
鈴



正三位本居豊頴校訂

本居春庭全集

本居大平全集

例言

一　本輯には、本居春庭の著「詞八衢」「詞通路」「後鈴屋集」の三部十一卷と、本居大平の著「古學要」「倭心三百首」「玉鉾百首解」「百八一首あづさ弓」「馬名合解」「神樂歌新釋」「近世三十六人撰」「萬葉山常百首」「藤垣內答問錄」「稻葉集」「藤垣內文集」「草まくらの日記」「おかげまうでの日記」「關の驛」「有馬日記」「名草の濱づと」「己未紀行」の十七部二十四卷とを收む。

二　諸書の排列、舊全集と異るは、なるべく同種類のものを順次掲載せんとせるが故なり。

三　句讀點濁點等、原本のまゝなり。

四　括弧【】を附したるは、原本細註なるを一行にせる印なり。

五　引用歌文等の右肩に、原本〽の印を附したるを、「に改め、且つ上部に附せり。

六　「詞八衢」「詞通路」原本に、例へば［あ］［四段の活詞］［いそのかみ］などある［　］を「　」とし、しし〔しく〕人こそつから〔め〕の類の〔　〕を‖　‖となす。又「詞八衢」の原本に(か)(き)(く)と

ある類の○を（）に改め、「詞通路」の原本に、ふるき都」のほとゝきすとある類の」を）に改む。

七　「萬葉山常百首」舊全集本は、初稿本なりと想はる。今は文政三年の刊本を採れり。

八　「藤垣内答問錄」の一　原本は、問は問全部、答は答全部各別々なるを、問答共に一項づつを交互に挿み、且つ問の詞を答の詞より一字低くして、その區別を明かにせり。

九　「有馬日記」舊全集本は、二十日より二十七日に至る間、彼此混亂せる所々あり。仍りて之を訂正せり。

目次

本居春庭全集

本居大平全集

○目次

詞のやちまた序

哥よみふみかく人はいふもさらなり。すべていにしへまなびにこゝろざゝむには。まづむねと詞の道にぞわけいるべき。そはいにしへの書ども。文にまれ哥にまれ。ふかき心をこまやかにしらむには。てにをはのこゝろばへ。辭のはたらきなど。その代の物いひざまのねむごろなるさま。みやびかなるさまなど。ふかくこまやかにあぢはへしらでは。えあるまじければなり。かれ詞の學びにしては。いはゆる五十連のこゑのたてぬきによりて。正し考ふべきなり。そも〳〵此五十連の音といふ物は。人の口よりいづる音のかぎりをつくして。たてはたてのまに〳〵。よこはよこのまに〳〵。ゆきとほりたらひてなむあれば。辭のすぢ〳〵千にかよはせ。萬に轉はせて。考へこゝろむるに。一としてまぎるゝことなく。あやしくくすしく妙なる物なりけり。そはてにをはのとゝのへ。かなづかひのさだまりをはじめ。言ののびちゞみ。言のきれつゞき。自他のいひざまなど。皆この經緯のすぢ〳〵に引よせて。わきまへたどるに。いとかすかなる言のたよりのはぶき詞。はかなき俚言のかたはしまで。露ばかりもみだれまぎるゝことなくなむありける。されば此八巷にわきまへられたる。詞の活用の。四段にわたり。一段にかぎり。中の二段。しもの二段などとて。四種にわかれたるも。もはら此段々によりて。考へ定められざることなし。かくてかの假字づかひの書。てにをはの書どもは。さきざき皆考へあらはされて。今はおぼつかなきくま〴〵もなかめるを。此言葉のはたらきといふことは。いまだ世にあげつらへる人もなく。をしへさとしたる書も見えざりければ。こたび鈴屋大人の眞子。いまの本居大人と聞ゆる。春庭君。よろづに考へわたして。この二巻になむあらはし出給ひける。これぞ此。言葉の道のこまやかなるすぢ〳〵。わきまへたどるべき。いみしきしるべ書にはありける。かくいふは。文化三年五月十三日。尾張植松有信。

詞八衢上

本居春庭著

詞のはたらきはいかにともいひしらずいともくすしくたへなるものにしてひとつことばもそのつかひざまによりて事かはりはたらきにしたがひつゝ意もことにきこえなどしてちぢのことをいひわかちよろづのさまをかたりわかつにいさゝかまぎるゝことなく又見るもの聞(キク)もの人の心におしこめたるおもひのくま〴〵すべて世中にありとしあるといく千萬のことなりともいひ盡しまねびやらむにたらはぬとなくあかぬことなきも此活(ハタラキ)によるわざになむありけるさるは神代よりおのづからさだまりありて今の世にいたるまでうつりかはることなくいさゝかもたがひあやまるときは其ことわからずそのこゝろきこえがたきものにしあれば一文字(ヒトモジ)といへどもみだりにはぶきみだりにくはへなどすべておほろかにおもひなすべきわざにはあらずなんかくて古への人はおのづからわきまへて用ひたかふるとはなかりつるを後の世となりてはやうやうにみだれゆきつゝ誤ることのみおほくなりぬるを世に見とがむる人もなくとかくあげつらふ書(フミ)も見えぬまゝにいよいよみだれあやまるとのみぞおほくなりきにけるかゝればものまなばむ人は古へのたゞしくうるはしきをよくかむがへふかくならひてこそものすべきわざなるをいかにともおもひたどらずたゞなほざりにのみ思ひ過して猶あやまるとおほきはいかにぞやされど哥よくよみ文章(フミ)よくつくれる人はおのれよく心得(ウ)とはなけれどおのづからのものにしあればおのづからかなひてたがふるとはをさ〳〵なかめるをうひまなびのともがらはいとたど〴〵しくまぎらはしげにてあやまるといとおほければ今その人々にさとししらしめむとていにしへのそのさだまりをこれかれあげてくはしくわかちしるしつこを詞八衢としも名つけたるよしはおなじ言の葉もその活ざまによりていづかたへもおもむきゆくものにしあれば道になぞらへてかくはものしつるになむ見む人よくたどりてふみまがふるとなかれ

〇活はすべていとおほくさま〴〵なる中に四種の活【此事下

にいふべし】もこもそのたぐひさま〴〵ひろくいこおほくしてこれにならぶはたらき他にはなし次にはたゞしし きしく又しきくこはたらく詞のみなりその餘の活はこれにくらぶればいこせばく詞もすくなしさてしし きしくしきくこはたらくは詞もいこおほけれごこはたゞ〔加〕行のみの活にて其餘の行にかくはたらくたぐひの詞なければ猶せばきを四種のはたらきは〔あ〕〔か〕〔さ〕〔た〕〔な〕〔は〕〔ま〕〔や〕〔ら〕〔わ〕の行におしわたりてこゝ〴〵くその活あるうへに行毎に又四種三種あるひは二種などづゝの活も有ていこさま〴〵ひろきにしたがひてその詞もいこおほしかゝれば先この四種のはたらきをさこさむこてくだり〳〵の圖などあらはし次々にそのよしくはしく書しるしつその餘の種々の活は別にあらはすべし

○四種の活こいふは四段の活一段の活中二段の活下二段の活此四つなり活のさまは次にいふべしさてこれらの名もこよりあるにあらざれごも事をわかちいはむに名目なくてはたよりあしければ今かりにつけたるなり下すべて此名をもていへり

○四段の活こはかきくけさしすせこやうに第一の音より四の音まで次々四段にあかんあきあくあけおさんおしおすおせなごはたらくをいふ也此活詞かぎりなくいこおほし

○一段の活こはいいるいれきききるきれなご第二の音一段のみにてはたらくをいふいるいれきるきれのるれは言をそへて活をなせるにて其行の音にはかゝはらざる也さて此活すべて一音にていきこいふより外なければ此活詞いこすくなし

○中二段の活こはきくくるくれちつつるつれこ第二の音三の音二段にておきおくおくるおくれこちこづこづるこづれなごはたらくをいふなりくるくれつるつれのるれは一段の活の所にいへるが如し此活詞もおほからず

○下二段の活こはくくるくれけすするすれせこ第三の音こ四の音この二段にてうくうくるうくれうけ見す見する見すれ見せなごはたらくをいへりくるくれするすれのるれはこれも上にいへるにおなじ此ノ活の詞は又いこおほし

○又此四種の活の同じたぐひにていさゝか活ざまの異なるありそをかりに變格こ名づけて其詞ある行の圖に出せりそのよ

しは其所々にいふべし

○四種の活の圖 并受るてにをは

四段の活	一段の活	中二段の活	下二段の活
飽押打逢住釣	射着似干見居	起落戀試老降率	得受痩捨兼辨醫消枯
（か）（さ）（た）（は）（ま）（ら）	（い）（き）（に）（ひ）（み）（ゐ）	（き）（ち）（ひ）（み）（い）（り）（ゐ）	（え）（け）（せ）（て）（ね）（へ）（め）（え）（れ）
ず で じ ぬ ん まし	ず で じ ぬ ん まし	ず で じ ぬ ん まし	ず で じ ぬ ん まし
（き）（し）（ち）（ひ）（み）（り）			
て けり けん つる し	て けり けん つる し	て けり けん つる し	て けり けん つる し
つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか
（く）（す）（つ）（ふ）（む）（る）	（いる）（きる）（にる）（ひる）（みる）（ゐる）	（く）（つ）（ふ）（む）（ゆ）（る）（う）	（う）（く）（す）（つ）（ぬ）（ふ）（む）（ゆ）（る）
めり らん べき らし と とも	めり らん べき らし と とも	めり らん べき らし と とも	めり らん べき らし と とも
		（くる）（つる）（ふる）（むる）（ゆる）（るゝ）（うる）	（うる）（くる）（する）（つる）（ぬる）（ふる）（むる）（ゆる）（るゝ）
かな まで に を より	かな まで に を より	かな まで に を より	かな まで に を より
（け）（せ）（て）（へ）（め）（れ）	（いれ）（きれ）（にれ）（ひれ）（みれ）（ゐれ）	（くれ）（つれ）（ふれ）（むれ）（ゆれ）（るれ）（うれ）	（うれ）（くれ）（すれ）（つれ）（ぬれ）（ふれ）（むれ）（ゆれ）（るれ）
ば ど ども	ば ど ども	ば ど ども	ば ど ども

此處四段の活と一段の活とは切ると續くとを兼て一ッなるを中二段の活下二段の活にては二ッにわかれたり

飢（ゑ）	受るてにをは
（う）	切るゝてにをは
	受るてにをは
（うる）	續くてにをは
	受るてにをは
（うれ）	こその結辭
	受るてにをは

此處一段の活中二段の活下二段の活は一ッなるを四段の活にては二ッにわかれたり

○凡て右の活詞（ハタラキコトバ）より受るてにをは猶いとおほかれどことごとくはいださずその大低をあげたるなり又やなりなどのごとくゆきや云々ゆくや云々などきよりもくよりもうけまたきこゆなりきこゆるなりなどゆゆるよりもうくるてにをはなどはまぎらはしければこれものせざるなり

○四段の活は「あ」「な」「や」「わ」の四行にはなし第一の音かさたはまらばそのまゝにては未タ語をなさずたとへばあかんあかずあかじかさんかさずかさじうたんうたずうたじなどをあかかさうたとのみにては語をなさゞるなり其下に受るてにをはのんずじにて語をなすなりこれは四段の活にかぎれる事にて一段の活中二段の活下二段の活にはこの語をなさゞる活なしさて此第一の音よりうくるてにをははずでじぬんましなどなり第二の音きしちひみりは用言へつゞく詞なりう

くるてにをははてつゝけりきけんなばぬるつるししかなどなり第三の音くすつぶむるは切るゝ詞と躰言へ續く詞とをかねたり受るてにをはも二ッをもちひて切るゝかたより受るてにをははめりらんべきらしとども續く詞よりうくるてにをははかなまでにをよりなどなり第四の音けせてへめれはこその結詞なり受るてにをはばばごどもなどなり

○一段の活は「さ」「た」「や」「ら」の四行にはなし此活はたゞ第二の音のいきにひみゐの音のみの活にて四段の活の第一の音と二の音との二ッの活をかねて用言へつゞく詞なりうくるてにをはもその二ッをかね用ふること圖のごとし又此音にるもじをそへたるは四段の活の第三の音と同じく切るゝ詞と躰言へつゞくとをかねて受るてにをはも二つを用ふると四段の活におなじ又れもじをそへたるは四段の活の第四の音と同じくこその結ひにてうくるてにをはも同じ但しるもじをそへて切るゝ詞とつゞく詞とをかねたるは後の定まりにてふるくは万葉集十に春野のうはぎつみて煮良思文古今集に花とや見らむ六帖六に松がえのときはに似べき後撰集に來て見べき人もあらじな土佐日記に似べきなど第二の音いきにひみゐより切るゝ詞をうくるてにをはを用ひたり此外猶おほし

○中二段の活には「あ」「さ」「な」の三行にはなし第二の音きちひみりゐはこれも四段の活の第一の音と二の音との活をかねて用言へ續く詞なり受るてにをはも二ッをかね用ひたると一段の活に同じ第三の音くつふむゆるうは四段の活の第三の音の切るゝ詞のかたにてうくるてにをはもその切るゝかたのめりらんべきらしとどもなどを用ふるなり又此音にるもじをそへたるは四段の活の第三の音の躰言へつゞく詞のかたにてうくるてにをはもそのかたを用ひてかなまでにをよりなど也又れもじをそへたるは四段の活の第四の音の活とおなじくこその結びにてうくるてにをはもそれにことなるとなし

○下二段の活は十行ことごとくあり第三の音うくすつぬふむゆるうは四段の活の第三の音のきるゝ詞の活のかたにてうくるてにをはもそのかたをもちふるなり又此音にるもしをそへていへるは四段の活の第三の音の躰言へつゞく詞のかたにて

受るてにをはもそのかたのてにをはを用ふるなり又れもじをしそへたるは四段の活の第四の音と同じくこそのむすびとばにて受るてにをはもこれにおなじ第四の音えけせてねへめえれゑは四段の活の第一の音と第二の音とをかねて用言へ續く詞にて受るてにをはもその二ッをかねて用ふると一段の活のいきにひみゐ中二段の活のきちひみいりゐとおなじ

○さてかく受るてにをはを圖などにも出してわづらはしきまでいへるを無益のことゝ思ふ人もあるべけれどすべて受るてにをはは圖の如く横に通ひて少しもたがふことなくいと正しく又四種の活詞をわかちしらんにこの受るてにをはをもてさだむるが肝要なればよく弁へしめんかためなりそはず　で　じ　ぬ　ん　ましのてにをはを第一の音かさたはまらよりうくるは四段の活詞としるべく第二の音いきちにひみりゐより受るは一段の活詞中二段の活詞としるべく第四の音えけせてねへめえれゑより受るは下二段の活詞としるべきなり此外もすべて右の如く受るてにをはによりて其はたらきざまのしらるゝなりそは受るてにをはのとをいへる所々又圖をよく見てしるべし

○續く詞はぞのや何の結びにてこれらの辭上にあるときは切れて下へつゞかざるなり　四段の活の第三の音くすつふむるはきるゝ詞とつゞく詞とをかねてゆくおもふわたるなどいひてきれもし又ゆく舟おもふ人わたる川などいひてつゞきもするなり一段の活は第二の音いきにひみゐにるもじをそへてこれも切るゝ詞とつゞく詞とをかねてきる(着)みる(見)などいひてきるゝ詞ともし又きる衣みる花などいひてつゞく詞ともする也中二段の活と下二段の活は四段の活の同じ第三の音うくすつぬふむゆるうながらすぐこふあくながるこのみいひては切るゝ詞にてつゞかずすぐる(過)月日こふる(戀)頃あくる(明)夜ながるゝ水などるもじをそへていはざればつゞかざるなりすべて續く詞といふは躰言へつゞくをいふなりたゞし用言へつゞくは活も別にてそはうちまかせてはつゞく詞とはいはざるなり用言へつゞく詞はまづ四段の活一段の活中二段の活にては第二の音いきしちにひみいりゐよりゆきかよふおもひあまりきなるゝ見すぐすおきあかすうらみわぶるなどいひ下二段の活にては

第四の音えけせてねへめえれゑよりうけとりきせ奉るながめやるなどいふはみな用言へつゞけたるなり

○世にいはゆる下知の詞は四段の活にては第四の音けせてへめれそのまゝにてさけわたせおもへなどいひて即チ下知の詞となるを一段の活にては第二の音いきにひみゐによもじをそへて拾遺集にやくすみ染の衣きよ君古今集に山のさくらをあはれとは見よ蜻蛉日記にはちすには玉ゐよとこそむすびしかなどいひ中二段の活も第二の音きちひみいりゐによもじをそへて古今集にこの一もとはよきよといはまし天つ風雲のかよひぢ吹とぢよ吹風をなきてうらみようつほ物語藏開にまどゐする迄おいよひめ松拾遺集にひとりねはくるしきものとこりよとやなどいひ下二段の活は第四の音えけせてねへめえれゑによもじをそへて古今集に人にはつけよあまのつり舟拾遺集にこちふかばにほひおこせよ云々又つくりかさねよ千代のなみくら古今集にわれにをしへよゆきてうらみむ万葉集にきなきとよめ余古今集にはひまつはれよ枝はをるともなとありて此三種の活にはかくよもじをそへざれば下知の詞とはならざるなりたゞしふるくは下二段の活詞にはよもじをそへず古事記下巻哥に加理許母能美陀禮婆美陀禮續紀宣命にかくおもひてはかることと止のりたまふ万葉集二にまつろはぬ國乎治跡同五にたゞに率ゆきてあまぢ思良之米同十七に阿比見之米等曾同十八におくつきはしるく之米多底人のしるべく同十九に馬しまし停息佛足石哥に都止米毛呂毛呂すゝめもろ〳〵大神宮儀式帳に國つ罪云々犯過人術云々祓清止定給支東遊風俗哥古本に與世波與勢與曾不流比止能尓久可良難久尓などもあり今の世にてはことたらはぬこゝちすれど古への一格也古今集のころよりこなたは此例をさ〳〵見あたらずたゞ順集にゐこひする君がはしたかしたがれの野にははなちそはやく手にすゑとあるのみなり一段の活詞中二段の活ことばには此例古にもなし

○活詞を躰言にいへることおほしそは四段の活一段の活中二段の活はいづれも第二の音いきしちにひみいりゐにて四段の活は万葉集に君がゆきけながくなりぬ後撰集に時鳥はねならはしに枝つたひせよ拾遺集にいのちをばあふにかふとかな

ごいひ一段の活は古今集にこまなへていざ見にゆかん云々又立居のそらもおもほえなくになごいひ中二段の活は拾遺集にこごしおひの松は七日に成にけり古今集にさきだゝぬくいのやちたびなごいひて躰言こし下二段の活は第四の音えけせてねへめえれゑにて拾遺集に道さまたげにたちなかくしそ古今集にいつまでわがみしたもえにせん又心がへするものにもがなごいひて躰言こする定りなり猶かく躰言にいへるといこ多しすべて四段の活一段の活中二段の活の第二の音は下二段の活の第四の音こはたらき同じきと受るてにをはなご圖を見てもしるべし

○四段の活の第一の音かさたはまらよりゆかなんこらなんゆかねこらねなごうくるこ第二の音きしちひみりよりゆきなんこりなんゆきねこりねなご受たるこなん　ねは同じここなれごもその受るこころの音によりて意かはるなり一段の活こ中二段の活は第二の音いきしちにひみいりるよりきなんみなんきね見ねこいひて右の二ッをかね下二段の活は第四の音えけせてねへめえれゑよりうけなんよせなんうけねよせねなごいひておなじく二ッをかねたりこは前後の詞にておのづからその意はわかちしらるゝなり右のなんねは意は異なれごもおなじ詞なれば受るてにをはのこころにはのせずさて圖にしるしたるてにをはは五ッにわかれたりそは四段の活の第一の音よりうくるこ第二の音より受るこ第三の音の切るゝ詞よりうくるこ又つゞく詞より受るこ第四の音より受るこなり　此五ッおのおの全くして他にまじはり混ずるここなき也

○中二段の活の第三の音にるもじをそへたるくるつるふるむるゆるるゝうるを俗言には第二の音にうつしてきるちるひるみるいるりるるるこいへりおくるをおきるこづるをこぢるうらむるをうらみるなごいへるがごこし又下二段の活の第三の音にるもじをそへていふうるくるするつるぬるふるむるゆるるゝうるを俗言には第四の音にうつしてえるけるせるてるねるへるめるえるれるゑるこいぶが定まりにてうくるをうけるやするをやせるすつるをすてるこいふが如し猶下に出せる圖の所々かたはらに片假名をつけてさこすを見て知べし四段の活一段の活にはかく俗言にうつる活なし但し四段の活詞の第

一の音かさたはまらよりんのてにをはを受るに俗言にいへる
とありそは其第一の音さんのてにをはをあはせて第五の音こ
そこほもろこいへりゆかんをゆこかざゝんをかざそまたんを
まこいはんをいほなごいふ也
○四段の活の第四の音けせてへめれよりらりるれこ活くあ
りそはさけらんさけりさけるさけれおもへらんおもへりおも
へるおもへれかすめらんかすめりかすめるかすめれなごいへ
るこれなりさてこのさけるおもへるかすめるなごをやがて
一ッの詞こして〔雜〕行の四段の活に入ルべきさまなれご受る
てにをはるれよりうくるは四段の活に全くおなじけれごもら
りより受るてにをはいさゝかこごにして四段の活の詞こもし
がたしそはさけらんさけらばなごはうくれごさけらじさけら
ましなごはうくまじくさけりせばさけりしかなごはいふべけ
れごさけりてさけりぬなごはいふべからざれば也餘もこれに
なぞらへてしるべし一段の活中二段の活下二段の活には此活
なし

阿行之圖　并受るてにをはの圖

○やちまた上

一段の活	下二段活
鑄イル　射イル	得ウル
(い) まんぬじでずし	(え) まんぬじですし
しつけけてるんり	しつけけてるんり
しぬなきつゝかるば	しぬなきつゝかるば
(いる)	(う)
ととらべらめもしきんり	ととらべらめもしきんり
	(うる)エ
よをにまかりでな	よをにまかりでな
(いれ)どばども	(うれ)どばども

○此行には四段の活中二段の活なし
○圖の上に射鑄得なごの字をしるしたるは其活詞の文字也こは圖を見てその活ざまをはやくしるべきためなり猶その活詞は次に出せり下の圖の所々もみなしかなり
○此一段の活は此行のいか〔也〕行のいか定めがたけれご先しばらくこゝに出しおきつなほ何れのくだりこたしかに定むべきよりごころありげなりよく考べし

〔一段の活詞〕

射いる　鑄いる

○此活詞すべて一音のみなればいといへる外なしいづれの行も皆然り

〔下二段の活詞〕此うるを俗言にはえるといふ例なり

得（う）　こゝろうる

○こは心をうるといふ意なれど おのづから一ッの詞のごとくになりたればこゝに出せり此類ひ猶おほし

加行之圖　并受るこるにはの圖

四段の活	一段の活	中二段の活	變格の活	
飽（アク） 吹（フク）	着（キル）	起（オクル） 過（スグル）	來（クル）	受（ウクル） 授（サヅクル）
（か） ず で じ ぬ ん まし	（き） す で じ ぬ ん まし	（き） ず で じ ぬ ん まし	（こ） す て し ぬ ん まし	（け） す で じ ぬ ん まし
（き） て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	て けり けん つる し　つゝ き たば ぬる しか	（き） て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか
（く） めり らん べき らし と とも	（きる） めり らん べき らし と とも	（く） めり らん べき らし と とも	（く） めり らん べき らし と とも	（く） めり らん べき らし と とも
かな まで に を より	かな まで に を より	（くる） かな まで に を より	（くる） かな まで に を より	（くる） かた まで に を より
（け） ば ど ども	（きれ） ば ど ども	（くれ） ば ど ども	（くれ） ば ど ども	（くれ） ば ど ども

○變格の活はくる（來）といふ詞のみにて此外なし活きざま受るてにをはなど圖の如し但し し しかのてにをはをうくるはきしきしかなどきよりのみ受る格なるをそれはいとまれにてこしこしかなどこよりうけたる多しさてすべての活に第五の音に活くとこれのみにて外に例なし又下知の詞にはこそのみいへる例なり

〔四段の活詞〕

あく　あく　○あがく　あざむく
○あざやぐ　あふぐ　○あへぐ　○あゆぐ
ありく　○いく　○いすゝく　いそぐ
○いそはく　いだく　いたどく　いつく
○いなゝく　○いらゝく　うく　うごく
○うしはく　○うすゝく　うすらぐ　うそふく
○うたゝ　○うたぐ　○うたづく　うめく
おく　おどろく　おぼめく　おもむく
およぐ　かく　かく　かぐ
かゞやく　かしく　かしづく　かたぶく
かづく　○かづらく　○かひろぐ　かわく
きく　○きしめく　きつく　○きらめく

○くゝ　くだく　○くつろぐ　○くどく
○けさやぐ　こく　こぐ　○ころゝく
さく　さく　さゝめく　○さゝやく
○さへぐ　さやぐ　さわやぐ　しく
しく　しぞく　○しだく　○しづく
しのぐ　しはぶく　しぶく　しりぞく
○すく　すく　すく　すく
すゝぐ　すだく　○すみやく　せく
○そく　そぐ　そゝく　○そゝめく
○そゞろく　○そほどく　そむく　そよぐ
そよめく　○たく　たぐ　たじろく
たゝく　たなびく　たひらぐ　○たをやぐ
つゝく　つく　つぐ　○つゝく
つゞく　つなぐ　つまづく　つらぬく
○つらゝく　とく　とぐ　ときめく
○とつぐ　○とづく　とゞろく　○とよぐ
とよめく　○とろゝく　なく　たぐ
なげく　なびく　○なへぐ　たまめく
ぬく　ぬぐ　ぬかづく　ねぐ
○のく　のぞく　はく　はく

はぐ　○はじく　○はたゝく　はぶく
○はるく　ひく　ひざまづく　ひしぐ
ひしめく　ひゞく　○ひゞらく　ひらく
ひらめく　○ひろめく　ふく　ふく
ふさぐ　ふせぐ　○ふづく　○ふゞく
ほぐ　○ほざく　ほのめく　まく
まく　まぐ　○まくらく　○まじろく
まねく　みがく　みじろく　○みそぐ
みちびく　みつぐ　○みづく　むく
むだく　もぐ　もどく　やく
やはらぐ　ゆく　○ゆらぐ　○ゆるぐ
○よく　わく　わく　○わかやぐ
わなゝく　○ゐなぐ　ゐらぐ　○をく
○をめく　をのゝく

○右に擧たる詞の頭に○の印をつけたるは其詞の活の證を下に引るしるし也下みなおなじ

○右に出したる詞の外何めくといへる詞猶おほかるべしみな此活なり

○あがく新撰字鏡に跪阿加久とあり

○あざやぐ　源氏物語寄生にあざやぎて云々など猶あり

○あへぐ　万葉集三に阿倍寸つゝ我こぎゆけば和名抄に喘息安倍岐枕草紙に老たるものゝはらたかくあへぎありく云々又あへぎまどひなどいへり

○あゆぐ　拾遺集物名に星のあゆぐと見えつるは千載集雑にあゆぐ草葉にとあり

○いく　六帖四にいける日の云々うつほ物語祭使にいくまなこのぬけ拾遺集別にいくくすり同戀にいかばやと思ふ後拾遺集戀にいかんとぞ思ふ源氏物語桐壺にいかまほしきは命なりけり手習巻にさてなんいくやうもあるべきと伊勢集に我身かくいかむとならば後六々撰に實方朝臣いかばやとおもふ斯もこそあれ小侍從集にいかばいきしなばおくれじ夫木集に家隆卿いく藥とる住よしの浦など猶ありさて此詞此行の中二段の活にていきいくいくるいくれとのみ活く詞と覺えしにかく四段に活かしたる方多くて中二段に用ひたるはいと稀なればかくおほく擧て其よしをしらしむるなり又右の如く四段にも中二段にも活さて同じ意なる詞これかれあり猶其處々にいふべし

○いすゝく　古事記中卷に立はしり伊須々岐伎とあり此詞外に見えざれども此活なるべし

○いそはく　万葉集一に伊蘇波久見ればとあり

○いなゝく　拾遺集におのれいなゝけとあり

○いらゝく　源氏物語橋姫巻にさむげにいらゝきたるといへり

○うすはく　祝詞に宇須波伎坐せとあり

○うすゝく　源氏朝顔に御門守さむげなるけはひうすゝきいできて云々とあるこれなり

○うたく　古事記下卷に其猪怒而宇多岐依來日本紀胥に宇拖枳かしこみ云々など見えたり

○うなぐ　万葉十六にわが宇奈雅流玉のなゝつを日本紀にうながせるよ延へてもいへり

○うなづく　竹取物語にうなづくとあり

○かづらく　万葉十八によもぎ可豆良伎十九に縵可牟又可豆良久は山した日かけ可豆良家流など猶多し

○かひろく　和名抄に舲加比路久注に船不ㇾ安也とあるはこゝの活き詞なるべし

○きしめく　枕草紙にきしめく車にのりてとあり

○きらめく　うつほ物語俊蔭にきらめきてといへり

○くく　古事記上にわがたなまたより久岐斯子也万葉集十七にほとゝぎすこのま多知久吉十九に立久久等はふりにちらす

○くつろぐ　源氏みをづくしにくつろぐ所もありけれと若菜上に冠のひたいすこしくつろぎたる又枕草紙にくつろぎてなどいへり

○くどく　住吉物語にうちくどき夫木集にぬかのこゑごゑくどき

つるかななどあり
○けさやぐ　源氏松風にけさやぎてまゐりぬとあり
○ころゝく　和名抄に断咽古路々久とあるこれなり
○さゝやく　後撰集に人見てさゝやきければ云々とあり
○さへぐ　万葉集二に言佐敝久とあり
○しだく　古今集物名に我宿の花ふみしだく云々など猶多し又丹後守爲忠家百首に仲正冬くればむれゐるたづにしだかれてとも活かしいへり
○しづく　万葉十九に底きよみ之都久いしをも催馬樂に江の波爲爾之已太万之川久也云々古今集に水の面にしづく花の色さやかにもなどあり
○すく　うつほ物語あて宮に木の實松の葉をすきて云々又ふみをちいさくおしつゝみてゆしてすきいれてなどあり又源氏若紫にさるべきものつくりてすかせたてまつる金葉集連哥に春の田にすきいれぬべきおきなかなかのみなくちに水を　ばやなどもいへり
○すみやく　新撰字鏡に悇悍惶遽也於地加志古彌須彌也久又詞花集戀にすみやかれつゝともあり炭焼をかねたり
○そく　古事記下巻に雲ばなれ曾岐をりともとあり
○そゝめく　枕草紙にくつのおとそゝめきとあり
○そゝろく　夫木集に慈圓そゝろきわたる山のはの雲

○そほどく　源氏椎卷になれ〳〵うちそほどきて竹川卷にもそほどきてとあり
○たく　万葉二に多氣ばぬれ多香根ば長き九にかみ多久までに十に手寸そなへうゑしもしるく云々などあり又十四にこまは多具とも十九に馬太伎ゆけばとあるは同じ詞か別にても活きはおなじことなり
○たをやぐ　源氏總角にたをやぎぬべきさあり
○つゝく　万葉十六に石もちて都追伎やぶりとあり
○つらゝく　古事記上巻にをぶね都羅々玖
○とつぐ　和名抄に止豆木乎之閉止里又祝詞に嫁繼給弖
○とづく　重之集にその原やふせやにとづくかけ橋もとよめり
○とよぐ　日本紀に鳴响騷動諠言諠譁などをしかよめり
○とゐゝく　古事記上巻にうじたかれ斗呂々岐弖とあり
○なへぐ　古事記下巻に必自跛也字鏡に蹇足奈戸久馬又和名抄に蹇訓阿之奈閉此間云那閉久また蜻蛉日記三にもなへぐ〳〵云々などあり
○のく　堀川二郎百首にへだつるきりはたちものくやとさよめりなほ又には多し
○はじく　万葉十四に波自伎おきてとあり
○はたゝく　竹取物語にみな月のてりはたゝくにも

○はるく　蜻蛉日記三にもの思ひはるけるやうにぞおぼゆるとあるのみにてはるかんはるきなど活きたると見えざれどもすべて第四の音よりるのてにをはならくるは四段の活詞の例なり下二段の活のはるくるをはるけるといふは俗言の例なりおもひまがふべからず

○ひゞらく　源氏篝木にひゞらき居たりとあり又紫式部日記におこなひがちにくちひゞらかし云々ともいへり

○ひろめく　枕草紙にひろめきてとあり

○ふづく　日本紀に恚恨哭恚恐などよめり

○ふゞく　蜻蛉日記五に雨風いみしくふゞくとありまた夫木集にふゞかれてともはたらかしいへり

○ほざく　日本記神代卷に神祝祝之とよめり

○まくらく　古事記中卷に枕二其后之御膝一万葉集五に人のひざのへわが摩久艮可武などあり

○まじろく　字鏡に瞚ハ目数動皃万志呂久とあり

○みそぐ　万葉三に潔身而麻之乎濱松中納言物かたり哥にこひしさをみそげど神のうけねばや云々などあり猶あり

○みづく　万葉十八にうみゆかば美都久かばねとあり又さか彌豆伎いますとあるも同言なるべし

○ゆらぐ　万葉二十に由艮久玉のをとあり

○ゆるぐ　住吉物語にゆるぎ侍る又枕草紙にゆるぎありきたるも云々などいへり

○よく　後撰集秋に宿をよかなん貫之集によく處なき秋の夜の月又よかずぞあらまし興風集に秋をよかなん元眞集にものおもふ宿の萩の葉はよけ蜻蛉日記にこひしき道はよかなくに狹衣三によくかたのなかりけるも又四にひきよかぬわざもがな堀川百首にけふひきよかずかけてけるかな丹後守爲忠家百首に仲正ちりしける花をゝしむさよくほどになどありさて此詞此行の中二段にも活きて意全く同じければかく例を多く引出せるなり

○わかやぐ　枕草紙にわかやぎとあり

○ゐたぐ　字鏡に喉ハ出二氣息一心呻吟也惠奈久

○をく　萬葉十七に呼久よしのそこになければ拾遺集物名にはしたかのをきゐにせんと云々などあり

○をめく　枕草紙にをめけばとあり

○万葉三に見毛左可受伎濃十四のら波可馬可毛などあるは全くこの活詞のさまなれどともに此外に活きたる例もなく又かく活くべき詞のさまとも見えざれば此活詞のつらには出さずさて此詞は此行下二段の活なれば見もさけずきぬつらはけめかもといふべき例なり凡てずめのてにをはを第一の音よりうくるは四段の活第

四の音より受るは下二段の活なる事上にもいへるが如し

〔一段の活詞〕

着(きる)

〔中二段の活詞〕此くるを俗言にはきるといふ例なり

○いくる　おくる(超)　すぐる　つくる(盡)

○なぐる　よくる

○いくる　蜻蛉日記一にしなんと思へどいくる人ぞいとつらきやとあるのみにて此活なるは見あたらずさて此詞この行四段にも活きて同じ意なるとそこにいへり

○なぐる　万葉四にしはしはこひは奈木六(ナギム)かと又十七にしげきこひかも奈具流日もなく又十九にこゝろ奈疑牟となどありすべて第二の音よりんのてにをはをうくるは中二段の活詞の例なりさて此詞も四段に活きて意は同じ事也

○よくる　万葉九にはるさめの與久列どわれを又十五にたつ月ごとに與久流日もあらじ古今集春にこの一もとはよきよといはまし好忠集に草葉をよきずうつほ物語菊宴に出つとを見すべき人はなけれどもわがをる枝に風もよきなむかくねがふ意のなんを第二の音よりうくるはこゝの活の格なり源氏竹川に尤よきすまゐり給ふ又よきぬなどの玉はするは今撰和歌集うらみてもこひしきかたやまさるらんつらきはよくるものにぞありけるなどあり此詞も四段にはたらけりそこにいへるがごとし

〔下二段の活詞〕此くるを俗言にはけるといふ例なり

あくる　あぐる　あづくる　○あらくる

○いはくる　うくる　○うらぐる　おもむくる

かくる　かゝぐる　○かじくる　かづくる

○かまくる　くだくる　さくる　○さぐる

さゝぐる　さづくる　さまたぐる　しりぞくる

○しらくる　○しらぐる　○すぐる　○すゝくる

そむくる　たくる　たすくる　たはくる

たひらぐる　たむくる　つくる　つぐる

つゞくる　とくる　とぐる　なぐる

なづくる　にぐる　ぬくる　ねじくる

○のくる　○はぐる　○はるくる　○ひしくる

○ひたゝくる　ひらくる　ひろぐる　ふくる

○ほくる　○ほろゝくる　まくる　まぐる

○むくる　○やくる　やはらぐる　わくる

わらくる　○わゝくる

○あらくる　古事記中卷に逃散(ニゲアラケヌ)日本紀神代卷に散去(アラケヌ)又廿六に散卒(アラケタルイクサ)などあり

○いはくる　源氏繪合にいはけたる御ふるまひ榮花物語かゝやく藤壺にいはけたることなくたどあり
○うらぐろ　古事記中卷におほみさに宇羅宜(ウラガ)て又下卷にもあり又うらがしといふ詞もあり
○かじくる　古事記下卷に姿體痩萎(カホカタチヤサカミカジケテアレバ)云々源氏物語東屋にかじけたる云々堀河次郎百首によしさらばおふるひつじのかじけつゝ云々などよめり
○かまくる　日本紀皇極卷に感をかまけと訓り續日本紀宣命に感(カマケ)天(テ)又万葉十六にねらのゝこらや蚊聞毛而をらんなどのみありてかまくるとは見えざれども二ゝの活詞也
○さぐる　拾遺神樂哥にさげはきて催馬樂に宮ひとのさぐるふくろを云々などあり
○しらくる　うつほ物語國讓の卷にかしらのおほくしらくるは忠見集にいたゞくかみのしらくるまでに
○しらぐる　うつほものかたり吹上の卷上によねしらげたり云々金葉集九によねしらげ侍る也となどあり
○すぐる　古今集物名に波の緒すげて風ぞひきける六帖五の下にすげてひくらん枕草紙にくつなどの緒すげさせ
○すゝくろ　源氏野分にすゝけたるしべなどもうちまじるかし散木寄歌集に雪きえぬふじのたかねはよとゝもにたつけふりにもすすけざりけり丹後守爲忠家百首に雪きえぬみ山かたそのすゝくるはやく炭がまの烟也けり
○のくる　住吉物語に遠くのけてとあり
○はぐる　万葉集二につらをとり波氣またつら作留(ハグル)わざを云々などあり
○はるくる　うつほ物語俊蔭下にきこえはるけんとありなほ源氏ものかたりなどに多し
○ひしくる　源氏あげまきに胸もひしけておぼゆ狹衣二にむれもひしけけるとあり
○ひたゝくる　源氏須磨にひたゝけたらんすまひは又若菜にあまりひたゝけてたのもしげなきは榮花物語初花に內の御使えひたゝけて參らず云々などあり
○ほゝくる　源氏明石にいとゞほけられて云々など猶あり
○ほろゝくる　源氏螢に道をかくしほろゝけてといへり
○むくろ　万葉五にから國を武氣たひらげなど猶あり
○やくる　万葉一におもひぞ所燒(ヤクル)さよめり
○わらくる　うつほ物語吹上につきの布のわらけたる
○わゝくる　万葉五に和和氣さがれるとよめり
○古事記中卷歌にたち波氣ましを万葉十四にあをねし奈久流なほ

下にもかくありこれらははかせ　なかしむるの　約ツヾマリ　たるにてこゝの活詞にはあらず又まけ。た。まふなどあるもまからせ源氏手習にい。。けはてゝ見まほしう云々とあるもいかせの約リたるにてみなこゝの活にはあらず　さてかく約たるがやがて一ッの活詞となれるも詞のつれにていとおほかれどこは　はく　はくる　はくれ　なく　なくれなけ　まく　まくる　まくれ　いく　いくる　いくれ　などは活くべくもおもはれず又しかいひてはかするとなかしむることまかすることいかすることとはきこえがたくいさゝかことなればこゝの活詞には擧ざる也　他ホカノクダリ行にも此たぐひこれかれあり其ところ〴〵にいふべし

左行之圖　并受るてにをはの圖

四段の活	押オス　指サス	（さ）ず　で　じ　ぬ　ん　まし	（し）て　けり　けん　つる　し　つゝ　き　なげ　ぬる　しか	（す）めり　らん　べき　らし　と　とも	かな　まで　に　を　より	（せ）ば　ど　ども
變格の活	爲スル	（せ）ず　で　じ　ぬ　ん　まし	（し）て　けり　けん　つる　し　つゝ　き　なげ　ぬる　しか	（す）めり　らん　べき　らし　と　とも	（する）かな　まで　に　を　より	（すれ）ば　ど　ども
下二段の活	合ハスル　痩ヤスル	（せ）ず　で　じ　ぬ　ん　まし　て　けり　けん　つる　し　つゝ　き　なげ　ぬる　しか		（す）めり　らん　べき　らし　と　とも	（する）せ　かな　まで　に　を　より	（すれ）ば　ど　ども

○此行には一段の活中二段の活なし但し古事記上卷に根許。士尓許士而また万葉八に伊許自而うゑしなごあるはすべて第二の音よりてこ受るは圖の如く四段の活中二段の活なるを四段の活ならばこざずこざんこぜなごいふ例なるをさはいふべくもあらずこじずこじんこずれなごはいはるべければまさしく中二段の活詞こおもはるれご外にこずることずれなご活きたるを見えずまた此行に外に中二段の活詞一ッもなければしばらくのぞきおく也

○變格此活詞は下に出せり活ざま受るてにをはなご圖の如し但ししかなごのてにをはを受るはし。より受る格なるをさはいはずせしせしかなごせ。より。のみ受るも外こは異なりすべて圖に出せるてにをはは上にもいへる如く五ッにわかれて相まじはることさらになきを右のごとく　しかのてにをはのみ他にうつれり〔加〕行の變格にもこのてにをはをこゝの如く用ひたるなごすべて〔加〕行の變格ここの變格ごよく似たり　こゝなるは第四の音に活きたるを〔加〕行なるは第五の音に活きたるのみ異にて其外は全くお

なじさて下知にはせによもじをそへてせよといふ例なり

〔四段の活詞〕

あかす　○あくがらす　あそばす　○あはたす
○あふす　○あます　○あむす　○あやす
○あゆかす　あらはす　いかす　○いそがす
いたす　いだす　います　うごかす
うつす　うつろはす　○うながす　○うらがす
うるほす　おす　おかす　○おくらす
おくらかす　おこす　おとす　○おどす
おどろかす　○おびやす　○おひやかす　おほす
おぼす　おぼらす　おもほす　おもほしめす
○およぼす　おろす　かす　かくす
かざす　○かたす　かはす　かへす
○かよはす　からす　○かわかす　○きこす
きこしめす　○きざす　○きやす　○きらす
くたす　くだす　くづす　くつがへす
くやす　○くゆらかす　くらす　○くるべかす
○くるほす　○くろます　けす　けがす
こす　こがす　こゝろざす　○こなす
こぼす　○こほめかす　○こやす　○こらす

ころす　さす　○さがす　○さすらはす
さとす　さます　さらす　○しゝこらかす
しめす　しろす　しろしめす　○すかす
すぐす　○すべす　すます　すます
○そす　そゝのかす　たどす　○たどす
たてまだす　たふす　ためす　○たらはす
ちらす　つかはす　つくす　つひやす
○つぶす　てらす　○てらす　○てらはす
ときめかす　とざす　とどろかす　とほす
ともす　とよもす　なす　なす
○なす　ながす　なごす　なびかす
なほす　○なやす　ならす　ならす
○ならはす　にがす　○にほはす　ぬらす
ねざす　ねやす　のこす　はげます
はたす　はづす　○はふらす　○はふらかす
はやす　○はやす　はらす　○はらゝかす
○はるす　○はるかす　ひたす　○ひたす
ひゞかす　○ひゞらかす　○ひやす　ふす
ふるす　○ふらす　ほす　○ほころばす
ほどこす　ほのめかす　○ほゝかす　ほろぼす

ますす　まぎらけす　ましますす　まだすす
まとはす　まどはす　○まどはかす　まはす
○まろかす　まをす　みそなはす　みだす
むす　めす　めぐらす　もてなす
もどす　もとほす　○もどろかす　○もやす
もよほす　もらす　やつす　やどす
○やはす　ゆらかす　ゆるす　○ゆるがす
○よこす　よさす　○わかす　わたす
ゑけす　をす　○をやす

○あゝがらす　蜻蛉日記にかくのみあくがらしはつるは源氏若菜に身なさしもあるまじきさまにあこがらし玉ふと散木寄歌集に心をそらにあくがらしつる千載集春にあくがらしけれなどあり
○あはたす　鎮火祭祝詞にあはたし玉ひつと申玉ふと有ルのみ也
○あふす　源氏玉蔓におとしあふさず云々とあり又万葉によもの人をもあふさはずとよめるもあふさずの延はりたる詞なり
○あます　古事記下巻哥につくやたまかきつき阿麻斯云々
○あもす　万葉十六にきつに安牟佐武とあり
○あやす　うつほ物語俊蔭巻に血をさしあやしてまた梅花笠巻につまもとより血をさしあやしてなどいへり
○あゆがす　拾遺集物名におしあゆがすな鼠とるべく又赤染衛門家集に女院の姫君ときこえさせしころいしなとりのいしめすをまゐらすとてすへらぎのしりへの庭のいしぞこはひろふこゝろあり あゆがさでとれなどあり
○いそがす　源氏桐壷にいそがせば又浮舟にたゞいそがしにいそがしいづればなどありさて右の如くせばと第四の音よりばのてにをはをうけたるは四段の活は已に然る上をいふ詞下二段の活はいまだ然らざるをかねていふ詞なり何れの行もみなしかりこゝも已にいそがしたる上にていへるなればこゝの活なるとしるこれらもいさゝかまぎらはしければついでにいへるなり
○うながす　うつほ物語たづの村鳥の巻に御くるましづかにうながしとゞめて云々惠慶ほうし集に駒うながさぬ
○うらがす　出雲風土記に乗レ船而巡二八十嶋一宇良加志給へ鞆云々
○おくらす　古今集別に人を心におくらさんやはとよめり此活也
○おどす　枕草紙にうちねふりておどすとてとありすべてとのてにをはは切るゝ詞より受る例なれば下二段の活詞ともいふべけれど四段の活の第三の音は切るゝと續くとをかねたると上にもいひ圖を見てもしるべきなりさてかくおどすとは下二段の活詞にもいひこゝの活にもいへるをこゝの活詞とさだめて擧たるは凡て此行の下二段の活詞は他に然さするをいひ四段の活は物をしかするを

いひておどすものをしかするかたなれはなり
○おびやす　字鏡に惱又愵於比也須とあるこれのみにて外になしもしは加の字の脱(オチ)たるにはあらざるか
○おびやかす　源氏東屋におびやかしたれはとあり
○おほす　万葉十八にまさ於保之同二十になでつゝ於保佐牟また
きみが於保世流六帖二又六にたでゝおほしゝうつほ物語たづの村鳥巻になでおほす松のはやしに云々などなほ多しさてかくおほせるなど凡て第四の音よりるりれのてにをはをうくるは四段の活詞にかぎれり餘の三種のはたらき詞には此例なし
○およぼす　うつほ物語俊蔭巻におよぼさんとあり
○かたす　日本紀神代巻に鍛(カタシテ)作新鈎一云々三代實錄十八に改二鐃鈸神寶一爲二貞觀永寶一常乃鑄一錢一司路一遠妨一多ℸ依天加太之於山城國葛一野一郡一天令二鑄一作一云々と見えたり
○かよはす　後撰集にせうそこかよはし侍りけるに云々又ふみだにもかよはすかたなく云々またふちながら人かよはさじ云々金葉集別にふみかよはさん住吉物語にかよはすほどになどなほいとおほしかくかよはすかたゝかよはすほどになど第三の音より下へつゞけいへるは四段の活詞の例也又じんのてにをはを第一の音よりうくるは四段の活詞なると圖を見てもしるべきなりさて右のごとくくだくだしきまでいへるは此詞此行の下二段の活にかよはすかよはするかよはすれかよはせなどもいふべく思はるれどしかいへるは一ッもなし然るを今の人ともすれば誤ること多ければぞかし凡て此行にかくまぎらはしき詞これかれなほ多しよくわきまへおくべきこと也
○かわかす　蜻蛉日記にわが袖はひくとぬらしつあやめ草人の袂にかけてかわかせとよめり此詞も下二段の活のやうなれど凡て第四の音をそのまゝにて下知の詞としたるは四段の活詞の例なり下二段の活ならばかわかせよとよもじをそへていふ格なると上にいへるが如し
○さこす　古事記下巻歌に大君しよしと佐許佐婆日本紀におほろかに枳許瑳怒万葉十一にいさとを寸許勢十二にそらごともあはむど令聞(キコセ)廿にかくし佐許散婆など猶あり
○さざす　好忠集に雪間にきざす若草のとあり
○きやす　枕草紙にしら山のくわんおんこれきやさせたまふなとありこゝの活ざまなり
○きらす　源氏行幸巻になどてみゆきに目をきらしけむとあり
○くゆらかす　源氏初音にじゞうをくゆらかしてといへり
○くるべかす　うつほ物語俊蔭巻にまなこを車のわの如く見くるべかして云々とあり
○くゝるほす　古事記中巻哥に本岐玖流本斯とあり此活なるべし

○くろます　神賀詞にいづべ黒益之云々榮花物語玉のかざりにみなくろましたりとあり

○こなす　うつほ物語俊蔭巻に木をきりこなすといへる此はたらきなり

○こほめかす　枕草紙にふみこほめかしてといへり

○こやす　日本紀に許夜勢屢　万葉集五にうちなき許夜斯たほ萬葉にこれかれありさて第四の音よりるのこにをはを受るは四段の活の格なり

○こらす　出雲國造神賀詞に下つ石根にふみ凝(コラ)しとあり

○さがす　うつほ物語たゞこその巻にぬす人云々さがしとりて云又まつりの使の巻にいひさけさがしけむ源氏やとり木巻にさがし出つゝ榮花うら／＼の別にさがさせたまふ枕草紙にさがし出たる紫式部日記にふるき反古ひきさがし云々など見えたり

○さすらはす　狹衣四にさすらはし玉ひけむといへり

○しゝこらかす　源氏若紫にしゝこらかしとあり

○すかす　丹後守爲忠家百首仲正つらきかなあばらまがきのかくれなく我をすかしてあはぬ心はとよめりなほ源氏篠木にたれかはすかされより侍らんなどもあり

○すべす　源氏蓬生につき／＼しうの玉ひすべしてといへり

○そす　源氏明石巻に酒しひそしなど猶あり

○たゞす　源氏若菜にめをさへのごひたゞしてなくゝ（？）

○たゞす　源氏若菜にめをさへのごひたゞして

○たらはす　大祓ノ詞に置(オキタラハシ)足波志　万葉集十三にあめつちにおもひ足椅(タハシ)など見えたり

○つぶす　竹取物語にまなこをつかみつぶさんとあり又赤染衛門家集にむしのちをつぶして身にはつけずともおもひそめつる色なたがへそかへしむしたらぬ心をだにもつぶさではなにゝつけてか思ひそむべき

○てらす　万葉十八に天良佐比とあるはてらしを延たる也

○てらはす　字鏡に衒天良波須とあり又日本紀に衒にひとてらふ云云と〔波〕行の四段にも活かしいへり

○なす　古事記上巻歌にいは那佐牟を又いをし那世万葉二に枕とまきて奈世流君かも五にやすいし奈佐農又十四にいりきて奈佐禰十七にわをまつと奈須らん妹を

○なやす　蜻蛉日記にきなやしたるものゝ色もあらぬとあり

○ならはす　おちくぼにならはす人あらばまたこれにならはせと云々とあり猶歌にも文にもおほしさて此詞をこゝにあげたるは此行の下二段にも活きてまぎらはしき故なり猶其と下二段のところにくはしくいふべし

○にほはす　万葉一に仁寶播散麻思乎などなほ多しこれもならはすに同じ下にいふべし

〇はふらす　古今集に身はすてつ心をだにもはふらさじ云々

〇はふらかす　源氏若紫にはふらかしつるとあり

〇はやす　催馬楽に藤生野かたちが原をしめはやしとあり林もこの意なり

〇はらゝかす　古事記上卷に蹶散(クエハラヽカシ)とあるこれなり

〇はるす　出雲國造神賀詞に意志波留志(オシハルシ)云々

〇はるかす　祈年祭祝詞に見霽坐(ミハルカシマス)いせ物語におもひつめたることすこしはるかさんと千載集哀傷にむねにみつ思ひをだにもはるかさでなどあり

〇ひたす　古事記上卷に治養をひたしまつるとよめり

〇ひどらかす　紫式部日記におこなひがちにくちひどらかし云々又源氏物語にひどらきとも活かしいへり

〇ひやす　うつほ物語祭の使の卷に御馬どもいけにひきたてゝひやし云々蜻蛉日記に馬ども浦にひきおろしてひやしたど云々夫木集安法ほうしの哥に駒ひきたてゝひやしけるたどあり

〇ふらす　金葉戀につゝめどもなみだの雨のしゐければこひする名をもふらしつるかなとあり

〇ほころばす　源氏若菜にひきほころばしたるに

〇ほゝかす　おちくほ物語にほゝかし玉ふにやといへり

〇まどはかす　うつほものかたり藤原君卷にとしごろまどはかしつるも云々

〇まろばす　狹衣二に雪まろばしするとあり

〇もどろかす　枕草紙に色々のきぬすりもどろかしたる云々と見えたり

〇もやす　後撰集にいとどなげきのめをもやすらん好忠集に吹つもやせ冬のやま風

〇やはす　万葉集二にちはやぶる人を和爲跡(ヤハセト)また二十に夜波之などよめり

〇ゆるがす　蜻蛉日記にひきゆるがすめれば云々枕草紙にゆるがせば云々またひきゆるがしたる云々又かぜのふきゆるがすもなどいへり猶これかれあり

〇よこす　古事記下卷に讒(ヨコシ)二大日下王一日云々　字鏡に讒與己須万葉集十二卷に人言之讒(ヨコス)乎をきゝて催馬樂葦垣おやにまうよこしまうしなどあり

〇わかす　万葉集十六にさすなべに湯和可世子ども云々蜻蛉日記にゆわかしなどするに丹後守爲忠家百首に盛忠おもふとありまの里に出るゆの絶ずなみだをわかすころかなたど見えたり

〇をやす　日本紀欽明卷に毒(チヤシ)害(コナヒ)又仁德卷に被蛇毒(ヲロチニヲヤサレテ)而とも有り

○古ゝきゝをきかす なげきをなげかし まつをまたす たちをたたしあひをあはし かよへをかよはせ つむをつます ふむをふますわたりをわたらしのれをのらせなど此四段の活に延べていへる詞いとおほかれど今は出さず猶此詞のと別にくはしくいふべしさて此四段のはたらきにのばゝりたるのみ貴ふ方にいへる多し他(ホカ)の行に延はりたるにはかくたふとむかたにいへる例なし右の如く古くは四段の活にかぎりたるを万葉二の御言不御問をみこととはせず又おなじ巻に立為者をたゝすればなど世よりずとうくるもまたすればといふも下二段の活にて例にたがへりみとゝはさずたゝせず又たゝせればなどよむべき處なり 後ノ世には物語書などにかく貴みていへるには此行の下二段の活にうつしていへりそは其ところにいふべし

○他行(ホカノクダリ)にはまぎるゝことなきを此行にては四段の活詞と下二段の活詞とたがひにまぎらはしげなるこれかれある中に万葉集十一にこひぞ晩師之雨のふる日を拾遺集にいかですぐしゝむかしなるらん六帖二また六になでゝおほしゝ順集に雨にぬれじと君やかゝし〻雅盛集によろづよの山に根ざしゝはじめより重之集にたれ故にかはわれはわたしゝ清正集にいそのかみむかしかざしゝ仲文集に今はとてかへしゝよりもふぢころも竹取ものかたりにつかはしし人は云々又かたときのほどゝてくだしゝを云々又つかはしし人

やうノヽかへりてうつほ物語さがのゐんの巻になやみたまふことあらんとまうしゝかば同たづのむら鳥の巻に御ことあそばしゝに同巻にてまさぐりにかきならしゝをはつ秋の巻に心におぼしゝことなれば云々蜻蛉日記にたはふれにもまめやかにもほのめかしゝに云源氏物語須磨巻に春宮の御ことをゆゝしうのみおぼしゝに云々同藤末葉巻にいかゞもらしゝ關のあらがき同まぼろしの巻にときまかうさまに思ひめぐらしゝに云々同若菜巻にことそぎつゝこそまぎらはしゝか云々同玉蔓巻にたづねもきこえですぐしゝほどに云々同橋姫巻にかのふる人のほのめかしゝすぢなど云々同椎本巻につかはしゝを枕草紙にまぎらはしゝかば榮花物語衣の珠の巻にあかしくらしゝほどに云々狹衣一の巻に二の宮のことをほのめかしゝは同四の巻哥にひきつれてけふはかざしゝあふひさへなど猶いと多しこれらのしゝを今はせしともいふべく思はるれどしからず其故はすべて圖にしるせるごといづれの行にても四段の活詞は第二の音きしちひみりより過去のしをうくる定まり也されば是ゝに引たる詞みな此行の四段の活詞なれば第二の音しよりうけてしゝといふべき例なり第四の音えけせてねへめえれゑよりうくるは下二段の活詞の例なればせしといひては此行の下二段のはたらきざまになりて四段の活詞の例に違へりさてかく此格にはづれて用ひ誤ると古へはさらにあることなし志かるを千載集の哥のはし書(カキ)に

申せしとありこれも寫し誤りたるものと見えたり凡てまをしは申しとのみ多く書て申しゝとはかゝざれば其申しとありしをふと書誤れるなるべし又竹取物語にわび哥などかきてつかはすれども云々とありつかはすは此四段の活詞なればつかはせどもといふ定まり也つかはすれどもといひては下二段の活なると圖を見てもしるべしかく下二段に活かしたると新古今の比まで例なければこれもうつし誤りなどなるべし然るを今ノ世の人此差別(ケヂメ)を辨へしらざればみなあやまれりされば凡ての例圖のさまなどよく見て心得おくべきことなりかし

〔變格の活詞〕

えんずる　○おはする　○かれする　ぐする
けいする　ごらんずる　さびする　○しにする
する　せいする　そうする　○たえする
○つきする　ねんずる　○はえする　ひする
○ふりする　ほりする　まひする　めいする
ものする　ろんずる

○右にあけたる外猶多かるべしさて此詞のさま一やうならずさまざまなる中にする　おはする此二ッのみ正しくこゝの活詞にて其外は爲(スル)といふ詞をそへていへるがやがて一ッの詞の如くになれるなり

○おはする　竹取物語に竹の中におはするにて云々又おはしける落窪ものかたりにおはせましかば又おはせで住吉物語に云々やはおはする又盛におはせじ源氏浮舟巻にかしこにはおはせんとありつれど榮花物語月宴におはすれど又おはせじなど猶多し又源氏乙女巻湖月抄に大宮の御世の殘すくなげなるをおはさずなりなん後も云々とあるは誤也一本におはせずとあるぞ凡ての例にもかなひてよき

○かれする　万葉集十六に枯爲禮(カレスレ)とあり

○しにする　後撰集物名にしにせぬ拾遺集戀にあはぬしにせん又しにせぬ身落窪にしにせぬなど見えたり

○たえする　万葉十四にたまもこそひけば多延須禮とあり又清正集にねやはたえするほとゝぎすなどよめり

○つきする　源氏須磨卷につきすべくも同橋姫につきすまじく榮花物語鳥邊野卷につきすまじう濱松中納言物語につきすべくもあらずなどいへりすべてまじといふ辭(テニヲハ)は切るゝ詞よりうくる例なり

○はえする　萬葉十四に柳こそきれば伴要須禮とあり

○ふりする　拾遺集戀にこひしきことのふりせざるらん

〔下二段の活詞〕此するを俗にはせるといふ例也【但しこゝの詞には然いはざるもまじれり】

あする　○あはする　○いまする　うする

○おこする　おほする　きする　○きかする
きこえさする　○くはする　興ぜさする　ごらんぜさする
○しらする　すまする　○せさする　○とらする
○ならはする　にする　○にほはする　のする
のたまはする　はする　○はしらする　ふする
○まずる　○まかする　○まゐらする　○みする
○むする　やする　よする

○右に擧たる外いはする おもはする とはする またする もたするよまする をらするなど他に然さする詞猶いと多し ことごとくは出さずさてこれを今俗には此行の四段の活にいへどみなこゝの活なり思ひまがふべからず又右の他に然さする詞をたふとむ方にもいへりそはすべて貴人は何事も人におほせてものしたまふなればおのづからたふとむ方にうつれるなるべしさてそれをもとにてみづからものしたまふをもやがてかくいへるもおほし又のたまふきこゆるを今一トきは尊みてのたまはする きこえさするといひまた興じたまふを興ぜさせ玉ふといひ又御覽に入奉るをも御覽ずるをもともに御覽ぜさするといふたぐひ多し皆こゝの活にて尊みていへる詞也古くは此行四段の活に延はりたる詞に尊みていへるあり其よしはその處にいへり

○凡て他に然さするはこゝの活き物を然するは此行の四段の活なり後拾遺春に梅か香を櫻の花ににほはせて柳か枝にさかせてしかた源氏紅葉賀に手本かきてならはせなどしつゝ云々などいへる後拾遺なるは櫻の花に梅のにほひをあらしむるをいひ源氏なるは源氏の君の紫上に手跡をならはしめ玉ふをいへるにて共に他に然さする方なればこゝの活の詞を用ひまた古今集秋にふちばかまくる秋ごとに野べをにほはす源氏紅葉賀にをとこ君はなどかさしもとならはい玉ふ御心のへだてどもなるべしなどあるは藤はかまの野をにほはすをいひ源氏君の葵上を然ならはしたまふをいへるにて物を然するなれば四段の活の方を用ひたるなりこの差別いとまぎらはしよくせずはたがひぬべしかく二タかたに活きてまぎらはしげなる右に擧たる二ツの外なほ有べしその外にふすとふするとあれどこは自他をわかちてまぎらはしきことなしなほ自他の詞のことは別にくはしくいふべし

○上にあげたる詞の中に此行の四段にも活く如くにてまぎらはしげなるは其證を次々に出せり此けぢめ古へはさだかなりしにや一ツもたがへるとはなきを今はまぎらはしくてともすれば誤ると多しそはいかにとなれば此下二段の活詞を今俗言には此行の四段の活にいふによりて誤れるもの也よくわきまへおくべし

○あはする　万葉集十九に安波勢やりまたあらき風浪に安波世受拾遺集に歌合のあはせずなりにけるに伊勢物語におやのあはすれ

どもさかでゝ竹取物語にをとこあはせざらんやはと云々落窪に男あはせじと源氏箒木にあまたみあはせんの心ならねど又夕兒巻にわれたりけりと思ひあはせば云々順集に風さむみなくかりがねにあはすれば信明集に夢ならばあはする人も有もしなましなど猶いとおほし此詞あはさんあはさずあはしなど四段にも活く如く思はるれど然はたらきたることは一ッもなく皆右のごとくいへり此源氏のあはせばもゆくさきの事をいふなれば四段の活詞のかたならばあはさばといふ例也

〇いまする　い世物語にかゝる道はいかでかいまするといふをうつほ物語俊蔭巻にわが子のいませんかたには云々源氏浮舟に右大将の宇治へいまするも猶たえはてずや枕草紙にまことぞをこなりとてかくわらひいまするがはづかしなどのたまはするほどに安法法師集にかんの君のこのかはらの院にこむとちぎりていませざりけるにいひやるなどありさて此詞この行の四段にのみ活く詞とおもはれしに右の如くあればこゝの活にも用ふる詞と見えたりされどまれにてこれらの外見あたらず意は同じとゝきこえたりかく二かたに活きて同じ意なる詞猶これかれ例あり

〇おこする　万葉十八に於許世率あまは又十九に於己勢多流古今集におこせたりけるふみどもを云々後撰集にふみなどおこするをとこ云々伊勢物語にとかきおきてかしこより人おこせばこれをやれとていぬ蜻蛉日記にこれをはじめにて又々もおこすれど源氏榊にいせまでたれかおもひおこせん馬内侍集にやすのぶ文おこすれば云々など猶いとおほしこれらも四段にはたらかしたるは一ッもなし此人おこせば又々もおこすれど文おこすればなとも四段の活詞ならば人おこさば又々もおこせど文おこせばといふが定まり也又んたりたるなどのてにをはを第四の音より受るも下二段の活詞の例也

〇きかする　万葉十八にきみにきか勢率後撰集に聲になきいでゝ君にきかせん又けぢかき聲をわれにきかせよ大和物語に聲をきかせん源氏箒木にときさかせんなどこれも猶いと多しみなかくありてきかさんきかさずきかしなどはいはず

〇くはする　拾遺集につるにくはせてすはまにたてりとありこれも四段の活詞ならばくはしてといふ例なりさてかく他にしかさするは上にもいへる如く凡て皆こゝの活詞也

〇しらする　万葉二十に志良世率古今集戀にゝるしさものと人にしらせむ拾遺集に君にしらせむ後拾遺集秋にしらするものは蜻蛉日記に杉たてりともえこそしらせね源氏物語總角に櫻こそ思ひしらすれ枕草紙につげしらするたらんとなど猶いと多しこれも四段の活にもいふべくおもはるれどしかいへる例なし

〇せさする　物語書にその人をたふとみてせさするといふといと

おほしこゝの活詞なり
○とらする　大和ものかたりにとらせざらんものは源氏夕顔にとらせたればとあり
○ならはする　源氏紅葉賀にてほんかきてならはせなど云々
○にほはする　後拾遺集春に梅が香を櫻の花ににほはせて柳が枝にさかせてしかな源氏若菜巻にやへ櫻をえもいはずにほはせ玉へりなどあり
○はしらする　竹取物語にあゆみとくする馬をはしらせん伊勢物語にたきおとし水はしらせなど云々などいへり
○まずる　源氏宿木にうちまずまじくとありまぜとはつねにおほくいへり
○まかする　古今集賀にあかぬ心にまかせはてゝん後撰集に春さく花を風にまかせじ又風にしもなにかまかせん又吹風にまかする舟や源氏竹川に心ひとつにいかゞまかする榮花物語に木がらしの風にまかするもみぢだに枕草紙にむげに心にまかするなめりとなど猶いとおほしこれもまかさんまかさずまかしまかす云々とつづけいふべくも思はるれどしか四段に活きたること一ッもなし
○まゐらする　源氏桐壺にいそぎまゐらせてなど猶多し
○むする　和名鈔に哽咽無須　源氏あかしの巻におもひむせたるもなど見えたり

○古へませ奉るなどあるはまさせの約まりたるにてこゝの活詞にあらずそのよし〔川〕行の下二段の末にいへるが如し又萬葉十五にひとくにゝ君を伊麻勢弖とあるも同じ

詞八衢下巻

多行之圖　并受るてにをはの圖

活	詞	未然	連用	終止	連体	已然
四段の活	打（ウツ） 待（マツ）	(た) ず で じ ぬ ん まし	(ち) て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	(つ) めり らん べき らし と とも	かな まで に を より	(て) ば ど ども
中二段活	落（オツル） 閉（トヅル）	(ち) ず で じ ぬ ん まし	て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	(つ) めり らん べき らし と とも	(つる)チ かな まで に を より	(つれ) ば ど ども
下二段活	捨（スツル） 撫（ナヅル）	(て) ず で じ ぬ ん まし	て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	(つ) めり らん べき らし と とも	(つる)テ かな まで に を より	(つれ) ば ど ども

○此行には一段の活詞なし

〔四段の活詞〕

あかつ　あやまつ　うつ　うがつ
かつ　かこつ　くだつ　けつ
こぼつ　すだつ　そだつ　たつ（立）
たつ　たもつ　はなつ　○ひつ
ひだつ　ひとりごつ　まつ　まつりごつ
○みつ　もつ　わかつ

○ひつ　古今集夏にわか衣手のひつをからなん　六帖五に袖ひつまでに後撰集戀にそでのみぞひつ　金葉集春に池にひつ松の云々などありさて此詞も此行の中二段にも活きておなし意なり此例たほこれかれあり

○みつ　古今集に汐みてば入ぬるいその　後撰集に汐みたぬ海ときけばや　拾遺集戀に汐みてるほどに行かふ又みつ涙哉　後拾遺集冬に朝みつしほに　うつほ物語藤原君の巻にれがひみたじやはと云々又吹上巻に秋みたんとて云々又同巻の哥にしほのみつかな源氏物語眞木柱にむねにみつこゝちして云々丹後守爲忠家百首に盛忠いかなればみたぬこよひの月影の云々など猶いとおほしさてかく多く出せるは此詞中二段にみち　みつ　みつる　みつれともはたらく如く思はるゝにしか活きたる一つも見あたらず　みな右のごとくこゝの活きにいへればなり又寛喜女御入内屏風にさなへを家隆卿うゑみつるたのものさなへ水みちてにごりなきよの影ぞ見えけるとあるみつるはみたするにて意となりいはゆる自他のわかちありよくわきまふべし

〔中二段の活詞〕　此つるを俗言にはちるといふ例なり

○いさつる　おつる　おづる　くつる

○しこづる　○そほづる　とづる　はづる
○ひつる　○もみづる　よづる　○をつる

○いさつる　古事記上巻に啼伊佐知伎(ナキイサチキ)云々又下に哭伊佐知流(ナキイサチル)とありこはいさつるといふべき例なれば然出せりちるといひては俗言の例なり續日本紀宣命に荒備流(アラビル)とあるも俗言の例なり　この外かくいへる例なし

○しこづる　日本紀孝德卷に譖(シコヅテ)二倉山田大臣於皇太子一曰云々續日本紀宣命に讒(シコヅ)治まをし玉へるに云々　字鏡に譖ハ讒也志己豆(シコヅ)とありさてかくぢづとのみありて外の活き見えざれども詞のさまこゝの活なり　また四段のはたらきには濁音一ッもなく此活には濁音の方多ければなり

○そほづる　堀河百首雜に袂そほぢぬ　拾遺集戀にそほづる

○ひつる　拾遺集戀にさをしかのつめたにひちぬ山川の順集におりたてばらまでひつる袂ゆゑ　蜻蛉日記に袖ひつる時をだにこそなげきしか　源氏總角にかく袖ひつるなと　堀河二郎に袖はひつるも此詞四段にも活きて同し意なり

○もみづる　万葉十に山の將黃變(モミヂム)　古今集冬つひにもみぢぬ松も見えけれ　新古今冬にこからしの風にもみぢてなど猶あり

○をつる　出雲國造神賀詞に彌乎知爾御袁知坐(イヤヲチニヲチマシ)云々　万葉集十七にたばなれも乎知母(ヲチモ)かやすき同廿にゆめ花ちるないや乎知(ヲチ)にさけまた後の哥に郭公にをちかへりなどいへるもこれなりさてかくのみありてつつるつれといへると見あたらざれども此活なるべし

〔下二段の活詞〕此つるを俗言にはてるといふ例なり

あつる　○あわつる　いづる　○うつる(棄)
かなづる　くはだつる　すつる　そだつる
たつる　なづる　ひいづる　へだつる
まうづる　○ゆづる

○あわつる　字鏡に惶急阿和豆(アワツ)とありあわてといふは多し

○うつる　古事記上巻にぬぎ宇弖(ウテ)又棄をうつるとよめる多し

○ゆづる　字鏡に煠以レ菜入レ湯云々奈由豆(ナユツ)とあり　又榮花物語本果巻に御風にやとてゆでさせ玉ひて云々など猶あり

○古事記上巻にとりしで　又古今集春に白雲の道ゆきふりにとやつてまし　土佐日記に手をひてゝさむさもしらぬ又かつら川袖をひてゝも云々　夫木集に野川の水に枝ひてゝ此外みてゝなどいへるしではしだらせつてはつたへひてはひたしみてはみたせを約めていへるのみにてつつるつれなど活かざればこゝのはたらき詞にはあらざるなり此と上にもいへりこのうちみては家隆卿の哥にうゑみつるたのものさなへ云々などみつるともあればこゝの活詞

ともおもはるれど猶然にはあらざるべし

奈行之圖　并受るてにをはの圖

	未然	連用	終止	連体	已然
變格の活　往（イヌル）死（シヌル）	（な）ず で じ ぬ ん まし	（に）て けり けん つる し つゝ き なば ぬる しか	（ぬ）めり らん べき らし と とも	（ぬる）かな まで に を より	（ぬれ）（ね）ば ど ども
一段の活　似（ニル）煮（ニル）	（に）ず で じ ぬ ん まし	て けり けん つる し つゝ き なば ぬる しか	（にる）めり らん べき らし と とも	かな まで に を より	（にれ）ば ど ども
下二段活　兼（カヌル）束（ツカヌル）	（ね）ず で じ ぬ ん まし	て けり けん つる し つゝ き なば ぬる しか	（ぬ）めり らん べき らし と とも	（ぬる）かな まで に を より	（ぬれ）ば ど ども

○此行には四段の活中二段の活なし

○變格の活詞は圖の上に記せる往（イヌル）死（シヌル）の詞二ッのみなり活さまは大抵四段の活のごとくにて切るゝとつゞくとの詞二ッにわかれこその結び二ッあり下知の詞はねといふかた也

〔一段の活詞〕

似（にる）　煮（にる）

〔下二段の活詞〕此ぬるを俗言にはねるといふ例なり

かぬる　かさぬる　○かたぬる　○たがぬる

○たゝぬる　たづぬる　つかぬる　○つぼぬる

つらぬる　ぬる　○はぬる　○ふさぬる

○ゆだぬる　○わがぬる

○かたぬる　万葉十八にとしのうちの許登可多禰（カタネ）もちとあり

○たがぬる　万葉五にたつかつえこしに多何禰提（タカネテ）とよめり

○たゝぬる　万葉十五にきみがゆくみちのながてをくり多々禰（タヽネ）云々といへり

○つぼぬる　蜻蛉日記におのがじゝひきつぼねなどしつゝ云々とあり

○はぬる　古事記下巻に須岐婆奴流（スキハヌル）拙能　また万葉集二に奥津かいいたくな波禰（ハネ）そ邊津かいいたくなはねそとあり

○ふさぬる　日本紀用明巻に摠二攝万機一をよろづのまつりごとをふさねかはりてとよめり　續日本紀宣命に萬政摠以をよろづのまつりごとをふさねもちてとよめり　散木寄歌集釋敎の部のはし書に大かたふさねてかの國たへたることをなどあり

○ゆだぬる　日本紀に付をゆだぬとよめり

○わがぬる　大和物語にかいわがねてつゝみたり又枕草紙にわがねかけたらん云々などいへり

波行之圖　幷受るてにをはの圖

四段の活	一段の活	中二段活	下二段活
逢(アフ) 問(トフ)	干(ヒ) 嚏(ヒル)	戀(コフル) 侘(ワブル)	加(クハフル) 辨(ワキマフル)
(は) ず で じ ぬ ん まし	(ひ) ず で じ ぬ ん まし	(ひ) ず で じ ぬ ん まし	(へ) ず で じ ぬ ん まし
(ひ) て けり けん つる し	て けり けん つる し	て けり けん つる し	て けり けん つる し
つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか
(ふ) めり らん べし らし と とも	(ひる) めり らん べし らし と とも	(ふ) めり らん べし らし と とも	(ふ) めり らん べし らし と とも
かな まで に を より	かな まで に を より	(ふる)ヒ かな まで に を より	(ふる)へ かな まで に を より
(へ) ば ど ども	(ひれ) ば ど ども	(ふれ) ば ど ども	(ふれ) ば ど ども

〔四段の活詞〕

あふ　○あがふ　あきなふ　○あぎとふ
あげつらふ　あざわらふ　あそぶ　○あたふ
○あたなふ　あつかふ　○あともふ　○あなゝふ
あへしらふ　○あまなふ　あらふ　あらがふ
あらそふ　いふ　いこふ　○いごのふ
○やちまた下

○いさかふ　いざなふ　いさよふ　いとふ
いはふ　いろふ　うかぶ　うかゞふ
○うけふ　うしなふ　うたふ　うたがふ
○うづなふ　うつろふ　うばふ　○うるふ
うべなふ　うやまふ　えらぶ　おふ
おふ　おこなふ　おそふ　おとたふ
おほふ　おもふ　およぶ　かふ
かふ　○かゞふ　かゝづらふ　かゝよふ
○かこふ　○かそふ　かたらふ　○かだふ
かなふ　かよふ　きそふ　きほふ
きらふ　きらふ　くふ　くらふ
○くるふ　こふ　○ころぶ　さかふ
さけぶ　○さすらふ　さそふ　さまよふ
さもらふ(ム)　○さらぼふ　○しゞまふ　したふ
したがふ　しつらふ　○しなふ　しぬぶ
○しらがふ　すふ　すくふ　すまふ
すまふ　そふ　そこなふ　そろふ
○たぶ　たがふ　たぐふ　○たくはふ
たゝかふ　たゞよふ　たまふ　ためらふ
たゆたふ　たらふ　ちかふ　ちがふ

○やちまた下

ちりばふ　つかふ　つがふ　つきしろふ
つくなふ　つくろふ　○つたふ　つどふ
つみなふ　○てらふ　とふ　とぶ
とこふ　とゝのふ　ともなふ　○なぞ(ズ)らふ
なづさふ　ならふ　ならぶ　にぎはふ
になふ　にほふ　○によふ　ぬふ
ねがふ　○ねぎらふ　ねらふ　のごふ
のたまふ　○のろふ　はふ　はからふ
はこぶ　はぢろふ　はらふ　はらばふ
ひこづ(シ)らふ　ひり(ロ)ふ　ふさふ　○ふればふ
○ふるふ　ふるまふ　へつらふ　まふ
まがふ　まかなふ　まじなふ　まじらふ
まつらふ　まと(ツ)ふ　まどふ　まな(ネ)ぶ
まひなふ　まよふ　まろぶ　○みそなふ
むかふ　むすぶ　むせぶ　○もこよふ
○もとふ　○もらふ　やしなふ　やすらふ
○やとふ　やらふ　ゆふ　○ゆるぶ
よぶ　よそふ　よばふ　○よろふ
よろこぶ　○よろぼふ　わづらふ　わらふ
ゐやまふ　ゑふ

○あがふ　万葉集十七に安賀布(アガフ)いのちも　字鏡に安賀布(アガフ)などあり

○あぎとふ　古事記中巻に始為阿藝登比(ハシメテアギトヒシタマヒキ)　蜻蛉日記にあたかまかまとたゞてをかきおもてをそこらの人のあぎとふやうにすれば云々などあり

○あたふ　日本紀神代巻にあたはぬかもよとあり

○あたなふ　日本紀神代巻に奸賊(アタナフ)とあり

○あともふ　万葉二に御軍乎安騰毛比(アトモヒ)賜又九に阿騰母比(アトモヒ)たてゝなど猶あり

○あなゝふ　續日本紀宣命に阿奈奈比(アナナヒ)奉とあり

○あまなふ　日本紀仁徳巻舒明巻に不和をあまなはずとよめり又應神巻に欲和をあまなへたまはんとすとよめりかくては此行下二段の活格たり

○いごのふ　古事記中巻にえゝしやこしやこは伊碁能布(イゴノフ)ぞとあり

○いさかふ　大和物語にいさかふなり　落窪ものかたりにいさかひてなどあり

○うけふ　古事記上巻に宇氣布(ウケフ)ときに　伊勢物語につみもなき人をうけへばなどあり

○うづなふ　万葉十八に神あひ宇豆奈比(ウヅナヒ)　續日本紀宣命に相宇豆(ウヅ)

奈比奉などなほあり

○うるふ　拾遺集うるひにけりと　丹後守爲忠家百首に忠盛こけの衣のうるひぬるかなとあり

○かゞふ　万葉九に加賀布嬥歌とあり

○かこふ　金葉集雜にかこふ垣柴の　好忠集にかこはれど蓬のまがき　堀河百首雜にかこひなき柴の庵　丹後守爲忠家百首に仲正かこひてさけるかきつはたぞもなどあり

○かそふ　古事記中卷　掠二取其母王一　續日本紀宣命に高御座次加蘇毘奉また皇位乎掠天なとあり　又日本紀繼體卷に捉をかすひともよめり

○かだふ　万葉十八にひと加多波牟かも　後撰集春に山風の花の香かだふふもとには云々などあり

○くるふ　万葉四に久流比に久流比おもほゆるかもとよめり

○ころぶ　日本紀神代卷に發二稜威之嘖一譲一又神武紀に詰嘖之

又万葉十一にはゝに所嘖物思ふわれを又十四にねなへこゆゑには許呂波要などもありさて此詞中二段の活かともおもはるれどしからず其故はすべて中二段の活詞の其第一の音より〔良〕行の下二段の活にころばれなどいふ例なしかくいふはみな四段の活よりなればなりころばえはころばれなり

○さすらふ　大祓詞に佐須良比うしなひてん　源氏物かたり總角にあるまじきさまにさすらふたぐひ　金葉集戀にゆきさすらひ一などあり此詞この行の下二段の活にもいひておなしき意ときこえたり

○さらぼふ　源氏明石におこなひさらぼひ散木寄歌集に山陰にやせさらぼへるいぬさくらおひはなたれてひく人もなし

○しゞまふ　古事記下卷に匍匐進赴云々　續日本紀宣命に進退はらばひなどあり

○しなふ　万葉三にまきのはの之奈布せの山また十三に春山の四奈比さかえて又二十にたちしなふきみがすがたを又好忠集に尾羽ぞしなへるなど見えたり又〔也〕行の下二段の活に　しなゆ　しなゆる　しなゆれ　しなえ　といふ詞ありこれこゝの詞と今は同し意ときこゆれどかゝ行も活も異にて同し意なる例なければ異なる意あるにやこはついでにおどろかしおくのみなり

○しらがふ　源氏竹川卷に見えしらかひまた總角卷に見えしらかふなどあり

○たぶ　續日本紀宣命に多婆受とあり又後に　たらび　たらべ　などいへるはたび　たべを音便にいへるなり

○たくはふ　万葉十九に多久波比おきてとありさて外に活きたると見えざれば中二段の活歟たしかに定めかたけれどこゝのはたらきのさまに似たれば先こゝに出せり又おもふに此詞常に用ふる下二段の活と意おなしことゝきこゆればたくはへといふべきを第二の音にうつして右のごとくいへるにてうれへをうれひ　あぢはへ　をあぢはひ　たとへをたとひ　おしなへをおしなみ　などいへるも此例にやなほこの中二段の活のうれふるといふ詞のところにいへるとあり考へあはすべしあぢはひ　たとひ　おしなみ　などもまれ〳〵にあるのみにて此外四段の活きざまにいへる例なし

○つたふ　公忠集によゝにつたへるくれ竹のとあり

○てらふ　日本紀哥に山のへのこしまこゆゑに人涅羅賦馬のやつげはをしけくもなし又字鏡にてらはすともあり

○なぞらふ　後撰集春に身になぞらへる　源氏さわらびの巻になずらふ人世にありなむや又みをつくしになずらはざらん又行幸になずらひても見え玉はざりけりなど猶ありさてかく四段に活きては他のものゝこれになずらふをいひ　この行下二段に　なずらふ　なずらふる　なずらふれ　なずらへ　とはたらきては他のものにこれをなずらふることにて意となりなほかくおなし行ながら活のことなるにて自他をわかつといと多かれどこはいさゝかまぎらはしげなればついでにわきまへおくなり

○によふ　落窪ににょひをるとあり

○ねぎらふ　日本紀雄略巻に労レ軍とあり

○のろふ　靈異記に咒をのろふ　伊勢物語にあまのさかてをうちてなむのろひをるなる　枕草紙にうちつる人をのろひまが〳〵しくなど見えたり

○ふればふ　源氏初音にふればひぬべきしるしやあると又夫木集に西行法師しづがかきねにふればひてなどありこゝの活さまなり万葉二にながれふらばへとあるはふれを延へていへるなり

○ふるふ　舊事記にゆら〳〵と布瑠部とあり

○みそなふ　新古今集に神もほとけもわれな見そなへなどなほあり

○もこよふ　古事記上巻に委蛇又日本紀おなし　源氏葵にもこよふとゝ云々　うつほ樓上巻ににげてたふれもこよひつゝいけばなどあり

○もとふ　日本紀神武巻哥にかむかせの云々いはひ茂登倍廛云々古事記にはもとへりとありすべて第四の音より　り　るの辭を受るはこゝの活きの格なり

○もらふ　字鏡に餬寄食也毛良比波无と見えたり

○やとふ　續日本後紀長歌にふみしるす博士不雇須とあり

○ゆるぶ　源氏紅葉賀に心ゆるびなきとあり
○よろふ　万葉一にとり與呂布(ヨロフ)とあり
○よろぼふ　源氏夕皃にうちよろぼひとあり
○古くなげきをなげかひ　つげをつがへ　まをしをまをさひ　きこしめせをきこしめさへ　まちをまたひ　ゑみをゑまひ　ぬすまむをぬすまはむ　わたるをわたらふ　のれをのらへなど延へていへるとなほいと多しその中に此四段に活きたるもおほかれどはぶきて出さず又たゞ某(ソノ)詞をのべたるのみにて活かぬさまなるもおほし又二重にのべていへるもあり古事記中卷にはひもとほろふしたゞみの云々とあるはもとほをもとほるといひ又それをのべてかくいひ日本紀雄略卷に中つ枝におちふらばへ又万葉二に下つ瀬にながれふらばへなどあるはふれをふらへとのべ又それをふらばへといへるなり此類も猶ありなぞらへしるべし

〔一段の活詞〕

ひる 干　○ひる 嚔

○ひる　和名鈔に嚔和名波奈比流(ハナヒル)噴(ヒル)鼻也　古今集にはなもひぬかなたなどたほありまた簸(ヒル)はものに見えざれとも噴とおなし詞たるべし

〔中二段の活詞〕　此ふるを俗言にはひるといふ例なり

○あからぶる　あらぶる　○いなぶる　○うとぶる
○うれふる　おふる　おきなぶる　おとなぶる
○おらぶる　かぶる　かぶる　くしぶる
こふる　○こぶる　ことさらぶる　さぶる
○しふる 強　○しふる　○しのぶる　○すさぶる
○たけぶる　○ともしぶる　○にぎぶる　○ねぶる
のぶる　ほころぶる　○ほとぶる　ほろぶる
○まなぶる　○むつぶる　もちふる　わぶる
わかぶる　○ゐやぶる　をさなぶる

○右に擧たる外何ぶるといふことたほあるべし
○あからぶる　出雲國造神賀詞に赤玉能御阿加良毘(アカラビ)半とあり此詞〔麻〕行にては四段の活なれども此行にうつりてはこゝの活きときこえたり此類なほこれかれあり
○いなぶる　源氏末摘花にいなびぬ御心にて　又若栄にかたくいなぶるを　又總角にえきこえいなびでなど猶あり
○うとぶる　祝詞に踈夫留(ウトブル)また踈(ウトビ)備などありこれも〔麻〕行にては四段の活なり
○うれふる　三代實録に憂(ウレ)禮比(ヒ)とありさて此詞はつねにこの行の下二段の活にのみ用ひたるを右の如くあるは四段の活の格なりされど此外に活きたることも見えざれば何れともたしかには定めがたけ

れど四段の活ならばられはんられはぬられはじなどいふ定まりなるをさはいふべくもおぼえずこゝの活にてはられひんられひぬられひじといふ格なりかくはいふべきさまなればこゝには出せるなり但し同し意にて二タかたに活く詞の例四段の活と中二段の活又四段の活と下二段の活などにはこれかれあれど中二段と下二段とに活きて同し意なるは例なしなほ此行四段の活詞のたくはふといふ下にいへるとありひらき見るべし

○おらぶる　万葉九にさけび於良妣日本紀崇神卷に叫哭又雄略卷に呼唬などあるのみにて外に活かざれば四段の活かともおもへど猶こゝの活のかたなるべし

○こぶる　字鏡に媚ハ古夫靈異記に媚ハこびて見え古事記上卷に媚附云々とあり此外に活きたると見えざれどもこゝの活詞ときこえたり漢籍讀にはこびんとこゝのはたらきざまにいへり

○しふる　万葉三にいなといへど強流志斐能我強語云々又六帖四に人をもしひじなどあり

○しふる　和名鈔に蘘荷名美々之比又盲和名米之比古事記にもありこれも外に活きたると見えざれども此活詞なるべし

○しのぶる　源氏帚木にたづねまどはさむともかくれしのばず云云若紫にしのばさせ玉へるに云々浮舟にしのばさせ玉ふけしき見奉れば云々　榮花物語うら〳〵のわかれの卷にしのびさせたまふなどありさせといふ詞を第二の音より受るは中二段の活にかぎれりなほしのぶるしのぶれといふは常に多し又万葉十一に不竊隱を古き點にしのばずてとよめりさて此詞四段にも活きて意は全くおなし

○すさぶる　源氏朝皃にのたまひすさぶるもとあり此詞も〔麻〕行にては四段の活詞なり此行にうつりてはこゝの活とせり

○たけぶる　古事記上卷に建通【訓建云多祁夫】万葉集十一におもひ多鶏備てなどあり又日本紀雄略卷に叱をたけばしめ又たけびしめとも訓點あり此外に活きたると物に見えざれば四段の活かこゝのはたらきか定めがたしされど先しはらくこゝに出しおきつ又おもふに凡てしめといふ辭を第一の音より受るは四段の活の格第二の音よりうくるはこゝの格なればたけばしめと第一の音よりしめといひては凡て四段の活詞たけびしめと第二の音よりいひてはこゝの活詞なりかく二タやうによみたれは四段にも中二段にも活く詞にや

○ともしぶる　万葉十七におとのみも名のみもきゝて登母之夫流がねとありこれも〔麻〕行にては四段の活詞なり

○にぎぶる　万葉一に柔備にし云々とあり此詞も外に見えざれどもこゝの活なるべし

○ねぶる　物語書にねびとゝのひなどあるをいふ此詞もかくのみありて外にはたらきたると見えざれどこゝの活詞ときこえたり

○ほとぶる　伊勢物語にかれいひのうへになみだおとしてほとびにけりとあり此ノ活ざまなり俗言にもほとびるといへり

○まなぶる　千載集序に此哥の道をまなぶるとをきくに云々とありて又下にふみの道をまなびずさいへりこゝの活さま也此詞四段の活にのみ用ひてかくいへるは外に見あたらず意はおなじことゝきこえたり

○むつぶる　六帖三に淀をむつぶる水鳥の云々源氏蓬生に例はさしもむつびぬを又々見にしたしく思ひむつぶるすぢはなどあり

○ゐやぶる　續日本紀宣命に爲夜備末都利　日本紀繼體卷に禮玉ヒテ賢さた跪禮たどあり　さて日本紀孝昭卷に禮神と第三の音よりドへつゞけてよめるは四段の活の格なりされど此詞のさま四段の活詞の如くにはあらずこゝの活詞のさまにおもはるればこゝに出せりなほよく考ふべし

○うれしび　かなしび　くやしび　たふとび　めぐびなどあるも〔麻〕行にては四段のはたらき詞なれど此行にうつりてはこゝの活さなるべし

「下二段の活詞」　此ふるを俗言にへるといふ例なり

○ゐふる　あがまふる　あたふる　あつらふる

○あまなふる　いらふる　○うらふる　○おくまふる
おこふる　おとろふる　かふる　○かゝふる
かぞふる　かずまふる　かなふる　○かまふる
かむかふる　くぶる　くはふる　くらぶる
○こしらふる　こたふる　こふる　さきはふる
さすらふる　○したがふる　しらぶる　○すぶる
そふる　そろふる　たふる　たがふる
○たぐふる　たくはふる　たゝふる　たづさふる
たとふる　たまふる　ちがふる　つかふる
つたふる　つどふる　とゝのふる　さたふる
とらふる　○なぶる　ながらふる　なずらふる
なぞふる　ならぶる　のぶる　○はふる
○はらふる　○ひかふる　ふきふる　ふすぶる
ほころぶる　まがふる　まじふる　よそふる
わきまふる　をふる

○あふる　蜻蛉日記にかみなりとのぼりくだりはあふれどもまださかゆかぬこゝちこそすれ又ことばかきあふべくもあらず　源氏葵に心もえをさめあふまじく眞木柱に人の見あふるほどもなう浮舟にはゞかりあふまじくなむ　狹衣三に人めもえつゝみあふまじくと猶榮花物語にもあり又　詔詞解に敢止之爲をあふましどと

してとよまれたりすべてなしのてにをはは切るゝ詞より受る例也ことてあへとは常に多くいへり

○あまなふる　日本紀應神卷に欲和をあまなへ玉はむとすとよめりこゝの活きまなり又仁德卷に不和をあまなはずとよめるは四段の活きまなり

○うらふる　古事記上卷にふとまにゝト相而(ウラヘテ)とありうらふうらふるうらふれなどいへるとは見えざれどもかく活く詞の格也

○おくまふる　万葉十一に奥間經而(オクマヘテ)わがもふいもとありこれも外に見えざれとも此活の例なり

○かゝふる　竹取物語にかゝへ奉れり　蜻蛉日記にやかてのりてかゝへてものしぬ　榮花物語楚王夢の卷になく〳〵かゝへまつらせ玉へりたどのみありてかゝふかゝふるかゝふれといへる見あたらざれどもかく活く例なり又〔也〕行下二段の活にてかゝゆかゆるかゝゆれかゝえといふ詞かとも思へどすべて物をしかするはおほくこゝの活詞にいひものゝおのづからしかるは〔也〕行の方にいへば猶こゝの活詞なるべし

○かまふる　榮花物語月宴におほしかまふと云々又かまふるつみに云々などなほおほし

○こしらふる　日本紀に慰喩(コシラフル)とあり又こしらへといへるは物語書におほしこれも〔也〕行にはあらざるべし

○したがふる　竹取物語に心にもしたがへずとあり

○すぶる　玉葉集夏に夕されば涙こす池のはちす葉に玉ゆりすぶる風のすゝしさとよめりすべといへるは常のこと也

○たふる　源氏物語桐壺にえたふまじうとありたへとは常におほし

○たぐふる　敦忠集にわがひとつたぐふる風を云々たぐへさいへるは常のことなり

○なぶる　蜻蛉日記にさきにやけにしにくどころこたひはおしなぶるなりけりこれもなべといへるはおほし又うつほ物語菊宴哥にうゑなむる人そしるへき花の色は云々とあるもなぶるなり此行さ〔麻〕行とかよふは常のことなればなむるとかけるのみにて〔麻〕行の下二段の活にはあらざるべし

○はふる　万葉十八にした波布流(ハフル)こゝろしなくは云々　新古今夏にしめはふるまでとありこれもはへといふはつねなり

○はらふる　万葉十七に中臣のふとのりとごといひ波良倍(ハラヘ)　伊勢物語にはらへけるまゝに　六帖にはらふるとを又はらふれば又糸つけてはらへん云々　後撰集夏に夏はらへする　拾遺集夏にはらふるとを　同哀傷にふち衣はらへてすつる　後拾遺集雑にはらへつる哉　兼盛集に河風ははらふるこもなど猶おほしさて此詞をか

ゝおほく出せるはふるゝけ祓もたゝ四段の活にのみ用ひたるを中昔より祓にかぎりて四段の活にいはずみなこゝの活にのみいひていにしへ今のたがひあればなり

○ひかふる　古今集秋詞書に紅葉のちる木のもとに馬をひかへてとありなほ外にもかくのみありて外に活きたると見えざれば〔也〕行の下二段の活かとも思へどたほしかにはあらじそのよしかゝふるのところにいへるがごとし

○万葉二十にちはやぶる神をことむけ麻都呂倍奴(マツロヘヌ)人をもやはし云々とあるはこゝの活ざまなりされど此詞此行四段の活きにのみもちひてこゝの活にいへるは外に例なく又かく活く詞のさまとも見えざればこゝの活詞のつらには出さず

○万葉十五にたましひはあしたゆふべに多麻布禮杼(タマフレド)狹衣にきぬのすそをおの〳〵ふまへつゝ　枕草紙にしろき色紙のむすべたるうへにひきわたしたるすみのなどあるは外に活かざればこゝの活詞にあらずたまふれはたまへふまへはふみを延ていひむすべはむすばれを約ていへるなりなほ此と〔加〕行下二段の活の末にいへり

麻行之圖　并受るてにをはの圖

一段の活	中二段ノ活	下二段ノ活
見(ミル)	恨(ウラムル)　試(コヽロムル)	聚(アツムル)　責(セムル)
(み) ず で じ ぬ ん まし	(み) ず で じ ぬ ん まし	(め) ず で じ ぬ ん まし
て けり けん つる し	て けり けん つる し	て けり けん つる し
つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか	つゝ き なば ぬる しか
(みる) めり らん べき らし と とも	(む) めり らん べき らし と とも	(む) めり らん べき らし と とも
かな まで に を より	(むる) かな まで に を より	(むる) かな まで に を より
(みれ) ば ど ども	(むれ) ば ど ども	(むれ) ば ど ども

四段の活
住(スム)　讀(ヨム)
(ま) ず で じ ぬ ん まし
(み) て けり けん つる し
つゝ き なば ぬる しか
(む) めり らん べき らし と とも
かな まで に を より
(め) ば ど ども

〔四段の活詞〕

あむ　あかむ　あからむ　○あこむ
○あたむ　あはれむ　あやしむ　あやぶむ
あゆむ　あをむ　いむ　いかしむ
いさむ　いそしむ　いたむ　いつくしむ
いどむ　いさなむ　いとほしむ　○いばむ
うむ　うむ　うづむ　うつくしむ
うとむ　○うべなむ　うむかしむ　うらやむ
○うるはしむ　うれしむ　○おいばむ　おむかしむ
かむ　○かむ　○かいまむ　かどむ

かくむ　かしこむ　かすむ　○かだむ
○かたじけなむ　かなしむ　○きざむ　きばむ
くむ　くむ　くゝむ　くやむ
くるしむ　○くろむ　けしきばむ　こむ
○ことなしむ　このむ　さいなむ　しむ
しがらむ　○しじかむ　しづむ　○しぼむ
○しほじむ　しらむ　○しろむ　○しわむ
すむ　すむ　すくむ　すさむ
すゝむ　すじむ　そむ　そねむ
○たむ　たくむ　たしなむ　たゝむ
たのむ　たのしむ　たゆむ　たわむ
ちじむ　つむ　つむ　つかむ
つゝしむ　○つぼむ　とむ　○ともしむ
とよむ　なぐさむ　なごむ　なづむ
なへばむ　なやむ　なればむ　○にがむ
にくむ　○にごむ　○にばむ　にらむ
ぬすむ　ぬるむ　ねたむ　のむ
いむ　のぞむ　はむ　はぐゝむ
○はづかしむ　はげむ　はさむ　はらむ
ひがむ　ひそむ　○ひるむ　ふむ

ふくむ　○ふくだむ　○ほとりばむ　まどろむ
○みつわくむ　むしばむ　もむ　やむ
やむ　○やくさむ　○やさかむ　やすむ
ゆがむ　ゆるむ　よむ　よどむ
○よゝむ　ゑむ　ながむ　をしむ
をろがむ

○何ばむといふと猶あるへしみなこゝの活なり

○あさむ　源氏若菜にめであさみ　うつほ物語俊蔭に天下の人いひあさみて　狹衣にあさみまわがせ玉ふ　濱松中納言物語におどろきあさむなどあり

○あたむ　万葉二に敵見有とあり此外に活さたると見えざれどもこゝの活なるべし中二段の活にはあらじ

○いばむ　日本紀神武卷屯聚居之【屯聚居此云怡皮濔多】又欽明卷に充滿などあり

○うべなむ　續日本紀宣命に天地乃宇倍奈彌由流之とあるのみなりこゝの活なるべし

○うるはしむ　伊勢物語にわがせしがごとうるはしみせよとありこれも上におなし

○おいばむ　枕草紙においばみとあり

○かむ　和名鈔に掃俗云波奈加無　源氏總角卷にはなしば〳〵ら

ちかみてなどあり
○かいまむ　いせ物語にかいまみてけり　大和物かたりにかいまめばなどいへり
○かだむ　靈異記に姧を可陀彌(カダミ)　日本紀又續日本紀宣命に姧(カダム)とあり
○かたじけなむ　續日本紀宣命に辱(カタジケナミ)彌とあり
○きざむ　好忠集に朝なにきざむ松の葉をとよめり
○くろむ　狹衣にくろみわたりとあり
○ことなしむ　古今集にことなしむともしるしあらめや又源氏物語にことなしみになどもあり
○しどかむ　源氏行幸に御手はむかしだにありしをいとわりなくしどかみたる　枕草紙にしどかみたる髮になどあり
○しぼむ　万葉十八に之保美(シホミ)かれゆく
○しほじむ　源氏明石にこゝらしほじむ身となりて又薄雲にしほじまざらましかば又夕顔にしほじみ云々　濱松中納言物語にこのかたにしほじみたる人はなど見えたり
○しろむ　枕草紙にいみしうしろみかれてとあり
○しわむ　万葉九にわかゝりしはだも皺奴(シハミヌ)　字鏡に皡を於毛氐志(シ)和牟(ワム)などあり

○たむ　万葉集三におきつしま搒轉(コギタム)小舟(ヲフネ)又十六にやらのさき多未弖(タミテ)こぎくとなどありまた拾遺物名にしたたみてこそものはいひけれとあるもおなし詞ときこえたりさて此詞中二段にも活きて同し意なり
○つぼむ　今撰和歌集に爲眞入道立枝につぼむ花なかりせばとあり
○ともしむ　万葉十七にはなたちばなを等毛之美(トモシミ)しなどなほあり
○にがむ　源氏物語箒木ににがみ玉ふ　狹衣ににがみかゝりなどいへり
○にごむ　日本紀崇神巻に和(ニゴミテ)享とあり
○にばむ　源氏葵ににばめる御ぞ　榮花物かたり鶴林にみなにぶみたり
○はづかしむ　續日本紀宣命に愧(ハツカシミ)美とあり
○ひるむ　和名鈔に痿痺俗云比留無夜末比(ヒルムヤマヒ)此活詞さ聞ゆ
○ふくだむ　源氏物語紅葉賀にうちふくだみたまへるびんぐきなどなほあり
○みつわぐむ　源氏夕皃にみつわくみてすみ侍るなり後撰集雜にしら川のみつわくむまておいにけろ哉などあり
○やくさむ　古事記上巻にわが御子たち不平(ヤクサミ)ますらし日本紀神

代巻に擧體不平など猶あり
○やゝかむ 古事記下巻に痩萎とあり
○よゝむ 万葉集四に老舌出て與余牟ともとありこの活のさまなり
○なみ居 なみ立るなどいへるはならびにてこゝの活詞にはあらず又万葉七にことしの夏のかげに将比疑とありさては此行中二段の活きさまなれどしか活く詞のさまにあらざればこは誤字なるべし

〔一段の活詞〕

みる（見）

〔中二段の活詞〕此むるを俗言にはみるといへり

○あむる（浴）　○うしろむる　○うとむる　うらむる
こゝろむる　○たむる

○あむる 古今集につくしへゆあみんとて云々 枕草紙にねおきてあむる湯は云々などなほあり
○うしろむる 狭衣にうしろむる人なからんよりはとありうしろみといへるはおほし
○うとむる 源氏竹川にきこえうとむるとありさて此詞此四段にも〔波〕行の中二段にも活きて皆同し意也
○たむる 万葉六にこき多武流うらのことゝ又二十にをかのさき伊多牟流ことになどあり右の外たみんたみずたみじためんためずためじなど活きたると見えざればこゝの活きか此下二段の活かいづれとたしかにさだめがたけれどこゝの方なるべし

〔下二段の活詞〕此むるを俗言にはめるといへり

あかむる	あがむる	あきらむる	あたゝむる
あつむる	あはむる	○あやむる	あらたむる
いさむる	いましむる	うかむる	うづむる
○えしむる	○おとしむる	かゞむる	かすむる
かたむる	○からむる	かろむる	○きたむる
きはむる	きよむる	くるしむる	こむる
さむる	さだむる	しむる	しむる
○しゞむる	したゝむる	○しづむる	しづむる
○しなむる	すゝむる	せむる	○せたむる
そむる	○そばむる	○たふとむる	○たむる
たむる	たしなむる	たのむる	○たゆむる
たわむる	ちりばむる	つとむる	とむる
とがむる	とぢむる	とゞむる	○ともしむる
さよむる	なむる	ながむる	なぐさむる
なごむる	なだむる	のどむる	○はむる
はじむる	はしたなむる	はやむる	○ひむる

ひがむる　　ひそむる　　ひろむる　　○ふかむる
ほむる　　○みしむる　　やむる　　やすむる
ゆがむる　　をこむる

○何しむるといふこなほおほし皆こゝの活なり
○あやむる　堀川百首にうつりかにつゝなぬ袖も人ぞあやむる散木寄歌集に戀すとも身のけしきだにかはらずはいはぬに人はあやめましやは　濱松中納言物語にすゝめいれたてまつりてしをおほしあやめて人つけ給へりけるなめりなどあり
○えしむる　万葉二十にわれに依志米しとあり
○おとしむる　源氏桐壺におとしめそねみ云々猶あり
○からむる　伊勢物語にからめられにけり　落窪物語にからむるやうになどあり
○きたむる　續日本紀宣命に支多米玉ふべく日本紀皇極卷歌にとこよのかみをうち岐多麻須母とあり此ますはむの延はりたるなり
○しゞむる　源氏行幸にひきしゞめ玉ひて　浮舟にこゑひきしゞめかしこまりてなどいへり
○しづむる　拾遺集雜にしづめじと云々さあり
○しなむる　日本紀崇神卷匿をしなめてとよめり
○せたむる　狹衣におのが身をとさまかうさまにせため云々又母しろまたせためによりきたるなど見えたり

○そばむる　源氏桐壺にあいなくめをそばめつゝ又竹川にそばめられともあり
○たふとむる　新古今集序に耳をたふとぶるあまりとありこのぶるはむるといふにおなじ
○たむる　六帖に眞弓たむれどゝあり　後拾遺集雜に君にこそ思ひためたる云々こは溜に弓をたむるをかねたり
○たゆむる　源氏紅葉賀にたいめきこゆさあり
○ともしむる　万葉十に今だにも乏牟べしや又十一に目莫令乏
○はむる　万葉十七にうち波米底とあり又いせ物語にきつにはめなでとあるはめははませの約りたる也されどもとは同し詞也
○ひむる　源氏絵合にいたくひめてとありこゝの活きざま也
○ふかむる　万葉二に深目手もへど　古今集に何にふかめておもひそめけんなどあり
○見しむる　万葉十七に見之米さあり
○蜻蛉日記にされぱこそいのちもつゝしむれとあるはつゝしめの延はりたるにてこゝの活詞にあらず此と上にもいへり

也行之圖　幷受るてにをはの圖

中二段活	老(オユル)　報(ムクユル)	(い) ず で じ ぬ ん まし て けり けん つる し つゝ き なば ぬる しか	(ゆ) めり らん べき らし と とも	(ゆる)(イ) かな まで に を より	(ゆれ) ば ど ども
下二段活	愈(イユル)　榮(サカユル)	(え) ず で じ ぬ ん まし て けり けん つる し つゝ き なば ぬる しか	(ゆ) めり らん べき らし と とも	(ゆる)(エ) かな まで に を より	(ゆれ) ば ど ども

○此行には四段の活一段の活なし

〔中二段の活詞〕此ゆるを俗言にはいるといふ例なり

○おゆる　くゆる　○こゆる　○むくゆる

○おゆる　源氏手習に年のおゆるまゝにはとあり

○こゆる　万葉五にうち許(コ)伊(イ)ふしてなどなほあり　外にこゆ　こゆるこゆれなど活きたるとは見えざれどもかく活く詞の例なり　又こうこらるこられと活きて〔阿〕行の詞かともおもふべけれどこやるこやすなどやより外の行にうつりて　はたらけば此行の詞なることあきらけし

○むくゆる　うつほ物語俊蔭にむくいんとあり

〔下二段の活詞〕此ゆるを俗言にはえるといふ例なり

○あゆる　○あゆる　○あゆる　○あまゆる

いゆる　○いばゆる　○おびゆる　おぼゆる

おもほゆる　きゆる　きこゆる　○くゆる

こゆる　こゆる　さゆる　さかゆる

○しなゆる　そびゆる　たゆる　○つひゆる

○はゆる　○ひゆる　○ほゆる　まみゆる

みゆる　もゆる　○わかゆる　○をゆる

○あゆる　うつほ物語蔵びらきに松風をはらめる君もえてしかならまれたる子のあえものにせむかへし秋風をあゆとやしれる君か子は千年をまつの野分とそきく後撰集に君か代はつるのこほりにあえてきね　金葉集連哥になにゝあゆるをあゆといふらんなどあり

○あゆる　万葉八に玉にぬく五月をちかみ安(ア)要(エ)奴がに花咲にけり云々又十に秋つけば水草の花の阿(ア)要(エ)奴がに云々又十八に安(ア)由(ユ)流(ル)實(ミ)は玉にぬきつゝ云々など見えたり

○あゆる　落窪に血あゆばかり　枕草紙にあせあゆるこゝちぞしけるなど猶あり

○あまゆる　源氏竹川にあまえて寄生にあまえてまた榮花物語にもあり皆あまえてとのみありて外に活きたると見あたらざれば〔波〕行下二段の活かとも思へど俗言にあまやかすといふ詞もあればなほこゝの活なるべし

○いばゆる　和名鈔に嘶和名以(イ)波(ハ)由(ユ)源氏總角に馬どものいばゆる

後拾遺集に駒ぞいばゆるなど猶多し此ことばを近き世にはいばひいふなど〔波〕行の四段の活にいへど新古今のころまでしかいへるとなし

○おびゆる　万葉集二に　協流（オビユル）までに　源氏物語箒木にやさおびゆれど若葉におびえさわぎてなどあり

○くゆる　万葉十四にみこしのさきの伊波久叡の君が久由べき

○しなゆる　万葉二に夏草のおもひ之奈要（シナエ）て云々十又十九に之奈要。うらぶれなどありさて此詞のこと〔波〕行の四段のはたらきしなふの所にいへるとありひらき見べし

○つひゆる　字鏡に瘠豆比由（ツヒユ）とあり

○はゆる　万葉二にかるれば波由流さよめり

○ひゆる　拾遺集に身はひえにけるとあり

○ほゆる　靈異記に喚吠を保由と訓注あり

○わかゆる　出雲國造神賀詞に御若叡坐（ミワカエマシ）　忠岑集にをる菊のしづくをおほみわかゆてふ　忠見集に人のわかゆる菊のうへに　赤染衛門家集に露にわかゆるなど見えたり

○をゆる　古事記中卷に御軍皆遠延而　日本紀に瘁瘼などの字をしかよめりさて外に活きたることは見えざれば〔阿〕行かとも思ふべけれど　日本紀にをやすとやよりはたらけば此行なるとしるし

羅行之圖　并受るてにをはの圖

四段の活	去（サル）、釣（ツル）	（ら）ず で じ ぬ ん まし	（り）て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	（る）めり らん べき らし と とも	かな まで に を より	（れ）ば ど ども
中二段ノ活	下（オル）、舊（フル）	（り）ず で じ ぬ ん まし	て けり けん つる し　つゝ き なば ぬる しか	（る）めり らん べき らし と とも	（るゝ）リ かた まで に を より	（るれ）ば ど ども
下二段ノ活	枯（カル）、晴（ハル）	（れ）ず で じ ぬ ん まし	て けり けん つる し　つゝ き たば ぬる しか	（る）めり らん べき らし さ さも	（るゝ）レ かな まで に を より	（るれ）ば ど ども

○此行には一段の活詞なし

〔四段の活詞〕

ある　あかる　あがる　あさる
○あざる　あざける　あたる　○あたゝまる
あつまる　あなづる　○あなくる　○あぶる
あまる　あもる　○あやかる　あらたまる
いる　いる　いかる　いきどふる
○いざる　いたる　いたはる　○いつがる
いつはる　いのる　いまはる　いろどる

うる　○うまはる　おくる　おこたる　○おほどる　かる　かぎる　かざる　かたまる　かへる　きしる　くる　○くさる　くばる　くゆる　○こぞる　○こやる　さがる　さづかる　しる

うけばる　える　○おくまる　○おそる　○おもねる　かゝる　○かくる　かさなる　かたよる　かをる　きたる　くゝる　くだる　くはゝる　○くらがる　ことわる　さる　さぐる　さとる　しきる

○うごなはる　おる　おこる　○おそなはる　かる　かゞふる　かける　かしこまる　○かなぐる　きる　きよまはる　くゞる　くつがへる　くだる　けづる　こほる　さかる　○さくじる　さへづる　しげる

○うずゝまる　○おぎのる　おごる　おとる　かる　かゞまる　○かげる　かたる　かはる　きる　くる　くゞまる　○くねる　くもる　ころ　こもる　さかのぼる　さだまる　さやる　○しゞまる

しだる　○しまる　○すぐる　すべる　そしる　そまる　たぐる　たづさはる　たばしる　ちぎる　○つゞしる　つもる　とる　とまる　なのる　にぎる　ぬる　のる　○のぞこる　のぼる

したゞる　しめる　○すゝる　すわる　○そゝる　たる　たすくる　たどる　たまる　つる　つゞまる　つよる　とゞこほる　なる　○なぶる　にごる　ねる　のる　のどまる　はる

○しばる　○しをる　○すゝたる　○せまる　○そゝくる　たる　たゝる　たばる　たもとほる　つくる　つのる　つらなる　となる　なる　なほる　○にじる　○ねぶる　のる　のゝしる　はいる

しほる　する　○すぢる　そる　そはる　たぎる　○たゝなはる　たばかる　ちる　つゞる　○つはる　てる　とほる　○なづさはる　なまる　○にぶる　ねむる　のこる　のぼゝる　はかる

はしる	はじまる	はたる	○はなる
はゞかる	○はびこる	はふる	はぶかる
はやる	○ひる	ひかる	○ひたる
ひねる	ひろまる	ふる	ふる
○ふる	ふける	ふたがる	○へなる
ほる	ほる	ほこる	○ほそる
○ほどこる	ほさばしる	○ほびこる	ほふる
○まる	まかる	○まくる	まさる
まさぐる	まじる	まじはる	まじこる
まつはる	○まながる	まはる	まもる
まゐる	みだる	みのる	○むかる
むさぼる	むつかる	めぐる	もる
もる	もる	○もぢる	もどる
もとほる	やる	やる	○やすまる
やどる	やぶる	○ゆる	○ゆする
ゆづる	ゆまはる	よる	よる
○よきる	よこぎる	よこなまる	よこほる
よばゝる	よわる	わる	わかる
わしる	○わする	わたる	○わだかまる
ゐる	をる	をる	○をこつる

○をせる　をどる　をはる　をゝる

○此外あはれがる　からがる　くるしがる　こひしがるなどいへるたぐひ多しみなこゝの活なり

○右に擧たる詞の中に有居の二ッいさゝかことなりすべて四段の活の第三の音くすつふむるは圖にもしるせる如く切るゝ詞と續く詞とをかねたればあるとあるともをるとをるともといふべき格なるに此二ッの詞のみありとありともをりとをりともといひ又切る詞にもありなりといふ例なり其外めりらんべきらしなどのてにをはをうくるはすべてにことなることなし

○あざる　万葉五にたち阿射里われこひのめど云々

○あたゝまる　榮花物語鶴林にあたゝまらせたまひてとあり此はたらきざまなり

○あなくる　日本紀舒明巻に入二畝傍山一因以探レ山　欽明巻に考二竅古今一又字鏡に竅阿奈久留　榮花物語うら〳〵の別に帯刀や瀧口やなどいふものどもよるひるさふらひ闕なかためなどしていとうたてあり世にはおほあなくりといひつくるもいとゆゝしなどあり

○あぶる　字鏡に焚阿夫留　後撰集物名に衣あぶらん

○あやかる　拾遺集にあやかりやすき云々とあり

○いさる　万葉十五に伊射流火波とあり

○いつがる　万葉九に伊都我里ませばとあり

○うこなはる　大祓詞に集侍　續日本紀に末爲宇古那波禮留

○うずゝまる　古事記下巻に庭すゞめ宇受須麻理葦弖と有り

○うまはる　日本紀允恭巻に蕃息仁賢巻に殖　皇極巻に不二蕃息一などあり

○おぎのる　字鏡に賖於支乃利　土佐日記におぎのりわざをしてなどあり

○おくまる　源氏若紫におくまりたる又橋姫におくまり云々

○おそる　續日本紀宣命に懼理さありさて此詞中昔よりは此下二段の活きにのみいへるを古くはかく四段の活きにも用ひたり此例隠解忘などあり

○おそなはる　うつほ俊陰に夕のおそなはるほどだに云々

○おほとる　万葉十六にふちの木にはひ於保登禮流とあり又源氏東屋におほとれたるとあるは同し詞ときこえたれどたるといふてにをはを第四の音れより受たるは此下二段の例にて活き異なり手習巻にもかくあり

○おもねる　日本紀神武巻佞媚をおもねりとよめり

○かくる　古事記上巻哥に青山に日が迦久良婆下巻にみやま賀久里万葉十五にやそしま我久里などなほあり此詞も上にいへる如く中昔よりは此下二段の活にのみ用ひたり

○かげる　古事記下巻にゆふ日の日影流美夜云々　祝詞にもありり又新古今集夏に野もせの草のかげろひてすゞしくくもるとあるはかげりを延たるなり

○かなぐる　源氏帚木にひきかなぐらめなどあり

○くさる　字鏡に餧ハ伊比久佐禮利と見えたり

○くねる　古今集序に女郎花の一時をくねるにも云々又蜻蛉日記にすこしはくねりてかきつなどあり

○くらがる　竹取物語にせかひくらがりてとあり

○こぞる　榮花物語月宴に世こぞりてなど猶あり

○こやる　古事記中巻歌にあづさ弓許夜流許夜理母とよめり又古今集によこほりふせる佐夜の中山を奥義抄によこほりくやるとある本あるよしいへり

○さくじる　おちくほ物語又狹衣四にさくじりとあり

○しゞまる　榮花物語玉飾に我命もしゞまるやうに云々

○しばる　うつほ藤原君に大きなる木にしばりつけたりといへり

○しまる　古事記下巻哥にやふ士麻理斯麻理もとほしとあり

○しをる　伊勢物語に女をまかでさせくらにこめてしをりたまうければとあり又源氏乙女に淺みどりとやいひしをるべき

○すぐる　うつほ物語吹上下にえらびすぐりたる上手又源氏桐壺

にえりとゝのへすぐりてなどあり

○すゝる　うつほ物語あて宮に水もすゝらで　源氏眞木柱に鼻すゝりあへりなどあり又万葉五にかすゆ酒うち須々呂比豆ともいへり須須呂比はすゝりなり

○すゝたる　拾遺集戀にすゝたれど堀河百首夏にすゝたれるやどにふすぶる云々同二郎百首にすゝたりぬべしなどあり此堀河百首の初句を一本にすゝたるゝとありさては此下二段の活きさまなり

○すぢる　宇治拾遺物語に翁のびあがりかゞまりて云々すぢりもぢりゑひ聲を出して一庭をはしり舞ふ

○せまる　うつほ藤原君にせまりしれたる大學ノ介とあり

○そゝる　万葉集十七にあま曾々理(ソヽリ)高きたち山　神樂哥にゆすりあげよ曾々利あげよなど見えたり

○そゝくる　おちくほ物語にちりはらひそゝくりて蜻蛉日記七にくす玉せむなどいひてそゝくりゐたるほどに榮花物語楚王夢にそゝくりふせたてまつり云々などいへり

○たゝなはる　万葉一に疊有(タヽナハル)　枕草紙に髪のうちたゝなはりて狹衣四にたゝなはりゐてなどあり

○つゞしる　字鏡に齝ハ左加奈豆々志留と見えたり又源氏箒木につゝしりうたふ又万葉集五にかたしほを取都豆之呂比とも延ていへり

○つはる　字鏡に牒ハ孕始兆也豆波利乃登支　和名抄に擇食ハ豆波利　おちくほ物語にいつしかとつはり給へば　金葉九にはかゝれにつはると見えしほどもなくなどあり

○なづさはる　神樂哥にみてぐらにならましものをすへ神のみてにとられてなづさはるべくとあり古本又拾遺集には結句をなづさはましをとせりさては〔波〕行の四段の活詞となる也

○なぶる　万葉十五に人奈夫理のみこのみてあるらんとあり

○にじる　字鏡に蹢ハ不獮尒志留と見えたり

○にぶる　日本紀天智卷に鋭(トイサキ)　鈍(ニブリ)力竭クとあり

○ねぶる　字鏡に舐ハ禰夫留とあり

○のぞこる　日本紀齊明卷に病自蠲(ノツコリヌ)消とあり

○はなる　万葉二十に波奈利蘇(ハナリソ)のはゝをはなれてとありかく四段にも活くと見えたりこれも中昔よりは此下二段の活きにのみいへり

○はびこる　日本紀顯宗卷に被をはびこれり又ほどこれりともよめり

○ひる　和名抄に痢ハ久曾比理(クソヒリ)乃夜万比又放屁倍比流(ヘヒル)

○ひたる　拾遺集に松の海にひたりたる所を　狹衣三に白かねの波よせてひたれる松のふかみどりの云々　堀河百首夏に五月雨は日數ふれどもわたのべの大江の岸はひたらざりけりなどあり

○ふる　万葉二十にいそに布理古事記下卷にこふこそはやすくはだ布禮などありさてかくこその結びにふれといへるはこゝの活の格也これも中昔よりは下二段の活にのみ用ひたり下二段の活にてはこその結びはふるれといふが定り也此けぢめまがひやすしよく考へ辨ふべし

○へなる　万葉十五に山川をなかに敝奈里氏など猶あり

○はそる　榮花物語花山にはそらせ玉ふとあるは此の活ざま也

○ほどこる　日本紀顯宗卷に破をほどこれりとよめり

○はびこる　万葉十八に雲保妣許里弖とあり

○まる　古事記上卷に屎麻理ちらしき　万葉十六に屎遠く麻禮竹取物語につばくらめのまりおけるふるくそを云々

○まくる　枕草紙に袖かいまくりとあり

○まながる　古事記上卷にたゝき麻那賀理とあり

○むかる　万葉二十に敝牟加流ふねとよめり

○もぢる　宇治拾遺物語にのびあがりかゞまりてまふべきかぎりすぢりもぢり云々とあり

○やすまる　續日本紀宣命に息安麻流倍伎又休息安麻利止

○ゆる　住吉物語に土もうちゆりたりけるとあり

○ゆする　神樂歌に由須利あげよそゝりあげよ猶あり

○よきる　源氏若紫によきりおはしましけるとあり

○わする　日本紀神代卷におきつ鳥かもつく嶋にわがゐねしいもは和素邏珥よのこと〴〵も　万葉二十に和須良牟砥などありさてかく第一の音らよりじ　むのてにをはを受るは圖の如く四段の活にかぎれり此詞も中昔より下二段の活きにのみいへり　古事記には妹はわすれじ世のこと〴〵にとありかくては下二段の活なり

○わだかまる　枕草紙にわだかまりさあり

○をこづる　日本紀に誘聚　源氏若菜にをこづりとらむの心にて濱松中納言物語にをこづりなどありさて此假字は日本紀にわかつるとも訓たればこゝにいだしつ

○をぜる　日本紀神武卷に望見又睨などよめりおを定めがたし暫く日本紀の假字づけによりてこゝに出せり

○万葉十三にたち花の末枝乎須具里又十四にをさぎれらはり十五に羽具久毛流又宣命につゝしまりなどあるはすぎねらひはぐゝむつゝしみを延たるのみにてこゝの活詞にはあらずこの万葉十三の歌同じ卷ノ上にも出たりそこには橋のほつえを過而とあり此例上にもこれかれあり其處々にいへるが如し

○すべて四段の活の第四の音よりさけらんさけりさけるさけれおもへらんおもへりおもへるおもへれたてらんたてりたてるたてれ

などらりるれとうくるは全くこゝの活きざまなりされど活詞よりうくるてにをはの活きたるなればこゝの活詞の列にあらず此よし上巻のはしめにもいへりさてこれを万葉に咲有立有思有などの有の字をそへてかゝれてその意なればうくるてにをはも上にいへる如くありとありともといふにおなし

〔中二段の活詞〕此るゝを俗言にはりるといふ例なり

おるゝ　こるゝ　○ふるゝ　ゆるゝ

○ふるゝ　古今集戀に我身ふるればおき所なし　後撰集雑にふるゝ身はたみたの中に云々　蜻蛉日記に二人の御心のうちふりずかなしなどあり

〔下二段の活詞〕此るゝを俗言にはれるといふ例なり

あるゝ　○あがるゝ　あきるゝ　あくがるゝ
○あざるゝ　あばるゝ　あふるゝ　あらはるゝ
いるゝ　いとはるゝ　いらるゝ　うかるゝ
うたるゝ　うばゝるゝ　うまるゝ　うもるゝ
おかるゝ　おくるゝ　おそるゝ　おそはるゝ
おとづるゝ　○おびるゝ　おぼるゝ　○おほどるゝ
おぼゝるゝ　おもはるゝ　かるゝ　かくるゝ
○かぐるゝ　○かぶるゝ　かこたるゝ　きるゝ
きらるゝ　くるゝ　○くるゝ　くづるゝ
くづをるゝ　けおさるゝ　けがるゝ　けたるゝ
けどらるゝ　こがるゝ　こぼるゝ　さるゝ
さそはるゝ　しるゝ　しるゝ　しぐるゝ
○しづるゝ　しのばるゝ　しほたるゝ　しらるゝ
しをるゝ　すかさるゝ　すぐるゝ　すたるゝ
○すみやかるゝ　せかるゝ　○そるゝ　○そほるゝ
たるゝ　○たかるゝ　○たどるゝ　たどらるゝ
たはるゝ　たはふるゝ　たふるゝ　つるゝ
つかるゝ　つぶるゝ　なるゝ　ながるゝ
ながめらるゝ　にくまるゝ　ぬるゝ　ねらるゝ
のがるゝ　はるゝ　はつるゝ　はなるゝ
○はふるゝ　ひかるゝ　ひたるゝ　ふるゝ
ふくるゝ　ほるゝ　まぎるゝ　またるゝ
まどはるゝ　まぬかるゝ　○まみるゝ　みだるゝ
○むるゝ　むつるゝ　むすぼるゝ　むすぼゝるゝ
めかるゝ　めさるゝ　めなるゝ　もるゝ
もよほさるゝ　○やるゝ　やつるゝ　やぶるゝ
ゆるさるゝ　よるゝ　よらるゝ　わるゝ
わかるゝ　わするゝ　わすらるゝ　○わろびるゝ
なるゝ　をらるゝ

○右に擧たる外四段の活詞の其第一の音よりおどろくをおどろかるゝくらすをくらさるゝくむをくまるゝなど活かし又一段の活詞中二段の活詞の其第二の音よりきるをきらるゝ見るを見らるるおくるをおきらるゝこふるをこひらるゝなと活かし下二段の活詞のその第四の音よりうくるをうけらるゝいづるをいでらるるとがむるをとがめらるゝなどるゝらるゝと活かしたるたぐひなほいと多しこと〳〵くは出さずみなこゝの活詞なり

○あがるゝ　源氏物語篝木にあかるゝ所にて　空蟬卷にあがるゝけはひなどなほあり

○あざるゝ　字鏡に餒ハ魚肉爛也阿佐禮太利とあり

○おびるゝ　物語文におびれなどあるのみにて外に活きたる事見あたらざれども此活きなるべし

○おほどるゝ　源氏東屋におほどれたる云々又手習に髮のすその俄におほとれたるなどあり

○かぐるゝ　万葉九に舟こぐとくより香具禮とある外に見えざれども此活詞なるべし

○かぶるゝ　和名抄に漆瘡ハ和名宇流之加不禮とあり

○くるゝ　神樂哥に山人のわれにくれたるやまつゑぞこれ猶物語書などにも見えたり

○しづるゝ　散木奇歌集に雪をおもみしだれるみさのえだなればさはる小笠にしづれおつなり同長哥にくだるみなわは白たへの雪のしづれとあやまたれ丹後守爲忠家百首に仲正朝まだき松のうは葉の雪は見む日かげさしこぼしづれもぞするなどあり又綺語抄におくやまのしづりのしたのそでなれやおもひの外にぬれぬとおもへば　四條大納言哥枕に木にふりたる雪のおつるをいふなりとありこれも同し詞ときこえたるをしづりとては四段の活ざまなりかくも活く詞にや外に見あたらず

○すみやかるゝ　詞花集戀にいつしかとのみすみやかれつゝとあり速に炭燒をかねたり

○そるゝ　夫木集鷹の哥にそれぬればさよめり

○そほるゝ　狹衣一にわらひそほるゝけはひとありまた今撰和哥集に爲眞入道うぐひすの梅の花がさちりぬればふる春雨にそほれてぞなくともよめり

○たかるゝ　古事記上卷に宇士多加禮とあり俗言にはたかりと四段の活詞にいへり

○たゞるゝ　古事記上卷に血爛をちあえたゞれたりさよめり

○はふるゝ　源氏夕顔にはふれぬべきとあり

○まみるゝ　日本紀神代卷に血染をまみれたりとよめりまた千載集にまみれて云々などあり

○むるゝ　丹後守爲忠家百首に爲盛いそぎつゝ駒うちむるゝたそ

かれにとありむれとはつねに多くいへり
○やるゝ　神樂歌に袖こそやれめ云々
○わろびるゝ　物語書にわろびれといへるのみにて外に活きたる事見あたらざれども此活きたるべし

和行之圖　幷受るてにをはの圖

一段の活	居(キル)	(ゐ) ず　で　じ　ぬ　ん　まし	て　けり　けん　つる　し	つゝ　き　なば　ぬる　しか	(ゐる) めり　らん　べき　らし　と　とも	かな　まで　に　を　より	(ゐれ) ば　ど　ども
中二段活	率(ヒキウル)	(ゐ) ず　で　じ　ぬ　ん　まし	て　けり　けん　つる　し	つゝ　き　なば　ぬる　しか	(う) めり　らん　べき　らし　と　とも	(うる) かな　まで　に　を　より	(うれ) ば　ど　ども
下二段活	飢(ウヽル)　植(ウヽル)	(ゑ) ず　で　じ　ぬ　ん　まし	て　けり　けん　つる　し	つゝ　き　なば　ぬる　しか	(う) めり　らん　べき　らし　と　とも	(うる) かな　まで　に　を　より	(うれ) ば　ど　ども

○此行には四段の活詞なし

〔一段の活詞〕

ゐる(居)

○和名抄に緌ハ俗云爲流船著レ沙不レ行也又齶ハ此間云波井流齒傷レ酢也などあるは同きか又同言にて異なるか又は〔羅〕行の四段の活詞にてゐらんゐりゐるゐれと活く詞か外に活きたること見えざればいづれとも定めがたし

〔中二段の活詞〕此うるを俗言にはゐるこいふ例なり

○うる　○つきうる　ひきうる

○うる　物語書にゐて奉るなどいへること多しこれなり外にううるうれなど活たると見えざれどもこの活と見えたりさてこれなひきうるのひきを略きたる詞とおもふはたがへりひきうるは此詞にひきといふことをそへていへるなり

○つきうる　日本紀崇神卷に急居此云菟岐于とあり物語文についゐ玉ふなどいへること多しおなし詞也

〔下二段の活詞〕此うるを俗言にはゑるといふ例なり

○うゝる(飢)　○うゝる(植)　○くうる(蹶)　○すうる(居)

○ひうる

○うゝる　字鏡に饑(ハイヒニウ)伊比尓宇ゑとあり猶うゑといへる多し

○うゝる　伊勢物語に忘草うゝとだにきくものならば猶多し

○くうる　古事記上巻に蹶散(クヱハラヽカシ)又蹶離(クヱハナチ)日本紀に蹶散此云倶穢簸邏々箇須などあり　さて和名抄に蹴鞠世間云末利古由とあり同し詞なるなかくいひては〔也〕行の下二段の活にて假字も異なり此ころはやく誤りたるにや

○すうる　經衡集にいかなれば大内山の道にさへ今はなこその關

をすゞらんとありするといへるは多し

○ひらる　古事記中巻にこきた斐斯泥とあり此詞外に活きたること物に見えざれども第四の音よりねとうくるは下二段の活の定まりなりさて和名抄に竹刀阿乎比衣とあるは本はひとつことのうつりたるとも思けるゝに假字のちかひたるはもとよりことなるにや

「安」行よりはじめて右に舉たる詞ども猶さまぐ＼に活きしかぎりなくおほゆれども思ひ出つるにしたがひてものしつるなればもれたるなは多かるべしさはこれらにならひてしるべきなり

文化三年春三月

詞のはたらきといふことは。歌よむにも。文かくにも。つねに書見る毎に。ふかく心とゞめて。しかいふへき事は。しかいふへかりけりと。よくこゝろえたる人は。まとふへきふしもあらさるへけれと。おほろかに見すくし。或はいまたひろくも見しらぬ人の。何くれのこと。よみいて。かかまはしと思はむに。さしあたりては。思ひもまとひ。又は何となくもてひかむることも。おへかめれはとて。春庭。此ひとゝせふたとせ。これかれの書とも。人にときゝかせなとするついでに。これかしるへと。引いつへき詞とも。つみいでおきたるうへに。猶よく考へ正して。これは。そのはたらき。これは。それとはことなりなと。おもひさためて。かの歌よみ。ふみかく人の。たやすくさとりつへう物したるなり。猶ひきもらしゝかむかへおよはぬもあらむは。此やちまたのすちぐ＼にならへて。わきまへてよかし。

本居大平

詞のかよひ路序

世にありとありて人のもてあそふわさ。大かた人の心を樂しましめさるはなくなむあるへけれと。それか中に歌よむわさなむ。物よりことにまさりてはあるへき。さるはよろこはしとも。うれはしとも。思ふ心をのへつらねよみ出たらむ。その言葉のよろしからむを。人のきゝめてゝ。おむかしとも。よろしともいはむに。わかこゝろなくさみて。樂しとおもふへきわさなり。かくいふは古事記日本紀に見えて。神世上古の哥のもとつむねなれと。今の世とてもこれにことなる事なかるへし。そも〳〵藤原奈良の御代を經て。寛平延喜のころほひより。大やけわたくしいよ〳〵さかりにいみしきもてあそひくさとなりて。花紅葉鳥虫のいろ音につけ。月雪霞のをりふしにもよほされ。高きみしかきみやひをかはすくさはひとなむなりもてゆきて。事ひろくなるまゝに。なにくれの題をまうけて。おのか身にあつからぬ事をも。そのをりふしにつきなきことをも。戀にまれ旅にまれ。海川野山の名ところによそへ。こまもろこしのふることを引いてゝ。世にいひふるさぬめつらしき心はへをとはけみ。あるはしらへ高くつゝけからおかしやかにと。きそひつゝ。學ひえたるいたりのほとも。よみ得たる力のきはも。とり〳〵に見えしられて。そのよき哥はよき哥と見さためて。同し學の友たちはさらなり。又さらぬよそ〳〵にても。こはおもしろことり見つゝ。或は遠きさかひにもうつしつたへて。もてはやすめるに。思ひほこるとはなけれと。いとこゝろよく樂しからしやは。これなむやかて。上古中昔の人の。心詞のめてたきに。神も人も心をうこかしけむためしおほえて。言靈さはふ道いちしるしとはいふへかりける。今もむかしも心を種の道なれは。いかて世に秀たるをと。心をくたき。思ひをこらして。よみとゝのへたらむは。おほろけならぬしわさなれは。一首にてもよくよみえたらむは。かへす〳〵もその樂しさ淺からめやは。また家集にまれ何にまれ摺卷にあらはして。世にひろくなりなむ後は。末の世久しく傳はりて。千代にくちせぬ詞の玉とこそ思はむには。尊くさへなむあるへき。大かた

○かよひち序

の世にはしられぬ人の。哥卷につたはれるためしもすくなからす。柿本朝臣山部宿禰は日本紀ともにはその名しるされさる人々なれとも。萬葉集に見えたるなむいみしき。此二人は神ともあかむはかりの尊き人なれは。こゝにいはむもたやすきさまなり。喜撰法師檜垣嫗なとも。その歌によりて世にあまねくしらぬ人なくこそ。かくいふははしめより。此道のよきことのかきりをつみいてたるなり。今の世の人よみいてむ一首といへとも。いさゝかも古の法にたかひかりそめにも昔の例によらさらむは。いふかひなくくちをしきわさなりかし。詞の玉緒詞の八衢はうひまなひのほとに。あくまてもくりかへしよみあきらめさせまほしくなむ。こゝにある人のいへらくちかきころ學の道さかりにて。そこかしこよりきそひあらはす何くれの書とも。とり／＼にめつらかなる事おほかれと。はやく鈴屋翁の著しおかれたるは。まめやかに教へさとして。すへて物學ふ人のためにその功こよなくこそおほゆれ。それにつきて後鈴屋翁の八衢のしるへこそまめやかなる教なれ。わかともからの机ちかくはなちかたき書なりといへりき。こたひ此あらはせる。詞の通路はた家の教いちしるく。まめ／＼しき書なり。此道に深く入たち。くま／＼あきらかにいたれるちからならては。かくはえさとすましくなむ。

文政十一年戊子秋

本居大平

詞通路上卷

本居春庭著

すめら御國の言葉のいとも〳〵あやしくくすしくたへなる事はいふもさらにて又其つかひさまなどおのつからさたまり有ていと正しくいさゝかもたかふ事のなきもいと〳〵くすしきわざになむ有けるかゝれはもの學ひせむともからはいにしへのあとをよくかむかへしるへきなり

世々ふかくしけること葉のかよひ路は
あとふみみてそゆくへかりける

さて今の人は詞の意をとかくいふめれと其つかひさまをいかにともいへる事なし詞の意をしらむよりはそのつかひさまをよくわきまふへきとなり意をしらむはやすくつかひさまをこころえむはかたく又ふみかき哥よまむにもたとひ詞のこゝろはよくしらすとも用ひさまを心えゐたらむにはいさゝかも用ひ誤る事はなかるへきを詞の意をのみ心得居ても其用ひさまをしらさる時はおのつから誤も多かるへしされはとかくいにしへの例をしりあきらむへきわさなりかし

世中に天地をはしめありとある千よろつの物いつれかあやしからすくすしからさりける中にも人のものいひは言靈のさちはふ國とこたまのたすくる國と昔よりいひつき來て皇國は殊に萬の國にすくれて其さまいと正しく淸らかなる事はさらにもいはす萬のさまをかたるにいさゝかの差別をもくはしくこまかにいひわくるなと又哥は殊に思ふさまをのふるものなれは其詞のつかひさまてにをはの用ひさまによりて意味のふかきさま心はへなとをもあらはし又たゝ一文字の用ひさまによりて意のいたくことなる事なと又其つゝけさまいひさまによりて言にいてゝいはぬ意味をもおのつからあらしめなとすへていとくすしともくすしくいと〳〵たへなるわさになむありけるさて其詞のはたらきてにをはなと神代よりおのつからのさたまりありていさゝかも是にたかふ時は其ことわからす聞えぬ事となるなり其定りの意はふかきゆゑよしさるへきことわりある事なるへけれと人のつたなき心にてはかり知へき事ならねはたゝ其さたまりのさまをよくかむかへわきまへ置へ

き事なりすへて詞の意をあなかちに考へしらむよりはそのつかひさまてにをはの定りをわきまへしりて物せはいさゝかもたかふとなく誤ることなかるへしそは今の世のなへての人のものいひさとひ言にも詞のつかひさまてにをはなとおのつから其定りありてひとつもたかふとなく詞の意いかにともしらぬ人も其いひさまてにをはの定りおのつからよく辨へたれはことをいひわかつにいさゝかもあやまりたかふ事なきにても知へしされはふみかき歌よまむともからは此いにしへよりの定りのさまをよく考へわきまへむ事をむねとはすへきわさになむ有けるこたひ其さたまりのさま〳〵おほかるなかにひとつふたつ思ひよれることのあれは書しるしつなほおもひよらむまに〳〵かきつくへきなり

詞の自他の事

歌よむにもふみかくにも事をしるすにもよろつの事をわかち其さまをくはしくしらするなれはもはら此自他の言葉の活をむねとこゝろうへきわさなりそはおのつからのさたまり有てこなたのことをいふにはこなたにつかふへきことはをもちひかなたの事をかたるにはかなたに用ふへき詞をつかはされは其事くはしくわかれす自他混雑して詞とゝのはす其さま聞えかたけれはなほさりに思ひすくさすよくわきまへおくへき事なりそも〳〵此はたらきは上にもいへる如く千よろつのことをくはしくいひわかつわさなれは其はたらきさまもくさ〳〵おほかるを世の人自他の詞はたゝ煙なとのたつといふはおのつからたつことをいひたつるといふは人のたつる事をいひまた花のちるといふはおのつからちることちらすといふはかせなとのちらすことなとゝのみなほさりに思ひてくはしく考へしるへき事ともおもひたらす又この事をとかくあけつらへる書もなけれはおのつから心をつくることもからもなくおのれ哥よくよみものよくこゝろえたりとおもふ人もおのつから取はつしてはあやまる事なきにしもあらすましてうひまなひのともからはいとたと〳〵しく常にあやまることおほけれは其定りををしへさとさむとてくはしくかきしるせるなり

さて自他の詞六つにわかれたれは今六段に次第してその詞をほとこし一目に見わたしこゝろえやすからむために圖をつく

りてさゝしたるなりよく〳〵かむかへ見るへしすへて自他のわかちは皆こと〳〵く詞のはたらきにあることなれはわかさきにあらはせる詞のやちまたの四種の活にそなはりたれは其活の名目にていふなりあけたる詞のかしらに［四カ］とあるは加行四段のはたらき詞［一カ］とあるは加行一段のはたらき言葉［中カ］とあるは加行中二段のはたらきことは［下カ］とあるは加行下二段の活こと葉［變カ］とあるは加行變格のはたらき詞なり餘の行行もみな是になそらへてしるへし

おのつから然る　みつから然する		四カ おどろく	四カ かわく	四カ しりぞく			
物を然する	下ア うる	四サ おとろかす	四サ かわかす	下カ しりそくる	四カ ふせぐ	四カ まねく	一カ きる
他に然する							下サ きする
他に然さする	下サ えさする			下サ しりそかする	下サ ふせかする	下サ まねかする	下サ きせさする
おのつから然せらるゝ	下ラ えらるゝ	下ラ おとろかるゝ		下ラ しりそかるゝ	下ラ ふせかるる		下ラ きらるゝ
他に然せらるゝ	下ア えらるゝ	下ラ おとろかさるゝ		下ラ しりそけらるゝ	下ラ ふせかるる	下ラ まねかるる	

中カ おくる	中カ すぐる	下カ くたくる		下カ にぐる			四サ ふす	
四サ おこす	四サ すゝす	四カ くたく	下カ さまたぐる	四サ にかす	四サ ころす		下サ ふする	
						四サ つかけす		下サ まかする
下サ おこさする	下サ すくさする	下サ くたかする	下サ さまたけさする	下サ にかさする	下サ ころさする		下サ ふせさする	
	下ラ すきらるる			下ラ にけらるる				
下ラ おこさるる		下ラ くたかるる	下ラ さまたけらるゝ	下ラ にかさるる	下ラ ころさるる	下ラ つかはさるゝ	下ラ ふせらるる	下ラ まかせらるゝ

下サ やする			四タ たつ		中タ おつる		下ダ いづる	
	變サ する	四タ うつ	下タ たつる	四タ まつ	四サ おとす	中タ とづる	四サ いたす	下タ なづる
下サ やせさする	下サ せさする	下サ うたする	下サ たてさする	下サ またする		下 とさちする	下サ いたさする	下サ なてさする
	下ラ せらるゝ		下ラ たてらるる	下ラ またるゝ			下ラ いてらるる	
	下ラ せらるゝ	下ラ うたるゝ		下ラ またるゝ	下ラ おとさるる	下ラ とちらるる	下ラ いたさるる	下ラ なてらるる

一ナ にる	下サ にする				
	下ナ たづぬる		下サ たつねさする	下ラ たつねらるゝ	下ラ たつねらるゝ
下ナ ぬる			下サ ねさする	下ラ ねらるゝ	
變ナ しぬる			下サ しなする		
	四ハ いとふ			下ラ いとはるる	下ラ いとはるる
	四ハ おもふ		下サ おもはする	下ラ おもはるる	下ラ おもはるる
四ハ たがふ	下ハ たかふる		下サ たかへさする	下ラ たかへらるゝ	下ラ たかへらるゝ
	四ハ つかふ	下ハ つかふる		下ラ つかはるる	下ラ つかはるる
四ハ まどふ	四サ まとはす			下ラ まとはるる	下ラ まとはさるゝ
中ハ おふる	四サ おほす				
中ハ ほろぶる	四サ ほろほす		下サ ほろほさする		下ラ ほろほさるゝ
	下ハ かぞふる		下サ かそへさする	下ラ かそへらるゝ	下ラ かそへらるゝ
	下ハ わきまふる		下サ わきまへさする	下ラ わきまへらるゝ	
	四マ いむ		下サ いまする	下ラ いまるゝ	下ラ いまるゝ
四マ くるしむ	下マ くるしむる		下サ くるしめさする	下ラ くるしまるゝ	下ラ くるしめらるゝ
四マ すゝむ	下マ すゝむる		下サ すゝめさする	下ラ すゝまるゝ	下ラ すゝめらるゝ
	中マ うらむる		下サ うらみさする	下ラ うらみらるゝ	下ラ うらみらるゝ
下マ さむる	四サ さます		下サ さめさする		下ラ さまさるる

第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	第六段
	下マ とがむる		下サ とかめさする		下ラ とかめらるゝ
	一ヤ いる		下サ いさする		下ラ いらるゝ
一ヤ おびゆる	四サ おひやかす				下ラ おひやかさるゝ
下ヤ きこゆる	四カ きく	下サ きかする	下サ きこえさする	下ラ きかるゝ	下ラ きかるゝ
下ヤ 見ゆる	一マ 見る	下サ 見する		下ラ 見らるゝ	下ラ 見らるゝ
	四ラ あづかる	下カ あつくる			下ラ あつけらるゝ
	四ラ かる	四サ かす			
	四ラ さづかる	下カ さつくる			下ラ さつけらるゝ
	四ラ さとる	四サ さとす	下サ さとさする		下ラ さとさるる
	四ラ たまはる	四ハ たまふ			
中ラ おるゝ	四サ おろす		下サ おろさする		下ラ おろさるる
中ラ ふるゝ	四サ ふるす				下ラ ふるさるる
中ラ ゆるゝ	四サ ゆるす				下ラ ゆるさるる
下ラ きるゝ	四ラ きる		下サ きらする	下ラ きらるゝ	下ラ きらるゝ
	下ラ わするゝ		下サ わすれさする	下ラ わすらるる	下ラ わすらるる
下ラ をるゝ	四ラ をる		下サ をらする	下ラ をらるゝ	下ラ をらるゝ
	下ワ うるゝ		下サ うゑさする		

第一段第二段は四種のはたらき入ましりてさたまりなし第三段はおほく佐行下二段のはたらきなれといとまれ〳〵には外のはたらきもましれり第四段は佐行下二段の活にかきれり第五段第六段は羅行下二段の活にかきりて外のはたらきなし

右に擧たる詞のうち第一段と第二段といとちかく第三段と第四段ともいと近くて其うち佐行下二段に活きたるは他に然すると他に然さするとをかれたるもあるへし源氏浮舟にわらはへして見せ侍りつれはとあるたくひなりなほよく考ふへし第五段と第六段は詞の活もおなしことなれはもとよりなりされは第一段にかくへき詞か第二段にかくへき詞か又第二段に書へき詞か第三段にかくへきことはかいささかまきらはしき詞もいとまれ〳〵にはあり其うち物によりて自他のいひさまいさゝかことなるあり又詞のうつりさまにて少し異なるさまに聞ゆるもあれといと〳〵まれなる事にて百に一つもあらされはさまたけにはあらさる事なからいさゝかの事をとり出て皆からとるにたらさる物の樣にいひなす世のならはしなれは此事くはしくあけつらはまほしく思へとさてはらひまなひのともからなとはなかなかまきらはしく思ふへしことに自他を別つにいさゝかもかゝはらさる事なれは委しくはいはすよく〳〵かむかへ見ておのつからしるへし

上にもいへる如く自他のわかるゝ事詞の活による事なれは其いひさまさま〳〵なれと同し行にてわかるゝと佐行にうつりてわかるゝと羅行にうつりてわかるゝとの三つなりこの三つにあつからぬもなきにはあらねといと〳〵まれなる事なり其同し行にてわかるゝは加行にてはとく。とくる。波行にてはそふ。そふる。羅行にてはをる。をるゝなとのたくひなり佐行と羅行にうつりてわかるゝさまは多くは其詞の活の其行の第一の音第三の音第五の音より佐行と羅行にうつりてわかるる事なり第一の音よりうつるはおとろく。あくる。は加行の活詞なれはかよりおとろかす。あかす。と佐行にうつりなやむ。さむる。は麻行の活なれはまよりなやます。さます。と佐行にうつりかこつ。あつる。は多行のはたらきなれはたよりかこたるる。あたるゝと羅行にうつりいとふ。そふる。は波行の活なれははよりいとはるゝ。そはるゝと羅行にうつるなとをいへるなり第三の音よりうつるはすぐる。は加行のはたらきなれはくよりすくす。と佐行にうつりあむ。むる。は麻行の活なれはむよりあむす。むす。と佐行にうつるなり第三の音より羅行にうつるはいと〳〵まれなり第五の音よりうつるはおくる。は加行の活なれはこよりお

こすと佐行にうつりおよぶは波行の活なれはほよりおよぼす。と佐行にうつりうつむは麻行の活なれはもよりうつもるゝと羅行にうつりはたらけりさてかく第一の音第三の音第五の音より佐行と羅行にうつりはたらきたる詞第一の音よりうつれるはいと多し第三の音第五の音よりうつりたるはいとまれなり又第二の音第四の音より佐行羅行にうつり活きたるもあれとそはいさゝか異にて中二段の活詞は其の第二の音に佐行羅行の第一の音のそひておくるはおきさする　おきらるゝ　とづるはとちさする　とちらるゝ　とうつりはたらき下二段の活詞はその第四の音に佐行羅行の第一の音のそひてわきまふるはわきまへさする辨へらるゝなと佐行羅行に移り活く例なり又右等の如く其活詞の其行の音より佐行と羅行にうつりはたらきて自他のわかるゝ事なるを佐行と羅行にて自他のわかるゝ詞の中に佐行より羅行にうつりたるにもあらすまた羅行より佐行に移りたるにもあらぬ一種ありそはかへす　かへるあらはす　あらはるゝなとの如しこは佐行と羅行は他の行より此二行にうつりて自他のわかるれはともにおのつから別るるこゝろあるなとにもあるへしたゝし一段の活には　きる　きする　にる　にする　見る　見するど移りたるもあれど一段の活に限りてこゝとは又異なり又詞の活きさま異にて同し意なるもこれかれありくろむる　くろます　あゆる　あやかるなとの如し

上にあけたる段々のいひさまの外にもなほ活きたる事あるへけれとそは是等になそらへてしるへきなりさてかくいへるのみにてはまきらはし聞くとりかたかるへけれは次々にその活きさまのたくひをわかちそのことはの大体をしるしおくを見てわきまふへし

○同行にて自他のわかるゝ例

加行四段活詞	同下二段活詞
しりそく	しりそくる
たひらく	たひらくる
つゝく	つゝくる
のく	のくる
やはらく	やはらくる

右上なるは物のおのつから然るをいふ詞下なるはものを然するをい

ふ詞なり

加行下二段活詞　同四段活詞

くたく○る●　くたく○

とく○る●　とく○

ぬく○る●　ぬく○

はく○る●　はく○

やく○る●　やく○

是は上なるとかへさまにて下二段活の方ものゝおのつから然るをいふ詞四段活の方ものを然するをいふ詞なり

佐行四段活詞　同下二段活詞

ふす○　ふす○る●

右上なるはみつから然するをいふことは下なるはものを然するをいふことはなり

多行四段活詞　同下二段活詞

そたつ○　そたつ○る●

たつ○　たつ○る●

右上なるは物のおのつから然るをいふことは下なるは物を然するをいふ詞なり

波行四段活詞　同下二段活詞

たがふ○　たがふ○る●

ちがふ○　ちがふ○る●

つどふ○　つどふ○る●

とゝのふ○　とゝのふ○る●

ならぶ○　ならぶ○る●

右上なるは物のおのつから然るをいふ詞下なるはものを然するをいふ詞なり

波行中二段活詞　同下二段活詞

のぶ○る●　のぶ○る●

右上なたるはおのつからしかるをいふことは下なるはものをたしかするをいふことはなりさてかくさもにのふると擧てはまきらはしけなれとすわりたることはにてあくるかすへての例なれはなり

麻行四段活詞　同下二段活詞

すゝむ○　すゝむ○る●

たゆむ○　たゆむ○る●

なくさむ○　なくさむ○る●

やむ○　やむ○る●

ゆかむ○　ゆかむ○る●

右上なるは物のおのつから然るをいふことは下なるは物を然するをいふことはなり

羅行四段活詞　同下二段活詞

いる○　　いる○ゝ●

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは他に然するをいふことはなり此こと下にいへるを見るへし

羅行下二段活詞　　同四段活詞

きる○ゝ●　　きる○
ほる○ゝ●　　ほる○
やぶる○ゝ●　　やぶる○
わる○ゝ●　　わる○
をる○ゝ●　　をる○

是は上なるとかへさまにて下二段活の方物のおのつから然るをいふ詞四段活の方ものを然するをいふ詞なり

羅行四段活詞　　同下二段活詞

あなつる○　　あなつ●らる○ゝ●
いのる○　　いの●らる○ゝ●
そしる○　　そし●らる○ゝ●
まもる○　　まも●らる○ゝ●
はかる○　　はか●らる○ゝ●

右上なる物を然するをいふ詞下なるは他に然せらるゝとおのつから然せらるゝとをかねいふ詞なり此下二段の活は●らもしのそはりたれ

は上なるとは活きさまいさゝか異なり

是より佐行と羅行の活詞にうつりて自他のわかるゝ詞をあく其うつりさまは上にもいへる如く加行のことはより佐行羅行にうつり活けるは其行の第一の音第三の音第五の音より佐行羅行にうつり活く事なり外の行よりうつるも是になそらへてしるへきなり擧たる詞の左のかたに●印をつけたるはその行の第一の音第三の音第五の音にて佐行羅行にうつる印なり

〇加行より佐行にうつりて自他のわかるゝ例

加行四段活　　佐行四段活

うごく○　　うごか■す○
おどろく○　　おどろか●す○
かわく○　　かわか●す○
なびく○　　なびか●す○
わく○　　わか●す○

右上なるはおのつから然るをいふことは下なるは他を然するをいふことはなり

加行四段活　　佐行下二段活

おく○　　おか■す○る●
かく○　　かか●す○る●

さく○　さか●す○る●
はく○　はか●す○る●
ふせく○　ふせか●す○る●
右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さするをいふことはなり

如行中二段活　佐行四段活
おく○る●　おこ●す○
すく○る●　すく●す○
つく○る●　つく●す○
右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるはものを然するをいふことはなり

加行下二段活　佐行四段活
あく○る●　あか●す○
ふく○る●　ふか●す○
右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふことはなり

○加行より羅行にうつりて自他のわかるゝ例

加行四段活　羅行四段活
つぐ○　つが●る○

のぞく○　のぞこ●る○
ふたく○　ふたか●る○
わく○　わか●る○
右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつからしかるをいふことはなり

加行四段活　羅行下二段活
あさむく○　あさむか●る○ゝ●
いつく○　いつか●る○ゝ●
はしく○　はしか●る○ゝ●
はふく○　はふか●る○ゝ●
まねく○　まねか●る○ゝ●
右上なるはみつから然するをいふことさは下なるは他にしかせらるゝをいふ詞なり

加行下二段活　羅行四段活
かく○る●　かゝ●る○
さく○る●　さか●る○
さぐ○る●　さが●る○
たすく○る●　たすか●る○
ひろく○る●　ひろか●る○

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふこと

はなり

○佐行より羅行にうつりて自他のわかるゝ例

佐行四段活　羅行下二段活

ころす○　ころさる○●ゝ

そゝのかす○　そゝのかさる○●ゝ

めす○　めさる○●ゝ

もてなす○　もてなさる○●ゝ

もどす○　もどさる○●ゝ

右上なるは物を然するをいふ詞下なるは他に然せらるゝをいふこさ

はなり

○多行より佐行にうつりて自他のわかるゝ例

多行四段活　佐行下二段活

うつ○　うたす○る●

かつ○　かたす○る●

たつ○　たゝす○る●

まつ○　またす○る●

もつ○　もたす○る●

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さするをいふ詞

なり

多行中二段活　佐行四段活

おつ○る●　おさす○

おづ○る●　おどす○

くつ○る●　くたす○

ひつ○る●　ひたす○

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふ詞な

り

○多行より羅行にうつりて自他のわかるゝ例

多行四段活　羅行下二段活

あやまつ○　あやまたる○●ゝ

かこつ○　かこたる○●ゝ

こほつ○　こほたる○●ゝ

たもつ○　たもたる○●ゝ

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはみつから然せらるゝと他に

然せらるゝとをかねていふ詞なり

多行下二段活　羅行四段活

あつ○る●　あたる○

すつ○る●　すたる○

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

○奈行より羅行にうつりて自他のわかるゝ例

奈行下二段活	羅行四段活
かさぬる○●	かさなる○●
つらぬる○●	つらなる○●

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつからしかるをいふことはなり

○波行より佐行にうつりて自他のわかるゝ例

波行四段活	佐行四段活
かるふ○	かるほす○●
およふ○	およほす○●
かよふ○	かよはす○●
さすらふ○	さすらはす○●
まどふ○	まどはす○●

右上なるはおのつからしかるをいふことは下なるはものを然するをいふ詞なり

波行四段活	佐行下二段活
あふ○	あはする○●
くゝふ○	くはする○●
たゝかふ○	たゝかはする○●
とふ○	さはする○●
ぬふ○	ぬはする○●

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さするをいふことはなり

波行中二段活	佐行四段活
おふる○●	おほす○●
ほろふる○●	ほろほす○●
ほころふる○●	ほころはす○●

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふ詞なり

○波行より羅行にうつりて自他のわかるゝ例

波行四段活	羅行下二段活
きらふ○	きらはるゝ○●
さそふ○	さそはるゝ○●
ましなふ○	ましなはるゝ○●
やしなふ○	やしなはるゝ○●
やとふ○	やとはるゝ○●

右上なるはみつから然するをいふことは下なるは他にしかせらるゝをいふ詞なり

波行下二段活　羅行四段活
かふる○●　かはる○
くはふる○●　くはゝる○
さふる○●　さはる○
たつさふる○●　たつさはる○
をふる○●　をはる○

右上なるはみつからしかするをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

○麻行より佐行にうつりて自他のわかるゝ例

麻行四段活　佐行四段活
くろむ○　くろます○
すむ○　すます○
とよむ○　とよもす○
なやむ○　なやます○
はけむ○　はけます○

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふことはなり

麻行四段活　佐行下二段活
すむ○　すまする○●
のむ○　のまする○●
よむ○　よまする○●
をかむ○　をかまする○●

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さするをいふことはなり

麻行中二段活　佐行四段活
あむる○●　あむす○

右上なるはみつからしかするをいふことは下なるは他にしかするをいふことはなり

麻行下二段活　佐行四段活
さむる○●　さます○

右上なるはおのつからしかるをいふ詞下なるは物を然するをいふ詞なり

○麻行より羅行にうつりて自他のわかるゝ例

麻行四段活　羅行四段活
たゝむ○　たゝまる○

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふこと

はなり

麻行四段活	羅行下二段活
うつむ○	うつもるゝ●
かこむ○	かこまるゝ●
にらむ○	にらまるゝ●
ぬすむ○	ぬすまるゝ●
ねたむ○	ねたまるゝ●

右上なるは他を然するをいふ詞下なるは他に然せらるゝをいふことはなり

麻行下二段活	羅行四段活
あつむる○●	あつまる○
あらたむる○●	あらたまる○
きはむる○●	きはまる○
とむる○○	とまる○○
をさむる○●	をさまる○

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

○也行より佐行にうつりて自他のわかるゝ例

也行下二段活	佐行四段活
あゆる○●	あやす○
いゆる○●	いやす○
つひゆる○●	つひやす○
はゆる○●	はやす○
もゆる○●	もやす○

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふことはなり

○羅行より佐行にうつりて自他のわかるゝ例

羅行四段活	佐行四段活
くゆる○	くゆらす○
ちる○	ちらす○
てる○	てらす○
なる○	ならす○
めくる○	めくらす○

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふこさはなり

羅行四段活	佐行下二段活
かゝふる○	かゝふらする○●

つくる○	つく●らす○る●
はしる○	はし●らす○る●
まもる○	まも●らす○る●
まゐる○	まゐ●らす○る●

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然とするをいふ詞なり

羅行中二段活	佐行四段活
おる○るゝ●	●おろす○
こる○るゝ●	●こらす○
ふる○るゝ●	●ふるす○

右上なるはおのつから然るをいふことは下なるは他をしかするをいふ詞なり

羅行下二段活	佐行四段活
ある○るゝ●	●あらす○
かる○るゝ●	●からす○
くる○るゝ●	●くらす○
つかる○るゝ●	●つからす○
ぬる○るゝ●	●ぬらす○

右上なるはおのつから然るをいふ詞下なるは物を然するをいふことはなり

○和行より羅行にうつりて自他のわかるゝ例

和行下二段活	羅行四段活
すう○る●	●すわる○

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはみつから然するをいふことはなり

○佐行と羅行なから佐行よりうつりたるにもあらすまた羅行よりうつりたるにもあらすおのつから佐行と羅行とにて自他のわかれたる例

佐行四段活	羅行四段活
かへす○	かへる○
さとす○	さとる○
のこす○	のこる○
やとす○	やとる○
わたす○	わたる○

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

佐行四段活	羅行下二段活
あらはす○	あらはる○るゝ●

くつす。　くつる〻●
けかす。　けかる〻●
こほす。　こほる〻●
たふす。　たふる〻●

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

佐行下二段活	羅行四段活
のする。●	のる。
よする。●	よる。

右上なるは他に然するをいふ詞下なるはみつから然するをいふことはなり此詞の事下にいへることあり見るへし

右の三つの活の外に中二段の活詞の其行の第二の音き。ち。ひ。み。い。り。ゐ。また下二段の活詞の其行の第四の音え。け。せ。て。ね。へ。め。え。れ。ゑ。にさもしのそひて佐行にうつりら文字のそひて羅行にうつり活ける事あり一段の活詞にも此例ありこは佐行羅行ともに下二段の活にかきれり左に其例を擧くこは上の三つの活に合せてはいとすくなし○印は中二段の活の第二の音下二段の活の第四の音のしるしなりたゝし左のかたにつけたるはそひたるもしのしるしなり

○中二段の活詞に佐文字のそひて佐行にうつれる例

加行	おくる。●	おき。さす。る●
多行	はつる。●	はち。さす。る●
波行	わふる。●	わひ。さす。る●
麻行	あむる。●	あみ。さす。る●
也行	くゆる。●	くい。さす。る●
羅行	おる〻。●	おり。さす。る●

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然さするをいふことはなり

○下二段の活詞に佐文字のそひて佐行にうつれる例

阿行	うる。●	え。さする。●
加行	うくる。●	うけ。さす。る●

佐行　ふする　ふせさする

多行　たつる　たてさする

奈行　つかぬる　つかねさする

波行　ならふる　ならへさする

麻行　きよむる　きよめさする

和行　うゝる　うゑさする

右上なるは物を然するをいふ詞下なるは他にしかさするをいふことはなり

○中二段の活詞に羅文字のそひて羅行にうつれる例

加行　おくる　おきらるゝ

多行　はつる　はちらるゝ

波行　こふる　こひらるゝ

麻行　うらむる　うらみらるゝ

也行　くゆる　くいらるゝ

羅行　おるゝ　おりらるゝ

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他にしかせらるゝとおのつから然せらるゝとをいふ詞なり

○下二段の活詞に羅文字のそひて羅行にうつれる例

阿行　うる　えらるゝ

加行　たすくる　たすけらるゝ

佐行　ふする　ふせらるゝ

多行　すつる　すてらるゝ

奈行

かさぬる　かさねらるゝ

波行
かふる　かへらるゝ

麻行
とがむる　とがめらるゝ

和行
すうる　すゑらるゝ

右上なるはものをしかするをいふ詞下なるは他にしかせらるゝとおのつから然せらるゝとをいふ詞なり

○又加行より也行にうつりて自他のわかるゝ事たゝ左にあけたる詞のみなり猶外に例あるへくおもはるれと未見あたらす

加行四段活　也行下二段活
きく　きこゆる

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

○又同し詞なから清濁によりて自他のわかれたるはたゝ左にあけたる詞のみにて外に例なし

加行下二段活　同活
しらくる　しらぐる

右清音はおのつから然るをいふことは濁音は物を然するをいふこと葉なり

○又一段の活詞はいとすくなきに自他のわかるゝことと一やうならすさまぐ\なり次にあけたるを見てしるへし

加行一段活　佐行下二段活
きる　きする

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるは他に然するをいふと葉なり

奈行一段活　佐行下二段活
にる　にする

右上なるはおのつから然するをいふ詞下なるは物を然するをいふと葉なり

奈行一段活　也行下二段活
にる　にゆる

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

波行一段活　佐行下二段活
ひる　ひさする

右上なるはものをしかするをいふ詞下なるは他に然さするをいふことはなり

麻行一段活　也行下二段活

見る　　見ゆる

右上なるは物を然するをいふ詞下なるはおのつから然るをいふことはなり

也行一段活　　佐行下二段活

いる　　いさする

右上なるはものを然するをいふ詞下なるは他に然さするをいふこと葉なり

和行一段活　　羅行下二段活

ゐる　　ゐらるゝ

右上なるはみつから然するをいふ詞下なるはおのつから然せらるゝをいふ詞なり

又万葉に　うみをなす　うつらなす　なくこなすなといへるなすは奈行一段の活詞の似の其第一の音のなより佐行四段の活詞にうつりて自他のわかれたるなりにるはおのつから然るをいふ詞なすは物を然するをいふ詞にてするといふに同し又なすをのすともいへるは第五の音より佐行にうつりたるなり又波行一段の活詞のひるの其第五の音より佐行四段の活詞にうつりてほすといへるもなすと全くおなしさまなり奈行下二段の活詞のぬるの其第一の音よりなすと佐行四段の活詞にのはゝりたるも同し活きさまなり

是まて上にあけたる行々の詞とも猶多かれと共おほよそを出せり餘はなそらへてしるへし又活きさまなとも思ひ出るまゝに書記したれは猶もれたるもあるへし是もなそらへてしるへし

○又自他をわかつ詞のさまにて活きはことなれと同し意なる詞これかれおほし次に出すを見てしるへし

よく　　よくる

是は加行四段の活詞と同中二段の活詞となり

おびやす　　おびやかす

是は共に佐行四段の活詞にてかもしのそはりたるのみなり

ひつ　　ひつる

是は多行四段の活詞と同中二段の活詞となり

しのふ　　しのふる

まなふ　　まなふる

こは波行四段の活詞と同中二段の活詞となり

さすらふ　　さすらふる

こは波行四段の活詞と同下二段の活詞となり

たる　　たるゝ

もろ　　もるゝ

是は羅行四段の活詞と同下二段の活詞となり

かくる　　かくるゝ

ふる○　ふるゝ○●
わする○　わするゝ○●
これらも羅行四段の活詞と同下二段の活詞にて同意なれとかくる
ふる　わすると四段に活かしいふはいにしへの活き様にて後の世に
はたえていはされはいさゝかとなり
えらるゝ○●　えらはるゝ○●
こは共に羅行下二段の活詞にてはもしのそはりたるのみなり
はるす○　はるかす○
ほかす○　ほゝかす○
これらもともに佐行四段の活言葉にてかもしほもしなとそはりたる
のみなり
うろふ○　うろほふ○
あかふ○　あかなふ○
こはともに波行四段の活言葉にてほもしなもしなとそはりたるのみ
なり
おほゆる○●　おもほゆる○●
是は共に也行下二段の活詞にてもしそはりたるのみなり
ましる○　ましはる○
こは共に羅行四段の活詞にてはもしそはりたるのみなり

○かよひち　上

むすほるゝ○●　むすほゝるゝ○●
是も共に羅行下二段の活詞にてほもしそはりたるのみなり
かゝやく○　かゝよふ○
こは加行四段の活詞と波行四段の活詞となり
むく○　むかふ○
是も加行四段の活詞と波行四段の活詞となり
こす○　こゆる○●
こは佐行四段の活詞と也行下二段の活詞となり
ます○　まさる○
こは佐行四段の活詞と羅行四段の活詞となり
まする○●　ましふる○●
こは佐行下二段の活詞と波行下二段の活詞となり
しなふ○　しなゆる○■
こは波行四段の活詞と也行下二段の活詞とにて同意なり八衢波行四
段の活詞のしなふといふところの下にしなゆるといふ例を引て同意
と聞ゆれと行も活もことにて同意なる例なけれは異なる意かといひ
しはあやまりなり
てらふ○　てらはす○
こは波行四段の活詞と佐行四段の活詞となり
のふる○●　のはす○

こは波行下二段の活詞と佐行四段の活詞となり

そふ。　そはる。

つたふ。　つたはる。

まふ。　まはる。

是等は波行四段の活詞と羅行四段の活詞となり

のふる。●　のはゝる。

こは波行中二段の活詞と羅行四段の活ことはとなり

くろむる。●　くろます。

とよむる。●　とよもす。

なこむる。●　なこす。

是等は麻行下二段の活詞と佐行四段の活詞となり

こゆる。●　こやす。

こは也行中二段の活詞と佐行四段の活詞となり

くゆる。●　くやむ。

こは也行中二段の活詞と麻行四段の活詞となり

あゆる。●　あやかる。

こは也行下二段の活詞と羅行四段の活詞となり

このたくひも猶あるへしなそらへてしるへし

すへてよるは物のおのつから然るをいふ詞よするはものを然するをいふことはなるを波なとにおのつから然るをよるともよするともいへるはいかなる事にかと思ひしをよく／＼考るにことよさし給ふといふことこれかれありよさしはよせののははりたる詞なり又ことよせつま又源氏によせおもくなといへる又おしよせよせ手なといへるを思へはすへてよするといふ詞は其よする所をむねといへる詞にて物を然する詞のかたにはあらて他に然する詞の方なるへし

又いるはおのつから然るをいふ詞いるゝは物を然するをいふ詞のさまなれと風の物のすき間より吹いるを吹いるゝと多くいへり是も浪のよするといへるさまと同しくそのいるゝ所をむねといへるにて他に然する詞の方なり山いり　いり日なとは其いる所をむねといひ火いれいれひもなとはそのいるゝ所をむねとして名つけたるなりこれらにても辨ふへし又のするといふ詞もこれらと同しく他に然するをいふ詞なるへし

又戸なとのあくはおのつから然るをいふことは　あくるは物を然するをいふことはなるを夜の事をいふにはあくるといふとかおのつから然るをいふ詞あかすといふか然するをいふ詞

なりさてあまの戸をあくるといひあまの戸のあくるといふはをといへるかたは戸の事にしてあくるといひのといへる方は夜のことをむねとしていへるものなり

又いづるは物のおのつから然るをいふ詞いだすは物を然するをいふ詞なるを書紀武烈の巻の哥に阿婆理豆那（アサリヅナ）ゐのことあるあさりづなはあさりいたすなといふ意なり又有明の月を待出つるかな　ふたりぬはかり見てたりや君　あさむきいてゝ舟をこきいつるなとみないたすといふへきをいつるといへりまた金葉集に甲斐國よりのほりてをはなる人のもとにありけるかはかなき事にて其をはのなありそこておひいたしたりければよめる　鳥の子のまたかひなからあらませはをはといふものはおひいてさらましをとあるは伯母のかたはおひ出す意尾羽の方はおひいつる意なりかくいへるたくひ猶いとおほし又身をうき草のねをたえて　うき事あれやねをたえてこぬなとあるすへてたえては物のおのつから然るをいふ詞なるにをといひては自他たかひたれと皆かくいへり又たれこめてはるのゆくへもしらぬまにとあるもこもりてとあるへきをこめてといへり又夢としりせはさめさらましをと有もさまささらましと有へきをかくいへり又源氏におのかしゝはちりもつかしとあるもちりもつけしとゝいふへきをかくいへり又日にそひてといふへきをすへて日にそへてといふ例なり是等もよしあることなるへけれといまた考へす

又まさるは物のおのつから然るをいふ詞ますはものを然するをいふ詞なるを　おもひのます鏡　おもひをます鏡なとまさる意にもます意にも用ひたり此たくひも猶あるへけれと得おもひいてす又ぬれてほす山路の菊の露のまにとあるほすはかわくこゝろなり

又古今集に　女郎花おほかる野邊にやとりせはあやなくあたの名をやたちなむ源氏夕霧巻に松しまのあまのぬれきぬなれぬとてぬきかへつてふ名をたゝめやは又若菜にくたれるきはのすきものともに名をたちあさむかれて又柏木にせめてあるましき名をたちなとありすへてたつは物のおのつからしかるをいふ詞たつるは物を然するをいふ詞なれは上にをといひては物を然する方にてたてといふへきをたちといへりこれも

よしある事なるへくおほゆ又草庵集にをりてこそ我名もたゝめ櫻花つらき嵐にまかせては見しとあり是もたてめといふへきをたゝめといへりもはをもの意なり下の句のさまにて然聞ゆるなり上にあけたる古今集の名をやたちなむをかなを改たる板本に名をやたてなむとあるは中々にさかしらなるへし又後撰集に年をへて花のたよりにことはゝいとゝあたなる名をや立なむと文字にて書たれはたちかたてかしられさるを八代集抄にたちなむとかけるはさる一本も有つるか又伊勢集に人もきぬ尾花か袖にまねかれていとゝあたなる名をや立なむと是も文字にて書たれと上にあけたるになそらへてよむへし又あけくらしまもるたのみをからせつゝとあるは　あけはおのつから然るをいふ詞くらしは物を然するをいふ詞にてすこし心よからす又万葉に山川のへなりてあれは　又やまかはを中にへなりてとあるへなりてはおのつから然るをいふ詞なれはのといへる方はよろしけれとをといへる方はいかゝにきこゆ又万葉にちはやふる神をことむけ麻都呂倍奴ひとをもやはしとあるまつろへぬはまつろはぬとあるへき所なり

又今の人の哥に嵐風なとに　ふきなひく　ふきちる　吹はれてなとよめるは自他混雑してとゝのはす其ゆゑはふくは嵐風なとのなす所にてみつから然するなり　なひく　ちる　はれてなとは草木花雲なとのおのつから然るをいふ意なれはなりこのたくひなほあるへし

又露なとに　おきそふ　おきそふるなとあるはそふは露のおのつからそふなりそふるは露をそふるにて物を然することなりたとへは露おきそふる秋のはつかせ　露おきそへてあきそくれゆくなとあるは秋の初風か露をおきそへくれゆく秋かつゆをおきそふるなりかくいふは風秋なとの然するさまにいひなせるなりされはおのつから然る方にはのといひ物を然する方にはをといふなり又風花なとに吹かはる吹かへて　咲かはる　咲かへてなとあるも風花なとのおのつから然るを吹かはり咲かはりといひ吹かへて咲かへてなとあるは風花の然なせるさまにいひなしたるなり

是らのたくひも猶あるへしなそらへて知へきなりまた古今集にぬきみたる人こそあるらししら玉の間なくもちるかそて

のせはきに後拾遺集におきあかし見つゝなかむる萩の葉に露
ふきみたる秋の夜のかせなこあるみたるはみたるゝ意には
あらすさてはるもしたらす又ぬきふきは風人なこのなす所
みたるゝはおのつから然る意なれは自他混雜してかなはさる
なりこはぬきみたすふきみたすこいふ意にて四段のはたらき
ここ葉にてみたるゝこはここなりおもひまかふへからす

詞通路中巻

詞の兼用の事

本居春庭著

哥に物の名にも詞にも其意はことなれとも其いふ所の言葉の同しきによりてかり用ふる事あり又かね用ふる事あり其かり用ふるにも又かね用ふるにもさま〴〵いと多く有て一様ならす又縁語にて意をかねていへるありまた縁語のみにて歌の意にかゝはらさるも多しいはゆる枕詞も多くはこれなり又序哥いひかけ物名なと皆これらのうちにてさま〴〵にいひなしたりそのさま〴〵にいひなしたるなとは歌にかきりたる事にて文には序文古文には見えたれとそれもかくさま〴〵にもちひたる事なくのち〳〵の文にはをさ〳〵なきとなりさて上にいへる用ひさまたれもたれもよくしりたるとなるへけれとうひ學のともからのこゝろえおくへき事にて哥よまむたよりとも古哥をこゝろえむたすけともなるへく又いさゝかまきらはしきもなきにしもあらて用ひあやまることのあれは今このたくひをこれかれいさゝかはかり次に擧るを見てしるへきなり

梓弓はるの山邊をこえくれは道もさりあへすはなそちりける

弓を張を春にかりもちひたるなり

玉匣あけは君か名たちぬへみ夜ふかくこしをひと見けむかも

匣をあくるを夜の明るにかり用ひたり

つれもなき人をやねたく白露のおくとは歎きぬとはしのはむ

露のおくを起るこゝろにかり用ひたり

かねてより思ひしことそふし柴のこるはかりなる歎せむとは

柴をこるを物にこるゝ事にかり用ひたり是等はいはゆるまくら詞なり猶いと多し

雨ふれはかさとり山のもみち葉はゆきかふ人の袖さへそてる

雨ふれは笠をとるものなれは笠とり山にかり用ひたり

夕つくよをくらの山になく鹿のこゑのうちにや秋はくるらむ

夕月夜のをくらきを小倉山にかり用ひたり

君によりわか身そつらき玉たれのみすは戀しと思はましやは

御簾を不見といふ意にかり用ひたりみすをみずとにとりていへる此例多しこれらも枕詞なり

なよ竹のよなかきうへにはつ霜のおき居て物をおもふころかな

竹のよを夜の意にかり用ひ霜のおくを起るこゝろにかりもちひたりこれは二つとも枕詞なり

あつさ弓はるたちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな

梓弓は上にいへるとく枕詞なるを其枕詞を用にたてゝ緣の詞に

て射るといへるなり

夕つく夜おほつかなきを玉櫛笥ふたみのうらはあけてこそみめ

これも同しさまにてくしけのふたみといふことを二見の浦にかりもちひ其縁の詞のあくるを夜のあくるこゝろにかり用ひたり

から衣ひもゆふくれになるときはかへす〳〵そひとはこひしき

これも衣のひもをゆふといふを日も夕暮といふにかり衣の縁の詞にてかへす〳〵といへるなり

しら露のおくにあまたの聲すれは花のいろ〳〵ありとしらなむ

是は置を奥にかり用ひて枕詞なから下に秋の草花の事をいひて露のよせとしたるなり

梅のはなちるてふなへに春雨のふりてつゝなくらくひすのこゑ

これも春さめの降出るを聲を振いつるにかりてそのあめのふるによりて花のちることをおもはせたるなれはおなしさまなり

久しくもなりにけるかなすみのえのまつは苦しき物にそ有ける

これも住江のは枕詞のさまにて松を待にかりそのよせにて久しくなるとはいへるなり

夕暮はまつにもかゝる白露のおくるあやしたやきえははつらむ

これはしらつゆのおくを起るにかりて枕詞のさまなから其縁の詞にてかゝるきえなといひなせるなり

からころもたつ日はきかし朝露のおきてしゆけはけぬへきものを

是も衣をたつを出立の意にかりて初にいへる枕詞と同しさて露のおくを起るにかりてこれも枕詞のさまにてその縁の詞にてきえなといへるなり

をとめらかおる機の上を眞櫛もてかゝけたく嶋浪間より見ゆ

上よりいひつゝけたる所は機の糸を櫛もてかきあけたくをたく嶋といふ所の名にかりもちひたりたくはとゝのへつくろふこゝろなりいはゆる序哥なり

あつさゆみひけは本末わかかたによるこそまされこひのこゝろは

上より弓のさまをいひくたして寄を夜のこゝろにかりもちひたるにて序哥なり

山かつのかきほにはへる青つゝら人はくれとも言つてもなし

これも上句は序にてつゝらの縁の詞にて操を來るこゝろにかり用ひたり

有間やまゐなのさゝ原かせふけはいてそよ人をわすれやはする

こはさゝ原のかせにてそよくをいへるにて上の句はそよといはむためのみなり其そよを俗語にさやうぢやといふ意にかりもちひたり下の句の意は俗にいやもうさやうであなたは人をおわすれなされはいたさぬさ裏をいひて人をわすれたるさまをあさけりいへるなり語の勢なとよく思ふへしかく見されははしかきにもかなはすよく〳〵かむかふへし古き註とも皆あやまりたれはついてにいへるなり

鶯のこそのやとりのふるすとやわれには人のつれなかるらむ
古集を人の舊くするにかり用ひたりこれらは皆世にいはゆる序哥にて上は歌の意にあつからす
わかせこか衣はるさめふる毎に野邊のみとりそ色まさりゆく
衣をはるな春にかり用ひたり
をとめ子か袖ふる山のみつかきの久しき世よりおもひそめてき
これも袖をふるを布留山といふにかれり後世袖ふる山といふ名にしたるは誤なり
ひとりして物をおもへは秋の田のいたはのそよといふひとのたき
これも稲葉のそよくな俗語にさうぢや尤ぢやといふ意にかりもちひたりこれらわつかに一句あまりたれと序哥といふへし
もかみ川のほれは下る稲舟のいなにはあらすこのつきはかり
こは上の句に序にて稲舟のいなと言を重ね稲を否の意にもちひたるなり
あし引の山澤人のひとさはにまなさいふ子かあやにかなしさ
是も詞を重ねて澤な多きといふさはの意にかり用ひたり
かくれぬの下より生るねぬなはのねぬなはたゝしくるないとひそ
こは上のいな舟のといふ哥のさまにて詞をかさねねぬなはを不寝名はといふ意にかり用ひさてぬなはは操よするものなれば來るに其意なかれていへり

かまくらのみこしかさきのいはくえの君かくゆへき心はもたし
こは上よりいひつゝけたるは岩の崩るゝ意なるをいひさまの同しきによりて悔る意にうつし用ひたるなり此こと下にくはしくいふを考へ合すへし是等も猶序哥なり
かれる田に生るひつちの穂に出ぬは世を今さらにあき果ぬとか
飽はつるに秋のはつるなかねたり
春の野のわかなならねと君かためことしの數をもつまむとそおもふ
積に摘のこゝろをかねたり
大空はくもらすなからかみな月としのふるにもそてはぬれけり
經に降をかねていへり
都にてめつらしとみるはつ雪はよし野の山にふりやしぬらむ
舊くなるに降こゝろをかねたり
君のみや野邊に小まつをひきにゆく我もかたみにつまむわかなを
互といふに籠のことをかねたり
とゝめあへすうへもとしさはいはれけりしかもつれなく過るよはひか
疾しといふに年のことをかれたり
よそにのみこひやわたらむ白山のゆき見るへくもあらぬわか身は
雪と行とをかねたり上よりのつゝきは雪をむねとししもにてはゆくことをむねとしていへり
つくはねの木本ことにたちそよる春のみやまのかけをこひつゝ

春のみ山に春宮をかねたり

別路は戀しき人のふみなれややらてのみこそ見まくほしけれ

遣に破をかねていへり

故郷は見しごともあらす斧の柄のくちし所そこひしかりける

如のごに碁をかねたり

あひ見ぬもうきもわか身のから衣思ひしらすもさくるひもかな

から衣のからに我身からといふ詞のからといふ意を兼たり

いはせ山谷の下水うちしのひひとのみぬまはなかれてそふる

泣ろゝに流るゝをかねたり不見間に水沼の意をもかねたり

宇治山の紅葉を見すは長月の過ゆくひをもしらすそあらまし

日をに氷魚のとをかねていへり物名のさまなり

紅にそめしこゝろもたのまれす人をあくにはうつるてふなり

飽に灰汁をかねたるなり

こゝにたにつれ〳〵となく郭公ましてこゝひのもりはいかにそ

こゝひの森に子を戀ろ意をかねたり

限なきなみたの露にむすはれて人のしもさはなるにやあるらむ

下に霜のことをかねていへり

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらむ

憂く不干に鶯をかねていへり

わかのりし事をうしとや消にけむ草葉にかゝる露のいのちは

憂しといふ詞に牛をかねたり

なき人の形見とおもふにあやしきは忍みても袖のぬるゝなりけり

笑てといふに繪を見る事をかねたり

あさなけに見へききみとし賴まねはおもひたちぬるくさ枕なり

君としといふに公利といふ人の名をかねたり

ちかくてそ色もまされる青柳の糸はよりてそみるへかりける

是は立寄に糸をよることをかねたりこれと糸をよるは緣の詞のみにて哥の意にあつからす

世にふれは又もこえけりすゝか山むかしの今になるにやあるらむ

こは鈴鹿山を鈴といふ意にして世にふれはといふに振意をかね今になるといふに鳴意を兼たりこれも緣の詞のみにて作たるにて哥の意にはかゝはらす

我戀にくらふのやまの櫻はな間なくちるともかすはまさらし

くらふ山をくらふる事にかねもちひ其山のさくらにて其さまをいへるなり

春の田を人にまかせてわれはたゝ花にこゝろをつくるころかな

心を付るに作る意をかねたり是は田の用の言葉にていひなせるなり

足引の山ほとゝきすけふとてやあやめの草のねにたてゝなく

根と音をかねたりさて五月五日なれは菖蒲をよめるなり

音にのみきくの白露よるはおきてひるはおもひにあへすけぬへし

こは音に聞といひかけて菊をかね起ゐるに露の置をかね又露の縁にてけぬへしといへるなり

昔をのみ思ひこし路のしら山はいつかは雪のきゆるときある

思ひ來しといひかけて越路のことにいひなせりさて雪の縁の詞にておもひのきえぬことをいへるなり

戀をのみ常にするかの山なれはふしのねにのみ泣ぬ日はなし

戀をつねにするを駿河にいひかけ又その國のふしのねといふを音のことに用ひたり

今こそあれわれもむかしはをとこ山さかゆく時もありこしものを

壯夫といふにをとこ山をかね又榮行に坂をゆくといふ意をかねたるなり

君か名もわかなもたてし難波なるみつともいふなあひきともいはし

三津といひて見つといふ意とし網引といひて逢きといふ意に用ひたるなり難波のことにていひなせるなり

秋の田のいねてふことも掛なくに何をうしとか人のかるらむ

稲を往ねといふ意に用ひさて稲の縁にてひとのさひ來すかるゝといふに苅をかねたりかくるも稲のえん語なり秋の田のさまにて仕立たる哥なり

花のいろはうつりにけりな徒にわか身世にふるなかめせしまに

經るに降のこゝろをかね物おもふ時のなかめに長雨の事をかね用ひたり

君かゆく越の白山しらねともゆきのまに〳〵あとはたつねむ

行に雪のことをかねたり　白山はつねに雪のことをよめはなりあとも雪の縁語なり　又二三の句ことはを重ねてあやとなしたるなり

みつ汐の流れひるまを逢かたみ見るめの浦によるをこそまて

汐の干るに晝のことをかね海松に見るとをかねみるめの寄るに夜をかねて哥のおもてとはしたるなり

結ひ置しかたみのこたになかりせは何にしのふのくさを摘まし

かたみの籠に形見の子をかね忍草に忍ふ意を兼いへるなり

わかなのみたつの市とは騒けともいさまた人をうるよしもなし

名のたつといひかけて辰の市のことをかね人を得るに賣をかねまた名をたてさわくに市のさまをもかねたり

あけくらし守るたのみをからせつゝ袂そほつの身とそなりぬる

田の實に頼をかね山田のそほつに袂のぬれそほつる事をかねていへるなり

忍ひつゝよるこそきしか唐衣ひとや見むとはおもはさりしを

から衣は着しといはむ爲の序なりさて着しといふを來しといふ意に用ひ人や見むといふに囚を見る事を兼ていへり

あふ事のかた糸そとはしりなから玉の緒はかりなにゝよりけむ

片糸に難き意をかねさて糸によることをかねたりよるもあふも糸の

縁語なり
おもへとも人目つゝみの高けれはかはと見なからえこそわたらね
人目をつゝみ忍ふに堤のことをかね彼はといふ意のかはに河をかね
たりわたるも川の縁なり
天河たかれてこひはうくもそあるあはれと思ふせにはやゝ見む
流れてを長く久しき意にかね用ひあはれとおもふその時といふに瀬
の事をかねたり早くも川の縁たるへし
立わかれいなはの山の峯におふるまつとしきかは今かへりこ
むいなは山にいひかけて往る事をかね松に待意をかねたり
おもひ出るときはの山の岩つゝしいはねはこそあれ戀しき物を
ときは山といひかけて時といふ事にかね用ひ又岩つゝしいはと言を
かさねていへるなり
右に擧たるたくひ猶さま〳〵限りなくいと多し是等になそら
へてしるへし其中にともに活詞にて事を兼用ひたるにいさゝ
かまきらはしきもあれはうひ學いともからのためにくはしく
いふへしそはまつ 平す 鳴すはともに佐行四段のはたらき
詞なれはならさむ ならし ならす ならせといへは 平す
事にも 鳴す事にもなり又 飼ふ 買ふはともに波行四段の
活言葉なれは かはむ かひ かふ かへといへは飼事にも

○かよひち中

買事にもなり又 降る 振る はともに羅行四段の活詞なれ
は ふらむ ふり ふる ふれといへは 降ことにも振事にも
なるなりこれらはともに同し活詞なれはいさゝかもまきるゝ
事なきを 悔ゆる 崩ゆるは同し也行の活詞なれと 悔はく
い くゆ くゆる くゆれと活きて中二段のはたらきこと葉
崩はくえ くゆ くゆる くゆれと活きて下二段のはたらき
言葉なれはくゆ くゆる くゆれといひては悔の意にも崩の
意にもわたれと くいといひては悔にのみいひて崩にはいは
れす くえといひては崩にのみいひて悔にはいはぬ詞なり又
降ると 經るは 羅行四段の活詞と波行下二段の活詞とにて
降は ふらむ ふり ふる ふれと活き 經は へ ふ ふる
ふれと活けは ふる ふれといふときは 降にも 經にもか
よひてかねいふへけれと ふらむ ふりといひては降の事の
みになりて 經のことには用ひす へ ふといひては 降のこ
とのみになりて 降のことにはならす又 燻ゆると 悔ゆる
は 羅行四段の活詞と也行中二段の活詞とにて 燻は くゆ
らむ くゆり くゆる くゆれと活き悔は くい くゆ く

ゆる　くゆれとはたらけは　くゆる　くゆれといへは燻にも悔にもなれと　くゆらむ　くゆりといふ時は燻の意にのみなり　くい　くゆといひては悔の意にのみなりてたかひに意かよはす又　置と　起くるは加行四段の活詞と同中二段の活詞とにて　置は　おかむ　おき　おく　おけと活き　起る　はおき　おく　おくる　おくれと活けは　おき　おくといへは置にも　起にもかよへと　おかむ　おけといひては置事にのみなりて　起るこゝろにならす　おくる　おくれといひては起る意にのみなりて　置こゝろにはならす　又木をこると物にこるゝとを兼るは　こるは　羅行四段の活詞にて　こらむ　こり　こる　これといひ　こるゝは同中二段の活詞にてこり　こる　こるゝ　こるれと活けは　こり　こるといふ時は木をこるにも　物にこるゝにもかよはし川ふれと　こらむ　これといひては木をこる事にのみいひ　こるゝ　こるれといひては物にこるゝ事にのみいひてともに通はし川ひられぬ事なり

後撰　夕暮はまつにもかゝる白露のおくるあしたやきえは果らむ

置は加行四段の活詞にて　おかむ　おき　おく　おけと活きて　おくるとは活かぬ詞なれとこは白露の置といひかけてそれにるもしをそへて起る意に用ひたるなりいひかけはかく語のなからまてかゝりたるもいと多し

續後拾遺　つれなしとかつは心をみ山木のこりすも斧の音つるゝかな

木をこるは羅行四段の活詞にて　こらむ　こり　こる　これと活けはこらすといふ例にて　こりすとはいはぬ詞なれと深山木はこる物なれは其縁にて　こりといひてそれにすもしをそへてものにこるゝ意に用ひたるにて上のおくると全く同し様なりこるゝは羅行中二段のはたらき詞なり

拾遺大貳歌　梓弓おもはすにしていりにしをさもねたく引とゝめてそふすへかりける

是は奥へ女の入たる事を表にて弓の縁語にていとはいへるにてりまてはかゝらさるなりされとこはいと心よからすいりを弓の縁語とはおもふへからす其ゆゑは射は也行一段の活詞にて　い　いる　いれと活きていりとははたらかされはなり然るを今俗語に羅行四段の活詞に　いらむ　いり　いる　いれ

こいふより　いりとも活く詞とおもふめれとかく活きたる事外にたえてなけれは誤としるへきなりこれらの事いさゝかまきらはしきさまなれはよく／＼考ふへきことなり此たくひなほあるへしこれらになそらへてしるへし

さて活詞をかね用ふる事上にあけたる如くなるを今のひとの哥に五月雨なとに　日をふりて　日數ふりぬるなとよめる事多しいみしきあやまりなりこは上にいへる如く降　經をかねもちひむには　日數ふる　日數ふれはといへは降意にも經意にもなりてかねいはるゝを　日をふりにては雨の降ことにのみなりて　日を經意にはならさるに經をふりといふも例なき事なり思ふにそは

拾遺　世中にあらぬ所もえてしかな年ふりにたるかたちかくさむ

新千載　幾代かはつもれるとしもおほともの三津の濱まつふりまさるらむ

これらを年經たる意と心得たるよりの誤なるへしこのふりといへるはとしの舊くなりたる事をいへるにて　ふり　ふる　ふるゝ　ふるれと羅行中二段に活きて意も詞も異事なるをや

猶是等のことき誤これかれありとおほえたれと今とみには得おもひいてされはかさねてものゝ序にいふへし

上に擧たるは大かた三代集の哥ともなり　後にはやう／＼に詞も意もいと巧になりもてきぬれは猶其いひさまも又いと多かりそはみなこれらになそらへてしるへきなり

詞の延約の事

古く古事記書紀萬葉集に詞ののはゝりたるたくひさま／＼あり又つゝまりたる言語もいにしへは多かりこののはりつゝまりたると古今集よりこなたはやう／＼いとまれになり行てそれより後々はいと／＼まれ／＼なる事となれりそも／＼延りたる詞は佐行と波行と羅行とにのはゝる事なり其うち佐行と波行とに延りたるはいと多かれと羅行にいへるはいとすくなし其外の行には延りたる例なしさて四段の活詞の延りたるか多くて其外の活詞ののはゝりたるはすくなし其延りたるさま自他の詞のわかるゝに同しくその活詞の第一の音より佐行波行に延りたる例なり加行の活詞なれはかより延り多行の活詞なれはたより延り麻行の活詞なれはまより延はる例なり又其行の第五の音よりのはゝるもあれと夫はいとまれなり又

自他のわかるゝには第三の音よりうつるもあれこのはゝる詞には第一の音よりこ第五の音よりここにて第三の音より延りたるはいこ〳〵まれにてたゞ一つ二つあるのみなり

のはゝりたる詞の例

○加行四段の活詞より佐行四段の活詞にのはゝりたるは

あふみつかすもは　あふみつくなり
おほみれなかしは　大御音なきなり
このとひらかせは　此戸ひらけなり
ながなかさまくは　汝がなかまくなり
なけかすつまには　なけくつまになり
ふとしかす天下は　ふとしく天下なり
よしときこさばは　よしときかばなり

○多行四段の活詞より佐行四段の活詞にのはゝりたるは

あくらにたゝしは　あくらにたちなり
あをまたすらむは　吾をまつらむなり
ゆみとりもたしは　ゆみとりもちなり

○波行四段の活詞より佐行四段の活詞にのはゝりたるは

あはしゝをとめは　あひしをとめなり
かよはすきみがは　かよふきみかなり

なこはさばは　菜こはぐなり
こはしたまひのまに〳〵は　こひたまふまに〳〵なり
みことゝはさずは　御言とはずなり
見つゝしぬはせは　見つゝしぬべなり
われをとはすなは　われをとふななり

○麻行四段の活詞より佐行四段の活詞にのはゝりたるは

あさふますらむは　朝ふむらむなり
あしふますなは　あしふむたなり
なつますこは　菜つむ子なり
ゑましゝからには　ゑみしからになり

○羅行四段の活詞より佐行四段の活詞にのはゝりたるは

あまたらしたりは　天たりたりなり
いゆきわたらしは　いゆきわたりなり
くにへくたらすは　國へくたるなり
すゞふれとらせは　すゝふれとれなり
豐みきたてまつらせは　豐御酒奉れなり
さやかにてらすは　さやかにてるなり
をたをからすこは　小田をかる子なり

○麻行一段活詞の佐行にのはゝりたるあり此行の音に拘らずすくに佐行四段の活詞にのはゝりたり

見したまひは　見たまひなり
見しせすけふはは　見る事をしたまふけふはなり
わか見せばは　わか見ればのこゝろなり
一段の活詞ののはゝりたるは是のみにて外の行なるは見あたらす又一段の活はたゝ一音の詞なれは外の延りたる詞のさまとはいさゝか異なり
○也行中二段の活詞の佐行四段の活詞にのはゝりたるは
いひにゑてこやせるは　いひに飢てこいたるなり
やみこやしては　やみこいてなり
中二段の活詞の延りたるはたゝ是のみにて外に見あたらす
○奈行下二段の活詞の佐行四段の活詞にのはゝりたるは
いはなさむをは　いはねむをなり
いほしなせは　いをねよなり
なすらむとゆゑは　ぬらむ子故なり
やすいしなさぬは　やすいねぬなり
下二段の活詞の佐行に延りたるはたゝこれのみにてほかの行にも例なし殊にこれは一音の活詞にてなにうつりたれは外の例とはたかふさまに聞ゆれと猶第一の音なれは同しはたらきさまにて異なることなし

○佐行變格の活詞より同し行の四段の活詞にのはゝりたるは
神さひせすは　神さひすなり
たひやとりせすとは　旅やとりすとなり
つりせすらしもは　釣すらしもなり
とは第四の音のせよりのはゝりたりすへて第四の音より延りたるは是のみにて外の行にも例なけれと此變格の活詞の第四の音はすなはち四段の活詞の第一の音と受るてにをはも同しけれはことなることなし
右らのことく佐行にのはゝりたるはおのつから尊みたるさまに聞ゆる多し又のはゝりて四段に活くさまなるもはたらかさるさまなるもあれと多くは活きたるさまなりかく延りたると後の世の詞にはなし
祝詞に　みけもたするとあるは　みけもつなりかくては多行四段の活詞の佐行下二段の活詞にのはゝりたるなりすへて佐行下二段の活詞にのはゝりたる例もなく又尊みたるさまにのはゝるは皆四段の活詞なれはみけもたすとか　みけもたせるとかいふへき例なり又ながいへせこそとあるは　ながいへこそのはゝりたるなれは　なかいはせこそとあるへき例なり
おしひらかねは　おしひらけなり

この日くらさねは　此日くらせなり
いはひまたねは　いはひまてなり
かくたちよらねは　かくたちよれなり
あめをたまはれは　あめをたまへなり

これらも延りたる詞のさまなれはこゝに出しつさてふるゝはかくの如く四段の活詞の第一の音かさたはまらにねもしの添はりたるをおほする意に用ひたり古今集よりこなたこのねは不の意のねにてつかひさまことなりおほする意のねは第二の音きしちひみりにそはりて

ゐておはしましねは　ゐておはしませなり
なほもおほしたちねは　なほもおほしたてなり
われをうとみねとは　われをうとめとなり
さてもやみねかしは　さてもやめかしなり
みかうしまゐりねは　御格子まゐれなり

なことありさて一段の活詞は第二の音きにひみいゐ中二段の活言葉も第二の音きちひみいりゐ下二段の活詞は第四の音えけせてねへめえれゑにねもしのそはりておほする意と不の意を兼たる例なりまた

いりきてなさねは　入來てねよなり

うかはたゝさねは　鵜かはたてなり
かやをからさねは　かやをかれなり
はなをふかさねは　はなをふけなり
わか名とはさねは　わか名とへなり

これらは其行の第一の音より佐行に延りて又其佐行の第一の音よりねといへるにて二重に延りたる詞なりふけのふかせとのはゝりふかせのまたふかさねと延りたるなりとへはとはせと延りとはせの又とはさねとのはゝりたるなり此外もこれになそらへてしるへし

〇加行四段の活詞の波行四段の活詞にのはゝりたるは

いひつかひけりは　いひつぎけりなり
つかふかはつには　つく川つになり
いろつかふは　いろつくなり
しはふかひは　しはふきなり
なびかひしは　なひきしたり

また祠を字鏡にほかふとあるはほくなり

〇佐行四段の活詞の波行四段の活詞にのはゝりたるは

かくさはぬあかき心は　かくさぬあかき心なり
かくさふへしやは　さくすへしやなり

かくさふなみは　かくすなみなり
かへさひは　かへしなり
けうそくを押へてまさへは　けうそくを押へてませなり
ねかはずいまさへは　ねかはすいませなり
まつりことまをさひは　まつりことまをしなり
四方の人をもあふさはすは　四方の人をもあふさすなり

○多行四段の活詞の波行四段の活詞にのはゝりたるは

またひは　まちなり

右詔詞にありたゝ是のみにて外に見あたらす

○波行四段の活詞の同活詞にのはゝりたるは

あらはひなとする人は　あらひなとする人なり
うろほふは　うろふなり
おもひまどはひは　おもひまどひなり
ふねよはふは　ふねよふなり
よそほひては　よそひてなり

○麻行四段の活詞の波行四段にのはゝりたるは

すまふわか身は　すむわか身なり
つゝまはずは　つゝまずなり
やすまふは　やすむなり
すまひは　すみなり
よにしすまへはは　世にしすめはなり
わかぬすまはむは　わかぬすまむなり
ゐまひふるまひは　ゐみふるまひなり

○羅行四段の活詞の波行四段の活詞にのはゝりたるは

いへのらへは　家のれなり
うちすゝろひては　うちすゝりてなり
かくろへいりたまふは　かくれいりたまふなり
ちたひさはらひは　ちたひさはりなり
つかへまつろへるは　つかへまつれるなり
はなちらふは　はなちるなり
まじろはむは　まじらむなり
みなきらひつゝは　みなきりつゝなり
わたらふつきのは　わたる月のなり

○多行中二段の活詞の波行四段の活詞にのはゝりたるは

もみたひにけりは　もみちにけりなり

たゞこれのみにて外に見あたらす

○波行中二段の活詞の同活詞にのはゝりたるは

おもひをのぼへましは　おもひをのへましなり

これも外に見あたらす又加行佐行麻行羅行の四段のはたらき詞の　ふみを　ふまへ　ひきを　ひかへ　おしを　おさへ

こりを　こらへ　なこ波行下二段の活詞にいへるは其意いさゝかこことなるさまなれこ序にこゝにいへり是等も第二の音の第四の音にうつりたるさまなり

〇羅行下二段の活詞の波行下二段の活詞にのはゝりたるは

なからふる雪は　なかるゝ雪なり

なからへちるは　なかれちるなり

かくろへゆくは　かくれゆくなり

又かくろひこもあるはかくりにて此詞ふるくは四段にもはたらきたれは此行の四段の活詞の波行四段の活詞に延りたるなり又しくれのなからふ見れはこあるはなかるゝ見れはなりさて又なかるゝは羅行下二段の活詞なりすへて下二段の活詞の波行羅の活詞に延りたる例なけれはこのなかるこいふここ葉も四段の活詞の方にて波行に延りたるにてもあるへし其ゆゑは此行の下二段の活詞にかきりて古くは四段の活言葉に活かしたるこれかれあり万葉に　なかる水沫の　又なかるさきたのかはなこあるも四段の活詞の例なれはなり

又波行下二段の活詞に　なそらふる　よそふるこいふ詞ありこは佐行四段の活詞の　なす同下二段の活詞の　よするこいふここ葉ののはゝりたるなるへしその故は伊勢物語に　あきの夜の千夜を一夜になそらへて八千夜しねはやあくこきのあらんこある哥のかへしに　秋の夜の千夜を一夜になせりこも詞のこりて鳥やなきなむこあるにてよくしられたり又　なそらふる　なすらふるこもあるは例の第三の音こ第五の音よりのはゝりたるなり又よそふるは万葉に　あわ雪にふられてさける梅の花きみがりやらはよそへてむかも　あらかへはかみもにくますよしゑやしよそふる君がにくからなくになこあるはここよせつま又　よせてし君かなこあるこ全くおなしさまなれはなり

又けかれを　けからひこいへる事ありこはすへての例　けからへこいふへきをかくいへるはこれも古くは四段にも活ける詞かこも思へこさやうに活くへき詞のさまにもあらされは然にはあらて第四の音の第二の音にうつりたる詞これかれあれは其たくひなるへし又つこにらまへてこあるはつこにらみてをのへたるなれは　にらまひてこいふへくまた　ませまつらへてこあるはませまつりてなれはませまつらひてこいふへくまた女房あまたゐてつこひまもらへたりこあるもまもりたりの延はりたるなれはまもらひこあるへきをかくいへるは第二の音の第四の音にうつりたるなり又かくろひこもあるは　か

くりにて此詞古くは四段にも活きたれは此行の四段の活詞の波行四段の活詞にのはゝりたるなり

○加行四段の活詞の羅行四段の活詞にのはゝりたるは

むかるこゝろは　むくこゝろなり

○佐行四段の活詞の羅行四段の活詞にのはゝりたるは

たゝりなさるなは　たゝりなすななり

みかさまさりては　水かさましてなり

○波行四段の活詞の羅行四段の活詞にのはゝりたるは

うこなはりは　うこなひなり

おきそはりは　おきそひなり

又にほふれとゝあるは　にほへとのはゝりたるなれはこゝと同しく波行四段の活詞の羅行四段の活詞に延りたるなれと上にもいへる如く第三の音よりうつりのはゝる例は下に出せる　すぎのすぐりと延りたるとこれとのみなり

○麻行四段の活詞の羅行四段の活詞にのはゝりたるは

命もちゝまるは　命もちゝむなり

風なとまらずは　風なとますなり

こしかゞまりは　こしかゞみなり

ちにそまれるは　血にそめるなり

つゝしまりは　つゝしみなり

○加行中二段の活詞の羅行四段の活詞にのはゝりたるは

ほつえをすぐりは　末枝をすぎなり

右のことくく第三の音よりのはゝりたるは上にもいへることくいとまれにてこれと上に出せるにほへのにほふれとのはゝりたるとたゝ二つのみなり

○波行下二段の活詞の羅行四段の活詞にのはゝりたるは

よみをはりては　よみをへてなり

○也行下二段の活詞の羅行四段の活詞にのはゝりたるは

こやるこやりは　こゆるこいなり

此外見あたらすこいは　こいまろひなといへるこいなり　又しら浪のよそるはまへに　よそりつまはも　汝によそりなとあるは佐行下二段の活詞のよするといふ詞の延りたるなり

○二重にのはゝりたるは

たりを　たらひ　たらはし

もとふを　もとほる　もとほらふ

ふれを　ふらへ　ふらはへ

たりは羅行の活詞の波行にのはゝりまた佐行に延りたるなり

もとふは波行の活詞の羅行にのはゝり又波行に延りたるなり

ふれは羅行の活詞の波行に延りまた波行にのはゝりたるなり又いまはり　うまはりは二重にのはゝりたるさまにて　いみうみの　いまひ　うまひと延り又いまはり　うまはりと延りたるなりされと　いまひ　うまひと延りたるは見あたらすいもひと延りたるはあり又きよまはりとあるもきよめの二重にのはゝりたるさまなれときよまひといへることはなし

すへて上にあけたる詞とも佐行と波行とに延りて四段に活きたるもおほく又活かぬさまなるも多し羅行なるもおなしさまなから佐行波行に延りたることはいさゝかことなるさまも見えたり猶この外も多かるへし皆これらになそらへてしるへし

又古く四段の活詞の第三の音　く　す　つ　ふ　む　る　の其第一の音　か　さ　た　は　ま　らよりくとのはゝりいへることありそは

○加行の活詞にては

ひとのきかくには　ひとのきくになり
ゆかくをしらには　ゆくをしらになり
わかなけかくをは　わかなけくをなり

○佐行の活詞にては

おもほしまさくは　おもほしますなり
おもほしめさくは　おもほしめすなり
めかきまをさくは　女かきまをすなり

○波行の活詞にては

いはくもしるくは　いふもしるくなり
かはくしよしもは　かふしよしもなり
きけはしぬばくは　きけはしぬぶなり
めくみたまはくは　めくみたまふなり

○麻行の活詞にては

ぬすまくしらには　ぬすむしらになり

○羅行の活詞にては

あめのふらくには　あめのふるになり
うけたまはらくは　うけたまはるなり
たてまつらくは　たてまつるなり
とらくをしらには　とるをしらになり
ひとのかたらくは　ひとのかたるなり

かくいへるのみにてはたらかさるなりさて多行にも此例あるへきことなれと未見あたらすたゝしひとりごたくといふことありしやうにおほゆれと慥ならす是等は四段の活詞にかきりたれは阿奈也和の四行にはなし

又四段の活詞にはあらて　ぬむるのてにをはの其行の第一の
音なまらよりくとのはゝりたるありそは

○奈行のぬのてにをはののはゝりたるは

あひ思はなくには　　あひ思はぬになり
あめのふらなくは　　あめのふらぬなり
そむかれなくには　　そむかれぬになり
ともならなくには　　ともならぬになり
みちのしらなくは　　みちのしらぬなり

○麻行のむのてにをはののはゝりたるは

いよ／＼見まくは　　いよ／＼見む事のなり
たゝまくをしきは　　たゝむ事のをしきなり
なかなかさまくは　　なかなかさむなり
ふらまくはのちは　　ふらむ事は後なり
おもへらまくもは　　おもへらむもなり
かよひけまくは　　かよひけむなり
ひさしけまくには　　ひさしけむになり

○羅行のるのてにをはののはゝりたるは

おもほゆらくには　　おもほゆるになり
おゆらくをしもは　　おゆるとのをしきなり
さぬらくは玉の緒はかりは　　さぬる事は玉の緒はかりなり

見らくすくなくは　　見る事のすくなくなり
まをせらくは　　まをせるなり
おもへらくは　　おもへるなり
人のしれらくは　　人のしれるなり
ありけらくは　　ありけるなり
はかりけらくは　　はかりけるなり
かさしつらくは　　かさしつるなり
さためつらくは　　さためつるなり
よのふけぬらくは　　夜のふけぬるなり

又‖く‖し‖き‖しく‖し‖しきと活く詞のくのけくとのは
はりたるありいらなくを　いらなけく　ながくを　なかけく
よくを　よけく　あしくを　あしけく　こひしくを　こひし
けく　をしくを　をしけくなといへり
又よのなかのうけくにあきぬ　いてしと思へはこそのしけゝ
くなとあるはきののはゝりたるなり
古今集の頃よりおいらくといへる事おほし上のるの延りたる
なからかくてはおいるにて俗言の例なりこは萬葉に老落惜毛
とあるはおゆらくをしもとよむへきをおいらくと讀誤りたる
にもやあらむさて是はたゝ老とのみいへる意にてこれまでの

延りたるさまとはことたかひて此外に例なし
又梓弓よらの山邊のしげかくに云々とあるは　しげきといふこゝろなれは上に擧たる四段の活詞の例とはたかへりこれも此外には例見あたらす
又ぬなはくりはへけくしらに　書紀にひしからのさしけくしらになとあるはまたことなり古事記にこれをさし祁流とあれははへけくもはへけるの意にもあるへし
又たひらけく　のとけく　やすらけく　なといへるはくしきの活のくにて異なれとけくといふよりまきれぬへくおもはるれは序にいふなり　また　しるけくはしるくともいひてともにくしきのはたらきなり

つゝまりたる詞の例

○加行の活詞にてくあの約りてかといへることいと多しとはすへてくしきの活しくししきの活詞のく　しくにありといふ詞のそはりたるなり

春のこゝろはのとけからまし
人にくからぬ世にしすまへは
あふにしかへは惜からなくに
人のことのはうれしからまし
なみのはなにそ秋なかりける
秋のゆふへはあやしかりけり
むかしよりやはうかりけむ
なき名取てはくるしかりけり
なとか泪のいとなかるらむ
をみなへしおほかる野邊に
戀しかるへき夜はの月かな
老せぬ秋のひさしかるへく
なかゝれとしも祈らぬものを
はけしかれとは祈らぬ物を
ひさしかれあたにちるなと

さて　なかれば　なかれど　おほかれば　おほかれど　うれしかれば　うれしかれど　かなしかれば　かなしかれどなどば　どのてにをはをうくるは多くは第四の音にうつりてければ　けれどといへりおほする詞には　かれどのみいひてけれどいへることなし
又さきくといふ詞　さきかる　さきかれなどつゝまりてくしきの活のさまなれど　さきし　さきゝとははたらかぬさまなりこの類なほあるへし

又かゝらむ　かゝりは　かくあらむ　かくありにて同しさま
なれとこのくはしきとは活かぬ詞なり此例外にもあるか得
おもひいでず

又ごとくといふ詞くしきと活らけどこはすへてのくしきの
活とは異なるさまにおもはれてかく　くあをかといへること
なし　此類も外にあるかおほえす

又もし　もしくも　けたし　けたしくもなといふ事もあり是
はしきとは活かさるさまなれと　しく　しと活きていさゝか
似たるさまなれは序にいへり

又過去のしにくもじのそひてひりひしく寝しくといへるもあ
り

又わぎへなとあるはわがいへのつゝまりたるなり　わぎもこ
もわがいも子なり　又かしのふによくすをつくりはこうの約
れるにてよこうすなり

又くあらむといふが　からむと約り　からむが又けむとつゞ
まりたるこれかれあり

いのちをしけむは　いのちをしからむなり
ことのしけゝむは　ことのしけからむなり
こひぬ日なけむは　こひぬ日なからむなり
こひしけむかもは　こひしからむかもなり
たゝにしよけむは　たゝにしよからむなり
見まくやすけむは　見まくやすからむなり

是等は古き詞にて後世にはをさ〳〵いはす又ときしけめやも
といふことありこはときしからめやといふことにておなしさ
まなからし　しきとは活かされは異なり此例外におほえす

又われなけなくにはわれなからなくににて上なると同しいひ
さまなれと此例外に見あたらす

又かれといふがつゝまりてけといへるありこのかれのかは則
くあのつゝまりたるかなり

うすけとは　うすかれどなり
とほけどもは　とほかれどもなり
はやけばは　はやかればなり

さてこひしけはかたみにせむとゝあるはこひしかれはにはあ
らて　こひしからはの意なりこゝにあけたるとはいさゝかこ
となれと　からむをけむといへるは同しさまなり

又かきあげをかゝげなといへるもあり

又きえの約りてけといへるは　けぬがうへに光けなくに　け
なばけなゝむなと常に多くいひて異なることなし

又け。ながき　ながきけ。なとあるけ。はさ。へ。の約りたるなり
又ひけ。とりのわがひけ。いなばとあるけ。はか。れ。のつゝまりたる
にてひか。れ。なり
又つかひのけ。れ。ばとあるはきあ。れ。の約りてかれ。といふが第四
の音にうつりてけれとはいへるなり第一の音の第四の音にう
つりたる事上にもいひて例多し古事記傳に參渡來をまゐわた
り。け。り。とよみてけ。り。はてにをはのけ。り。にあらすきてありをつ
づめてきたりといふ意といはれたるはおなしさまなからくは
じからす
又このあげ。るいもがこゝろもはきあ。る。の約りてけ。るといへる
なりすり衣けりと夢みつはきありと夢みつなりけ。せ。る衣の
とあるはきし。あ。る衣のの約りたるなり　きし。はけし。にてじは
佐行にのはよりたるなり
又たちはけましをとあるけ。はかせ。の約りてけ。といへるなり
○佐行の活にてずあ。の約りてざ。といへること常にいとおほし
こは不の意のずにあ。り。といふ詞のそはりたるなり

しのひに袖はしぼらざ。ら。まし
ちると言事はならはざ。らなむ
世のうき事のきこえこざ。らむ

あかざ。りし袖のうちにや入にけむ
きのふけふとは思はざ。りしを
夢にいくらもまさらざ。りけり
おとにも人のきこえざ。るらむ
さけるさかざ。る花の見ゆらむ
すきにけらしな妹見ざ。るまに

さてざれといふ詞うちひらめなればにや哥にはおほえす文に
はいと多し
又ぞ。あ。のつゝまりてざ。といへる事あり戀にざ。りける　物にさ。
りける　なとかくさまに結句にのみいひて外にとかくいひた
ることなし
又さしあ。げをさゝ。げめし。あ。げをめさ。げといへるともあり又駒
をはさ。せてとあるは駒をはしらせてなり又一とせ。千とせなと
のとせ。はとし。へ。のつゝまりたるなり
○多行の活にてち。あ。の約りてた。といへるあり

名たゝ。るやとの菊なれは
母のかたみとわかもた。る
わたつみのもた。るしら玉

又うちあ。げを　うたげ　もちあ。げを　もたげ。といへるもあり

またうちすてを　うつてこあり又さきたへをさいてこゝつたへをこゝつて手をひたせを手をひてみたせをみてなこもあり
又てあの約りてたこいへるもあり

おもひゐたらむには
われはしぬへくなりにたらずや
ふたりぬはかり見でだりやきみ
わかやとのうめさきたりと
うつせみの世にも似たるか
たゝこゝもとにねたる聲する
おほせおきてたれ
鏡の山をたてたれは

さて　手あらひをたらひ　御手あらはしを　みたらしなこいへることもあり
又こあのたこ約りたるは見あたらざれこも漢文訓に君君たらす臣臣たらす云々然たり　云々如たり云々たる云々なこあり
古事記傳に　告言汝者任我宮之首をいましはこの宮のおびこたれこのたまふこよまれたり
又こいの約りてちこいへるあり

からしほなそゝぐちふごと

上にいへるもの第四の音のてにうつりたるはいこ多し

しぬちふことにまぬかれぬ
こてふに似たりまたすしもあらす
ひとをあくにはうつるてふなり
ゆめてふものはたのみそめてき
からにたにわれきたりてへ
このもとことに落とまるてへ
やへむくらして門させりてへ

さて右の外にこいふをこふこいへると多しこは約りたるにあらすいもしのはふかれたるなりいかにいふをいかにふこいふもおなし
○奈行にては　にあのつゝまりてなこいへる事常にいこおほし是もにのてにをはにありこいへることのそはりたるなり

秋ならてあふことかたき
うかへる舟のきみならは
松もむかしの友ならなくに
なからの橋と我となりけり
ふちはせになる世なりとも
わかやとのものなりたから
まつしるものに涙なりけり

ふたなる物といひはなすとも
するかなるうつのやまへの
あふ人からの秋の夜なれは
おくれておふるなへなれと
世ははるなれや色のつねなる

又新甞をにひなへといふはにひのあへの約りなり書紀のうたにひめなそびすもとあるは姫のあそひすもなりくれなゐもくれのあゐなり又こなたかなたといふもこのかたかのかたなり又江次第に結菓をかく繩とあるを和名抄に加久能阿和（こは假字たがへり）とありこれらものあのなとつゝまりたるなり
○波行にてはのたまはくをのたはく人わらはれをひとわらへなといへり又まなはしら尾ゆきあへは尾ゆきあはせの約まりたるなり
○麻行にてはともあれかくもあれを　とまれかくまれといひまたあまおりをあもりといひ　ほめられをほまれといへり又御裳のすそつみあげとあるを俗語にはつまげといへり
○也行にてはゆつゝまくし　ゆつかつら　ゆつま椿　ゆついはむらなとはいほの約りてよとなれるがゆにうつりたるなりすへて四段の活詞の第二の音きしちひみりにありといふ詞のそひて第四の音けせてへめれと約り夫よりらりるれと活きて

いへることゝねにいとおほしさてきあるは　かる　しあるは　さる　ちあるは　たるなるを第四の音にうつしてけるせることいへり第一の音の第四の音にうつりたる例おほし

○加行にては

花はさけらむは　花のさきあらむなり
さけりけるは　咲きありけるなり
さけるは　さきあるなり
さければは　さきあればなり

○佐行にては

花をかさせらむは　花をかさしあらむなり
かさせりは　かさしありなり
かさせるは　かさしあるなり
かさせればは　かさしあればなり

○多行にては

月をまてらむは　月をまちあらむなり
まてりは　まちありなり
まてるは　まちあるなり
まてればは　まちあればなり

○波行にては

人のつとへらむは	人のつとひあらむなり
つとへりは	つとひありなり
つとへるは	つとひあるなり
つとへれどは	つとひあれどなり

○麻行にては

雪のうつめらむは	雪のうつみあらむなり
うつめりは	うつみありなり
うつめるは	うつみあるなり
うつめれどは	うつみあれどなり

○羅行にては

雨のふれらむは	雨のふりあらむなり
ふれりは	ふりありなり
ふれるは	ふりあるなり
ふれゝどは	ふりあれどなり

右は四段の活詞にかぎりたれは阿奈也和の四行にはなし
右に擧たる延約の詞ども猶多しここに約りたるかたはかぎりなくいとさま／＼なりそはこれらになぞらへてしるべし

詞通路下巻

詞天爾乎波のかゝる所の事

すへて詞にもてにをはにもこと〳〵く其かゝる所あるとなり歌よみふみかくこともから是をよくしらてはあるへからすいにしへよりてにをはの事はこれかれをしへさとしたる書ともさまさま多く又人も常にとかくいふ事なれは人々おのつから見きゝてゝにをはゝかならすしらてはえあるましき物としりていかてよく明らめはやとたれも〳〵思ふへかめるをこのかゝるこころのさまはむかしよりたれもことゝしていへることなけれは物よくかむかふるともからもおのつからこゝろつかさりけれはなほさりにのみなりもてゆきて近代にはこのあやまり多く出來にけるなりけりそは次の詞へのみかゝるもありあるは一首のうへにこと〳〵くかゝるもありあるは句をこれかれへたてゝかゝるもありて其かゝりさまもさま〳〵なれとおのつから其定りある事なり是にたかふ時は詞とゝのはす或は自他いりましりけちめわからす下にかゝるへき所あるへきに其詞なくあるはたゝ一もしのつかひさまにて上にかけあはすなりなとする事なれは歌學せむともからはかならすしらてはえあるましき事なり又古歌の意をよく心得むには此てにをはことはのかゝる所をわきまへしるか第一の肝要なり是までの哥の註釋ともすへて此かゝる所のさまをくはしくわきまへしらさるによりて其ときたる所うはへはかり心得たるさまにてその趣意たる所をたしかにわきまふる事あたはすしてともすれはほかさまにそれなとしていとたと〳〵しけなり又みつから歌よまむにも此かゝる詞のさまをよく心得なは上下のとゝのひかけ合なといさゝかもたかふ事なかるへけれはくはしく辨へ置へき事なりおのれ常に初學のともからの歌を多く見るにこれかれあやまる事多けれはいかてしらしめむと思ひよりけるまゝにいにしへの哥ともをこれかれ出して其かゝるてにをはのさまを心得安かるへき様に印をつけ筋なと引て教へ諭しつるなり

） 此しるしは次の詞へのみかゝるをしらせたるなり

［ 此印はその詞てにをはの句をへたてゝむねとかかるこころをしらせたるなり

｜ 此印は下より上へかへりてかゝる所をしらせたるなり

＝　此印は哥のなからにてきるゝをしらせたるなり

‖　此印は紐鏡にいへる結ふてにをはをしらせたるなり

「　」　かくかこみたるは枕詞なり

猶印をつけいはまほしき事ども多かれど中々わつらはしく初學のともからは思ひまどふへく又筆には書取難き事ども多しそはみつからよく心得ておのつからさとるへき事なり

〔いそのかみ〕ふるき都のほとゝきすこゑはかりこそ昔なりけれ

　時鳥の下にのもしをそへて意得へし此類おほしなそらへてしるへし

ふか草のさとの月影さひしさもすみこしまゝの野邊のあき風

　月影の下にのもしをそへて意得へし

時鳥なくやさつきのあやめ草あやめもしらぬこひもするかな

　やは助字なりあやめもと詞を重ねて上は序なり

思ひつゝぬれはや人のみえつらむ夢と知せはさめさらましを。

　をはものをのこゝろなり

よし野川よしや人こそつらからめ早くいひてしことは忘れじ

　よしやと詞を重ねてあやをなせりやは歎息なりはやくは河のよせなり

枕にも袖にもなみたつらゝゐてむすはぬ夢をさふあらしかな

　なみたの下にのもしをそへてこゝろ得る例なり

　ならひこしたか僞もまたしらてまつとせし間の庭のよもきふ

　四の句のもしにて本哥とれるさま聞えたり　結句は本歌の上の句のさまなり

いたつらに過る月日はおもほえて花見てくらす春そすくなき

なれ〳〵て見しはなこりの春そともなとしら川の花のしたかけ

　四の句いひかけなり

〔朝露の〕おくてのいな葉かりそめにうき世中なおもひけるかな

わくらはにとはれし人も昔にてそれより庭のあとはたえにき

　三の句昔になりての意なり

〔久かたの〕ひかりのとけき春の日にしつ心なくはなのちるらむ

　此らんは上へ何とてといふことをいれて見る格なり

わかせこか衣のすそをふきかへしうらめつらしき秋のはつ風

　うらめつらしきに衣の裏をかねたり

をくろ崎みつのこしまの人ならは都のつとにいさといはましを。

　のはをの意をはものをの意なり

谷風にとくる氷のひまことに打いつるなみやはるのはつはな

　初花の下にならむといふことをそへてこゝろうる例なり

けふこすはあすは雪とそ降なまし消すはありとも花と見ましや。

○やはやはの意にこうらへかへる意なり

けふのみと春を思はぬ時たにもたつことやすき花のかけかは。。

かははうらへかへる意なり

夜を寒み衣かりかねなくなへに萩のした葉もうつろひにけり

夜のさむきに衣をかるさいひなせり

みかの原わきて流るゝいつみ川いつ見きとてか戀しかるらむ

いつとことはなかさねて序詞なり

なかれてはいもせの山の中におつるよしの河のよしや世中

よしと重ねて詞をあやなせり。やは歎息なり

子日してしめつる野邊の姫小松ひかてや千代の陰をまたまし

風ふけは峯にわかるゝ白雲のたえてつれなききみかこゝろか。

。かはかなの意のはの如くといふ意にてたとへなり

あひ見ぬもうきも我身のから衣おもひしらすもとくるひもかな

二三の句は我身からといふ意にいひかけたり

年の内に春は來にけり一年をこそとやいはんことしとやいはむ

うゑしうゑは秋なき時やさかさらむ花こそちらめ根さへかれめや。。

。しは助字なり　めやはうらへかへる詞なり

これや此やまとにしては我戀る紀路にありさふ名におふせの山

結句の下にならんといふことをそへて意得へし

おとは山音にきゝつゝあふ坂のせきのこなたにとしをふるかな

あふ坂な逢ことにいひなせり

五月雨はおうのかはらのまこも草からてや涙の下にくちなむ

。はゝにはの意なりやもしは下にやといふへきをさはいひかたきに

よりてかくいへり

よそにのみきかましものを音羽川渡るとなしにみなれ初けむ

此けむは上へ何しかといふことをいれて見る格なり

いつはりと思ふ物からいまさらにたか誠をかわれはたのまむ

水の面におふるさつきの浮草のうき事あれやねをたえてこぬ

うきと重ねてあやをなせり又のはのことくの意をもかねたりあれ

やはあれはにやの意なり

幾世しもあらし我身をなそもかくあまのかるもにおもひみたるゝ

。をはなるものなの意にはの如くにの意なり

紫染の君かたもとは雲なれやたえすなみたのあめさのみふる

なれやはなれはにやの意なり

梅のはなたか袖ふれしにほひそと春やむかしの月にとはゝや

初句梅花のかくにほふはと詞を添て見る意なれは初句より三の句

へ印をつけたり四の句は伊勢物語の意をとれるなり

うめのはなあかぬ色香も昔にておなしかたみのはるの夜のつき

三の句昔の如くにてといふ意なりのはなるの意なり
岩ねふみかさなる山をわけすてゝ花もいく重のあとのしら雲
　のはなるの意なり結句しら雲そといふ意なり
衣うつ音はまくらにすかはらやふしみの夢をいくよのこしつ
　三の句いひかけなりやはよび出しのやなり　伏見はふし見るとい
　ふ意にもちひたり
里はあれて月やあらぬと恨てもたれ淺ちふにころもうつらむ
　二の句は伊勢物語の歌によれり　淺ちふには　淺ちふの宿にのこ
　ころなり
露はらふねさめは秋のむかしにて見はてぬ夢にのこるおもかけ
　秋に飽をかねたり此昔にては昔になりてなり
尋ね見るつらき心の奥の海よしほひのかたのいふかひもなし
　三の句いひかけなり　結句貝にかひをかねたり
かなしさは秋のさか野のきり〳〵す猶ふる里にねをやなくらむ
　さか野にならひといふ意をかねたり
うき世には今はあらしの山風に是やなれゆくはしめなるらむ
　二の句いひかけなり
契ありてけふみや河のゆふかつら長き世までもかけて頼まむ
　宮川に見るといふ事をかけたり

わかせこはいつちゆかめとさき竹のそかひに寐しく今し悔しも
　二の句むといふへきをめといへるは東哥たれはなりしもともに助
　字なり
春日野の若菜つみにやしろたへのそてふりはへて人の行らむ
　袖をふるにわさ〳〵といふ事をかねたり
淺みとり糸よりかけてしらつゆを玉にもぬける春のやなきか
　淺緑の下にのもしをそへて意得へしかはかなの意なり
ときはなる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり
さくら花春くはゝれる年たにも人のこゝろにあかれやはせぬ
　結句はなせにあかれぬそといふ意なり
玉かつら今はたゆとやふく風のおとにも人のきこえさらむ
　此枕詞はたゆるへかゝれり此例外にもあり
あひにあひて物おもふ頃の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる
　なる事かたといふ意にて變格なり
紫の一もとゆゑにむさし野のくさはみなからあはれとそ見る
　みなからは　皆なからといふ意なり
あつさ弓いそへの小松たか世にか万代かねてたねをまきけむ
わかせこを都にやりて鹽かまのまかきの嶋のまつそこひしき
　松に待をかねたり

物おもけてたゝおほかたの露にたにぬるれはぬるゝあきのたもとを。
をはなるものをの意なり
大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいつらめ
やは所謂よひいたしなり
みよし野は山もかすみて白雪のふりにしさとに春は來にけり
いそのかみふる野の櫻たれ植て春はわすれぬかた見なるらむ
郭公こゑまつほとはかた岡のもりのしつくにたちやぬれまし
こよひたれすゝ吹風を身にしめて吉野のたけの月を見るらむ
山のはを出ても松の木のまよりこゝろつくしのありあけの月
木間よりたえ／＼もりての意なり　のはたるの意なり　結句はいひかけなるへし
幾夜われ涙にしをれてきふね川袖にたまちるものおもふらむ
いつかわれ苔の袂につゆおきてしらぬやま路の月を見るへき
あらしふく峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆくわか泪かな
のはのことくの意なり
末の露もとのしつくや世中のおくれさきたつためしなるらむ
初二の句は末の露もとの雫とやの意なり
あらさらむ後しのへとや袖の香を花たちはなにさゝめ置けむ
神代よりけふのためとや八束穗に長田の稻のしなひそめけむ

現にも夢にもわれは思はさりきふりたる君にこゝに逢むとは
誰そ此家の戸おそふるにふなみに我背をやりていはふ此戸を
二の句の下にはもしをそへて意得へし
今そしるくるしき物と人またむ里をはかれすとふへかりけり
ふく風をなきてうらみよ鶯はわれやははなに手たにふれたる
しるしなきねをも鳴かな鶯のことしのみちるはなならなくに
花の色はうつりにけりないたつらにわか身世にふるなかめせしまに
なは歎息なり經に降をかね長目に長雨をかねたり
あたなりと名にこそたてれ櫻花としにまれなる人もまちけり
まちけりは待いてたる意なり　櫻花は名にこそたてれといふこゝろなり
ちりをたにすゑしとそ思ふ咲しより妹とわかぬるとこ夏の花
常夏に床をかねたり結句にはもしをそへて意得へし
秋ならてあふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬものゆゑ
結句おひはせぬけれともといふ意なり
ふし詫ぬしのゝ小笹のかりまくらはかなの露や一夜はかりに
ふしに伏ゐをかね假に苅をかね夜に節のよをかねたり
やは歎息なり　にはなるにの意なり枕の下ににもしを添て聞へし
わするなよやとる袂はかはるともかたみにしほるよはの月かけ

影の下にをもしをそへて意得へし
きりともよ猶逢事をたのむかな死出の山路をこえはわかれは
月みれはちゝに物こそかなしけれ我身一つの秋にはあらねと
ちはやふる神代もきかす立田川からくれないに水くゝるとは
川の下にのもしをそへ水の下にをもしをそへて意得へし
夕暮はくものはたてに物そ思ふあまつ空なるひとをこふとて
三輪の山いかに待見む年ふとも尋ぬる人もあらしとおもへは
山の下ににもしをそへて意得へし
吹まよふ野風をさむみ秋はきのうつりもゆくかひとのこゝろの
三の句のはの如くの意なりかはかなの意なり
おほかたは月をもめてし是そこのつもれは人の老となるもの
このはかのといふ意なり結句の下になれはといふことをそへてこ
ころ得へし
近江より朝たち來れはうねの野にたつそ鳴なるあけぬ此夜は
をりにあへは是もさすかにあはれなり小田の蛙の夕くれのこゑ
聲をさして是もといへるなれはかくしるしをつけたるなり
雨ふれは小田のますらないとまあれや苗代水を空にまかせて
やはおしはかりて定めたる意なり
有明のつれなく見えし月は出ぬ山ほとゝきすまつ夜なからに
過にけりしのたのもりの郭公たえぬしつくをそてにのこして
はらひかねさこそは露の繁からめやとるか月の袖のせはきに
かはかなの意にて歎息なり
年も經ぬいのるちきりははつせ山をのへの鐘のよそのゆふ暮
夕くれの下ににてといふことをそへて意得へし
忘れては打なけかるゝゆふへ哉我のみしりてすくる月日を
もらさはや思ふこゝろをさてのみはえそやましろの井手のしからみ
四の句いひかけにてやむましけれはの意なり
きくやいかにうはの空なる風たにもまつに音する習ありとは
松に待をかねたり
面影のかすめる月そやとりける春やむかしのそてのなみたに
四の句伊勢物語の意なり
もらすなよ雲ゐる峯の初時雨木の葉はしたにいろかはるとも
初時雨の下ににもしをそへて意得へし
とへかしな尾花かもとの思草しをるゝ野邊のつゆはいかにと
おもひ草はもの思ふ事にいへるなり
思ひいてよたかかねことのすゑならむきのふの雲のあとの山風
山かせの下にはもしをそへて心得へし
いはさりき我身ふる家のしのふ草思ひたかへて種をまけとは

○かよひち下

二の句いひかけなりしのふ草に忍ふ事をかねたり

さもあらはあれ暮行春も雲の上にちる事しらぬ花しにほはゝ

しは助字なり

忘れしの人たにとはぬ山路かなさくらは雪にふりかはれとも

初句わすれじと契りしの意なり

われたからおもふか物をとはかりに袖にしくるゝにはのまつかせ

かはらたかひのかなり

年經たる宇治の橋守ことゝはむいくよ世になりぬ水のみなかみ

ぬはぬるそといふ意なり水上の下にはもしをそへて意得へし

ふく木にあふくま河のなかりせはいかにかせましけふのわかれを

あふくま川に逢ふ事をかれたり

思ひ出るをりたく柴の夕けふりむせふもうれし忘れかたみに

柴を折に時節のをりをかね難さに形見をかねたり

みし人の烟になりしゆふへより名そむつましき鹽かまのうら

結句の下にはもしをそへて意得へし

たつね來ていかにあはれとなかむらむ跡なき山のみねの白雲

結句の下にをもしをそへて意得へし

わするたよたのむの澤をたつ鴈も稻葉の風のあきのはふくれ

是も結句の下にをもしをそへて意得へし

心あてにをらはやをらむ初霜のおきまとはせるしらきくの花

結句の下にけもしをそへて意得へし一二の句は心あてにをらにを

これもかといふ意なり

今そしる思ひ出よとちきりしは忘れむとてのなさけなりけり

結句の下にさもしをそへて意得へし

きえわひぬうつろふ人の秋の色に身をこからしのもりの下露

三の句秋に飽をかねたり四の句いひかけなり

我庵はみわの山もとこひしくはとふらひ來ませ杉たてるかと

結句の下にそもしをそへて意得へし

あすよりは志賀の花園まれにたに誰かはとはむ春のふるさと

結句の下になれはといふことをそへて意得へし

ちらすなよしのゝ葉草のかりにても露かゝるへき袖のうへかは

結句の下にこけあらされはといふことをそへて意得へし

わすれした難波の秋の夜半の空ことうらにすむ月は見るとも

三の句の下にをもしをそへて意得へし

袖にふけさそな旅寐のゆめも見しおもふかたよりかよふ浦風

結句の下によもしをそへて意得へし

うき草の一葉なりともいそかくれおもひなかけそおきつ白浪

結句の下にはもしをそへて意得へし

わか君は千代に八千代にさゝれ石の巖と成てこけのむすまて
八千代にいませこいふ意なり
君か代け久しかるへしわたらひや五十鈴の川の流れたえせて
やはよひ出しのやなり

めてたき大御世はみやひここも何くれこさかりにのみなりもてゆきつゝ歌まなひの道もいやさかえてよみ習ひものする人の世に多かめれこほかの道々のわさこはなほすくなきさまなりさるは文字かくここを初こして其すへきさまかたちをなして見せしらせ教へさこすもろ／＼のわさはなし安く又學はむ人々も其すへきさまを見て其如くまねひなさむには出こぬまてもなし安きを手してなすわさこはやう替りてみつからの心よりまうけつくりなすここなれは手習なこの如くいくたひもなしこゝろみるへくもあらぬわさなれはほかのもろ／＼のわさこははしめのほこ學ひ習ひかたくむつかしきさまに覺ゆれはおのつから此道にいる人少きさまなりさはいへこ猶いまは年月にそへて哥よまゝくほりする人世にいこ多かめりそれもよまてはえあるましき事にしあらされは思ひなから一日二日一月二月こすきゆきていつしか月日重りもてゆけは來む春よりはしめむ此秋よりよまむなこいひつゝ猶いたつらに春秋もはかなくすき年さへそくれゆきけるしかする程にはや三年五年こいふになりぬれこ猶思ひたちかたくやう／＼に年さへ多く經ぬれはいよ／＼今さらめきていひ出かたくこやせむかくやせむこおもひ廻らせここかくおもむきかたくて思ひそめし程よりよみ習ひ物せましかは此程はさりこも無下にくちをしくはあらさらましをなこかへす／＼もくやしき事こ思へこかひなく又今よりまなひてもあるへきをえものせすのみあり經てつひによます成ぬる人もいこ多かるへし又さやうに深くのみは心に思ひしめさるもまたゝ心のうはへにのみあさらかに然思ひなからすくすなこもいこ多かるへしさて思ひたつよりこかくたこらすすか／＼しくよみ初る人もまれ／＼にはあるへけれこそはいこすくなくて百に一人もなくなむあるべき又二年三年經て今はこ思ひ起しておもむくもあるへく又七年八年かほこに成てをりふしにつけつゝ思ひ出て忘れすなからうち出むたよりなくて猶むなしくすくる間にふこよまゝほ

しく思ひし初の程の事なと思ひ出てかそふるに年月の程うちおとろき悔みなけきてたよりもとめ出つゝやう／＼に入來る人なともあるさまなり右のとくとかく此わさに入たつ人はかたけなるを其中にも人にすゝめられてよみはしむる事此わさにはもとも多かる事なりさるは年ころいかてと思ひ渡れとたつきなくなとして過す人或は近きほと物のをりふしにつけてよまゝほしく思ひ居たるをりしも人のすゝむるによりて思ひたつ人なともありまたかけてもおもひたらぬ人も又雲井はるかに思ひなしたるも時々人のすゝむるにつきてはさもやともおもひなるに又々もすゝむれはつひによむ事となれるもあるへし人のすゝむるに任せてよみ初めむには其人たよりちからとなりてたと／＼しき事おほつかなけなる事なとをもとひきくに心やすく又その人も我すゝめたるなれはいかてと思ひてさるへき事なといひしらせ敎へなとすへけれはおのつから習ふに便よく學ひやすかるへしさて友たちともによみはしむるあり何事も常にかたらひ合せつゝよみならふに互に便と成てなすともしいてやすく覺束なくたと／＼しき事もすくなかるへく又精出さむにもはけむ心いて來てすゝむものなれはおのつからよくも出來あかりもてゆくそかしたゝ一人にてはとかく退屈もいてきておこたりやすし友あれは心ひきたてられたゆむことなかるへけれはおのつからおこたるともあるましくすへて此わさは外の道々よりもとりわきて友たちあらまほしきなりそれも同し程の友ならては心置れてさのみたすけともなるましけれはかへす／＼おなしほとの友たちこそあらまほしきわさなりけれさて哥をよみならはむと思ふ輩はまつ初の程はてにをはの書又詞の書なとはしはらくさし置てよむへからす又歌よまむにてにをはことはつかひなとむけにしらさらむはいかゝと思ふは中々にひかことなり哥はとかく何事も一向にしらさるほとよりよみならひものするかもともよろしきなり初より右等の書を見てなましひに事をしりてはさかしら心いてきまたてにをは詞さまなとにからめられ言葉すくみてのひらかならす心にまとひいて來てなか／＼によろしからさるわさなりたゝ初は題林愚抄草庵集此二の書を手本としてよみならふへきなり外の類題したる書これかれ多かれと

よろしからさるふりもましりたゝしからぬ詞なとも見ゆれは見すしても事たりぬへけれは先さしおくへし題林愚抄は趣意安らかにて風躰宜しく草庵集はもとよりあしき風をきらひてたゝしきをむねとつとめてよめるなれは哥の法式にたかはす誤もなきさまなれは手本として習ひ學はんにあやまちなかるへしさて右の二書を手本とし題をまうけてよみ習ふへし題もむつかしきはさしおきて心やすきをえらひてものすへきなりすへて歌は數多くよみいつるか第一なれはとかくその意にて隨分澤山によむへきとなりはしめのほと多くよまされは詞のひやかならす口ほとけ難しかくて師の許にみつから物して添削をこひ何にてもしらさる事はとひきゝいさゝかなることをもいかゝと思はむ事は必尋ね明らむへしとかくたれも〳〵尋ねとはぬものなりさるはさはかりの事しらすとふかと思ふらむ事をはちてとひきかぬさまなれと決してさやうに思ふ物にはあらす師たる人も何にてもたつねきくかたをよしと思ふものなれはとかくとひきくへきことなりしらさるよりならひ學ふことなれはしらぬをはちてとはすにあるへきことにはあらすさて右の如くよみ習ふに題に作例ある事なり其作例によりて是にはつれさる樣にと心してよみ習ふへきわさなり作例とは花は花郭公は郭公月は月雪は雪とおの〳〵其物によりて其よむへきさまおのつから大低定まりあるをいふなりそはいにしへよりよみならひ來れる哥ともを見て知へしかくの如く作例をむねとしそれにはつれてはならぬやうにいひてはすへて哥は思ふ意をのへいふさまにはあらて心の外のことをまうけよむ事と思ふ人もあるへけれとしかにはあらす其故はまつうたも相應によむやうに成ては我おもふ心のまゝにいひてもみやひにして俗なる事はさらになく作例にはつれたるさまに聞ゆることなほたかふことなきを初學のほとみつからの心にまかせて作例によらすよみてはいひさまみやひならす俗になる事なり春庭常に人の哥を多くみるに皆然りされはとかく作例にはつれすたかはさるやうにとはいへるそかし

○古今集は後の世の哥のもとにて詞趣意なともみな此集より出たる事なれは其趣意詞さまなとよく味ひしるへき事なれはいくたひもくりかへしよみおほえてそらむすへき書なり次に

後撰集拾遺集なとも常に本歌にとれる哥とも多けれは是等もよく覺え置へきなり後拾遺集の比詞のいひさま艶なる一つのすかたいて來にたりはやく萬葉集より趣意をまうけてよめるを三代集にいたりてはいよ〳〵しかのみにてさま〳〵まうけなしてよめる物から猶いにしへの樣殘りておのつからなる所あるを此集のころより全く作りものせるさまになりて今の世の哥のさまには成來にけるなりけりさて新古今集は此程誠に哥道さかりにして勝れたる上手これかれ多し詞のもちひさまいとうるはしく一首のしらへすかたなといひしらすいとめてたき哥ともいと多かりけり此ふり學ひよまゝほしけれとたやすくよみうへき事にはあらす哥のさまよく心得よくよむ人とても詠得む事はいと難しましていまたしきともから初學の人なとはかけても及はす是を習ひ學はゝあらぬみたりことのみいて來へけれはかならすものすることなかれ

○歌は詞うるはしくしらへ高きか第一の事なれは隨分よき詞を撰ひいさゝかにてもあしき詞はのそき用ひさるやうにして詞いうに一首しらへとゝこほりなきさまにと心かけ物すへきわさなりかくて又其つかひさまいひさまによりておなし詞もよくも聞えあしくも聞えまたよき詞といへとも其つかひさまつゝけからなとよろしからされはあしくなり又あしき詞も其用ひさまつゝけさまによりてさしもあしけにきこえぬことも常にありて詞は其つかひさまいひさまにもよる事なりされは其いひさまつかひさまなとにも心をもちふへきわさなりまた趣意めつらしくたくみに詞の用ひさまうるはしくいうなるはいふもさらなりいかに趣意めつらしくたくみなりとも言葉のつかひさま優ならすしらへよろしからさるは見あきしぬへきわさなり皇國の古事から國にありし事なとよめるも詞の用ひさま調なとよきはさるさまにきこえてあくましくおほゆるをいひさまつたなく詞のしらへなと宜しからさるは心のとまるへくもあらぬをましてたゝ其ことを三十一字にのへたるのみなるはいふかひなく心くるしすへて古事なとをよめるは並々にてはおこりさまに聞え又物しりめきておのつからことはもこは〳〵しくいうならすなとして心とまるへくもあらすなむ又萬葉の哥をとりてよめるなとも前後詞の用ひさまなという

にしらへよきは一ふしありて心もとまるわさなるを上下の詞のつゝけからなと後世のさまにて其とれる詞のみふるめかしくきこゆるは木に竹をつきたらむやうにて中々なるわさそかしされは詞のうるはしくつゝけさまの優なるか本意なれは常によき詞をえらひ用ひさま續けからなとに心を付へき事なるをとかく詞をいたはらす思ふまゝにあしけなる詞をもみたりにつかひ聞苦しき詞又つまりたる詞なとを用ふるはいかにそやさても文字にもしをもして文字なと重りたるにさしもあらぬもあれと耳たちて聞くるしき多し不の意のぬ文字重りたる又意は異なれとやもし二つあるなと快からす又のもしも次々に多くかさなりたるは快からす又ともしかさねていはまほしき事をり〳〵あり是はさのみ耳にもたゝすまたき文字くもしなと句のするにかさなりたる句をへたてゝも聞よからぬものなりすへて右等のほかにもかさなりて聞よからぬさまなる文字は心すへきことなりまた字あまりはあいうおの四字多し尤句のなからにあることにてかしらにあるは此限にあらす此四字の外は聞にくけれは必よむましきことなり又右の四字の中にも詞さまによりて聞よからぬもありこは故あることなるへくはおほゆれといまた考へすいさゝかにても聞よからぬは心して用ふへからすさて又古より法式なといへることさま〳〵おほし其中には用ふへき事とも ゝこれかれあり又用ひすしてよき事とも ゝ多しそはおのつからわきまへ出くへき事なり

○後世の題詠はかりむつかしきはあるへからす其故は其事にふれ其物を見てよめるは目のまへにまさしくことにふれ物を見れはそのことのよせことはの縁なくてもよろしきを題詠は殊さらに題をまうけてよむ事なれは其題のゆるかす動かさる事をむねとすへきことなりたとへは海ならはうみ山ならは山其海山につきたることをいひて一首の上も其さま有へきなり海山とはかりにてそのよせなくては題うきて海山といへる詮なけれはなり

○歌學者といふへきさまにて古哥の事を明らめ言葉てにをはなと此みちのことをのみ學ひて常に歌はよますたま〳〵をりにふれてよめる事なとあるは其哥拙き物なりこは歌をよむ事を學はさるかゆゑなり事を學ふと哥をよむとはひとつ事なる

やうれと別なるものにていかほと古歌をよくあきらめてにをは詞なと辨へゐたりともよむことを學ひ心得すしてはよき哥なとはいてくへきものにあらすされと大躰哥よむ事をおほえたらむには一通り事をも學ふへきなりことをしらては不自由なる事も多かるへく又大概よくよむといはるゝはかりになりてはてにをはもおのつからとゝのひ詞の活なともをさ〳〵たかふことはなかめれと猶とゝのひたるたかひたるなと體にわきまへしらさらむはくちをしかるへきわさならすやさて又哥を解し詞のもちひさまてにをはのつかひやうなとくはしくわきまへことゝろうることをもはらとする學者よりはかへりて歌よみのかたまさるへしいかにとなれは哥はいと〳〵あやしくくすしくたへなるものにて意味のつかひさまてにをはなと實の所は言語にもいひ難く筆にも書盡しかたしされは事をしる學者の方はみつから哥をよまされはその心うる所もたゝ註釋するまての意味なるを歌よみの方は常にたえすものして意味用ひさまなとになれたることなれはおのつから其誠の意味をよく辨へ心え居たるへけれはなり歌の意味の詞にいひ難き事は哥よくよまむ人はおのつからよくしりぬへき事なりかし

○學問はもとより哥の道に限らす何わさにも才不才あるさまにて又其中にかのわさには才あるも此わさには不才なるまたかのわさには不才なるも此わさには才あるもありてひとむきならすまたなにわさにもおしわたりて才ありと見ゆるもありさやうの人は必つとむることえせされはとり出て是といふはかりのわさは出來ぬ物なり又いかに才ありともつとむる事なほさりにては出來る事かたし不才とてもたゆみなく習ひおこたらすつとむる時は其功積りてかへりて才ある人よりは其わさまさりてよく出來る物なりことしけくいとまなき人と常にいとまおほかるとのさまも此類なり又晩學とてたれも〳〵埒あかぬ事と思へとそれさしもあらす精いたしおこたりなくつとめたにすれは其かひありてさらに出來る事なりわか敎子にも此類これかれありされは晩學とてさのみおもひくつをるへきことにあらすとかくたゆますおこたらすつとめまなふにしくはあらすなむ

○常に歌よむ早き人とおそき人とあり是は上手下手にはよら

ぬことにてよくよむ人にもおそく不達者なるありいまたしき人にも達者にて早く出來るもあり是等生れ付にていかにともしかたしされとよくよむといはるゝ計に成ては半夜五十首或は一夜百首の會なとに出ては其心に成て隨分に出來ることなれと不達者なるは常には出來る事のおそきものなり

○よめる歌に面々の得たる所得ぬ所さま〳〵いと多かるなかに常に其詠草を見るにてにをはなとおのつからとゝのほり詞のつかひさまなともをさ〳〵誤り違ふ事なくまれ〳〵いさゝかつゝ直せはとゝのはさる哥いとすくなくして地場の所おしなへてよろしけれと多くの中に是そと取いてゝ譽へき歌のなき人もあり又地場のこころあしくててにをは言葉のつかひさまなともすれはたかひまたたかふとはなけれとなにとかやよろしからす又一首の意なと異やうなる又詞いひたらす又上下かけ合體ならすなとかく調ひさまおもはしからすなほしにくゝてよろしからさる哥多き中にふと趣意いひさまなとさるへきもましれるもありてとり〳〵なり右の二つともに今一きは格別に心を用ひ精出しつとめ學ひなは地場の宜しきはいよいよ宜しくなりもて行て其中にはおのつからよき哥もましり出來ぬへく又地場のあしきもおのつからなほりて其中のよき哥も猶さらよくなりゆくへきことなれはかへす〳〵も上にいへることく精出させまほしくこそおほゆれ

○常に詠草を多く添削するにたゝあしき所はけつり詞はさる所は直しなと思ふまゝにいかやうにもなることゝおもふ人もあるへけれと添削するはいとむつかしき物にて思ふさまには直しかたくてとかく心いりいとわつらはしく心に叶はぬこと多し其よしをいさゝかいはむには先すこし直してよきも其さまによりて一句二句も直し又下句なと少し直すへき所を直せは其所はよろしけれと其直したるにつきてまた上句に直さねはならぬ所いてき又一句のうち直さむとするに字數たらす或は餘りなとして直し難く又上句と下句とかけ合よろしからさるなと上句をなほすかたよかるへきか下句をなほす方よきかと思ひくらへて直しのすくなき方にする事なりすへてよみ主も直しのすくなき方快かるへけれはなりまたゝ一文字二文字にて一首の意聞えかたくとゝのはさるなとありてとかくお

もひめくらせといかにとも直し難くてさておくもあり又初五文字あるは三の句なと用なき詞あるをのそきさるへきこと葉をおかむにふとえ思ひ出すからくして思ひよる事もあり五文字七もしと句の字數さたまりたる物なれは直しかたき事も多したとへは　うらむる。葛の葉　へたつる。中かなといふへきをさては一字多けれは　恨む葛の葉　隔つ中かななといひ　花。そめつらしき。風そ。うらめしき。といふへきを　花そ。めつらし風そ。うらめしなといひ　あらはすかな　なかると見てなといふへきを一文字たらさるによりて　あらはするかな。　なかるゝ。と見て　なといひ　櫻は　心はといふへきを四言にて一字たらされは　櫻には。　心には。なとにもしを加へなとしたる此たくひさま〱いと多し善惡によらす直しやすきと直しにくきとありてあしきさまなとも其あしき所を直しなとすれは宜しき方にもなりすへては宜しきさまなるも少しあしき所の直しかたく其まゝにてはゆるしかたくて捨るなともありてとかく心にまかせぬ事とも多し猶いはまほしき事ともさま〱あれとさのみいふへきことにもあらす又筆にもくはしくはかきと

りかたくなむ

○我先にあらはせる詞のやちまたをたれも〱多くむつかしくわかりかたき物に思へるよしかれ今其わかりかたく思ふめる所々を心得辨へしめむか爲にこれかれ一とほり次々にいふへし此やちまたなとはさつと一とほりに見てはわかりかたく辨へかたし物語或は記錄或は註釋物なとは書面文義たに聞ゆれは事はよくわかりしらるゝをかやうの書なとは書面文義は聞えても其意わかりかたし一言いへる事もすへてへかゝりそれをもて始終に押渡し心うる事なれは二言といへともなほさりに見過さす深く心をとゝめて考へわきまへて其事ともを我物と手に入やうにせされはいくたひ見ても益なしそも〱この書をあらはしたるさまをいはむに古書古歌の言葉ともをとことくのこらすわきまへて後作れるものにはあらすこは其さたまりたる其肝要の所をとらへえたるにつきてその例をもておしさたむるに千万の詞いと正しくおこそかにして一つもたかふとなしたとへは日蝕月蝕のさまを知たるも天にのほりて其さまを見明らめたるには非す月日の年々めくる事の正しく

ていさゝかもたかふ事のなき所をしりえておし定めたるか如し日月のめくり詞の活のおのつからいと正しくすこしもたかはされはなりこれを思ふにも皇國の詞といふ物はまことにまことにあやしくくすしくたへなる事しられていともくたふとしさてやちまたのさまを辨へしらむと思はゝ先五十音を繰返し繰返し何へむもよく見てとくとそらに覺えよく心えてアイウエオは阿行カキクケコは加行サシスセソは佐行タチツテトは多行ナニヌネノは奈行ハヒフヘホは波行マミムメモは麻行ヤイユエヨは也行ラリルレロは羅行ワヰウヱヲは和行さて第一の音はアカサタナハマヤラワ第二の音はイキシチニヒミイリヰ第三の音はウクスツヌフムユルウ第四の音はエケセテネヘメエレヱ第五の音はオコソトノホモヨロヲ右等の事をとくと心得て譬へは阿行といへは阿行の文字加行といへは加行の文字なと目のまへにうかひ第二の音といへはイキシチニヒミイリヰ第四の音といへはエケセテネヘメエレヱの文字目さきにうかふはかりによく〳〵覺え置へきなりさてたとへは加行の第五の音は何ととふにコと答へ奈行の第四の音は何ととふにネと答へ麻行の第三の音は何と問ふにムと答へ羅行の第二の音は何と問ふにリと答へ又シ文字はいかにと問ふに佐行の第二の音とこたへテ文字はいかにと問ふに多行の第四の音とこたへホ文字はいかにと問ふに波行の第五の音と答へユもしはいかにと問ふに也行第三の音とこたへていさゝかもとゝこほりなくすみやかなるへくうろむにて俄に思案するやうの事にてはとゆかぬわさなれはいかにもよく覺えこむへきなりさて右にいへることもをとくとよく覺えこみて後活詞のさまを心得へき事なりその活詞は四段の活詞一段の活詞中二段の活詞下二段の活詞の四種なり此活きさまはやちまたに委しくいひたれと猶下にもいふへしさて四種の活詞をわかちしるには其うくるてにをはを以てわきまふるか肝要なりうくるてにをはによりて是は四段の活詞是は一段の活詞是は中二段の活詞是は下二段の活詞とわかちしる事なりそは四段の活詞は第一の音カサタハマラよりんのてにをはをうけ一段の活詞中二段の活詞は第二の音キチニヒミイリヰよりんのてにをはをうけ下二段の活詞は第四の音エケセテネヘメエレヱよりんのてに

をはを受るか定まりなり此定まりに一つもたがふ事なし四段の活詞は加行にては　あかん　うごかん　ゆかん右の如く何れも第一の音カよりんのてにをはを受れは飽動行などは加行四段の活詞なり佐行にては　おさん　かへさん　くらさん右の如く第一の音サよりんのてにをはをうくれは押返暮などは佐行四段の活言葉なり多行にては　うたん　かたん　またん右の如く第一の音タよりんのてにをはをうくれは打勝待などは多行四段の活詞なり波行にてはいはん　かよはん　ねがはん右のごとく　第一の音ハよりんのてにをはをうくれは言通願などは波行四段の活詞なり麻行にてはうまん　くまん　すまん右の如く第一の音マよりんのてにをはをうくれは産汲住などは麻行四段の活詞なり羅行にては　しらん　つらん　ふらん右の如く第一の音ラよりんのてにをはを受れは知釣降などは羅行四段の活言葉なり一段の活詞は加行にてはきん奈行にては　にん波行にては　ひん麻行にては　見ん也行にては　いん和行にては　ゐん右のごとくいひて皆その行の第二の音キニヒミイリヰよりんのてにをはをうくれは着似干見射

居などは一段の活詞なり此活詞は第二の音一音のみなればいと少なし中二段の活詞は加行にては　おきん　すぎん　つきん右の如く第二の音キよりんのてにをはを受れは起過盡などは加行中二段の活詞なり多行にては　くちん　こちん　はちん右のごとく第二の音チよりんのてにをはを受れは朽閉恥などは多行中二段の活詞なり波行にては　おひん　こひん　しひん右の如く第二の音ヒよりんのてにをはをうくれは生戀強などは波行中二段の活詞なり麻行にては　あみん　うらみん右の如く麻行の第二の音ミよりんのてにをはを受れは浴恨などは麻行中二段の活詞なり也行にては　おいん　くいん右の如く第二の音イよりんのてにをはを受れは老悔などは也行中二段の活言葉なり羅行にては　こりん　ふりん右の如く第二の音リよりんのてにをはをうくれは懲舊などは羅行中二段のはたらき詞なり和行にては　ひきゐん右の如く第二の音ヰよりんのてにをはをうくれは率は和行中二段の活詞なり下二段の活詞は阿行にては　えん右の如く第四の音エよりんのてにをはをうくれは得は阿行下二段の活言葉なり加行にては　うけん　た

すけ○ん● つゝけ○ん●右の如く第四の音ケ○よりん●のてにをはをうくれは受助續なとは加行下二段の活詞なり佐行にては あはせ○ん● うせ○ん● やせ○ん●右のことく第四の音せ○よりん●のてにをはをうくれは合失瘦なとは佐行下二段の活詞なり多行にては いて○ん● すて○ん● へたて○ん●右のことく第四の音テ○よりん●のてにをはをうくれは出捨隔なとは多行下二段の活言葉なり奈行にては かさね○ん● たつね○ん● ね○ん●右の如く第四の音ネ○よりん●のてにをはをうくれは重尋寐なとは奈行下二段の活詞なり波行にては かへ○ん● つかへ○ん● へ○ん●右の如く第四の音へ○よりん●のてにをはをうくれは替仕經なとは波行下二段の活詞なり麻行にては さめ○ん● すゝめ○ん● とゝめ○ん●右の如く第四の音メ○よりん●のてにをはをうくれは覺進止なとは麻行下二段の活詞なり也行にては きえ○ん● こえ○ん● さかえ○ん●右のとく第四の音エ○よりん●のてにをはをうくれは消越榮なとは也行下二段の活詞なり羅行にては かれ○ん● なかれ○ん● ふれ○ん●右のことく第四の音レ○よりん●のてにをはをうくれは枯流觸なとは羅行下二段の活詞なり和行にては うゑ○ん● うゑ○ん● すゑ○ん●右の如く第四の音ヱ○よりん●のてにをはを受れは植餓居なとは和行下二段の活詞なりさて四段の活詞は加行にてはカ○キ○ク○ケ○波行にてはハ○ヒ○フ○へ○と其行の第一の音より次第に四段にはたらくなり一段の活詞は奈行にては ニ○ル● ニ○レ●也行にては イ○ イ○ル● イ○レ●と活きて其行の第二の音のみにて一段の活なり中二段の活詞は多行にては チ○ ツ○ ツ○ル● ツ○レ●麻行にては ミ○ ム○ ム○ル● ム○レ●と其行の第二の音第三の音と四段の活の中二段に活くなり下二段の活言葉は佐行にては セ○ ス○ ス○ル● ス○レ●羅行にては レ○ ル○ ル○ヽ● ル○レ●と其行の第四の音と第三の音と二段に活きて四段の活の下二段なり右のうち一段の活詞中二段の活詞下二段の活詞に●印を付たる ル● レ●はそへていへる文字なり此ことやちまたにくはしくいへり さて上にもいへることく四種の活詞をわかつこと第一の事なれは又いふへしたとへは書咲なとは何の活言葉そといふに かゝ○ん● かき○ かく○ かけ○ さかん● さき○ さく○ さけ○と活きて加行の第一の音カ○よりん●のてにをはを受てカ○キ○ク○ケ○と活けは加行四段の活詞なり又思通なとは何の活詞そといふに おもは○ん●

おもひ　おもふ　おもへ　かよはん　かよひ　かよふ　かよへと活きて波行の第一の音ハよりんのてにをはをうけてハヒフへとはたらけは波行四段のはたらき詞なりまた似見なとは何のはたらき言葉そといふに　にん　にる　にれ　みん　みる　みれと活きて奈行の第二の音ニ麻行の第二の音ミよりんのてにをはをうけてたゝニミとのみ一段にて奈行麻行の一段の活ことはなり又落恥なとは何の活詞そといふに　おちん　おつ　おつる　おつれ　はちん　はつ　はつる　はつれと活きて多行の第二の音チよりんのてにをはをうけてチツと二段に活け多行中二段の活詞なり又赦舊なとは何の活言葉そといふに　ゆりん　ゆる　ゆるゝ　ゆるれ　ふりん　ふる　ふるゝ　ふるれと活きて羅行の第二の音リよりんのてにをはを受てリルと活けは羅行中二段の活詞なり又任痩なとは何の活言葉そといふに　まかせん　まかす　まかする　まかすれ　やせん　やす　やする　やすれなと活きて佐行第四の音セよりんのてにをはを受てセスと二段に活けは佐行の下二段の活詞なり又責譽なとは何の活詞そといふに　せめん　せむ　せむる　せむれ　ほめん　ほむ　ほむる　ほむれと活きて麻行の第四の音メよりんのてにをはを受てメムと二段に活けは麻行下二段の活詞なり是等の事をよく辨ふへしされは第一の音にんのてにをはをそへていはるゝ詞は四段の活詞第二の音にんのてにをはをそへていはるゝ詞は一段の活詞と中二段の活詞第四の音にんのてにをはをそへていはるゝ詞は下二段の活詞なりすへて物をおほゆるに歌にてはおほえやすけれは

んのてには四よりうくるは下二段四段は一の音よりそいふ
一段と中二段とは二の音にんのてにをはをそへていふなり

又四段の活詞は第三の音より體言につゝきて　ふく風　かよす　櫻　まつ人なといひ一段の活詞は第二の音にるもしをそへて躰言に續くるなり　見る月　いる矢なといひ中二段の活詞と下二段の活詞は第三の音にるもしをそへて躰言に續くるなり　おくる朝　こふる心なといひ　かくる露　いつる月　さむる夢なといふかきたまりとしるへし又るれの文字を第二の音にそへてはたらかす言葉は一段の活詞第三の音にるれの文字をそへてはたらかすことはは中二段のはたらき言葉なり

る。れ。のもし三にそへるはなかこしも第二の音にそふは一段
躰言を三よりいふは四段たり二にるをそへていふは一段三
の音にもらしをそへて躰言へつゝくことは中こ下なり
又すへておほする詞は四段の活は第四の音をそのまゝ聲たえ
すなはち春ここにさけなこいひ一段の活中二段の活は第二の
音によもしをそへて見よ　おきよ　おりよなこいひ下二段
の活は第四の音に　よもしをそへて　はやいてよ　千代もへ
よなこいふか定りなりおほする詞こはいはゆる下知の詞なり
四の音を四段はすくに下知こなし下二段にはよをそへてい
ふ一段こ中二段こは二の音によもしをそへて下知こするな
り

又阿奈也和の四行には四段の活詞なし阿佐多羅の四行には一
段の活詞なし阿佐奈の三行には中二段の活詞なし下二段の活
言葉はここ〳〵くありこれらのことかへす〳〵もよくこゝろ
えおくへきなりさて上にいへる事ともを大躰よくこゝろ得な
は古歌をこりいてゝそのなかの言葉こもをかたはらに何のは
たらきこゝはこいふ事をしるしてこゝろみるへしそは三代集
の音は五十首百首二百首なこもこりいてゝものすへきなりそ
のしるしさまひたりにあくるかこし

袖ひちて結ひし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ
見わたせは柳櫻をこきませてみやこそ春のにしきなりける
夏山になくほとゝきす心あらは物おもふ我に聲なきかせそ
こひ〳〵てあふ夜はこよひ天川霧たちわたりあけすもあらなん
なきわたる鴈の泪やおちつらむ物おもふ宿の萩の上のつゆ
白雪の所もわかすふりしけはいはほにもさく花とこそ見れ
かりこもの思ひ乱れて我こふと妹しるらめや人しつけすは
こひわひてうちぬる中にゆき通ふ夢のたゝちは現ならなむ
石間ゆく水の白浪たち歸りかくこそは見めあかすもあるかな
ふして思ひおきてかそふる萬代は神そしるらむ我君のため

後鈴屋集序

此集を後のすゝのや集と名つけたることは我翁としころよみいてられし哥すへておほち翁のよみたゝしおかれたるすかたしらへにここならす詞のこゝのへさまこゝろはへのめつらしきなこは猶まさりさまなるかたに見きゝめてゝをちこちのをしへ子たちのつねに後の鈴屋翁こいひはやさるゝにしたかひてまたほかにもこむることもなくたゝありにつけたるなりけりかくいふは翁の家つける

本居建正

文化十三年十一月

後鈴屋集上之巻

本居春庭詠

春哥

年のはじめによめる

日のもとのけさのひかりや天地のうら〳〵かすむよもの初春

けさはまためにこそたゝねのとけしと見ゆるやかすむはつ春の空

うれしこのあまりあるよいはつ春と袂ゆたかにたつかすみかな

君か代の千年のかけにすむたみのはつ春いはふかといまつ竹

家ごとに松の千年をしめはへてゆく末ながくいはふはつ春

立春

春やまつ人の心にたちぬらむかすまぬほとの空ものとけし

のとけしたゝ春たつといふはかりかすみそめたる空のけしきも

なしまれし心さわきのなごりなくけさはのとけきはつ春の空

立春山霞

雲の色もあゝれに春のよそならてかすみてかゝるかつらきの山

立春浦霞

ゆく年をへたてゝ春になる空のかたえかすめるなふの浦たし

霧中立春

つたかつらくる春にしもあはむとは思ひやかけしうつの山こえ

年内立春

けさはゝや春きにけりとふる年の日數をこめてたつ霞かな

春きても猶たちのこる年波は霞のそてにせきやとめつる

初春

春きぬと思ふ心のゝとけさもたちそふけさの朝霞かな

よもの海霞そたてる波風もしつかなるよのはつ春の空

初春霞

春きぬといふよりはやくめにたちてのとけさ見する朝霞かな

よし野山おくある春の色見えてかすみそめたるふる里の空

初春山

年ははやくれていなはの山のはに春たちかへる朝霞かな

初春河

とくるより咲こそいつれ谷川のこほりや波の花のしたひも

早春水

うちとけて岩井の氷わか水にむすひかへたる今朝のゝとけさ

氷のみ猶こそおすへ風さえてまた春あさき山の井の水

早春山

春たては山のはなから跡もなく霞にきゆるこそのしら雪

早春河

よし野川かすむ高根の春の色にたちもおくれぬ浪のはつ花

音羽川こほりもけさはうちとけて跡なきなみに春風そふく

立かへり春はきにけり岩波の音たし川もこほりなかれて

湖早春

漣さかる波もみきはにたちかへり春こそきぬれしかのから崎

名所早春

ゆく末の春のゆた野の面影もくさのはつかにかすみそめつゝ

つくはねの雪もたえ〳〵とけそめて雫のたゐに春はきにけり

山家早春

たえ〳〵の軒の雫に春しるもあはれはふかき雪の山さと

春きぬと雪のしつくも松の戸にたえ〳〵かゝる朝かすみかな

子日

おひつゝくねのひの野への小松原つきせぬ御代のためしにそひく

いつか又けふの子日の姫小松千代のためしにひかむとすらむ

ひき植てねのひの小松年高くわれもさかえむ千代の春迄

子日してけふより千代をわかものと宿にそうつす野への姫松

雪中子日

降雪に今より千代の色見えてねのひの小松花そさきける

若菜

春さむみわかなつみにとくる人も雪間もまれの春日野のはら

たゆみなくつむとはすれとたまらぬは雪ますくなき若なゝりけり

此ころはおふる若菜のほとよりもつむ人しけき春日野のはら

摘若菜

くる人のまれなるほとはまれならでなか〳〵おほくつむわかな哉

雪中若菜

人もまたしら雪ふかき野へにきていとゝまれなる若なをそつむ

さらてたにまれなる野へのはつわかなと白雪のふりかくすらむ

名所若菜

春さむみ雪まゝわかなつむ人もたえ〳〵にのみ見よしのゝ里

若菜祝

春ことにわれもわかなの若かへりおほくの年をつまむとそ思ふ

若草

庭の面になかめふりぬる雪きえて色めつらしくもゆる若草

若草のひとつみとりもうすくこくおのかさま〳〵色は見えけり

もえそめし色のはつかに今は又雪こそ見ゆれ野へのわか草

おひゆかむ末野の春ののとけさもかつ見えそめてもゆる若草

庭若草

雪きえてほとなき庭のまかきにもみとり色こくもゆるわか草

野若草

わか草のみとりそふかきしら雪のきえてほとふるかすかのゝ原

春くれは空もひとつに浅みとりわか草つゝくむさし野の原

春池

春は又池の心ものとかにてみきはに波のたちもさわかす

山家春

山里のかきねの小草もえいてぬかれし人めもいつか見えこむ

残雪

とく消しこすゑの雪にひきかへてつれなくのこる松の下陰

たえ〳〵になりてなか〳〵木本はきえぬ日数のつもるしら雪

春の日をへたてやすらむ消やらて垣根はかりにのこるしら雪

野残雪

春ふかき柳さくらの色をまつみやこの野への雪のむらきえ

谷残雪

春きてもつもりしまゝにきえやらて猶谷ふかくのこるしら雪

谷ふかみよそなる春もいちしるく猶さえのこる雪の色かな

鶯

消あへぬ雪も花かと見るはかりなく音のとけき枝のうくひす

音になきておのか涙を青柳の糸に玉ぬく春のうくひす
雪ふかき谷の戸いてし鶯のかへるふるすに花そふりしく
手折つるものとやこゝにうくひすのなきてうらむる袖の梅か香

朝　鶯

春さむみうつる日影のかた枝のみ木つたひてなく今朝の鶯

雪中鶯

ふる雪におのかなく音の春はかりうつもれのこるけさのうくひす
ふりうつむ雪をうしとや花の枝に鳴て木つたふ鶯のこゑ
ふりまかふ木ことの花にうくひすのたとらて來なく雪の梅枝

花間鶯

さかぬまはものうかりつる鶯のなく音もとくる花の下ひも

野　鶯

なきぬやとかすむかた野に立いてし朝けもしるき鶯の聲

谷　鶯

おのか音も春のひかりとよそにしてうつろひ出る谷のうくひす
春さむみ猶出やらて谷の戸に日數ふる巣のうくひすの聲
花の香のたよりまつまの谷のとにしはしやすらふ鶯のこゑ

山家鶯

鶯のこゑうちとくるなみたかとみ山の庵のゆきのたま水
山里はふる巣なからのはつ聲も軒端にちかき谷のうくひす
いましはし此山里にくちなれて都にいてよたにのうくひす
なれもまたうちとけぬまはなく聲の山さとひたる谷のうくひす

梅

たちよれは袖にかをりて見る花のあはれをそふる梅の下風
いつこそとよそにや人のしのふらむ軒端の梅にはる風そふく
さく宿に人はさそはておれのみ空にうかるゝ風のうめか香

雪中梅

うつもれぬにほひをうしと梅かえにふりこそまされ庭の白雪

梅　風

さきぬとはつけぬ梢もふく風のたよりにとはむ宿の梅か香
色も見ぬよそのにほひを身にしめてたよりの風にしのふ梅かえ
さく宿をうはの空にもしのふかな梅か香おくる風のたよりに
吹たりとつけくる人に吹風のたよりおくれぬよその梅か香

梅薫風

さそひこぬ梢の色もふく風におもかけにほふよそのうめか香
くれてゆく色のあはれも梅花をしからぬまてにほふ夕風

梅薫袖

さそひくる風にもうつる花の香はをる袖さそなよその梅枝
さそひきておのれ過ゆく袖のうへににほひそとまる梅の下風

梅薫枕

さくと見し夢もまさしく手枕にかをるねさめのよはの梅か香

夕　梅

うめの花色はくれゆく軒端より香こそあはれとかよふゆふかせ
夕風のあかぬ木かけにたちくれて月もうつろふ袖の梅か香

夜　梅

梅花さそふにほひに面かけのたち枝ゆかしきよはのはる風
あけて見むあすの梢のおも影もよふかきまとににほふ梅か香

夜風告梅

梅さきてにほふと見しは夢ならで手枕すくるよはのはるかせ

月前梅

咲そめて月のたち枝の梅か香も袖にほのめく夕くれの空

風たえてかすむとはなき梅かゝもうつるはうすき袖の月かけ

はし居して月に見るよは咲花の梢もうつるそてのうめか香

さく花のおなし色なる月影もうつりてにほふそての梅かゝ

梅か香もおなし昔のかたみにておもかけにほふ春のよの月

行路梅

ゆき過てあかぬ梢をかへり見る袖にうれしくかよふ梅か香

すきゝつるうさなくさめて吹おくる情もふかき風の梅か香

水邊梅

猶あかぬ色香なりけり梅花をられぬ水にうつる木末も

梅移水

花の香も影こそ見えね春風にうつりてにほふうめの下水

よそにのみあはれとや見む梅花をられぬ水にゝほふ色香は

簷梅

よそにのみさそふ風にもあまりありて猶軒ふかくにほふ梅か香

里梅

吹さそふ花のにほひも絶間なくつゝく梅津の里の春風

咲つゝく梅津の里ははなれてもにほひ絶せぬ春風そふく

故郷梅

さきぬとてとふ人もなき故郷にたれをこてふの梅のはる風

とへはまつ袖にゝほひてふる郷のあるしかほなる軒の梅かえ

柳

春くれは道ゆく人も我かとのはひ入の柳はひいりてそ見る

ふく風ものとけき春の色見えてたえ／＼なひく青柳のいと

我かたに吹よる風もうちとけてたのむかひなく青柳の糸

はる風のふかぬ絶間もかたよりしなこりになひく青柳のいと

柳露

風ふけはみたるゝいとを玉のをにむすふもはかな青柳の露

さほ姫のねみたれかみの朝露にしをれてなひく青柳のいと

柳風

のとけしなかすむ末野に吹風もほのかに見えてなひく青柳

打なひく春の霞のたえまよりふく風見ゆるあをやきのいと

うちなひく色もかすみて吹風ののとけさ見ゆるはるの青柳

春風もなひくにつけてたえすのみふきやよるらむ青柳のいと

柳靡風

大かたは吹とも見えぬはる風になひくやなきのいとまなきまて

行路柳

のとけさの絶間も見えすはる／＼とゆくてにつゝく青柳の糸

水郷柳

水無瀬川なひく柳のいとにのみありてゆくせの風ものとけし

みなせ川山もと遠くふく風もたえ／＼見えてなひく青柳

水邊柳

水底になひく玉藻の數そひて川そひ柳はる風そふく

水邊古柳

ふちはせにかはるあすかの川のへにいく春へぬる青柳のいと

河邊柳

のとけしな岸の柳のいとはかり風に波よる春の川みつ

岸柳

うちなひくみとりうつりて水底に吹風見ゆる岸の青柳

岸ちかき柳のいとは川風のふきくることに波そよりける

霞

朝な〳〵霞たちそふほと見えて遠さかりゆく春の山のは

よもの山へたゝるをちのほと〳〵もよそにしられてたつ霞哉

山霞

うすくこき霞の色にをちこちのほともしらるゝ春の山のは

空たかく霞はたちもはゝからてけふりなからにこむるふしのね

いつとなくふる白雪も立こめてかすみ時しるふしの芝山

時わかぬ雪も春日は色きえて霞にうつむふしの芝山

吹上のはま風たえてうら〳〵と霞のころもきちの遠山

霞隔遠樹

へたてゝもおもかけはなほ峯の松見なれしまゝにたつ霞哉

野霞

もえそむる草のみとりの色はかり空もはつかにかすむ野へかな

野外霞

朝かすみ草のはつかにたちそめて空もみとりをいそく野へ哉

かすか野やうつみし雪はきえて又霞にこもる春のわかくさ

鶯もまゆる若菜もたちこめて春をしめ野の朝霞かな

野径霞

吹わくる霞の袖もたえ〳〵にゆく人見ゆる野路の春風

水郷霞

水無瀬川ありてゆくせも見えぬまて春をふかめてたつ霞かな

さし出る朝日の山の峯かけてかすみわたれるうちの川はし

江上霞

なにはかたもゆる入江のあしかひに空もけふりてたつ霞かな

海邊霞

見るからうちにこきゆくふねもしら波の跡なくかすむ春の海原

見わたせは汲みたれて白波の花すりころもうら風そ吹

浦霞

春は又あはとはるかにあはち島ふかき霞のなかにたちけり

あやなくもへたつる春の霞かなおとはするかの田子の浦波

餘寒

若菜つむ袖にはあらて春日野や猶白たへに雪そふりくる

うち出し波もこほりにたちかへり又さえわたるはるのやま川

餘寒風

まちわたる花のしるへのそれならて雪ふきさそふはるの山風

つれもなく花まつ空に猶さえてゆきふきちらす春の山かせ

餘寒月

さむけしなおなしおほろも霞にはあらぬ雪けの春のよの月

春曙

花鳥も一夜へたてゝあさ霞またぬつらしき明ほのゝ空

水郷春望

みなせ川春やむかしのあはれまてたちそふさとの夕かすみかな

春月

春のよはかすまぬほとも雪けにてくもるおほろの月のかけかな

くれふかき春の霞に山のはもおほろに見えていつる月影

さためにふかきあはれはおほろけにあらぬおほろの春のよの月

おともなくふけゆく影ものとかにて人たのめなる春のよの月

社鳥のあかぬまはれもくるゝ夜は月にこゝろのうつる春かな

霞中月

山端はそことも見えす春ふかくかすむそらよりいつる月影

てりもせすくもりもはてすたか峯に光そかすむ春のよの月

春の夜のかすみも老の涙かといくたひ月にめをしほるらむ

かすみては心つくしも一しほの松の木のまのはるのよの月

雲はれて猶も霞のかゝるとはしらてやなきし月の夕かせ

春曉月

立こめにふかき霞のなか〳〵にひかりさやけきありあけの月

きぬ〳〵の涙にくもるさほ姫のかゝみやかすむ有明の月

河春月

清瀧やかすむおほろの影見えて川の名しらぬ春のよの月

水郷春月

春のよは月のかつらの里人も風をやたのむ霞もなかりに

面影も昔にかすむみなせ川月もこゝろやありてゆくらむ

歸雁

たこゝあたゝくこむ秋もはるかなるとこよにかへる雁のわかれち

はるかなるとこよにかへる雁なれはなかき春日に思ひたつらむ

色になる花のうきよと見すてゝも昔にやはたかぬ春の雁かね

花の色に心うつさてゆく雁もかへるあた名やそらに立らむ

見すてゝも猶やとまりて花さかり心はゆかし春のかりかね

さくらさく峯とひこえてゆく空やなく〳〵かへる春の雁かね

花にたにしはしめかれてゆくかたのなかめられぬる雁のわかれち

名のみたつ空の霞の關こえてかけたにとめぬ春のかりかね

遠歸雁

見えまゝにあまたつらねてゆく雁も雲ゐにきえて數すくなき

こし秋の雲ゐのおもかけもかすみに見えてかへるかりかね

霞中歸雁

そこともなくかすむゆくへも春の雁聲するほとはなかめられつゝ

かすますは遠さかるとも今しはしゆくへや見えむ雁の一つら

立まよふ霞のうちも故郷にかへるこゝろやはるのかりかね

なく聲は霞のそこときこえてもゆくかけ見えぬ春の雁かね

曉歸雁

見すてくることしの秋もかへるかりまけれはあくや有明の空

夜歸雁

ゆくまたに見るへきものを月またてかへるか雁の夕やみのそら

月花の別ををしと夕やみのそらにやかへるはるの雁かね

人しれぬよのまとたのむはたの雲になく音をしのへ春の雁かね

月前歸雁

かへるかり峯とひこえてゆくかけもほのかに見ゆる夕月のそら

かすむよは月によこきるほとはかりゆくかけ見ゆる春のかりかね

海邊歸雁

まちこひむ秋もはるかに大伴のみつのはまへをかへる雁かね

住よしと思ひもしらて故郷にかへるか雁のはるのうらみへを

燕

見わかねと軒のふる巣を尋ねきてすめるやこそのつはめなるらむ

春雨

くれふかき霞かくれにふり出ておともしのふの軒の春雨
音たてぬかすみの空の春雨もふるとはしるき軒の玉水
なかき日とふるもはるゝものとかにて空にいそかぬ春の雨かな
音たてゝふるとはなしに板ひさしひさしくなりぬ春雨の空
さほ姫の春のなかめの袖ぬれて空にしをるゝ夕霞かな

夕春雨

雲ふかみくれぬと見えて猶しはしゆふへほとふる春雨の空
春雨もくらしわふへき長き日とさすか夕をいそく空かな

閑中春雨

はるさめのふるも心にかなふかな世のおとつれをいとふすみかは

早蕨

花をまつ山のさくらの木本にをりもたかへすもゆるさわらひ
山ふかき軒のつま木の下わらひけさをりそへてをりをしる哉

野遊

糸ゆふの長き日くらしみやこ人こゝろもそらにあそふ野へかな

遅日

立いてしけさもきのふのこゝちして山わけころも春そ日なかき
こえて又けさ見しはかり峯とほくへたてきにけり長き春日は

遊絲

春くれは心もそらにうちとけてなかき日くらしあそふ糸ゆふ
たえ／＼になひくを見れは吹風もあるかなきかの空の糸ゆふ
さゝかにのそれにはあらて長き日のしるしとかゝる空のいとゆふ

呼子鳥

聲たえす人よふこ鳥なくなるはなれもみ山のおくやさひしき
おくふかみ人もこすゑに聲たてゝ山のかひなくよふこ鳥かな

雲雀

かすみよるおちくるほとも夕ひはりそらにしられて聲そちかつく
くれゆくをなれもをしとや思ふらむ心も空にひはりなくなり
なか／＼におちくるまゝになく聲はたかくなりゆく夕ひはりかな
空たかきほともしられて鳴音さへたえ／＼かすむ夕ひはりかな

待花

うら／＼とのとかなる日はなか／＼にしつこゝろなく花そまたるゝ
さく花を朝夕見まくりほり植てまつもえならぬ庭櫻かな
さくら花面影はかりたちなれてまつにつれなき庭の木本
待わふる心の花にいそかれてさかぬ野山をわけくらしつゝ
春の日ののとけき花の心とてさくをいそかぬ山さくらかな
待わひて猶そうらむるかきりあれはさかぬも花の心ならねと
かきりありてさかぬをしひて待人の心そおきそ山さくら花
ほとなさを思へはまつにつれなきもなか／＼花のなさけなるらむ
はかなしやまつにとくさくならひともきかぬさくらにつくす心は
をしむにはよしやとまらてつらくとも待にとくさけ山さくら花

待山花

けふも猶さきこそやらね面影はたちていくかのみよし野の花
今いくかありてゆくせに色ふかきかけをみなせの山さくら花

雨中待花

さひしさも花まつかたにわすられてさくやとたのむ春雨の空

尋　花

櫻花さきぬと見えてたつねいる山くちしるくにほふはる風

たつねすはいかてかみわの山さくら霞かくれにゝほふはつ花

咲そむるけふ尋ねきて人はまたわけ見ぬ花をみよしのゝ山

尋遠山花

尋ねこむときてもまたはゆくまにも遠山櫻ちりもこそすれ

折　花

めつらしき思ひもそひてさくら花咲そむるよりあかぬ色かな

咲そめてまつにつくしゝよの人のこゝろをはるの山さくら花

庭さくら今咲そむる色見れはわか朝戸出を花もまちけり

花の哥とも

咲そむる花も雲かとみよしのやあやまたれつる心ならひに

さほ姫はさくらはかりと見しほとに人のこゝろの花もそめつゝ

山さくらまつにかこちしなかき日も花見るけふそうれしかりける

まつほとの心つくしも山さくらさきてかひある花のいろかな

我なからあやしきまてに山さくら思ふか花を春の此ころ

山さくらこくもうすくも見る人のこゝろにゝほふ花の色かな

さほ姫もさくらの花はわれなからそめてかひある色と見るらむ

めつらしき花とはなしにたくひなく色香めてたき山櫻かな

かくはかり花のすかたのよにゝぬもちきりことなる櫻なるらむ

ほとなきものとけき春の日数にてさすかうれしき花盛哉

うきものとさのみいとはし春霞へたつる花も風そ見せける

立かくす霞そつらき山さくら見らくすくなき花の盛を

ふかくのみ心を入てそむるより花やうきよの色を見すらむ

まかはすは何にさきちる花の色をかけてしのはむ峯のしら雲

きえかての雪とは猶もさくら花梢なからに見るよしもかな

見る夢も猶外ならて花にのみたゝ明くらす春のこのころ

さくら花ちるてふことは夢にたに思はて見はやさよの手枕

峯の雲ふもとの雪と咲ちるもよにたくひなき山さくら哉

さきてとくちるこそあかね山さくらおもふとなき花の色かな

さきなはとちきりし宿のあまたあれはわすれぬ花もとはにちりなむ

さけはちる花のさか野をきて見れはあらしの山のふもと成けり

さそはるゝ心なりせは吹風をいとふも花はつらしとや見む

朝　花

咲そめてよのまの夢のまさしくもにほふ朝けの庭さくらかな

日影さすかたへはわきて花の色もまさるあさけの庭櫻かな

さくら花しはし見さりしよのほとの思ひもそひてあかぬけさ哉

夕　花

吹風のくれぬにほひにおもかけもさなからのこる山さくらかな

日数なきおのかさかりとさすか又ゆふへいそかぬ花のいろかな

なかき日に猶夕くれをのこしてもあかぬさくらの花の色かな

ちりぬらむよのまもしらて山さくらあすをそたのむ花の花暮

夢見花

尋ね見むあすの野山にさきたちてにほふ夢路の花のおもかけ

さけはかつうつろふ花を思ひねに見るもほとなき春のよの夢

月前花

さくら花月に見るよは大そらをおほふかすみの袖もうらみし

霞中花

吹風のなきたるけさは色よりもなか／＼うすくかすむ花の香
山鳥のをのへの花の夕かすみへたてゝもはてすにほふはるかせ
みわの山かすみかくれに咲花の心もしらすにほふはる風

雨後花

きらてたにはるゝなかめのうれしきににほふ雲間のはつさくら花

花交松

深みとり木間にさける花の色も今一しほのはるの松かえ

盛　花

待をしむ心わすれてさく花を見るやさくらのさかりなるらむ
まちをしむ心つくしも山さくらしはしわするゝ花さかりかな

花滿山

よし野山さかりしられてふもとまておりゐる峯の花のしら雲

花滿山川

雲とさき波とうつりこよしの山峯も川せも花そひまなき
よし野山雪には見えし川せまてさきうつみたる花のしろたへ

花似雲

わけこえし高根の花もかへり見て夕雲かとそあやまたれける

花　雪

咲おもる梢たわみて山さくらしたをれぬへき花のしら雪

花似雪

ふりつみし雪の朝けの面影もにほふ木との花さかりかな

翫　花

見てたにも老をわするゝさくら花かさゝは千代の春もへぬへし
山さくら夢にもさきて此ころはよるひるとなく花をこそ見れ

思　花

さくら花おもふ心のゆくはかりゆきても見はや野にも山にも

折　花

をしと思ふ心もあかぬ色香にはまけてそたをる花の一枝
山さくらあかぬ心のよきひとや花もゆるさむたをる一えた
手折とも何かやつれむひと枝はゆるせ千もとの花の山もり
一枝にやつそはかりの花ならは何かはをらむあかぬさくらを
かへるさのうきなくさめて見ぬ人のためのみならぬ花の家つと

花下忘老

春とにかくわすれつゝ花を見は千年も猶そおいせさるへき

依花客來

あひにあひてめつらしきかなまれにとふ人まちえたる庭の初花

花下送日

かり衣たちもかへらてよしの山日數かさぬる花の木のもと

隣家花

色も香もへたてすなからわかものといはぬはねたき花の中垣

水邊花

むすふ手にあかぬのみかは見る花のかけさへにこる山の井の水
われなからえならぬ色とうつろひて花も心やゝり水の影
咲かゝるさくらか枝にかくれて色香もふかくたきつ山水
さくら花そこには影のうつるとも水のあわとはうかはすもかな

行路花

山さくらしるもしらぬも立よりて道のゆくての花の木のもと
たちよれはいそくゆくへも山さくら見るにわするゝ花の木本

なか／＼にさかりそなしきよそに見て過ゆく道の山さくら花

山花

いかならむふもとの花もよしの山なほおくふかくにほふ色香は

さかぬまそそれかとも見しよしの山花はまかはぬ峯のしら雲

吉野山なきたる空にいちしるく朝ゐる雲や櫻なるらむ

みよしのや分いるまゝに山さくら花になりゆく峯のしら雲

ふもとよりまつ咲そめてよしの山たかねにうつる花のしら雲

芳野山いくよの春をかさねきてやへたつ雲と花の見ゆらむ

花ゝかり心もそらにわけくれて雲にやしかそみよし野の山

あすまたて見はや夢路によしの山けふわけのこす花の行末

ちるまてはかゝらて見はやよしの山いくかもまたぬ花のさかりを

にほひのみ風にたくひてかつらきやよそにうつらぬ花のしら雲

はつ瀬山木間のさくら見えそめてかすむひはらにはる風そふく

立まよふ雲もかをりていこま山花のはやしにはる風そふく

深みとりみらくすくなく波こえて花咲にほふ末のまつやま

わけきつるふもとの雲のおひ風も袖にかをたつみねの花の香

暮山花

くれふかく風もにほひてよしの山みねにゆふゐる花のしら雲

かへり見る峯に夕ゐるしら雲やあかてわかれし花の一むら

山さくら又白雲とみねとほくよそにへたてゝかへる夕くれ

かへるさは又見ぬかたのこゝちしてゆふへさきそふはなの山道

夕はえの花を見すてゝかへるさは心もくるゝはるのやまみち

名所花

花さかりよそめのみかは分きてもなほ雲ふかきみよしのゝ山

しら雲の中にそおつるよしの川峯のさくらのかけうつるころ

よし野川高根のさくら影見えて雲の波ちをくたすいかたし

關花

さきしよりゆきゝとゝめてあふ坂やとさゝぬ關も花そゆるさぬ

關路花

こえかてにゆきゝとゝめて吹にほふ花そせきもるあふ坂の山

のる駒も猶や心のとまるらむはなにすゝまぬあしからの關

海邊花

うちよする磯山さくら吹からになみの花さへにほふうら風

閑居花

こぬ宿は花に人まつくるしさもしらてのとかに見るさくら哉

ふりにける身のかくれかに咲にほふ色あたらしき山櫻かな

はかなしやおなし色香も人とはぬ宿にさくらの花のちきりは

山家花

花にのみ山さくら戸を明くれてさひしさしらぬ春の此ころ

見せはやと花のさかりはさひしさにあらて人まつ山かけの庵

さけは又人めまたれて花ゆゑの思ひそたえぬ春の山さと

旅宿花

たひ枕しのふ都の夢ならて見つゝなくさむ花の下ふし

花下旅宿

とくおそくにほふひかりに明くれていとゝみしかき花の下ふし

花主

うゑて見る花のあるしの心まてよそめゆかしき庭さくら哉

庭さくらたゝ一枝もなか／＼に花のあるしはえこそたをらね

[illegible]

かぞれ[illegible]日数はなりはさく花の山わけころも色そうつらぬ

こ[illegible]らちりけかり色そめて花すり衣たちかへらはや

[illegible]

かぞ[illegible]の下ふく木かゝみ日数をうつせちりもかゝらて

[illegible]の[illegible]より花のかたみやちりかゝるらむ

[illegible]花の[illegible]みつからもさかりすきぬる影やかなしき

[illegible]

[illegible]水の[illegible]影たえてあらしにうつる花の色かな

[illegible]

おもかけに[illegible]見る花も跡たえにさそふ嵐の夢のかよひち

[illegible]山櫻

花[illegible]けふはわすられて風おもしろきしかの山こえ

落花[illegible]

さく花をあかぬ心にまつたひにおのれとちらす枝のうくひす

[illegible]せて植しかひなき青柳の糸

[illegible]ありてや櫻花嵐の山ににほひそめけむ

なさけなき色香そやかてさくら花ちりゆくけふのつらさ也ける

[illegible]にけれ山さくら思ふ心を花やしりけむ

[illegible]花こゝろもなるゝまもなくちる櫻かな

[illegible]ふの花やよしの山けふ故郷の雪けなりけむ

[illegible]思ふと花さそふ風の心になり見てしかな

[illegible]は千代と思ふにも年のわかれにまさるけふ哉

[illegible]になりてたることのときはたくひのなきそかなしき

山さくら命にかへてをしめとや見はてぬ夢と花のちるらむ

いとゝよのうきめを見せて人心さそひかほにもちる櫻かな

まつにとくさかぬのみかはをしむにもとまらてつらき山櫻哉

ちる花のわすれかたみの面影に雲ふく峯の風もうらめし

見し花のおもかけのこる梢にもなほいとはしき春の山風

目にそへてのこる梢のおもかけもうすき花さくら色そきえゆく

ちる花のわすれかたみとなりにけりそれかとも見し峯の白雲

跡もなく峯のあらしにさそはれて花もきのふの空のうき雲

いつまてか思ひたえなて峯の雲跡なき花をかけてこふらむ

惜落花

さくら花ちりかひくもる別路にをしむ心そゆくかたもなき

をしみてもとまらぬ色のふかくのみ身にしみかへる花のわかれち

暁落花

てりそひて有明の影もきえかてに夜ふかくつもる花のしら雪

朝落花

さめやらぬ夢かとはかり庭さくらちりぬる花にたとる朝戸出

夕落花

花さそふあらし色もくれはてゝふりしくさくら雪とたに見す

夜落花

山櫻見はてぬ夢のこゝちしてよのまの風に花そ跡なき

夜思落花

よるもなほ心みたれてちる花のおもかけ見ゆる夢の手枕

月前落花

花さそふ高根を出る影見れはあらしにくもる春のよの月

風さそふ花の梢にうつろひて月のひかりもちるさくらかな

月かけも梢あらはにうつらひて花の色そふにはのおもかな

風前落花

風はやみおほふ雲の袖なからそらにみたれてちるさくら哉

落花随風

雪とたにつもらはちるもよしの山あらしにたくふ花そつれなき

ひたふるにまかする花の心とてちりゆくさへも風のまに〳〵

雨中落花

をしみえぬ心もそらにきえかへりあらしにまよふ花のうき雲

うつもる〻こけのみとりをちる花の梢にいそく庭のはる雨

落花如雪

よし野山花まちとほに雪さえし面影見えてちるさくら哉

咲つ〻く枝にあらしの跡見えて雪ちりか〻る花の木のもと

おもしろく雪とふるにも山さくら思ひふかむる花の色かな

庭落花

ちりはてとさすかうらみしく庭かてになかき日をふる花の白雪

君もやとまち見し花はきのふにて跡なきけふの庭のしら雪

雪とたに見せはや庭の花さかりあすよりのちも人のとへかし

花ちれは心なからにうつろひてまたれし人もいとふ庭かな

さくら花ちりしく庭に鶯も跡いとへはやひとくとはなく

ちりつもる庭にあらしの跡つけて又さそひゆく花のしら雪

庭上落花

ひとまかりありこの夜ら庭の面になかれふりせぬ花いしら雪

よそに又ふきやさそふとちりはてし花にもいとふ庭の春風

水上落花

水のあわと波にうかひてさくら花いと〻あた名のたちやそふらむ

行路落花

立よれはなか〳〵袖にはらひあへす雪とふる野の花のした陰

山落花

吹まよふあらしや花をさそふらむしら雲さわくみよしのゝ山

ふきすさふ峯の嵐のほと見えてふもとにふかき花のしら雪

ちると見てかへる山路の衣手につもるもうれし花の白雪

河落花

山川や岩ねの花の雪けにもたちこそまされ水のしら波

よし野川日数もはやくうつろひてよとまぬ水に花そなかる〻

山家落花

のかれえぬ花のうきよは都にも猶ちりまさるみよしのゝおく

すみわひぬこゝもうきよとちる花のゆくへゆかしきみよしのゝ奥

もろこしにときけはよしのもありときくちる花のよをこきてのかれむ

故郷落花

故郷は人めなからと思ふにもこゝろほそしやはなのわかれも

けふも猶きえすはあれとも花の雪ふりにし里はとふ人もなし

花殘枝

待人はあすかとひきていかに見むけふたに雪とふる里のはな

なか〳〵にさひしかりけりおのつからちりのこりたる花のこすゑは

菫

花見れはたかふる郷のかきねそとむかしすみれの人もなつかし

苗代

せきいる〻たみの心もゆく川の水ゆたかなるを田のなはしろ

思ふこと昔代小田にゆく水たこゝろのまゝにせきていれつゝ
しめはふる今より水もゆたかにてちたのみまさる田の昔代

躑躅

花も又今一しほと色そふるゆふ日をまつの下つゝしかな

欵冬

山吹の花の影見る川水やうつろふはるのかゝみなるらむ

夕欵冬

こえゆかてしはしまかきの山ふきに夕くれのこる花の色かな

籬欵冬

夕くれの色にゝほひてゆく春をとむるまかきのやまふきの花

里欵冬

行春のをしさもしらし山吹の花見てくらす井手の里人
花ちりし春のゆくへを尋ぬれは里のかきねにのこる山ふき

故郷欵冬

とふ人もなき故郷のかきねとてこたへぬ色にさける山ふき

杜若

かきつはた水のみとりに紫の色こきませてへたてやはする

池杜若

池水の波の花さへむらさきの色にさきたつかきつはたかな

藤

立かへり見てたにあかぬふち波になほゆく春はまたれきにけり
たしめともまたぬ春を色にいでてうらむらさきの藤浪の花

松上藤

十かへりの花のためしの千代かけてにほへときはの松のふち波
咲かゝる花のけしきもことに木よりたちまさりたる松のふち波
濃みとり見らくすくなくふち波の花にかくるゝいその松かえ

暮春

待をしむ心つくしの花の邊に春の日かすもうつろひにけり

暮春霞

おしまれさへたちもとまらて絶々にくれゆく春の夕かすみかな
立こめて春のわかれのゆふ霞くるゝをいそく空もうらめし
さほ姫の春のわかれの夕霞そてふる山のいろそくれゆく

暮春月

ゆく春の霞の袖のわかれちにのこるもうすきあり明の影
はかなしやのこる光もたえ〳〵になりゆく春のあり明の月

暮春鳥

たかくのみしたふひはりの聲すなり空にや春のくれてゆくらむ

暮春鶯

鳴とめぬ花にもこりす行春のわかれをしたふうくひすの聲

三月盡雨

いつしかとはれ間まつまにけふははやくれゆく春のなかめをそする
つれ〳〵の春のなかめもけふのみと思へははるゝ空もまたれす
けふのみと思はぬたにもはれやらて猶袖ぬらす春のなかめを

夏部

首夏

けさ見れは跡こそなけれ春霞きゆるや夏のへたてなるらむ

首夏雲

夏かけて猶そ咲そふゆく春にたちおくれたるふち波の花
なつかけてにほふふち波立かへり春のものとて猶しのはまし

更衣

夏衣たつやならひをたかへしとをしさもすてゝぬきそかへつる
花染のあかぬたもとを夏衣うらなくたれかかへはしめけむ
いとひこし風もまたれて心さへうつれはかはる花染の袖

朝更衣

立かへむけさもおきうし花衣きつゝなれにし袖のわかれに

羈旅更衣

都思ふ心はけふもうつろはて袖のみうすき夏ころもかな

餘花

色も香もおくれてさかはおそさくら一木をかくはあはれとも見し
名にしおはゝいなてふこともおそ櫻さえり久しき色にさかなむ
色はえてしける青葉のなか〳〵に心そめますおそさくらかな

尋餘花

尋ねゆく山へにのこる面影やおくるゝ花のしるへなるらむ
みわの山霞かくれや尋ねまし風にしられぬ花もありやと

山餘花

咲のこる一木の花に立そひて又みよしのゝ春のおもかけ

遲櫻

ちりしける雪ふみわけてみよしのゝおくれてにほふ花を見る哉

新樹

花の雲跡なくきえて夏木立みとりにはるゝけさの山のは
さきましゝそれかと見えて夏木立青葉にのこる花の面影

きのふこそ花はちりしか庭さくらにはかにふかくしけりぬ
しけれるもさくらか枝と思はすはいかにいふせき青葉ならまし

新樹風

青葉にも猶しのへとやちる花の面影見する露のあさ風
いとひこし風もなつかし庭さくら花の梢もかはる青葉に

庭新樹

夏きてもしける青葉に風よしと猶たちなるゝ庭の木のもと
花ゆゑの人めはかれて青葉のみしけくなりゆく夏のにはかな
あかず見し花の枝とも夏木たちうとましきまてしける庭哉

山新樹

わかれすよかすみはれても夏木たち空のみとりにつゝく山のは

雨中新樹

さらてたに雨のふるやにいふせきにおひそふ軒の夏木たちかな

卯花

さきしよりやみも月夜もへたてなく光さやけきかきの卯花
照月はもらぬ青葉の木かくれにかけをうつしてさけるうの花
くもるともふるともなくて庭の面につもれる雪やさける卯花

籬卯花

卯花のさけるまかきも時しらす雪ふりつもる山とこそ見れ

閑居卯花

とはれしとのかれこたれかすみぬらむよを卯花にかこふ庵は

里卯花

夏きぬとほすや衣の白たへに色さきまかふさとのうの花

海邊卯花

見わたせはまかきのしまの卯花に咲つゝきたるおきつしら波

卯花如月

さきしよりよひ暁のやみもなし卯花月夜きよきかきねは

木間よりもりくる月のおもかけをうつすゆふへの庭のうの花

葵

千代かけてたらぬかさしとあふひ草そのかみ山におひはしめけむ

待郭公

時鳥いかにしのひてかくはかりおもふにまけぬはつ音なるらむ

一聲もきかていくよかほとゝきすまつをならひにあくるしのゝめ

かくはかり思ふはつ音を心なくしのふいは木の山ほとゝきす

なれも又空にしのひて時鳥たゆむ心のほとやまつらむ

むら雨もそらたのめなるならひとはいつよりなりし山時鳥

郭公山のかひなく立ぬれてまつもいく夜のあかつきの露

ほとゝきす雲のまきれのたのみたにつれなきよその村雨の空

まつよりや思ひあかりて郭公雲のよそなる一こゑもせぬ

月前待郭公

ともにやとまつにつれなく有明の月のみいつる山ほとゝきす

影すみて月もこてふにゝたるよはいとゝまたるゝ山ほとゝきす

對月待郭公

あはれそふならひもしらて時鳥月のためとや猶しのふらむ

時鳥まつよつれなきうらみさへ空にのこりて月そあけゆく

與女待郭公

郭公なく一聲をもろともにまつもはかなきねやの手枕

人傳郭公

われも又いつかかたらむほとゝきす人つてにのみきゝわたりつゝ

かたらすはまたしきほとゝ思ひてもやま時鳥人つてもらし

尋郭公

時鳥日數かさなる山こえてたつぬるかひもなかぬつれなさ

郭公

ちきりあらはおのかはつ音も時鳥ふりいてゝなけむら雨の空

一聲はしのふならひをわすれてもさたかにもらせ山ほとゝきす

さよふけてもらすにそしる郭公またてはきかぬはつ音なりとは

さよふかくまたすはきかし鳴聲も月のはつかのやまほとゝきす

郭公それかあらぬかむら雨の雲のまよひのゆふくれのこゑ

ほとゝきすきかて明ぬる夏のよをなく一聲とたれうらむらむ

一聲は夢かうつゝか待わひてたゆむまくらの山ほとゝきす

時鳥たゝ一聲と思ひしはまたきかぬまのこゝろなりけり

遠さかる今一聲そなか〳〵にそれときゝつる山ほとゝきす

おとろかす夢のゆくへも一聲に跡なきよはの山ほとゝきす

待わひてぬるよのゆめを時鳥かこちかほにもおとろかす哉

むら雨のたのみは過て時鳥おもひたえぬる空になくなり

郭公やとりしてなけわか袖のなみたもかさむ軒のたち花

たち花にやとるとならはとことはになけやさ月のやま郭公

有明の月もかくれてほとゝきすなきつるかたはむら雨の空

をしめとておとろかす音もさやかなる月のいるさの山時鳥

きく人の袖のなみたも紅にふりいてゝなくほとゝきす哉

ねもやらすまたれし聲も此ころは夢おとろかす山ほとゝきす

曉郭公

あり明の月にしのはゝ時鳥おなしつらさの名をやのこさむ
有明の月をのこしておのれまついるもつれなき山ほとゝきす
郭公雲のいつくの一こゑとなかむるそらに月そあけゆく
つらからぬこゑはなか〳〵有明の空にのこらぬやまほとゝきす

曉郭公

きほひあへす今一聲は明はてゝ月におくるゝ山ほとゝきす

夜郭公

さむるまもあらつゝをかけて時鳥なきこそわたれ夢のうきはし
くるゝより曉かけていく聲となくやさ月のやまほとゝきす

月前郭公

まさりゆく光にならへみか月のこよひほのかになくほとゝきす
郭公また里なれぬはつ聲をうきよのほかの月になくなり
いでいるもおのかさ月の影とてやなきてともなふやま時鳥
もろともにいてゝなく音のさやけさも月ておくれぬやま郭公
ほとゝきす涙にかけやくもるらむ月になくねのかこちかほなる
いつるよりいるまてきけと時鳥なほあかつきのやまのはの月
影さらすよすから月の白玉になく音あへぬくほとゝきす哉
夏木立月のかつらのかけにきて鳴音もしけき山ほとゝきす

雨中郭公

一聲の涙そゝきてむらさめも過ゆくよひのほとゝきすかな
いふせさをなれもわひてや五月雨のはれぬ雲ゐになく時鳥

遠郭公

山のはを猶いてやらてほとゝきすまちとほにのみ聲そきこゆる
里なれむほとも雲ゐのこゝちしてなほこゑ遠きやま時鳥

此里はなかてやすきし郭公今ひと聲もをちかたのそら

山郭公

いとゝしくまたれこそすれはつ聲をきゝしのちせの山ほとゝきす
なく聲もよるこそまされつまこひの心のさかのやまほとゝきす

杜郭公

なきぬへきけしきの杜の木かくれにやかてほのめく時鳥かな

河郭公

よしの川岩波たかくなく聲はうちもまきれぬ山ほとゝきす

里郭公

時鳥まつくるしさも今はなし里をはかれす鳴わたるころ

聞郭公

ほとゝきすまつに心のたゆまねはほのかなる音もきゝそたかへぬ

郭公遍

きゝもらす人もやあると里ことになきかへりなくほとゝきす哉

旅宿郭公

時鳥みやこの夢にかへてまつたひねとしるやよはの一こゑ

郭公歸山

都思ふよはの涙をおのか音にかりねとふらむ山ほとゝきす
おそく出しつらさのみかはをしむにもとまらてかへるやま時鳥

早苗

なかき日をたのむのさなへおこたらはとりやはてむ千町八千町

夕早苗

ほともなき家路もしるくくるゝまてさなへとるなり里の垣つ田
くれゆけは葉末の露もを山田に月をまちとる夕さなへかな

菖　蒲

あやめ草猶ふるさとやしのぶらむ玉のうてなにふくも露けし

深き江におひてあやめの草の露玉のうてなにかゝるけふかな

けふも猶軒のあやめのかけ見えてひきつともなき庭の池水

あやめ草かりふくけふはしつかやもさ月の玉のうてなりけり

繚菖蒲

かりふきて玉のうてなもしつかやもあやめわかれぬけふのゝきかな

けふもなほあやめわかれぬ軒端にてふくもはかなき草の庵哉

旅宿菖蒲

かり寐するあやめの草の枕にはふるさとしのふねさへかけつゝ

盧　橘

心あらはとこよにゝほへいにしへをしのふにあまる軒のたち花

夜盧橘

見しゆめの昔の人の袖の香にかをるねさめの軒のたち花

ふりしよをしのふ枕の夢よりもさたかにゝほふ軒のたち花

盧橘驚夢

にほひきてさめしゆめちのさよ衣むかしにかへす軒のたち花

にほひくる風に昔のゆめさめてしのふもとほし軒のたち花

繚盧橘

よゝをへてしのふ昔をほとちかくにほふもうれし軒のたち花

古宅橘

くちもせすむかしなからのにほひにて故郷しらぬ軒のたち花

五月雨

晴間まつ思ひもたえてけふは又ふりこそまされさみたれの空

をやみたになかめいふせく明くれてはれぬ日数をふる五月かな

五月雨雲

さみたれの雲の衣は夏なから立かさねても見ゆるそらかな

古宅五月雨

五月雨のふるやの軒の板ひさしひさしくなりぬくちやはてなむ

庭五月雨

けふいくか庭はさなからやり水のなかれてはれぬ五月雨の空

日をふれは池のみかさのまさこちに波よせかくる五月雨の庭

池五月雨

池水のますみのかゝみくもるにそふるほと見ゆる五月雨の空

五月雨にまさりのみしてなかれいてぬ池のみかさはかきりしられす

江五月雨

ふしのまもをやみなくふるさみたれに入江のあしも波の下くさ

河五月雨

ころも川日数かさなるさみたれにみかさもたかく波そたちける

日をへつゝふるの川はし波こえてみかさそたかき五月雨のころ

螢

夏の夜もゝゆるほたるの心にはなかしとのみやこかれわふらむ

野　螢

夕風の露ふきはらふ草むらにのこるひかりやほたるなるらむ

とふほたるならぬ思ひのたくひとやふしのすそ野にもえわたるらむ

草ふかくのこる思ひやかよひきて野となる里にほたるとふらむ

原　螢

草のはらたか行末を尋ねきて思ひこかるゝほたるなるらむ

岡螢

とふほたる音にはたてすとも岡にさゝのよすからもえあかすかな

澤螢

夏の夜は野澤の水もぬるむならむあまたほたるのもゆる思ひに

水上螢

ほとせはみうつるとすれと山のゐに見る影あかすゆくほたるかな

河螢

とふほたるいはぬ思ひのかけ見えて花の跡とふ井手の玉川

よる／＼は思ひこかれてあまをふねはつせの川にとふほたるかな

はるゝ夜のほしかと見えて久かたの天の川原にとふほたるかな

天川かよふ螢はたなはたのおもひこかるゝたまかとそ見る

湊川たえぬおもひのゆかりにもなかるゝせゝにとふほたるかな

なみた川ふかき思ひにもえわたるゝせゝのほたるやみつの水上

池螢

いひ出ぬおなし心と池水になみたちさらすとふほたるかな

池水のそこまてゝりてよるひかるたまもはすかるほたるなりけり

海邊螢

とふほたる思ひありその岩かねに波のよる／＼たまそくたくる

江螢

とふほたるもゆるおもひのふかきえにあしのねをのみ何しのふらむ

あしの葉に光みたれて露くらきよるの玉江はほたるなりけり

ゆきかへりなにはのあしのよもすからおなしほり江にとふ螢かな

瞿麥

やとりして朝露ふかき色も見むくるゝまかきのやまとなてしこ

鵜河

よしの川はやせならすはうかひ舟さしくたすまやなつのよの空

待夏月

ほともなくあけぬとならは山のはをいつるもいそけ夏のよの月

はやくのみあくるならひを夏の月なとか待まの久しかるらむ

夏月

しつかやの軒端みしかき夏のよは月のひかりのもるほともなし

見る影のふけゆくまゝにすゝしさもまさりてをしき短夜の月

みしかよを空にしれとや夏の月雲間なからに影しらむらむ

夏曉月

月も又みしかきよをやをしむらむ明ゆく空に影そのこれる

ほとなさをいかにかこたむ夏のよのふけゆく空にいつる月影

名殘あれやうつろふ影のすゝしさも袖にきえゆく有明の月

夏月涼

影すめは空ふく風もよそならて袖にすゝしき夏のよの月

久かたの月のかつらの夏木たちすゝしきかけになるゝよな／＼

庭夏月

影見えて雲ゆく月のとゝしてもまかきにこもる庭の夕露

夏草

ふみわけし人めはかれて跡もなくしけりそまさる庭の夏くさ

道もなく庭の夏草しけりあひてすゝしき風もかよはさりけり

野夕夏草

里人のゆきゝ絶ぬる夕くれは露こそむすへ野路のなつ草

杜夏草

しはしとて立よるかけも夏ふかくおひしけりたるもりの下草

蚊遣火

くれゆけはきそひかほにも宿とにたつるかやりの夕けふりかな

かやりたくしつかふせやのいふせさも空にしられて立けふり哉

なひきくるけふりの末もいふせきをたく宿さそな賤かかやり火

夕立雲

それとたゝ山のはつかに見ゆるよりけしきことなる夕たちの雲

見る袖もすゝしかりけり夕たちの雲のころものかゝるやまのは

待こひていく里人かあふくらむゆふたつみねの雲の一むら

遠夕立

吹風も見わたす雲のほとはかりほのかにかよふをちの夕たち

野夕立

ふるほとはをしかのつのゝつかのまもなつ野すきゆく夕立の雲

水鶏

猶いかにはやくあけよとみしかよの天のとたゝくくひなるらむ

夕顔

かくはかりえたらぬ花のしつかやにさくもあやしき軒の夕かほ

吹かゝる花をもやかてゆふかほのまかきえならぬ夏の山さと

垣夕顔

しら露のかゝるかきねをたよりにてさくもはかなき宿の夕顔

蓮

大かたの露のひるまもしら玉のみたれてたえぬ池のはちす葉

ふきわたす風の跡より波こえて又も玉ゐるはちす葉の露

夕風のみたれぬはかりふき過て白玉ゆらくはちす葉の露

玉ならて風にみたるゝすゝしさも秋とあさむく蓮葉の露

はちす葉にやかてつゝまはちりもせしとりてや見まし露の白玉

池蓮

底きよき池の心をにこりにもしまぬはちすの色に見せけり

はちす葉の露をは玉とあさむくもみのりの池のこゝろなるらむ

池水のにこる此よと思ふよりこゝろやかくるはちす葉のつゆ

夏夜

夏の夜はなく一聲をほとゝきすまつとせしまにあくるしのゝめ

夏風

袂にはふかぬ軒端の夕風も見るめすゝしくなひくまつか枝

夏河

岩はしるたきつ川せは見るめにもこえてすゝしき波の音かな

秋はまた遠きわたりをいつみ川いつとて波のかくはすゝしき

扇

夏くれはまつ手にならすあふきかなかならす風を頼むならねと

いかはかりいかにやとしてほともなきあふきの風のつきせさるらむ

氷室

夏も猶霜とや影のこほるらむひむろのやまのあり明の月

蟬

しけりあひて日影へたつる梢よりもりくるせみの聲そすゝしき

納涼

吹そよく音こそあらめ秋風もしのひてかよへ軒の下をき

夕されはまたほにいてぬ秋風のかよふもすゝし軒の下荻

明くれに立いてなれてすゝしさをほかにもとめぬ庭の松かけ

すゞしさは風もかよひて過かてに袖ふきかへす松の下みち

夕納涼

秋風の夕くれふかくしのひきてそよくもすゞし軒のした荻

たそかれにしのひてかよふ秋風もそれとはしるき袖のすゞしさ

ゆふされはとなりまちかき秋風のかよひてすゞし庭のあしかき

樹陰納涼

しのひきて夕すゞしき秋風のおとふきならすならの下かけ

松下納涼

しのひてはふくやとまつの夕かけにいてしもしるくかよふ秋風

すゞしさにゆきかふ人も立よりてならしのをかの松の下かけ

水邊納涼

山水をむすふ雫や秋のつゆそてにみたるゝ風のすゞしさ

海邊納涼

すみのえやひるのあつさもわすれ草つむ袖すゞしうらの夕風

賀茂河納涼

秋も又かよふかそこに水鳥のかもの川せのなみのすゞしさ

庭納涼

こむ秋もほとなき草のまかきとてすゞしくかよふ露の夕風

松下水

吹風になひく梢のすゞさもくむ手にうつる松の下水

六月祓

立かへる袖そすゞしきみそき川秋にかゝれる波の白ゆふ

みそき川今よりつみもあらしほのしほのやほあひになかしすつれは

後鈴屋集中巻

本居春庭詠

秋歌

秋のはじめに
西こそとむかふ峯よりすゝしくも袖にふきおろす秋のはつ風

初秋
すゝしさのあかれこそせねふくもまたものうきけさの秋のはつ風
結ひ置し露のちきりや深草の里にまつふく秋のはつ風
色かへぬときはの山もふく風の身にしみそめて秋はきにけり

初秋風
秋きぬとつくる軒はのゆふ風にやかてこたふる庭のをきはら
をりふしもうつろふ色に吹かへてけさは身にしむ秋のはつ風
露ふかき秋のあはれのはつしほと身にしみそむる袖のあさ風

初秋露
秋きぬとさすかきのふにまされともまた淺ちふのけさのしら露
おきそめし秋の日數のほとよりもふかきよもきの庭の朝つゆ

初秋月
いりたちてまたみか月の影ならさすかに秋の色そほのめく
ほのかなる影もさすかに秋見えて夕すゝしき三日月のそら
秋ふかき有明の空のあはれさもはのめきそむるみか月の影

早秋露
吹風のそよとはかりにゆつちるもあひにあひたるはつ秋のつゆ

故郷早秋
ふる郷は秋よりほかにくる人もあらしふきそふあさちふのやと

野亭早秋
秋風のそよとふくよりちる露もしのゝをさゝの野へのかり庵

待七夕
たなはたはすゝしさならてかさぬへき袖にまつらむ秋のけつ風
天川なかれてはやき月日をもまれのあふせにまちやわふらむ

七夕
まちこひておるたなはたの白たへや涙にふかき色をそむらむ
水上のふかきちきりも天川なかれてたえぬあふせにそしる
天川たえぬちきりになくさめてまれのあふせも猶たのむらむ

七夕別
立わかれかへるあしたは天川わたらぬさきやこひしかるらむ

七夕後朝
かへるさはわたらぬまにも袖ぬれてなみたさきたつ天の川波

七夕月
いくめくりよそにへたてゝたなはたは空ゆく月をともに見るらむ

七夕霧
年にまつあふせはこよひたちこめてくるゝをいそけ天の川きり

七夕河
天川ふちせはしらぬたなはたもとほきわたりに袖ぬらすらむ

七夕橋
かけてまつ思ひの色と天川紅葉のはしやわたしそめけむ

待わたる袖の涙や天川紅葉のはしのいろをそむらむ

七夕船

心こそまつあふこかそ[illegible]あまの川よしのわたりの舟出まつ夜は

いつしかとおもひこかれしはつ秋のあふせにとよする天の川ふね

霧こめて見えぬふなても音たかくむせふにしるし天の川波

七夕衣

なてつくすいはほの後もたなはたのちきりはたえし天のは衣

あふよにはかへさてうらみもたなはたはかさねやすらむ天のは衣

秋風にあまのはころもふきかへしうらみかさなるきぬ〳〵の空

七夕糸

たなはたにたむくるいとや秋をへて絶ぬあひ見のしるしなるらむ

七夕枕

秋ならてまくことかたきたなはたのいはの枕はこけやむすらむ

七夕夢

たなはたもゆめちなからはあふことを年に一夜となけかさらむ

閏月七夕

天川のちの文月もあふせとはなとたなはたのちきらさりけむ

荻

身にしみてそよとはかりの音つれもやかて秋なるをきの上風

秋くれは風のやとりとふく音も[illegible]にしけき庭のをき原

うき宿の風のやとりとことわりの涙みたるゝをきのうは露

秋風やたれもかなしき聲たてゝなみた露けき庭の荻は[illegible]

夕荻

ふきはらふ風やうつしてきく袖に夕くれふかき露のをきはら

荻風

[illegible]

所もて[illegible]ふく音も軒端に[illegible]のうはかせ

おもひやる野山の秋のあはれまて軒はにかよふをきのうは風

吹すくる音たにつらき秋風をのきはにやとす庭のをき原

[illegible]

[illegible]

閑居荻

宿からは[illegible]さびしさも荻ふか[illegible]は風

萩

花の色に[illegible]

おもるとも吹風またし萩の露はらはゝともに花もこそちれ

露ならてうつる心もさく花のむらさきふかき[illegible]

萩露

白玉と風にみたれて花の色にうつりもはてぬ秋はきのつゆ

おけはかつなひきこほれて咲たわむ花におきそふ[illegible]の露

心してをれぬはかりは花の枝にさすかおもらぬ秋はきの露

夕萩

きしそふる[illegible]の色もむらさきの花に[illegible]の露

庭萩

[illegible]

行路萩

袖の色もむらさきふかく分いりてうつしやせまし野路の秋萩

薄

秋風のたち野のはらのしのすゝきまたほにいてぬ袖そ露けき
ふかぬまの名にこそありけれ秋風に跡なき露の玉のをすゝき
吹はらふ風をやまねく花すゝき夕露ふかき草のたもとは

野外薄

行末は雲もひとつに花すゝきなみたちつゝくむさし野の原
吹ほともほのかに見えて花すゝきなひく末野の秋のゆふ風

行路薄

分ゆけは跡こそ見ゆれ咲たてる野へのを花の波のかよひち

薄露

秋風に思ひみたれて袖の露はらひもあへぬ野へのをすゝき
吹はらふ風にたもとをまかせてもたほ露しけき花すゝきかな
秋風のふかぬたえ間もおく露に猶うちなひく野へのをすゝき

月前薄

しら露の玉のをすゝきよるは又月もひかりをむすひそへつゝ
花すゝきたもとにおもる月見てもなかめよふかき露やしるらむ

女郎花

風ふけは思ひみたれて露にのみなひきもはてぬをみなへしかな

槿

露はかり色もたかはぬ朝かほはあさな〳〵にさきかへるらむ

月草

衣にはすらて心を花のいろにうつしてそ見る庭の月くさ

草花

見る人もおのかさま〳〵咲花にこゝろの色やそめてめつらむ
なか〳〵にまねくにつけて秋の野のを花か袖は露もとまらす

草花露

をみなへし秋のさか野の夕露をはらひかねてや猶かこつらむ

庭草花

植おきし庭の千くさにこの秋は野へともいはて花をこそ見れ

野草花

秋萩の花のにしきのたか絶て一むらしける野へのをすゝき
あきはきの花すり衣わけくれぬ心も野へのいろにうつりて

翫野花

いりましり野への千くさの色々にをりみかさしみ花をこそ見れ

行路草花

わけ見れは花より花に心さへうつりてそゆく野路のもゝ草

月前草花

秋の野の露にうつりていろ〳〵の花とひかりをちらす月かな
露しけきを花の波にうつろひて月影さわく野への秋かせ

雨後草花

ほともなくはれゆく風に小萩原おもりもはてぬむら雨の露

霧中草花

はれそむる朝けの風にほの見えてなひくを花の袖の秋きり

野露

絶すふく木下風も秋ふかみはらひかねたるみやきのゝ露

月前露

空の月雲なきよはゝなか〳〵に影見る露にいとふ秋風

虫

大そらのくもるをなれもうれしとやくれまつ虫のまたき鳴らむ

よひのまの木かけをくらき淺ちふに月まつ虫の聲そさやけき
秋風にくたけてものや思ふらむ玉ちる野へのまつむしの聲
さく花の色なる露を涙にてむしの音しけき野への萩原
霜ふかきあさちかもとのきり〴〵すいつれかさきにかれむとすらむ

野　虫

くれゆけはおのかさま〴〵啼いてゝ千くさにかはる野への虫の音

野外虫

秋の野のを花か袖の夕露や人まつむしのなみたなるらむ

庭　虫

秋の野に露もおとらぬ宿なれはむしの音しけき庭の淺ちふ
梢ふく風にきほひてなく聲も軒はにたかき庭の松むし
さゝかにのすかく夕のあさちふになくねときめく庭の松虫

籬　虫

夕くれのまかきの山に月ならて鳴いつるむしの聲そさやけき
ほともなき草のまかきにさま〴〵のあはれこもれるむしの聲かな

夕　虫

淺ちふやくれまつ虫の名もしるくまつ鳴いつる庭のゆふかけ
きけは又夕身にしむ秋の色も今一しほの松むしのこゑ
いつはとはわかれと秋は夕月夜さすやをかへの松むしの聲

夜　虫

いてゝなほもらぬ木かけの淺ちふに月まつ虫の音をつくすらむ
ならはしの露の枕もよやさむきなく音をつくす庭の松虫

月前虫

夜もすからともにやとりて月影もあさちか露にすめる虫のね
ふけゆけは月の光も身にしみてむしのねすめる野への秋風
秋の夜は月の光もむしの音もひとつにすめる庭の淺ちふ
月影はあさちかもとにやとりきて虫のねたかくすめるよはかな
露しけきあさちか宿の月かけにたれをとてふのまつむしの聲

秋　風

きく袖はめに見るものゝあはれより露けさまさる秋風のこゑ

秋　夕

夕まくれ思ふまゝにやなかめましさらてもぬるゝ秋のたもとを
ゆふまくれ心なき身も露かゝるならひあやしき秋の袖かな
袖の露かゝるならひもうき身とておき所なき秋のゆふくれ
うしとてもたれかかゝらむ袖の露たくひなきみの秋の夕くれ
うちはらふ跡より袖におく露のあはれせめくる秋のゆふくれ

秋夕雲

何となき雲のけしきもあはれにてなかめにかゝる秋の夕くれ

月

さやかなる月見むための秋とてやよのまをなかくさため置けむ
有明の影よりも猶とゝまらて山のはいそく月そつれなき
風ふけはみたるゝ露を玉のをとひかりをむすふ月もはかなし
雲はらふよはのあらしに久かたの月のかつらの花そちりそふ
すむ月にうかるゝはてやさそはれてわれも山ちにいらんとすらむ
ものおもふ秋のならひもしらてたれ涙くもらぬ月を見るらむ
秋のよは何ゆゑおつるなみたそとたもとにやとる月にとはゝや
なかめつゝぬらす袂にやとりきてなくさめかほの月もうらめし
秋の月たかあくかれしならひより心もそらに人さそふらむ

秋の夜も涙くもらぬ月は見すちゝにものおもふ我身ひとつは
さやかなる月も涙にやつれけり身のうき雲は風もはらはて

待　月

山のはに雲のゐるゆふくれは月よりもまつ風そまたるゝ

深夜待月

いつしかと出にし影を又さらにまつか枝さける山のはのつき

曉　月

更ぬれといてくる山のたか〳〵になほまちわふるよはの月かけ

雨後月

有明の影をのこしてしらむよをつれなしとこそ月は見るらめ

見　月

むらしくれ月のかつらもそめぬらしはるゝ雲間の影の一しほ
空にのみさやけき影と見しほとに袖もさなから月になりつゝ
なか〳〵にあかぬ心のからころもたもとにやつす秋のよの月

會友見月

見る友もかけぬまとゐに空すみて思ふくまなきもち月の影

翫　月

まちをしむ心つくしもなか空にすむ影あかぬ秋のよのつき
もの思ふならひのみかは見る影にうきもなくさむ秋のよの月

終夜翫月

よもすから月見る袖と露も又かけをやとしておきあかすらん

依月客來

あすのよもとふ人なから待いてゝともにこそ見め山のはのつき

惜入月

をしみえぬ影と見るよりさきたちて心きえいる山のはの月

八月十五夜

天の原心にかゝるうき雲もたえてなかはのあきのよの月
名に高きこよひはかりはねてあかす人やなかはの秋の月影

九月十三夜

又たのむこよひもちかきなかはたにふくるはをしき月のひかりを

山　月

鏡かと見えてさやけく山とりのをのへにすめる秋のよの月
はしたてのくらはし山は秋のよの月すみのほる名にこそ有けれ
秋のよも光を花とよしの山さくらか枝にちらすつきかな
くもりなきかゝみの山の秋の月これや名におふ光なるらむ
もる山やまた染あへぬ下葉まてるかけあかき秋のよの月

岡　月

さやかなるかつらのかけも秋の夜は松とならひのをかのへの月

野　月

吹ちらす草葉の露に見る風も月のひかりの秋の野へかな
かけなからうつる草葉の露わけて月にぬれゆく野へのかよひち
昔にもすみこそまされ秋をへて露ふかくさの野への月影
露わけぬ袖にも影のやとるまて月のあはれのふか草の野へ
花とちる光を露にぬきとめて月をしめのゝ糸すゝきかな
まねきても猶やとまらぬ野への月を花か袖に影ふけにけり
大江山雲もかゝらぬ月かけによるもいく野の秋のたひ人

武藏野月

夕風にさわくを花の波間よりひかりほにいつるむさしのゝ月

里　月

里の名も空にしられて紅葉する月のかつらのかけそてりそふ

秋をへて野となる里に月はかりすみこしまゝの影そさひしき

河　月

影うつる清瀧川の秋風に月もいはこす水のしらなみ

うき雲の波もかゝらて久かたの中なる川に月そさやけき

水の面に花とちれはやかつら川ひかりよとまて月のなかるゝ

はつせ川かけし玉とも鏡とも見えてさやけきせゝの月かけ

瀧　月

花とちる月の光をぬきとめておのれみたるゝ瀧のしらいと

渡　月

てる月にゆくへもしらすあこかれてゆらのとわたる秋の舟人

橋　月

ふくる夜に霜と見るまて影しろく月すみわたるかさゝきのはし

なかめつゝなれもいくよを秋の月すみわたるらむうちのはし守

海邊月

あかしともすまともいはて月は見むさやけきかたにうらつたひして

思ひやる月の都のおもかけも袖にたちそふすまのうらなみ

月ならてとふ人もなしすまのうらやしほたれまさる秋の袂を

秋のよはうらわのあまもかつきえぬしら玉うかふなみの月かけ

波のうへに光をしきててる月のしら玉はやすむこのうら風

浦　月

あかすなほたこのうら波よるかけて見よとやすめる秋の月かけ

影きよみもしほはやかて月にのみたゝあこかるゝすまのうら人

さはりつるけふりもたえて鹽かまのうらみむかたもなみの月かけ

江　月

よもすから波も玉江の名によせて月影すめる秋のうら風

影も又よすれはよりてうら波のまゝのいりえの秋のよの月

湖　月

さやかなる月の見るめにしかのあまも袖しほたるゝ秋のよな〱

名所月

よと川や岸の柳のかけなからうつるいりえの月のさやけさ

秋ふかきをはすて山のよはの月あはれはいふもさらしなの里

さやけしなすまのうへ野の露かけて波ちにやとるうらの月かけ

社頭月

へたてなくさやけき影も所からすむ月よみのもりの神かき

山家月

山里によのうき雲をはなれきて心もすめる月をこそ見れ

のかれきてわれもうきよの外なれはともにそすめるみ山への月

さそはれて思ひ入ぬる山もまたあくかれぬへき月のかけかな

ものをのみおもひし月に今はまた心をすます山のおく哉

閑居月

かりそめの松の下庵もる影もかすかにすめる秋のよの月

故郷月

軒端もる露をあるしと尋ねきてよな〱やとる故郷のつき

秋をへてすみもかはらぬふるさとの月やいくよのあるしなるらむ

故郷のむかししのふの軒はより月もつゆけき影そもりくる

きて見れは昔しのふの露なから袖にみたるゝのきの月かけ

ありしよをしのふか月も故郷の軒の草葉のつゆを尋ねて

松間月

ふきわくる木間もりきて月影も軒はにさわく庭のまつ風

庭の松こするゝのかけもねやちかくさしいるよはの月のさやけさ

月前友

夜よしとも今さらたれにつけやらむ友待いてし山のはの月

月前衣

月草にすれる衣のこゝちしてひかりの花そ袖にうつろふ

月影もうきよのほかの友とてやこけのころもの露になれぬる

月前遠情

思ひやるその面影のいつこかはこよひの月にうかはさるへき

すさしむこなたかなたの心までおもひやらるゝやまのはの月

月前木

さけりつる梢はなれて月の色もいま一しほのみねのまつはら

月前松

軒の松見れはおよはぬ梢までさやかにうつす庭の月かけ

よるも猶月の光のみつしほに見るめかくれぬいその松かえ

月前風

雲はみなはらひつくして照月のひかりをちらすよはの秋風

月前竹風

くれ竹のなひくのみかは吹風もさやかに見ゆる秋のよの月

秋[illegible]さやくみ山のさゝの葉におく霜ふかきよはの月かけ

駒迎

ひきたつるかけもこよひの名におひてたくひなかはの望月の駒

霧

ざひしさはそことも見えす立こめてたゝ秋きりの夕くれの空

野霧

花の色をへたてもはてすおのれさへ千くさに見ゆる野への うす霧

風わたる野へのをすゝきほの見えてたえ／＼なひく秋の夕きり

河霧

みなせ川秋をふかめてたつ霧もありてゆくせの音はへたてす

あすか川くもりみはれみ立きりのふちせもかはる秋のゆふ風

なかれにやまかせてくたす川きりにゆくへたとらぬせゝのいかたし

浦霧

うら風もたちやへたつる夕きりのまかきのしまの松も音せす

初雁

秋の田のいな葉をそよと吹風にきなきあはするはつ雁の聲

きく袖に秋のあはれもそふ露をかけてまちけるはつ雁のこゑ

暮天初雁

たそかれもわかぬ夕の空とてや名のりてきつるはつかりの聲

雁

あかさりしとこよわかれてよはの雁心もそらに音をやなくらん

なへてうき秋もしられてなく聲にねさめなくさむよはの雁かれ

夕雁

きて見れはいつこもおなし夕くれと鳴こそわたれ秋のかりかれ

夜雁

たかいそく玉つさなれは雁かれのよをさへかけてそらにきぬらむ

つられくる面影見えて夕やみのそらにちかつくはつかりのこゑ

深夜雁

うきことを思ひつらぬる友とてやねさめとふらむよはの雁かれ

月前雁

すむ影やこしちの空にまさるらむ月のみやこにきなく雁かれ
つらねくる数もさたかによむはかり月すみわたるかりの玉つさ

田上雁

鳴ておつるしつくのたゐやつくはねをこえくる雁のなみたなるらむ

湖上雁

故郷のあはれやいつれしかのうらになきてこしちの秋のかりかれ

羇旅雁

なれも又雲ゐはるかにたひころもきつゝなくらむはつかりのこゑ

旅宿雁

ふる郷をしのふ友とや草まくら鳴こことゝふよはのかりかね

稲妻

一むらの雲にやとりてはかなさは空にもしるきいなつまのかけ

鹿

をかへなる松のつれなきつまこひにわさ田ほにいてゝをしか鳴也
はけしさのほともしられてさそひくる鹿の音たかきみねの松風
たくへくるをのへのしかの聲たから軒端の松にきわくやまかせ
なくしかの涙なからやさそふらむきく袖ぬるゝみねのまつ風
きく人の袖こそぬるれ松風にしくるゝみねのさをしかの聲
鹿の音をおのれさそひてを山田のひたふきならす峯の松風

山鹿

よしの山うきつまこひになくしかも岩のかけちやふみならすらむ
みわの山杉のたちとも霧こめてつまとひわふるさをしかのこゑ

野鹿

つまやらき野路のさゝ原分ぬれてよふかくそよくさをしかの聲
花つまの心いかにと聲たてゝさむき野風にをしかなくなり

田家鹿

軒ちかくきなく山田をもるしつのおのれおとろくさをしかの聲
もる人も今は山田のいねぬとやかりいほちかくしかのなくらむ

朝鹿

今はとてたち野のはらの朝きりにかへさやまとふさをしかのこゑ

夕鹿

夕まくれ月まつ宿にきこゆなりみ山をいつるさをしかの聲
月まつとつまやたのめし夕まくれ山よりいつるさをしかの聲
しかの音もほのかにきこゆみか月の影見るをちの峯になくらし

夜鹿

なれもうきつまやたのみこ秋風のさむき夜とにしかの鳴らむ
さそひきて身はならはしの秋風も枕にさむききさをしかの聲

月前鹿

てる月のかつらのかけになくしかは手にもとられぬ妻やこふらむ
あけぬまも月をしたひているさ山かたふく峯にをしか音なり

霧中鹿

秋山のなかめくれはく夕きりにあはれたちそふさをしかのこゑ
たつ霧をつまとふおのかなけきにてはれもやらくをしか鳴なり

秋衣

中々に秋の日数をかされてはさむさそまさるよはの衣手

秋風のすそふきかへすころもへて今はよさむのうらみられつゝ

擣衣

きけは又身はならはしの秋風もさらによさむの衣うつこゑ
袖の露思ひみたれてよもすからたれ[illegible]しのふの衣うつらむ
ふかきよの霜をかされて白たへの衣手さむく衣うつなり
ひとりある人のすさひにきくわれも猶いねかてのさよきぬた哉
きゝあかすものともしらてうちもねぬあ[illegible]衣

聞擣衣

うちあかす人のあはれもきく袖にしら露ふかきよはのさ衣

[illegible]衣

きゝてたによさむの衣うちあかす里人いかにそてのあきかせ

[illegible]

なか〳〵にたゆめはたへぬよさむとやまなくうつらむあさのさころも
よさにう[illegible]

月前擣衣

や[illegible]音に月影の[illegible]
さしのほる月にきほひてさよ衣うち出る砧も空にすみけり
あくれは[illegible]さよ衣[illegible]

[illegible]

秋の[illegible]

[illegible]

露のまもためし久しき菊の花さきてうつろふ千代やいくちよ
色かはる秋のならひもしら菊の花のまかきは千代をこめつゝ
花の色もうつろはむとやはつ霜にむすひかへたる露の白きく
けさ見れはうつろひそめて置霜にまかひもはてぬ庭のしら菊
とり〳〵に色そえならぬ紅にうつろふ花もませのしらきく
うつろへは久しくれなゐの[illegible]ありて[illegible]しら菊の花

菊　露

千年さへ猶よそならすきくの露花の色香にうつるのみかは
千代かけておく[illegible]きくの露たれはをりかさすともちりはみたれし
きくのうへに千年をかけておく露も猶はかなしと花や見るらむ

[illegible]菊

やへさける[illegible]まかきはしら菊の千年かさたる山かとそ見る
[illegible]て千代[illegible]きくの花にほふまかきの山のしつくに

野　菊

むさし野の草はみなからおく霜にかれてもにほふきくの一もと

水邊菊

谷川のなかれに千代の影見えて行末とほくにほふしらきく
山川や波の花さへたちそひてやへさきにほふ岸のしらきく

月前菊

[illegible]へて[illegible]月の霜にはうつろはて猶色まかふしらきくのはな

紅　葉

染つくす木々の梢のなか〳〵にうすき紅葉の色もめつらし
[illegible]て後も色こきは秋のはしめのかたえなりけり
とりしのふ紅葉はかりにそめはてゝなけく色なき秋の山のは
[illegible]人の心の秋にあふたもとの色か木々のもみち葉

[illegible]紅葉

色ふかく染つるよはの露なから日かけにゝほふけさのもみち葉

夕紅葉

てりそひし一しほ色のこまにしき日も[illegible]

月前紅葉

月かけに[illegible]

[illegible]

か[illegible]に[illegible]しくれに[illegible]

むらしくれ過こしかたの色[illegible]

[illegible]

からにしきにほふ一本に立[illegible]て心[illegible]

千しほまて心の色[illegible]くして[illegible]

山紅葉

高間山まなく時なくしくれして千しほをいそく峯のもみち葉

下葉よりいろいろ色に山の名のもるほとしもしくれ[illegible]

瀧紅葉

さし出る梢に瀧のしらいとをなかはそめたる岸のもみち葉

うすくこくたきのしら糸染かけて錦おりなす岸のもみち葉

杜紅葉

千入まてそむる日数[illegible]もあかぬけしきの杜のもみち葉

たか秋の涙の露に色そめてくれなゐふかきころもての杜

露霜の秋にみとりも色かへて染ますあけの衣手のもり

名所紅葉

いかならむまなくしくれの雲かゝるかつらき山の峯のもみち葉

笠とりの山もしくれのもる山もそむるもみちの色はかはらす

秋ふかき露をなけきの涙にて色かはりゆくころもてのもり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柞

[illegible]

[illegible]

秋ふかくしくるゝ枝はつれなくてしつくにそむる松のしたくさ

秋山

[illegible]しら雲

[illegible]

山路秋行

おくふかく[illegible]山路かな

秋の色[illegible]

暮秋

くれてゆく秋[illegible]

した[illegible]

くすかつら[illegible]露

暮秋雲

入日影のこる名残の秋のいろも夕くれうすきやまのはの雲

しくれとやあすはなりなむゆく秋の夕日をさふる山のはの雲

九月盡

けふのみとをしむ涙に目もきらひ心もくるゝ秋のそらかな

霜むすふあすをもしらて殘しおくかたみはかなき秋の夕露

冬歌

初冬

神無月空も秋をやしのふらむ涙しくるゝ雲のころも手

秋の色は露もとまらて冬きぬと落葉かうへに霜そむすへる

ふゆきぬときのふの露の玉さゝも霜にそさやくけさの朝あけ

初冬霜

秋くれし露の玉さゝけさ見れは霜こそむすへ一夜はかりに

冬くれは露はきのふをかきりにて霜こそむすへむさしのゝ原

初冬時雨

かきくらすふもとの里のはつしくれ山のはよりや冬はきぬらむ

初冬曉時雨

神無月秋にわかれしよこ雲のやかてしくるゝ山のはのそら

時雨

しくれゆくたゝ一むらのうき雲にいく里人か袖ぬらすらむ

夢かよふ道のゆくへもかきくれてしくれにたとるさよの手枕

ほともなくすきの板やのむらしくれきゝしは夢かさよの手まくら

色にこそふるほと見えね神無月松そしくれの音はたてける

朝時雨

明ぬとてわかれし峯のよこ雲もしくれてかへるけさのやま風

明わたる峯もしくれにかきくれてけさはわかれぬよこ雲の空

夕時雨

山のははれゆく空の夕日かけさすやをかへは猶しくれつゝ

夜時雨

おのれさへさそふ夢ちの跡もなくすきの板やのさよしくれかな

さそはれて見はてぬ夢の手枕にをしむ涙もうちしくれつゝ

明やらぬひまもよふかくかきくらしもの思ひそふるむらしくれ哉

跡もなく夢のゆくへをかき　らしおのれはれぬるさよ時雨かな

杉の庵やしくれはよそにうつろひてはれゆく月の影そもりくる

うき雲のかたへははれ　月影も板間もりくるむらしくれかな

もりかはる月の光もさためなきねやの板間のさよ時雨哉

時雨驚夢

はやすきておとろかしつるしくれさへ跡なき夢のさよの手まくら

おとろかすよはのしくれのそれならて夢のなこりにぬるゝ袖かな

おとろけはねやの板間に月さえて夢も跡なきさよしくれ哉

行路時雨

しくれゆく雲の末野のたひ人もわかこと今や袖ぬらすらむ

海邊時雨

沖遠くかきくらすより音たてゝまたきしくるゝいその松風

山家時雨

ふりめくる山を軒はの柴の戸はしは〳〵たゝくむらしくれかな

故郷時雨

故郷とあれし宿にもめくりきて猶ふりすてぬむらしくれ哉

木枯

さそはれぬ梢の色としりなからふくもつれなき松の木からし

杜木枯

はけしさのほともしられて散のこる色こそ見えね木からしの杜

ちりはてしよその梢は音たえてときはの森にのこる木からし
霜さけはちりてほとふる梢にものこるなけきのもりの木枯

落　葉

ゆきかへりそめし千入のはては又おのれしくれとふる木葉哉
やかてちるものともしらていつしかと千入をまちし庭のもみち葉
さそひくるあらししくれて松枝もつもる木葉に色つきにけり
もみち葉のこれもはるさぬひの色を風は心になとまかすらむ

風前落葉

はては又おのれあらしの色そめて空にしくるゝ峯のもみち葉
吹たゆむほともしられて紅葉ちる嵐の色そうすくなりぬる
いくたひともしらぬ錦のもみち葉をたゝ一むらにさそふやま風
もみち葉のにしき吹しく木の下やちらす嵐のやとりなるらむ

落葉随風

見わたせはあらし色つくたつた山みねの木葉やまなくちるらむ
さそはるゝほともしられて吹まよふ嵐色こき峯のもみち葉
うへもなき錦と空にさそはれて心たかしの風のもみち葉

月前落葉

さそはるゝつらさのみかは見る月の光をさふる風のもみち葉
さはりつる梢もはれて庭の面にもみち葉あかくうつる月影

雨後落葉

そめ〳〵て今は千しほのむらしくれはるゝあらしにちる紅葉かな
おのれ〳〵ふりそめにけり雨はれて今そ千入とたのむもみち葉
むらしくれはれゆく風にふりそめて又袖ぬらす庭のもみち葉

落葉霜

しはしこそ風にまかすれはては又そめつる霜にくたすもみち葉

落葉有聲

さはかりはふかぬ嵐の音たかくさわくやきほふ木葉なるらむ

庭落葉

梢より庭のおち葉の色そこき千入はかりやまつちりにけむ
のこりなく紅葉ちりしく此ころや庭のまさこの千入なるらむ
さそひつる梢の音もうつろひておち葉にさわく庭の木からし

路落葉

ちりうつむ道こそまよへ落葉にはゆきかふ人の跡し見えねは

山落葉

ちるほとそなか〳〵松も見えわかて山はさなから紅葉なりける
木枯にあらそひかねて色つきぬ紅葉しくれとふるの山まつ

杜落葉

おなし色もちりしくかけにたかめてはかはるけしきの杜のもみち葉

河落葉

山風に木葉しくれとふる郷のさほの川水もみちしにけり
よしさらはさそひゆくせもよとむまて紅葉ちりしけ山川の水
風はやみ空をなかれて川水にちりもかゝらぬ岸のもみち葉

橋落葉

橋のうへにちりかゝりつゝさにぬりの色葉わたす岸のもみち葉
ちりしける紅葉の色もとことはにくちせてかゝれ谷の岩はし
くち木橋ちりかゝりたるもみち葉のたえ〳〵のこる色もはかなし

古宅落葉

色も又軒はにくちぬちりしきていくかふるやの庭のもみち葉

故郷落葉

おのれさへ今はあらしの庭とてやよそにちりゆく軒のもみち葉

紅葉殘枝

木枯をへたつる松の下もみちこれもつれなくのこる一えた

庭霜

冬くれは露も跡なくうつろひて霜のみふかき庭のあさちふ

野霜

しけかりし草は跡なく冬かれて霜ふみまよふ野へのかよひち

殘菊

見れは又秋の千くさのおもかけのこりてにほふ菊のいろ／＼

おく霜にかれぬのみかはきくの花なか／＼色そ染まさりける

きくの花いかにちきりをむすひ置て霜にもかれす咲のこるらむ

にほへなほ秋のかたみとのこしおく霜のまかきのしら菊の花

寒草

置あまる野へのを花の袖の霜はらひかねてや冬かれぬらむ

袖くちて色こそなけれ見し秋のおもかけまねく野へのを薄

置かはる霜に千くさも枯はてゝ秋のなこりは露たにもなし

冬深みやとりし風も音かれて霜のみさやく庭のをき原

庭寒草

ふみ分し人めなからに冬かれて跡たにもなき庭の淺ちふ

やとりこし風もよそけに吹さえて霜にそくたす庭の荻原

野寒草

まねきつる草の袂も冬かれて人め跡なき野へのをすゝき

かそへ見しを花くす花霜かれて秋のなこりもなゝ草の野へ

見し秋の千くさはかれて置霜のあしたの原そひとつ色なる

色くちて立野のすゝき見る人の袖さへたへぬ霜の朝かせ

枯野

うらみても秋はかへらておく霜におのれかれゆく野への葛原

ひとつ色に霜のみさえて冬くれは露ものこらぬ野へのもゝ草

寒芦

色もなくかれてなか／＼ふく音はさわきそまさるあしのうら風

をれふして跡なき霜に吹おともかれてさわかぬあしのうら風

寒松

はては又ちらぬときはの松かえにつれなくのこる峯の木からし

氷始結

けさ見れはよとむ岩間のほとはかりこほりそめたる山川の水

氷

とちはてぬこほりのしたにきこゆなり猶いはくゝる谷水の音

岩はしる音もすくなく行水のたえ／＼こほるふゆの山川

冬ふかみふちせもわかすこほりゐてさなからよとむ山川の水

池氷

池水のこほるかゝみによもすからさえし嵐のほとも見えけり

冬ふかき池の鏡はちりならてこほりゐるにも影そくもれる

冬深くとつるこほりにさゝ波もえそうちいてぬ池の水口

河氷

おのれのみ猶おとたてゝいは波のこほる川せにふくあらし哉

ひろせ川名のみなかれてゆく水のなきさも遠くこほる比かな

山家氷

人こそあれこほりむすひて谷川の水も音せぬふゆの山さと

冬　月

木からしに月のかつらのもみち葉もちりてやかけの冬はさひしき

こからしに月の桂のかけはかりなほてりそひてのこる山のは

白たへに影こそさゆれ久かたの月のかつらも霜やおくらむ

山冬月

さえくれしほともしられて山のはの雪よりいつるよはの月影

野冬月

見し秋の面かけ遠くふゆかれて月のみのこるまのゝかやはら

湖冬月

遠さかるゆくへも月のかけさえてこほりはてなきしかのうら波

千　鳥

立さわきみちくるしほの夕波に聲あはせつゝなく千鳥かな

あしの葉は跡もなにはのうら風にむれたつ千鳥聲さわくなり

うちよする波のひまにも聲たてゝさわくいそへのむら千鳥哉

夜千鳥

あつさ弓いそへのちとりなく聲もよるこそまされつまやこふらむ

浦千鳥

あはちかた夕波千鳥みつしほに遠くなるみのうらつたふ聲

湊千鳥

猶しはしゆくへしられてさよ千鳥ゆらのみなとに聲そきこゆる

礒千鳥

汐みてはかくるゝいその松かねにあらはれてなくさよ千鳥かな

湖千鳥

しかのうらやこほるなきさに聲たてゝ波の跡とふさよちとり哉

旅泊千鳥

うきねする袖のみなとによもすから波かけそへてなく千鳥かな

うき寐してきけは涙もちる玉のをのゝみなとに千鳥なく聲

水　鳥

あしかものうはけの霜ははらひこもしたやすからすこほる池水

冬かれしあしは色なくをれふして青羽めにたつ池の水とり

さえわひてさそなうきねときく袖の涙もこほるよはの水鳥

池水鳥

こほりゐる鏡の池のほと見えてよそにうつろふ水とりの聲

水鳥馴舟

みなれさをなれもをふねの行かへりおなしほりえにあそふ水鳥

屋上霰

よもすからまきの板やに音たてゝゆめもたまらぬ玉あられ哉

冬　朝

猶ふかくうつもれふして霜さゆる朝けおきうきねやのをふすま

冬　夜

かさねても猶さむけきにふすまにもまさりていくへ深きよの霜

衾

霜こほりかさぬるをしの名にはおへとさゆる夜しらぬねやの小衾

埋　火

ともなへはさむさのみかはさひしさもわするゝよはの埋火のもと

閨埋火

よもすからおきゐる床のさむしろにしくものもなきねやの埋火

鷹狩

たつ鳥もしらふのたかのおなし色に雪ちりかゝる御狩野の原

雪中鷹狩

ふりまかふしらふのたかもをちかへる袖をや雪に猶たとるらむ

炭竈

山のはの雪けの雲にたちそひてけふりもさゆる炭かまの里

ふるまゝにをのゝすみかまたきそへてけふりも深き雪の山里

神楽

たきまとるあたりは霜の色きえて火かけそしろき百敷の庭

待雪

雪はく冬の日数のつもるをけ空にまちてやおそくふるらむ

初雪

跡ならてはれゆく空をゝしむかなつもらぬけさの庭の初雪

見なれこし蓬生の庭にふりかはる色めつらしきけさのはつ雪

庭初雪

めつらしく庭にそつもるきのふまて雲ゐのよそにみれの白雪

けふこすはあすはたかめもふりぬへしとへかし人の庭のはつ雪

雪

風はらふ木々にはさかて庭にのみちりしく花とつもるしら雪

おそかりしほともしられてふりそむるけふより深くつもる白雪

ふりそめて庭のまかきのほとなきに山とも高くつもる雪かな

積雪

日をふれは庭の籬もうつもれてかきりしられすつもる白雪

よしの山ふりしく雪のいくへともいはのかけ道跡たえにけり

松雪

ふりそむるけさはなか／＼色はえてみとりそ深き雪の松かえ

時雨にはのこりし松そと木よりまつふる雪の色は見せける

ふりつもる色にたひきにつれなさも雪にはたへぬ松の白たへ

月前雪

かつはれしはたれの庭も色そひて月に夜ふかき雪の白たへ

庭雪

つけやらむけさめつらしく降そめて雪も友まつ庭のけしきを

待人のとはぬつらさもいちしるく跡なき庭につもるしら雪

山とのみつもるもよしや庭の雪たちよる人もあらぬまかきは

行路雪

ふみまよふ跡もしらてこむ人やとめてわくらむ野路の白雪

山雪

見し春の花の木とにふりつもる雪もよし野の山のあけほの

野雪

ふしのねにけさはつゝきてふりつもる雪もはてなきむさしのゝ原

杜雪

花紅葉うつれはかはるをりふしのけしきの杜の木々の白雪

年ふりしこれやかしらの色ならむおいその杜につもる白雪

関路雪

ふる雪にゆくもかへるも跡たえて名もうつもるゝあふ坂の関

ふみなやむうさもわすれておもしろき雪にこえ行あしからの関

遠村雪

けふりのみなひくは見えてふる雪にうつもれはてし里の竹村

故郷雪
くちのこる軒端うもれて又さらに見しにもあらぬ雪のふる郷

田家雪
こむ年の秋のたのみもいちしるくかと田の面につもるしら雪

羇中雪
雪ふかくつもる旅路はふる郷をおもふ心もゆくかたそなき

旅宿雪
わけくれてたのむかりねの山松もわひしや雪の下をれの陰

雪中眺望
うつもれてなか〳〵ものゝいちしるくあやめわかるゝ雪の朝明

雪中待人
とへかしな跡は思はてひとりのみ見るとをしむ庭のしら雪

早梅
くる春をさそふしるへかまつ咲て年のこなたにほふ梅かゝ
くる春やとなりまちかくなりぬらむ花咲にほふ中かきの梅

春既卜隣
花もやゝあなたの枝は咲そめてはるもまちかき梅のなか垣

歳暮
あはれ又身にそふとしと思ふにもをしむ心そまつくれにける
したひてもゆくへしられぬわかれちに心もとしのくれまとひつゝ
くれてこそ年のゆくへもしられけれあはれわか身にとまるものとは
いたつらに過し月日のおこたりも我身につもる年のくれかな
けふのみに老まさりゆくこゝちして涙もつくるとしのくれかな
さても猶日かけやはやき年のくれ春まちいそく人にとはゝや
猶いかにくれゆく年のをしまれむ春のいそきにまきれさりせは

惜歳暮
のとかにもくる春またて行年を心いとなくなにをしむらむ

老後歳暮
身につもるよはひのみかは年のくれをしさも老は数まさりつゝ

歳暮雲
かつらきやあすは霞のよそに見む年くれかゝる峯の白雲

羇中歳暮
都いてし月日かさねてたひ衣又をしまるゝ年のわかれち
はかなくもとしのわかれをしたふかなわか行へたにしらぬ旅路に

歳暮述懐
くれてゆく年は雪ともふらなくにつもるかしらの白くなるらむ
黒髪にしら雪ふりておいせすはつもらむ年のくれもなけかし
いたつらにおいせし年のくれはかり月日をつねにをしまゝしかは

後鈴屋集下之卷

本居春庭詠

戀歌

初戀

春の野の草のはつかに見てしよりまつ〱えそむる我思ひかな

ゆくかたもしらぬこひちに何と又思ひたちける心なるらむ

きのふけふ思ひそめけるはつしほに袂色こきこひころもかな

口なしにそめて露けきこひ衣これやおもひの色の初しほ

忍戀

いかにせむしのふの衣かきりありてつゝむにも猶あまる涙を

年もへぬいつをしのふるかきりとて猶いひいてぬ思ひなるらむ

かくとたにいはてしのふのすり衣みたるゝ露に袖やくちなむ

ふるとてもしのふ身をしる雨なれは袖のほかにはもらしとそ思ふ

ほにいてぬ思ひは草のたもとたに露けきものをしのゝをすゝき

ほに出ぬおもひもかくとしのすゝきしのに露ちる袖を見せはや

しられしと人にしのふのうらのあまのいつか見るめをからむとすらむ

露しくれいくたひ[illegible]山のした葉の色そ染てかひなき

忍[illegible]戀

心にもあまる涙はつゝめともたもとにえこそまかせさりけれ

いかにせむ[illegible]のなみたを

[illegible]忍戀

もらさしとつゝむ心もおのつからあひ思ふ中はかよひぬるかな

いそくとて何うらむらむわれもなほ曉ふかくしのふわかれを

聞戀

吹風の音にきゝつゝいつまてかうはのそらなる物おもふらむ

いつか見てそれともしらむよそにのみきゝてしのふる人の面影

見戀

あふとも[illegible]

祈戀

かけてのみいのる契をうけひかぬ神もうきたの杜のしめなは

あふことは猶かた[illegible]

はつせ[illegible]

戀せしのみそきを神のうけぬにも逢瀬ありやと猶いのる哉

[illegible]

[illegible]

しるしたに見えぬ鏡の神かけて何いのるらむこゝろつくしに

[illegible]戀

あふともなきたるあさのいとはれて心もそらにきゆるうき雲

つれなさを[illegible]とはるゝ世のとわり[illegible]は

不[illegible]戀

あふとのなみたはかりをつゝみきてうれしきしらぬ[illegible]かな

なかれてもうき中川の水のおもに袖のみぬれてなほそ數かく

[illegible]

たくひなくつらき[illegible]思ふにも[illegible]こほるゝ

雨も[illegible]葉にかゝる[illegible]はかな[illegible]の緒

ゆくへなき空のけふりをかきりにて逢事しらぬ我思ひかな
あふこともなくてつひにと思ふにもなかめにかゝるそらのうき雲
つれもなき人の心はさておきてこひしなぬ身をなけく頃かな
つれなさに今はたゆとも玉のをのなかきうらみは猶やのこらむ
こひしなてつらきもあふにかへぬへきためとやのこる命なるらむ

戀のうた

しるへとはならて中々ゆくへなくおもひにまよふわかこひちかな
つれなきに我心さへならひても思ふにもなほまかせさるらむ
しのふるもおなし心のくるしさをわすれむとのみ何おもふらむ
涙せく袖もいつしかくちなしの色のやしほにしたこかれつゝ
見せはやと何なけくらむ袖の色にうつるはかりのつらさならぬに
深からぬ思ひの露もかゝるかとゝはゝや色にうつるたもとを

待戀

苔ふかくたのみはくるしなほさりにわれも人をや今はまたまし
くれぬとよその心もいとゝ夕日影くもらぬ空にこかれわひつゝ
こぬ人をまつに袖の夕しくれかひなき色に袖ぬらしつゝ
思ひやれよそのちきりのさはるにもたのめしくれの雨のつらさを
まつといひしわかいつはりはさておきてこぬ人かこつ山のはの月
ちきりおきてまつよなからの袖にとはおもひやかけし暁の露
さゝかにの糸のたのみもたえ〳〵にこぬよふけゆく軒のまつ風
待つならひしらすはこぬまても猶やたのみのあり明の空
ちきり置てこぬ夜はかりを[illegible]衣かさねむものと思ひかけきや

待夕待戀

こぬくれのかさなるまゝにさりともといとゝたのみて人そまたるゝ

忍待戀

立ぬれてまつ袖くるししのふ山こかくれふかき露の夕くれ

初逢戀

こひ〳〵てむすふ契のはつを花ゆく末かれす手まくらにせむ

逢戀

絶やらてつれなかりつる玉のをもなかくとちきるよはそうれしき
よりかけてあふよありける玉のをゝ絶ねとのみは何おもひけむ
年月を思ひへたてしつらさにもこえてうれしきあふさかの關
命たにあらはあふよとまたれしもかゝる契のしるしなりけむ
わかれなは心のやみのゆかりとて夢とやならむさよの手枕
こひ〳〵てまれにあふよのうれしさをつゝむほとなき袖の別路

逢後增戀

又さらにまさる思ひやあふ事にかへぬいのちのむくいなるらむ

夢逢戀

よひ〳〵にあひ見る夢のちきりにもくれはゆく空そ猶またるゝ
梓弓つらきうつゝにひきかへて見るもはかなき思ひねの夢
ゆきかよふ夢路はかりは中々にゆるすもつらきあふ坂の關
あふさかやかよふゆめちのわかれまてゆるさぬ鳥のあかつきの聲

別戀

おとろかす鳥のやこゑにまさりけり別れをいそく人のつらさは
おきわかれ袖に涙をかけろとや曉つけてとりのなくらむ
あけぬとていそく心もなく聲もとり〳〵つらき別路のそら
わかれちのそらにきえなは契おきし此夕露もかひやなからむ
明ぬれと猶もよふかきこゝちして涙にくらきわかれちのそら

られしさをつゝみもあへすおき出てなみた玉ちる袖の別路

有明の月のゆくへもかきくれてかへるさまよふそての別路

なみたをへとまらぬ袖のわかれちにのこりてやとる月もうらめし

後朝戀

あり明のかたみの月は影たえて袖にのこれる露もはかなし

露はなほおきこそまされ月かけもきえてわかれしけさの袂に

うちとけぬ心つよさのなこりまてつらき又寐の夢の手まくら

きえわひぬまたねの夢のきぬ〳〵にうきをかさぬる袖の朝露

露はなほ又寐の床のおきうさもしらて袂にまさるけさかな

くれまとふけさのわかれに消かへりなみまもしらぬ袖の露かな

顯戀

あらはれむものともしらて松か根に心そよせしおきつしら波

名立戀

數ならぬちりの身とてやこふるよりまたきうき名の空に立らむ

うき人もそらになき名のたちぬるをなけくや同し心なるらむ

濡衣へたつる中にうき名をへよりかさねてもなけくころかな

立無名戀

立さわくなみのうらには見るめかるあまの袖たにぬるゝならひを

尋戀

さしてゆく思ひを門のしるしにて杉ともいはすたつねてそとふ

尋ねてはつらき心もすきの門さすかにあはていかゝかへさむ

たつねこししるしにはあらてつれもなき心の色をみわの杉むら

尋ぬれとあはて月日はすきのかとさしもしるしのなき契かな

疑戀

しりそめてたか〳〵人のまことをもいつはりかとそうたかはれける

いかにして人の心をみなせ川したにうきせはありてゆくやと

疑行末戀

今こそあれ末の松山いかならむ波こさしとはちきることゝも

語戀

ことの葉ののこりてあくる秋のよになかき思ひのほとはしらなむ

契戀

袖にのみかけしちきりを末遠くむすふもうれし中川の水

露ふかくちきりおくにもまことゝはたのまれかたき人のことの葉

さのみやはゆくすゑとてもかはるへき契るもまゝにや猶たのまゝし

ちきりおくその行末にいつなりてかはらぬ人のこゝろをも見む

聞戀

なれぬれはなか〳〵袖の露のまも見ねはぬれそふこひころもかな

變戀

またしらぬ人の心の秋の色を袂に見せて露そうつろふ

水垣の久しくあはてありしより心やよそにへたてそめけむ

なけきわひうつろふ袖の色もうし露たにかへれ秋のむかしに

恨戀

ふきかはる人の心の秋風にころものすそのうらみられつゝ

たか袂にあらぬまくすのうら風もうき人は猶よそにきくらむ

うらみしと思ふたもとも露ちりてふく風さわく秋のくすはら

くるしさに思ひあまりてちる露も袖に玉まく葛のうらみ

猶まさるつらさはあらし今はたゝおもふまゝにや人を恨みむ

つれなさはよしやうらみてまさるともおしこめてやはさのみおくへき

逢不遇戀

思ひきやをさゝか原のかりまくら一夜はかりにかれぬへしとは

あひ見しは一よの夢のちきりにて又さゝわくる中のかよひち

しるといへはねてかさめてかことゝはむさためもあへぬゆめの手枕

はかなしやよるの衣をかへしても見えぬうつゝの夢のちきりは

さよ衣かへすく〳〵も又と見ぬうつゝのゆめをなけくころ哉

あひ見しははかなき夢の昔にてつらきそ今のうつゝなりける

夢よりも見しははかなきちきりにてたとるかたなきさよの手枕

被忘戀

われそまつつまゝしものをわすれ草うき人にしもおくれぬるかな

ことのはは露も跡なきちきりかなわするゝ草のしけりのみして

いつまてかわするゝ草の露かけてとはれぬ宿に袖ぬらすらむ

ひろふらむものとはさらに忘かひよせくる波のおもひかけきや

わすれしとたのめし人の言のはそかへりて今はかたみなりける

絶戀

たえはてむ中ともしらてくやしきはあふにかへさる命なりけり

ことの葉はかれしちきりにむすほゝれのこるもはかな露の玉のを

行末も絶しとこそはむすひしかかけたに見えぬなか川の水

涙川たゆるあふせにせきあへぬ衣手なからくちもはてなむ

くすかつらうらみかくへきたよりたにかれて跡なき霜の下くさ

絶久戀

あひきとも見つともいはてしのひしになにはのことも昔なりけり

稀戀

はかなしやたえぬ契も待わたるあふせはまれの中川のみつ

久戀

さりともとつらき心もたのまれて經ぬるもうれし中の年月

過來つるとしをこひちのしるへにてしらぬ行へも猶やたとらむ

しら波の濱松かえのいく代まてつれなき色をかけてこふらむ

經年戀

つらさこそ猶うつろはね年をへて袖の涙も色かはるよに

何にかはあはぬ思ひをなくさめてうきとし月をすくしきぬらむ

曉戀

さゝわけてかへる袂に見るもうしおなしつらさのあり明のつき

夕戀

こぬ人をまつふく風もなみたせく袖にしくるゝ夕くれのそら

夢戀

秋のよもねさめを人のわかれにて見しまほとなき夢の手まくら

よひ〳〵にかよひなれたる契とて夢路たとらぬねやの手まくら

しるといへはいかにさためてねしよそとはゝやものを夢の手枕

近戀

いかにせむまちかきかひもなか垣にかこつ心のつらきへたては

遠戀

白雲のかゝる山路をへたてすはよな〳〵月の出てきなまし

旅戀

さらてたにへたつる人をたひ衣かけて雲ゐのよそにこひつゝ

草枕たのむのかりのちきりたになくねかひなきみよしのゝさと

たひ衣こひちの露もかゝれとてたちやおくれぬ人のおもかけ

春戀

こひすれはまたれし春の花鳥も思ひをそふるつまとなりつゝ

夏戀

人心ち川のかゝりなかれてもしらぬあふせにもえわたるかな

秋戀

さらでだにぬるゝかわらうき人の秋をかさぬる袖のゆふつゆ
ひとり寐のこのあくるまもたかよそのあふ人からの秋のよならむ
人ふるさうき名をしらて秋かけしちきり待まの宿はあれにき

冬戀

涙川うきねの床にこほりゐてなかれぬよはもふめはむすはす

忍涙増戀

心してしのふるなかの言の葉はつたふる風もふきなちらしそ

見書増戀

見るにそふ思ひもしらて袖の露かけてそまちし人のことのは
見るまゝになみたなかれてよと川やつねよりこひのまさる水くき

閨打歎戀

はかなくも猶そたちよる玉すたれかけはなれてはいはぬ言葉に
玉すたれかけてそかこつ吹風のいりかよへともいはぬこゝろを
たまたれのかゝるへたてもなからましいふとのはのまことなりせは

寄思南人

中々にふたかたなからあひも見すいつれよかれむ心ならねは
こなたにわくる思ひもふたかたの思ひに猶やおもひまさらむ
こひしなむけふりの末も二かたに思ひみたれてたちやまよはむ

隔東西人

たつた山こえゆくよはの松風におもひそいつるつまことのこゑ

不言在所戀

そことたに杉たつ門ををしへなむ心のまつはよしかたくとも

不開門戀

明やらてさしもつれなき心にはなとをしへけむ杉たてる門

戀夢

見る夢をいつかうつゝの契にはむすひもかへむさよの手まくら
思ひ寐に見るもはかなきちきりにておなしうつゝの夢の手まくら
さゝかなる夢のちきりもむかしにて見ぬとは見えぬ人のおもかけ
ほの見てしやみのうつゝのなこりとてたえ〳〵のこる夢もはかなし
あふと見てつらきうつゝにかへるさのなこり露けき夢のわかれち

戀面影

人心さしもへたつるうき中にたゝおもかけの身にはそふらむ
見しよはの夢のちきりのそれはかりはかなくのこる人の面かけ
うきなから面影たにものこらすは見しよの夢を何にしのはむ

戀命

つれもなき人の心にならひてや猶こひしなぬ命なるらむ
こひしなぬ命につけておのつからあらはあふよをまつもはかなし
いかにせむあらはあふよのいのちたに心にかなふ此世ならねは

戀天象

心あれやしのふの里の夕月夜ひかりをさふるそらのうき雲

寄月戀

うきなからその面かけにかよふやとなかむる月もかきくらしつゝ
いてなはとたのめし月のそらとを我さへいひてまつもはかなし
よしさらは春や昔のなこりなくくもりもはてぬ月の面かけ

めくりきてほとは雲ゐの月はかり昔やむかしの袖にことゝふ
月ことにわすれかたみとなかめては面影なからたえそはてなむ
たれゆゑになる身のかけそさそひても人には見せよ秋のよの月

寄風戀

夕まくれまつにかよひてこぬ人のつらさ身にしむ風の音かな
こぬくれもおとせぬ風はたかかたのまつにかよひてつれなかるらむ
言の葉はふきもつたへす音にのみきくをたよりの風もはかなし
とのはのたよりも今は吹かはるあらしにつけて袖そしくるゝ

寄木枯戀

露しくれかゝる思ひの袖の色をふきもつたへよ庭のこからし

寄雲戀

へたてなく見ゆる心におのつからたのみもかゝる山のはのくも
峯の雲はてはたえなむちきりともしらてあらしになひくはかなさ
かけてのみしのふの山のかひもなくよそにうつろふ峯のしら雲
人心あらしにきえてものそ思ふかゝるかたなきそらのうき雲
ゆきあはむちきりもいつとしら雲の中空にして消やはてなむ
こひしなむ身の行末と思ふにもきえてかなしき空のうき雲
いつまてかかけてこふらむ峯の雲あとなき中におもひ消なて

寄烟戀

おなしくはつらき心をなひくまて思ひのけふりめにもたゝなむ
うき人を思ひたくもの夕けふりなひくもよそのすまのうら風
きえわたゝおもひのけふりいつまてかなひかぬ中にくゆりわふへき
ゆくへなき空のけふりと身をなさはなひかぬ人もあはれとや見む
ゆくかたもなくてや空にまよはましあふにかへたる烟ならねは

寄雨戀

雨になるものともしらてくもりゆく空をうれしとまちそくらしゝ
さはるらむと思ふ心もかきくらし袖にふりそふよひのむら雨
さはらしとたのめしくれもふる雨の心にかゝる軒のたま水
ほともなくはれぬるよひのむら雨をやかてかことにとはぬつれなさ
さはりつるちきりも今はむかしにてわか身ふりぬる雨の夕くれ

寄時雨戀

人心あらしの風にかきくれてなかむる袖もうちしくれつゝ

寄霞戀

空にたつうき名もしらて春ふかく霞のころも思ひそめてき

寄霧戀

人心きりのまかきのへたつれははれぬ思ひそゆくかたもなき

寄露戀

うき中に猶もきえなて袖の露いつまてかゝるもの思ふらむ
小さゝ原あはてこしよの袖しらてたれかこつらむわかれちの露
わかれこし心のやみにかきくれて袖のひるまもしらぬ露かな
消思ふ袖はひるまも名のみして猶ほしあへぬ露のぬれきぬ

寄雪戀

たつね見よまつに日数のつもりても猶雪をれぬふかきこゝろを
わかれちをいそかす雪のひかりかたたゆるはかりはふりもつもらて
いかはかりをしむとかしる跡つけて出ゆくけさの庭のしら雪

寄水戀

あふさかの關の清水やこえかねてなかるゝ袖のなみたなるらむ

寄山戀

夢にたにあはぬためしのうつの山うつゝにしもと何おもふらむ

あふとは山をへたてゝ遠く〳〵もおりゐる雲のたえしとそ思ふ

いこま山立まふ雲のやますのみこゝろにのりて人そこひしき

ちりひちの数ならぬ身は山とのみつもるかひなきなけきをそこる

寄野戀

野となりし人の心をかけてのみしのふもはかなふか草の露

寄原戀

今はまた思ふもとほき面影になみたみたるゝまのゝかやはら

寄里戀

あれはてしうつらの床よ今さらにとはれむものかふかくさのさと

寄關戀

さらに又關のこなたにたゝすかなこしは夢かあふさかのやま

あふ坂はよしやへたてゝかたくともふみたにかよへせきの岩かと

いかにせむかけもとゝめす不破の關あれのみまさる人のこゝろを

ふみたにもかよはさしとやもしの關すゑてゆるさぬこひちなるらむ

寄川戀

はかなしやしらぬあふせにおりたちて袖しみぬらす中川の水

こひわたる思ひのふちよあすか川なとかあふせにかはらさるらむ

水の沫のきえねとなにゝ思ひ川なかれてかゝるあふせあるよに

此まゝに猶なかれてのゆくすゑもうきせた見えぬなか川の水

もの思ふわかみなかみのふかけれはなみたの川のひるときもなし

うきせのみありてたゝすゝみた世川したにのみはふ心なるらむ

たえ〳〵になりし音羽の川水にかはるこゝろの見えもするかな

いつみ川いつ見しまゝに思ふにも遠きわたりは袖ぬらしけり

寄袖川戀

袖川やなけきこりつむ年も經ぬいつのくれかはなかれよるへき

たかかたになかれよりてかそま川や又このくれもひきたかふらむ

寄淵戀

身をなけて今はしれとや思ひ川あふせなみたのふちとなるらむ

寄瀧戀

音なしの瀧のしら糸しられしとせくに心もむすほゝれつゝ

たれ故とおつる白玉いはすとも見せはやしらむ袖の瀧つせ

寄橋戀

こぬ人をよひ〳〵ことにかけてまつ心やいかにうちのはしひめ

よゝにたにあはれはかけよわすられて我身ふりぬるうちの橋守

あふこともたえてなからのはしはしら何面かけの立のこるらむ

橋はしらたつ名なからはくちもせて絕にし中に何のこるらむ

寄舟戀

わすられて身をうら船のよるかたも跡なき波にこかれわひつゝ

寄浦戀

こぬ人を猶こりすまのうらみても夕のけふりたちそまたるゝ

かりそめの見るめもなみにほしあへぬあまの袖しのうらみられつゝ

寄木戀

いかにせむあはれとたにもいはしろのむすひかねたる松のつれなさ

たつね見よしるしの杉にたちそひて心のまつもおひしける門

いつまてかつれなかるらむ年へても猶そよにのみねの松かえ

いかにせむすくるひはらにこりましてなけきつむ身の末もあはすは

末とほくたれかちきりてあはれともよにいはしろの松はつれなき

我たゞはつれなく見ゆるときは木をかはらぬ色とたれ契るらむ

寄花戀

みわの山霞かくれの花の香も風のたよりはありてふものを

はかなしや年にまれなるちきりたに結ひかねたる花の下紐

雲にたつうき名もしらて山さくら思ひかけたる花のしら雲

寄紅葉戀

うつりゆく人のなけきの露かけて秋の色こき衣手のもり

色かはゝ情を見てもおもひやれ秋にはあへぬ袖の千しほを

寄落葉戀

我袖に色をのこしてうつりゆく人のこゝろの秋のもみち葉

寄草戀

あさちふのふかきを人の心にておかれせすれくちきりもかな

草の名のいつまてつらくかゝにのみ見えへたつる身ならなるらむ

跡たえてとはれぬ宿のかきねにもうゑはおいかてこひわすれ草

あさちゝははわするゝ草の何なれやかれし宿にしけりそふらむ

ふみわけし昔をかけて露ふかく跡しのはるゝ庭の浅ちふ

寄忘草戀

ことのはのゆきゝもかれてわすれ草おひしける中のかよひち

寄款冬戀

いはぬ色にさきて露けき山吹はわか下そめの思ひなりけり

寄菖蒲戀

うきになほ心ひかれてあやめ草袂になかきねをそかけゝる

寄夏草戀

夏草のなひかぬ人をふかくのみ思ひいる野の末もはかなし

夏草の深き思ひもゆくはかりかりそめならて人のとへかし

かりにのみとひくる中は夏草のふかきちきりもむすひかねつゝ

寄薄戀

それそとはほにこそいてねしのすゝきしのに露ちる我袂かな

いかにせむ秋のさかりとなる袖も猶露ふかきしのゝをすゝき

寄月草戀

たかかたにうつりそめてか色かはるつらき心のつき草の花

寄竹戀

うきふしに何を思ひてくれ竹のよそに心をへたてそめけむ

なよ竹の心よわきのなこりまてなみたの露にふしなひきつゝ

寄篠戀

夢路にもあはぬたふしのきゝわけて袖ぬれかへるあかつきの露

寄蘆戀

難波かたたにをか人のうきふしに入江のあしのよかれてあけむ

寄鳥戀

鳥の音もわかれをいそく心にはおそしとのみや猶かこつらむ

久しただにちきりおかすに猶いかにうらみをかけのあかつきのこゑ

ほつきのまれのたよりもかき絶て今は雲ゐのよそのかりかね

音をこそなくたのむの雁の跡たえてよるかたもなきみよしのゝ里

寄雁戀

よそにのみかけはなれたゝ玉つさに雲ゐの雁の音こそなかるれ

寄獣戀

わすれ草かりてやかひしのる駒にまかせてたにも人のとひこぬ

寄蟲戀

きゝてたに思ひも出よちきりおきしこの夕くれのまつ蟲のこゑ
こぬ人を尾花の波のよる／＼は音にあらはれてまつ蟲そなく
[illegible]なきてつけしも身の秋としらてきゝけるきり／＼す哉
うき人の心の秋にふるされし身はすゝむしの音をのみそ鳴
はかなしやたれの見るめもわれからとおもひぬもにすむ蟲の契は
[illegible]蟬もなみたれて秋ちかき身はうつせみの音をのみそ鳴

寄蜘蛛戀

かけそへてこよひはかりとまつくれのたのみられしきさゝかにの糸
さゝかにの糸のたのみもむかしにておもひ絶ぬるやとの夕くれ

寄螢戀

こぬ人のそなたの空にゆくほたるおもひこかれてまつとつけこせ
[illegible]たえてもえわたるにも螢よりまさる思ひのほとはしらなむ

寄蟬戀

[illegible]人の心うらもなくもなきてそこふるせみのはころも

寄衣戀

[illegible]とたにかけよ夏ころもきこそはうすき心なりとも
[illegible]つゝにむれきてやかへす夢路もかひなからむ
[illegible]ふとのかたしく床にさよ衣かさぬるものはうらみなりけり
[illegible]衣[illegible]こそかたからぬよそにはたてぬ心ともかな
こひ衣あはぬ月日をかさぬとも心なからはたにかへたてむ

寄糸戀

一[illegible]すはかた糸のあはぬつらさもかゝらましやは

寄枕戀

さためても涙の川のうきまくらなかるゝよひはいふかひもなし
さたむへきかたこそなけれ枕たにしらぬ一夜の夢のちきりは
泪川夢のあふせもよとむまてまくらなかるゝなみのよる／＼
かひなしやかはすとなしに夢はかり見るを契のさよの手枕
はかなしやいかにねしよのたのみたにしらぬ夢路をたとる枕は

寄筵戀

[illegible]きしのふ袖の涙をぬく玉の緒となりはつる閨のさむしろ

寄弓戀

おきふしにとるとはすれとあつさ弓つよき心はよわるともなし
心ひくかたやあら木のしらまゆみよるとはすれとなれぬ契は

寄鏡戀

ますかゝみくもる涙にしられけりうつるこゝろのかけは見えねと
うつりゆく人のなけきにます鏡見る我かけもかはるころ哉
ます鏡我身も影となりにけりうつれはかはる人のつらさに
うつろひし人のかたみと見るかひもなみたにくもるます鏡かな

寄玉戀

つゝみあへぬ袖の涙もしら玉とみたれてものをおもふかす／＼

寄琴戀

かき絶てわれをはとはぬつまとのたかまつ風にふきかよふらむ
琴の緒をたつやうき名のなけきさへくはゝる中はねこそ絶せね
なくさめむことこそなけれかき絶てとはれぬ中のこゝろほそさは

寄籬戀

こえかたき山とそ見ゆるうき人の心へたつるやとのまかきは

寄夢戀

さよ衣かへす契もいたつらにゆきてはきぬる夢のかよひち

さやかなる夢にいくらのちきりとて闇のうつゝもつれなかるらむ

寄涙恋

恋ころも思ひみたるゝかす〳〵になみたもまなくちるたもとかな

つれもなき人を思ひの涙とてわかこゝろにもまかせさりけり

袖の色もかゝらましやはこひ衣うきをかさねぬなみたなりせは

つれなさは猶もかはらて涙のみ年月ふかくいろそうつろふ

寄虫氏待恋

きえかへるちきりもしらて深くのみ結ひおきける露の夕かほ

ほともなき契をかけてしのふかな草のまかきのはふかほの露

はかりまて身にしむ色のかゝるにもふちなみならぬちきりそと思ふ

雑哥

年のうちに春たちける正月朔日に

春といへは年のうちよりかすみしも又あらたまる明ほのゝ空

十二月廿日はかり春たちけるに

春きぬと日数ものこる有明の月のはつかに空そかすめる

正月末つかた前なる窗のぬけしに

もえ出る春しもおちしこのはかな老のくち木のほともしられて

かへての若芽のいとあかきを見て

おしなへてみとりにはるのこのめのみしとりかへてもにほふ色哉

櫻をうつし植て花まつ人の心をよめとあるに

さかぬよりまたき心をうつしうゑて立ならすらむ庭の木本

しをりに人の哥こひけるに

わけのこす花のしるしとよしの山ふみ見る道にしをりをそする

花をゝりて人のもとに遣すとて

君かためをらぬさくらの枝たらはをしかりぬへき花の色かな

日ころとはむと思ふ人のもとに花の比いひ遣しける

此ほとは花のたよりになりぬへしさかりすくしてとさらにこそ

黒部村阿彌陀寺のたのみにて古寺花盛かまのうらの

霞をよめる

咲にほふ花にひかれてまうてくる人めもしけきあみた寺の庭

春ふかみうらのとしほはやかぬ日もかすみにけふる夕なきの空

ある人のもとよりいとおもしろきやへさくらをゝり

ておこせけるに

一枝にあかぬ色香はやへさくらとへといはねとゆきてこそ見め

やよひの廿日ころ花見にある人の家に人々まかりて

哥よみけるに庭の池にをし鳥のあまたむれ居けるに

立いてをわかれをかねてをし鳥のともにむれゐる花のこの本

三月廿日ころ名古屋にものしけるとき白子の萩かや

にて

宿の名のをりにはあらぬ春なれは君か言葉の花をこそ見め

吉哥の何も題にて落花

さくら花にほふ日数のすくなくもたれかはちるをゝしと思はむ

北村何かしのすみれ草といふふみをおくりて侍ける

に

紫の色にもしるしすみれ草つみあらはせるふかきこゝろは

植松有信のものいはぬやまひをわつらひてこもり

けるに或人のもとに山吹をおくるとて　いはぬ色に

たらふとしらて軒ちかくうゑてくやしき山ふきの花

　ゝあるを見て

いはぬ色にゝほふとすれとみならねはついひにさてやはやま吹の花

　大滝の長楽寺の藤はむかしの種なるよし聞て

なとりたにかゝる色香を名にたてる昔やいかにふち波の花

　京に在ける卯月の末つかた去年の此ころ故郷をたち

　いてしときを思ひて

立出し去年の月日とおもふにも故郷とほくしのふけふかな

　五月廿日山田世義寺にて夜郭公

なけやなけおのかさ月もほとゝきすはつかになりぬ有明の空

　山田よりかへらむとしける時夏別といふ題にてよみ

　ける人々の哥を見て

見わたせは山田のきたへとり／＼に玉をみかける露のことのは

　和泉國堺の某のそのあたりの八景を題にて人々の哥

　こひけるに濱屋中螢

いさりひぬよはもあしやの里ちかくいそへにもえてゆく螢哉

　大矢中門の螢の哥あまた見せけるを見て

露ふかき言葉のいかす／＼にひかりもそひてとふほたるかな

　加藤有清の住はしめたる家の庭に荻を植てその宿の

　名を荻園とつけて哥こひけるに

吹風もいくよの秋をたきそらむときのそのふにやとりさためて

　萩の花をゝりて人につかはすとて

をる袖にとまりぬるかな露なから見せましものを秋萩の花

　京にありけるころ八月十五夜雨のふりけれはふるさ

　とによみておこせける

かきくらしみやこは雨のふる中もなほかけ見すやもち月の空

　八月十五夜雨ふりける九月十三夜月のさやかなりけ

　れはよめる

あま雲のなかはの影やそひぬらむこよひの月のいとゝさやけき

　長月のはしめつかた伊豆國人竹村茂雄人々にうたこ

　ひてかゝせむとてものしけるさうしのはしめにまつ

　こひけるに書へき哥もふとおもひいてねはよみてか

　きつけゝる

かゝる色も染はしめたる山くちと見てやゆるさむ淺きことのは

　桂の紅葉をすりて月のかつらと名つけたるたにさく

　に人の哥こひけるに

手にとりてたれうつしけむ久方の月のかつらの秋のもみち葉

　遠江國の人々の九十番哥合の判しけるに暮秋紅葉と

　いふ題に秋のゆくへのしたはれてとよめるをほめて

梢にもまさる心の色そめてくれゆく秋をしたふことの葉

　同國中嵐に心なきいはきの山とよめるに

心なきいはきの山そたか／＼にふかき言葉のいろはそめける

　年のうちに春たちけるとしくれに

春きてものこる日數はみな人のをしむにとまる年にや有らむ

はきかよふ袖もかすみて市人に春たちましる年のくれかな

　伊賀國に縣杜戀湊といふ所ありとて其國人のうたこ

　ひけるに

うき中に年ふるこひの杜なれやいとゝなけきのおひしけるらむ

わひはつる戀のみなとのとまり舟さそな思ひに身もこかるらむ

思ふといふことあまたあるうた

思はぬをおもふ思ひはおもふ人おもふおもひに思ひまされり

父のめし出されける御よろこひに若山にものせられけるをり　御前にて講説なとつかうまつりしに有かたき御こと〳〵もありけれはかへりこのち君思海と
いふ題にて人々に哥よませられけるに

おきつ波たちても居てもきみか海の深くみえすわすれやはする

古事記傳書をへられける時その書の中なる神の御名人の御名を題にて人々に哥よませられけるに倭武命

とひかけり又もゆくへのしら千鳥いつこをはかと跡しのはまし

父翁のあふきに故郷のはるけさいかにといふ哥をかかれたるに人のうたこひけれは

あふき見しその面影もみえ遠くへたゝりにける旅ころもかな

かくよめるは三十年はかりさきにかゝれたるなれはなり

且葉何かしの父翁のかゝれける色紙短冊なともたるにうたよみてとこひけれは

淺くのみ書なかしたる水くきもよにゝこりなき跡とこそ見れ

京に在けるところ父翁のもとより四月のころ人背といふものをしたるに父ものよくかまるゝよしよろこひおこせて　思ひきやおいてくちたる木に春過てかゝるわかはの又おひむとはとあるかへし

とことはに千代もさかえむしるしとて生る老木の若葉なるらむ

京にありけるころ火うちや老人鐵石軒年百十歳なるか哥こひけるに

めつらしな百年あまり十年へて猶其わさをうちもたはます

おなしころある人の兄なる人のもとにかの鐵石軒老人のうちたる火打をおくるにそへてやるへきいはひの哥こひけるに

長きこのよはひにあえて手にならすうち出る火のつきぬ限は

同し所にありけるころ藤何かし我故郷ちかき名残村といふ處にはやくすみけりとて尋ねきたりける後よみて遣しける

あひ見しも故郷人のこゝちしてひと日の名残こひしかりけり

おなし所に在けるころ大平のもとへ思ふ心を

いせの海こひしからすはあらねともかへるそつらきおきつ白波

殿村常久みつから春秋の哥よみて合せたるを判しつかはしけるにおもしろきこれかれ有けれはおくに

花紅葉深き梢のましらすはたか〳〵あさき色やなからむ

直道より高蔭のもとに弓の哥をあまたよみてことわりたこひに遣したりけるに　あつさ弓おしてもいはしよしあしをちからなき身はわく方もなしといふ哥よみておこせけるよしきゝて

よしあしをいひもはなたてあつさゆみおしこめてける心よわさよ

ある人の鞆の御職とかいふになりたるよしきゝてよみてつかはしける

紫の深きふくみもろ人にこはなるまりのしるし成けり

菩立法師のあかさといふものゝおもしろき枝さしな
るを杖につくりて哥こひけるに

千年までつくとも猶やあかさらむよにめつらしき君かこのつゐ

消息ふみなといれてかよはすへき料につくりたる袋
に書つくへき哥人のこひけるに

うち見ればほとこそなけれ千萬のことをもこめてかよふふゝくろ

ある人の盤のうたよめといひけるに

すかたにも波しつかなるあし原にうきふししらぬよをすくすらむ

平田篤胤の年ころ道に心さしふかくわか故翁のあら
はされたる書をも明くれ見つゝふかく信していかて
對面せはやとおもひわたりつるを道のほと遠くかつ
は心にまかせぬ身にてついにそのとたくてやみぬる
ことゝつねにくちをしう思ひためるに去年の三月の
末つかた夢に人の來て鈴屋の翁のこゝにものせられ
てまかりつるか今なむかへられしとつけるにおとろき
てとるものもとりあへすからうして品川といふあた
りにおひしきてまつ思ふこゝろのかたはしうちかた
らひなとしてをしへ子の數にさへなむくはゝりぬる
と見たりつるはかつ〳〵もとしころねかひつるほい
かなふこゝちしていとうれしう思ひけるまゝに猶ゆ
く末なかくしのふたよりにもとやかてそのありつる
さまをうつさせてこれに哥よみて書くはへてよとあ
るに

わたつ海のふかき心のかよひてやそこには見えし人の面かけ

夢にてもかたる見るめをかつきつる契はふかき伊のうらみつら

ある夜夢に人の白髪の翁の瀧見たるかたかきたる繪
をもちきて此うたよめとありけれはよめりと見たり
つるをわすれにけれはつとめてよめるさてその瀧は
ふるの瀧とそきゝし

見る人も年をやふるの瀧たらむみなかみくろきすちなかりけり

百人一首の哥もてふしの山の形をかきなせるを見て

言のはをかのこまたらにつみあけて雪をまやなす山はふしのね

播磨國林田の神社に白井の水といふ有よしにてその
神主の哥こひけるに

あするよもぬるむよもあらし林田の神のしら井のこの眞清水は

あれはの松と緒絶橋とを一首によみてと其國人のこ
ひけるに

かきならす緒たえの橋のつま琴にかよふあれはの松風の聲

後藤親明の家なる松のうたこひけるによみてつかは
しける

いつとなきなかめのみかはたのしさは千代をともなふ宿の松かえ

軒端に松うゑたる人の哥こひければ

年高く昔はるかにあふき見て植しよしのへ軒の松かえ

川原木造村の長閑寺といふ寺の庭に松を植て法庭植
小松といふ題にて人々に哥こひけるに

寺の名のなかくたのしき友とてやうゑてみのりの庭の若松

廻文

なかむらむかとをとひなは草に木にさく花人をとかむらむかな

星

てりわたる光のみかははるゝよの空には数もまさるほしかな

風

吹風はむなしき空をかよへはや高くきこえて色なかるらむ

涙

青海原ふかきみとりに色け出ていとゝめにたつ波の白たへ

すれはく跡よりきてわたつみの波の花こそときはなりけれ

いそしるく岩にたつのみかきく音もみゝにさやけきおきつ白波

海眺望

うら遠くこきゆくまゝにおのれさへ跡なき波のあまのつり舟

名所

いもせ山心へたつるうき中になかるゝ川やなみたなるらむ

關

今は關心よゝおもふはのせき跡なきあとをしのふたひ人

瀧

よりかけし山のかひなくちる玉をぬきもとゝめぬ瀧のしら糸

よにたかく音もきこえて雲ゐよりなかれおちくる山の瀧つせ

松

松かえのみはふたかみや千代をへて花咲にほふ十かへりの春

浦松

うら波のよするときはの松かえに秋なき花そ咲かゝりける

大淀の松をよめる

木本によせくる波、音たかく名にこそたてれ大よどの松

嵯峨山松

さかの山松もみゆきのいにしへをさそなときはに思ひいつらむ

竹

うきふしのしけきにつけてさき竹のそむきそめける此よなるらむ

江蘆

難波かた鹽みちくらし見るまゝになみに入江のあしのむらたち

風ふけはよせくる波に音そへてさわくいりえのあしのむら立

苔

川上のゆつ岩むらのこけころもなかれていくよかさねきぬらむ

硯

すゝりこそ心にかなへすみの色のこくもうすくもするにまかせて

ものかゝてさしもしたしきすみ筆も硯にうとくなれる此ころ

笛

ふけゆけはちかくなりぬるこゝちして聲すみまさるよはのふえ竹

遠くすみちかくきこゆる笛のねは空にあらしのふけはなりけり

きく人の一ふしありといふはかりいかてふきえむふえ竹のこゑ

弓

とるまゝにたけき心もおのつからふりおこさるゝあつさ弓かな

とる人の心をさへにひきたてゝゆみそ御國のたけきつはもの

ともの音きこえぬ國とあつさ弓心ゆるふなますらをのとも

杖

つく杖にたすけられすは年高き老の坂路をいかてこえまし

船

おきつ波よるひるともなくこきいてゝさたかちはきぬあまの釣舟

くちてたにすつへからぬを思ふにもこれそらへなきらきたからなる

夢

わかゝりし昔のゆめそなか〳〵においのねさめの思ひなりける

曉燈

ともし火の影もほのかにねやの戸のひましらみゆく明方の空

閨中燈

たえ〳〵にふけゆく影のさひしさもすむ宿からのよはのともし火

さよふけてさひしきかけも宿からは友とそたのむ里のともし火

山家の哥とも

さひしさに猶もの思ふすまひともしらてむすひし山かけの庵

すめは又そむきしかたそしのはるゝこれもうきよのさかひの山里

山にてもすまぬ心をみやこ人いかにととはゝいかにこたへむ

いとひこも猶いとはしきよしの山心のおくははてやなからむ

のかれいる山のおくにもすみうきは猶よにふかきちきり成らむ

世をいとふ深き心のたくひよりよし野のおくにのかれそめけむ

さひしさのうきよにまさるやまへ哉されはそたえて住人のなき

聞しにもまさる嵐にすみよさもかくやとたのむみ山への里

山深くなふめてしりぬうきなから猶思ひ出のあるよなりとは

よのうさに思ひこりつゝとふ人を軒のつま木のまつもはかなし

すみよしとつけたにやらしとふ人をまつにそにたる山かけのいほ

よのうきにかへてすますはさひしさのしのはれぬへき山のおくかは

思ひこし心はかりはあられともすみはてぬへきみよしのゝおく

山ふかくらつむはかりすみなして故郷人にとはれてしかな

まつ人のとはぬはかりそすみなれし此山里のおもひなりける

とふ人に此山里のすみよさをかたらはやかていてかてにせむ

山ふかきちきりありてや白雲のかゝるさひしき宿もすみよき

ひかりかはよのうきこともよそなれはたにの庵はもの思ひもなし

なれぬれはみ山のおくのさひしさも深きあはれとなるすまひ哉

いつしかと岩のかけちもおもひやる心にならすみよしのゝおく

さそはれぬ心つよさをわれなから思ふにくるゝ山のはの月

ほとちかきわかよもかくとなかむれはなみたそおつる山のはの月

思ひしれ山よりいつる月見てもなほすみかたき此世なりとは

よの中に猶もつれなくすみはてゝ山にはいらしあり明の月

山家風

いとひつるよのうきこともかくはかりきゝやはわひし峯の松風

聞なれぬ音はの山のさひしさに人まつ風もふかぬ日はなし

たへてきくものとや人の思ふらむ心をすますみねの松風

さひしさも思ひかへしてすみ染の袖になれゆく峯の松風

山家松風

つれなくて猶きゝいれぬ心ともしらてはけしき峯のまつ風

はけしきもたへてすむ身のつれなさによわるかなるゝ峯の松風

よのうきはきかれてきかぬ山里も猶しかまし峯のまつ風

山家嵐

さりともと思ふ心そ[illegible]りぬるなれにもおなしみねの嵐に

夢にさへうきよのかるゝすまゐかたたえぬ枕の山のあらしに

山家雲

みやこのみ雲のたちゐにしのはれて心もはれぬみ山邊のいほ

すむ人の心はいさやしら雲のおくゆかしくもみゆる山さと

よのうきをへたつる雲のおく山もはれぬなかめに住そわひぬる

山家月
山里によのうき雲をのかれすは心もすめる月は見ましや
山家水
はつかしなすまぬ心にくむかけのうつるもきよきやまの井の水
猶すまてふりまさりゆく影見れは深くまるゝやまの井の水
かくれすむ谷の軒はみらもれ水ありともいかて人にしられし
すむ人をさそひかほにも音つれてうきよにいつる軒の谷水
よの中のうきにかはりてこゝろさへすみてきゝよき谷水のおと
むすふ手にゝこるはかりそすみなれし心にあかぬやまの井の水
山家木
かけ高き軒端の松そ年ふりしわかやますみのしるしなりける
山家松
月をまつゆかりに人やなかむらむわかすむ山の軒のまつかえ
田家
明くれに見やる心もふく〳〵とかと門のいねのたちさかえつゝ
故郷松
ふりしよにかはらぬ色を尋ねきてたれかしのふの軒の松か枝
故郷竹
おのれ猶とはにさかえて故郷のうきふししらぬ軒のくれ竹
閑居
こもりすむ人の心もおく深くやへかきめくるそのゝくれ竹
とはれしの心かまへもよにふかき竹のそのふのおくのかくれか
閑居水
朝夕にくみて心をやり水のおとよりほかにとふ人もなし

○後鈴屋集前篇下

古宅
しのふ草しけらさりせは猶いかにふるやの軒端あらはならまし
仙家
おいらくもよそなる谷のかけしめて千代とことはにすめる山人
山人のときはのかけとしめてすむ軒端の松の千代やいくちよ
樵夫
こりつみてかへるゆふへや遠からむおたし山路もおもきつま木に
菅公
なか〳〵に心つくしのうき雲もひかりをそふるあり明の月
小野篁
今もなほ波路はるかに八十嶋の昔をかけてしのふらふね
小浦朝道の二月のころ若山にかへるによみて遣しける
北へふく雁のわかれはよそに見てきみのちにかへる君をこそ思へ
肥後国の人々二月中ころ国にかへるに
秋とたにちきらは雁のわかれもさかへるつらをもなくさめましを
二月末つかた友直枝の出羽国にかへるに
そらとも秋とちきらはなくさめてかりの別とかくはなけかし
岡山正興貞光保の江戸にくたりけるによみておくる
春の日に思ふとちゆくこのたひはたひともあらし東路のそら
三井高匡の四月廿日ころ江戸に木曾路をくたりけるによみてつかはしける
たひ衣きそのやまちの郭公まちえて袖の涙かゝるらむ
五月のはしめつかた山田よりかへるとて人々にわか

れをゝしみて
かりそめのわかれと思へとあやめ草うきに袂のぬるゝけふ哉
わかれゆく袂にけふはあやめ草五月の玉とちるなみた哉
かへりなむとしけるに雨ふりけれはとゝまりて寄よ
みけるに人々のうたを見て
ふる雨のさはるつらさも露はかりかけて思はぬ玉のかす〳〵
千家清主のいせの國に久しくありて出雲國にかへる
時わか京のやとりに立よりけるに
あふとてもいつもの國と思ふにもいとゝわかれのをしきけふかな
春きりのたちわかれこし故郷にかすみを見てもまちやわふらむ
十月はかり山際貫弘の江戸に下りけるによみて遣し
ける
しくれゆく嵐の雲のほともなく立かへりこれあつまちのそら
三浦雪溪父春とむとてしはすのはしめつかた吉山に
かへる時
たひ衣雪を袂に分かへて立かへりこれはるのやまちを
遠江國鈴木書緒山下方朗此里にひさしくありてかへ
る時よみてつかはしける
故郷にかへるわかれもたひころもなれてはさすか立うかるらむ
尾張國大舘高門か家にやとりてかへる時わかれををしみて
たか〳〵に一夜やとりてたひ衣あかぬわかれをたちかさねつゝ
父の身まかりけるとふらひに植松有信のきたりてし
はし此里にありてかへりけるに

行末もきつゝなれにしをり〳〵のたひねわするないせの濱荻
京にのほりけるにむく本にて雨ふりけれはむくもと
といふとをかくして
鈴鹿山いつこなるらむくもとちてそことも見えぬ雨の夕くれ
龜山の樋口垂水の家にやとりてかへる時
宿からにたひねわすれて故郷の夢ともいはすよころへにけり
旅
たち出しその曉も日數經ておもへはとほしふる里のそら
故郷の夢のわかれにいてしよのあかつきかけて露そこほるゝ
旅行
風さわくをさゝか露のかり枕みやこの夢もむすひかねつゝ
海山のかはるなかめに故郷をしのふこゝろもゆくたひち哉
春旅
故郷をいとゝへたてゝのとかにもあらぬたひちのはる霞かな
さくらあさのをふの下草ひき結ひ花にやとるか春のたひ人
月に見てよるも心はゆくたひのかりねうれしき花の木本
朧なる月に見るよはふる郷のゆめともいはぬ花の下ふし
秋旅
いとゝしく心つくしのたひねかた月のかけもる松かねのとこ
月前旅
影すめる月をかりねのあるしにて露のやとゝふ野への夕くれ
草まくらむすふかりねのよころへて袖になれゆく露の月影
旅月
ふる郷を雲ゐのよそと思ふにも月こそたひの友となりけれ

羇旅月

みかさ山ふる郷人も月を見ておもひやいつるもろこしの空

旅宿

なか／＼に心はゆかて草まくらなこり露そふゆめのかよひち

草枕思ひいてゝやみやこ人ちきりし月にうかふおもかけ

わけてたにぬるゝためしのさゝの葉にやとかる袖の曉のつゆ

旅宿朝

故郷を見はてぬ夢のかりまくらなこり身にしむ野邊の朝風

おきいつる朝けの野へのさゝ枕しのにみたるゝ袖の露かな

旅宿露

よもすから夢はむすはてさゝ枕露おきあかす野へのかりふし

旅橋

かけてのみ思ひわたれと故郷のふみもかよはぬ天のはしたて

羇中關

たひ衣いつかはわれもかへりきてこえゆく人にあふさかのせき

都にて音にきゝこし秋風も今そたもとにしら川の關

旅泊

うら風にかよふみやこの夢路まて跡なき波のうき枕かな

述懐

うきなからさすかにえしものかれぬやよにすむ人の心なるらむ

かくはかりおほくの年はつもれとも猶数ならぬ我身なりけり

花さかてしけるなけきの末つひにいかに我身のならむとすらむ

夜述懐

おろかなる心のやみをなけくかなすみわたる夜の月を見るにも

寄竹述懐

うきふしのしけきものからくれ竹のとはにこのよをかれせすも哉

懐舊

ありしよをしのふもことの數々になみたみたるゝ袖のうらへかな

父の七年九月　五日夜影前會兼題に懐舊

七年の秋のしくれをかさねてもなほことの葉の色はまさらす

秋ふかくしのふ心の色はかりそめはやいかにけふのことの葉

中里常岳追慕會兼題寄花懐舊

春ことに見るもしはしの花の色をなかきかたみとしのふはかなさ

九月廿五日夜影前會兼題に花

言の葉にうつしてけふや手向ましをるをゝしみし花の色香は

寄山吹懐舊

山吹の花にむかしのことゝへはこたへぬ色も露そこほるゝ

三月廿日植松有信追慕會に暮春懐舊

めてしよをしのはぬたにも花鳥の色音はをしき春の別を

ある人の七年のとふらひに残暑

きゝしよかたみの露は置やらて猶もあつさののこる秋哉

父の身まかりけるはてに人々集りてうたよみけるに

紅葉を

ちり過し人のよかなしこその色にかへる紅葉を見るにつけても

父のみまかりけるとしの九月廿九日山室のはかにまうてゝ

ふち衣かふる月日はきても猶なみたははてなき我たもと哉

父の十三年の九月廿五日夜影前會兼題に秋懐舊

をりふしにしのふなかめも露きえし秋こそことに袖はぬれけれ

植しよをしのふ心も秋ふかくそめて色こき庭のもみち葉

かへりこぬ昔をしのふ秋の夜にたれまつ人か衣うつらむ

冬懐舊

神無月しくれぬ空もかきくれてふりしよしのふ袖そぬれける

山田西山政年の周忌のはてに神無月廿日はかり人々集りて哥よみけるによみて遣しける

時雨にはあらぬ月日もめくりきてしのふ袂をぬらすけふ哉

加茂大人の十三年の十月晦日にしのひてよめる

十年あまりふりし時雨の音にのみきゝても袖のぬるゝけふ哉

父の三年の九月廿五日夜影前會兼題に雪

下をれしそのよをしのふなけきさへたへぬなかめの宿の白雪

稲掛大人追善に寄風懐舊

めにこそはよし見えすともなき人の音たにかよへ庭の松風

なき人をしのふの露もかけそへて袖ふきしをる軒のまつ風

寄水懐舊

さらに又むかしにかへるなみた川なき人こふる袂はかりは

中里常秋の追慕の會に海

わたの原風のたよりもしら波の跡なき人をこひわたる哉

ある人の一周忌をとふらひけるによみて遣しける

わかれつる心のやみにめくりこし月も夢かと猶たとるらむ

琴をこのみたりつる人の跡とふに哥よみてと人のこひけるに

かきひけは松風ならてことかみによすからかよふ人の面かけ

琴笛の師なる人をしのふあそひすとてある人の寄管絃懐舊のうたこひけるに

よにたえすきこえくるにも糸竹のたくひなかりし音こそしらるれ

殿村道應冬身まかりける父の年の春寄雪無常

春またてきえにし人を思ふかなのこれる雪を見るにつけても

正月十日はかりいもうとのみまかりけるに

人のよのみしかき夢を思ひねに見るもはかなき春の手枕

正月廿日はかり長谷川常雄の伜にみまかりけるに中里常居のもとによみてつかはす

さそな君さましかぬらむよそにてもおとろかれぬる春のよの夢

ある人のみまかりけるに寄花無常

ちる花に思ひよそへてありしよをこてふの夢と見るもはかなし

富山定豪の花のころみまかりけるに

君はなよいそきゆきけむ櫻花さくともきかぬしての山路に

ある人のみまかりける比その宿に咲たる花を見て

はかなしとなかめきにけむ庭さくら花こそ今はかたみなりけれ

三月中ころ中里常居の身まかりけるに

まとひつゝたちやかへるときくら花ちりかひくもれしての山路に

かねてより思ひし花はよそに見て君か別をなけくけふかな

三月はかり長井直延のみまかりけるをかなしみて雨のふる日よめる

來む年もあひ見む花の名残たになけきおひそふ春のなかめを

竹口直彦の月の夜女の花をあふきにするてもちたるかたかける繪に哥よみてとこひけるによみて遣しけ

るほとにみまかりけれは
あたらよの月と花とをよそに見てなとかやみちにちり別けむ
佐藤美道三月中ころ身まかりけるに
ふちかつらわかれし君にまつはれてなとかは花のとゝめさりけむ
四月朔日芝原春房のみまかりけるをかなしみて
花染のけさのわかれにかなしさを立かさねたる袖の露けさ
樋口垂水の男夏の比みまかりけるによみてつかはす
夏深き梢を見てもかれにけるなけきやいとゝしけりそふらむ
四月末つかた大久保松正院尼身まかりけるによみて
つかはしける
しての山きみやあひしと時鳥ことゝふわれも音そなかれける
水無月廿日はかり植松有信のみまかりけるをかなし
みてよめる
うつせみのよのはかなさもさらに父思ひしられて音こそなかるれ
八月の比林賣海の身まかりけるを聞てよめる
かなしさに秋やは人のむかしまて思ひかけゝるそての露けさ
高橋義方の八月末つかたみまかりけるよし聞てかな
しみてよめる
わかれゆく心そつらき秋やはといひしもしらぬ君ならなくに
出羽國大友久磐物まなひにきたりて此里にてみまか
りけるに人々集りてかなしみの哥よみけるに時雨を
かきくらし涙しくれて見し人のさためなきよをしのふ袖かな
神無月廿日ころ中里常岳の父のみまかりけるによみ
てつかはしける

神無月空のはれ間もなき人をしのふたもとや猶しくるらむ
神無月はかり堀口光重の父のおもひにこもりけるに
よみてつかはしける
たのむかけかれしなけきのこの本は涙も袖にさそしくるらむ
父の身まかりける比人々集りてよみける哥を見て
みな人のしのふるけふのとのはをかきあつめてそわれはかなしき
おなしころ山室のはかにまうてゝ
あはれこのこけの下にと思ふにもきては露そふちころも哉
橋本定之のみまかりけるころつねに好めりし古物語
を題にて人々かなしみの哥よみけるにすみよし物か
たりにて
かくれてもよにすみよしの里ならは又あふともあらましものを
おなしをり當座池
いひ出ぬ池の心も見なれこし人のかけをや猶しのふらむ
ある人の賀に寄若菜祝
年ことに野へのわかなのわかゝへりおいせぬ千代の春をつまなむ
寄霞祝
あら玉の春くることに立かへり霞のころも千とせかさねよ
寄梅祝
立なれてあかぬ色香を年ふかく袖にもしめよやとの梅か枝
ある人の賀に寄柳祝
末なかく柳の糸をよりかけて君か千年のたまの緒にせよ
春祝
天下もれぬめくみに野も山もそめてあまねき春の色かな

花契多春

春ことに千代もかさゝむさくら花あかぬ心をちきりにはして

ある人の賀に

のとかにそ猶いはふへき萬代のはるをかさねむ君かよはひは

齋伯道兄六十賀の屏風の繪にわさ田の稲かきたるところ

八束穂にしなひさかえむ面影もなひくわさたの秋の初風

ある人の賀に契菊千秋

咲にけり千年の秋をしめゆひて植しまかきのしら菊の花

ある人の賀に菊をゝりて人のもとにつかはさむとし
たるかたかける繪に

君かため手折袖にも露かけて千代をかさねむしら菊の花

人の賀の屏風に松に雪のふりかゝりたるに

十かへりの雪まつかえに咲花のおもかけ見えてつもるしら雪

寄松祝

春ことに色そふ松の一しほや千代十かへりの花のした染

松不改色

千代へてもおなしときはの松の色はいかにそめたるみとり成らむ

人の賀に檜松有嘉色

千代ふへき宿の軒端におひたてるちきりもふかき松の色かな

ある人の賀に契松齢

萬代に君もさかえて年高きかけをならへよ軒の松かえ

人の庭に松をうゑていはひの哥こひけるに

うゑつし植て千年なからにわかものとみとりさかゆく宿の松枝

人の賀に松の枝につけて遣しける

ちきりおく松にならへて千代も見よ此ことの葉も色はかはらし

寄竹祝

おひそはる竹のはやしの陰ひろみ末もはたかに千代そすむへき

渡邊中庸五十賀に竹追年友

心さへあひたる千代の友なれやなほきまなひのまとの呉竹

母の七十賀に寄鳥祝

ちよ〳〵とたのみつゝなく鳥の子のかひある君かよはひともかな

君かよはとこよにあらなむ雁かねのちたひやちたひゆきかへる迄

ある人の賀に寄鶴祝

年高く千代をかさねむ友なれや雲ゐになるゝつるのけ衣

ある人の賀に鶴介千年壽といふ題にて

君も經て千代のためしにあふかれよ雲ゐのつるの高きよはひを

鶴追年友

門ちかくなるゝや千代をかさぬへき友とたのむのつるの毛ころも

ある人の賀に松に鶴の子のあまた居たるかたかける
繪に

ちよ〳〵と千代をかさねてつるの子の松の梢にむれつゝそなく

祝

鶴亀もなほやうらやむ万代も千代もかきらぬきみかよはひは

寄日祝

きみか代のなかき光は春の日ののとかにかすむ空に見えけり

竹口直兄母の六十賀に二見浦貝

二見かたかきりもなみによるかひをつきぬよはひの數にひろはむ

ある人の七十賀に鬮のかたをかきたる繪に

七十にあふさかこえてゆく末のよはひはるけき東路の空

加藤千蔭の七十賀に武蔵國の名所を題にてよめるに

芝浦

かきりなき千年の数と芝のうらにしはしはよするおきつ白波

みちのくの本宮小沼幸彦七十賀に

七十にあふくま川のゆく末もなかれてとほきよはひならまし

人の賀によみて遣しける

ちきりおく千年のことくけふを又今そはるかに思ひいつらむ

長井直延五十賀に

年高く五十を五十かさねあけて千代の坂をも麓にを見よ

織戸爲貞の六十一賀によみて遣しける

若かへりいく度もへよ今よりは六十を老のはしめにはして

又加藤富方六十一に

ゆきかへり猶いく度も六十路におなし今年にめくりきはなむ

七十賀をいはひしけるによみて遣しける

千代ふともおいとは見えし黒髪につもるなしらの雪しらねは

萬歳といふものかける繪に

萬とせいはふときけにうちつけにつゝみの聲もめてたかりけり

籠にわかなある繪に人の哥こひけるに

万代のためしにたまふこのわかないかにもとめて人のつみけむ

柳に鶯かける繪に

春風のふくにまかせて青柳のいとのとかにもとふつはめかな

柳にこ鳥おほくかける繪に

風ふけはともにみたれてむら鳥のなく音もまよふ青柳の原

御階のさくらの花の咲たる所かける繪に

吹風のゝとけき御代とさく花の色もときはのこゝのへの春

吉野山の花さかりに朝日のある繪に

うつしても猶こそあかね朝日影にほふよしのゝ山さくら花

月夜に女のさくらの花をあふきにすゑてもちまゐる

かたかける繪に

おなしくはともにめてよと月の夜に手をりやきつる花の一枝

やへさくらの繪に

此花はやへのひとへもうつろはて代々をさへにそ咲かさねける

菫といふものにかきたるすみれの繪に人の哥こひけるに

紫のにほへる妹とすみれくさかけのよろしき花さきにけり

春の野に草花色々ある繪に

はるもなほ花のさきまし色見えてひとつみとりの野へとしもなし

青葉のさくらかきたる賛もとめけり

山さくら花さく春もありしものをいかにつみたる青葉なるらむ

宇治のはし守の月見たるかたかける繪に

ことゝはむいくよの秋の月を見ておいとはなれぬうちのはし守

水の面に雁のうつりたるかたかける繪に

行水に雁の影さへうかへるはいかなるふてのたくみなるらむ

つかれたる稻に雀のきゐるかたかける繪に

むらすゝめはねにまかする此秋はたれもたのみやゆたかなるらむ

きくの繪に

とことはにかはらぬ千代の色見えて秋なき時もしら菊の花

女のはしちかく居て人待さまかける繪に

山のはの空をなかめて月まつとしはぬはかりのやとの夕くれ

いてゆく人を山中に女の見おくるかたかけるに

思ひいてよしその袖にうつるともなきてふるすの谷のうくひす

あれたる宿に夕くれ女のなかめ居たるかたかけるに

かれはてしちきりしられて松虫の聲もきこえぬ淺ちふのやと

宮の庭にてかり衣にてつるをものするかたかける

繪に人の哥こひけるに

おのか經むよはひを君にゆつるとや千年を人の手にまかす覽

薪をいたゝきたる女のうしひきたるかたに

おふうしのたきゝにあかてわれも猶いたゝきいつるやせの里人

うち川を柴舟のくたるかたかけるに

さす棹のよわたるわさはおりくたる山路よりいつれらくの柴舟

ふしの山かけるあふきに人の哥こひけるに

うへもなく風そすゝしきあふき見よ雪ふりつもるふしの高ねを

龜の酒のめるかたかけるに

のむさけやいかにたのしき萬代にかはらぬ君のか影をうかめて

池の邊に松たてるゑに

ちりかゝる時しなけれは松かけの池のかゝみは千代もくもらし

後鈴屋集後篇上之卷

本居春庭詠

春歌

春のはしめによめる

春きぬとおかふ日影ののとけさをたちかさねたる朝霞かな

いつくかはこの日のもとののとけさに霞しくへき初はるの空

あらたまる日影まはゆくふりはてゝあふくもおいははつ春の空

まか事はないりきたりとしめはへて御門の神をいはふ初春

家ことにひもろきたてゝ大年の神の御たまをいはふはつ春

立春

霞かはゆきかふ人ののとけさもけさはめにたつ初はるの空

日の本のけさの光をあふき見こけふから国も春やしるらむ

立春河

早瀬川よとまてくれし年浪もはるたちかへるけふそのとけき

年内立春

たつやときくるゝやおそき年の内の日数なからに春はきにけり

春きぬと年のをたまきくるゝまもまたてたなひく朝霞哉

まちをしむ人のためとやくれのこる日数のほとに春のきぬらむ

さきたてる春の霞に行年のくれまとひてや猶のこるらむ

初春

まつひとへたつものとけし朝霞ちよをかさねむはつ春のそら

初はるの空とならぬのとけさをあくれは見せてたつ霞かな

身にかへてをしみし年も明ぬれはちよとそいはふ初はるの空

初春霞

あらたまる中にものにさきたちて春見えそむる朝かすみ哉

これも又いそきおきてや春きぬと霞の衣けさはたつらむ

ゆく年のくれし心もはるかすみめにたちかへる空そのとけき

初春風

きのふまてふくにむすひしいさらゐの氷もけさはとくる春風

谷川や氷ふきとく春風におとうちそふる瀬々の岩なみ

都初春

春きぬとゆきかふ人のたもとにも花のみやこの色は見えけり

初春梅

とくも來すおそくもさかて梅の花はるのたち枝に色そほのめく

早春河

氷かはけさは霞もよしの川なかれてはやく春はきにけり

貴賤迎春

くらゐ山みねもふもともへたてなく春たちわたる朝霞かな

上か上しもか下まてあらたまる心やおなしはつ春のそら

待子日

春くれはまついそかれて初子日まつも千代ふることゝちこそすれ

子日

ひかるへき子日とけふはこゝろしてまつもちとせの色やそふらむ

ねのひするちよをあまたの小松原こゝろのひくに猶やまかせむ

千代をへてけふの子日の姫小まつためしまさしくいつかさかえん

雪中子日

千とせふるおもかけ見えて初子日ゆきをいたゝく野邊の姫松

野子日

松あまたひくまの野へに子日してつきせぬよはひ手にそまかする

若菜

初わかなけつかにたてもももえいてはつみにや野へにふきまもとむ

まれに見てまたつみたへぬそてにまつうれしさあまる初わかなかな

のとかにこもえぬまとらぬ雪の下はかたに若菜つまゝし

かきわけし跡のみ見えて一葉たにゆきまのわかなつみものこさす

はつわかな雪は跡なくきえし野に霞をわけてつむそのとけき

雪のうちにもえそめしより立出て日數に野へにつむなふた哉

寺若菜

たれか又わか跡とめて[illegible]のかた野へわかなたつねわふらむ

雪中若菜

里人もうつもれぬまといそきいてゝ雪よりさきにつむわかなかな

野若菜

雪間たに見えぬわかなをもとむとてあまたく野へにいく日數經

むさしのやまれの若菜もみなからにつまはかきりの猶やなからむ

原若菜

千代こもる竹田か原の初わかなたか行末をためしにそつむ

つむ人もゝゆる若菜の日にそへてしけくなりゆく春日のゝ原

岡若菜

つむ人もしけきゆきゝの岡へとやもゆるわかなもひまなかるらむ

路若菜

春日野やわかなつみにはこぬ人も猶すきかてにもゆる道のへ

若菜所々

おなし野も心のゆくにまかせてやこなたかなたにわかなつむらん

白馬節會

白青の名にたつけふの駒なれはうへも雲ゐにたなひきにけり

若草

したもえのしけきおもひにつれなさもとけて雪まの野への若草

きえはてゝなか〳〵色のあさみとり雪間にはえしのへのわかくさ

しら雪のふりにし野へもあたらしき色をみとりの春のわか草

秋ならて春もみとりのうすくこく猶いろ〳〵の野邊の若くさ

籬若草

日影さすかきりはわきて色ふかくもゆるまかきの春のわかくさ

野若草

もゆるよりみとりそふかき立こめて色をかすめる野への若草

殘雪

皆人のなかめふるせる春そともおもひきえなてのこる白ゆき

けるきては色もなかめもふりはてゝおもしろからぬ庭の白雪

あし火たく軒端に猶もきえやらてすゝたれなからのこるしら雪

下もえてきゆるをいそく若草に雪ものこれる空やなからむ

野殘雪

ふりそめしほとはひとつをとくおそくなとむらきえの野邊の白雪

庭殘雪

春のきて今はなかめもふりぬとやおもひきえゆく庭の白雪

松下殘雪

いつしかときゆるをまつの木本に猶もつれなくのこるしら雪

鶯

うちとけし涙のつらゝさえかへり又とゝこほるうくひすのこゑ

梅か香のしるへまちえて鶯や心もゆきのふるすいつらむ

朝日さすまどの木末になく影も見えてこつたふ鶯のこゑ

初鶯

うちとけぬこゑときくにも青柳のいとめつらしきけさの鶯

鶯出谷

ともにみなきて都にうつるより春やよそなる谷の鶯

朝鶯

おのれまつ影さすかたにうつしはき朝日さすなる鶯のこゑ

夕鶯

日影まつ霜のまかきにうつりきてまつこゑとくるけさの鶯

くれふかみねくらいそきてなく聲も猶のとかなる春のうくひす

雨中鶯

ふる雨にきなくうくひすなれならて誰かはとらむ梅の花かさ

雪中鶯

おのか音のにほひをそへて花とみる梢の雪にきなく鶯

竹鶯

庭の雪なかめふるさす花とのみ木つたひちらす鶯のこゑ

くれ竹にねくらしめなはよとゝもに声かはさなむ窓の鶯

竹裏鶯

しけき葉にならひきなけと軒ちかくうゑ竹しるき鶯の声

梅間鶯

何にいかになくとも梅のかはかりはのとけからしな鶯のこゑ

松上鶯

まつになくけふの初音をためしにて千年もきかむ野への鶯

ひとしほの緑のまつに春の色をあらそふ枝の鶯のこゑ

鶯馴

なるゝをも誰かいとはむきくたひにのとけさまさる鶯の聲

庭鶯

門の戸をあくるまちてや鶯もけさはひいりの庭に鳴らむ

野鶯

なく聲もまたわか草のはつかにて雪まゝれなる野への鶯

はるあさき野邊の霞ののとけさをたなひきたつる鶯の聲

わか草のもゆる雪まの日にそへて聲とけまさる野へのうくひ

三笠山さすや朝日ものとけきをかすかの野邊のうくひすの聲

小まつ引初音ならねときけは又これもこゝろをのへの鶯

関路聞鶯

旅ころも我もわかれをうくひすとなきてそこゆる逢坂の関

山家鶯

こゝも猶ひとくとなきておくふかき山路すゝむる鶯のこゑ

鶯帰谷

鳴聲も今はつきぬとゆく春におくれすかへる谷のうくひす

梅

にほふより心をさへに深くのみうつしてめつる袖のうめかゝ

ふく風を梅さく宿のこてふにてとはゝやうとき花のあるしも

吹風ににほひもさそならつるらむ梅さく山のみねのしら雲

雪中梅

色こそあれふかきにほひはふる雪に猶もかくれぬ梅の花かさ

梅風

めに見えぬ同したくひと吹風やうめのにほひをさそひそめけむ

吹風のおもかけなかくさそひきてにほふもうれしよその梅かゝ

さきたりとつくるはらはの空ならてまさしくにほふ風の梅かゝ

梅薫風

よそまては吹もさそはぬのとけさに梅かゝふかき軒のはる風

梅薫袖

吹しよりなれて木かけに日数をもうつしかさぬる袖の梅か香

吹ことに花のあるしと梅か香を袖にすくさぬ宿のはる風

たちなれてうつす日数のほとはかり袖にかさぬる軒の梅かゝ

薫梅枕

春さむきすきまの風を梅かゝのかをる枕にまつもはかなし

見し夢もをしからぬまて梅かゝのさむる枕ににほふはる風

折梅

をる袖にあかぬ色香のうつるにもをしさわするゝ梅の一えた

花もまた手折をうしとおもはてやあかぬ色香のまさる梅枝

挿梅

かさしてはあかぬ色香の外に又老もかくるゝ梅のはなかさ

垣梅

へたてなくよるひるなれていかはかり梅かゝふかき軒のみ垣

月前梅

香をとめて光にみれは梅花いろもおほろのはるのよの月

水邊梅

いかてかく香ににほふらむうつるまもなかれてはやき梅の下水

さきしよりなかれてうつる梅かゝのみなとやいかに春の川水

行路梅

あかすのみにほふ色香に立よりて道さまたくる野への梅枝

梅村聞笛

吹つゝく梅のにほひを吹ませて笛の音かをるさとの春風

山家梅

ふかき色も誰かきてみむかくれすむ谷ののきはの梅の花笠

紅梅

いかにしてこそめの梅をつけやらむこてふの風も色はにほはす

落梅

吹さそふ風には猶もかくれあへす雫ちりかゝる梅の花かさ

梅の花今はにほひもつきぬとや色をもさそふ枝のはる風

柳

此ころは見るにかゝりてなかき日も猶あをやきのいとまなき哉

柳露

しら玉とつらぬきとめて青柳の露もなかめの糸の一ふし

水邊柳

河水におふる玉藻と露なからうつりてなひくきしの青柳

野外柳

遠かたやふきよる野邊の風見えて霞もなひく青柳のいと

池柳

水のおもに枝うちたるゝ青柳や池のかゝみのちりはらふらむ

影見れは吹風なから池水にうつしてなひく岸の青やき

故鄕柳

青柳のいとによらすはふる鄕にとひくる人やたえてなからむ
春もなほくるひとたえし故鄕は柳のいともおもひもゆらむ

田家柳

うちかへし見るに心やよりぬらむ門田おこたる青柳の糸

行路柳

ゆく人のたえまにも猶かゝかる風吹わたる野路の青柳

霞

春霞たちそむるよりきえし色はきえてのとかにみねの白ゆき
はるのきて霞のころもまたゝねとはやたちたわ一日ゆる空哉
吹風にかすみの衣みたれてもくたちかへりはるのやまのは
のとけさのまさる日ことに立そひて霞そふかきたをみせける

夕霞

遠かたはふかきかすみにきえはてゝ見わたすよもの山そすくなき
なかき日はくらしわふとや立こめてゆふへをいそく霞なるらむ

霞隔遠樹

春ふかく霞の色もたちそひてみとりかさなる峯のまつかえ
へたてゝも霞色こき一むらにそれとしらるゝみねの松かえ

山霞

下もえのけふりとはかり春くれは若草山にたつかすみかな
白たへの雪をかすみの春の色に俤ひきかへてうつむ山のは
けさみれは外にめにたつ色もなし山はかすみの緑のみして
うら〳〵と見るめのとかに空かけて霞のあみをはるの山のは

野霞

いかはかりたもとゆた野の名にたちておほふ霞の衣なるらむ
たとりゆくかすみは春につきぬともなほむさしのはわけやのこさむ

杜霞

立そめて木末にみゆる春の色もはゝその杜のうすかすみかな
春は今みしめのほかにうちはへて霞たなひく杜の神垣

關霞

あふさかや戸さゝぬ關をへたつるものとけきみよの春かすみかな

關路霞

のとかなるみよの戸さしは霞にてゆきゝへたてぬ逢坂の關

海霞

春霞みるめもふかく色そへて青海原の名にそたちける

海邊霞

よせかへるみるめはなみの音はかり霞にのこるうらの夕なき
いとまなきあまも霞にたちましりのとけき春のかひひろふらん
伊勢の海やとこよをかけてはる〳〵と霞しき浪たてるのとけさ
すみよしと春の海邊の名にたつもかゝる霞のみるめなるらむ

浦霞

立わたる春のかすみのふかみるにかりそめならぬ浦ののとけさ
あまならぬ人も霞の立いてゝ浦の見るめをかる春日かな
はる〳〵と浪路をかけて袖のうらにたちかさねたる夕霞かな

嶋霞

春ふかみわたのそことも見えぬまて霞にしつむあはち嶋山

瀧霞

山たかくおちくる筋の中たえて霞かゝれる瀧のしらいと

名所霞

のとかなる春のさかのゝ夕霞あらしの山もよそにへたてゝ

いもせ山春は河瀬の外に又中をへたてゝたつかすみかな

橋上霞

立わたる霞とたえて吹風のふきゝも見ゆる峯のかけはし

山家霞

よそにのみうきよへたてゝのとけさもふかき霞のおくの山里

餘寒

春なからきえやらぬまは吹風も猶さえのこる峯のしら雪

餘寒氷

谷川や氷のしたにたちかへり又冬こもる瀬のはつはな

春曙

ほの〳〵と色みえそむる花の枝にあけもおくれぬもゝ鳥のこゑ

かけしろく月もにほひてさく花のいろ香にあくる春の山のは

花鳥のあかぬ別に横雲もおもひきえゆく明ほのゝやま

[illegible]春曙

とる筆もすてゝこゝろやうつすらむかすむ繪嶋の春の曙

春月

影くもる月のかつらの夕霞このひともとゝもよきてたゝなむ

はるの月老はこゝろもおほろにてかすまぬ影もかすむとや見む

春の月かすむならひのほとすきてくもるや老の見るめなるらむ

春月朧々

春の夜の月はなか〳〵かすむよりおほろけならぬ影とこそ見れ

影見にもおほろけならすかすむとは空にしらるゝ春のよの月

わきて又老は見えぬのかゝみにもまさる朧のはるのよの月

春月幽

いてはてぬ影かとはかり春ふかく山のはつかにかすむよの月

おほろよのあはれもすきて春の月霞のそこに影そほのめく

山のははかすみのそことわかねともさすかにいつる月そしるけき

河春月

清瀧や影見るなみもおほろにて川の名かすむ春のよの月

水郷春月

水無瀬川春やむかしのおもかけも山本とほくかすむよの月

名所春月

はる霞立田のおくのみねしるくいとゝをくらき夕月の影

歸雁

わするなよ霧たちかへりこむ秋を霞にちきる春の雁かね

ふる郷もなれては花のみやこにもまさるかかへる春のかりかね

わひつゝやたちかへるらむ春の雁はれぬ雲ゐに聲そきこゆる

ひとかたにおもひとまらはまちをしむらみはおはし春の雁かね

いつこにも心とゝめぬ鳥とてやかへるもかりと鳴てゆくらむ

さくらなきとこよは雁のかへるさや花まつはかり待わたるらむ

かへるさもわするゝ花とさかぬまにいそきやすらむ春の雁かね

きてたにもみるへき花をよそにしてなとかは雁のかへり行らむ

うき旅のなくさめにとや花さかりおもかけにしてかへる雁かね

こむ秋のとほきわかれも露の間とゝこよの雁やちきり置らん

暁歸雁

横雲にはねうちつけて春の雁みねにわかるゝあかつきの空

夕歸雁

聲はしてゆく方わかすくれは鳥あやなき空にかへるかりかね

霞中歸雁

たつきりの空にこしちの跡とめて霞たどらすかへる雁かね

春ふかくかすむゆくへをたとるにも空やすからしかへる雁かね

かた／＼にあはれそふかき聲はしてゆく空かすむ雁のわかれち

鳴聲はあまたきこえてゆく雁のみちくすくなくかすむ空かな

なく聲のかすまぬほとは歸る雁見えぬゆくへもなかめられつゝ

霞間歸雁

心あれやかすむゆくへをなくこゑにしらせてかへる春の雁かね

かへるかりつらきこゝろのへたてよりかすめる空におもひたつらむ

月前歸雁

數みえし月とそしのふかへる雁かけもおほろにかすむよの空

なきて行涙もかすむ月影の朧やいかによはのかりかね

峯歸雁

とひこはる峯もかすみのそこはかとなく音のみして歸る雁かね

海邊歸雁

いせの海とこよの浪のかへるよりおもひやたちし春の雁かね

あまも又ゆくをゝしまはすみよしといひてもとめよはるの雁かね

浦歸雁

かへる雁みるめのみかはうら浪にかすまぬ聲もうちまきれつゝ

沖とほく消こそかすめかへる雁田にへたてぬうらのみるめも

關路歸雁

待あへすわかれし雁のかへるにも雲ゐのほとはしら河の關

田歸雁

春の田をかへす／＼もゆく雁に稻葉の露やちきりおかまし

名所歸雁

霞たつ春のうみへをかへる雁猶ふるさとや住よしのはま

燕

おのれのみふるすともなく尋きて人はのきはにすむつはめ哉

春雨

ふりそむるけふたにあるを日數へむなかめやいかに宿のつれ／＼

なこりまて春のなかめの空しるくはるゝにも猶日數をそふる

夕春雨

音するもかすむ夕のはるさめはうたかひかゝる軒のたまみつ

春雨にかよはぬ音もさひしさを猶うちそふる入相のかね

春雨夜靜

ふるとなきおともまきれすきこえてふくるよさひし軒の春雨

幽栖春雨

しのふよりつたふ雫もかすかにて世にふるとなき宿の春雨

古宅春雨

けふいくかかゝるなかめのさひしきにたへてふるやの軒の玉水

故郷春雨

故郷よあれしのきはゝふるおともきたかにはあらぬ宿のはるさめ

田家春雨

春雨のふるの山田のさかしさもうゑしきかたにうちかへすらむ

早蕨

さわらひのもゆるをりとや春霞野にも山にもたちけふるらむ

野早蕨

たちいてゝくらす春日のすさひともえてをりよき野へのさわらひ

峯早蕨

もえいつるをりとちきりて都人とはぬやよそにみねのさわらひ

みねの庵たゝひとりをるすさひにはあまりてもゆる軒のさわらひ

野遊

春とにあかぬこゝろをしるへにて行末とほくわくる野へかな

花鳥もひとつ霞のうちの野にたちましりつゝあそふのとけさ

けふいくか霞のころもはるの野にあかぬ日数をかさねきぬらむ

外よりもわきて霞に立ましるたもとゆた野のはるのもろ人

遊絲

佐保姫の手引もしるくうちはへて霞のそてにかゝる糸ゆふ

五百機のかすみの衣おる空にたてぬきしけくかゝるいとゆふ

のとかにも心のをろをのはへつゝなかき日くらしあそふ糸ゆふ

遅日

きのふかとたとるはかりに夕霞へたてゝとほきけさのおもかけ

さくらなき國人いかにくらすらむ花見てたにもなかき春日を

呼子鳥

山彦のこたへのみして來る人もなく音さひしきよふこ鳥かな

やまひこのこたふる聲に呼子鳥よふかひありと猶や鳴らむ

山路呼子鳥

よふこ鳥聲するかたにわけいらは猶山ふかく道やまよはむ

雲雀

のとけさにおのか芝生をあくかれてうはの空にもなくひはり哉

のとけさを空にもこめて若草のかすめる野へにひはりなく也

志賀花園蝶

飛てふはむかしなからに尋きて猶こそあれねしかの花園

待花

山さくらかくとけかたきちきりにはなとむすひけむ花の下紐

咲花をわりなくいそく心よりまつにあまたの日数をそふる

さきやらぬつらさになしてかこつ哉まつにまたしき花の日數を

こゝろあての日數の後はさくら花しはしの程も待そわひぬる

さきやらぬ日數へにけりさくら花まつもかきりのなきこゝちして

まつにふる日數もうれし櫻はなさくほとちかくなりぬとおもへは

さくにのみ今はまかせてさくら花まつにつくさぬこゝろともかな

日數へてまつもはかなし春のよの夢はかりなるはなのさかりを

隣待花

中垣のそなたの花もまつほとの日數なからはへたてすもかな

木末のみとなりまちかくなかめても猶まちとほの花そつれなき

山家待花

さきぬやととひくる人はまちえても猶花つらき春の山さと

さひしさにいとゝまたれてさかぬまの花のうきよはまさる山里

尋花

山ふかく何たつぬらむふもとたにさかぬさくらもおもひたとらて

かり衣たちうき花の陰ならてさかぬ山路に日をかさねつゝ

尋山花

かりころもたちいてしけさのあらましもさかぬにたかふ花の山ふみ

所々尋花

山さくらあまたところをわけみても猶一木たに花はにほはす

尋花所不定

山櫻そこともいはすたつねみむおもふこゝろのゆくにまかせて

さきそむる花はいつことしら雲のかゝる峯をやまつたつねまし

逐年尋花

まつさかむ山はありとも年毎になれてたとらぬ花やたつねむ

初花

さきそむるたゝ一枝にまちこひし日数のうさもはるのはつ花

咲ぬれとまたたえ〳〵の花の色に猶もさかりの程そまたるゝ

夜のほとにさきぬとしらておそく出しあさいくやしき庭の初花

花

花といへはさくらなるにもしられけりよにたくひなき色香なりとは

たくひなき程もしられて花とのみいふにまかはぬ山さくらかな

昔人のこゝろうかなゝ色香より花やうき世の名にはおふらむ

山さくら心はかりとおもひしを命も猶やはなにつくさむ

にほふ国をなとかみしかき契りにはむすひそめけむ花の下紐

花の紐とくれは又もみるほとのみしかきかたにむすほゝれつゝ

雲とのみあふき見るにも山櫻うへなき花のほとそしらるゝ

咲にほふ色香の外に山さくら日数もあかぬはなさかりかな

狩ころもいそきたてとや山さくら夢路に花のさくと見ゆらむ

花の香も猶山ふかくにほひきてまかはぬ雲に春風そふく

にほひかは霞のそての春風に木末ももるゝ山さくら花

山さくら見る人からの春日とてとそともなくくれにけるかな

から人のこゝろにおはぬ色香とやたえて櫻のよになかるらむ

およふへき色香ならねとこの葉にかけすはいかてやまさくら花

山さくらにほふ春へはよのうさをいとゝよそにやみよしのゝ奥

霞中花

よそにのみ見るをうしとや山櫻おもひへたつる霞なるらむ

山さくらたちへたてたる花の色のうすきやふかき霞成らむ

春ふかくにほふ色香はつゝみあへす霞のまそてもるさくら哉

たちこむるいろかこほれて山櫻かすむ梢にはる風そふく

たちこめて色もわかれぬ山さくら霞のまほに見るよしもかな

月前花

よるも見るなさけはいはて花の色のかすむをかこつ春の月影

風前花

さけはちる日数もさそふこゝろにはまちやわふらむはなの山かせ

雨後花

雨はるゝ雲の絶間に見えそめて嵐にもさく山さくらかな

ちるとのみかきくらしつる涙さへはれて咲そふ花のはるさめ

花似雪

花のひもとけてなか〳〵雪とのみ色さきまかふ山櫻かな

花下送日

根にかへる花をし見すは家路をもおもひはいてし春の木本

盛花

にほひのみあかすちらして櫻花さかりのほとは風ものとけし

惜花

春の日のなかきおもひはさきやらぬ花まつほとの心なりけり

たかねつゝこゝろのゆくも山櫻はなのおもひの外にやはある

花未飽

よしの山おくあるまゝにわけみてもあかぬこゝろの花そはてなき

折花

山さくらをらてかへらは中〳〵にこゝろなからむ見ぬ人のため

春情有花

くるをまちゆくをゝしみて春にさへ心をつくす山さくら哉

山さくらわけくらしても猶あかぬこゝろのほとは夢に見えけり

花下友

ちきりおきしまとゐのほとを咲花もまちてやけふは盛成らむ

花發風雨多

吹たにも猶うきものを花さかりふる雨をそふ春のやま風

ふる雨も吹山風も花さかりいとふにはへてをやみたにせす

さきしより雨もあらしもやまさくらさなから花の日數をやへむ

山花

山さくらわけ見る人の心まて花になりゆくはるのこのころ

わけすてしふもとの花のおもかけにかすむや櫻みねの白雲

いひしらぬ花ともしられてよしの山きゝしにまさる色香也けり

山路花

きのふみし夕ゐる雲やけさわけてこえゆく峯の花の一むら

暮山花

ゆくにのみ家路へたつる花の雲ゆふゐる山に旅ねせよとや

花滿山川

花さかりさかぬ河瀬も見る影に猶色ふかきみよしのゝ山

川瀬にも猶かけみえて花の雲うつみのこさぬみよしのゝ山

峯花

花もまたかさなるみねのそのまゝにときつゝきたる山さくら哉

野花

さく花の風のしるへもほのめきてかすむ末野に色そみえゆく

杜花

見る人の心も花に色そめて木かけたちうきころものもり

池花

さくら花ふかきあはれは池水のそこにうつる色香にそしる

瀧上花

たきつせにさきかゝりても山櫻いろ香のとけき花のしら浪

關花

今も猶あはれとゝめてさく花やあれにし後のふはの關守

禁中花

九重にさきこそにほへさくら花雲井の庭に雲をかさねて

社頭花

かくはしきあはれもそひて柳葉にましりさくらの花の神垣

色ふかく神のこゝろをとりしてゝ春はさくらの花のしらゆふ

山家花

とふ人のやまさくら戸におもふ哉ちりなむ花のあとの明くれ

崎花

こなたにもさく枝あまたさしなみのとなりうれしき花の中垣

羇中花

うき旅もいそくゆくへも立よりて見るにわするゝ花の木本

花雪
ちりて後日をふる花の雪ならは木末にも猶きえかてにせよ
よしの山花の雪にも道たえて入にし人やかへりこさらむ

花衣
狩衣たちおくれしといそくまはさかぬもられし山さくら花
たつねこしかひある山のかり衣ひもときそむる花をわけみて
かり衣たちやましらむ花の雲かさなる山のふかき色香に
みよしのゝ山分ころも日数さへおくある花はかさねてそ見る
くれなゐのうす花染に立なれて色をうつしの雲の衣手

花鏡
いろかはるかけ見るにも水鏡はなのこゝろや先くもるらむ

花本
よしの山千本の花もよそに見て宿の一木になるゝ明くれ
いかにせむ野山の花もわすれねとたちさりかたき庭の木本
柴人のしはしやすらふ木本も猶ほかならぬ山さくらかな
さく花のたゝ一本に立よりてみち行人のかきりしられす

花友
さきしより野山の春にあくかれて心の花もおなし友とち

花主
くるをまちゆくをとゝめてとふ人のあるしは宿の櫻なりけり
わかものとみるもかひなし庭櫻ちるをまかせぬ花のあるしは

花夢
ちると見ておとろく夢や朝戸出をいそかす花のこゝろなるらむ

花欲散
さらてたにみしかきものを櫻花はしきるとも吹嵐かな

花半散
木末さへいかにへたてゝこなたのみちりものこらぬ花の中かき
つもりてはちりしかたへのほとも猶庭にひまなき花のしら雪
みるに猶たのみすくなしさくら花ちりしはかりはのこる木末も

落花
ちらて猶日数かさねよさくら花まつにのみやはほとをへぬへき
ちりちらす猶こそ見ゆれ櫻はなさけるさかさるありしまに〳〵
山さくら雪とちるにもとけさりしつらさわすれぬ花の下ひも
をしむには立もとまらて櫻はな根にこそかへれ花のあた涙
雲とのみ見えまかふより山さくらあらしや花をさそひそめけむ
ぬきとめむとおもふ心もかた糸の空にみたれてちるさくら哉
ありなはとおのれのかれてちる花のうきめを人にみするつれなさ
花ちらす常なき風も身にかへてをしむかたには猶そつれなき
ちりつもる花のしら雪かきつめて庭によしのゝ山やつくらむ
しつれおつる花の雪にもきえかへり猶袖ぬらすはるのこのもと

曉落花
有明の月に今はとちる花のこらぬ色も猶そつれなき

夕落花
夕風のさそふつらさを猶くれぬ光に見せてちるさくらかな

夜落花
あかすのみをしむを花もつらしとや見えぬよのまの風にちるらむ
さそはれてゆくもうきめと色みえぬよのまの風に花やちるらむ

月前落花

かすむ夜はちらす光もちる花も同しおほろの月のはる風

吹風に梢はれてもさくら花ちりかひくもる庭の月かけ

風前落花

さくら花あたなる色と吹風も空にしりてやさそひそめけむ

山櫻をしむ心もさそはれてあらしにうつるはなのうき雲

よしさらはをしむ心の花も猶あとなくさそへ春の山かせ

吹さそふつらさをいかにしれとてかはなには見ゆるあらし成らむ

山落花

咲花のにしきかさねて立田山をくらの峯もあらし吹らし

山路落花

こゝろさへくれこそまとへ花も櫻にかへる夕のはるの山道

關落花

ぬさとのみちるより神も花の枝にあらしやゆるす逢坂の關

關路落花

あふさかや木末の花に跡つけて關ふきこゆる春のやま風

こえかてにおのれとまりてあふ坂やちりゆく花ををしむ旅人

水上落花

きえかての雪と見るたにうき花を水のあわともちらす川風

ちりかゝる花のうきせは猶見えてあやなくくもる水鏡哉

をしみえぬ涙なかれてちるせゝに心もきゆる花のうたかた

河落花

さそふをもうき瀬といはしおく山のさくらを見する春の谷川

あわとたになかれよとまて早瀬川跡なき浪にちる櫻かな

なみた川かけてをしめとちる花のうきせよとまぬ袖のしからみ

池落花

見る影も今はなしとや池水のかゝみに花のちりかゝるらむ

池水にちりもかゝらてしはし猶空にうきたつ花のあた浪

ちる花をさそはぬ池のみつからも心ふかしと空やおもはむ

白たへに花ちりしきて池水のみとりの色を梢にそ見る

社頭落花

ゆふかけし梢の花もぬさとのみ風の宮居にちる櫻かな

櫻はなぬさとちらさは中〳〵に神のこゝろをとりやたかへむ

庭落花

をしとおもふこゝろの花もうつろひてちりしく庭のおもしろき哉

隣落花

さそひくる風のこなたは中垣のとなりにこえて花そちりしく

山家落花

都にも吹こそまされのかれえぬ花のうき世のさかの山風

ちりにけり花見かてらのおとつれも今はあらしの山かけの庵

あかすちる花のうきめはなか〳〵によしのゝ奥やよにまさるらむ

故郷落花

人めかは木末なからに山さくらちりて跡なき花のふるさと

風ならてたれかはとはむ花の雪ふりにし里の木々の梢は

落花入簾

もる風のしけきあれまも吹いるゝ花にうれしき軒の玉たれ

雨菫

色ふかくたこりもそひてすみれ草かりねおきうき野への朝露

閑庭菫

露かゝる宿にもたれかすみれ草うゑて心をはるの山かけ

雉

春ふかき霞にそことわか草のつままとはしてきゝす鳴なり

野外雉

つまこふる聲もそことはわか草のかすめる野へにきゝす鳴なり

つまこひのけふりやかすみ聲たてゝおもひやけのにきゝす鳴也

春駒

のとけしな野への霞の棚引にまかせてあそふ春のわかこま

ひきかへてのとけかりけりゆくかけも霞のひまの野邊の春こま

苗代

ひくしめのなかき春日にまかせてやうちもいそかぬ小田の苗代

せきあまる苗代水にしられけりまくやゆたねのゆたかなる世は

雨中苗代

ふる雨に水をまかせて空も猶いそくと見ゆる小田の苗代

田家苗代

せきいるゝ水も門田の軒ちかくなかれてやすき賤か苗代

躑躅

岩つゝしたれまつかけに色ふかく夕日こかれて咲にほふらむ

行末はつまきなるへきつゝしとてまつやたく火の色に咲らむ

たはしりしそれかとみえて岩村にさきかゝりたるにつゝしの花

欵冬

山吹のはなさくゐての里人はくれゆく春も猶やまつらむ

河欵冬

よしの川日數なかれてはやきせに春もうつろふ山吹のかけ

いはぬ色も猶おとたてゝ川浪にうつれはかはゐやまふきの花

名所欵冬

山吹の花にせかるゝ色なから猶こゑたつるゐての川なみ

さく花におく露なから玉川の名になかれたるゐての山吹

きて見よと花こそいはぬ色ならぬ里人つらきゐての山ふき

杜若

春のみか色のかきりも猶みせてむらさきにほふかきつはた哉

池杜若

かきつはたさく池水のこゝろにはむらさきふかく春やをしまむ

藤

何をかはまつにかゝりて行春もしらすのとけき藤浪の花

藤花留客

まつはれてけふのまとゐにたつことを猶もゆるすた藤浪の花

瀧下藤花

そこひなき色にも中のよと見えて瀧つ岩根ににほふ藤浪

江畔藤

みつしほに入江ならても浪こえて藤咲かゝる岸のまつかえ

春夢

春のよは曉かけて見れと猶わたしもはてぬ夢のうきはし

春濤

しら浪は跡なくこめて霞のみたちこそめくれあはち嶋山

いせの海や春たとこよのみるめにてのとかによせよ霞しき浪

春船

のとかにてよをうみわたる船としもなにはの浦のかすむみるめは

春　田

打かへし花見むためと里人はつくりやそめし春の櫻田

春山家

なほさりにかすむ山とやみやこ人花らくひすにこもるすみかを

暮　春

ちる花のこゝろさわきをのとめてもくれゆく春はかへりたにせよ

暮春霞

もろともにたちし霞はゆく春の空にも猶やおくれさるらむ

暮春夕

くれぬまをはるとなかむるあはれさや秋にもまさる夕なるらむ

暮春雨

ゆく春にたちやおくれむ晴やらて猶ふりくらす空のあま雲

ちらしつる花のをしさもはれやらぬなかめなからに春そくれ行

山暮春

よしさらはくれ行春のまとふまてちりかひくもれ花の山道

花鳥のかへる色香をさきたてゝくれ行春や山路こゆらむ

夏歌

首　夏

たちそめし春のしるしに引かへてかすまぬ空に夏はきにけり

首夏雲

夏きても花の面かけ猶たちてはるをへたてぬ峯の白くも

更　衣

木かけにも猶こそまされなれきつる花のたもとのけふのたちうさ

なつ衣たちてもゐてもなれきつるはなの袂はわすれかねつゝ

かへそめしうきならはしに花衣むかしをかけてうらみられつゝ

朝更衣

ぬきかへむ程をおもへはおきうさもまさりてふかき袖のあさ露

餘　花

咲そめしそのおもかけもたえ〳〵にのこりてにほふ花のひともと

新　樹

庭さくらまさる青葉の日にそへてとほさかりゆく花のおもかけ

しけれたゝ櫻か枝の夏木たち見し面かけもくるゝはかりに

なこりおもふこゝろもしらてゆく〳〵としけるさくらの夏木立哉

新樹露

咲ましる花かとはかりみつ枝さす木々の青葉にかゝるしら露

庭樹結葉

おなし色もさすか見なれし梢とてそれとわか葉の庭櫻哉

新樹妨月

夕月のまさる光もなつ木たちさはるわか葉のかけそひゆく

山新樹

見わたせはすゝしさこめて夏木たち青かきめくるよもの山のは

卯　花

卯のはなのさけるまかきは庭の面につくれる雪の山かとそ見る

音もせすたちもさわかて卯花のなみのぬれきぬほすかきねかな

ひたふるに咲こそまかへ卯花のこゝろやゆきのそらめなるらむ

月前卯花

てる月のもらぬ木かけも咲しより光あまねき庭のうの花

垣卯花
雪とさき月とにほひてよるひるのへたても見ゆる垣の卯花

水邊卯花
なみよりし春のさくらの面かけに立かへりさくきしの卯花

河卯花
川浪の音はまさらてたちそふと見ゆるや咲るきしのうの花

葵
代々遠くかけてそしのふあふひ草その神山のふかきちきりを

挿葵聞郭公
とりかさすあふひの外にはつ聲はおもひもかけぬ山ほとゝきす

待郭公
よしさらはまたれぬはかり鳴こゑをしのひもはてよ山ほとゝきす
人よりも待そわひぬるほとゝきすきゝおくれしとおもふ初音に
ほとゝきすまつにこゝろをくたく哉さ月の玉のこゑきかむとて
時鳥なくや五月のくす玉をかけていつかと聲そまたるゝ
ほとゝきすくへきしるしとむら雨の雲のふるまひかけてこそまて

人傳郭公
人とにかたりつたへてひところゑもよもにあまねき山ほとゝきす
柴人のほかにはたれもほとゝきすまた山深き聲はかたらし
わかきゝし聲にかはりて人つてはさやかにかたる山ほとゝきす

尋郭公
ほのかなるしのひ音ならてたつねいるかたのみたとる山ほとゝきす
たつねいるけふしも鳴てよにいてはいかにう月のやまほとゝきす

遠尋郭公
なきぬへきけしきに又も峯こえてつらさかさなる山ほとゝきす

初郭公
きく人のあまたあらしとうれしさも深きよの間の山ほとゝきす
まとろまてこよひまたすはほとゝきす人つてにのみあすやきかまし

郭公
なれもまたぬしさたまらぬ戀すとてうはの空にや鳴ほとゝきす
鳴聲もきゝの若葉の日にそへてしけくなりゆく山ほとゝきす
くもの浪たちもかへらてひと聲にあとなく過しやま時鳥
わかためにもらすはつ音もほとゝきすうき身はよそのたよりとそ聞
ねのみなくうき身ならてはかす人もなみたことゝへ山ほとゝきす

曉郭公
つれなさも月にはまけてほとゝきすあはれのこさぬ有明のそら
夢路よりさむるまくらのやますて猶あかつきかけて鳴ほとゝきす

夕郭公
ほとゝきす雲のいつこと鳴すてゝ月影したふ明かたのこゑ
まつ人もまたぬもきけとほとゝきすたそかれわかぬ空になくなり
こよひまた月にと猶もちきりおけとよはた雲になくほとゝきす
紅になみたこかれてほとゝきすおつるいり日のやますなくなり

夜郭公
ほとなさを鳴てかこつも一こゑはかひなきよはの山ほとゝきす
ねさめてやなく音聞らむほとゝきすさそふ夢路の末の里人

月前郭公
月にきくよはのあはれはいてぬ間のおなし聲ともなくほとゝきす
さやけさを耳にもきけと時鳥月見る空になきわたる聲

てる月の光さやかに鳴音をもそらにそちらす山ほとゝきす

雨中郭公

しのひ音のなみたには猶村さめもそゝきそあまる山ほとゝきす

さみたれにかさとり山の郭公なにをらしとかふりいてゝなく

五月雨を涙にからはほとゝきす聲もをやますふりいてゝなけ

いふせさのをやむはかりにほとゝきす聲ふりいつるさみたれの空

近郭公

ほとゝきす雲のいつことたちいつる軒はに又もなのる一こゑ

遠郭公

ほとゝきす夕ゐる雲のそことなく山のはつかにこゑそきこゆる

なきてくる聲かときけはまたさらに遠さかりぬる時鳥かな

山郭公

くれふかく夕ゐる雲のそこはかとなく音しのふのやま時鳥

まちつけて鳴こそいつれむら烏のかへるゆふへの山ほとゝきす

高くらに聲もきこえてこのあさけなきわたらひのやまほとゝきす

深山郭公

やへたてる雲にきほひて鳴こゑも空にかさなる山ほとゝきす

河郭公

川浪にまきれやするとをちかへり鳴聲たかき山ほとゝきす

よしの川早瀬の浪に鳴すてゝこゑもあとなきやまほとゝきす

關郭公

すき行をしはしとゝめて關もりも猶なのらせよ山ほとゝきす

市郭公

たちさわくいちのうゑ木に聲たかく鳴てまきれぬやま郭公

山家郭公

みやこおもふみ山の庵とほとゝきすいつるたよりをすくさてそとふ

ほのかなる聲こそきかね出いるもちかき軒はの山ほとゝきす

鳴ていつるたより過さすさそひけり夢のまくらの山ほとゝきす

故郷郭公

としとにきけとふりせす鳴聲やむかしなからの山郭公

こゑも今はふりし都のほとゝきすさかりの程やなきてこふらむ

待客聞郭公

すきゆかてともにきくへくこぬ人も猶まちいてよやまほとゝきす

念佛間聞郭公

一聲に佛となふる數あまたおこたる今朝のやまほとゝきす

郭公數聲

とほくすき近くもらして鳴聲の空にしはしもやまほとゝきす

早苗

うゑわたすけふのさなへにゆたかなる秋のたのみもとりはたかへし

をとめ子か袖ひちりこにおりたちて水沫かきたれとるさなへ哉

わさ田よりおりたちそめてけふいくかおくてのさなへとりつくすらむ

採早苗

おりたちてとる手やいかにたゆみなく千町のさなへいそくをとめこ

身をうきに思ひとるにもしつのめはさなへにそてやぬらしそふらむ

雨中早苗

いそくらむほともしられて五月雨のふるのわさなへとりもをやます

海邊早苗

しほなれぬしわさやからきみなと田にさなへをいそく浦のあま人

菖　蒲

ぬれまさる袖もおもはてあやめ草なかき根さしにこゝろをそ引
あやめ草なかきねさしを引かへてこよひはかりの枕にそゆふ
ふかくしむにほひもたれかあやめ草ひくをならひのけふの袂は

簷菖蒲

ふくけふも軒のあやめの露けきはうきにこゝろや猶ひかるらむ
昔のみしのふの軒にけふはまたちとせをかけてふくあやめかな

池菖蒲

池水のふかきこゝろにおほしたるあやめやなかきねさしなるらむ

盧　橘

袖の香のむかしのみかは面かけもしのふにゝほふ軒のたちはな
いつよりか花たち花のかくのみは昔をしのふたねとなりけむ

盧橘風

さそひくる風をむかしのしるへにて袖のかしのふ軒のたちはな

簷盧橘

しのふにもあまる軒はのたち花やいかにちきりし昔なるらむ

故郷盧橘

にほはすはふるき軒はの昔をも花たちはなのかくはしのはし

樗

むらさきのいろにさかすは見る人もなつの木間のあふちならまし

五　月　雨

はれまかはけふはしはしのをやみたになかめいふせき五月雨の空
をやみなくふりそふまゝに音たかくさみたれおつる軒の玉水

五月雨久

さりともとたのみそめてもけふいくかはれす日をふる五月雨の比

五月雨晴

めつらしきおもひのかけもさしそひていふせさはるゝさみたれの空
かさなりし雲も日頃のいふせさも跡なくはるゝ五月雨のそら

杣五月雨

日をふれはほの三日月も五月雨のはれゆくそらに有明のかけ
ひく人もたえてほとふる五月雨に朽木のそまの名こそなかるれ

河五月雨

よしの川みかさにこえて岩浪のうつ音たかきさみたれのころ

螢

よもすからもえこそわたれおもひくさ朽てやなりしほたる成らむ
おく露をいのちとたのむ身なれはやひる間はきゆる螢なるらむ
なみたにはからぬほたるもおもひたつたよりに草の露やとふらむ
うかれゆく螢のたまはから衣すそのゝ露やむすひとむらむ

曉　螢

とふほたるうき曉にきえ行やもゆるにまさるおもひなるらむ
鳥の音になかぬほたるもうき時とおもひきえぬ曉のそら
わかれこしたかきぬ〳〵の道芝におもひきえゆく螢なるらむ

雨中螢

とふほたる雨にさはらぬ思ひとやふる夜もぬれて猶かよふらん

水邊螢

そこひなき淵のおもひとあた浪の音にはたてぬほたる成らむ

谷　螢

木かくれて月日よそなる谷水にほたるはかりや影うつすらむ

野　螢

あたしのゝ露にひかりはまかひてもおもひきえせすとふ螢哉
何事をおもひいる野に夏草のふかくはもゆるほたるなるらむ

河　螢

ふち瀬なきおもひをしれと瀧川の淀にももえて飛ほたる哉
涙の音をなくねにかりて涙川ほたるそもゆるふかきおもひに

池　螢

おもひにはもゆるほたるもなくこゑのなみたの川や浪のぬれきぬ
とふほたる池の鏡に見るかけのみくりやいかにくるしかるらむ

海邊螢

とふ螢ふかきおもひもいひいてすもえてや見するみゝなしの池

窓前螢

住江にもゆるおもひはわすれ草つみにやきしのほたる成らむ
我かけに書見るまとゝこゝろありてあつまりきぬる螢なるらむ

照　射

なにことをおもひあつめて飛螢ふみゝぬまとにもえわたるらむ

山中照射

さをしかもひとつおもひの身なれはやともしの影にこかれよるらむ
よる鹿をまつのおもひにかり人も猶山ふかくこかれわふらむ

瞿　麥

おひいてしちきりはかなき垣ねとやつゆけかるらむなてしこの花
朝夕になでおほしたるかひ見えていろ香もふかきやまとなてしこ
いろも香も露おくれてはあらせしとなてしこしるき花のませかき

瞿麥露

おきいてしたふ床夏のなごりより色こき露のかゝりそめけむ
色そめて花のにしきにおく露も玉しきしまのやまとなてしこ

鵜　河

おくれしとくたすうふねもあくるよの早瀬にしらむかゝり火の影

深夜鵜河

桂川月のなきよはかゝり火の影さしあかすうかひふね哉
夕月の光はきえて鵜かひふねたのみよふかくてらすかゝり火

鵜河篝

夕月のいるより瀬々にさしかへて鵜川をてらすかゝり火の影
明ぬまもきりのよ川のうかひ舟さすかけうすき世々の篝火

名所鵜河

うかひ舟山吹の瀬にちる花の面かけうかふ涙のかゝり火

夏　月

あつき日のなこりもきえて夕露に光さしそふ月のすゝしさ
日くるれはあつさもなつの夕月夜すゝしき影にうつりかはりて

夏月涼

やとる間もなつのよなからすゝしさは秋をかけたる露の月影

夏月易明

見る影のあくるそはやき夏のよは月けの駒もひまやゆくらむ

雨後夏月

雲間よりかつ見えそめて夕たちのはるゝをいそく月の影かな

樹陰夏月

吹わたる梢の風ももる影に見えてすゝしき夏のよの月

河夏月

水無瀬川やとれはあけて月はかりあけて行せにのこる短夜

関夏月

おのれまつさす影あけてあふ坂や関の戸いそくみしかよの月

旅宿夏月

夢路かは月に都のおもかけもかよふほとなくあくる夏のよ

夏　草

かる草のあとよりおふるほとは猶はらはぬ庭もしけらさりけり

おひしける庭にことさら夏ふかく見ゆるやくさのまかきなるらむ

行路夏草

しけりあひてまよふ夏野の草も又むすへは道のしるへとそなる

野夏草

いろ〳〵の花咲いてむくさ葉ともなへてみとりにしける野邊哉

原夏草

しけりあひて雪間はつかにみし春をおもへは遠きまのゝかや原

故郷夏草

故郷はまかきにふかき夏草のは山しけ山にはにこそ見れ

蚊遣火

蚊をいとふひとつおもひによる〳〵はけふりくゆらす遠近のさと

海邊蚊遣火

むれくるをからしとうらのあま人はもしほにあらて蚊遣たくらむ

閑居蚊遣火

人めにはけふりもたつなしられしとすむかくれかの軒のかやり火

世のうきはのかれてすめる宿も猶いとひかねてやかやりたくらむ

夕　立

なる神のおとにまきれてふる雨のはけしさしらぬ夕たちの空

ゆふたちはふるとはかりにかつはれてなこりはかなき雲のぬれきぬ

夕立雲

名もしるくくれ行空のこゝちしておほひかさなる夕たちの雲

すくる間のときもおそきも吹さそふ風のまゝなるゆふ立の雲

夕立早過

すゝしさも猶ほとなくて夕たちの過ゆく跡にてる日かけかな

いつこまてふりゆくとてか夕立のあしもとゝめすいそきすくらむ

山夕立

見るかうちに日かけおほひてくらはしのやまのはのほる夕立の雲

かきくれし入日の影もみえはれて外山にうつる夕たちのくも

海夕立

あはち嶋あはと見るまに雲の浪跡なくくらす夕たちのそら

よる浪に音をのこしておき遠くなる神すくるゆふたちのそら

水　鶏

宵なからあくるよとてや天の戸をくるれはたゝくくひなゝるらむ

人とはぬ葎の門をしけくのみさしてたゝくやくひなゝるらむ

夕　顔

しられしとしのふやとりの花とてやたそかれときにさける夕かほ

白露の光をそへてにほはすはたそかれわかし花のゆふかほ

草屋夕顔

さすかまた花もはちてやあはらやを咲かくすらむのきの夕かほ

あはらをもつくろひたてゝ露きよくにほふ軒はのはなの夕顔

蓮

そこにこる心しられて玉とのみ露をあさむく池のはちす葉
玉とのみふきゆらかしてゆふ風もあさむきそふるはちす葉の露

氷室

夏かけて猶きえせぬや心をもふかくこめたる氷室なるらむ

氷室風

なつ冬もつかへまつるとひむろ山あつさ寒さも世にやことなる

納涼

氷むろ山さえしあらしのすゝしさにかはるや夏のしるしなるらむ
てりわたるあつき日影も夕くれにうつれはさすかすゝしかりけり
吹風のすゝしくかよふ夕暮は夏をもたとる松のしたみち

夕納涼

すゝしさは秋まつむしも下草に鳴いてぬへき軒のゆふかせ
なこりなくあつき日影も色くれて夕すゝしきやまのはの雲

樹陰納涼

かけふかくすゝしき木々のなかりせはなにゝよりてか夏をすくさむ
すゝしさも一葉の秋にとならてちらぬや夏のきりの下かせ
夏ふかくてる日おほひてもゝえさすみなつきの木の影そすゝしき

杜納涼

日をさふる梢の風もすゝしさを重てあかぬころもてのもり

河邊納涼

浪はかりかへる川への夕すゝみたちよる人は家ちわすれて
秋たゝは猶いかはかりますけかるそかの川せの浪のすゝしさ

湖納涼

袖かへるよそめもすゝしゝかのうらやゆふ風わたるあまの釣ふね

船納涼

こきめくる池のなかにも中嶋のまつかけすゝしふねやよせまし

松蟬

うつせみのけふかあすかとおのかよをまつの梢に音をや鳴らむ
かけよりも猶たかゝらし年ふかき松かえゆするせみのもろこゑ

扇

秋風のをきの上葉に吹までのやとりやならすあふきなるらむ

扇風

いつとなく思ふまに／＼あふきいてゝすゝしき風を手にまかせつゝ

夏日

てりわたるあつさしられて吹風も日かけにぬるむみな月の空

夏星

夕つゝのかゆきかく行すゝむまにはやあかほしのあくるみしかよ

夏夜

ひるのまのなかきあつさに引かへて涼しさあかぬ夏のみしか夜

夏田

うゑわたす跡より又もおりたちてわさ田の小草とる岡へかな
いつかまたかたへの麥のほにいてゝ色つきぬらむをたのわかなへ

夏木

日をさふるすゝしさいはて月影のもらぬをかこつ夏木たち哉

夏蟲

夏ひきのいとまなくのみくり出て日くらしすかく軒のさゝかに
鳴せみの聲はくれゆく木かけよりおもひにもえてとふほたるかな

夏聲

ほとゝきす鳴一こゑに夏のよはおくれすひゝくあかつきのかね

夏　衣

蟬のはのひとへはかりもいとはれてあつしとかこつ夏ころもかな

夏　簾

夏なからもりくる風のすゝしさは秋をかけたる軒のたまたれ

ふきいれてすゝしきくれは秋かせの面かけうこくのきの玉たれ

晩　夏

おきまさる夕露すゝしこむ秋も草のまかきのほとやなからむ

くれて行夏も程なきまかきとてへたてもおかぬあきの夕つゆ

晩夏風

夕まくれとなりまちかき秋風のあしかきこえてかよふすゝしさ

貴賤夏祓

松かえの高きもなみにあらぬ身もみな月はらへしかのから崎

後鈴屋集後篇中之卷

本居春庭詠

秋歌

初秋

草の露梢の風のすゝしさも今朝はことなるはつ秋の庭

身にしみてふくにもしるき秋の色を袖にかさぬる露のあさ風

初秋夕

いかならむまた初秋の夕たになかめられける行末のそら

初秋露

秋きぬとめにさへけさはかゝるまてむすふか庭のあさちふの露

あきとのみ夏の末葉に見し露も猶あさ戸出の庭のあさちふ

こゝろにはおほえぬ秋をはやしりてなみたの露も袖におくれす

田早秋

時きぬとおのれけさよりほにいてゝいそくわさたの秋のはつ風

幽栖秋來

秋きぬとしらてもすきの下庵に梢の風のおとろかすらむ

殘暑

そのまゝに殘るあつさもわすられぬあふきはかりやうれしかるらむ

七夕

天川のまれのあふせを待わたるたきつなみたや水のみなかみ

天川はやちかつきぬまちとほにおもひわたりしとしのあふせも

たなはたのとしに一夜のあふとはかけてはかなき露のぬれきぬ

待をしむなけきの外はあきの露かけてもしらし天の羽衣

天川かはるうきせはなゝふすけたゝかりそめの一夜なれとも

天河いかにわたりのとほけれは年をへたつる舟路なるらむ

七夕別

うらみあれや天の川原にはふくすのわかれてかへる袖のあさ風

とし月をへたてぬ袖のわかれたにぬれそふものなあまの羽衣

七夕雲

うれしさをつゝむ今宵とたつ雲の衣手いそくほし合の空

一とせをよそにへたつるうき雲の晴間やこよひほし合の空

七夕河

天川なかるゝ水はたえぬとも星のあふせはよとみたにせし

あまの川かはるうきせはなき中も遠きわたりになかれてそふる

七夕橋

天川こよひならては渡さぬもうらみそかゝるかさゝきのはし

七夕船

わたしふれさをかちほさぬ契りとはなとたなはたの定めさりけむ

七夕草

しのすゝきしのはぬこひもたなはたのまれの契りは猶やくるしき

たなはたの袖かと見えてよるふねをあまの川原にまねく小薄

天川そこの玉ものたまさかになひきぬるよやいかにうれしき

七夕鳥

たなはたにはねをならふる契をはしはしかさなむかさゝきの橋

牛女悦秋來

天河なけきの霧もかつはれてこゝろゆく瀬に秋風そふく

　星夕言志

くれまつも年に一夜そくもりてもられしさそへよ星合の空

いかなれは今宵ならては天川舟をもはしもわたさゝるらむ

　荻

生たてる程よりも猶秋風の吹音しけき庭のをきはら

　荻風

おとたてゝ過ぬるあとのさひしさも猶ヿならぬ荻の上風

吹音のかくうきものと秋風もしらてやそよく庭のをきはら

秋風のふかきあはれや荻の葉にやとりてさわく夕なるらむ

そよきても荻の葉風にまさりてはなにの草木の音かさひしき

吹やらきさわくやつらきいつれともおもひわかれぬ風の荻原

　露底荻

此くれはおのかやとりと吹はらふ風をもうつむ露のをき原

　夕荻

吹音のあはれはかりになりはてゝなかめくれゆく荻の上かせ

　夜荻

よるは又なかめくらしゝあはれまて軒はにそよく荻の上風

さよふかきおなしあはれもねさめして聞音たへぬ荻の上かせ

　江邊荻

夕まくれ入江の浪も荻の葉に音うちそへてさわく浦かせ

　故郷荻

ふる郷は音する風も吹あれてかなしさふかき軒の下をき

　萩

夕露の色をおきては見る花の時こそなけれ庭の秋はき

　萩露

おもりては色そふ露もいとはれて花に風まつ庭の秋はき

　夕萩

月にいま見るへき花も露はかりくるゝまをしき庭の秋萩

あやにくに露さへ花のいろそへて夕くれかゝる庭の秋はき

　萩盛

咲みちてあまたいろかやおく露にうつりてにほふ秋はきの花

　萩移袖

小萩原わくるこゝろのいろはかりうつるも深き花すりのそて

　月前萩

にほふ色もみかく光もとり／＼にあはれよふかき月の玉はき

　庭萩

くれかけて猶そ咲そふ朝戸出に見しもさかりの庭の秋はき

　行路萩

いろみれはわけし小萩のおもかけもうつりてにほふ花すりの袖

　萩映水

いろふかくうつる影にも猶あかて涙や萩こす野路の玉川

　宮城野萩

きてゆかむにしきならねは立かへりよくみやきのゝ秋萩の花

　薄

まねくかひありていつかはとふ人の袖とも見まし庭の小薄

　風前薄

花すゝきあはれやまねく見る人のそても露ちる野邊の夕風

たれとなくうはのそらにやまねくらむ風をたよりの野への小薄
と草は過て跡なき秋風をほなみにのこす野邊のをすゝき

薄露

むすふまもなひく野風に猶たえすちるかを花のそての夕露

薄似袖

おもひ草下におひてや秋の野の尾花か袖も露かゝるらむ

野外薄

人まねく袖と見るよりわかやとはたのみもかゝる露の小薄

袖の露はらひやあへぬ吹過にゆく風まねく野への小すゝき

女郎花

女郎花夕の露の玉かつらかけてたれをか待わたるらむ

をみなへし人のものいひさかの野に咲口なしのいろもあやなし

月前葛

すむ月の影吹ちらす秋風をうらみやすらむ野へのまくす葉

影はなほふきもかへさてふくるよの月にあたのゝ葛のうら風

蘭

藤はかまきぬといふよりにほへれは秋こそやかてあるしなるらめ

ふちはかまたかぬきすてゝ秋の野の道のちまたに咲にほふらむ

咲にほふ河邊のをのゝ藤はかまたかぬきすてしみそきなるらむ

槿

朝な〳〵ひもときかふる花なれはうつるもあたの露のあさかほ

草花

いろ〳〵におもひみたれても草の花にこゝろを露もおくらむ

からにしき一野にみちてしくものもなゝくさにほふ花さかり哉

草花盛

おく露も花の色香の外ならてさかりかすそふ野への八千種

月前草花

つゆかゝる花のにしきによるは又光をしける月のたまはき

水邊草花

花のいろも月をやとしておく露のひるまにまさる野への八千種

野草花

咲かゝる萩こえすきてもとの色に浪たちかへる野路の玉川

のへみれは猶さま〳〵におほけれとあはれもたくひなゝくさの花

なゝくさの外にもあまた咲花のかすかきりなきむさしのゝ原

故鄉草花

藤はかま小萩のにしききて見よと人をやまねく野へのをすゝき

尋きて千くさにものをおもへとや花さく野らとあれしふる鄉

露

秋をおきて時こそなけれ草葉にも袖にも露のかゝるゆふへは

おもひ草ありとしられてほにいつる袂も露のしのゝをすゝき

風前露

かこたてはなにかおくへき秋の露とわり過てかゝるたもとを

ちるよりもむすふやしけき夕風の吹にそひゆく淺ちふのつゆ

月前露

くれふかく露ゝ心をみかきおきて光まちとる月のしらたま

やとりきて玉なす露のうたかひをみかきそへたる秋のよの月

くるゝよりやとすあはれも露そひて更行そてにおもる月かけ

庭露

けさみれは又おきそひてふかゝりし昨日の露もあさちふの庭

野　露

草葉よりこほれあまりて白露の玉ぬきあへぬをのゝしの原

田上露

吹よれはいなはの浪のしら玉を風にみたるゝ小田のゆふつゆ

秋ふかくみのりさかえむおもかけもなひく稲葉の露のおくて田

故郷露

あさちふの露のおくかを尋きてたれふる郷に袖しほるらむ

枕上露

ものおもへは夢はむすはて秋の露おきこそあかせさよの手枕

さよふかき秋のおもひのかす／＼をつくすねさめの手枕の露

かけそふる老のねさめのとわりも過てよふかき手枕の露

虫

なみたにも猶おきそはむ夕露をかこつか庭のむしの聲々

聞人のこゝろのいろもひとしほはあはれさふかき松むしのこゑ

くれふかくおもひみたれて鳴虫やおのかなみたにかるかやの露

松虫もたか秋ならぬ程しるくかひなき音のみつくすよな／＼

夕　虫

鳴いつる涙とはかりむしの音におくれすかるゝ庭のゆふ露

あさちふやなみたにからむ夕露をした葉にいそく松むしの聲

深夜虫

なきあかすあはれのほともきく袖にしら露ふかきよはの虫の音

曉　虫

有明の光もきえし朝露につれなくのこるまつむしの聲

きり／＼すこゑたてそへて長きよも猶あかつきの露にたく也

聞　虫

きく袖にふかきあはれのほとはかり露もおきゐるよはの虫の音

虫聲隨風

吹風にうつりきこえてそこはかとしら露まよふのへの虫の音

月前虫

見る月にさはらすなからきけは猶こゝろつくしの松むしの聲

照月のかつらにはあらぬ松むしも猶鳴こゑはそらにすみけり

まつむしもおもひこかれて紅葉する月の桂のかけになくなり

中におふるそれにはあらぬまつむしも光やたのむ月に鳴聲

こぬ人を猶まつむしもかきくらし雨もと月に音をや鳴らむ

雨中虫

こぬものとおもふかなれも降雨に鳴音しをるゝ宿の松むし

ふるまゝにおもひしをれて松むしの聲にもさはるよひのむら雨

ふる雨にぬれぬあはれも一入はそひてや深き松むしの聲

雨後虫

むら雨にをやみしこゑもはれ行は又ふりいてゝむしそ鳴なる

行路虫

道のへやすゝみしかけに秋もまた立よりてきく松むしのこゑ

野　虫

秋ふけて今はわれかととふ人もなく聲よわるのへのまつむし

よるは又花のゝにしきたちかへてこゑのあやおるむしのいろ／＼

野徑虫

わけゆけはなくむしの音のあはれにも袖ぬれまさる野路の夕露

禁庭虫
いつこまてすみのほるらむ雲の上のみはしのもとに鳴虫の聲
田家虫
山田もる袂の露をなみたにやかりほにむしの鳴あかすらん
故郷虫
あともなく草にやつれてふる郷はたゝ鳴虫のすみかなりけり
閑居虫
とはれしのやとの淺ちに露かけて人まつむしのこゑもつれなし
旅宿虫
松虫のあまたこゑして草枕むすひわつらふ秋の野へかな
枕上虫
おとろけはぬるよのかへのきり／＼す枕にちかく聲しきるなり
關路秋風
秋風はいつよりたちてもろともにけふ吹こゆるしら川のせき
野分
野分たつ風に草葉の露よりもまつさきたちて雲そみたるゝ
あれはつるわかやとのみや野分せしけさもなかめのかはらさるらん
野分後月
あくるをもまたてをしめと野分せし庭の千くさをてらす月影
秋夕
露の間のなかめにちゝの數／＼をおもひそつくす秋の夕くれ
くれふかき秋のあはれのほとはかりおきてやかゝる袖の夕つゆ
物おもふ數をつくしてくれふかくそてにおくれぬ秋のゆふ露
秋夕雨
なかめにもかゝる夕の秋の袖ぬらしなそへそむらさめのつゆ
そらも猶ものおもふ秋の夕とやむらさめそゝく雲のころも手
海邊秋夕
風たえてなみの花さへなにはかた見るめさひしき秋の夕くれ
山家秋夕
世の外のあはれもそひて苔衣つゆ山ふかきあきの夕くれ
田家秋夕
吹そよく稲葉の風を軒はにてなかむる小田の秋の夕くれ
月
弓張の空よりかけすなかめきて今はまとかにいつる月かけ
うき雲のなみもかゝらて秋の月水なき空に影そすみける
さやけさはとよはた雲の夕より空にしられしよはの月影
おもひいれぬ人もことひはさやけさにあくかれぬへき月のかけかな
よのうさもみるにわすれてあくかれぬこゝろも月の外やゆくらむ
あはれしるうき身ならすはなか／＼に涙くもらぬ月や見さらむ
なかしともたれかおもはむあかすのみ月見てあかす秋のよなれは
上弦月
見るほともあすはまさらむ影なれといる猶をしき弓はりの月
待月
まちわたる月はつれなき山のはをわれのみいてゝ見るもはかなし
深夜待月
まちわたる人のこゝろのほとはかりいつるをいそけ山のはの月
ふけゆくと猶山のはをいてやらて待ほとなかき秋のよの月
欲出月

いてぬより先さやけさのあらはれて山のはみゆるあきのよの月

翫　月

名もにすよ千よをひと夜になすらへて見るともあきの月の影かは

連夜見月

ねもやらてつもる枕のちりはかりくもらぬ月にいくよあかしつ

夕月のそひゆくかけを見るごとにめつるこゝろもまさるよな〳〵

ほのかなる光ももちとみつまてに一夜もかけす月を見しかな

馴　月

秋ふかくなるゝを月もいとひてやなかむる影のかきくらすらむ

なるゝをも月はいとはてなか〳〵にあはれをそふるよひ〳〵の影

袖にのみやとりなれては月も猶雲ゐのよその影とやは見る

明　月

さやけさはますみのかゝみかきあけて空にかけたる秋のよの月

月秋友

としへてもかはらぬ月の影なれは秋のよなかき友とこそみれ

貴賤憐月

てりまさる秋のおまへの月やいかにしつか垣ねも影すめるころ

緇素見月

よの外を行なる月のまとゐとやこけの衣も立ましるらむ

遊士行月

すむ月に長き夜すから行人も雲ゐはるかに猶やうかれむ

惜入月

出るたに心つくしをみねの松木の間におつるよはの月影

八月十五夜

さやけさのたくひなかはとよにたかき名をもち月の影そことなる

なみならぬもなかのほともあらはれて照そふ月の玉かしはかな

九月十三夜

十日あまりみたぬ光のもちのよにかはらてすむやまさる長月

庭　月

夕くれの露の光もうつろひて月になりゆく庭のあさちふ

都　月

すみわたる雲井まちかき光とてさなから月のみやこ也けり

山　月

たつねみむ杉のこすゑにすむ月もこてふにゝたる三輪の山もと

しら雲のたつたをくらも名のみしてさやかにすめる峯の月影

杣　月

よるは又月のかつらにひきかへて宮木をよそにみをのそま人

これもまた月の宮木とかつらにや心ひくらむよはのそま人

谷　月

中空にすむほとはかり谷の戸やしはしさしいるよはの月影

野　月

草の葉の露もみなからてる月の光にうつるむさしのゝ原

杜　月

ふかきよの露をつくして下草にもりの木間の月そくまなき

わりなくもしけき木間をもりの露尋てやとる月のかけ哉

月影のなかめにたへぬなみたともおつるなけきのもりの下つゆ

海邊月

さすしほは及はぬいそのくまわまて光みちたるあきのよの月

浦月

さやかなる月のみるめをかるよはゝ猶袖ぬらす浦のあま人

音たかくさやかにすみて影なから月ふきよする浪のうら風

秋の月光をちらす浦風に花をあらそふ沖津しらなみ

瀧月

ぬきとむる光も山のかひなくて月おちかゝるたきのしらいと

てる月の光をかけてぬきみたる瀧のいとまやなみのしらたま

岩にちりそこにしつきて玉みかく瀧つよとせの秋のよの月

關路月

あふさかや關の戸ならてすむ月のさすに夜深くこゆるたひ人

關路曉月

たひ人はあけぬとこゆる關の戸に猶かけとめて月そいそかぬ

井月

なか〳〵に月のみやこの面影をうかへてつらきわすれゐのみつ

くむ水に井のへのかつらかけなからうつるも清き月の玉もひ

田月

秋のよの月のやとりとくれゆけは露しく小田の稻むしろ哉

夕露のおくていろつく秋の田にやとるもあかき月の影かな

橋月

すみわたる月をいくよの秋かけてあはれとかみる宇治のはし守

すみわたる光もあかしさにぬりの大はしのうへの秋のよの月

社頭月

よもすから雲もへたてす風の宮光をみかく月のたまかき

古寺月

さよふかくおこなふ庭の秋の月光ものりの花とちるらむ

閑居月

月をのみ友となかめて心さへうきよの外にすむいほりかな

山家月

月見れはわれもうきよのちりはかり心くもらてすめる山さと

こゝろすむ友とはなにをみねの庵外行月の影ならすして

のかれきて世のうき雲の外ゆけはこゝろの月もすめる山さと

故郷月

きてみれは涙くもりて月影のすみしよをさへしのふる郷

秋も猶むかしなからの山風に光をちらす月の花その

廣澤池眺望

おもひやるむかしも遠くすむ月になかめはてなき廣澤のいけ

月前星

さしのほるひとつ光となりはてゝ月にきえゆく星のかす〳〵

月前雲

見る月のあたりまちかくたゝよひてものおもはする空のうき雲

たえまのみわたりやすらむむら雲の空行月もかけそくまなき

さらにまた光そひぬるこゝちしてむら雲すくす月のさやけさ

吹風にあらそひかねてすむ月の空に消ゆくよはのうきくも

見る影にさはらぬ雲と吹風ものこすか月のよそのひとむら

すみわたるあたりの空はとたえして月にかゝらぬ雲のうきはし

月前風

月影のすみゆく空にさきたちてうき雲はらふよはの秋風

雲はみなよそにうつして照月の鏡をみかくよはのあきかせ

はるゝよは雲やさそふと吹も猶心にかゝる月のあきかせ

月前竹風

吹わたるさ枝の風ももる月のさやかにみえてなひく呉竹

月前木

ひるまかは月にみるよのけしきまてと木およはぬ庭の松かえ

月前玉

なか／＼にひろひそわふる秋の月清きなきさは玉にまかひて

月前管絃

高くすむしらへは月の都にもきゝやめつらむよはのいとたけ

月前遠情

すまあかし今宵いかにとみる袖にかけてそしのふ浪の月かけ

駒迎

もち月のかけと名におふ駒なれはこよひそいつるあふさかの山

水郷秋望

あしろ木もあらはれそめて立霧の涙にいさよふうちの川風

霧

なか／＼に立へたてゝはよるひるのさかひわかれぬ秋の夕きり

曉霧

立霧に猶よをこめてよこ雲のみねもわかれぬあけほのゝ山

夕霧

たちこめてなか／＼物のさひしさもなかめへたつる秋の夕きり

山霧

へたてゝも猶たつ霧のほとはかり面かけうすく見ゆる山のは

立こめてみねもをくらの山の名はなか／＼きりにあらはれにけり

ふしの根のゆきはゝかりて秋霧も猶山たかくたちはのほらす

海霧

わたの原みるめもなみの音はかり立のこりたる秋のあさきり

みるめなく八重の鹽ちの名にたちてあさけの霧も深き海原

浦霧

たちこめてあとなき涙もうちよする音はへたてぬ浦の秋霧

關路霧

くれふかく山ちへたつる夕霧にゆくへあやふむあしからのせき

閑居霧

立こめてうき世よそにと住庵のへたてかさぬる霧の八重垣

初鴈

きく人の袖にも露の玉梓をかけてそきなくはつ鴈のこゑ

山初鴈

みねこえしつはさをしはしやすむとや先小山田に落る初鴈

峯初鴈

飛こゆるみねは雲井の遠なからよそにはきかぬ初鴈の聲

田初鴈

なみたさへおちけるものを小田の庵にいつかとまちし初鴈の聲

鴈

まちとほにしはしきこえし鴈かねも軒端をすくる聲そ程なき

とひこゆる空よりやかてふもと田に先聲おつるみねの初かり

夕暮の野風をさむみ秋はきの花摺衣かりやなくらむ

暮天鴈

くれかけてくる鴈かねはみるまなく空に消ゆく露の玉つさ

月前鴈
月影のかたふく山のみねこえておのれもおつるよはの鴈かね
ちかれきて鳴をあはれと月影も鴈のなみたの露やとふらむ

羇中鴈
宿にたになかむる空を旅路にてくる鴈いかに秋の夕くれ

霧中鴈
こゑも猶きりやこむるとみねたかく鳴てや鴈のしらせきぬらむ
おもかけもこゑのまに／＼立きりの空にちかつく鴈のひとつら
立空におのれまよひてくる鴈はたとらぬみねの秋の夕きり

田上鴈
高根よりいな葉の雲をめにかけてふもとのを田に落る鴈かね
小山田のほたみかたよる秋風につらもなひきておつる鴈かね

橋邊鴈
鴈かねもつはさならへて雲の上に鳴こそわたれかさゝきのはし

芦邊鴈
たかかたにあしのよるともなにはえやふしとさためすわたる鴈かね
なにはかた何をか鴈はうきふしにあしのねをのみ鳴わたるらむ

遠近鴈
鳴聲のあはれかさねて峯たかく又きこえくる衣鴈かね
みねふもとおくれさきたつともしるくなく音あはする小田の鴈かね
峯とほきこゑも門田になく鴈もあはれは同しつらにこそきけ

鴈作字
かけてこしその玉梓の面影にかきつらねたるあまつ鴈かね
鴈かねのかきつられたる玉つさはとこよの文字かよみもとられす

稲妻
風わたる草葉の露の玉ゆらにひかりもかよふよひの稲つま
あたし野の露の契やいなつまのかよふとすれとかけもとまらす

鹿
なか／＼にきけはあはれのそふ聲をいつしかとのみまたれけるかな
つれもなき妻こひしれと松風にたくへやしつるさをしかの聲
露なからさそふ野風かとはかりにきく袖ぬるゝさをしかの聲
さをしかも雲になくなる心地してこゑ吹あくる峯の松風

曉鹿
長き夜にのこるうらみやあり明の月にたえせぬさをしかの聲
くるゝよりしはしのほともやまかつら曉かけてをしかなくこゑ

朝鹿
花つまにこゝろおきてや朝露のきえかへりなくさをしかの聲
吹おくるあさけの風にうらみてやかへる裾野のさをしかの聲

夕鹿
入相のかねにおくれすきこゆなり尾上をいつるさをしかのこゑ
夕日影いるさの山をつまこひにこかれていつるさをしかのこゑ

風前鹿
よそならすきゝこそあかせ秋風の身にさむきよの棹鹿のこゑ
吹まゝにたくひやくるとさよふかくまつ風しるきさをしかの聲
さそひくる尾上やとほきたえ／＼に松かせよわるさをしかの聲
雲はらふみねの嵐にたくひきて空に消ゆくさをしかの聲

月下鹿
つまこふるおなしあはれも月影のいてゝよふかきさをしかの聲

いつれかはあはれよ深き月影のかたふく山のさをしかのこゑ
月影もおなし秋なるあはれさに涙くもらぬさをしかのこゑ

霧中鹿

つまこひのなけきもそひて暮ふかく霧たちまよふさをしかの聲

山鹿

おもふにはまけてしのふの山高く鳴やをしかのつまこひのこゑ
わすられぬ妻をこひてやさゝのはのさやくみ山に鹿の鳴らむ

野鹿

聞袖も猶露ふかき秋の野をわけてつまとふ棹しかの聲
よもすからおもひこふれて聲たかくつまとふ野にをしか鳴なり

山家鹿

なれもまたはれぬ雲ゐに山高くなきてやわふるさをしかのこゑ

田家鹿

庵ちかく山風さそふ鹿のねにひたうちならす小田のますらを

擣衣

故郷に衣うつとは防人もよさむにつけておもひしるらむ
夢路よりさむる枕に猶たえす音うちつゝくさよきぬた哉
このころのたへぬよさむにうつ音もときあらひ衣いそくさと人

風前擣衣

ねさめしてうつ音きけはから衣夢をもさそふよはの秋かせ
秋風のおのかよさむもうちそへてさそひきぬたの音そ身にしむ

月前擣衣

こてふにもにたる音叢てる月にたれまちこひて衣うつらむ
里人は衣うつにもてる月のかつらの影や猶たのむらむ

秋風のちらす光に照月の花すりころもたれかうつらむ

夜擣衣

うつ音のさしもいそかすきこゆるやなかき夜たのむきぬた成らむ

深夜擣衣

宵のまのそれとなきまてうつ音のふけてちかつくさよきぬた哉

擣衣幽

なかゝゝに耳こそとまれさよきぬたたとるはかりの遠かたの聲
たえゝゝに音そきこゆる里遠くひゝききぬたの程もしられて

遠擣衣

吹さそふ風のをりゝゝきこえきてたえまとほの衣うつこゑ
さとあまたなかにありてやさよころも打聲うとくきこえきぬらむ

擣衣寒

秋風の身にしむいろをうつしてやきくもよさむの衣うつこゑ

擣衣何方

いつかたときく我さへにうちもねすたとりそあかすよはのさ衣

里擣衣

うつ里のかはりしはかりさよきぬた更てきこゆる音そまちかき
さよきぬた更てほのかに今ひとつきこゆる音や遠かたの里

名所擣衣

夜をさむみしかのからさきさきくあれとたれまつ風に衣うつらむ

澤邊鴫

なかめやる行へはくれて立鴫のおもかけはかりうかふさはみつ
なかき夜に猶もつきせぬうき數やいかにさはへの鴫の羽かき

鴉

露しげき草葉の床になくよりもきくやうつらの夕暮の聲

故郷鶉

あれはてゝ立よる人もなき宿の草のまかきに鶉なくなり

菊　露

さきかゝるまかきもたわに置露やおいせぬ菊の千代のありかす

咲花の色にうつるもあたならて千代をかけたる白きくの露

菊盛久

今よりは又みる花もなか月となかくやきくの咲にほふらむ

長月はなかくつきせぬしらきくの花のいろかの名にこそ有けれ

菊挿頭

あかす猶かさしやせまし菊の花千代のいろかのうつりゆくまて

千代へてもおいぬかさしときくの花なとしら髪のいろをそふらむ

菊花色々

こと〳〵にとれもにほはす菊の花おのかさま〳〵色はかはれと

ひとゝせにさくさま〳〵の花のいろのかきりも見する菊のませかき

水邊菊

さま〳〵ににほふまかきの菊も猶ちとせの外のいろとこそみれ

ちりかゝるときしらきくの下水や千とせくもらぬかゝみなるらむ

初紅葉

しらさりしよはの時雨もけさ見えていろつきそむる庭のもみち葉

紅　葉

まつそめし秋のかた枝は千入まてさきたついろのみゆるもみち葉

いろあさき梢もうれし千入にはちるもおくるゝもみちとおもへは

いかはかり秋のおもひのふかけれはかゝるもみちのいろにいつらむ

立田姫そむるこゝろもふかきいろはにしきおよはぬ木々のもみち葉

たか秋になみたしくれて山姫のこの葉のころも色かはるらむ

尋紅葉

たつねいる心の色のふかきにもそめておくれぬみねのもみち葉

紅葉一樹

外は猶いそくともなくたゝ一木そめてほとふるはつしくれかな

紅葉未遍

ふもとまておよはぬほとは初しくれたかねはかりのもみちにそしる

そむるいろもふるや時雨のこゝかしこむら〳〵見ゆる山のもみち葉

夕紅葉

もみち葉をおもひのいろも一しほはくるゝをしさにまさる夕はえ

雨後紅葉

さよしくれ夢かときゝしうたかひもはれて色そふ今朝のもみち葉

ふらぬまのおなし梢と見えぬまて時雨にまさる庭のもみち葉

深秋紅葉

露しくれそむる日数もうつろひて色秋ふかき山のもみち葉

山紅葉

山の名もよにかくれなく下葉までもる露ふかき秋のいろかな

秋ふかく露もる山のかひ見えて下葉もうすきいろはましらす

きてみれはもみちにあらぬかけもなしなへていろつくは山しけ山

もみち葉のにしき立田のやまとにもからくれなゐのいろはそめけり

谷紅葉

よそならぬ秋の光をたにふかく梢に見せててるもみちかな

關紅葉

一入を梢にとめてあふさかの關路すきゆくむらしくれかな
いろふかく染てあかまの關の名をこするにとむる秋のもみち葉
みとりなる衣の關路秋こえてこの葉もあけに色そうつろふ

名所紅葉

秋はまた名もいろかへてをくら山木々の葉あかくもみちしにけり
露しくれもる山いかに笠とりの梢もふかきあきのもみち葉

社頭紅葉

色深くそむるもみちのにしきにはしく手向なきあきの神垣
手向にはなにをかせましいろふかくそむるもみちにあきの神垣

柞

いろうすき梢はかせもちらさしとたのみやせましはゝそならすは

槭

そめわたすきゝの中にも立枝とてまつめにかゝるはしのもみち葉

蔦

いろそめていはほにかゝるつたかつらなつるをとめの袖かとそ見る
玉たれも秋はにしきにひきかへて蔦はひかゝるふるさとののき
唐錦しとねと見えてふる郷のすのこにはへるつたのもみち葉

秋夜長

このころはいくたひ夢を見すてゝも猶秋ふかくのこるよはかな
まちかきて鳥の八聲のしは〳〵に老はれさめをしきる秋の夜

秋興

とひこえて鴈なきわたる高根より又きこえくるさをしかの聲

山路秋行

涙かは分行そてにおちそふもふかき山路のまきの下つゆ
ゆくさきのこゝろほそさもうつの山猶あきふかきつたの下みち
分まよふなけきしられておきそ山あきゆく人の袖の夕きり

秋山

もみちせぬおのれなか〳〵秋山のいろもてはやす松のむらたさ

秋田

ほにいてゝそよくわさ田の秋風に露のおくてもうちなひきつゝ

秋鐘

暁のかねこそひゝけ秋のよのなかきおもひはつきぬまくらに

秋聲

秋風につままちわひてさをしかも聲うちなけくよはのさころも

秋植物

中々に人はまねかてさひしさのますほのすゝきなにかうゑけむ

殘秋

くれのこる秋の日數の今いくか在明の月のたえ〳〵にして

暮秋

したふとはなき別路もうき秋のなこりにかゝるそての夕露
なかめこし夕の空もこの暮や秋のかきりのあはれなるらむ

暮秋月

今いくか在明の月とおもふにも心ほそしやあきのわかれ路

暮秋鳥

なきておつる涙も霜とおくて田を鴈かねさむく秋そくれゆく

暮秋夢

ぬるからうちも猶をしまれて行秋の夢やすからぬさよの手枕

九月盡

露もまたけふをかぎりと行秋をしむたもとにつくしてやおく

冬歌

初冬

もみち葉もしくれもけさはさそはれて山風はやく冬はきにけり

秋はてしたか嵐より冬きぬとしくれそめけむ雲のころもて

初冬時雨

冬きては嵐はけしくふりかへてこの葉をそめし時雨ともなし

初冬霜

朝戸出の庭しろたへにおく霜のころもてさむく冬はきにけり

初冬落葉

たつた姫かへる錦とふるさとにもみちをおくるけさの山かせ

初冬月

しくれゆく雲間にさえてさやかにも冬をしらする夕月のかけ

山初冬

からにしきたつたの山も冬きてはしくれの雲のまよふふる衣

山家初冬

冬きぬとつくるしくれもよにしらすうき雲まよふ山の奥かた

閑居初冬

冬のきて人めもかゝる草の庵におとつれまさる軒の山風

時雨

ふりくへきしくれの程もまつ見えてひとむらふかき空のうき雲

こゝかしこしくるとみえて村雲の四方にたゝよふ山かせのそら

かつすきて一むら雲のほとなさも空にしらるゝさよ時雨かな

浮雲のはるれは空に音もなし嵐やゝかてしくれなるらむ

うき世にはふるかひなしと空にのみはやくやすくる時雨なるらむ

たゝならぬけしきはすきて定めなくなこりの雲にふるしくれかな

吹音のふるにまかひて村しくれはるゝもわかぬ宿のまつかせ

曉時雨

よにふるをなけくねさめはかきくれて老のなみたもうちしくれつゝ

有明の月はつれなく雲間より猶影見えてふるしくれかな

朝時雨

あけやらす猶かきくれて物おもふねさめのほともふる時雨かな

待えたるねやの板間の朝ほらけまたかきくらす村しくれかな

夕時雨

山のはの入日のほともいくたひかかきくらしふるしくれなるらむ

夜時雨

さそはれぬ夢もやあると立かへり又もおとするさよ時雨かな

見るかうちに空かきくれて月影の霜ふりかはるさよ時雨かな

寢覺時雨

袖ぬらすたよりまちてや物おもふねさめの床にしくれきぬらむ

はやすきてねさめ夜ふかくきく袖の涙はかりはふりもしくれす

時雨晴陰

ひとかたにさためかねてやよにふるも猶はれくもるしくれなるらむ

行路時雨

晴くもりふるとなきにもゆく道の空やすからぬむらしくれかな

むらしくれ又もふりきてたちよれは同しゆくさの野路のこの本

遠からぬ道もしはしは過しては行にほとふるむらしくれかな

瀧邊時雨

かきくらす空もしくれのふる音もしら雲たえぬ山の瀧つせ

おちかゝるすちこそそはねむらしくれふるまみしかき瀧の白糸

關時雨

風あるゝふはの關屋のむらしくれはやふりすきてもるとしもなし

ふる音にすまの關もりおのれさへ夢をとほさぬさよ時雨哉

橋時雨

吹さそふ風のゆくへも峯遠くしくれてわたる雲のかけはし

山家時雨

山里もよみうき雲をみかれねは猶さためなくふりしくれつゝ

むらしくれはれぬ雲井は世のうきにまさりて袖のぬるゝ山さと

落葉

ふくかたにこゝろは猶もうつろはてをしむ色こき風のもみち葉

見るそてに色をうつしてゆくへなく吹風さそふ庭のもみち葉

さそふとてをしむ紅葉もちるかたは風のたよりにうれしとやみむ

もみち葉の跡なき枝にうつろはてのこるなけきの色もはかなし

みな人のめつる千入をかきりとはなとちりそめしもみちなるらむ

夕落葉

てりそひし日影もおちて嵐山のこる色なきみねのもみち葉

風前落葉

もみち葉をさそふ嵐の山かせはをしむおもひの色にこそふけ

さそはれて風のゆくへも見ゆはかり明空てらす木々のもみち葉

庭落葉

すきそめし梢の色のこゝかしこ庭にも見えてちるもみちかな

日にそへてちりしく色のまさこにもまたもみち葉の盛をそ待

木本にちりしくはかり梢には猶あと見えぬ庭のもみち葉

水上落葉

影あかくてらす紅葉もちりかゝる水のかゝみは猶くもりけり

谷落葉

さしおほふ谷の戸はれてもみち葉にてりかはる日の影もめつらし

瀧邊落葉

もみち葉のにしきはつれてくれなゐにみたれやおつる瀧の白糸

河落葉

一葉まつおつるもみちやみなの川なかれてふかきいろの水上

ちりかゝる河瀬を見れはあやにしきたちかさねたる浪のもみち葉

なかれゆく色をゝしとやせきとめておのれ川瀬につもるもみち葉

海邊落葉

山本にちりてうかへるもみち葉のこかるゝ色やあけのそほふね

わたつみにかせるもみちの唐にしき磯へにかへすおきつしら浪

關落葉

はゝかりの關ともいはす吹こえて紅葉とゝめぬ枝の木からし

もみち葉も吹にとまらてふはの關梢あとなくあるゝ山かせ

橋下落葉

天の川涙もにしきの名にたちてもみちのはしをわたる木からし

閑居落葉

ふみわけてたれかこの葉も山ふかくちりうつみたる宿の通路

木枯

さそはれぬ色をうしとや吹音もいま一しほの松の木からし

音はかりたえすさわきてときは山ふくかひ見えぬ木枯の風
さそふへきかきりはまれの一葉たにふきものこさぬ庭の木からし

殘菊

くれなゐにうつるまかきの白菊やあきと冬とのへたてなるらむ
冬くれは霜のしらきくふりぬとやくれなゐふかき色にそむらん
いろはえて猶こそあかねくれなゐににほふからへの霜のしら菊

冬草霜

冬かれて草のはつかに殘る色も猶霜ふかくうつむ野邊かな

竹霜

吹はらふさ枝の風も猶さえてさやきそまさる竹のあさしも

篠霜

よもすからきえしにあかてけさも猶おく霜さやく風のさゝ原

枯野霜

八千草の花のにしきは色くちて一野にしける霜のしろたへ

社頭霜

色かへぬ御代のためしと榊葉にかけてそいのる霜のしらゆふ

寒草

おほかりし野へとも見えす女郎花かれて跡なきしもの下くさ
露は猶しもとなりてものこれるを草葉そさらに枯て跡なき

月前寒草

かれす猶やとるもさえて花すゝき霜をかさぬるそての月影

水邊寒草

見る影も猶こそかるれおくしもやみなそこわかぬきしの冬草

野寒草

おく霜に露も跡なくかれはてゝ名のみおひたる深草の野邊

原寒草

たえ／＼にのこるも今は遠からす霜かれはてむまのゝかやはら

谷寒草

霜さふる岩かけなから涙かけて氷にかゝるたにの冬くさ

枯野

秋のいろはいつちいにけむ白たへの霜にあとなき野邊の冬かれ
冬きては花野のにしきしきかへていろも跡なき霜のしろたへ

寒樹風

もみち葉のちりにし後はさひしさを吹こそさそへ冬の山かせ
もみち葉をさそひ盡して風の色も跡なき枝にのこるさひしさ

寒芦

わけわひしそれともなみにをれふして小舟さはらぬ浦の枯芦
かくれぬもそれとあらはに霜かれてなにのみたてる冬の芦原

薄氷

あさな／＼むすふとすれとかつとけて日をもかさねぬ薄氷かな
かさねてはさえぬ夜風にこほれるも猶ひとへなる今朝の池水

氷

さゆるよの嵐にまさる音羽川こほりやくたく瀬々の岩波
とくるもや猶かたからむ岩床とこほりかさなる山川のみつ

池水半氷

中島のこなたこほらぬ池水はふきくる風を松やへたてし

池上氷

河水はまたしきほとも流れぬをたよりにむすふ池のうすらひ

河　氷

山川や岩うつ音もこほりゐてあとなき浪にふくあらしかな

井　氷

ひまもなくむすふにあかて厚氷とちかさねたる山の井のみつ

田　氷

冬くれは氷にとちて小山田はもる水口のおともきこえす

もりすてし冬は嵐のひたふるに音吹さえてこほる小山田

冬　月

霜とのみうつろふ影のさえぬれは人めもかゝる冬のよの月

おく霜の花かとはかり木からしの光をちらす月のさむけさ

つもる色の面かけ白く雲間より雪けにさゆるまさこちの月

雲まよふ雪けの空におのれまつ光をそれとちらす月かな

里冬月

白たへにすむ影さえてみよし野は雪ふるさとゝ月も見えけり

野冬月

おくしもにうつるもかはるよのさかと露の跡とふ野邊の月影

關冬月

立出し月の都のおほろよを雪けにしのふしら川のせき

千　鳥

さよちとりよをうみへたに鳴なるは見るめすくなき妻やこふらむ

鳴ちとりこゑもまとほにすまの海士の鹽やき衣浦つたふらし

ありそこす波たかゝらしむれたちてほかゆくよはゝうら千鳥哉

浦つたふなこりさひしくよる浪におもかけはかりたつちとりかな

曙千鳥

ほの／＼と浪のたちゐも見えそめてあくるなきさにちとり鳴なり

千鳥聲遠

しかのうらやなきさこほりて聲遠くふけゆく浪に千鳥鳴也

さつまかた波路へたてゝ聲とほくおきの小しまにちとり鳴なり

岸千鳥

おのれさへ音にあらはれて磯のまつ浪うつきしに鳴ちとり哉

浦千鳥

たちゐかはさわく聲さへうら波のまゝの入江のともちとりかな

磯千鳥

なく聲やまさりて高きむらちとりあら磯浪にうちもまかはす

水　鳥

おく霜を打はらはすは水鳥の青羽も猶や冬かれなまし

鴨とりのあしのいとなくくたかすは玉もの床やこほりはてまし

水鳥驚筏

みなれさをなれし筏も川浪のおもひよらてやさわくをしかも

水鳥馴船

みなれ棹なれておのれも友ふねとならひよりくる浦のあしかも

河水鳥

山かけも猶こほるまやなつみ河むれゐて鴨のさわく夜ころは

湖水鳥

しかのうらやこほらぬほとは鳴こゑもみきはにさわく浪の水鳥

淵水鳥

あた波はかけしとなれもふちにのみなれて友ねのをしやすむらん

霰

冬ふかくきゆるあらしにさそはれてこほる時雨やあられ成らむ
音そへてふるほとはかりはけしきはあられやさそふ嵐なるらん
一しきりふりのみすきて庭の面に猶しきみたぬ玉あられかな

寢覺霰

ふる音もねさめものおもふかす〳〵にくたくるよはの玉あられ哉

草庵霰

風あらくうつとはすれと玉あられ草の庵は音もくたけす

殘鴈

稍くきの霜にちきりやおくれきておつるかり田のけさの一つら
おくれきて雪ふる空や寒からしはね白たへのころもかりかね

衾

ひとへたにかつかてあかすわひ人はいかにふすまのよさむならまし
霜ふかき朝けもしらすかさねてはおくるもをしのふすまなりけり

埋火

埋火のなからましかはさむけさをなにゝよりてかよそになさまし
音はかりあらしときゝてさむけさはしらぬよの間の埋火のもと
ふゆなからはや埋火に花とりのはるをこめたるあやかきのうち

向爐火

むかひゐてかきおこす手のたゆきにも寒さしらるゝよはの埋火

爐邊閑談

なかきよを春日になしてのとかにもかたらひあかす埋火のもと

鷹狩

かりくれてゆくへわかれぬ空に又色ふりまかふ雪のしらたか
くれぬとてかへるかりはの夕霜にあすの鳥たちや契りおかまし

網代

あしろ木になかれよりきてひをよりもかゝりそまさる木々のもみち葉

炭竈

よそめには春をすみやくこゝちしてけふりそかすむ小野の山さと
面影にけふりかすみて小野山や雪も花かとみねのすみかま
うつみ火のゆくへにもにすやく炭のけふりは空にたちのほりつゝ

遠炭竈

たつ空もやかてくもゐの峯なれやけふりみしかき遠の炭竈

遠近炭竈

立のほる同しけふりの色うすく見ゆるやをちの峯のすみかま

神樂

かはらぬを神のためしと宮人のとるもうたふも同しさかき葉
さかき葉に神のこゝろもとりそへてうたひつゝあかすよかくら

冬のうた

みよしのゝ山風さむししら雪のふるさとちかくなりやしぬらむ

待雪

かきくらす空をあふきて待にのみ日数つれなくふるゆきけ哉

初雪

今朝はまた梢はかりに色見えてふれと跡なき庭のはつ雪

雪

雲ふかくかきこそくらせけふの雪つもらむほとを空にしらせて
をやみなく降とはすれと庭の雪日かすはかりは猶もつもらす
うつろはて日数ほとふる花とさへつもりてあかぬ木々のしら雪
けさ見れは野山に雪のはな咲ておもしろからぬ草も木もなし

ふりつみてゆくかたまとふ雪をしもふみたる道にたのむあやしさ

淺　雪

ふりしくもたゝそれなから置霜にあらぬはかりの庭のはつ雪

ふかゝらぬ雪けの雲のそのまゝにつもるともなくはるゝ空かな

霜とのみまかへやはてむ降をみぬよの間の雪のはたれなりせは

けふも猶ふるとはかりの名にたちてつもるとはなき雪のぬれきぬ

かつはれて降にほとをもかさねゝはしろたへうすき庭の初雪

めつらしきおもひそへすはみところもあらしの庭のけさのはつ雪

朝　雪

なかめあかすくれしおもひも夜の程につもりてふかき今朝の白雪

風前雪

まきあけてむかふ峯より風さむく雪吹かくる軒の玉たれ

吹はらふ風のちからに日をふれと猶おもかはらぬ雪のまつかえ

松　雪

冬なから今一しほの色はえてはるまつか枝につもる白雪

ふけと猶つもるはかりははらはてや雪になりゆく風の松かえ

としふかくふるたにあるを白雪のつもりていとゝこたる松かえ

やます猶ふりつむまゝに下をれのあやふさ深き雪のまつかえ

けさみれは一夜に千代やふる雪の庭の松かえ花さきにけり

竹　雪

ふりつみてたわむけしきも一ふしのなかめなりけり雪のくれ竹

庭　雪

中垣のへたてもけさはうつもれてかきりなかめの庭のしら雪

猶いくかつもる日数をなかめてかふりはてぬへきにはの白ゆき

籬　雪

ふりつもる庭のまかきをけさみれはよの間に雪のやまつくりけり

窓　雪

ふみみよとふる夜はさえてなか〳〵におこたりつもる窓の白雪

行路雪

猶ふらはかへるさいかにけさたにもゆくへあやふむ野路のしら雪

路　雪

ふりし世の跡をたつねてふみ見すはゆきやまとはむしき嶋の道

山　雪

ふりつもる雪に光をのこし置てきゆる高ねの有明の月

山路雪

ふみわけし跡ある雪に行末も猶ふかゝらぬ山路をそしる

谷　雪

みねよりもくつれおちきて底ふかくつもりそまさる谷の白雪

谷ふかく降つむそこに下をれて木高きまつも雪のうもれ木

ほとせはみさなからそこにうつもれて雪をれしらぬ谷の松かえ

江　雪

なには江やあしのかれ葉も夢とまたうつむ一夜の雪の明ほの

關路雪

ふりつめは戸さゝぬ御代もこえかてにゆきゝとゝまる雪の關山

橋　雪

おきわたす霜かとはかり初雪のふりかゝりたるかさゝきの橋

社頭雪

ふるほとはぬさとちりかひ積りてはゆふとりかくる森のしら雪

ふるまゝにあけもみとりも色かへて榊葉しろき雪の玉かき

降雪の白ゆふかけて豐としのたのみをいのるもりのさかき葉

閑庭雪

とふ人のなきうれしさは降まゝに跡しらゆきのなかめなりけり

故郷雪

たれかはとおもへはわけし我跡のあはれもふかき雪のふるさと

古寺雪

御法にも猶きゝやらて深くのみつみこそまされ雪のふる寺

うつもれぬみのりの道も聞人の跡けたえぬる雪のふるてら

雪中友

あとつけしをしさはきえてともに見るうれしさふかき宿の白雪

同し跡も分こし人のかへるさにつくるはをしき庭のしらゆき

雪中待友

跡よりもひとりみ雪のをしまれてふりしく庭に友そまたるゝ

ふりなはと契りし人はつれなくてまつに音する雪の下をれ

雪中眺望

うつもれぬ山はふしのねおしなへて雪のそこともわかぬなかめに

雪中述懐

ふりそむる雪を見るにも年ふかくつもるわか身そきえてかなしき

ちとせふる我身ともかな白たへの雪をいたゝく松にならひて

羇中雪

ふみわくる旅路ならすはめつらしく心もゆきの野山ならまし

早梅

ゆくとしの日數をこめてくれはてぬまかきにゝほふ梅のはつ花

鶯のなかぬはかりそ梅の花はるにさきたつ色香なりける

雪中早梅

うくひすもきなかぬほとゝふる雪にかくれてにほふ梅の花かさ

雪中待春

とけそめむ雫もいつとかけてのみ春まつの戸の雪のあけくれ

花とのみつもるなかめに春をまつこゝろもしはしゆきの朝戸出

冬朝

おきいてむ袂やいかにかさねきてふすまもさむき霜のあさあけ

冬夜

まつひまは猶もつれなく明やらて埋火しらむねやのさむけさ

冬山

ときはにてのこる松さへさひしさの猶外ならぬ冬かれのやま

吹音も梢さはらて名はかりはあらしさわかぬ冬かれの山

冬關

ふらぬ間と雪けの雲の八重山をわけつゝいそくあしからの關

冬田

よるひるとともりし山田もひた繩のくる人なしや秋はてぬとて

引すてしを田のひたなはそのまゝに猶冬かけてのこるさひしさ

冬枕

冬のよはすき間の風のならはしもたかひてさむきねやの手枕

冬鐘

霜ふかきほとをもつけてあかつきの枕にさゆる鐘の音かな

佛名

つみは皆跡なくきえて法の師にかつくる綿とゆきそつもれる

追儺

こむとしの鬼おひやらふあしの矢はあしき事なきためしにそいる

歲暮

くるをまち行をゝしみていとなさも年のくれこそかきり也けれ
としのくれ老はほとなき行末のなけきもそひてをしきけふかな
花もみち老をわすれし春秋も猶身につもるとしのくれかな
はるも猶きえぬ頭の雪なれはつもるをなけく年のくれかな
としのくれをしむこゝろのくるしさにおもひはるくるいそきをそする
ゆくとしはよしやをしむにかたくとも身のおいらくのとまりたにせよ
をしみあかて猶やあけなむとしの暮こよひひとよは千夜になすとも

歲暮雪

ふりまさる老の頭のしら雪にくれ行としの跡は見えけり

雪中歲暮

身につもるほとをおもへは降雪もおもしろからぬとしのくれ哉

學者惜年

ゆきやらてくれゆくとしの程はかりふみ見る道にをしけきはなし
おそきわか心はいはてとしとのみ文みる道にかこつくれかな

歲暮鏡

ちりならてかしらの雪のふる鏡つもりのみゆくとしのくれかな

歲暮鐘

きくとによひあかつきと鐘の音もはるに近つくとしのくれかな

歲暮夢

はかなくて暮ゆくとしをおもひねにみるもひとよの手枕のゆめ
とよひ又春秋みせて一とせの夢をさたむるねやの手まくら

○後鈴屋集後篇中

後鈴屋集後篇下之卷

本居春庭詠

戀歌

初戀

わけそむるけふより袖もほしあへぬこひのさか野の道芝の露

人めにもかゝりやせまし戀ころもつゝむならひもしらぬ涙は

一すちに思ふこゝろをしるへにてしらぬこひちも猶やたとらむ

ゆくへかはおもひたちぬる足もともしらぬ戀路にふみまよひつゝ

忍戀

世の人のことの葉草にかけしとて忍ふもふかき軒のした露

下におもひそてにつゝみて我こひは色にもいてし露もゝらさし

いはねまついはねは人のつれなさもしらしとせめて猶しのふかな

しのふれは木間の月の影ならて涙のもるもこゝろつくしを

ことの葉にかけてとはゝやとしふかき軒のしのふの露はしるやと

忍久戀

せく袖にあまらさりせはとし月をつゝむ涙もかけてうらみし

はかなしやもれぬはかりをたのみにて年月つゝむそての涙は

思不言戀

いひ出てつれなかりせはくるしさも猶やます田の池のねぬなは

下にのみいつまてものをおもひ草野への花のほにいてすして

戀衣ふかきおもひも口なしのした染なからくちやはてなむ

欲言出戀

いひ出てつらきこゝろをみましかはしのふにまさるものや思はむ

聞戀

心からきくよりうかふ面影をたゝそれとのみしのふはかなさ

なりはすの音きゝしよりあつさ弓かりそめならすひく心哉

未見戀

それとたにしらぬおもひは見ても猶はかなくよそにこひやわたらむ

見戀

はかなしや身にたちそふもほのかにて見しはかりなる人の面影

行路見戀

あひ見てもしけき人めにことの葉は露たにかけす過るかよひち

祈戀

きふね川しらぬあふせに涙かけて心をくたく袖のしらたま

きふね河いつかあふ瀬のうれしさにつゝみもかへむそての白玉

いのちたにあらはと猶もいのる哉よにあふことのなきさはのもり

おのつからあらはあふよの命をもかけていのらむもりのしめなは

引かへて今はうかりし年月のうらみをかくる森のしめなは

祈久戀

としへても猶うけひかぬうらみさへかけてそいのるもりのしめ繩

祈經年戀

ひと筋にいのるこゝろはとしへても猶こそくちね森のしめなは

不逢戀

うつりゆく袖のなみたの色もうしつらさかはらぬ人のちきりに

つれもなき心ひとつに逢ことのなけきあまたのとしをつむかな

いつまてかあはぬおもひにやく鹽のからきめをのみみつのうら人

とし深くつもるおもひはなくさめていつの月日かかきくつさまし

うきなからあらはあふよとなくさめて頼む外なきわかちきり哉

かひなしやあらは逢よのありとてもなからへぬへき思ひならねは

待戀

このくれと契りも置ぬゆふ露をたもとにかけてまつもはかなし

雨になる空かとはかりくもるをもさはるちきりにいとひてそまつ

まつ空のくもるを人の暮ぬとてとひこは猶やうれしからまし

なか／＼にくれまつ空のくもりてはくる程おそきこゝちのみして

いつしかといそく心のくるゝより待まほとふるゆふへなるらむ

うき人の契りしまゝのなほさりにおもひいれすやわれもまたまし

待人も猶われはかり暮ふかくまとふこひちにおそくきぬらむ

ちきりおきて音せぬ人に聞せはや猶ふきさわくよはの松風

夕待戀

いつとなきこひもをかへのまつくれはさすや夕日のこかれわひつゝ

かひなしやちきりしまゝに待えても人のとひこぬゆふへはかりは

待空戀

今こむといひし心のつれなさをしらせていつる有明の月

逢戀

かさねても猶ゆめかとそたとらるゝかへしなれたるよはのさ衣

あふ夜のみ今はかさねて戀ころもはかなき夢にかへさすもかな

別戀

さよふかくおきやわかれむあけてたに猶きえかへる道芝の露

しきりなく鳥の八こゑにいそかれてやすらふ空もなきわかれ哉

おきいてむとおもふはかりまつきえかへるゆくへやいかにいてたちの露

露は猶おきうからてやきえかへる袖にひまなき今朝の別路

ひとりねにまたれし鳥のそれとしもなくねかなしききぬ／＼の空

有明の枕のちりにひきかへて露うちはらふそこのわかれち

さゝわけし袖もわすれておきいつる朝露かこつわかれ路の空

いかにしてこよひの間のちきりには引かへすへきそこのわかれち

後朝戀

いてゝ行庭になみたの玉しきてくるゝゆふへをいまよりそまつ

ほとをへてうつりかうすくなるけさもふかしやさめぬこゝろまよひは

このくれのちきりいかにとなけく哉またねの夢のうきにつけても

見し夢の別かさねておく露もけさはまたねのところせきまて

欲顯戀

今は世にあらはれぬへき身とてせく袖くたすなみたなるらむ

顯戀

あらはれていまはいつるにまかすともなか／＼やすき涙なりけり

さよふかく忍ふおもひを誰しりて我かよひちに關はすゑけむ

あらはれむものとはわれもしら露のおきまさりたるけさの別に

無名立戀

いさや川しらぬ逢瀬にたれかけて立わたるらむ浪のぬれきぬ

名立戀

ちりならぬ人のうき名もあふ夜のつもるよりこそ世にたつらめ

いも世山へたつる中にうき浪のぬれきぬさへそ立かさねぬる

よにもれてかゝるうき名を露はかりしらてつゝみし袖のぬれきぬ

せくも猶おろかならねと世に早くさわくなみたの袖のたきつせ

尋　戀

いつこをかさしてたつねむ三輪の山すきたつ門もよそのちきりは

たつねわひ袖こそぬるれそこともたにをしへもおかぬ道芝の露

三輪の山さして尋ぬる杉の門やかてあひみるしるしともなれ

たつねこも猶こそみえねをしへつる宿のしるしのすきやしぬらむ

疑　戀

ふる空にさはるもよその夕かとうたかひかゝるむらさめのくも

いつはりにあらぬちきりをうたかふもたかをしへたるこゝろなるらむ

さそふ風あらはよそにもうつるへきうたかひはれぬ人のうき雲

契　戀

行末はわかこゝろたにしられねはちきりしまゝに猶やたのまむ

恩　戀

まことゝもさためすなから頼かな猶いつはりにこりぬこゝろは

思

やるかたもなきこそわふれ涙とゝせくにまかする思ひならねは

増　戀

これもまたあふをかきりと目にそへてまさりのみゆく我おもひ哉

見書増戀

なかなかに見すは袖にもくたけてはかゝらましやは露の玉つさ

通書戀

かきやれと跡より又もおひそひてとの葉しけき中のかよひち

ふみかよふ道たになくはあはぬまの心つかひをなにゝやらまし

難忘戀

住の江のきしかひもなく我戀はつめとひろへと猶そわすれぬ

恨　戀

くすかつらくるしと人のおもふまて猶露ふかくかけてうらみむ

つれなさのよわるはかりにくすかつらかけて恨みむことの葉もかな

くるしともおもはし人をくすかつらたえすはかけてなにうらむらむ

年經てはさすかつらさも身のとかになしたにはてす恨られつゝ

互恨戀

うらむるを猶もうらみてかたかたに吹こそさわけ風にくすはら

うきふしはおのれまさりて我よりも猶かすかすに何うらむらむ

稀　戀

いかにそとおとろかさはやまれにのみかよふちきりはわすれもそする

久　戀

みつかきの久しき中にいつまてか猶へたてあるこゝろなるらむ

隔　戀

いかはかりへたつる中のちきりにてあふをかきりのかくはゝるけき

こゝろにも猶こそまされ海山のかはるよしらぬ中のへたては

ならひこし中の月日とおもふまにこゝろをさへそへたてはてぬる

末つひにへたてゝつらきこゝろともしら雲ふかくなにたのみけむ

厭　戀

とわりもしらぬうき身になしはてゝいとふつらさを猶やうらみむ

僞　戀

まとしくいひはなしてもいつはりのさすかにしるき人の言の葉

ふかくのみちきるとすれとにつきてもなきいつはりは心とまらす

逢不過戀

はかなしや何をうつゝのしるしにてみしよの夢をさましかぬらむ

見しよはつゐにはかなくいつまてかこゝろのやみにくれまとふらむ

ひとかたにあらすちきりし数々もあとなきよはの夢の手枕

あふせにはたちもかへらておもひ川きえのみわたる泡のうたかた

逢ことにかへぬ命のむくいとや猶なからへてものおもふらむ

猶とめぬ心まとひもたちそひてのこるそつらき夢のおもかけ

被忘戀

今そしるつれなかりしもわすれ草たねとなるへきこゝろなりとは

人ふるす宿の軒はのしのふにかけしとすれと露そこほるゝ

わすれつゝなとうき世にかゝる身のむくいあやしきわかちきりかな

絶戀

かくたえむものとは人も思はてや行末とほくちきりおきけむ

身にちかくそふもはかなししたふとてよそになりにし人のおもかけ

恨絶戀

たえぬへき心かまへのつらさともしらてくやしく何うらみけむ

變戀

うつりゆく人のつらさをなけく哉そてのなみたも色かはるまて

恨戀

あはすしてあらましものを又とみぬ契くやしき夢の手まくら

朝戀

あさねかみけつるをくしのはら〳〵とかゝる涙もかきみたれつゝ

暮戀

わかれこしけさの名残になほくれてそての涙のひるまともなし

夕戀

きえわひぬまつにかゝらむ契たにむすひもおかぬゆふくれの露

いつしかと夕をいそく心とてまつかきくらすわかなみたかな

くれふかく心にしみて物をのみおもふやこひの色のゆふはえ

夜戀

涙川まくらなかれてこひころもかへすたのみもなみのよる〳〵

ゆくへなきおもひもいとゝよるは又まとはれまさるわかこひちかな

あくるよそ猶またれけるひるまとてすくすにやすきおもひならねと

曉戀

ひるまたにしらぬ袖にもおもひやれおきあかすよの曉の露

おきあかすそてにまさりて見し夢のねさめよふかき床の露

春戀

梅さくらかさしあそへと物をのみおもふこゝろははるとしもなし

のとかなるはる日もしらて青柳のいとなくもおもふころかな

そての香もはるやむかしゝ面影のかすめる月にゝほふ梅か枝

わすれすははるやむかしの人も猶おもかけかすむ月や見るらむ

夏戀

さなへとる田子もうきにはおりたてとかくやは袖をぬらしわふへき

戀すれはせみも螢もよそならてもゆるおもひに音こそなかるれ

ねになきてもゆる我身はほたるにも蟬にもまさるおもひ也けり

秋戀

くれふかく人の秋にもかけそへてなかめかさぬるそての夕つゆ

戀衣そてにもあきの色見えて我身しくれとふるなみたかな

うき人も猶わか秋に色かへてせくとはしらしそてのなみたを

冬戀

もみち葉にまさる千しほもたか秋の霜よりおける袖とかはみる

露しけくかよひし中のとの葉もかれて跡なきしもの道芝

人めせく涙の川と氷さへとちてもらさぬそてのしからみ

近戀

かきりなく思ふ中にはかりそめのへたてもつらき庭のあしかき

遠戀

いかはかりぬるとかはしる道とほく露わけかへるけさのころもて

幼戀

露かけて今より下におもひ草手枕むすふあきの尾花を

戀面影

今も猶月にはさすかのこりけりさそひなれたる人のおもかけ

身にそひてわすれかたみのゆくへまてつれなさ見ゆる人の面影

みにそへてしのふとしらは面かけのかゝるも猶や人のいとはむ

戀書

かくすみのうすき心と人やみむなみたおちそふ水くきのあと

戀雨

としふれは身をしる袖の雨も猶つゝむおもひのいろにいてつゝ

戀命

戀しなてあふをかきりの行末もあらはとたのむわかいのち哉

懸命戀

さらてたにあすしらぬ世をうき戀にたへぬ命やけふの夕くれ

戀隣女

へたつるもたゝかりそめのあし垣をやかてかことになすもつれなし

思高戀

そての露とひくる影をしるへにてをらはやをらむ月のかつらも

思貴人戀

戀ころもわか身におけぬあやにしきあやなくなとかおもひそめけむ

契變戀

涙こゆるつれなさしらて千代かけし契くやしき末のまつ山

臨期違約戀

待人のそれと出見る夕にはにさはるつかひのたつもつれなし

不言在所戀

さしていふところそあらめ杉の門あたりをたにもなとかをしへぬ

疑眞偽戀

いつはりとおもひもえこそ捨はてねたえてまともなきよならねは

等思兩人

二かたに身をしわけねはよかれせぬよはもよかれを猶なけきつゝ

来不留戀

わか方によるかと見ればあつさ弓やかてもつらくかへる君かな

住の江のきしもなか〳〵うら涙のとまるとはなくかへるこゝろは

とゝまらてかへるのみかはかけそふるたこりもつらき袖のうらなみ

戀學問妨

こひすればふみ見る道もおもほえす空にこゝろのうかれのみして

寄月戀

夕まくれ山のはつかに三日月のかけわすられす人そこひしき

山のはの松にかゝれる月見てもいてこむ人のさはりをそおもふ

面かけはなかむる月にかきくれて一めにうかふわかなみた哉

月も猶人のうきよの外ゆかて見るにおもひをそふるかけかな

もろともに見しよもあるをうきほとの面かけはかりさそふ月哉

見しよはをしのふ涙に月たにもすますなりぬるうきちきり哉
つれなさのたくひとみれは殘しおくかたみかほなるあり明の月
ちきられねと今はかたみと見るはかり袖になれぬる露の月影

寄星戀

人は猶雲のよそにやおもふらむほしの林のしけきなけきも

寄風戀

身にしめてまつもはかなしそなたよりかよふはかりの風のたよりを
との葉をうしろやすくもふきそやる人めに見えぬかせのたよりは
人は猶まつにこすゑの風はかりたえす音してふくるよはかな
との葉のたよりもあれてよそにのみ今はふきやる中のこからし
めに見えぬ風のたよりも音たてゝしのふる中はこゝろつかひを

寄雲戀

いつよにかたちゐの空も白雲のきえかへりのみものおもふらむ
山たかき人をこふとてはれすのみ身のうき雲にものをこそおもへ
おもひわひつひにきえなむ身のほとも空にしられてまよふ浮雲
かゝる身のうき雲よりやよそにのみあはぬ月日をへたてきぬらむ
はかなしや今宵とたのむしるしさへ空にうきたるくものふるまひ

寄雨戀

うき人はさはるかことゝふる空をあふきやすらむよひのむらさめ
かゝる身のうき雲よりやかきくれてさはることよひの雨もふるらむ
なか〳〵にしのふる中はまきれきてふるもうれしき夕くれのあめ
さはりつる一夜の雨にほしあへぬなこりいくかの露のころもて
まつよひのかくのみさはるはては又我身も雨とふりやしなまし

寄時雨戀

はれやすきならひも雲のよそなれやうき中にふる袖のしくれは
はれぬれとひこぬ人のうき雲に猶くれふかく袖そしくるゝ

寄煙戀

中〳〵にたちものほらて下もえのおもひのけふりゆくかたそなき
もしほやくけふりならねと下もえはからきおもひにくゆりわひつゝ
なけかしな空にたつ名もわか方になひくけふりのゆくへなりせは
こひしなぬなけきをさへにたきそへて思ひのけふりたちそまされる
いつまてか野への空にはたちもせておもひの忡したにもゆらむ
ゆくへなきむねのけふりにくらへてはなほやあさまのやますもゆとも

寄蚊遣火戀

下にのみおもひこかるゝ蚊遣火はけふりも猶そくゆりわひぬる
こぬ人をまつにこかれていふせさも猶くれふかき軒のかやり火

寄埋火戀

やく炭のおもひこかるゝ行末も猶うつみ火の下にきえなむ

寄霧戀

へたてなくおもひかはさは朝きりのまかきは猶やたちうからまし
空にたつなけきの霧としらてなとおしこめさりしおもひなるらむ

寄露戀

草葉にもまさるたもとの露はあれと猶もちきりはむすひかねつゝ
人こゝろうきをもおきて袖の露しのふにのみもかゝるころかな
おきあかすよのまのみかは名のみしてひるとしられぬ袖の露哉
こぬくれはおもふ心のそのまゝにみたれそまさるそての夕つゆ
玉しきし淺ちか露も秋風におもひきえぬるやとの夕くれ
なけくわか袖にそかゝるふみわけてとふらむよその宿の夕露

寄霜戀

猶かより袖かたしきてさゝの葉のさやく霜よをかされてそぬる

寄氷戀

人こゝろとけぬ氷の岩とこにぬるよやかたき中川のみつ

寄霰戀

吹かはる人の心のあらしよりあふせも猶やとゝこほるらむ

あふと見し夢のわかれにこゝろさへくたくるよはの玉あられ哉

人こゝろあらしにくれて涙さへあられふりしく床のさむしろ

寄雪戀

とひゆかは跡にかこちてうき人は猶やいとはむ庭のしらゆき

いつしかとくれまつ宿にふりつみて光つれなきゆきの白たへ

降つもる夜の間の雪に跡をさへそへてそをしむけさの別路

いまはゝたゝ外山の庭に跡つけてわか身ふりぬる雪の夕くれ

寄山戀

とし月をかされても猶こえやらぬ戀の山路やいくへなるらむ

あふとも猶時しらすいつまてかうきにとしふる雪のふしのね

あふとも今はなけきのしけ山とまくらにちりのつもりのみして

寄野戀

我戀の行末しらてむさし野をはてなき物とたれかいふらむ

わけいれはうき伏しらぬ伏たに猶露ふかきこひのさか野を

寄杜戀

うつゝにはぬ人のつらきを森の名のときはにかけてしのふ下露

深くのみなけきの露のかゝれとはおもひやそめし衣手のもり

寄池戀

いひいてぬ池のこゝろになとかくはぬなはくるしくものおもふらむ

寄沼戀

かくれぬのかくともいはてうきにのみ下はふあしのねにそなかるれ

寄河戀

音羽川おとはなみたちせく袖に見えらむものをたきつ心は

ちきりおかぬ人のあふせを涙川身さへなかれて何ためならむ

あすか川あすをもまたてきのまへにかはる淵瀬をいかゝたのまむ

うきなからあふせまつまは思ひ川きえたにはてし水のうたかた

おもひ川うき中つせにおりたちて水そこふかくなとしつむらむ

わたりてもあひそめ川は色なれはこゝろつくしにあはしとそ思ふ

うきふしもなかれよとまて竹川やあふせは千代の末もたえせし

寄瀧戀

ちらさしとつゝむ涙の瀧つせにこゝろをくたく袖の白たま

おもひせく瀧つ心の早きせをしはしのとめむなみたもかな

寄淵戀

岩かきのくちぬかきりは猶こめてなみたの淵もよそにもらさし

人をのみおもひの淵に身をなけてふかきこゝろのほとやしらせむ

寄湊戀

見るめなき人のこゝろのうな原をなとみこに深くおもひいりけむ

なみにのみおもひけつともわたつみのふかきこゝろはうちやいてまし

せきとめし人の心のうた坂にたえて跡なき浪のかよひち

おきつ浪うらみかけてもわたつみとあれにし中はいふかひもなし

寄浦戀

まとほにもよりこぬ人をあま衣かけてやこひむすまのうら浪

まとほにもからぬみるめをうら涙にぬれこそまされあまの衣手

寄関恋

せきすゑしたかうき中のちきりよりへたてそめけむあふ坂の山

あふとはゆるさすとてももしの関かよふはかりはとゝめさらなむ

うとくのみへたてむためとうき人やなかに衣のせきはおきけむ

駒の足も空にきつれは相坂のせきの岩かとふみもなつます

いつまてかうきとし月をふはの関あれぬる人にこゝろとゝめて

寄橋恋

中空にわたしもはてぬちきりとはおもひやかけしくめの岩はし

はしはしらむかしなからに立かへりまたゆきかよふちきりともかな

外にまた人やわたすとつらきにもうたかひかゝる中の川はし

寄舟恋

大ふねのおもひたのまむちきりともなみ風あらき人のこゝろは

うきてのみ恋わたるなも大ふねのおもひたのむと人やみるらむ

寄木恋

あふ事をまつにつれなく千代もへぬ花さくまてとちきりやはせし

寄柳恋

かたよりになひくをみてもむすひあへぬちきりくるしき青柳の糸

青柳のいとはれぬへき身の程もしらつゆかけてなにみたるらむ

かけてのみたのむこゝろもいとしるくわかかたよりになひく青柳

寄紅葉恋

手折きて見せはや人めもる山の下葉のいろはしるやいかにと

なにゝかはかへて見せましもみち葉もあかぬおもひの色の千しほは

秋にあふ袂もしらてもみち葉をおもひの色のかきりとそ見し

寄草恋

忘くさうゝる心のつらきにも身のうきほとそまつつまれぬる

しのふともかゝらましやは露はかりわするゝ草のおひもましらは

おもひきやつらきこゝろもわすれくさたねとるはかりあらむものとは

寄若草恋

むすふへきちきりなりせはもえつゝも行末またむ野へのわか草

寄杜若恋

むらさきのふかきこゝろもかきつはたよそにへたつるうきこひち哉

寄菖蒲恋

あやめ草ふかき根さしを契にてかりそめならすむすふ手枕

おもひきやあやめの草のかり枕なかきねかけてこひむものとは

寄荻恋

ふみわくるそれとはかりに吹音のかよふもつらき荻のうは風

寄薄恋

ほにいてゝ何かはこひむしのすゝきしのはれぬへきおもひなりせは

打なひき物おもへとや花すゝきほにいてゝふく人のあき風

寄葛恋

かた〳〵に引わかるとも葛かつらつらきこゝろはたえておもはし

寄草花恋

いろふかく露のみかけてかす〳〵におもふしるしもなゝくさのはな

寄菊恋

色かはる人のあきをもしらきくの露にちきりやむすひおかまし

寄竹恋

くれ竹のよそになひきて吹風のそよともいまは音せさりけり

寄鳥戀

鳴鳥のきこえとりせはしのふ山ふかきおもひも音にやたてまし

いそけとはなかぬ八聲もうきかたにとりてそかこつわかれちの空

なく鳥のこゑのしきりに別ちのつらさもよほすあかつきの空

またもきくわかれならこや鳥の音もことわりすきてかなしからむ

鳴こゑもむかしなからの鳥にとりかへされぬちきりをそおもふ

とり〳〵にあはれとなれも音にやなくまつひとりねもかこつ別も

寄呼子鳥戀

ゆくへなきおもひをそへて呼子鳥おほつかなしやこひのやま路に

寄郭公戀

鳴ふるす宿としられてたえ〳〵に聲もあれゆくやまほとゝきす

寄鴈戀

わかかたによるとはなかぬうきなにゝたのむの秋のかりかね

我そてのなみたをかりも音にたてゝ人の秋にや鳴わたるらむ

寄鴫戀

きくもらし人は音せて明るよのかすにたえぬしきの羽かき

寄獸戀

更ぬれは駒のあゆみも聞えこすよひもまたや引たかふらむ

のる駒のはやきあかきもけさはうしやかて雲ゐにわかれきぬれは

寄放駒戀

はる駒にあらぬ心はあるゝをもつなきやとむる野へのわかくさ

寄虫戀

音にたてし夕も秋のむかしにてわか身ふりぬる宿の松むし

露かけてなくもかひなき夕ゝはいつよりなりし松虫のこゑ

きり〳〵す秋のおもひの音をそへて見はてぬ夢の枕をそとふ

寄鈴虫戀

なほさりに人まつむしとききつるはちきらぬほとの夕なりけり

こぬ人も思ひしくれをわすれすはあはれときかむまつむしの聲

寄蟬戀

露しけきなけきの森に鳴せみの羽そても色のうつりやはする

寄鐘戀

われはかりおとろかしてや待人は猶もおとせぬいり相のかね

音せすと何うらむらん入相のかねてもしるき人のつらさを

かねのおとのあくとつくるもこぬよはゝうき身のうへに聞なされつゝ

寄衣戀

かけておもふこゝろのほとは戀ころもみゆらむものを袖の涙に

身にたにもあまる涙をこひ衣せはきそてにはいかにつゝまむ

うとくのみへたつる中にさよ衣かさぬるものは月日なりけり

つひにかくうとく〳〵へたてむ契とてなかにやありしよはのさ衣

中にありしよはの衣やかへしけむ見ゆるもうとき手枕の夢

寄糸戀

あふとのなとかなからむかた糸もたゝひとすちに思ひよりたは

かた糸にあらぬちきりもあふ事のまれなるふしはかひなかりけり

寄玉戀

おちたきつ袖にみたるゝ白玉も猶おろかなるなみたとやみる

おろかにはなみたしられてたきつせにくたけそまさる袖の白玉

寄弓戀

あつさ弓いまさらよそになりはすの音つれもせぬ人そつれなき

寄琴戀
たえすのみねこそなかるれ年へてもうきことのをのしけきちきりは
絶ぬへき中のほそをの契ともしらてたなれしとそくやしき
かきたえて音せすとても今さらにことかたにねはこゝろひくへき
寄筆戀
おろかにて人のこゝろをとる筆もおもふにえこそまかせさりけれ
寄書戀
いつまてか数のみかきて水くきの跡たにもみぬ人をこふらむ
面かけも見るにうかひてたへかたく涙わきいつる水くきのあと
かよはすもしのふる中の玉つさはこゝろつかひをそへてこそやれ
かきやれとつきぬ涙のはつきも猶おろかなるこゝろとやみる
寄繪戀
ゑにかきてむかひや見ましつれもなき心なからはうつししもせし
繪にも猶つらきこゝろをうつしてや見るにうらみのまさる面かけ
寄車戀
こゝろひくよそのたよりとおもふにはふけてくるまのおとつれもうし
寄垣戀
何をかはおもひへたつるうきふしに契かれゆくなかのあしかき
寄涙戀
せきあへすおつるなみたのかす／＼やしのふにあまる思ひなるらむ
こゝろにはよしたかふともつゝむわかそてにまかするなみたともかな
おろかにやおもひおとしてせきあへぬ流つなみたもよそにみゆらむ
色かはる人の心をしらせてやうつろふそてのなみたなるらむ
かはと見て思ふよりはやそれとのみなかれよとまぬわかなみた哉

寄源氏物語戀
ゆかりこそ猶わすられねむらさきのうへなき色をみるにつけても

雜歌

十二月十八日はるたちけるに
はつかにはあらぬ有明の光をもはるたちこめてかすむ空哉
十二月はつかはかり春たちけるに
春きぬとかすめる空につれもなく猶くれのこる有明の月
梅の花を人のこひにおこせけるに手折とて
ゆきうしとおもふか花もをる袖にとまる香ふかき軒の梅かえ
うめを好文木といふよしきゝて
文このむ梢のはなと水くきにうつしてめつる色香なるらむ
父翁のかゝれたる契あらは柳におのかにあるたにさ
くに哥よみてそへよと人のこひけるに
ちりうせよこのとの葉もなかゝれとむすひやおきし青柳の露
若山のある家の八景の内齋寺晩鐘にて春の哥よめと
あるに庭に花多し
をしみきこちる別ちも軒ちかくなる鐘つらき花の夕くれ
山吹にそへて人のもとにはしめて遣しけるといふ題
にて
いはぬいろにおもひそめけるこゝろとて見するも猶そつゝましけなる
妹のもとにまきおほしたる橘を遣したるか久しくあ
りてことしはしめて花さきけれはよみて遣しける
植て見るそのみも今はなりいてゝともにさかえむ宿のたち花

扇に人の哥こひければ

吹風のおもふ心にまかすれはうへなきものとあふくなつの日

初秋露のうた人のこひけるに思ひめくらすついでに

見る人のおとろくはかりとの葉にかけはやいかてはつ秋の露

近きころ色／＼の朝かほのありけるに

さま／＼に色こそにほへはかなさは露とならぬ朝かほの花

八月に閏なりければ

すむかけをあくまて見よとこの秋はあまりありてや月の行らむ

ある人の月松なと繪書たる琵琶をもたるを月の夜と

名付つかはすとてよめる

こゑたかくすむらんほとは影見ても空にしらるゝ月のよつの緒

吉田利充菊の繪に千代ふへしかさしのきくのといふ

哥を父翁のかゝれるけるに哥こひければ

おちそひしかさしの花の露はかりにこらぬ菊の水くきの跡

九月二十九日人々山寺にまうでけるによみて遣しける

うちむれてわくる山路のきく／＼の露千とせの秋もかゝれとそおもふ

ある寺に神無月はかり盛なる紅梅のあるに人のうた

こひけるに

梅花これもしくれのふり出てくれなゐふかくいろやそめけむ

畑にひの菜ひくを見て

いろにいてゝなにをおもひのなゝるらむひく人あまた見ゆるはたけに

雪の山のきえたるをよめる

高くのみつくりなしても雪の山つもる日数に跡ものこらす

ある人の家の名をつたの軒とつけて哥こひけるに

松かえの千代にあまりて末なかくかゝる軒はのつたかつらかな

森嶋由之の家の名を松風屋とつけて哥こひけるに

とことはにとふく聲もたか千代をよはふとかきく衛の松かせ

池のほとりにいほりつくりてすめる人のうたこひけ

るに

きよくすむ池の心をこゝろにてよのうきひちもしらぬやとかな

ある人の許より父翁のかゝれたる繪のさんのうたを

見せにおこせてよしあしいかゝといひける返りこと

に

かけそへし露も色にやうつし繪のまことすくなく見ゆるとの葉

土佐國幡多郡清水浦といふに清水あるよしにて其所

の人の哥こひけるに

しほならて浦の清水をくむ袖はぬれてもからきものはおもはし

周防國吉敷郡大道村上田某の家の庭に延齢松となつ

けたるまつのあるに哥こひければ

なにしおへは契るまに／＼此まつやよはひをのへむ千代も八千代も

名にたてる此まつの葉をすく人も千代のよはひや猶のはへまし

ある人の河蝦考といふ書を作りてくはしく其ことを

わきまへて哥こひけるに

いかにしてきゝまかへけむ鳴聲もところも時もたかふかはつを

百十九歳なる人の壽の字をかける扇に人の哥こひけ

れは

かく文字も猶外ならていとゝしくなかきよはひのあふかるゝ哉

詞の八ちまたに付て猶いはまほしきとおほければ

ふみわけて猶しるへせむこの葉のくさ〳〵しけき道のやちまた

詞のやちまたを見るよし人のいひけれは

一すちに跡とめゆかはのと葉のしけきちまたもふみはまよはし

霧はかりまよふ筋なくふみ分てゆけやこと葉の道のやちまた

なほさりにふみわけ見てはなか〳〵にまとひまさらむ道の八ちまた

ある人のみつからよめる哥とも書あつめて見せにおこせけるを見てかへすとて

ひろふにも心くたきしかひ見えてもくつましらぬ玉のかす〳〵

物名　桃栗柿枇杷梨

もゝちたひくりかへしてもいとゆふのなかき春ひはくるしともなし

天

わかれつる神代もとほくへたてきて天はるかなる青雲の空

星

數しらすてるとはすれとあまつ星猶たのむへき光ともなし

雲

はるの野の雪間おほえてむら〳〵と空のみとりにかゝる白雲

曉　雲

生たてる松もわかれてほの〳〵と山のはしらむよこ雲のそら

嶺上曉雲

月は猶よふかき峯にほの〳〵とわかれをいそくあかつきの雲

風

吹風はめにこそ見えね色は猶ありとしられて身にそしみける

雨

かきくらし雨のふる日はなかめやる空もこゝろもはれせさりけり

煙

吹たつる民のかまとのにきはひも空にしられてそふけふり哉

山

本しけくたちさかえたる杉もたかくたふとき三輪の神山

はるとの花のちりひちいくとせかつもりてなれるみよしのゝ山

たか中にいくよのちりのつもりてかかゝる枕のやまとなりけむ

名所山

たかいつのあたし心の契よりとはに浪こすすゑのまつやま

富士山

ふしの根はともにはゝかる雲鳥のあやにくすしき山にそ有ける

杜

いかはかり木々の雫のしけゝれはもりの名にさへかけていふらむ

河

大海になかれいつとやいさきよくはしりゆくらむ瀬々の川水

五十鈴河

いすゝ川そこの岩根にすむ水やちとせかきよの鏡なるらむ

河水流清

よしの川はやくのよゝり清き名のなかれてたてる水のしら浪

瀧

浪の音も猶ゆくみつのほかならできよたき川の名にそたちける

名所瀧

白雲の中よりおちてひゝきゝへ猶音たかき山のたきつ瀬

瀬

よしの山落くる瀧のしらいともよしとよく見し中の一ふし

よせかへる浪より外にめにかゝるものこそなけれ大うみのはら

海邊

これやゑにかけるそのさまたつ浪のしろきをのちの青海の原

海路

たちよれとやかてそかへるおきつ浪まかきの嶋の松やつれなき

浪

浪風のしつかなる世はうみわたる舟路も猶やうらやすのくに

礒浪

うちしきる音もひまなく千重五百重たちかさなれるおきつ白浪

あらいそやよりくるほとのみるめよりくたくる音の高き岩波

さらにまたあかぬ見るめを打そへて浪よせかゝるいその岩かね

海眺望

わたの原いつこそきへのきはみともなみ路につゝく空の白雲

海邊眺望

天くものむかふすきはみわたの原さはる見るめもなみの行末

關

かへりきていつあふ坂とおもふにもへたつる關はわかれかねつゝ

狩人

かり人は多きえものにあつさ弓かへる道にもゆくこゝろかな

漁父

海さちのほともしられてあま人の日とにえつるちゝのはたもの

樵夫

よそめにはおも荷と見るも山賤の身のほとにおふつま木なるらむ

行人過橋

なか〳〵にゆく人よりも打わたすよそめあやふき木曾のかけはし

捨子

いかはかりくるしき身にて子をすつる思ひにかへしこゝろなるらむ

妓女對鏡

よそに見る人も心やうつすらむかゝみにむかふはなのすかたに

うつし見る花のすかたにますかゝみちりもすゑしとおもひふそらむ

玉かつらの君

ひるの子のあしたゝさりしほとゝてやふみもとゝめすはひかくれけむ

夢

うつゝにはなきうれしさもたま〳〵は見えてこゝろのゆく夢路哉

そのまゝにうかれもはてすさめぬれはうつゝにかへる夢のかよひち

こゝろにはかけておもはぬあたりまてあやしくかよふ夢のうきはし

夜眠易覺

よひ〳〵に見はてぬ夢もあるものをなとさめやすきねふり成らん

老眠易覺

ぬる間なくさめぬるよはのはかなさをみはてぬ夢の枕にそとふ

曉遠情

音たかくひゝかすとてもよはの鐘さむへきものを老のねふりは

さめて又夢路の末のうみ山をおもひつゝくるあかつきのとこ

庭松

とことはにかはらぬのみか見る庭のけしきとそふる軒の松かえ

一本に庭のこと木のなかめまてまさりてふかき軒のまつか枝

庭松久緑

猶千とせ君もかはらすたちなれてみとりさかえよ庭の松かえ

舊松經久

ちとせ住宿の軒はに所得てみとりさかゆくまつのこたかさ

行路松

たちよりてやすらふかけと道遠き野への行てにしける松枝

松色浮水

岸のまつなれもこゝろや行水に千とせかはらぬ影をうつして

ゆく水にかく数ならて千代の色をうつしあやとる岸の松かえ

松風入琴

おのれまつかきなすことをたてそめてひくといそくのきのまつ風

琴の音にやかてそかよふかきなすをいつかとまつの風としられて

峯　松

山遠みこと木はわかぬほとも猶それとさたかにみねのまつかえ

いつとなき色も日影にさしむかふあしたとなる峯の松かえ

谷　松

程せはき谷はなかなか空にのみ枝をしのひて松そ木たかき

花のさくときやなからむ十かへりのはるもよそなる谷かけの松

ほとせはみ下枝はさゝて空たかくたちさかえたる谷陰のまつ

池　松

千代經ともちりゐくもらし松か枝のさしおほひたる池のかゝみは

海邊松

よせかへる浪もちとせのあり数に立さかえ行いそのまつかえ

たつ浪にこゑをあはせて浦風もとはにふきよるいその松かえ

浦松風

なひかすは吹ともしらし岩波に音うちまかふ磯のまつかせ

故郷松

あれはてし軒に木たかく年ふりてまつもむかしの面かけそなき

名所松

いまも猶尾津のさきかなるひとつ松人にありせは千代のなか人

草

うきことのしけき宿にはわすれ草うゝとも猶やおひせさらまし

わすれくさおほかる野へにいほりせは世のうきとは露もおもはし

苔

むすこけもちとせかはらぬみとりにておなしときはの松の下かけ

橋上苔

くち木はし人のゆきゝの絶しよりたのみをかけて苔そ生そふ

岩　苔

天をとめなつる袂に岩かねのこけの衣や千代かさぬらむ

巖　苔

色ふかく苔のむしろも岩かねのやへにこりしくとこの山かけ

さゝれ石のなれる岩ほの苔ころもともにいくよをかされきぬらむ

苔ころもかゝる岩ほとなりてより猶もいくよかかさねきぬらむ

竹

あひにあひてしけりそまさるうきふしのおほかる宿にうゑし呉竹

吹としもなよ竹にのみ風見えてなひくけしきも庭のひとふし

くれ竹のめてたきふしは末なかくかはらぬ千代のみとりなりけり

よのさかとさらぬとをもくれ竹のうきふしにのみかそへられつゝ

里　竹

葉かくれの家居しられて夕風にけふりもなひく里の竹むら

鶴

いかはかりゆたかにたちて千代ふへきられしさつゝむ鶴の毛衣

鷹

手はなれもをちもやすくてあかぬとなてゝわかかふましらふの鷹

暁　鶏

あかつきの八こゑや老のねさめして物おもふかすに鳥のなくらむ

遠村鶏

なく聲のとりしきらすはあかつきをつくるもしらしをちかたの里

鳥

色はえてゆくへも見よとあけからすしらむ空にや鳴ていつらむ

蜘　蛛

いそきつるしるしも見えてくれぬまにすかきはてたるさゝかにの糸

木末より程ある軒にいかにかはかけわたしけむさゝかにのいと

見るからちにかけこそわたせさゝかにのいとなくいそくほともしられて

くる人のしるしならすはさゝかにのいとひそせましかゝるふるまひ

弓

おきふしにあかすひきよせとりなてゝわかはし弓と身をははなたす

琴

ひく人の手ならしられてきこゆるは琴もことなる音をやたつらん

笛

聲たかくなりまくよはの笛竹は空にや風のふきおはすらん

鏡

うつし見るかゝみしなくはわれなからわか面かけもしらすやあらまし

年あまたうつるにつけて曇らくもますみの鏡影そふりぬる

寄枕雜

しのふわかこゝろをしりてさよ枕ゆめにやみするむかしなるらむ

しるといへは枕にとはむこゝろにもおもはぬ夢を見るはいかにと

筆

とるふてのみしかきつかをはしきりてたゝなほさりに書ちらしつゝ

筆寫人心

めに見えぬ心を何にうつさまし世に水くきのなからましかは

繪

かきなかす水のふち瀬にゑたくみのふかさあさゝの程も見えけり

言　葉

うつりゆく世のさま〳〵に染かへて色かきりなき千々のとの葉

金

あなかちにむさほるとなき心にも猶ほしかるはこかねなりけり

車

ひく人もなくてとしふる小車のうしやくちのみまさるわか身は

はしらせていそくを見れはおもひやるこゝろさへにもゆくくるま哉

船

遠さかるはてはこき行おのれさへあともなみちにきゆる浦ふね

こゝろゆく浪路と見えてあま小船世をうみわたるわさとしもなし

うみわたる同し浦わにうけすゑてさをさしあそふ船も有けり

はしめよりしほにやくへきしるしありてからぬてふ名やおひし此船

みつしほに風まちつけてこきいつるこゝろもけさはゆくふなちかな

今も猶音にきこえてからぬてふ其名はくちぬふねのふること

山　家

むかし誰よしとよく見て世中をよしのゝおくにのかれそめけむ
おもひいるよし野の奥もいかならむ猶よのほかの山路ならねは
山ふかくすめるよ川のみつからにはれぬ雲井と猶やわふらむ
世中をいとふ心のほと／＼にやともおくあるみよしのゝやま
世をいとふこゝろふかくはすむ山はよしやよし野の奥ならすとも
こゝろなき岩根木立もひとりすむみやまのたとなるなかめ哉
山ふかくのかれても猶まつ人のとはぬうきよにすみそわひぬる
やまふかみとはに嵐をきくもうしきかぬもさひし鳴とりの聲
すむ山のかひあるしらて谷せはきこゝろとなほや人の見るらむ
思ひやれなれぬはかりのあはれさもあさかりぬへき山のおくかは
人とはぬよしのゝ奥のさひしさもこゝろにならす岩のかけ道
さひしさになれしはかりを年つもる山のかひにてすめるはかなさ

山家嵐

さひしさをいかにふせかむ草の庵峯のあらしはかこふすみかも

山家雲

のかれすむやま路の外に雲もまたうき世へたつるおくのかくれか

山家水

あさきにも猶こゝろすむ山の井によかはの水そくみてしらるゝ
こゝろすむ音もたえ／＼岩もりてきゝこそあかね山の井の水
心すむほとならすともきく音のうさたによとめ軒の山みつ
よのうきにましるもしらにすむ山をなかれそいつる軒の谷水

山家夢

すみよさは夢にもしらすぬるよたに猶うき事のみやまへのいほ

田家煙

かきりなき千町の末に一すちのけふりさひしき小田の夕くれ
もるしつのたくや煙の眞柴にもたのみゆたけき程そしらるゝ

故　郷

いくよをかへたてきぬらむ家もなくかきねも見えすあれしふる鄕
ふるさとはかきねあとなくあれはてゝしのふあはれもかきりしられす
何をかはおもひのこさむあれはてゝ露も跡なきよもきふの宿

閑　居

たれかよゝ竹のは山にのかれきてうきふししらぬ宿もとめけむ

閑居待友

とふ人をまつに心のまきれすに猶いかならむやとのつれ／＼

閑中燈

影もたほ草のいほりのかすかにてあひにあひたるよはのともし火
かゝけても猶宿からのさひしさはまきれぬよはのともし火のかけ

仙　家

いく千代のよはひなるらむおいらくもよそなる谷にすめるやま人
谷ふかく軒はにしける松のはやすむやま人の千代のありかす
いつのよのさゝれかかくとやま人にとはゝや谷の軒のいはほを
すむ人は猶はかなしとみねのまつ谷のいはほの千代のよはひも
岩のさま松の木たちもよにそにぬこややま人のすめるたにかけ

仙家松

すむ人のよはひのほとにいくたひかおひかはるらむ軒のまつかえ
すむ人はなほも老せぬ谷かけに千代經てうつるのきのまつかえ

三井高匡よしのゝ花見にものしけるに

さくら花よし野よく見てとの葉にうつしてかへれあかぬ色香を

霜月十日はかり小津守良久足江戸にくたりけるに
草枕むすふ露たにうき旅のおきふしさそな霜ふかきころ
雪のふる日旅たちしける人の別れに
いとゝしくをしさも深しふる雪に跡をつけゆくけふのわかれは
秋旅
蔦かつらかゝる紅葉のをりにたにくる人見えぬうつの山こえ
旅宿
ふしわふる芦のかりねのよもすから見しうき夢もむすひかねつゝ
旅宿嵐
ふかぬまもあらしをいつとまつかねにたのむもはかなふる郷の夢
嵐ふくかり寐の野への草の露むすはぬ夢にぬるゝそてかな
旅泊夢覺
ふるさとの夢ちへたてゝ浪まくらうきねにかへすよはのうら風
羇中山
こえわひてやすらふほとも古郷をしのふこゝろはやままつのかけ
こえかてにふみこそなやめ古さとのへたてかさなる山の岩根は
羇中杜
旅ころもたちよる袖にかけそへてみやこしのふの森のしたつゆ
羇旅友
しのふるも同し旅寐の友なれは見るにかはらぬ古さとのゆめ
羇中思都
心ゆく旅路ならまし海山も都おもはてなかめましかは
述懐
人かすにあらぬうき身のほとはかり世にくちをしき物やなからむ

數ならぬ身になすわさはひとつたにおもふ心にかなひやはする
よにひろくさかえ行にもこゝろせよくさ〳〵しけきとの葉の道
人數にあらぬうき身とおもふ事ひとつたに猶かなはさるらむ
うれしさの常なるよともしらてたゝうき事のみそかそへられける
かくはかりいとひなからに捨かたくおもふこゝろもうき世なりけり
年月にふみ見る道やいそかましひまゆく駒のあしにまかせて
獨述懐
人なみにあらぬ心のおろかさやわか身ひとつのなけきなるらむ
老述懐
老らくをなけく涙もとし月に身をしる雨とふりまさりつゝ
としたかくよはひはのひてかけもなくかゝまりはつる老の身そうき
ちりひちの數ならぬ身は年たかくつもれと山のいふかひもなし
うきなからわかよふけぬる後も猶老のねさめの久しからなむ
名所述懐
をり〳〵は一ふしあらむとの葉も猶おひいてよいせのはまをき
春くれは又もかすみにかくれ住こやさためなきあしのよの中
なみならぬ言葉の玉もらかひ出てこゝろをわかのうらみしもせし
寄月述懐
心あさきわか水くきにうつしこはなか〳〵月の影ややつれむ
照月にあらぬわか世はいたくのみ更ゆくかけもたれかをしまむ
寄道述懐
たえすのみ行かふ人もともすれはふみたかふめるしきしまの道
皆人のまよふ筋なくなりゆきていつ世にひろくみちの八ちまた
寄埋火述懐

心をはなほこそおこせうつみ火のうもれてのみは下にきえしと

寄事述懐

うつもれぬ跡をたつねてふみ見すはあらぬかたにやゆきのふる道

寄書述懐

色あしきこの葉よりも書うつすわかみつくきの跡そ見にくき

寄筆述懐

物とにおそきこゝろはとる筆もおもふはかりはえこそはしられね

寄涙述懐

なかれいつるわかみな上のうきせより涙の川やたえせさるらむ

正月十日はかり小津信厚身まかりけるに

ひきかへてきのふの千代のことふきもけさははかなき春のよの夢

二月はかり人の身まかりけるに

ぬきとめすきえし恨みは青柳のいとにそかゝる露の玉のを

寄霞懐旧

はれすのみしのふ心のゆかりとやなかむる空にかすむおもかけ

天かける影も見ましをはる霞はれぬおもひに何へたつらむ

なかむれははれぬおもひになけく空猶やすからすかすむおもかけ

藤堂家誠徳院殿百ケ日のとふらひに寄霞無常

くれて行はるをかきりとかすみこしおもかけにさへたちやわかれむ

面かけのかすめる空をなかめつゝはれぬおもひにしのふけふかな

四月二十日はかり織戸爲貞の身まかりけるに五百根
の許によみて遣しける

月雪と見えまかふにも定めなきよをうの花とおもひしるらむ

八月朔日北京にて小津守良の身まかりけるをかなし
みておもひいつるまゝによみける哥ともを書あつめ
て久足のもとにつかはす

言の葉の玉を此世にのこしおきて身はしら露ときえし君かな

秋のよの長きおもひの露かけてはかなき夢をしのふころかな

かせをまつ露をいのちに鳴むしもなほはかなしと音をやたつらん

はかなくて消し人にや手向まし露のまかきの朝かほのはな

弓はりの月を見るにもかけさりしまとゐをかけて猶しのふかな

伊藤喜孝長月はかり身まかりけるに

くすかつらかへらすとても秋やはと猶露ふかくかけてうらみむ

人の身まかりけるに

はかなさを露によそへて忍ふにも猶きえかへりかなしかるらむ

三井高匡の生たる子のほとなくうせけるに

此秋のなかめやいかにさらてたに猶袖ほさぬ露の夕くれ

七月はかり鈴木朗の母の身まかりけるによみて遣し
ける

きえぬるか千代もとかけてたのみけむ人のこゝろもしらきくの露

森嘉基の身まかりけるにかなしみてよめる

皆人のをしむなけきも深き色にちりて過にしもりのもみち葉

足代弘魚十二月はしめつかた身まかりける父のとし
三十はかりなるよしきゝて

跡もなくきゆるわかれはしら雪のふりぬる身たにかなしきものを

松野道忠身まかりけるよし年のくれにきゝて

とし浪のかへらぬ人のわかれをも猶かけそへてをしむくれかな

秋懐舊

人まちてうつときくにもかへりこぬなけきかさなるよはのさ衣
ふるさとにきてもかへらはしての山かひある木々のにしきならまし

別府勝孝追慕秋懐舊

おもひいてよしての山路に聲きかはしかなきてのみ君をしのふと

建正一周忌に秋懐舊

此ころとかけてしのへは香をそへてあさちか露にむしもなく也
秋ふかくかけてしのへと袖の露きえにし人やおもひおきけむ
めくりきてとふになか〳〵面かけはなみたの袖の秋のよの月

河北夏蔭の七年のとふらひに月前懐舊

なかめつゝしのふにつけてかたみとも袖になれぬる露の月影

寄露懐舊

とし經ても猶そてぬれてしのへとはきえにし露やおもひおきけむ

寄竹懐舊

しのふるも猶世にたくひなよ竹の一ふしありし人のむかしは

寄雪懐舊

雪ならて千代のふる道跡とふとふみゝるまとに友そあつむる

寄船懐舊織戸篤貞追慕に

へたてゆくとし浪かけてさしもなとこかれわふらむ浦の友舟

故郷月岡部翁五十年追慕に

住あれぬ月もむかしの影は見すしのふの露のかゝるたもとは

加藤千蔭十七年のとふらひに往事渺茫都似夢といへる詩句を題にて人の哥こひけるに

ありし世をおもへはなのみうつゝにてさなから夢のむかし也けり

父の二十七年に

きえし世をかけてしのふもいく秋のむかしになりぬ袖の夕露

祝

此まゝに猶いく千代も露かれすきつとひあそへ言の葉のとも

人の賀に

こえゆかむちとせのさかも安むしろ君かよはひにたれかしくへき
今よりのよはひは老のさかさまに年さかゆきてわかゝへるらん

ある人の賀宴に

ときはにといはふうたけに聲そへて千代をとふく宿の松風

ある人の八十賀に

すゝか川千代もなかれてとし波の八十瀬はるかにふりかへり見よ

長谷川元貞の子のはしめての五月五日の祝に松壽といふ酒をおくるとて

みとり子のさかえを千代とちきるには松のよはひそためしなるへき

人の賀に海邊といふ事を

千代あかぬよはひは浦のあまたたひ猶くりかへせつなてたくなは

鯉にて祝の哥人のこひけるに

こひも久瀧つせならぬ池水は心のとかにちよもすむらん

ある人の賀に屏風に子日したる所

猶ひきていはひやせまし姫小まつ一木にあかぬ君かちとせは

ある人の賀に寄若菜祝

いかはかりこゝろゆきまのはつわかなまれなる千代をつまむよはひは

人の賀に花契多春

櫻はなあかぬ心をちきりにて見る行末やいくちよのはる

辻岡信道の四十賀に春祝

色香にもあくよありやとちとせ經て君こゝろみよ花鳥の春

人の賀に松上藤

十かへりの花にましりて千代の春なほさきかゝれ松のふち浪

ある人の賀に首夏

夏きてははるゝ霞に千代の色もてにとるはかりみねの松かえ

人の賀に夏祝

長秋のなかきよはひのありかすにとるや千町のをたの若なへ

なほなかきためしにひきてあやめ草よはひひさしにふきやそへまし

松契遐年

千代のはるちきり置にも咲花の面かけかすむ遠山のまつ

庭松契多年

庭のまつなれもこゝろや行末の千代のさかえを君にちきりて

とさらにちきらすとても庭のまつ千代のよはひは誰とかはへむ

竹遐年友

限なきよはひの友と見る竹のまかきにこもる千代の行すゑ

ある人の賀に對鶴延齢

宿ちかくなるゝや千代の毛衣を君にもつるのきするなるらむ

鶴全千年壽

つゝむにも千代をかさぬるうれしさはあまりやすらむ鶴の毛衣

萬民祝

天くものむかふすよもの國へまてたちさかえたる御代の民くさ

寄國祝

日本のこゝろをしらぬ國人もてらすひかりは猶やあふかむ

万とせさかえかはらぬ秋の田に水穗のくにの名こそしるけれ

人の賀に寄山祝

ふしの根になそふるはかり重ねあけよやまとし高くつもるよはひを

猶たかくとしつみあけよ千代やちよかさなる山とあふき見るまて

寄岩祝

老らくのこむ道さへてとし高くたちさかえたる五百津岩村

寄巖祝

さゝれ石のいはほとなりし程はかりまたとしたかく千代をかさねよ

寄水祝

五十鈴川なかれて遠くすむ水をむすひやせまし千代のためしに

寄海祝

伊勢の海やうきめはよそにかりすてゝよにすむかひを猶そひろはむ

かりそめのうきめもしらてうらやすくよをわたつみのもなくさかえん

母の六十賀に寄木祝

松すきにあらぬはゝそもときはにて千とせかはらぬみとりともかな

寄松祝

千とせへて見るうれしさは櫻にも猶やまさらむまつにさく花

末遠きちよのさかえもめにちかく見えて軒はにしけるまつかえ

きみならてたれかはしらむ松にさくちよ十かへりの花のいろかは

咲まつも花の色香をしる人ときみかちとせのはるやまつらむ

まつのみとおもひしものを年たかく君もときはに千代さかえつゝ

寄藤祝

なにゝかけ何によせてかいはゝまし藤なみならすなかきよはひは

松かえのちとせをこえて末なかく猶よろつ代にかゝる藤なみ

まつかえにさく藤浪の花なれは千代のたのみをかけてこそ見れ

寄菊祝

千代の秋かさねむ宿のしらきくはやへにのみこそ花もさきけれ

寄竹祝

末なかくともにさかえよ竹の葉をかはらぬ千代のありかすにして

うつしうゑてちきる今日よりくれ竹のうれしきふしを千代もかそへよ

うつし植て千代をちきるやくれ竹のうれしきふしのはしめなるらむ

色かへす千とせさかえよ老らくをまかきの竹のよそにへたてゝ

くれ竹のひとよを千代とかそふとも君かよはひは猶やのこらむ

呉竹のひとよを千代になそらへて八千代かそへむ君かよはひは

服部菅雄五十賀に寄篠祝家の名を篠のやといへは

宿の名のしのをためしにすむ人も猶かきりなく千代そさかえむ

伊豆國熊坂村竹村茂雄六十の賀に穂向屋といふによりて其教子とも寄稲祝といふ題をいたして哥こひけるに

ゆたかなるたり穂の稲のかす／＼を千とせつむみにかけていはゝむ

母の八十賀に寄鏡祝

此まゝに千代も老せてますかゝみかはらぬかけをうつせとそおもふ

神祇

天てらす神の宮居とひきたかくあふきまゐくる四方の國人

秋神祇

色そむるめくみの露や世にこえてもみちとなる秋の神かき

子日したる野に鶯の鳴たるかたかける繪に

うくひすの初音にも猶ひく松の千代のよはひや野へのもろ人

人まちたる家の軒端に鶯鳴たるかたかけるに

まつやとにきゝのよろしくくれかけて人くとなくうくひすの聲

月の夜に梅の花見ゐたるかた

うめの花さきたる宿に月影もよゝしとつけてたれをまつらむ

道行人の梅を多く手折たるかたかける繪に

見すてゝはあかぬ心のあまりにもをりやつしたる野路の梅かえ

梅の花咲たる家に人の來けるかた書たる繪に人の贈答の哥こひけるに　とひきつる人の心の色よりもさそふなさけや深き梅かゝとあるかへし

さそふかのふかきなさけもとひこすはいかてかしらむ宿の梅かゝ

歸鴈のかた書たる繪に田もあり

別にも猶うちかへしこむ秋をかけてたのむのはるのかりかね

家の前に花の咲たるを人の見ゐたるかたかける繪に

あかす見る人の心も此はなの千代とことはにうつらさるらむ

山々に櫻花さきたる繪に

ほとちかき花よりをちの山さくらわけつくすまてさかりともかな

花の繪に

とことはにめつるのみかは待をしむうさをもしらぬ花のうつしゑ

櫻さきたる家のまへに川あり

河水のなかれてにほふこの花にたえすこゝろもゆくすまひ哉

花に蝶書たるゑに

猶いかにのとけからまし花盛ちるにまかはぬこてふなりせは

家の前に咲たる花を人の見居たる繪に人の哥こひけるにその花のいつれともわかりかたけれは

植置て見る人のみやこの花をそれとはしりてあかすめつらむ

つゝしの為に

いはかねに咲たるさまもたゝそれとよくにつゝしの花のうつし為

あやめうりのさまかきたる為に

かりまよふうきにもかへてあやめ草こゝろのひくにまかせてそうる

片岡の杜を郭公の鳴て過るかたかける繪に

ほとゝきす杜の梢のおかしきにいつかたをかはさしてゆくらむ

しのふの里に郭公の鳴たるかたかける繪に

里の名をそらにはしらてしのふともなく聲たかき山ほとゝきす

なてしこの為に

咲にほふ色のみならすとこ夏の名にもたかはぬ花のうつし為

瀧ある山さとに夕たちして雨たるさま書たる繪に

鳴神も軒端におつるこゝちしてひとつにひゝく山のたきつせ

秋の花野書たる為に

咲ましる色のあはれもゝゝ草の花の外なるなかめなりけり

萩に鹿書たる繪に

花つまの心もよそにうつろはししかたちならす野への秋萩

朝かほの為に

そのまゝに露のひるまもうつらぬはいかにつくりしあさかほの花

月の繪に

千代かけてめてはや老ぬ國の名のとこよにすめる月のうつし為

月に鴈の為に

鳴聲のきこえぬのみそすむ月のなかめにあかぬよはの雁かね

彈正大弼仲國小督のかくれかをたつぬるかたかける

繪に

尋ねゆく月にをりしもかきひくやしられそむへきつまことの聲

箱のふたに紅葉と菊をする為たるをわらはのわたとの

よりもちてまゐるかたかける繪に

よそにのみおもはむ人はもみち葉のかゝる色香もしらきくの花

屏風の為に十月新稲を民とも俵に入なとみつき物た

てまつるさまかけるに

なすわさも秋にあまりてたのみ多くとしある御代は猶てにきはふ

水菜といふものかける繪に

一もともちゝにわかれてさかゆれはみつ〳〵しくてふなにこそ有けれ

二見の浦に雪ふりたる繪に

ふりつめは松も岩ほも二見かたひとつみるめのゆきの白たへ

竹取ものかたりの繪に

竹とりの世々のおきなもかくや姫かくめつらしきふしや見さらん

いつはりをかさりもあへす玉の枝こゝろたくみもあらはれにけり

行末のはかなさしらて朝夕に竹取たてゝおほしつるかな

身をつくし心をくたく玉のえたこやすのかひもあらぬちきりに

いはゆる高砂の翁嫗のまつかけにはゝきもちてたて

るかた書たる繪に

世のちりはよそにはらひてもろともにつもるちとせをまつの木本

七福神のかたかける繪に

見るかたのかはるまに〳〵よの人にあたふるさちもおのかさま〳〵

西行法師のしろかねの香爐をわらはにとらするかた

かきたる為に

わらはへにとらせても猶しろかねのくちぬその名は世にのこりつゝ

○後鈴屋集後篇下

かなへをかつきたるかたかけるゑに
ぬけかたきものともしらておつらしくしたりかほにもまふほうし哉
御簾のつまより男のはひ入かたかける絵に
おもひいる深きこゝろに玉たれのへたてはかりはなにかさはらむ
山里にともし火にて文よみたるところ
かゝくへき人なき世とやともし火の影かすかにてすめる山さと
人待宿にくものすかくを見ゐたる處
こむといひしこよひはかりやさゝかにのいつはりならぬ契なるらん
野に髑髏書たる絵に
たれも皆かゝらむ露の身のほとをしらてよそけに見るもはかなし
ふしの裾野にたひ人のあふき見ゐたるかたかけるに
旅ころもすそ野の原にかりねして夢にも見はや ふしの高ねを
ふしの絵に
ぬけいてし筆のたくみもあらはれて雲より上に見ゆるふしの根
竹の為に
末なかきためしに引てうゑ竹の かはらぬ色をたのむよの人
二本ある竹の絵に
立そひてうきふししらぬたか中の千代のためしのたけのふたもと
竹に鶴かきたる絵に
たちならふ竹のみとりも色はえて千代いちしるきつるの毛衣
くれ竹にみとりしろたへ千代の色をあらそひたてる鶴の毛ころも
水のほとりの岩に亀ゐたるかたかける絵に竹も有
万代もすめるみきはの亀なれはいはひあそへるさまもゆたけし
なかれに亀ふたつ書たる絵に
亀もさそ心ゆくらむ川水の萬代たえすすまむなかれは
蟹の為に
行さまの一ふしありてなにはえにすむより名にやおひしあしかに
一ふしのみるめなりけりゆくさまのたくひなにはの浦のあしかに

有　郷

家の風よもにもさそへこのもとに
ちりてとまれる落葉なりとも

天保三年辰三月

うむかしきかなめでたきかないにしへ學びの世にひろこれるこことよ朝日子のことよさかのぼるかこことこ櫻の花のさきにほふかこといことのことけき御世の春のここそあひにけれここゝにわか曾祖父美豆櫻根の翁の古事記の傳なことはやう世にもてはやせれこと卷々かすおほくこみにも見わたしかたくてなむなけくめるにおほちの翁の書殘されしこの古學の要はしもみやひ言葉をもつくろはずつゝまやかにてさるかたにいこたよりよきふみなるにいたくここそきたる處はこと父のいさゝかここくはへられて有けるをこたひ高階の三子ぬし心の花の匂ひ深く靑霞堂のあるしにはかりてかく櫻木にゑらせつるなりけりはつかなる一卷にて夏虫のいことはかなくはみゆるものこらくらきうひ學びのまとにはゝたよきこともし火こともなりなましや

嘉永四ことせこといふ年

霜月はかり　　　　本居豐頴

古學要

本居大平著

ふるごと學びに心ざしてむねとつとむべきはいにしへふみの言の意をときあきらむるなん學びのむねには有けるそも／＼いにしへふみとは古事記日本紀をはじめ續紀以下正史どもをいふそはみな古ありし事を後の世につたへむがためにえらびしるされたる物なれば廣く傳へ長く明らめしめん事を要とすべきわざなればなり其古書の文義といふも千有餘年をへて後世の人の心もて考ふるに其義まどはしき事のみおほくてたやすく明らめかたき事なり其文義のまことを考ふるにはよく古の意をさとりしるにあらざればその文義のまことをあきらかにわきまふる事かたしそのいにしへ心をしるには漢意の理窟をはなれてたゞひたものわかいにしへの心をあきらかにしてよくわきまふべきなり（古書の文義を解釋する事は古今集萬葉集等の古の雅言を學びしる事を發途とすへし）さてかの古書といふ中に古事記日本紀の二典ぞ最大切の書にてその神代の事跡どもを記したるは又いとこゝに大切の事ともなるを（古事記日本紀の神代の事跡をしることは人の道なり世の大義なり今日の世の道はことごとく神世にてをしはかりて大義をしるへきなり）これまでの識者のときおける注釋どもみな漢籍の理窟と佛書の教意を以てときおけることのみにてみなまことの古意をあらはす事なく大にあやまれる事のみなり依てかへすがへすも漢意佛意の所々にましれる事をよくわきまへ本末をたゞして御國の上古の意をさとり得てさて文義をあきらかに解釋すべきなり（道の本末大義を明らめわきまへさるは愚者なり本末とは神と人、君と臣、祖と孫、皇國と外國に五穀と財貨なとの差別なり）さて自のみ漢意佛意をわきまへ正して解おかばさてもあるべき事なれどそのとける趣をよく人にさとしをしへむとするにはまづその漢意のあしきよし佛意のあしきよしをいひときてこれをさとしおかではかなはぬにつけてはその漢國の道てふ事のひがことなるよし佛教の害となることどもをまつあげつらはてはかなはぬなり儒佛の道をあしくいはむ事をこのみていふにはあらずいはではかなはぬによりていふなりかくのごとくして儒佛の道のあしきことをさとさむとすればおのづからわが古の道のすぐれて尊く正しくまことなることのしらるゝにつけてそれをかやうかやうとわきまへしらしむべきなり（古事記日本紀の上古の事文學によりて心得誤ることあるは漢籍意を用ひそめたまへるよりのまがわざなりその文字ちふものを御國にみそなはし始たる事は古事記中輕島の明の宮に天下しろしめして應神天皇の御代に云く又科百濟國貢上賢人故受命以貢上人名ワニキシ即論語十卷千字文一卷付是人即貢進とあり件のごとく異國の書籍をめして見そなはすは天皇の都にまし／＼て四方の國々の風土

記を貢らしめて見そなはす事の始なり四方の國々邊國の風俗を學ひとりたまふへき本意にはあらず異方萬國の風俗をも見そなはさんためなりさてかの古事記の文の義を考ふるにこなたよりは賢人を貢れとこそ科せ給ひつれ書籍をもとめさせたるにはあらす賢人に付て書籍をも貢進したるは命詔の外にかれか心としてとりそへて貢りたるなりかしこの風俗を一わたり見そなはさん爲に書籍をも見たまはん事はよき事なりその文字を　皇國にもとり用ひたるか道をあやまることの始となれるなりされと又この文字をかりて史典を記し傳へ給へるは大なる幸なりこは考へ思ふへき事なり三韓漢土より貢り傳へたる物の中に有用の重寶はこの文字のみなりこの餘はこと〳〵く無用の長物なり　ここにおきてわが先人鈴屋の翁數部の書を著し千萬言をつくしてそのわがいにしへの道のすぐれたるよしをあかし佛儒の道のあしくひがごとなる事をわきまへさとしおかれたるなり

内遠云儒道わたりまゐれるはしめは前にあれと佛のまゐわたれるはしめのことをいはれされはこゝにいふへし日本紀欽明天皇御卷十三年冬十月百濟聖明王云云獻釋迦佛金銅像一軀幡蓋若干經論若干卷とあり是始なり但同卷此前六年九月百濟丈六佛像をつくりて天皇の御爲に福祐をいのる事も見えたり又儒道といふにつきては論語のわたれることをはしめといへけれど外國にかゝつらひあることのはしめをいはゝはやく神代卷に素盞嗚尊の新羅國に降りましゝことをはしめて少彦名神の常世の國にわたりましゝこと稻飯命も浪のほをふみてとこよの國に出ましゝこと崇神天皇の御時に吉田連の遠祖鹽乘津彦を韓國巴汶の地につかはされしことつぬかあらしとのわたりまゐりしこと天の日矛のこと田道間守かとこよの國より橘をとりてまゐりし事なとみな應神天皇より以前にありこれらのこと猶儒佛の論のことくはしくはおのれ別にしるせれはこゝにはいはす　抑この儒佛の道の御國にわたり來たるは甚あしきことにはあれどもその始をおもへば神の御こゝろよりいでてかの三韓の國をうちしたがへたまひてから國のゆきかよひをはじめたまへるより文字てふ物をこゝにも學びとりたまへるより儒道佛道てふ物もとりもちひたまふ事となりぬるなりそもかの國の書どもを見たまひて文辭のうるはしくよろづそなはれるさまにおもはるゝをめでたまひそのうへにめづらしき事にはこゝろうつろふも人情の一つにてそのかみの高貴のかしこき人々かの佛儒の道々をよき事と思ぼしめしてとり用ひたまへるなるへしこの儒佛の道をよき事としたまへるよりこの二つの學問をする事次第に増長してよき事と思ひおもしろき事として次第々々に世にひろこりもてゆきてつひにはわがいにしへのまこともうしなはれてすべての世のありさまもかのから國のあしき世のありさまにうつろひかはりつつ數千年あまりをへぬるは天の下の人ごゝろまどひにまどひひがみにひがみて古のまことをしるといふ事はなくなりぬるなりかくて世の人の心に儒佛の道のしみつきてその染付たるからごゝろがもとよりのつねのこゝろのごとくなりぬれば天の下の大きなる害となれることゝも出來たるなりされば其箇條をもいはてはかなはぬは此つき〳〵に三つ四ついふなり佛道のとがは佛といふものを此上もなく貴き物といひてその道を信ぜさせんとするよりかの天竺國にては神といふ物も佛より下にたつものとして或は神といふものは佛道をもてあかめて

その道を守護するものとせるによりてわが皇國の神をもそれと同じやうにいひなして（内遠云佛教に十界といふことをたてゝ地獄餓鬼畜生修羅人天聲聞緣覺菩薩佛とたてゝ次第に加上せり是はもと天竺佛教なかりし以前は天に生するをたふときことゝ說たる婆羅門のをしへなりしに此天を次第に加上して以前の教をひくしとしてその上の天ある事をたて／＼してつひに三十三天にいたれるのち釋迦出てかくては五十步百步の論にておなしことなる故に一機軸を出してその天ととくものは何ほど上をとくともみな天部をまぬかれすその天よりははるかに上に佛といふものありていとたふときかきりなり此佛と天との間猶くさ／＼ありて佛にやゝおとれるを菩薩といひそれよりもおとれるをつき／＼に聲聞緣覺といひさて次にやゝ天部なりといたくいやしめて天より下はたゝちに人界なりとときたるはかの佛經にいふ須彌の四天王辨財天大黑天歡喜天なとをはしめその餘龍王部明王部なとをもおしこめて佛法の守護神といやしけにしたるなり　皇國の僧これにならひて　皇國のたふとき天神をも地神をも此天部のうちのごとく解なしてつひに垂跡なといふことをとき出したゝちに佛にては人情に遠きによりかりに神とあらはれて人に近くなりまして衆生をみちびき給ふなといひかすめたるはいとにくきたふれ言なり權現なといふ例もなき神稱をさへつくり出て世をまとはし來れりしも世々をへてはもとよりさる事とまとふ人もおほかるはいと／＼おろかにあぢきなきことなりゆめ法師のそらことにたぶらかされそよ）猶々此　皇國の神よりも佛は尊きものぞといひなして上下の人に信仰せしむる故に次第に神を尊む事はおろそかになりて世の人これを思はさるが多きにつけて世の害となりぬる事いく千萬とかぞへがたしこれ一つ

佛は上もなく尊きものとしてその道も上もなく尊き道としてその道を行ふをも尊き事として上一人より下が下にいたるまで件のごとくひたすら信敬することゝなりて神をかろしむのみならず　天皇をもかろしめ奉るはじめとなりぬるなりそれにつけて世のわづらひとなれる事其とがあげていひがたし是一つ

世の上下佛道のさとりをよき事と心得ては死してまたよきところにもゆき此世にもかへるすちもあるやうにこゝろえて物のかなしみをうすくするもわが古の道にそむきていたくなげくべきことゝなり是一つ

人の死して葬のわざを行ふもおのづからかろくするをさとりのかたと心得てかろくもてなすこと出來たる是一つ佛の道の害は死てまたふたゝび此世にもうまれくる事もあるがごとく思ふ心になるこれまかことなりそは死ぬる事をさしもなげかぬはじめとなり此世にうまれ來たることをもさしもよろこばぬはじめとなりて神の御惠のかたじけなきをわするゝはしこなる事甚かしこしこもかしこきことゝなり

佛のをしへを學ぶより身をかろく命をかろく思ふ心にうつりてつひに神の御惠をかろく思ふはじめとなれるはいとも／＼かなしむべきことゝなり今日かくの如くいきながらへて生命を保ち君に仕へ家をつぎ世の業をつとむるは神の御惠にて人道の大義神の惠をおもふより他の事はなきを此神の惠をかろく

思ふはいとも／＼かなしくいみじきことなり神をゐやまひ神の御蔭を思はざるやうになりたるはみな佛道の害なりといふここふかく思ふへきことなり

から國の政事にならひて國々の國造縣主などいふをさめかたをもかへて京より國司をくだして次第に交代せしめたまふ事出來てより國々のいにしへのありさま大にうしなはれぬる是一つ

から國の風俗上中下の人の心にうつりてから國のならはしに似て中ごろ　天皇をかろく思ひ奉る人々出來て臣たちの權威天皇の御心にもまかせ給はぬさまにありし代々の事此一つはこゝに大きなる害なりそも／＼漢國には天子といふもの行ひあしく道にかなはぬものは民の害となるといひて位をさらしむることありそもその王の親族に代りたゝしむる事ならばさもある事なれどももとより君と臣との品分きはやかならぬならひにて臣たるものも代りなきならひにて中にもさかしくかしこきものはおのが行ひをよくつとめて身を正しくして世の人によき人なりとおもはせてさて君の行ひのあしきを見はからひて位をおろしもしまた打ほろぼしておのれ王となりて主君の天下をうばひとりてこれ天の命をうけてあしき王をほろぼし民のくるしみを助けたきなりといひおのれは聖人なりと人にいはせて世によき人めきてさかえをるものどものあるならひなるをそのから書をつねに見ならひから國の道といふ事をつねにきゝならひまねふにつけていつとなくそれに見なれ聞なれてさるあしきならひをあしきならひともおもはすなりてつひにわが　皇國にもそれに似たるさまにて　天皇の御位をもかろ／＼しく心にまかせていひはからひ又かしこくも遠き所にうつしたてまつりなどさかしま事のありしはみなそのもとから國の道を學びてあしきならひのうつりぬるなり

宣命（神に申詞　詔詞臣民につけたまふ勅命）なとの文をかく事は世々の博士の職業事なるをその博士儒生の人々もつねに學問とて學ぶ事はみなから書をのみまなぶことにて明くれにから國の事のみ目にふれこゝろにたもちてわが國の古の道詞にはうと／＼しくて其つくる詞も自然とから國のふりにうつり文のこゝろも專古意にはあらずなりぬるこれはたから學びの害なり祝詞宣命は神に申告たまふ勅語なれば神の聞しめし人たまふ詞を以て申さしめたまふべきをあらぬ漢語もて申さしめたまふはいかゝはしき事ならずや中むかしの代までわが古の事をたてゝまなぶ事はなくして學問とたにいへば漢學問の事にて古の道や古の

詞やゝ學ぶ事のなかりしゆゑに古の道にくらく古の詞にくらくなり來りしなりこれいと〻〻なけかはしき事なり内遠云此書元來亡父たゞ人に心得やすゝ手短に大意のみをのへられたる所多ければこまやかにはいひつくされぬことと所々にあり此わたりも其趣にてあまり簡易なるによりもじはよむ人心得あやまりてさては　皇國のいにしへには學問といふ事なしさらは今古學とて學ぶもをしふるもいにしへのさまにはあらすしてひかことなりなと思はむかこゝろくるしけれは今ここに其差別をいふへし上古には異國の事入交ることなけれは明くれに上下の人いひといふ事ならひとならふ事みな　皇國の古傳のまゝにならひ來れるにてそれを學問と名をつくることなきのみにてすなはち今の古學の道なり儒佛わたりて後ももとより名もなくてなし來れることなれは猶學問とも古學ともいはさる事以前の如くにてかへりて儒道儒學佛道佛學といふは我國の今までのふりと異なる故にわかちていふおのつからの名目なり後儒學盛になり文字ひろく世に行はるゝよりして儒學とわきてもいはすたゝ學問とのみいひてその事と人もしるごとくなり來りしなり是もたゝおのづからのならはしにこそあれかくいへはとて儒學の外學問といふ事なしといふにはあらず又正しき故にかく學問とのみいふにもあらずこの時勢といふ意をよく心得わかちてあやまるへからずさて近世になりて其稱のあやまれるを辨して自國の學をこそおしはなちて學問といふへきことなれ他の學は儒學佛學西洋學醫學暦學とわかちいふへきなりといふ是正しき稱なれとも猶世上の人こと〻〻くとは思ひとらざる故にともすれは自國本源の學問を和學なといふはます〻〻ひかことなり異國の人こそさもいはめ吾國に居てその國のことをわかちてへだてかましくいふはたとへは諸國の人の參りたる中にて紀の國人かわか友のことを紀の國人といふか如し他國の人こそさもいふべけれ自國の人の自國の人を國名をもてわかちいはむはひかことなるのみならすかたへにきく人おろかなりと嘲り笑ふへしされはわかちいはではまきらはしき時は皇國學とも古學ともいふへし是上古になき稱なれともやむことを得すして儒佛にわかたんとていふなりさもあらずはたゝ學問とのみいふへきこと勿論にてこのさため祖父翁の玉かつまにもすでに記せり又古事記の序の語によりて本敎といふもよし此ことおのれ古學大意に詳にいへり中むかしまで古學といふ事はなかりしかども歌をよむ事は神

世よりつたへたる道にて此歌の道にわがいにしへの道のつたはりしなり古より歌をよむ事を藝能としてこの歌學びの筋につけてかつ〴〵古をも學び詞の意をもつたへましたる事歌學の筋にのこれりしは幸とも幸にてよろこぶべき事なり歌學びの道の尊くよろこぶべきゆゑよしは事長ければ別段にいふべし

かくて又よくおもへば神の御しわざはかしこくあらそひがたきものにてもと此儒道佛道の御國につたはりこしも神の御心よりしかる事なればあるやうこそあるべけれたゞひたすらにあしき道なりとて根をたち葉をからしてなくなすべき物にはあらざるべしかくてまたおもふに御國は萬國の祖國なり君なり異國は臣なり民なりたとへば人の身にとりてはかしらの如く異國は手あしのごとく人のゆかりにとりてはおや先祖のごとく異國は族類緣者のごとくくひものにとりては五穀のごとく異國は野菜海魚などのごとくなるものなりされば祖先祖ありても族類緣者なくては事とゝのはぬごとくかしらありても手足なくてはことはたらかぬごとく五穀ありても野菜海魚なくては足らぬがごとく異國は皆御國のたすけそなはりとなるべきものなればたえてにくみきらふべき物にあらずとりあへ

むつふべきものなりしかるにとりあへむつはんにはかのから國の文字も今は御國の物としなれゝばつひに異國に言かよはさんには其國々にもその國の文學はあれどもからもじはことに簡易にかゝれてさとし安かるべきものなれば此異國むつひの筋に此からもしはことかよはすたよりとはなれるなりかくて此からもじの物學びにつけてもかの國の今の世の言とひまてわきまへしらでは物の用にたちがたしそれにつけてはからふみ學びもからうたつくることもいよ〳〵はげみつとめしめてひろくくはしくせさすべきわざなりしかせさするにはたゞにつとめよ〳〵といひをしへたりともわが心より出こぬことはつひにそのおくをきはむる事えあらぬわざなれば世にから書ひろくよむものをはかしこき人とてもてはやし又からうたよくつくるをもそのこゝろをめでゝもてはやさむにそれをよろこぶも又人のこゝろなればそれによりておのづからよくつとめひろくくはしくしる人も出來べきなりこれらもみな神の御心よりしかせしめたまふ事なるべく思はるれば此からふみ學ひのわさもにくみきらふべき事にはあるまじくなほよくつとめしむべき事ならんとおもふなり内遠云漢學の皇國に害ある事は直毘靈をはしめ此書にもその他にもいへるか如ししかるにそのわたれる始を考れは三韓攻伐に根さしその事の始は神の御よさしに起れるよりさては漢學も神の御慮よりひろまれることならんと古學の徒にすら惑はしくおもふものあり次の條なる文字もかの國よりわたりて今専用ひて徐あれはます〳〵此まとひふかくなるへし是は祖父翁古事記傳に善惡かたみにかはりて根さしなす事をいはれたる說のごとくにて異國をしたがへ通路をひらきましそのころ皇國にいまだあらざる金銀なとかの國よりわたし來つべくはかりて神の御さとしありて神功皇后の御船を出しましゝよりくさ〳〵貢參れるは古事にて貴き神の御慮より出たるにて文字も何もその中の一條にてかの國の書も皇國にて人ことによまるゝはかりになりてもろこしの國内の案内人情もゐなからにしてしらるへくはかりたまへるにてたふとき事論をまたずいかにせむかのまかつひの神の御しわさはよき神の御まもりのひまをうかゝひましてよきことには必まかことゝ根さすへくはかりたまひてかの國俗のよからぬ風儀をその國にうつしてさかしらなる情の人の心にうかふへくならひとるへくなし給へるは是みなよき神の御慮のすき間に乘して忽吉事に禍事の繼きて根さしたるなりこの理をたにわきまへしる時は惑はしき事にはあらすなほこの事はおのれ別に詳に記せり

そも〳〵文字てふものゝ世の寶となれる事はあげてかぞへがたしそは神世より今の世までありこし世のありさまをも記しつたへたる高く貴きふみどもをはしめ遠き所にことかよはしあけくれの用をなすこといく千萬ともかぞへがたし文字をかり用ひ給ふ事のよきあしきは猶よく〳〵深く考ふへき事なり文字製作天竺和蘭其外の國々のは人々音聲の形を以て作れり漢土のは山川草木鳥魚なとその物の形を以て作れり漢土の製作そ便利なる但し漢字のいたくことはあまりに文字の品數をいくつもつくりたるはこはいと〳〵つたなくわつらはしきことなりこれらの論も猶よく〳〵考て後にいふへしされどこの文字てふものさばかり世になくて事ゆかぬものなりせはから國よりかりもちひずとも御國にても神のつくりてをしへおきたまふべきわざなるをかしこにから文字をしもかり用ひさしめ給ふはこなたのことをかしこに

もいとよくわきまへしるにすみやかなるべく又からもしは萬の異國にもうけつたへて事ゆきやすきよしあればなるべし

さてかく世の寶となる文字てふもの丶御くににてつくり給はずてから國にて出來たるをとり用ひさしめたまふ神の御心ははかりがたけれどこれらをあかぬ事にと思ふは物にかたよりあらそふこ丶ろのちひさき思ひなしなり上のくだりにもいへるごとくから國もとわが御國の身につ丶きゆかりにつ丶きたる同じつ丶きの國なればそれをあらそふはちひさき心なり猶よく思へば　天皇のしきます都のうちにはなくてたらはぬものは西國東國北の國南の國々その國つ物どもをその國々より奉らしめて海つ物も山のおくに出くる物をも朝ゆふに用ひさせ給ふことなればあやにしきのおりものをはじめ玉にもあれ金銀にもあれ藥のたぐひにもあれ萬の異國の國つものを奉らしめて用ひたまふぞ貴くすぐれたる御國のひかりには有けるかけまくもかしこきたらしひめの命のうちしたがへたまひつる新羅もみまなも内つみやけとさだめたまへり 御宅といふ事は今云御庭まはり御花畑御藥園なといふかことし しか定めたまへるはわが朝菜夕菜をつみ出給ふ御そのとしたまへるなりかけまくもかしこきすさのをの命のから國の島には金銀あればわが國にうきたからなくてはたよりあらじとのりたまひて木をうゑて船をしもつくる事はじめおき給へるは即とりも直さず萬のから國の物はみなわか國のつかひ物ととりつかひたまふべき御心なりけりあなかしこあな尊神の御心を思ひかしこみてちひさくせはくあらそふこ丶ろはおもふまじきなり

佛の道を學ぶは法師の職業なりから書の學びをまなぶは儒者の職業なりはじめにもいへるがごとくそのはじめわが御國にわたりまうで來たるも三韓の國をうちしたがへたまひてから國のゆきかひはじまりてよりの事なれば始をたづぬれば神の御心より出來たる事にてさていにしへの代々の天皇のもてはやしあかめたまひて多の法師にいつきまつらしめたまひたる事なれば佛の道も學ぶも　天皇に仕へまつる業なり儒者の漢(カラ)籍(フミ)學ぶもすべてこれに同じされば此二つの道も後にわたり來て古はなくてすみ今ありてまことは何の益もなき物なれどもそのはじめは神の御心より出來たる事といふことをしりてさてまたおのが身の法師になり儒者になりたるゆゑよしをもおもふべしそのさかしらに物いふ法師もおのづからいきてはたらくごとく思へる儒者ももとは神の御たまによりて世にうまれ出て神の御たまによりてひと丶なりいてつ丶物學ぶすべを

もしりたるなり又そのおのが先祖よりすめらし所も朝夕にたべ明くれに服よそふくひものき物住家までかしこきや　天皇のたまもの神のさづけたまへるものなればおの／＼その道をつとむるも　天皇のかしこき仰ごと神のかしこき仰ごとゝ思ひて　皇國のために佛の道も漢書の道もひろく委しく朝夕につとめまなぶべきわざぞかしこれら佛道儒道にかぎらず何わざも同じことなれどその道のをしへを學ぶよりわが神の道をないがしろにしてそのもとのゆゑよしをもしらず佛聖人の德ありてかくこの道は行はるゝ事とのみおもへるならひなれば此二つのわざにふれるをことさらにいふなり（儒佛の道を世の害となるといふは二つの道の本源は道によりていふなり今日の儒者佛者は今の世にてはさしも世の害悪になるものにてはなし此二業もわが皇國本源の世のありさまに化せられて今の世にはたゞ世渡の職業の一つになりて此業を以て活生の事とすればなり　皇國本源は世のありさまに化せられてといふは今の世の佛者といふもの經論に見えたる佛道の本意にはたかひてたゞ今日の世渡の業となれりそのさま高貴にへつらひ富商におもねり金錢を樂ひ身の安からむ事を樂ひ美衣美食を欲して東西にわしるさま士商の世わたりにもことなることなし儒者も同しこれ實はまことの道なり誰か生としいける人これを思はざるべき法師も儒生もこれ本源の世の道に化せられて士商にことなる事なきは世の害ともならざるなり）

いにしへ名高き大寺の本尊の脇立に御國の尊き神をしたる事大和の國などにおほかる事なりそはいにしへは佛といふ物を人の心にさしも思はざるも多かれば御國の尊き神をしかわきにたてゝその神よりも尊きほとけなるよしをおもはせたるなりいとまか／＼しき事なり

又竹生島安藝のいつく島をはじめ其外いにしへの名高き神社を佛になして辨財天などいふ名をよびあへるなどいと／＼かしこき事なりいかに世の人の尊みるやまふとももとよりの神はいかなる神ともしらず佛ふみにあるよしもなき辨財天毘沙門などいふものと思ひて尊みをかまむはいかでこゝろよき事かあるべきいかなる神にましませばとてよろこびたまふべきいはれなしかゝるまか／＼しき事をゑわきまへぬ世となりぬるはかなしき事ならずやそも／＼神の御名はしも神代より申つたへたてまつるまに／＼言のすゝみにごり言のあがりさがりをもつたへのまに／＼正しくとなへたてまつるべきなりそのよしは古事記傳につまびらかなりそはいふもさらなることなれどなほ越前の角鹿の氣比大神は品陀天皇の御名を神の御名に易たまはん事をこひ給ひて名吏の禮代をさゝへ　天皇にたてまつり給へる事あれば神の名もわたくしにたやすくすべからぬことわりなることしるべし

延喜式の神名帳は國々郡々にいにしへよりまつり來れる神社にて朝廷よりも奉幣使をたてまつり給へるなりこの諸國の神

社はみな神代の由緣又その時々其所々にいとこと〴〵に功(イサヲ)ある神社なればその御名も正しく又その神をまつれりといふとも代々遠くさだかにしられたる事なるを三四百年こなたには其名のつたはらぬが多くいまも村々山の麓山の上森林などの內に御社はありながらいづれかいづれともしるすべなく或は牛頭天王八王子八幡宮何かし權現天神などのみいへるは勿躰なき事なり

佛道は貴權大家をはじめ山中浦々の下賤に至るまで財物ををしまず信入するならひとなれゝば世に僧尼の世務はゆたかにして僧をうらやまぬものもなく出家得度の志におもむく人は多く繁昌日々に盛なれば神職の輩は月々日々におとろへ或は僧家の奴隷のごときもあり世の變化世の盛衰につけて朝廷神祇官の御政事すたれて諸國にいはゆる式內式外の社々年々月月におとろへさせたまひて是に奉仕したてまつる神主祝部の人も世領所務なくはづかに村民の幣物助物を以て世渡のたよりに宮守といふばかりにて大切なる神德をも顯はし奉る事なく世をわたるが多ければ神職といふばかりにて神典のおもむきをうかゞひしる事もなく神主の法師におとれる事たとへむかたなし 法師は富盛なれは學問をもすれとも神主は貧迫なれは學問をもする事あたはすあはれむへき事なり僧は寺格法途のためにもすゐぶんに經論修學をもすれとも神職の人はわつかに神務と家産におひたてられて書物なといふものをのそきて見るほとの事もかなはすまつ今日の事に役せられてなか〳〵神典古實を學ぶ力ある事なし神職人は書を得ん料も乏しくて一生學問所にてはなく神道の尊き由緣をもしらす今日を過すのみのもの多し

或人問ひけらく學問にもせよそれを本業にたてゝ世を渡る人は道の本意にあらざるよしつねに鈴屋大人のいはれたるとは皇國は漢國とはちがひて學問といふ事は政事の要にあらずて世のをさまるをさまらざるは學問事にはかゝはらぬ事なればなりされば鈴屋大人は古學を表にはたてられず世をわたる業には醫術を行ひて學問のかたは自己のすきこのむこゝろのまゝにて物せられたりそはまことに和漢古今にわたりて道の本意たるべき事なりしかるをその學問のをしへをうけてもつはら古學をこのむともがらもとより鈴屋の門人にして別に本業とてたてたる家の業もなくたゞひとへに學問のみをしてあまたの弟子をしたがへ專著述をあらはしつゝそれが助によりてはつ〳〵に世をわたる輩ちかきころはそこかしこに聞ゆるは古學者もまた本意をうしなひてよのつねの漢學の輩にことなる事なきはいかにといへるに答云實に此あけつらひはよくいはれたり故翁の本意にあらざることはこの論のごとくにして

たがふ事なしもとよりの本業とする事は道の本意をうしなひたる事なりしかれども今このまことの道をひろく人にをしへむと思ふこゝろを本意とすればおのがうへの身一つをすてゝも世を直きかたにせんと思ふなれば本意にはあらねどかくてあるなり今此道をたてんとおもふには身ひとつをかへりみる事のあたはざるなり猶次の論のおもふきにてなぞらへしるべし　内遠云こゝの條はもと祖父翁のいはれたることをもとゝして問へるによりて父も同意しておだやかにそれに隨ひてたゝやむことをえさるをもてのへられたるは只難を陳しられたるまでにて祖父の說にもとらむを恐れられたるなり今その時勢をいふへし祖父の此はいまた此學を專とする人世こ多からすそれだにその道をもて師とならんと思ふ人もありしより學問はたれも／＼すへき道なり別に師となりて敎を專としてそれをもて生活の業とすへしやはといましめられたるはもとよりの業ある人その業をおろそかにせむことを恐れもし又學をもて業とする時は貧學者は必生活の急の爲に貪る意を生してその道を汚さむかと恐れてなり今時のことく盛になりては以前のことくにはあらずわが家の如く君命を蒙りて現にその道その學を業として仕ふ諸家にもそれ／＼にさる家を命せらるゝ上は公然たる事にて私事にあらすされはおのつから市中村里にも年をへてさる類出來たらむも道の盛になれるしるしなれはしひて今にては禁すべきにもあらずそは儒者とても元來はその學をもて業とし生活の種とすへきにあらさる事は同意なり

神の御心はあやしきものなりそも／＼儒道佛道の學び世にひろまりて長くつたはりぬればやう／＼に此國のさまたげをなしていにしへの國ぶりをわすれうしなふばかりなりぬとおぼしきころほひよりまた御國のいにしへ學びといふ事いさゝかつゝはしまりてつひに此道をたてゝ一重に學ぶ事となりぬそもそもかの元祿寶永正德享保のころほひから學びさかりにて御國はもと道といふことなく君に忠をつくすもから國の聖人のをしへをつたへならひてよりの事なれば家も國も天の下もやすくをさまることは聖人の道の御蔭なりといひたてゝ學問せぬ人々までもいよ／＼まことにもろこしの聖人の道は尊きものとのみおもへりしをちかきころほひこの古學のみちかつかつひらけて　皇國のもとより尊きゆゑよしをしれる人そこかしこにいてきて此ごろは聖人の道のさかしらごとをも又から學問の世に要なき事をもしれる人さへいてきたり時のいたれるなるべし

さてまたおらんだといふ國の學びをもしてひろく萬の國のありさまなどを考へしりてかの國人の物にくはしう理にかしこき事などをしりてはもろこしの聖人の道ならでも世はよくをさまる事をしり又儒者の天地の間にもろこしをのみ尊き國とおもへることをもわらひてかたよらぬをよき事とするもあり此おらんだの物學ひにつけて今は大かたもろこし聖人のをしへのさしも要なき事をもしれるはよけれど猶かの物にくはしく理にかしこきをよきことゝのみ思ひて御國のかぎりなく尊

きよしまではおもはぬはにくしかれどもまたつひに神の御國の尊きゆゑよしも世の人皆しりはつべきはしとも思はるゝは又たのもしきかたもあるなりかゝる事どものいでくるも神の御心よりいづることなるべくおもへばいと尊くなん

文化六年巳春のころかく書つゞれりかゝる事は猶いくらも思ひよる事あれば猶このつき〳〵にも書つくべし

附錄

今の世の童子(ワラハベ)の手習ふ始にするいろはにほへと云々といふ詞は僧の手より出たる詞なるべし其詞の意をとへばこゝろよき詞にあらずあいうえおの五十音も元は悉曇を學ぶ方にて備たるものにて元來より　皇國の上世よりあり傳へたるにもあらねど　内遠云五十音は悉曇を教る爲に製したるものなれとも悉曇中に此圖もとよりあるにはあらず　皇國言の通用延約まことに縱橫符合すれは　皇國の固有も同じ事なり此辨はおのれ別にあり　今はいろはの四十七字は廢除してかのあいうえおの連音もて手習の始にもせまほしこの五十連の音は古學びに甚だ助となるものなればなり

今の世の古學輩すべての事部類を分て其本證を相考へて詞の意を推正(オシタヾ)すなる事世に多くなれりこはいと〳〵よき事なり學の要たるべし

物をかへ改むる事は世の人のまどひとなりてあしき事なれども又改むればいつとなく改りて年を經てつひに改まる事もあれば心にかけていつとなくよき方になりゆくさまにおもむくる事もよき事なり

明和安永の頃まではわが古學の人々の儒道佛道を論破することあるを聞て以の外の如くおもひ異端の道を行ふ輩となどお

もへりしを近き寛政享和文化にいたりては儒佛の道をさんさん辨折するをもあやしむ事なく古學のともがらはわれ常の事なり道理ありて儒佛の害惡をとがむるはさやうにあるべき事なりと上中下の人のあやしむ事なくなりたるも道のまことのあらはれゆく次第なり

或人學問にこゝろさしてむねとおもふべき事を文に書てありけるにいさゝかおもふべき事をかきつく

鈴屋翁の教子の中に歌のみに心かけずひろく漢籍をよみわたしやまとふみども國史律令儀式などにこゝろかけてわが世のかぎり學事にて名をあけいみじき先生とならむと高くおもひあかれる若人ありてその人ある時師にこひていはく何にまれおのれにをしへ示し給ふ事かきて給へとこひたるにそのゝち三日四日ありて

家（イヘ）の業（ナリ）なおこたりそねみやびをのふみはよむとも歌はよむとも

といふ歌をなむかきてあたへられける家のなりとは武士にまれ農家にまれ商人にまれ先祖の代よりわざとしてつとむる家産をいふことなりみやびをとは學問などする人をいふなりみやびとは里備（サトビ）夷備（ヒナビ）にむかへて大宮風にて風流文雅に心よせて田舍めきて野卑なる方ならぬをいふにてしるべし書よむといふよむと歌よむといふよむとは心ばへこと〳〵なれと詞の同じきにとりて一首のあやとなしたるなりかくよめるはつねに世の物學びするともがらたゞその學事にのみ心いれて家の産業をおろそかにして或はやがてその家産をすてゝ身もまづしくつひに妻子親族のうれふるはかりにいたるまで心いるゝ學者のあるをあぢきなきすさびなり漢國などにさるさまの人ありて其ほどは困窮（セマ）りてくるしきを堪（タヘ）しのぶほどにつひに高き職位（ツカサクラヰ）に引擧られて家を起したる事などもあるがあれはそれをいみじき事に書のうへに目なれ耳なれてたゞはげみにはげみて家も身も取はづしては立がたく見ぐるしきまでにせまるまゝに或は弟子あるはさるべくむつましき人などにたすけをこひなどするもあるはいとかたはらいたく道にかなはぬしはざなりとつねに思はれていはゆるつねの産（ナリハヒ）なくして世に在經るは見ぐるしき事なりといましめてかくをしへさとされたるなりけりされど又學問せんとおもひたつ人のはじめより道にかなひて家の業をもよくつとめ學をも得んとせむには何はかりの事か爲いてんたゞ世の常のまめ人といふばかりにて在經ぬべし學問にも心ざしたる人のたゞのまめ人といふにてやま

むことかつはくちをしのわざやたれか思はざらん家の業をもさかえしめ學びのわざをも世にたてんこそ本意ならめそもそも學問は人の身の光の如く人の心のにほひのごとく世のいとなみの外にそへもたらむこそ心にくゝおくゆかしくなむあるべきさるは學問の功にまれ家のいとなみにまれその身の力にあひかなへて物せむこそめやすかるべけれ何わざにまれ世にことにぬけいで秀てんと思ひすゝむともその力たらはずしてしひて物せむとするは中々なるわざなるべしかしたゞこの古學といふは學びわざにこゝろざすおもふきも漢心に似ず倭魂をかためみやびこゝろをたてゝさとひ心をわすれ古の大道をたふとひ神の御しわざのかたじけなきをあふぎ遠つ祖のそのはじめをわすれず世にしたがひ時にかなひ今の身の業をよくつとめおのが力をかへりみて雄々しくもまめまめしくも千代にたつべき功をたてたくも聞えあけ中下の道引ともなるべくひろくもをしへ學びもてゆかむなん古學の本意にはあるべきかくいふが中には猶その思ひとりたるおのおのがよる方もあらむかし世にしたがひ時にかなふとはその時々の上の御さための御のりをいふなりわが心のまゝに世にひかひかしくかたよらむはたよろしからずといふなりかくいふは文政十年丁亥三月十五日

眞臣に答ふる詞

わが教子安藝國人後藤眞臣泉國辨といふ書をかきて大平がおもふ意を記してよとあるにこたへけらく此書の主意といへるは人の死てその魂は黄泉の國には不往してみな幽冥に入なりと云ことをかきたるなりかゝる新說は容易く許すべきことならねばその由をいふなり即此辨にも見えたる平田篤胤が著せる靈の眞柱と云ふ書に云へらく天地泉と三つに分れ竟りて後も天と地とは神々の往來し給へる事實多かれども地と泉とは大國主ノ神往て還りたり後は神々の現身ながらは更にもいはずその御靈さへに往來まして事實も傳說も更に見えざるは此は伊邪那岐大神の彼國を甚く惡みおもほす御心に彼國此國の往來を禁止て定めましゝ御謂に因ることゝ見えていとも畏き御定になむありける然るを古も今も人の死て其魂は盡に夜見國に歸といふ說のあるはあなかしこ伊邪那岐大神のいみしくも思ほし定めたまへるその御神慮を思ひ奉らずまた大國主神の幽冥を掌り治し看す幽契の妙なる謂をも考へずいとも忌々しき曲說にて慨き事のかぎりになむありける云々師翁の曰人は死ればその魂は善も惡もみな黄泉國に往くといはれし說のい

かに非說ならしやは（以上玉のみはしらの説なり）といふまで新說を立て人の魂は黃泉へは不往して幽冥に入るといへるなり今此泉國辨に此靈の御柱の說を諾ひてまた萬葉の歌どもを引れたるも一つの强ことにてうべなひかたけれどかつは然もやと思はるゝことの無きにしもあらねばいよ〳〵深く思ひ遠く思ひはかるに今大平その說を諾ひなば故翁の服部中庸が三大考の說をめづらかにも考へ出たるかもくすしくも考へ出たるかもといはれしと同じさまにて後來には彌益にいかなる事をかいひ出んとそをおそるれば上件の新說は取らざるなり人のあらたに考へ出たる說を用ひざるは學びの力たらはざるか又わが心のひがめるか道に心の進まざる人かともいふへけれど許す事は大事にて遠くおもへるなり大平旣く思ひよれるは古事記の天地の始の段に五柱の別天神と又國の常立神豐雲野神二柱神も御身をかくしたまひきとあると大國主神の國避の段に卽其船を踏傾けて云々隱ましき又八十坰手に隱て侍はむ云々とありて現身にまして御身を隱し給ふこと八十坰手に隱て侍はむとある事は深き由緣あることにて幽事を掌看(シロシメ)す御所爲(ミシワザ)なるべく思はるゝ事にてそも〳〵なに事にまれ事あらん時は其靈の天地の間に遍(アマネ)く滿(ミチ)て何所までも何時にてもいたりて行はむとおもほせば忽に御心の隨にせさせたまふことの成なるべし神の御うへにても宇都志御身まし〳〵ては御心のまゝには成がたきゆゑにしかあらかじめ御身を隱して幽事を知行(シロシメ)す事なるべくおもひよれるなり（世の人も讎の報せんに現身なからはえせぬ事も其體亡ひて後に魂にてはおそろしき祟事をなす事もある物なり今の世にもつねに人のいふ事なり宇治拾遺今昔物語古今著聞集たとにもさま〳〵見えたりそは大方佛の因果のことにつけて見るなれとも事實の幽事はかはる事なしおもひ合すへし）上件幽事の說は靈の御柱泉國辨の說によく似たれども大平がいふは別天神と聞ゆる大御神たちと幽事しろしめす大國主大神のうへを考へいふなりされどかかる憶說は深くつゝしみていふましきことなり古事記傳の卷卷所々に師翁の思ひよられたるいさゝけ事はあれどもさる思ひはかりの說どもはたれしも思ひよる事もあるならひなればよくいはれたりとおぼゆるふしもなきにしもあらねどそのいさゝげことをとりはやしてさま〴〵つけそへていはむことはいくたびも〳〵思ひかへして初學びの人などにはたやすくいひきかすましき事なり古學といふはその御典(ミフミ)の文辭(コトバ)のいさゝかにてもまどはしからむは例證を引てわきまへいはむそ要なるべき大平か師の說を信受(ウケ)て守れるは古意古傳說をたふとひて神ノ道眞ノ道を自(ワレ)もたふとび他(ヒト)にも解きかするのみこそあれ古書の文辭の正眞(マコト)に心得てその文詞(フミコトバ)の事の義(コヽロ)をうまくさと

すべきなり私智の漢意は思ひよるまじき事なりたゞよく漢意と佛意とを清くはなれて古語にいはゆる神ながら言擧せぬ國こともあれば後意を堅くして古典の義をしるべきなりと思ひ定めたるなり天は天、日は日、月は月、國は國、海神宮は海神宮、黄泉は黄泉風雨のふりふき潮汐の滿ひ火のいてきえ水のわきかわき木草の生たち五穀のみのり人のいきしににいたるまで盡くに神の所行にしてその古典にあるかまに〳〵心得て何のたらはぬ事かはあるべき知れぬ事はしらずてあらむと思ひ定むれば三大なる道の御言は無用長物たるべし漢學佛學於蘭陀學もひろく學びてたゞ皇國の道の比ひなくすぐれたるゆゑよしをぞしるべきさるはすへて測量の精細を學びもいひもてゆけばその功益なき物なり人の惑を解て見たりとても難儀き疾病をことごとく直し止むべき術もあるべからず日月星の運行遠近の度は得たりとても風雨寒暑をねがふまゝになすべくもあらねはすへて物の理を究むることは智術のさかしらことにて神の道を學ぶには益なき事なりとしるべしたゞ神世上古よりかたりつたへたる事實をそのまゝに心得ておろかなるが如くなれどもさてあるべきなり萬物萬事の理を究め天地の有状を測量りてかにかくに論ふは無用のことなりかへすがへすも漢意をわすれはて佛意をきらひて　皇國神の道のたふときよしをしるぞいにしへ學びにはありけるされば泉國辨靈眞柱三大考の類すへてとらざるなり

文政十年丁亥四月二十八日しるしぬ

此古學要一卷は天保十二年やよひの末つかた紀の若山の休賀か淵のうへなるかりのやどりにして春雨そほふるゆふへ蛙乃聲をきゝつゝ翁のしるしたまへる本をもてうつしぬ

高階三子

倭心三百首の序

いにしへ學の道今は世にあまねく行わたりたるさましられて年月にそへてきそひあらはす書もめづらかなることもおほかるはいとよきことになむありけるされど其記したる事どもを見ればおの／＼が學びの力を見せむとてから倭のめづらしき書の名どもをあげて世に物よくしれる人とはしらるれど初學の人を助け道びくにもあらず大かたの世人を教ふるにもあらずさき／＼人々のあらはしたる書の中にひがことあるを見いでてことごとしくあげつらひてけたかくみせて事も物ちさしもとがめずてもよかめることどもおほしさとりつよく強ひたる論すなるは大方いたづらごとやなりなんいでや此三百首の歌は手近くて有のまゝなるおもむきを我師の翁の詠いでられてうつそみの世の大道をさとされたるものにしあればかしこきや神のみたまの幸ひます由縁を初めやことなき御あたりの御ありさまは言もさらにて君に仕まつる心はへ親子うからのむつびの有様青人草の品々のおもふき世間になくてもあらぬ器財などもつみいで給ひはた道の學びの大要までも白玉椿つばらかによみ顯はされたる歌なれば其意こゝろをよく心得たらむには敷島の倭魂かたまりてうごく世なくいひといふこと思とおもふくさ／＼も大直日神直日になほく正しうなりもてゆかん教にしあれば鈴屋翁の玉鉾百首と此三百首とは難波津淺香山のふたうたのやうにてなん道のためには父母なりけるさへつるやからこゝろの道ときし篇どもとは玉たすき掛ても似よらぬをしへなりけり物學せん輩朝夕に口ならし讀みたらんには己々が家の業をも身のおこなひもほと／＼にあるべきさまをしりて自らに玉幸神の御をしへに隨ゆきつゝ道に惑はしきくま／＼もあらじかし天保二とせといふ年の二月かくいふは

賀島正根

おなじはしぶみ

はやく我家のおほぢ翁は玉鉾百首に下濁れる漢籍意をさとし清められたり今この三百首はたそれが外にもみやびたるさとびたるよろづの事にも物にもおのづからやまとぶりなるとからぶりなるとかあるをいにしへの眞心のまゝにおもひつづけて父翁のよみ出られたるかいやつぎ〳〵に數多くなれるをこは世の人の朝よひにいひならさば神の大道をもしるべきはじめならましとてやまと心となむなづけられたりけるさは此心といへるものよ神のみたまをうけ得て天の下にいきとしいけるものに皆そなはりてわが國ひとの國の論なくひとしかるべき物なるにもろこしには早くこちたきならはしにて眞心にそむきたる教といふ事をたてゝ人のこゝろわろくなまさかしくなりたるをその國の書どもをわが國にもわたし來てそをめづらしみまなぶ人はたひろごりゆくまに〳〵かへりてよろしくうるはしき事とさへおもひまどひてつひには有のまゝなる神ならふ御てぶりも世人の心もかのさかしらなるから心にまじこられざるはなくなむなりにたりけるかゝればそをあけつらひとさむとてはかのから心といふがあるにわかたむとてことさらにいはずても有ぬべき皇國のもとつ心をしもやまと心などいふなるはあやしときく人もあらむかしされどそれ今いひ出たるにはあらずはやく中むかしの歌にも文にも見え源氏の物語にはやまとだましひとも見えたればぞかし此書の名も眞心ともあらまほしけれどもとよりいやはてのうたの詞なればさてあるなるべしかくくだ〳〵しき事どもをしるしたるもかつはぢおもふことなれどこれがはしに一くだりとあながちに言出られたる父のこと葉のがれがたくて

天保二年冬

本居内遠

倭心三百首

本居大平詠

神の幸ひ

天地のそこひのうらにゆきとほりみたぬ方なき神の幸ひ

見れは見えゆけはゆかるゝ目も足も神のちはひの外ならめやは

天地の神のちはひのそのもとは産靈(ムスヒ)の神の御靈(ミタマ)にそよる

靈(タマ)ちはふ神のめくみをうれしともしらす思はぬ人しかなしも

大きなる神のちはひは目にも見えす心にも思ひしられさるらむ

君の御蔭

大船の思ひたのみてわか君と仕ふる君の御かけたふとし

われによる妻子(メコ)も奴もかくしよに養ふことは君の御蔭そ

かしこきや君の御世御世代々を經てかゝふる御蔭(ミカケ)なわすれそ子等(コラ)

父母の恩

高き人賤しき人も親思ひ忘れておもふなあしたゆふへに

かきりなき親のめくみは己か身の老て後しもましておもほゆ

妹(セ)のむつひ

神世よりかくありけらしうつくしみめくみこと問ふ妹と妹の中

思ほしき心かくさすむつましくゐみもゐますもかたる妹とせ

兒をうつくしむ

昔今高きいやしき人の親の子を思ふ心ことならめやは

賢しきもおろかなる子もとりとりに我子としいへは同しかなしさ

乳兒の遊ひ

むつまかにいふかとすれははらたちていさちあらそふ子等か遊ひはも

五月蠅(サハヘ)なすさわきよはゝり立はしりうらなく遊ふ子等しうつくし

うち思ふ心のまにまふるまひてさかしらせぬはこらかまこゝろ

老人をいたむ

心のみさかしらかりて目も耳もおいおとろふる人のあはれさ

老をなけく

わかゝらはかゝらましやとおとろふる我身のおいそうちなけかるゝ

見る人のにくまさらめや白髪おひ老舌いてゝよゝむおきなを

おいしれて同し言のみする人を若人はさはわらはさらめや

かくてしもいつは死むと心にはおもはぬ物のおいそかなしき

年つもる老そかなしきさかさまにわかゝへるへき道しなけれは

身のうれひ

わか身のみかにもかくにも歎れて思ふことならぬ世にもあるかも

世にふれは事にふれつゝさまさまに我身のうれひやむときそなき

富を思ふ

子孫(ウミノコ)のその末かけて思ふには富せむことそまつねかはしき

先祖(トホツオヤ)の光消(ケ)たしとおもふにもとみを願はぬ人あらめやは

富子(トミコ)ら代にこゝろたらひにやしなはむ思ふまに／＼家しとみせは

貧を苦しむ

おのつからまつしきにもあなとられ輕しめらるゝ身そくちをしき

世の中は憂しといへとまつしきにせまる身のみそせむ方もなき

ともしあたり世にふるたつきなき人をすくひたすくる富人もかな

病のみ病とやいはむまつしきにありわつらふもやまひなりけり

病をわつらふ

あし引のやまひのみこそうれたけれ山にも野にも見にもえゆかす

寢屋の内に一人いふせくあけくれて月雪花も見ぬそくるしき

うまき物酒も肴もいむといへはたゝひと日もえこそまかせね

わか好む菓子(クワシ)すらも物うくて手にたにふれすあるやまひかな

のむ藥日に苦きをたのみにていゆる日數をまつやまひかな

いとゝしく露の命をつひにはたいかにとなけく床のおきふし

命ををしむ

千萬の金も珠も何にせむ命のみこそたからなりけれ

たまちはふ神の給ひし玉の緒は世に二つなき寶なりけり

遠つ祖のゆつり賜へるたまものゝ緒たえはゆゝしおほろかにすな

うつせみの此世にかくていつまてもあらまほしきは命なりけり

あるかひもなき病人も老人も今はのいのちをしまさらめや

長生をねかふ

松竹の千代八千代こそかたくとも百年をたにかくて經にしか

八十まてかくてそ經ぬると思へは今二十年もとこそおほゆれ

幸を得

桃の枝高き短きほと／＼になりのほりなむ身を思はしや

幸のいかなる人か家もとみ身も品たかくなりはなるらむ

譽をよろこふ

事なくてありはつるたにうれしきにのこすほまれそ餘る幸ひ

君のため世の爲たてし忠わさの功を千代にほめさらめやは

年かさねはけみつとめてつひにはたたちし功のうれしからしや

安御代

天の下常磐堅磐に治れるわか大君の御世は安御代

天つ日嗣

かしこきや天つ日つきは天地の常磐堅磐に御榮えませり

靈ちはふ神の御世より御代かさね天つ日嗣としらしめす君

天照す日の大神の御勅にそ天つ日つきは定まれりける

皇御孫(スメミマ)の神のみことの受つかす天つ日嗣はうこく世そなき

萬代に現(アキ)つ御神と生まして國しろしめすすめら大君

安見しゝわか大君は神なから受つかしますあまつ御くらゐ

雲のうへ人

神世より君に仕へて世々たえす御位たかき雲のうへ人

代々たえす君につかへてあめにしも地におちまさぬくものうへ人

神代よりまことに千代の世々を經て家つきたえぬ雲の上人

藤原は天の兒屋根の神代より御もとに近く仕へます家

八雲たつ出雲の穗日の命よりつたへ／＼し菅はらの氏

清原の眞人の氏は遠つ代のすめらみことの御末とそきく

初國を平の宮にしらしける君の御末そたひらとはいふ

水の尾の御門の御末源のそのみなもとは經基の君

又さらに宇多の御門の御末にも源氏はさつけたまひき

村上の帝の末も師房の君よりはしめみなもとの氏

花山のみなもと氏は立かへり世々につたへて王の家

正親町ちかき帝の御末にもみなもと氏は廣幡の家

神官大中臣も卜部氏も尊き神の御すゑなりけり

大彦の命の御子の建沼河別の命そ阿部氏の祖

物部の大まへつ君

大君の遠の朝廷に天の下すへまもります大まへつ君

國々の君

物部の大まへつ君の住たまふ國々しりてまもります君

御軍の大まへつ君をわか君とよりて仕ふるくに／＼の君

まけあかちあつけ給へる國々の民ともやすくをさめます君

此ついてに

とほつ代は國造縣主君直別稻置といへりき

から國も封建の代といふほとは公侯伯子男といへりき

からさまにおきて給へる御代よりそみこともちをは下し給へる

國ことに守介掾のそのつきに目史生と任たまへりき

漢國はとまれかくまれわか國は郡縣の制ふさはすといふ

おのつからうつりかはりて國々にその君います代とはなりにき

物の部

たひらけき御代にはあれとものゝふの道おこたらぬますら雄の伴

事しあれは君の御楯と御軍の御さきに立てすゝむ武士

山ゆかは草むすかはね海ゆかはみつくかはねといふはものゝふ

君の爲たけき心をあらはしてわか身はつゆもかへり見やする

朽む名をはちてをしみていさみたるますら武雄は命をしむな

まめやかに君に仕へてわたゝしのねたみうらみに命なすてそ

大御たから

御貢物はこひつかふる民草はわか大君の大御たからて

春くれはこそのあら小田くはもちてたちもつかれす打かへす田子

あくるよりいそき出たちをち方の田にたちくらす田人いそしも

夏の日のあつき盛もすゝみえす田におりたちて田草とる田子

浪の上に小船こきいて海幸の釣しあみひく浦のあまひと

浦浪にめかり汐くみ朝夕にぬれつゝわたる海人の衣手

眞柴かりねりそねりゆひ荷ひもちくるしき山路かよふ山人
宮材(ミヤキ)きりうつや斧音ゆ木末よりほと〳〵しくも見ゆる杣人
あらかしめ高さ廣けささしはかり屋つくりたつる工いそしも
くみあくろ桁梁のあやふきをふみなれはしるおほたくみはも
作いふりよろつの物をたらはすは國のたからそ手人商人
人の爲にかひらろ物のくほ〻もておのか世わたる市女あき人

水穗の國

千萬の國に又なくすくれたる稻の水穗の國はわかくに
八束穗の水穗の國と神代よりうへいちしるく稱へ來にけり
天てらす神の御末のきこしめす水穗の國そあやに尊き
天なるや豐受姬の大神そ水穗のくにはまもりますらむ

五穀

保食(ウケモチ)の神のみことの御身よりそ成出そめしその田なつ物
天つ神種とり得ましつくりそめ民にをしへし田なつ物かも
稻種も粟麥豆も黍稗も小豆にさゝけも神にそましける
神の世の神の御身より生いてゝたえす枯せす生いつる種
いくしたて水口まつる苗代におひいつる種け神にそましける
大年の神のよさしをよろこほひうたひゑらきてうゑよ狹少女
よさしますす御年の神の御めくみをわすれす祝へ田にたつ田長
もみにます御よねは神そいたゝきてたはへは人の命つく物
神にます千穎八百穎(チカヒヤホカヒ)一粒もおほろかにすなとりていたゝけ
稻のたねまけと生せぬ外つ國は猪鹿(シヽ)のみ喰て命つくとふ
いのちこそ魚鳥くひてつかめともうまき御稻の味はえしらし

菜物

山縣にまける青菜も浦磯に生る磯菜もつむそ樂しき
樂しけむ野澤にいてゝ根芹つみ岡へにたちて蕨をる子等
瓜なすひ芋も大根もはしかみも垣内の畠につくる里人
海さちも山さち物も保食の神の御靈とたまふたま物

火並燧

飯かしきあつものにものあふりもの朝夕御蔭ねかふ竈の火
おそろしき火の迦具土の神なれと御蔭かゝふる鍛人(カヌチ)鑄物師(イモノシ)
薪火たきほたうちくへて浦の海人も谷の木こりも火をこそたのめ
燠(オキ)うつむ火桶炭櫃によるくのさむけさしらすたのむ冬春
ぬは玉の夜毎にともすあふら火の光しえすは夜をいかにせむ
足引の夜こえにこゆる山道も手火のひかりにゆきもまとはす
かと石に火打すりよせうつまゝにあらはれ來ますほむすひの神

水並井

高山の谷のなかれを千町田にくまりほとこす水分(ミクマリ)の神
池をほり設溝(マケミゾ)ほりて雨ふらぬ日てりのためとまけたのむ水
眞清水にもあらふのみかけかれたる物等あらはひすますよろしも

山の井のさむきみもひをむすひあけて心もけやにのむかすゝしさ

火の神のあらひをはやく鎭めよとうみ出ましゝ水の大神

甕もてくむもかしこし彌都波能賣神のみたまのより來ます水

大穴牟遲神の命の御子にます御井の御神の御蔭たふとし

上埴

火の神をしづめまさむと土の神埴山姫はうみおきましぬ

八十平瓮御酒もる甕の陶物も眞埴もてこそ作るなりけれ

飯かしくへつひをはしめぬりこめの壁もついちも埴もてそする

金鐵

大土をほりてうかちてからくして掘うるこかねたふとかりけり

大刀かたな箭さきほこさき鎌くはも鍋も釜も鐵にてそする

物にかへかよはしつかふ御たからのたふとき物は黃金白銀

玉石

言のはにいひかけまくもかしこきは瑞八坂瓊の五百津みすまる

貴人はその品々に好玉を御身のよそひとつけたまひてき

御殿もたゝの家らも石すゑとつきかたむるは石にそ有ける

木草

高山の宮木引いてゝ大たくみ作るも高き神の御あらか

杣川をくたしもてこし眞木のくれ又引あけていはふ棟あけ

御かま木と楚刈いて都へにはこふもしけき四方の山人

をちこちの眞柴かり來て里ことに竈所の煙たゆる日もなし

久々能智の神の御靈といやもえにしみさひたてる眞木のしみ山

いつの代の赤裸山そ深みとり木々をころもとよそふ靑やま

百草の根も葉も莖も花も實もなめこゝろみて藥にそする

竹

木にもあらす草にもあらぬ竹とりて萬の物をつくるよろしも

衣服

夏引の手ひきの糸を經緯に織たるきぬをきる身うれしも

きぬといへは絁たにもよき物をよききぬけ又殊によろしも

かされても涼しかりけり夏衣麻もてうすくおれるかたひら

いろ〳〵に染たるいとをたてぬきにましへたくみて織いたす服

高機のはた物しけくあやとりてあやにおりなすたてぬきの糸

かしこきや神の御身より成いてゝ引つたへたる桑まゆのいと

かさねても身におもからぬ衣かた桑蠶の眞綿ふくよかにして

麻こそは畠にまきしか今しはし種まきつくる綿もありけり

山畠につくれる木わたしも人も布子きるにさむけくもなし

きぬならす布にもあらす今の世のもめんは價やすき織物

裝束

冠も表の裝束も漢國のすかたをこゝにうつすとそきく

からふりのよそひのみかはもとよりの倭よそひも有さらめやは

御鬘に御頸に御手にかけましゝ珠のよそひそ鈴かりけむ

居屋

大宮も民のわら屋も日の御蔭天の御蔭とたのみてそすむ

日てりにも暑けさしらす雨ふれとぬれす起ふしすむ家そよき

雨露ももろ時しらす鹿屋野比賣神の御蔭にかくれすむ家

葦ふきのすゝたれ家も霜雪をおほふと思へは安穏する家

家居してかくれすますは六月のてる日のあつさいかにかもせむ

倉

火もいかてやきほろほさむ眞埴もてぬりて作れる藏の内の物

鏁樞鎰扃(サウクル、カスカヒトサシ)さしかためとさせる倉に何かいり來む

船

順風に帆はり梶とり時の間に千里をはしるおきつ大ふね

あやふしと思へはたまも消ぬへし千尋の浪をわたる大船

島も見す御空もしらす大浪の浪の間わけてうきわたるふね

島はなれこきいつる船は綿津見の神のめぐみにかゝるなりけり

遠つ國しらぬ國よりめつらしき國つ物はこふうきたからかも

橋

天地にかよひましけるうき橋そはしてふ物のはしめなりける

棹梶のこくわさなくて船よりも安くゆきかふ大川のはし

馬

人の脊におはぬ重荷をうは荷うちて驛路かよふ旅籠馬かも

道遠くとみの使と早打にいそくそ馬にしくものあらめや

いにしへの甲斐の黒駒鞍きせすかけりしるし命たすけつ

牛

稲はこふ田人のちからたすくとて殊に負もつことひうしかも

大津より野ゆき山こえ車牛とゝろ〳〵とかよふみやこ路

力車

三人四人荷ひもあへぬ重き荷をちから車そ安くつみゆく

乘物

貴人の御輿輦(テクルマ)うしくるまゆきかよひけむいにしへおもほゆ

御車はとゝろゝ道の山道も御馬そ安くふみかよふらし

神の世に目なしかつまもありしかはかことゝいふ名もいやしといはし

調度

身にちかく手にとりつかふ時々のよろつの物の有そうれしき

あさゆふの飯笥(イヒケ)盌鋺(モヒマリ)はし札こしき鍋釜(カナヘ、カナヘ)さしなへ

御井の水くみとるつるへ桶ひさこ御よねしらくる臼杵ふるひ

春の田をかへす鋤鍬秋の田をかるとはこゞは鎌物なり

ますはかりたかはかりまた曲尺かそふる物はさんぎそろはん

さま〳〵に木竹絹布のみならす紙もてつくり取つかふ物

みの笠は神世なからの物なれと今はからかさ雨がつぱの物

松ともしかゝり火たきてせしわさもらふそくたてゝてらすてともし
世にのこし今もかよはす書みれはふみてと墨と紙そいそしき
年を經ておいぬる人はつく杖とかくる目かねそたすけなりける

冠烏帽子

おしなへてきぬ世となりてきる人はその品見ゆるゑほしかうふり

七首蝶囊

紐小刀火打袋をいにしへはたひゆく人のまもりにそせし

鏡

手にとれはたゝそのまゝにうつされてくすしきまてに見ゆる鏡か
朝な／＼わか影うつすかゝみこそ身にうとからぬ寶なりけれ

兵　仗

伊邪那伎の神のみことの御はかしのその御劔は尾羽張の神
御そひらに千のりの靫（ユキ）をおひまして男たけひましゝ日の大御神
須佐の男の神そをろちをきしきて取得ましける草薙の大刀
大穴牟遲生大刀弓矢得ましてそ大國主の神とならしゝ
天つ久米天の忍日の二神のとらしゝ弓にあめの波士ゆみ
頭椎（クブツチ）の横刀（タチ）とりはきて御天降の御前仕へし大伴の神
眞菅（マスゲ）吉（ヨシ）尾張の國の大御神厚田の宮は草那藝大刀
石上布留（イソノカミフル）の御神は國むけの布都の御魂の横刀にそましける

又

神代には沼矛廣矛八尋鉾今しは大身すやり十文字
遠つ代の加和頁もよろひ今の世の具足といふも甲なりけり
腰にはき手にとり給ふ物なれは大刀は御はかし弓はみとらし
とふ鳥もゆくけた物もとることはまつ的遠く射習ひてこそ
かきろ火の火うつすくすり手も早く玉うちはしく小筒大筒
いかつちの神とけならて天地にとゝろきわたる石火矢の音

琴　笛

琴の板神より板といふなるは神の御占の天の詔琴
あたたふと笏もてうては天地の神より來ます天ののり琴
神の世に弓をならへてひきゝてふ傳へよしある事にそ有らし
今の世に神おろしとてかむなきの弓うちならすわさも餘し
六つの緒と定めしことは歌舞に彈なる物と成てなるらむ
から琴のわたりきてよりあらためてやまとことゝはいふにそ有ける
ひく糸の音のきこえをきゝとりてあつまてふ名け負せそめけむ
よこふえはやまとふえともいひわけすたゝよこふえといふそ餘き
ひちりきはさしも見えねとたゝみたる笙は姿もからめきて見ゆ
琵琶といへはから琴なれとひくこゑは日本ふりにそきゝなされける
うま人のつねに手ならす箏のこゑも姿もみやひてそある
古の人のめてけるきんの琴世にたえぬるはをしくもあるかな
こととといふはわこむきんひはしやうの琴笛はよこふえひちりきと笙

大つゝみかつこ鉦皷とこまふえは猶みやひたるいにしへの物

神 遊

歌うたひ琴ひき笛をふくわさは神の御代より遊ふ御遊

たふとしな神代のまゝに神さひてうたふ神樂の本末のこゑ

倭琴笏もてあそふ神わさのかくらあそひそあやにたふとき

神世より耳なれまして神あそひあなおもしろと神やめつらむ

おもしろきこまもろこしのかくよりも東遊そ神はめつらむ

皇神もあなおもしろときこしめすあそひのわさそいにしへの道

こまやかにめつらしき手はそはすとも神遊こそ尊かるらめ

唐 樂

からあそひとこそいひけれおのつからわかそのかみの振そあるへき

みやひかにいにしへの人のつたへきてからあそひとも思ほえぬかな

唐あそひからの國にはつたはらす早くの代より絶ぬとそきく

みやひたるかゝるあそひのわか國につたはれるこそ尊かりけれ

散 樂

彈物はましへされともさるかくはたけく雄々しくおもしろき物

そのかみはさるかうことゝ見つらめと物々しくそ今は見えける

うたひものいやしき語ましれともはやしの音はみやひてもあり

漢學(カラマナヒ)からに心のひく儒者はいやしき物といひおとせとも

ふたふこゑはやし辭は何となく倭あそひに似たるさまあり

罪人のなくやさけひに似たりとしおとしめいふはから心なり

さるかくな物々しとて又さらに狂言といふわさもそはれり

いやしけとをこかましくてわらはるゝそのをこ事そ今のわさをき

又

大つゝみうちなす音はいにしへの笏柏子ともきゝそなさるゝ

いにしへの琴のひゝきにおもほえてみやひかなりや小皷の音

うちなすやたいこの音はうけふせてふみとゝろかす音とこそきけ

俚 樂

これも又わさなきなれや今の世のかぶき芝居も人形芝居も

事のさまいやしけれとも今の世の人のかんする物は淨瑠璃

琵琶法師かたる平家はいまの世に淨るりといふものゝそのおや

いまの世の女のわらはへの琴ひきてうたふ小うたも一くさのもの

さみせんはおかしからすもあらねともこきうはいやしからすしもあらす

書 籍

天地のはしめの時にありそめし萬の事もつたへくる書

遠つ代に百濟の國ゆ奉(マタ)しける書はろんごと千字文なり

今の世は月に日にけにあらはして彌たらひゆく道々の書

文 字

漢國のその國文字もわか物とつたへてかけは事たらひけり

事のみか思ふこゝろのありさまも書にしるして見するから文字

から文字は物のかたちになそらへて作りおけるそさかしかりける
漢文字は餘りにかすの多かるをわつらはしとそむかしよりいふ
悉曇もおらんた文字も人のいふこゑにかたとりつくれりし文字
正文字も眞假字ひらかな片かなも便よろしゝつかふわか國

漢文學ひ

から學ひ書の博士にならひてそ書よむすへは知へかりける
からふみをならひよますはもろこしに言かよはさむ便えさらむ
なかなかにふみかくすへもならはすは漢のさかしらしらすやあらまし
ちかき世の書ともよみて清國（カラクニ）の俚言をもよくそしるへき
あたし國譯のつたへはまたすして文字もて示し問ふこともあらむ
筆もちて言かたらはゝから學ひ拙からむそはつかしからむ

醫術

大穴牟遲少名毘古那の神代よりはしめ給へる藥師の道
掌ゆひさすかことその病しりて治るくすしたのもし
身のやまひわつらふ時は神よりもまつたのもしくたのむ醫師
よく直すよきくすりしにあふ事も幸ふ神のめくみなりけり

天文暦算

閏月月の大小さためおきて月日の蝕をはかるこよみ師

歌

神の世の神の御心御語も正しく知は歌にさりける

古の人の眞心いにしへの人の言とひらたにとそしれ
その歌はふることふみとやまとふみまむえふしふと三部にそある

歌學ひ

神の世に神の始めし歌なれはならひてよむそ神の道たる
いにしへの跡をたつねて學はすは世々經て道や淺くなりなむ
近き世のいやしきふりをきらひつゝひかことせすてよみうるそよき
いにしへの正しき跡にたかはしと猶こゝろしてよむ歌そよき
たゆみなく年へてよまはおのつからなとかよき歌出來さるへき
古の道にこゝろのよる人はまつは歌をそよむへかりける
歌學ひあさけむ人は古のふみのこゝろもうまらにはえし

古事學ひ

尊きやふることふみと御代々々のやまと書にそ心よすへき
尊きは延喜の式ののりとことしんみやう帳と代々のせんみやう
古語拾遺國造ほんき姓氏ろく風土記の中にのこるふる事
代々久にあやまてりける假字つかひ正しをしへし契冲の大人
さはかりの阿闍梨の學ひそのかみは世にしる人のあらすそ有ける
かしこくもみさの君こそ契冲か秀たる學ひ知しめしけれ
まんえふのその解說をけいちゆうにみとの君こそこひ給ひしか
東麿荷田の宿禰は縣居の翁か學の祖にそましける
荷田の大人まなひのむねは口つから眞淵の大人に傳へおかしき

荷田加茂の二人の大人は神の道さとすそ家のまなひなりける
神の道さとさむ物と二大人はまつ萬葉の歌そとかしゝ
縣居の大人そはしめて此學ひ教子ひろくをしへましける
あかたゐの大人のまなひを受得しはわか鈴屋の大人にそ有ける
古言のまなひ受つき皇神の道をしへける鈴屋のうし
眞直なる倭こゝろに學ひては神の眞事の道はえてまし

文政五年冬詠畢　　本居大平

此歌ともはわか翁のつねに歌の圓居のをり〳〵なとにいひきかせをしへさとされたる事ともなりいと若き時よりその時々ふかく心にとまれるかかくいはまほしくてなむすへて此歌にいへる事ともは古事記傳をはしめ玉勝間にいたるまてみなあらはされたる書ともに見えてそのおなしことをかく今さらにことさらによみいてすともあるへきことなれとされとまたはやくみつからも玉鉾の百首とてよみ示されたることもあれはそれにならひてなりけりかの百首はこと〳〵くに古風のみにて正しくよみとゝのへられたるをこれか中にはいさ後の世の詞ともゝましれるはその事のさまにしたかひてなり又事のゆゑよしにも大平かさかしらに思ひよりたるまゝをよみたるもいつゝむつましれるは翁さひえもたしあへぬしわさなりけり

玉鉾百首解序

たまほこのもゝうたは。靈ちはふ神の御代より。やすみしゝわが大君の御代々々に。傳はり來ぬる。玉矛の道わけいるべきこゝろばへを教へたまへる。吾が師さくすゞの鈴屋ノ大人の歌になもありける。そは高光る日の大神の。天地にてりこほらひまして。大御光の。たくひなく尊きことをよみ給へるを。始めとして。かしこきや東照神ノ命の。安國としづめまして。天地のよりあひの極み動きなく。榮えまさむ大御代の。惠ふかき御功績の。あやに貴き事までを。淺茅原つばらにをしへ給へる。此百歌をよみ見む人は。天の下國は多けど。この大御國にならぶ國なく。日の大神の本つ御國と。いよゝます／＼貴みて。神代の傳へなき外國の。横さの道に入そめて。したにごれるから書川の流れにおぼれ。漢意のさ霧にまごへる。世の人ども。天照す日の大御神の道は此道と。さとり得てつひにしきしまの倭たましひとなりて。百たらず八十狂日神の。まが心をはらひ清めて。神直日神大直日神の。御靈のふゆをかゞふりつゝ。此玉ほこの道分いらむ人ぞおほからむかし。こゝにわが友稻懸ノ大平は。大人の御許にちかく家をらして。朝夕になれつかへて。いとも尊き教のかぎりを學び得て。大人の教子はさはなる中にも。物まめやかにいにしへ尊む心深くて。書籍さとることも。歌よむ事も。人よりまさりてなもありける。かゝれば此まことの道の尊とき事をも。人より深くわきためさとりて。此百首の註釋を物して。意。辭のことがたきふし／＼を。ねもころに解あきらめて。よむ人のしるべとなもせられける。かれこの八束穗のいかし穗の。稻掛ぬしの眞心を。おむかしみたふとみ思ふこゝろのかたはしを。かきのばへて。はしがきとなしぬ。かくいふは學ひのはらからなる。出雲人出雲宿禰俊信

玉ほこ百首解はしかき

世の中の萬の事、神の御蔭にもれたるはなきを、それが中にも、ことに尊くうれしきは、直日の神の御靈にぞありける、天の下、安國のうら安に、賑ひ榮えて、すたれたる萬のみち〳〵も、つぎ〳〵におこるめる中に、古事學びの、いやましにおこなはるゝことよ、そも〳〵此ふることまなびの始は、難波の契沖あざり、古き代の書どもを見明らめて、すぐれたる注釋どもを物せられたるを、そのかみ大かたの世には、しる人もなかッめりしを、たゞ一所、水戸の殿のさとくきこしめし信じて、安藤何がしを使にさして、ねんごろにとぶらはせ給ひつゝ、萬葉集の代匠記なッど、かゝしめ給ひけるなッどぞ、そのはじめなりけむ、しかはあれど、世にひろくおこなはるゝ事は、遠江のくにの岡部ノ大人の、田安の殿につかうまつりて、さま〴〵仰ごとどもをうけたまはり、雄々しき倭だましひをたてゝ、正しきいにしへ意を、ひたぶるにをしへみちびき、世の人々をいざなひて、うけばり物せられけるほどになん、やう〳〵天の下にはひろまりにけるを、わが本居ノ大人は、その學びを受つぎて、いにしへ今の書どもの、意こと葉を、いよ〳〵深く考へて、神代の御ふみの尊く妙なるおもむきを、深くさとり、こまかにわきまへてなん、こゝらの書ども、書あらはし玉ひけるほどに、わが殿の殿人にめして、つかうまつらしめ玉ひなッど、厚き御惠の光さへそひて、大人の功もいよ〳〵たちて、このまなびの道、世にみさかりになるまゝに、年ごろ四方の國々より、したひまゐりて、したがへるともがらも、いよ〳〵おもひはげみつゝ、その業をあひたすけて、世にひろむるなかに、稻掛のおほ平ぬしは、ことにこの大人のやまとごゝろを、大かたの世にあまねくさとさんの心まめやかにて、まづ此百首のさとし歌のこゝろをときあらはして、二ばしら御祖の神のはじめ給へる、たふとくたへなる道のもとをたどり、あやしくくすしかりし神代のおもむきをもて、今のよにありとある事のことわりをなぞらへしり、よき事あしきことのゆきかはる、神どものかしこき御しわざをもわきまへ、黄泉の國のきた

なき穢い、ゆゑよしをさとりて、竈所の火の、いみしくたいじなる事をおもひ、身のけがらひは、清き川瀬におりたちはらひ、禍津日の神の御あらびに、みだれりしみだれ代のありさまにくらべては、安國のやすらけき御世をあふぎ、道のまことをしりて、かみの御蔭をうれしみ、今の代は、今の御おきてにしたがふをよしとし、おのがわたくしの、世に異なる行ひをいましめなゞごし給へるこゝろを、よの人にしめさんとて、此二卷の注解をものせられける、げに初學びのともがらはさらにもいはず、世のいとなみにかゝつらひて、ひろく書見るいとまなからん人々なども、をり／＼にひらき見て、神國のこゝろをしらば、古こまなびいよ／＼ひろまりて、この注解の、つとめたるねがひもかひありて、上中下の人のこゝろうちあひて、おとろへたまへる神の御社をもてなほし、絶たる神わざをおこさせ給ひなごして、後やう／＼にふるき代のてぶりにかなひもてゆき、天地とゝもに、てらす月日の、かぎりなく、明らけき御代は、いや榮えにさかゆかんと、いともかしこき神の御かげを、あなかしこ、今より思ふも、うれしくたのもしくて、かくなむ

紀伊國玉津島社司上總介従五位下　橘　朝臣　房　雄

玉鉾百首解上卷

この百首の歌は、神の道の、尊くすぐれたるをしらざる、なべての世の人をさとし、またいにしへ學びする人もいまだわきまへぬ事ども多くして、古意にたがへることあるなどを、いきどほりて、わが本居ノ大人の、はやくよみおきたまへる歌なり、此哥、いにしへのすがたにならひてよみ給へれば、中には、耳なれぬ詞などもまじれるを、いふかしがる人々もあれば、これがちうさくを物し侍るになん、

稲掛大平

つきさかきいづのみたまと天地にいてりとほらす日の大御神

○つきさかきは、齋き賢木にて、清淨にいつき清めたる賢木をいふ、この詞は、伊豆といはん枕詞なり、○いづは、嚴つといふと同じくて、清淨なるをいふ詞なり、○いづのみたまとは、清淨なる御靈とまうす意なり、天照大御神は、古事記に、是以伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米志許米岐穢國而在祁理、故吾者爲御身之禊而、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原而、禊祓也、云々於是洗左御目時所成神名、天照大御神とありて、黄泉國の汚垢を、はらひ清めたまひて、清淨になりはて給へる時に、生出たまへる日の大御神なる故にかく申せり、さて此詞は、日本紀神功ノ巻に、神風伊勢國、百傳渡會縣之、拆鈴五十鈴宮所居神、名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命とありて、すなはち天照大御神の、御みづから御名のりたまへる御詞なり、御たまとのとは、とてといふ意なり、○いてりとほらすとは、天地のかぎり照りわたり給ふをいふなり、いは發言とて、言の上にそへていふと古言におほし、

○一首の意、清淨の御魂とて、天地の間に、いさゝかもいたらぬ隈なく照りとほりたまふ、日の大御神とよめるなり、此歌をはじめにおかれたること、意あるべし、道は清淨を旨とす、伊邪那岐大神の禊祓の功によりて、この大御神の成出ませることを深く味ふべく、又清淨の御靈なる故に、天地にてりとほり給ふといふ、二の句と三四の句とを、相てらして心得べきなり、

天つちのきはみ御てらすたかひかる日の大神のみちはこのみち

○天地のきはみとは、天地の限りいたらぬくまなくといふなり、○御てらすは、照り給ふなり、てらすなどいふ、用語にも、御の字をそへていふこと、古言におほく例あることなり、○高ひかるは、日といふことに、枕詞のやうにかうぶらする詞なり、高は、天といふに同じく、光るは、照るといふに同じきなり、○一首の意、天地の限てりわたり給ふ日の大御神の道といふは、此道ぞとなり、此道とさす、ところは、即此百首の哥どもに、次々に見えたるおもむきなり、

高みくら天つ日嗣と日の御子のうけつたへます道はこの道

○たか御くらは、天皇の御座をいふなり、そは高き座なる故にいふにはあらず、高は、たかひかるの高と同じくて、天といふことなり、天皇の御座は、すなはち高天原の、天照大御神の御座なる故に、高御座と申すなり、○天つ日嗣とは、御代々の天皇、天照大御神より、さづけたまへるまゝに、うけつぎたまふ御位を申すなり、猶くはしくは、師の古事記傳をひらき見て心得べし、○日の御子とは、天皇の御事なり、いく万代の末々までも、天皇は、天照大御神の御末なれば、かく申すなり、○一首の意、日の御子の天つ日嗣として、受つたへまします道は、この道ぞとなり、此道上に同じ、

天のした青人草のあさよひに御かげとよそる道はこの道・

○あを人草とは、万民をいふなり、○朝よひとは、朝も夕もなり、俗に常住不断といふことなり、○御蔭は、俗にもおかげといふに同じ、○よそるは、寄るといふことなり、たのみにしてよりすがる意なり、○一首の意、天のしたの万民の、朝夕に、御蔭として、たのみよる道は、この道ぞとよめるなり、右の三首、みちはこの道といへるは、天照大御神の道も、天皇の天つ日嗣受つぎ給ふ道も、万民のつねに御蔭と頼みよる道も、皆この百首の歌に、つぎ〳〵によめる所の道にして、他のみちにはあらずといふなり、

二柱御おやの神ぞ玉鉾の世の中の道はじめたまへる

○ふたばしらとは、二神と申すことなり、○御おやの神は、

伊邪那岐ノ命、伊邪那美ノ命、二神をまうすなり、〇玉鉾とは、玉をつけたる鉾にて、みちといふ言の枕詞なり、さてこの百首を、たまほこ百首といふは、此歌のこの辭をもて、名つけられたるにて、道の百首といふとなり、〇世の中の道とは、まづ上の歌どもに、此道とある道にして、その外よろづの事にわたるべし、そも〳〵この二柱の大神、はじめて夫婦となり給ひて、國土を始め、野山海川木草火水にいたるまで、生出したまひ、萬の神々をうみ出し給ひ、竟に日の神、月の神をも、生出したまひたるなり、さてまづ夫婦のわざをなしはじめ給ふ、これぞ世の中のもろ〳〵のしわざの本にて、その外萬のわざを始め給へり、

天の下國はおほけど神ろぎのうみなしませるおほ八嶋國

〇この天の下は、四海萬國をおしくるめていへり、〇おほけどは、雖レ多とかきて、多けれどゝいふとなり、〇神ろぎとは、皇祖とも、神祖ともかけり、天皇の大御先祖の御事なり、此哥にては、伊邪那岐、伊邪那美ノ命をさして申すなり、大八嶋國は、古事記、日本紀に、この二柱の神の、國々をうみ給へる次第をいひて、その嶋すべて八つあるをもて、大八嶋國といふとあり、くはしくは、師の古事記傳、國號考等に見えたり、〇うみなしませるは、うみ出し給へるなり、なすといふも生の字なり、令出來となり、〇一首の意、世界の内に、國は數しらず多くあれども、我天皇の御先祖、伊邪那岐、伊邪那美ノ命の、生出し給へる國は、この大八嶋國なりとよめるなり、此國の外の、もろ〳〵の國は、たゞ潮の沫の凝りてなれるにて、二柱の生なしたまへる國にはあらず、

日の神のもとつ御國と御國はし百八十國のほくにおや國

〇日の神とは、高天原にまし〳〵て、万ッ國をてらしまします、天つ日天照大御神を申すなり、〇もとつ御國とは、日の神の生出たまへる、御本國といふことなり、この神は、かの筑紫の橘小門の、御禊に成出たまへれば、この皇國ぞ、御本國なりける、〇御國はしは、此御國はといふなり、〇しは助辭なり、〇百八十國とは、數の多きをいひて、いはゆる万ッ國なり、〇ほくにとは、中にすぐれてよき國といふ

なり、くはしきことは、次々の歌にいふを合せ見べし、○おや國とは、万ヶ國の本たる國といふなり、○一首の意、此日のもとは、日の神の、出現ましく〵たる御國なれば、萬ヶ國にすぐれて、萬ヶ國の上にたつ、第一の國なりとよめるなり、

百くにの國のまほらは大やまとわがおほ君のきこしをす國

○百國といふも、上の百八十國と、同じ心ばへなり、○國のまほらとは、萬ヶ國の中に、殊に勝れたる所といふなり、日本紀の神武ノ巻に、大和の國をほめて、秀眞國とのたまひ、古事記に、倭建命の御歌に、やまとは國の麻本呂波たゝなづく青垣山こもれる倭しうるはし、應神天皇の大御歌に　山城國葛野を見さけたまひて　知婆の加豆怒を見れば百ちたる家庭も見ゆ國の富も見ゆなど、又万葉集にも此詞おほし、上の歌に、秀國とよめるも同じ、俗にいはゞ、あるが中に、正味の所といふにあたるなり、○大倭は、こゝにては、皇國の惣名の倭なり、○わが大君は、天皇の御事なり、○きこしをすは、きこしめす、しろしめすといふに同じ、○一首の意、百千の國の中に、第一に勝れたるよき國は、天皇のしろしめす、この日本ぞとよめるなり、

かしこきやすめら御國はうまし國うら安の國くにのまほくに

○かしこきやとは、皇といはんとて、まづ冠らせいへる詞なり、俗におそれおほきといふに同じ、やの字は添ていへる辭なり、○すめら御國は、この御國を尊みていへるにて、天皇の御國といふ意なり、○うまし國は、美稱していふなり、物のよき事を、古言に、うましといへり、日本紀垂仁ノ巻に、伊勢ノ國をほめたる詞に　可怜國、万葉集一ノ巻に、何怜國ぞあきづしま倭の國は、これは大和一國のことをいへるなり　などあり、○うら安の國は、神武ノ巻に、昔伊奘諾尊目二此國一曰、日本者浦安國、これは日本とかける文字にかゝはらず大和一國のことをいへるなり　万葉集にも、うら安といふとあり、何も憂へもなく、よろづに心のやすらかなる國にて、俗にいはゞ、安樂なる國といふことなり、○くにのまほ國は、上の歌に、秀國とよめるに同じ、○一首の意、わが天皇のしろしめす此國は、うまし國なり、うら安の國なり、國といふ國の中に、すぐれたるよき國なりとよめるな

り、

百八十國にあれども日の本のこれの倭にます國はあらず

〇日の本は、倭の枕詞なり、万葉集山部赤人の長歌、また續日本後紀、仁明天皇四十ノ御賀の長歌などに見ゆ、〇これの倭は、これのは、このといふに同じ、倭は、大和一國の名なれども、御國の總號になれるなり、日の本といふ名のゆゑよし、倭といふよしなど、くはしくかの國號考に見えたり、〇一首の意、百も千も國はあれども、この日本にまさる國はあらずとなり、

天地のそきへのきはみまぎぬとも御國にましてよき國あらめや

〇そきへは、天地の至れる限りをいふなり、はての所といはんが如し、〇まぎぬとは、まぎは、覓の字の如し、ゆき求むともなり、〇一首の意、天地の內ゆきはての所々まで、行て請ね求めたりとも、此國に勝りて、よき國はあらじとなり、

大穴牟遲少名御神のよろしくも造りかためし大やしま國

〇万葉集第七、大穴道、少御神作　云々とあり、猶集中に多し、古事記に、故大國主神坐出雲之御大之御前時、自波穗乘天之羅摩船而、內剝鵝皮剝爲衣服、有歸來神、爾雖問其名不答、且雖問所從之諸神、皆白不知、爾多邇具久白言、此者久延毘古必知之、即召久延毘古問時、答白此者神産巣日神之御子少名毘古那神、故爾白上於神産巣日御祖命者、答告此者實我子也、於子之中、自我手俣久岐斯子也、故與汝葦原色許男命爲兄弟而、作堅其國、故自爾大穴牟遲與少名毘古那、二柱神相並、作堅此國、然後者、其少名毘古那神者、度于常世國也、とあり、この二柱の神、相ならばして、此國を經營したまひしこと、なほ日本紀など、古書どもに見えたり、〇よろしくもは、不足ところなくの意なり、そもそも大八嶋國は、はじめ伊邪那岐命伊邪那美命二柱の、うみおき給ひつれど、黃泉の段に、吾と汝と作れりし國、いまだ作りをへずとありて、いまだ作竟へたまはざりつる所々を、此大穴牟遲少名御神の二柱、よろしく作堅めなし給へるなり、

きひづるや常世のからの八十國は少名毘古那ぞつくらせりけむ

○きひづるやは、からといふ枕詞なり、○常世とは、海をへだてゝ、いと遙に遠き國をいふなり、とこよは、ときへといふと同意の言なり、○からの八十國、からとは、西の方なる、海外の諸國をいふ名なり、もろこしにて、戎といふ文字、加羅國といふによく當れり、又漢をも、唐をも、韓をも、からとよむは、これらも皆、西なる國なればなり、○つくらせりけむは、造り給へるならむといふとなり、○もろ〳〵のから國は、その出來はじめ、物にも見えねど、上の歌に引いでたる、古事記の文をはじめ、此少名毘古那ノ神の、とこよの國に渡り給ひしと、日本紀に、其後少彦名命、行至熊野之御碕、遂適於常世鄕矣、亦曰、至淡島而緣粟莖者、則彈渡而至常世鄕、また伯耆ノ國ノ風土記に、相見郡郡家西北有餘戸里、有粟島、少日子命蒔粟莠實離々、即載粟彈渡常世國、故云粟島也、などあれば、まことに、加羅國どもは皆、此神ど經營し給ひつらんと思はるゝなり、○一首の意明らけし、

物みなはかはりゆけどもあきつ神わが大君の御代はとこしへ

○もの皆とは、世の中にあらゆる、萬の物皆といふなり、○あきつ神は、現神とかきて、御代々の天皇を申す、天皇は、すなはち神にてましませば、現世の神とまうすとにて、わが大君と申す詞に、かうふらせいふ詞なり、古き宣命の詞に、現神御宇天皇詔旨云々などあり、○とこしへは、いつまでもかはらぬとなり、○一首の意、萬の物皆は、世を經てうつろひ變りゆけども、わが天皇の皇統は、常しへに、かはらせ給ふとなしとよめるなり、

くに〴〵の君はかはれど高光るわが日の御子の御代はかはらず

○國々の君とは、海外の異國どもの王をいふなり、まづ近くはもろこしの加羅國は、いにしへよりよろづたらはぬ事なく、餘の外國にくらぶれば、よき國なれども、いにしへより國の主さだまらず、しば〳〵代の易れるを思へば、その餘の國々もみな、同じとゝしらる、○高光る日の御子と申すと、上にいへり、皇國の君は、天地のかぎりを照し給ふ、天照大御神の皇統にましますゆゑに、てんちのあらむか

ぎり、かはらせ給ふとなきなり、

天てるや月日のかげをしる國は本つ御國につかへざらめや

○天照るとは、御空をてり渡り給ふとなり、高光ると全く同意なり、○月日の影をしる國とは、月日の光を蒙りて、そのかたじけなき德を、しる國はといふなり、○もとつ御國とは、その月日の神の生出たまへる御本國にて、即この御國をいふなり、○つかへざらめやは、臣と稱してしたがふべき物ぞとなり、古事記に、息長帶日賣命の、韓國をうちたまひける時に、於是其國王畏惶奏言、自今以後、隨天皇命而爲御馬甘、毎年雙船、不乾船腹、不乾柂檝、共與天地無退仕奉 とあり、日本紀には、此事ここに委しく記されたり、万國の王ども皆、この新羅王の如くあるべき事なり、○一首の意、日月の尊くかたじけなき、御かげをしる國は、この本つ御國に、仕へぬといふとは、あるまじきことわりぞとなり、

もろ／＼のから國人も日の神のひかりしえずはいかにかもせむ

○上の歌、また次々のをも合せて心得べし、○光しのしは、助辭なり○下の句の意、この大御神の御光を蒙らずは、何とかすべきとなり、

さかしらに言擧はすれどから國もひるめの神のてらす國内を

○さかしらは、かしこだてなり、○言擧は、物を議論するとなり、あげつらふといふも同意にて、いひたつるといふとなり、○ひるめの神は、日の大御神の御名なり、○國内は、字の如くにてくぬちとよむなり、○はてのをは、なる物をといふ意なり、○一首の意、もろ／＼の加羅國は、各さま／＼に物の道理などを、賢げにこちたく言たつれども、その國々もこと／＼く、日の大御神の照し給ふ内の國なる物を、此日の大御神の道を知らざるは、いかにぞとふくめたるなり、

皇神の道しられねこそ言さへぐから國人はさかしらすなれ

○すめ神とは、神を尊みて申すなり、皇統の神をのみ申すといふ說あれども、然らず、○道しらねこそは、道を知らねばこそといふとなり、○さかしらすなれは、加羅國人は、測りても、測りしられぬ、天地の間の事どもをば、理を以

ていとよく知りがほに論ずるをいふなり、〇一首の意、神の道の實の傳へを知ねばこそ、加羅國人は己が私の智を以て、さま〴〵賢げにいふなれ、皇神のまことの道を知らば、その賢げにいへる事ども、ひがことあることは、しらん物ぞとなり、

天しるや日の大神の道をおきてよこさの道にまどふよのひと

〇天知るやとは、日の大神の天をしろしめすをいふ、〇道をおきては、さし置てなり、〇よこさの道とは、横様の道といふことにて、神の道の外に、おの〳〵一家をなしたる道道をいふなり、そは神の道の正しく直きにむかへて、正しからず直からざる故に、よこさの道といへるなり、〇まどふ世の人とは、正しく直き神の道のあるを、その道をさしおきて、正しからず直からざる異國の道々に、まどふ事よとなり、〇日の大神の道とは、御國の正しき道をいふ、かの初めつかたなる歌どもに、道は此道とある道なり、此哥かの歌どもと合せて心得べし、

明らけき日の大神の道しらぬからのさかしらきゝたつなゆめ

〇明らけきは、日といふもじにはかゝはらず、道といふへかけて心得べし、日の大神の道は、から國のさかしらにまうけ出たる道の如く、をぐらき所なき道なれば、明らけきといふなり、〇きゝたつなゆめ、此句のこと師のいはく、こは万葉四の巻に、汝乎與吾乎、人曾離奈流、乞吾君、人之中言、聞起名湯目、とあるによりてよめるを、後によく思へば、かの起の字は、超の誤にて、聞超名湯目なり、十一ノ巻にも有超名湯目とかけり、然ればこゝも、聽許須那由米と改むへきなりといはれたり、聽入信用することなかれといふことなり、〇一首の意、日の大神の明らけき道をしらざる加羅人のさかしらごとをばゆめ〳〵聽いるゝことなかれとなり、

外國はかみ代のつたへなければこそまことの道をしらずありけれ

〇とつくには、字の如く外國なり、〇なけれこそは、無ければこそなり、御國ならぬ外國は、すべていづれにも、神代のつたへ說の無き故に、正實の道をば知らずして、さまざま私の賢げなる、さかしら說をいふなりとよめるなり、次

の哥あはせて心得べし、

くに〳〵に傳はあれど日の本に本のまことのことはつたはる

○外國にも、それ〴〵上代よりいひ傳へたる說はあるなり、もろこしの國にては、盤古氏の左右の眼、日月となるといひ、或は女媧氏、五色の石をねりて、天地の缺たるを補へりといふたぐひ、また天竺にて、佛の經論どもに、さまざまの事どもをいへる中にも、その國の上代よりのいひ傳へとおぼしき事どもゝあるなど、猶その餘の國々にも、おのおのかたりつたへたる事あるべし、しかれども、もろ〳〵の外國どもの、さやうの傳說は、皆正しからずまことにあらず、たゞ正しき實の根本の傳說は、日の大神の御本つ國なる、此御國にこそつたはりたれとなり、その正しき實の傳說といふは、古事記の上卷、日本紀の神代卷にしるされたる事ども、是なり、

上つ代のかたちよく見よいそのかみ古事ぶみはまそみのかゞみ

○形とは、ありさまといふに同じ、○石上は、古といふことの枕詞なり、○まそみの鏡は、まそかゞみといふに同じ、人の形などの、鏡の面にうつりて、ありありと見ゆるが如く、古事記を見れば、上代のありさまの、まさしく見えしらるゝをたとへていへるなり、ふることぶみは、古事記なり、此記はもと、天武天皇の大御口づから、天地の始より、天つ日嗣の御代繼のありさまなどの、古事を、稗田阿禮といふ人の、わかきほどに、いひをしへさせ給ひて、口によみうかべしめたまひつるを、元明天皇の御代和銅四年に、その稗田阿禮といふ人の、口に空によみつゝ、おぼえたるまゝを、太朝臣安萬侶といふ博士に、書しるさしめ給へるなり、日本紀は、文章、漢籍のふりをしひてまねたれば、古意にたがへることゞも多くまじれるを、この古事記は、御國言辭のまゝに、ありのまゝをしるして、いと正しき書になんありける、故に此書をよく見よとなり、

まつぶさにいかでしらましいにしへをやまと御書の世になかりせば

○まつぶさは、具にといふなり、まの字を添るは、古言のつねなり、○いかでしらましは、何として知べきぞとなり、○やまとみふみは、日本紀なり、日本紀は、元正天皇養老

四年、舍人親王、勅命を奉りたまひて、撰錄し給へるなり、上代の古事どもつぶさにしるし給ひて、古事記よりは、こよなく廣く、詳なり、上代のありさまを、こまかに知べきは、此日本紀なり、されば此御書の、世にある事は、いと〳〵尊きなり、○一首の意、句の次第を置かへて、四五三一二と心得べし、

神の代の事らこと〳〵傳へ來てしるせる御書見ればたふとし

○事らは、事どもなり、○こと〳〵は、盡なり、○つたへ來ては、神代よりいひ傳へ語りつたへ來てなり、○しるせる御書は、そのいひつたへ語り傳へ來たる事等を、錄せるなり、御ふみは、是は古事記日本紀を合せていふなり、○一首の意、神代の事どもを、その傳のまゝにこと〳〵く記錄したる、この御書どもを見れば尊しとなり、

まそ鏡見むと思はゞからことの塵ゐくもれり磨てしよけむ

○上の歌によりて、日本紀古事記をさして、まそ鏡とよみなせるなり、まそ鏡は、万葉の古歌どもに、つねによめるは、たゞ見といふ枕詞におきたるを、こゝにては然らず、二の御書をたとへて、鏡といへるなり、○からことの塵ゐくもれりとは、代々の識者の、二書を注釋したるは、漢籍の意義をもて、神代の事等を、或は陰陽五行などに配當し、或は天上の事は、倭の都にてありし事とし、又海神宮の事を、對馬國なりとも、琉球國なりともいへるたぐひ、其外の事等にも、皆漢意を以て解る故に、實の古意はかくれて顯れざると、たとへば鏡に塵のかゝりてくもれるが如くなるをいふなり、されば其の漢意の說を、とりすて磨みがきて、古意をまさしく見出づべしとなり、○磨てしよけむは、磨て見るがよからむぞとなり、磨てしのしは助辭なり、

しるべすと醜のものしりなか〳〵によこさのみちに人まとはすも

○しるべすとは、しるべをするとてなり、教へ道引をいふなり、○醜のものしり、物知りは、今の俗にいふも同じく、識者をいふ、醜は、万葉集中に、しこのしこ草、しこほとゝぎすなど多くよみたる、みなその物を、にくみきらひていふ詞なり、○なか〳〵には、なまじひと同意なり、俗にはなまなかといふ、○人まどはすもは、もは、輕くこゝろ

うべし、よなこいふ意なり、万葉集中に、鶯なくもなご多くあり、人を惑はすこは、外國の道々の書の意もて、御國の古書の注釋をなして、教へ道引キて、人を惑はすなり、〇一首の意、しるべをすこて、わろき物知り人等が、なまじひに、横さまの道にをしへおもむけて、人を惑はすよこなり、

さかしらに神代の御書ときまげて漢のこゝろになすが悲しさ

〇さかしらは、上に出たり、〇こきまげては、文義のまゝに、眞直には說かずして、漢籍ごもの意を以て、牽强附會して、横樣に枉げてこくをいふなり、〇漢のこゝろになすがかなしさは、神代の古事ごもを、漢意にこりなすを、深く歎けるなり、〇一首の意、代々の注者、さかしら心にて、神代の御書の、古傳說をば、强て漢籍の意義に說き枉げて、皇國の古意をうしなふが悲しこなり、

からごゝろなしと思へど書らよむ人のこゝろはなほぞからなる

〇書等は、もろ〳〵の書籍なり、〇猶ぞからなるこは、書ごもを讀むほごの人は、われはからごゝろなしこ思へごも、

やつはり、から意なりこいふなり、そも〳〵歌よみ或は古學するひこの、やゝ古書の義を會得して、われは漢國風は信ぜず、漢意なしこおもへる人も、なほ漢意の習染ははなれがたきなり、學問する人は、十人が九人までは漢意なり、たこへば、わが國は神國にて、皇統のここしなへにつゞき給ひ、稻穀の殊に美好なるなご、いこ〳〵尊き國なり、加羅國ごもは、風土あしく、人心さかしだちて、いやしき國なりなごまでは、わきまへながら、神代のありさまの奇異なる事ごもを記せるを見ては、猶こやかくやこうたがひまごひて、高天の原の事、夜見の國の事、綿津見の宮の事、また今目のあたり天てらす日は、伊邪那岐ノ命の御禊によりて生出ませる天照大御神なるここ、又たゞ今天ノ下しろしめす天皇は、すなはちあまてらす大御神の御子孫なるとなごをば、猶疑ふたぐひあらん、これみな漢意のはなれぬ故なり、道にこゝろざしあらむこもがらは、よく〳〵おのが心をかへり見て、漢意をはらひ淸むべし、これ古學の緊要なり、

からごゝろなほしたまへと大直毘神のなほびをこひのみまつれ

○大なほび神の直びは、大直びのと、のをそへて心得べし、古事記に、伊邪那岐ノ命の御禊の段に、次爲レ直二其禍一而、所レ成神名、神直毘神、次大直毘神、次伊豆能賣神とあり、世間のよろづの、あしき事を、吉に直し給ふ神なり、されば人の心に染みつきて、離れがたく退りがたき、漢意を直し給へと、大直毘神のなほびを、こひ願ひ奉れとなり、直毘をこひのむとは、物直し給ふ神靈を祈りねがふなり、

伊豆のめのいつのみたまを得てしあらばからのまがれる事さとりてん

○いづのめは、上の注に引出たる、伊豆能賣神なり、○いづの御靈は、清淨明白なる神靈をいふなり、○えてしあらばは、しは助辭にて、得たらばなり、○からのまがれる事とは、漢意の直からず、物を強たることをいふなり、○一首の意、直毘ノ神に祈り願ひて、その直毘の神靈によりて、伊豆能賣神の清淨なる御靈を得たらん物ならば、その時ぞ、漢意のわろき事をばさとるべきとなり、

久方の天つ月日の影は見じからのこゝろの雲し晴ずは

○ひさかたは、天の枕詞なり、○雲しのしは、助辭なり、○一首の意、雲霧におほはれては、天つ月日の影の見えがたきが如く、漢意にうばゝれては、皇國の明らけき、古傳說の意を、えわきまへさとらじといふたとへなり、四の句にて、そのたとへのこゝろをしらせたり、

からぶみのさぎりいふせみしなとべの神のいぶきの風まつわれは

○さぎりは、たゞ霧なり、さは眞と同じく、そへいふ詞なり、○いふせみは、雲霧の氣氳とおほへるが、もや〳〵としてうつとしさにといふなり、○しなとべの神は、古事記に、風神志那都比古神、日本紀に、伊弉諾尊、曰二我所生之國唯有朝霧一而薫滿之哉、乃吹撥之、氣化爲神號、曰二級長戸邊命一、亦曰級長津彦命是風神也とあり、○神のいぶきの風とは、風はみな、しなとの神の吹息なればいふ、大祓ノ詞に、科戸之風乃、天之八重雲乎、吹放事之如久、朝之御霧、夕之御霧乎、朝風夕風乃、吹掃事之如久などあり、○一首の意、からぶみの說、天下にみちひろごりて、雲霧のごとくおほへるが、いふせくわづらはしきによりて、われは神の息吹の

風をまつとなり、神の御息もて、うるさきからぶみの說どもを、ふきはらひ給はむことを、まつなり、

下にごるから書川はとこなめのかしこき川ぞあしふむなゆめ

○したにごるは、うはべは澄たるやうにて、底のにごれるなり、○からぶみ川とは、漢籍を、川にたとへていふなり、○とこなめは、川の底なる石に、なめらかなる苔のごとき物の、あるをいふなり、○かしこき川は、おそろしき川なり、○足ふむなゆめとは、ゆめ〳〵、そのとこなめを、ふむことなかれとなり、そも〳〵、漢籍といふ物は、うはべは、文章うるはしくて、見事に見ゆれども、實は、直からずしひたることおほく、又うはべをかざりて、內心には、邪曲をいだける事おほし、されば、見る人の心まで、おのづからそれにうつりて、邪智を生ずるなり、それを、下にごれる川の常滑を、ふみてすべりて、水中にたふるゝにたとへたるなり、万葉十一に、こもりくの、豐泊瀨道は、常滑の、恐きみちぞ、こふらくはゆめ、此哥の姿詞をうつされたり、○一首の意、漢籍川は、下にごりて、常滑にすべりたふる、おそろしき川ぞ、心せよ、淸き川ぞとおもひて、ゆめゆめあやまちすなとなり、

きもむかふ心さくじりなか〳〵にからの敎ぞ人あしくする

○きもむかふは、こゝろの枕詞なり、○さくじりは、こざかしくて、大やうならぬをいふなり、俗にこましやくれといふにおなじ、○なか〳〵には、なまじひになり、漢の敎てふ物は、人をよき方に道引くべくたてたる物なれども、あまりに瑣細に物を議論し、理非をきはやかにし、私智をふるふからに、人よりはわれ賢こからんと、あらそひて、かへりて人の心をあしくすとなり、

みくにはし日の神國と人くさの心もなほしおこなひもよし

○みくにはしのしは、助辭なり、○日の神國は、日の神の生出たまへる御國なり、とはとての意なり、○人草は、上に出たり、○漢くになどは、人の心姦邪にしてその行ひ、正しからず、御國はもと人民の心直くして、おこなひも正しかりしなり、中にはあしき行ひする者も、なきにはあらざりしかども、漢國にくらべては、いと〳〵まれにて、又そ

の暴悪も淺く直かりしなり、

からざまのさかしら心うつりてぞ世人のこゝろあしくなりぬる

○上代は人の心直く正しくして、万の事穩かに安らかなりつるを、漢國より書籍のわたりまゐり來て、それをよみ習ひ學ぶことはじまり、やう〳〵に盛になりゆき、天の下にひろごりわたり、上下こぞりて、かの國のしわざを、まねびならふから、おのづから、人の心も、おこなひも、その漢國のさかしきにうつり來て、數百年の世をふるまゝに、かの悪風俗の染習して、世人の心、いにしへには大にかはりぬるなり、

日の本のやまとをおきてさつ國にむかる心はなにのこゝろぞ

○日の本は、枕詞ながら、日の大御神の御本國といふ意をも、ふくめておかれたりと見ゆ、○さつ國は、上にいへり、○むかる心は、あふぎ向ふ心にて、佛者のいふ、歸依の意なり、万葉に、むかしくもあるかなどもよめり、敵となりて向ふにはあらず、さて此詞は、万葉の東歌に、つくしべに、敝牟加流布禰乃といへる、むかるに同じ、世の人、外國の王を、天子といひて、尊き物に思ひ、その國を、中華中國などいひて、御國をば、いやしめて、みづから、東夷となどゝいふたぐひさへある、これ外國にむかる心なり、○一首の意、日の本のこの尊き御國をさしおきて、いやしき漢國をあふぎ尊む心は、いかなる心ぞとなり、

言擧せぬ國にはあれどもまがことのことあげこちたみ言擧すわは

○言擧とは、物を論じいひたつることなり、ことあげせぬ國とは、何も物をかしかましくろんじ、いひたつることなき國といふなり、○まがことの言擧は、道の害になる、邪僻の諸説をいふなり、又儒者などの、ひたすら皇國を貶しめ、神をかろしめ、天皇をたやすく申し奉りなどするも、みな道にそむける、枉說なり、○こちたみは、言痛と書て、好ましからぬ事のあやにくにしげきやうの事をいふ詞なり、こちたみのみは、こちたさにといふ意なり、俗にいはば、うるさゝになどいふが如し、○ことあげすわは、論辨すわれはなり、万葉十三、蜻島、倭之國者、神柄跡、言擧不爲國、雖然、吾者事上爲、天地之、神毛甚、吾念心

不知哉、云々また葦原、水穗國者、神在隨、事擧不爲國、雖然、辭擧叙吾爲、云々などあり、〇一首の意、皇國は、物をこちたく論ずることなき國なれども、邪說の論が、あまりやかましう、うるさゝに、やむことを得ず論辨することなり、此百首の歌ども、すなはちこの言擧なり、

まがつひい世人の耳かふたぐらむ眞事かたればきく人のなき

〇まがつびは、古事記に、伊邪那岐命の御滌の段に、初於中瀨隨迦豆伎而滌時、所成神名、八十禍津日神、次大禍津日神、此二神者、所到其穢繁國之時因汚垢而、所成之神者也と見えて、かの黃泉のけがれより、生出給へる神にて、世のなかの凶惡は、みな此神のなし給ふなり、〇世人の耳かふたぐらむとは、世上の人の耳を、塞ぎたまふかしてといふなり、耳をふたぐとは、聞人のなきといふにつけての詞のみにて、意はたゞ此神のさまたげて、きゝ入れせぬやうにし給ふかといふとなり、まことに世の人の、古學の尊きことを聞いれぬは、此神のさまたげ給ふなり、〇眞事かたればは、神代の古傳のまゝに、眞實の意をかたりきかすればなり、〇さるは、世の物しり人の、神代の書をとくに、漢意を附會して、解き聞すに對して、さやうのつけそへごとなく、古傳のありのまゝに、解きゝかす、といふとなり、〇禍津日いのいは、人の名などの下に附ていふと、古言に多くあることなり、某よとよび出る意もあるなり、續日本紀の宣命におほし、萬葉集にもあり、〇一首の意、禍津日ノ神の、世人の耳を、塞ぎたまふやらむ、神代の眞實をかたりきかすれば、きゝいるゝ人のなきことなり、

あやしきはこれの天地うべな〱神代はことにあやしくありけむ

〇これのとは、此といふに同じ、〇うべな〱は、諸の字にて心得べし、俗に、なるほどげに〱といふ意なり、〇よにあやしき物は、この天地なり、いま現に、かく奇々妙々なる天地なれば、此天地の出來はじまる神代は、又ことに奇々妙々なると多かりけんも、げにことわりなりといふなり、〇あやしくありけむは、俗にいはゞ、あやしく有ッたであらうといふ意なり、さてかくよめるは、世の人の、神

代のさま〳〵のあやしき事どもを、有まじき事と思ひて、うたがふ故に、さやうに疑ふは、かへりて愚なることゝいふ意を、さとしたるものなり、

しらゆべき物ならなくに世の中のくしきことわり神ならずして

○しらゆべきは、しらるべきといふに同じ、○くしきことわりは、奇妙なる道理なり、神代の事よりはじめて、すべてこの世間の道理といふ物は、いと〳〵奇妙なる物にて、いかにとも人の小量なる智にてはしられぬなり、○結句は、神ならずしては、しらるべきにあらずと、上へかへる詞なり、

しるといふはたれのしれものはかりても世のことわりは底ひなき物

○しるといふは、たれのしれものといふは、知て居るといふは、何といふ愚癡の人ぞといふ意なり、しれものは、癡人といふことなり、たれとは、尤めていふ詞なり、○はかりてもは、いかほど工夫し考へてもなり、○世のことわりは、上の歌に、くしき理とあると合せて、くしき世の道理はと心得べし、○そこひなきものは、限りなき物ぞといふに同じ、かくよめるは、己が智慧を以て、世の中の理を、測りしらむとするとの、愚なるをいふなり、

くすはしきことわりしらずて漢人の物のことわりとくがはかなさ

○くすはしきは、くすしき、くしきなどいふみな同言にて、奇妙なる意なり、○ことわりしらずては、天地の間の事は、すべて奇妙なる理ある事をばしらずして、かしこげに物のことわりをとくは、はかなく愚なることぞとなり、

あやしきをあらじといふは世の中のあやしきしらぬしれ心かも

○神代のさま〳〵のあやしき事などを、から心の人は、神代とても、さやうにあやしきことにてはあらじと疑ひ、すべて世にあやしき事は、無き理なりと思ふは、いとあやしき此世間に在りながら、そのあやしきをしらざるからの、愚なる心ぞとなり、○しれ心は、癡心なり、そも〳〵この世間の事は、人の、目にて物を見、口にて物をいひ、耳にて物をきゝ、手足の物とり道ゆくやうの事までも、一つとしてあやしからぬはなきを、それをしらずして、世にあやしき事はなき理なりと思ふは、まことにしれごゝろなり、

さかしけど人のさとりはかぎりあるを神代のしわざいかではからむ

○さかしけどは、賢しけれど丶いふとなり、さかしは、賢きなり、人の智といふ物は、何ほど賢くても、限りある物なれば、神代のしわざの、奇妙靈異なる理は、いかでかよく測りしらんとなり、

人みなの物のことわりかにかくに思ひはかりていふはからこと

○人みなは、皆人といふに同じ、○かにかくには、とやかくやといふに同じ、○からことは、漢流の説をいふなり、世の人、何事につけても、それはかやうかやうの理にて、しかり、これは、かやうの理にて、然りと、まづその理を、とやかくやとさだめいふ、そはみな漢國の風俗にて、から說なり、すべてのと、その理は實はしれぬことなれば、大やうにて、何となく心得おくぞ、御國のいにしへの意なりける、

つたへなき事はしるべきよしもなししらえぬことは知ずてをあらん

○しらえぬは、不所知にて、知られぬといふとなり、○すべて、神代よりの傳說ありて、古書に見えたる事は、その說の如く、心得べけれど、傳へなくして、古書に見えぬ事は、いかにとも知るべきよしなきなり、然るを、そのしりがたき事をも、しひてしりがほにいふは、例のから風なり、

○をあらむのをは、助辭のごとく、そへいふ詞なり、

つたへはしなくとも似たるたぐひあらば外になぞへてしることもあらむ

○傳へはしのしは、助辭なり、○なぞへは、なぞらへなり、○上の歌につゞけて心得べし、○古事記、日本紀、その外の古書にも、たしかにつたはらぬ事も、大かたよく似たる事あれば、それに准らへて、しるべき事もあるべしとなり、此歌などは、古書を考へとくためのをしへなり、

世のなかのあるおもぶきは何事も神代のあとを尋ねてしらゆ

○あるおもぶきは、万の事のありさまをいふなり、○神代の跡は、事跡なり、○たづねてしらゆは、神代にありし跡を、尋ねてしらるとなり、すべて世のなかの事は、國の治亂盛衰、人の吉凶禍福、その外よろづの事の、筋道はこび、皆神代にありし事跡の趣に、全く同じくしてかはることなし、然れば、世間の万の事の筋みち運びを知むとおもはゞ、

神代の事跡の、おもぶきはこびを考へて、しれとなり、

まろ〳〵のなりづるもとは神むすびたかみむすびの神のむすびぞ

○なりづるもとは、成出る源なり、人類の生れいづる事、万物の出來ること、万事のいでくる事などをいふ、○神産巣日、高御産巣日神は、古事記に、天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、次高御産巣日神、次神産巣日神とあり、物を生ぜしむる靈の神なれば、かく御名つき給へるなり、むすは、苔のむすなどいふむすにて、物の生するをいふ言なり、神代のはじめにあらはれ給へる神にて、世の中にあらゆる事のおこりは、みな此二神の御靈によりて、成出るなり、その物を生じ給ふ神靈をさして、むすびといふなり、日本紀に、産靈と書れたり、

あらはにの事は大きみかみごとは大國主のかみのみこゝろ

○日本紀に、大國主ノ命の、この葦原の水穂の國を、天つ神の御子に、避奉りたまひし時の、御詞に、吾所治顯露事者、皇孫當治、吾將退治幽事とあり、○あらはにの事とは、現在世人のなすわざをいふ、さて別に、誰がなすわざともしられずして、世におこなはるゝ事を、かみ事といふ、人の生死禍福、國の治亂吉凶などのたぐひなり、○あらはにの事は大君とは、現在人のなすわざは、天皇のしろしめすよしなり、天皇の、この天下を治めたまひ、万の事をまつりごち給ふ、これ顯露事なり、○かみごとは大國主の神の御こゝろとは、かの誰がなすわざともしられずして世に在る事は、みな大國主の神の御心もて行ひ給ふなり、○一首の意、あらはにの事は、天皇のしろしめす事ぞ、目に見えぬ神事は、大國主ノ神の御心より、おこるものぞとよめるなり、

目に見えぬ神のこゝろかみごとはかしこき物ぞおほにな思ひそ

○神の心のかみごととは、上の歌なる、大國主ノ神の御心もて行ひ給ふかみ事をいふ、そは、誰がなすわざと、あらはにはしれぬとなる故に、目に見えぬといふなり、かみごとを、日本紀に、幽事とかゝれたり、○かしこき物ぞとは、おそるべき事ぞとなり、○おほにな思ひそは、おろそかに思ふなといふなり、○一首の意、目に見えぬ神の御しわざ

は、一きはことにおそろしき物なり、おろそかに思ふべからずこなり、しかるに、後世の人は、みな漢意にて、物の理窟をのみいひて、神事のおそろしきここをしらざるは、いこかなしきわざなり、

世のなかのよきもあしきもことぐに神のこゝろのしわざにぞある

〇世間に、吉事の出くるも、凶事の出來るも、皆ことぐくに神の御心よりおこりて、しかせしめたまふぞこなり、おそるべきここなり、

よきことにまがことといつぎまがことはよき事いつぐ世のなかの道

〇よき事は吉事なり、〇まがここは、凶事なり、〇いつきは、繼こいふ言に、いもじをそへたるなり、万葉に、いつぎいつぎこあり、〇世のなかの道、この道こいふも、かのはじめつかたの歌に、道はこの道こあるに同じ、〇一首の意、世間のありさまをよめるなり、まづ神代の事の次第、すべて吉事より悪事出來、また惡事より吉事になるなり、さて人の代こなりても、代々に吉事凶事のかはるぐはこびゆく次第も、神代の事の如く、此理にしたがふこいふことなし、

世のなかはよことまがことゆきかはる中よぞちどの事はなりづる

〇よごこは、吉事なり、〇中よぞこは、中よりぞこいふこなり、よりをよこもゆこもいふなり、〇ちどのは、さまざまのなり、〇なりづるは、成出るなり、吉事こ凶事、こゆきかはりゆきかはりする中より、世の事ごもは、何事も出くるぞこなり、たこへば、年のうち、寒暑温凉の往來する間に、田穀も草木も生育するが如し、

ことわりのまゝにもあらずてよこさまのよきもあしきも神の心ぞ

〇横樣のよきあしきこいふは、あるべき當然の理にたがひて、吉事もあり、又理にたがひて、凶事もあるをいふなり、たこへば、善人の禍にあひ、惡人の福を得るたぐひなり、禍福のこと、すべて道理のごこくにはあらで、思ひの外なる物なり、かくはあるまじき理ぞこ思へごも、それも、神の御心より出くるここなれば、あらそひがたし、そはよき神の然せんこおぼす事も、その神の御心にも叶はず、他のあしき神のみこゝろなごに、まけたまふこともあるゆゑなり、

もゝたらず八十まがつひのまがことゝよきをきらへやよき人よくせぬ

〇もゝたらずは、八十といふ枕詞なり、八十とは、數の多きをいふ、〇まがこゝのごは、ことゝいふ意なり、〇よきをきらへやは、吉事を嫌へばにやといふなり、〇よき人よくせねは、善人を吉せぬなり、よに善事をなす人には、万の福きたりて、富貴安樂なるべきを、その道理にはゆかず、善人も不幸貧窮のみにてあるなごは、みな禍津日神の御しわざなり、又これに准じて、惡人の福あるも、此神の御しわざなる事をしるべし、〇一首の意、禍津日ノ神の禍わざにて、世上の吉事をきらひ給へばにや、よに善事をなすよき人を、よくもあらしめぬことゝめるなり、

よき人をよにくるしむる禍津日の神のこゝろのすべもすべなさ

〇世にくるしむるのよには、詞なり、世にもかなしく、よにもうれしくなごそへいひて、その事の意を深くする詞なり、〇すべもすべなさは、すべなきは、何とも爲べきてだてもなきをいふなり、二つかさねいふは、つよくいふなり、こも／＼儒佛なごの教には善を行ふ人には、福祐をあたへ、榮えしむるやうにいへれども、その理のごくはあらぬ物なり、これ世の中の事は、みな神の御しわざにて、神には善神惡神のまし／＼して、世の中の事をも、人の身の上をも、はからひ行ひたまふ物なればなり、

天てらす大御神すら千早ぶる神のすさびはかしこみましき

〇天照大御神すらのすらは、大御神でも、大御かみさへなごいふが如し、〇千早ぶるは、いちはやぶるにて、荒ぶるとなり、〇神のすさびは、あらびて惡行をなし給ふをいふなり、こゝは須佐之男神のすさび、あらび給ひて、さまざまの惡行をせさせ給ひし事なり、〇かしこみましきは、おそれ給ひしなり、須佐之男神のあらび給ひしには、世に又なく尊き、天照大御神すら、何ごともせさせたまふべきすべなくて、おそれて、天の岩屋にさしこもり給ひしなり、此事神代の、磐屋戸のくだりにありて、古事記傳にくはしくときおかれたり、ひらき見て知べし、されば、善神の御心には、善人をよくし、惡き人を凶くせんとおぼしめしても、惡神のあらび盛なれば、善神の御心にも任せ給ふことあたは

ず、故に世の中には、理にかなはざる吉凶のあるなり、これ尋常の理を以てはいひがたきとなり、

おふけなく人のいやしき力もて神のなすわざあらそひえめや

○おふけなくは、力に應ぜぬ、重き物を負持んとする如く、己が分際に過たることをするをいふ、俗に大膽なといふ意なり、神は尊きもの、人は卑きものなるに、そのいやしき人の分際として、神の御しわざに押勝んとあらそふ、これ負氣無きなり、○あらそひえめやは、爭ひ得べからずといふ意なり、○一首の意、人たるものゝ、わづかなる力をもて、おふけなくも、神の御しわざに、勝んとあらそふとも、つひにあらそひ得じとなり、これから意の人の、己が理窟をたてゝ、神の御しわざに、勝んとするを、いましむるこゝろなり、

あぢきなき何のさかしらたまぢはふ神いつかずておほろかにして

○あぢきなきは、無益といふことなり、○さかしらは、賢だてをするなり、○たまぢはふは、神の枕詞なり、千早振といふとは、反對にて、ちはやぶるは、神のあらび給ふか

た、これは、神の靈の、人に幸ひし給ふことをいふなり、古今集このかたの歌には、神といふ枕詞には、たゞ千早ぶるとのみいへれども、いにしへは、靈治波布ともいへるなり、○神いつかずて、いつくとは、祭祀して、重じうやまふとなり、○おほろかにしては、おろそかにしてといふに同じ、世には賢だてをして、わが心だに正しく、正直なれば、神は見通しにしろしめす道理なれば、あながちに祭り祈らずとても、神の加護はあるなりといひて、神を重んじ敬ふこともせず、なほざりにし奉るものもあるなり、そはみなさかしら心より出くることにて、いとあぢきなく、あるまじきとなり、されば、それをいかなる心ぞやとことがめたるなり、○一首の意、いつきうやまふべき神を、いつきうやまはずして、おろそかにして、たゞ己が理窟のかしこだてばかりをするは、何事ぞ、無益の賢だてかなといふ心なり、

いざ子どもさかしらせずて靈ぢはふ神の御しわざたすけまつろへ

○いざ子等とは、人々を率ひたつる詞なり、子どもとは、

小児をさしていふにはあらず、門人従者などやうの、己が率たる者をさしていふなり、万葉にも、古事記、日本紀の歌にも、多くよめる詞なり、○助けまつろへ、助とは、神の御しわざをこも〴〵力をそへて、助奉るなり、たとへば、神の人に幸をあたへ給ふやうの事を、我もこも〴〵力をそへて、その事を助けなすやうの意なり、まつろへは、まつれなり、したがひ仕ふるをいふなり、○一首の意、人々賢だてをやめて、神の御心にしたがひ、神の御しわざを、助け仕へまつれと、人をすゝめいざなへるなり、

をぢな[illegible]思ひて神といへども人にかたずといふはおほかたさ

○をぢなきは、弱く拙くいやしきやうの意なり、こゝは、をぢなき神をいふなり、まくる思ひては、そのをぢなき神の、たま〳〵人に負たまふことのあるを思ひてなり、そもそも神は大かたは尊くおそろしき物なれども、中にはよわく、微しき神もあれば、よに心たけく剛強なる人は、その神をも、何とも思はぬに、たま〳〵かのをぢなき神は、さる剛強なる者には、まけて、え祟りなどもせぬ事のあるは、

神の中にも、弱く拙く微しき神なればなり、○一首の意、よわくつたなき神の、事によりては、人にもえ勝たまはぬとのあるを、手本にして、惣躰神といへども、人に勝ことあたはずと、思ひさだむるは、神にも、尊卑強弱のあることを、わきまへぬ、愚なる心なりとよめるなり、以上四首は、例のかの風の理窟をいましめたる歌なり、

神といへばみなひとしくや思ふらん鳥なるもあり虫なるもあり

○一首の意、神といへば、いづれの神も皆同じことに思へるか、そはひがことなり、神にはさま〴〵ありて、鳥なる神も、虫なる神もありて、品々のあることぞとなり、猶次の歌に合せていふべし、

いやしけどいかづちこたまきつねとら龍のたぐひも神のかたはし

○鳥獣虫魚のたぐひまでも、あやしくくすしき勢ひしわざある物は、みな神なり、○雷はもとより、鳴神とて神なり、○こたまは、和名鈔に、樹神ともかけり、俗にいふてんぐのことなり、天狗といふはもと星の名なれども、こゝにては俗にいふ天狗なり、また俗にこたまといふは、山中などにて、物のこゑのひゞきこたふるを、こたまといへど、それにはあらず、それはむかしは山彦といへり、又俗に、高神

ともいへり、など狐狸熊狼虎豹龍蛇の類みな神なり、虎を万葉集に、韓國の虎ちふ神とよみ、日本紀欽明ノ卷に、威神といへることもあり、狼をも同じ卷に、貴神とあり、又万葉に、大口の眞神之原とよめる歌どもゝあるは、狼をいにしへ、眞神といへればなり、神代卷に、素戔嗚尊、蛇を、可畏之神とのたまへるともあり、これらみな神にはあれども、微しく劣れる神なり、○いやしけどは、賤しけれどゝいふことなり、○神のかたはし、今の俗にも、某の片端といふに同じ、清少納言枕双子にも、木のかたはしのやうにといふ詞あり、神の中にも、いと賤しき神なる故に、片端といふなり、

さかくじも神にしあればその道も廣けき神の道のえだみち

○さかは、釋迦、くじは、孔子なり、字音なれども、古代より世の人のつねにいひなれて、歌にも、物語ぶみにも、をりをり見えたり、釋迦は、佛道の元祖にて、はるかなる西の方の國に出たる人なれど、その道のひろく行れて、世人にあまねく尊信せらるゝは、すなはち神なり、孔子も、から國の人なれども、世人にすぐれたる人にて、代々の人にたふとまるゝは、すなはち神なり、○神にしあればのし。は、助辭にて、神なればといふことなり、さてその儒佛の二道も、その神たる人の、敎へたる道なれば、即これも神のみちのかたはしの枝道なり、廣けき神の道とは、かくの如く外の道々もいひもてゆけば、皆神の道の內なれば、神の道はいと廣きなり、

いつくべき神たちおきて外國のけしき神をらいつくもろ人

○いつくとは、上にもいへる如く、祭祀崇敬することなり、○おきてはさしおきてなり、○外國は、字の如し上にもいへり、○けしきは、異の字を書て、御國の皇神たちとは、異なる神をいふ、そもそも、世の人、よしなき、外國の人、或は佛、菩薩などをのみ尊信して、いつき奉らではかなはぬ、己が國の皇神たちをば、さしおきて、まつらぬをいふなり、

玉鉾百首解下卷

たなつ物もゝの木草も天てらす日の大神のめぐみえてこそ

○稲穀は、いふもさらなり、野山に生たつ、もろ〳〵の木草まで、みな天つ日の御めぐみをかうふりて、成長蕃茂するなり、日影のあたらぬ物の蔭などにては、何となき草も、え生さかえぬにてもしるべし、○めぐみ得てこそ、こそにてとまりたるは、いひのこして、詞の外にこゝろありて、めぐみを得てこそ、成就して生榮ゆれといふなり、

朝よひに物くふごとに豐宇氣の神のめぐみをおもへよのひと

○朝よひは、朝夕なり、○豐宇氣神は、よにことにいつきまつるべき神なり、食物は、皆この大神の御靈によりて出くるなり、そも〳〵、朝夕の食物といふ物、よに絶えて無らんには、天のしたの、人の命は繼ぎがたきなり、命のなからんには、天下は常闇もひとしきなり、伊勢の外宮に、この大神をいつき奉るも、天照大御神の御心よりおこりて、大御神の宮ちかくましまさしめて、万の神事も、大御神の宮にことならず、いつきまつらしめ給ふこと、大御神の、重くいつき祭らせたまふ御食神にましますなり、

天地の神のめぐみしなかりせば一日一夜もありえてましや

○神のめぐみしのしは、助辭なり、○有得てましやは、あられはすまじといふことなり、人の世にあるほど、何事によらず、神の御惠にかゝらざる事は一つもなし、神の御蔭をかうふらでは、一日片時も、在得べからざるなり、さて上に、伊勢の兩宮の大神の事をあげて、次に此歌に、天地の神の云々とあるは、かのふた宮の外にも、必いつき奉らでは叶はぬ、神たちの、多くましますことを思はせたるなり、

八雲たつ出雲のかみをいかに思ふ大國主を人はしらずやも

○やくもたつは、出雲の枕詞なり、○出雲の神は、杵築大社なり、○大國主をとは、たゞ大國主ノ命といふ御名をいへるのみにはあらず、これは葦原の中つ國、天ノ下を、經營しうしはき領じましませし、國の主たる神なる物をといふ意なり、この大神の、國の主とまし〳〵けると、古事記日本

紀にくはしく見えて、天の下の人、みなこの恩頼を蒙り奉るといふもさらなり、〇人はしらずやもは、人はしらぬかこいふ意にて、世の人々、かく尊くおもき神にてましますを、それこもしらすにゐるとかこ、深くこがめたる詞なり、〇一首の意、出雲大社の神をば、世の人々はいかに心得て居るぞ、此神は、天下を經營したまひ、領知し給ひし、國のあるじ、大國主ノ命にましませば、天下の人、必いつき奉らでは叶はぬ神なる物を、それこはしらぬかこいへるにて、世の人の、出雲の大社を、必尊敬し奉るべきとを、しらざるとを、深く歎きてよまれたるなり、

いのちつぐくひ物きものすむ家ら君のめぐみぞ神のめぐみぞ

〇いのちつぐは、命をつゞくるなり、〇めぐみこは、御かげこいはんが如し、神にもあれ、主君にもあれ、親にもあれ、上たる方より、下たる者を慈惠して、あたへ給ふ恩德をいふなり、あたゝかに服、飽まで食ひ、雨露をおほひ、安く住み、やすく寐るは、人々おのが力もて、然るこ思へるか、皆これ、天地の神のしからしめたまふなり、さて天下の万民、君の御惠を蒙らざるはなし、又君こは、おの〳〵が、主君のとにもわたるべし、

天てらす神の御民ぞ御民らをおほろかにすなあづかれるひと

〇天てらす神の御民ぞこは、天下の民百姓は、みな天照大御神の、御民百姓ぞこなり、〇おほろかにすなは、疎略等閑にするとなかれこなり、おほろかは、おろそかこいふに同じ、〇あづかれる人こは、一國にもせよ、一郡にもせよ、一邑にもせよ、その民を治むる人をいふなり、民は、皆大御神の御民なる故に、それを、姑く預り居るなれば、あづかれる人こいふなり、然れば、必私の民百姓こ思ひて、おろそかにすなこなり、

物つくる民は御たからつくらずはいかにせんとか民くるしむる

〇もの作る民こは、田畑に蒔生して五穀をつくる者また宮室器財布帛何にても、よろづの物を作りいだし、交易する工商などをもすべていふなり、古書どもに、百姓こかきても、民こかきても、みたからこ訓たり、その農工商の、物作らざらんには、いかにこもすべきかたなかるべし、〇

いかにせむとかは、何ッとせうとてかといふに同じ、〇民くるしむるは、民は、わが領内の民なりと思ひて、心のまゝに、ひたすら苦むるをいふなり、

すめかみのめぐゝおもほす人草ぞよの中の人あしくすなゆめ

〇すめ神とは、神を尊みて申すなり、〇めぐゝは、めぐみと同言にて、めぐみは、躰なり、めぐゝ思ふは、用なり、俗に、ふびんに、大せつに思ふといふが如し、万葉十八に、妻子見れば、かなしくめぐしとあり、〇人草は、上に注せり、万民なり、よの中の人といふも、同じく万民をいへるなり、〇あしくすなは、賊害するのみならず、すべて、いさゝかにても、人のためにあしき事を、なすなといふなり、〇ゆめは、ゆめ／＼なり、

世々のおやの御かげわするな代々のおやは己が氏神己が家の神

〇代々の先祖は、すなはち我家の氏神ぞとなり、おの／＼ほど／＼に、家の業ありて、世を安くわたるは、みな先祖の御蔭なれば、その家々にとりては、神なり、先祖の御蔭は、一日も忘るまじきわざぞとなり、朝夕祀り奉りて、孝養をつくすべきなり、

父母はわが家の神わが神とこゝろつくしていつけ人の子

〇人の子といふは、たゞ子といふに同じ、ふるき哥に、たゞ親のことをも、人のおやといひ、又千代もといのる人の子のためなどもいへり、これらの例なり、〇一首の意、子たる者のためには、父母は、わが家の神なるぞよ、わが家の神とあふぎ奉りて、力のかぎり、心のかぎり、まめやかにいつき敬ひ奉れとなり、

ぬえ草のめとやつこらは皇神のさづけし寶うつくしみせよ

〇ぬえくさは、妻の枕詞なり、〇めこは、妻と、子となり、〇やつこらは、奴婢なり、〇うつくしみは、慈愛憐愍をいふなり、一首の意、妻も、子も、めしつかふ者も、みな皇神たちより、授けあたへ給ひたる、寶ぞよ、隨分にあはれみをかけて大切にせよとなり、

かもかくも時のみのりにそむかぬぞ神のまことの道にはありける

〇かもかくもは、ともかくもといふに同じくて、こゝは、ごうであらうがかうであらうがといふ意なり、〇時の御のり

は、當時の法令にて、上の御掟なり、〇一首の意、よくてもあしくても、その時の上の法令を守りてそむかぬやうにするぞ、神の道のまことなるといへるなり、たとへば、今の代のありさま、上の掟も、下の行ひも、古の道にはかはれることのあらむを、心よからず思ひて、私にいにしへをまねて、行ひなどせんは、却て神の道にも、古の意にもたがひて、己が私事なり、あしくてもよくても、上の御掟、すなはちこれ神の御心なればなり、

とき〳〵の御のりも神の時々の御ことにしあればいかでたがはむ

〇御ことにしあれば、御ことは、命令なり、にしのしは、助辭なり、〇いかでたがはむは、俗にたがはうと思てもたがはれはせぬ、どうしてたがへられうぞといふ意なり、上い歌にも見えしごとく、神といふ物は、善神惡神さま〴〵ましまして、心々なれば、世間の事も、時々その神の御心にしたがふ事にて、上の法令にも、其時々のおもむきさま〴〵ありて、これ皆、その時々の神の御心よりいでくる事なれば、それにさかひたがはんとしても、さかひがたくたがひがたき事ぞとなり、

今の世はいまのみのりをかしこみてけしき行ひおこなふなゆめ

〇かしこみては、俗にいふかしこまり奉りてなり、〇けしき行ひは、異なる行ひなり、世俗通例ならぬ、異風異躰の行ひなり、〇おこなふなゆめは、ゆめ〳〵行ふべからずと制するなり、そも〳〵、今の世のありさま、古にはかはれるとおほかれば、古學などする人は、それをうれふるがあまりに、己が家の掟身の行ひなどをも、古の躰にせんとかまへて、世に異なるふるまひをし、佛なども、もと外國より渡り來たる物にて、神の道にはいたく害ある物なればとて、俄に廢せんとするたぐひ、又漢學にふけりたる輩は、万の事漢めきて、身をもふるまひ、家をもおきてなどするたぐひ、すべて普通ならぬ行ひは、かへりて古の道にもそむけるなり、さて筆のついでにいはん、今の代、家々に佛像をおくことなどは、上の法令にもかゝりて、天下一同の事なり、そのうへ、おの〳〵が先祖の人々も皆信じ來りたるも多ければこれを嫌ひ廢せんは、公にもそむき、私の先祖にも不孝

になるかたもあれば、これらはことに世の中のならひにまか
せてあるべき事なり、その外よろづの事ども、これに准じ
て知べし、

やす國のやすらけき代にうまれあひてやすけくてあれば物思ひもなし

○やす國は、上にいでたる、うら安國に同じ、○やすらけ
き代は、泰平の御代をいふ、俗にいはゞ、何の不足なく安
樂なる國にて、時代も又何もあんじ事もない、けつかうな
る時代に生れあひて、無爲にくらせば、何も思ふ事もない
とよめるなり、かうやうにめでたき御代に生れあひながら、
猶世をうらみて、いろ／＼不足なるよしをいふは、いとあ
るまじきわざなり、

かりこものみだれりしさまきく時し治まれる代はたふとくありけり

○刈薦は、みだれの枕詞なり、○みだれりしさまとは、昔
の亂世の有樣をいふなり、○きく時しのしは、助辭なり、
むかしの亂世のありさまを、いひ傳へにても、書傳へたる
にても、きく時は、何事も／＼もあさましくかなしく、心う
き事のみなり、それにくらべて思へば、靜謐の御代といふ
物は、たふとくありがたき物なりとよめるなり、泰平の御
世の惠を、おろそかに思ひ奉ることを、いましめたるなり、

すめらぎに神のよさせる御としをし飽までたべてあるが樂しさ

○すめらぎは、天皇なり、○神のよさせるは、神より天皇
に寄せ奉り給ふなり、○御としをし、御としは、田穀の
となり、をしのしは、助辭なり、○あくまでは、十分に
といふなり、○たべは、今いふ詞も同じ、食ふとなり、
○あるがたぬしさは、よろこばしきといふなり、神代のは
じめ、豐葦原の水穗の國は、千五百秋の長五百秋に、我御
子の知しめさむ國なりと、高御産巣日神、天照大御神の御
命もて、授け奉りたまへれば、天下の田畑より出くる穀
物は、皆天皇の知しめす穀物なり、其よし古事記、日本紀、
古き祝詞、等に見えたり、さてその天皇の、神より授りた
まへる穀物を、下万民にわかち賜りて、くふなり、もと食ふ
ことを、賜るといふも、かやうの心ばへにや、○一首の意、
天皇に、神たちより、寄せ奉りたまへる米穀を、飽まで
賜べて居るが、よろこばしきことゝよめるなり、是又神の御

恵を、おろそかに思ひ奉るまじき、いましめともなるなり、

事しあればうれしかなしと時々にうごくこゝろぞ人のまごゝろ

○うごく心とは、うれしともかなしとも思ふは、心のうごくなり、何事にても、樂しき事にても、憂はしき事にてもある時は、その事に觸れて、感動するぞ、まことの眞心といふ物なりける、さて此哥の意趣は、次の歌にいひのべたり、

うごくこそ人の眞心うごかずといひてほこらふ人はいは木か

○ほこらふは、矜るなり、るをのべて、らふといへるなり、○石木かとは、石か木かと、つよく詰りていふ詞なり、世の學者、ものゝ道理を悟り得て、心の物に動ぜぬといふを、賢きことにいふは、みな眞心にはあらず、いつはりなり、○一首の意、物に動ずる心こそ、人の眞心なれ、動かずといひて矜るは、情無き石歟木歟、それは、眞心にてはなきぞ、皆僞とよめるなり、

眞ごゝろをつゝみかくしてかざらひていつはりするは漢のならはし

○つゝみかくすは、色に顯はさぬをいふなり、○かざらひては、飾りてなり、りをのべて、らひといへるなり、潤色し僞り飾るなり、○眞心は、人の生れつきたるまゝの心にて、儒佛などの見をも交へず、うはべをつくろひかざりもせぬ、ありのまゝの心をいふなり、○いつはりするとは、たとへば、心には、嬉しと思ひながら、嬉しきふりをせず、心には欲しく思ひながら、欲しからぬ躰をするやうの事なり、かやうに上べは、つくろひかざりて、まとの内心を見せぬやうにするは、漢ごゝろの風俗にて、みな僞なり、

から人のしわざならひてかざらひて思ふ眞心いつはるべしや

○いつはるべしや、べしやは、僞るべき事にはあらずといふを、つよくいふてにをはなり、俗にいはゞ、僞らうとてはなきにといふが如し、官祿富貴をもとめず、喜怒哀樂にも動ぜぬ皃をし、天なり命なりなど悟りがましういひて、賢人ぶるは、僞おほき、から國人の風俗なるを、世の人それをよき事に思ひて、皆それにならふを、深くにくみたる哥なり、そも／＼これらは、さのみ害にもなるまじき事のやうに思ふ人あるべけれど、然らず、世の中に、物を僞り

かざるより、大なる害はなし、たとへば、人の臣下たる者の、内心には、君を殺し、國をうばゝんと思ひかけて、うはべを飾りいつはりて、君を大切に思ふふりをし、忠義らしきふるまひをして、實に忠臣と思はせおきて、つひにその君を殺し、國を奪ふやうなる事も、もとこれ眞心を僞り、上べを飾るよりの、害ならずや、よく／＼思ふべし、

たまきはる二世はゆかぬうつそ身をいかにせばかも死なずてあらむ

○たまきはるは、命といふことの枕詞なり、新玉來經るといふ意の詞なれば、生る此世のことにも冠らするなり、○二世はゆかぬとは、此命の死て、また改て二度生れ來て、この世を經ることのならぬをいふなり、万葉第四に、空蟬乃、代也毛二行、何爲跡鹿、妹爾不相而、吾獨將宿、また第七に、世間者、信二代者、不往有之、過妹尓不相念者などあり、○うつそみは、現の身といふことにて、此世に存生にて在る身をいふなり、○いかにせばかも死なずてあらむは、何としたらば、不死に居られうぞとなり、○一首の意、死して、又更に二度とは、來直しのならぬ、此身なれば、命は、至極をしき物なり、死ぬるは、しごく悲しき事なり、いかやうにしたらば、死なずにゐられうぞとよめるにて、いつまでも不死あらまほしきよしなり、これ人の眞心をあらはせる哥なり、世間の人みな、儒佛の意にへつらひて、命を惜むをば、愚なる事のやうにいひて、をしまぬふりをする、その僞を、にくみてよまれたるなり、次の二首も同じ、

うつそ身はすべなき物かあかなくに此世わかれてまかるおもへば

○すべなき物かは、俗にせう事もない物かなといふ意なり、○あかなくには、いつまで存へ居ても飽とはなく惜く思ふにといふ意なり、○まかるは、死して、此世を去りゆくとなり、○一首の意、命はあかず惜き物なるに、死して此世を別れゆくを思へば、人の身といふ物は、せんかたもなき物かなとよめるなり、これ又、人の眞心をしめして、悟りがましきことをいふを、いましめられたる哥なり、

きたな國よみのくにべはいなしこめ千代とことはに此世にもがも

○きたな國は、穢き國なり、○よみの國べは、死てゆく國

を、豫美の國といふなり、○いなしこめ、いなは、否の意、しこめは、醜目にて、見ぐるしきことにて、豫美の國をいふなり、古事記豫美のくだりに、伊邪那岐大神、詔、吾者、伊那志許米志許米岐穢國至在、また日本紀にも、伊弉諾尊、既還乃追悔之曰、吾前到於不須也凶目汚穢之處、故當滌去吾身之濁穢などあり、死人のゆく豫美の國は、けがらはしく、きたなく、みにくき國なり、古書に、黄泉國とも、底根之國とも、根國底國とも、根之堅洲國ともあり、○一首の意、けがらはしく穢き黄泉の國は、往ことはいな、千年も万年も生存へて、此世に在まほしと願ふなり、これ人の眞心なり、

ちはやぶる神の心をたごめずは八十のまがことなにとのがれむ

○ちはやぶるは、上にもいへる如く、あらぶる惡神をいふなり、さればこゝは、たゞに神といふ言の枕詞のみにいへるにはあらず、いちはやくおそろしき意をこめたり、○なごめずはは、和らげ奉らずはといふなり、俗にいはゞ、神のなつとくしたまひて、御きげんの直るやうにせずばといふ意なり、○八十のまがとは、さま〴〵の惡事凶事なり、そも〳〵、神の御心を和むるしわざは、まづ火を清め、よろづ清淨にして、隨分に心をつくしていつき敬ひ、うまき物、よき物を、さゝげ奉り、おもしろきわざをして、神の、よろこび給ふやうにすべきなり、○一首の意、猛き神の御こゝろを、和らげ奉らずは、さま〴〵の禍事を、何とて脫れうぞ、のがれがたからんとなり、

家も身も國もけがすなけがれはし神のいみますゆゝしきつみを

○けがれはしのしは、助辭なり、○ゆゝしきは、忌々しきなり、神のいみきらひ給ふ忌々しき事となり、○罪をのをは、罪なる物をといふ意なり、身も清く行ひ、家をも清淨にして、よろづに穢のなきやうにせよとなり、國も穢すなとは、一鄉〳〵いひあはせもてゆかば、一國中けがるゝ事なく清淨ならん、又國を有つ人のいましめにもあるべし、國の內けがるゝ時は、國の災あるべければなり、○一首の意、穢は、神の、いたく忌きらひたまふ罪なれば、身も、家も、國も、けがさぬやうにせよとなり、

竈の火のけがれゆゝしも家内は火しけがるれは禍おこるもの

○かまは、竈所なり、○ゆゝしもは、大せつにすべきと、おそれつゝしむべき事なり、万葉に、かけまくも忌々しきかも、いはまくもあやに恐こきなどあり、○火しけがるればのしは、助辭にて、事が中に、火のけがれほど、忌々しきはなし、最も忌べき事なり、古事記黄泉段に、伊邪那美命答白、悔哉不速來、吾者爲黄泉戸喫、これ火に穢あらば、必忌清むべきとの本なり、此御詞をもて、竈の火の穢の、大せつなることを、よく〳〵思ふべし、○まがおこる物は、災難凶事のおこるものごとなり、火の穢を、なほざりに思ふまじきよし、師の古事記傳に委く說きおかれたり、

けがれをし罪ともしらにみそがずてもだある人をみるがいぶせさ

○けがれをしのしは、助辭なり、○しらには、不レ知といふことなり、○みそがずては、身滌せずにといふとなり、身滌とは、川海などにゆきて、身をそゝぎて清むるわざなり、祓といふも同じことなり、○もだあるとは、默止在とかゝれたるが如し、爲べき事をせずに、そのまゝ在をいふなり、俗にも、爲べき事せずに居るを、だまつてゐるといふ是なり、○見るがいぶせさ、いぶせきは、欝悒の字をかきて、心の內にもや〳〵と思はれて、さつはりとせぬをいふなり、こゝにては、みそがずて在人を見ては、きたなくむさく思はるゝをいふなり、○一首の意、物の穢を、それ罪咎ともしらずして、身滌祓をもせずに、たゞにある人を見れば、こゝろよからず思はるゝよしなり、

あなかしこよもつへぐひの禍よりぞもろ〳〵の禍おこりそめける

○あなかしこは、俗にあゝ恐ろしやといふ意なり、よもつへぐひは、黄泉戸喫にて、上に引いでたる古事記の文の如し、戸は、竈のことにて、黄泉の國の竈にて炊きたる物を食ひ給へるをいふ、さて伊邪那美命は、これより惡神となり給ひて、伊邪那岐大神の、黄泉より逃かへり給ふ時、豫母都志許賣に追しめたまひ、また八くさの雷神に、千五百の黄泉軍をそへて追しめ給ひ、はてには、御自おひおはしまして、黄泉比良坂にて、大神にむかひたち給ひて、

汝の國の人草、一日に、千頭絞ころさむ、などのたまひたる、これみな、かの穢によりて、かく惡神となり給へるにて、禍事のいできはじめなり、さて、上にも引出たる如く、かの大神の、身滌に、あらはれ給へる神たちの中に、はじめに、八十禍津日神と、大禍津日神のなり出たまへるは、此二神者、所到其穢繁國之時因汚垢而所成之神者也、とありて、世の中の凶事は、みな黃泉の穢よりおこるとよくよく思ふべし、

つみしあらば清き川瀨にみそぎして早秋津姬にはやあきらめよ

○罪しあらばのしは、助辭なり、罪は、穢をいふなり、上の歌にも見えたり、穢を罪といふこと、師の大祓ノ詞ノ後釋にくはしうときおかれたり、○早秋津姬は、大祓詞に、荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽乃八百會爾坐須、速開都比咩止云神、持可可呑而牟とありて、穢をはらひ失ひたまふ神なり、古事記には、水戶神、名速秋津日子神、次妹速秋津比賣神とあり、○はやあきらめよ、はやは、すみやかになり、あきらめよは、清淨にせよなり、ものゝ穢あるは、くもれるが如し、はらひ清めたるは、明らかになりたるなり、○一首の意、人もし穢あらば、清き川瀨に、おりたち身滌して、速に祓ひ清めよとなり、

まがことをみそがせれこそ世をてらす月日の神はなりいでませれ

○みそがせれこそは、身滌し給ひたればこそなり、○成出ませれは、生れ出たまひたれといふなり、伊邪那岐ノ命の、黃泉の國にまし〱ける、その穢禍事を、祓清めたまひたればこそ、天地にかゞやきて、世を照らし給ふ、清淨明麗なる、日月の神は、出生したまひたれ、しかれば、世の人、身に穢のあらん時は、身滌祓をして、速にはらひ清むべきなり、さて此哥を、終におき、都伎賢木の歌を、卷頭におかれたること、心あるべし、此うたより立かへりて、卷頭の哥へつゞけて見れば、いよ〱意味深長なり、

阿麻理歌

あまりうたとは、百首のうへに、餘れる哥といふなり、

かつ〴〵も百ちのうたにいきどほるこゝろのをろなのばへつるかも

○かつ〴〵は、物のいできかゝれることにいふ詞にて、十いでくべき物の、まづ一つ二つ出來たるやうの事をいふなり、されば、まづ少しばかりと心得べし、○百ちのちは、はたち、みそぢ、などのちなり、ちゞなどのちも同じ、○いきどほるは、心の内にむすぼゝるゝことをいふなり、○心のをろとは、心の緒といふ事にて、ろはそへたる言なり、たゞこゝろのことゝしるべし、○のばへは、のべといふ事にて、思ふ事を、歌によみあらはすをいふなり、○一首の意は、三四二一五と句を置かへて心得べし、心のうちにむすぼゝれて、もや〳〵と思ふことは、千々万々なれども、百首の哥に、まづすこしばかり、述(ノベ)いであらはせりとなり、

思ふことうたへばなぎぬ言靈(コトタマ)のさきはふしるしまさしかりけり

○うたへばとは、哥によみいづればといふも同じ、○なぎぬとは、心の晴ることなり、なぐさむといふ詞も此意なり、雲霧などの、はれ、荒き風の、和らぐ事をも、なぐといふに同じ、こゝは、心の内に、もや〳〵とせしとの、晴れたるをいふなり、○言靈(コトタマ)は、御國の言語には、靈(ミタマ)のあるをいふなり、○さきはふは、幸(サキハヘ)をあたふるをいふ、万葉に、言靈能(コトタマノ)、佐吉播布國(サキハフクニ)、またこと靈之(タマノ)、所佐國(タスクルクニ)などあり、○一首の意、心の内に思ひむすぼゝるゝことも、歌によみいづれば、その心のはるゝは、まことに、言靈(コトタマ)の幸(サキハ)ひ助(タス)けたまふ驗(シルシ)は、たがはざりけりとなり、

百うたにとゞめてはあれど千歌にも思ふこゝろはあにつきじかも

○とぢむとは、終(ヲ)へ止(トヾ)むるをいふなり、○豈(アニ)は、いかでといふ意なり、但し漢文に、つねにいふ格にては、豈つきんやといふべきなれども、不(ジ)といへることも、古き歌には例あり、○つきじは、盡はすまじなり、○かもは、輕く心得べし、○一首の意、百首にて、まづ終へとゞめたれども、思ふ心のほどは、千首によみたりとも、いかでかつきすべき、盡(ツキ)はすまじきかとよめるなり、

とこしへに世をてらします日のみたまつけし鏡は伊勢の大神

○とこしへは、永々不變なるをいふ、○日のみたまつけし

鏡とは、天照大御神の御靈を、託うつし給ひし御鏡をいふなり、古事記に、於是副賜其遠岐斯、八尺勾璁、鏡、及草那藝劔、亦常世思金神、手力男神、天石門別神而詔者、此之鏡者、專爲我御魂而、如拜吾前伊都岐奉、とある、これすなはち、伊勢の大御神なり、この御鏡、いせに御鎭座の事は、日本紀の垂仁ノ卷に見え、大神宮儀式帳にくはしく見えたり、

ひむかしの國ことむけてみつるぎはあつ田の宮にしづまりいます

○ことむけは、平ヶ治ムルなり、○みつるぎは、草薙劔なり、此御劔の事、古事記、日本紀に見えたるが如し、○あつたの宮は、寛平の熱田大神宮縁起に、正一位熱田大神者、以神劔ヲ爲主、本天叢雲劔、後名草薙劔、其祠立於尾張國愛知郡ニ、云々、延喜式の神名帳に、尾張國愛智郡熱田神社、また日本紀に、是草薙劔、此今在尾張國吾湯市村、即熱田祝部所掌之神是也、など見えたり、○ひむかしの國言向てとは、此ノ御劔を以テ、倭建命の、東の國々を平治し給へるとなり、さて、東國を征し給ひしは、倭建ノ命にてはあれども、みなこの御劔の神威の、助けたまへるなれば、この歌に、國ことむけて云々とは、專ラ御劔へかけてよめるなり、○一首の意、三の句を上へめぐらして、御つるぎは、東の國々を平治して、さてつひに、熱田の宮に鎭座したまへりとなり、

久方の天つ日嗣の御たからと御もとはなたぬやさかまがたま

○ひさかたは、天の枕詞、○天つ日嗣は、天皇の御代々々御位つぎ給ふことなり、上にも出たり、○御たからとのとは、としての意なり、御代々々つたへ給ふ御寶としてなり、○御もとはなたぬは、天皇の御許離ち奉り給はぬなり、○やさかまがたま、やさかには、彌眞明の意にて、明らかにてれるをいふなり、まが玉は、横井ノ千秋の考に、まかゞ玉にて、目かゞやく玉の意なりとあるを、古事記傳にも用ひられたり、古事記に、科玉祖命、作八尺勾璁之五百津之御須麻流之珠而とあり、また天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而、於上枝取著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉、また日子番能邇々藝命天降り給ふ時、天照大御神よ

か授奉りたまふ、その文、上の鏡の所に引たり、日本紀、天照大御神、乃賜天津彦々火瓊々杵尊、八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物とあり、建暦御記寶劍神璽の條に、御璽筥、神代于今不持云々此一ハ、夜御殿御帳中、枕ノ二階上案云々、自神代如見、我被誓置、尤可敬事也、云々などあり、これ神璽とまうす御寶なり、さて、右の三首は、三種ノ神器の御事をよまれたり、これ天つ日嗣の御璽にして、道にかゝれる重き御寶なる故に、このあまり歌のはじめにおかれたるなるべし、

みづ垣の宮の大御代は天地のかみをいはひて國さかえけり

○水垣の宮は、崇神天皇の御代の、都の名なり、此天皇、神祇を殊に重く敬ひ奉り給ひて、御祭ごとも嚴かにて、天の下にぎはひ榮えけるなり、古事記のこの御代の段に、此天皇之御世、役病多起、人民死爲盡、爾天皇愁歎而坐之夜、大物主大神、顯於御夢曰、是者我之御心、故以意富多多泥古而、令祭我御前者、神氣不起、國安平、是以驛使班于四方、求謂意富多多泥古人之時、於河内之美努村、見得其人貢進、云々、於是天皇大歡、以詔之天下平人民榮、即以意富多多泥古命爲神主而、於御諸山拜祭意富美和之大神前、又仰伊迦賀色許男命、作天之八十毘羅訶、定奉天神地祇之社、又於宇陀墨坂神、祭赤色楯矛、又於大坂神、祭黑色楯矛、又於坂之御尾神及河瀬神、悉無遺忘以奉幣帛也、因此而、役氣悉息、國家安平也とあり、

めかどやくたからの國をことむけの神のさとしはたふときろかも

○めかどやくは、きら〳〵とかゞやきて、目のまばゆきとにて、金銀のたぐひをいふ、○財の國とは、かの金銀などの多かる國をいふ、三韓のことなり、○言向は、したがへてなり、上にもいへり、○神のさとしは、神託なり、たふときろかも、ろは助辭、かもは歎なり、日本紀仲哀天皇卷に、時有神託皇后而誨曰、天皇何憂熊襲之不服、是膂宍之空國也、豈足擧兵伐乎、愈茲國而有寶國、譬如美女之睩有向津國、眼炎之金銀彩色多在其國、是謂

栲衾新羅國、とあり、古事記には、故天皇、坐筑紫之訶志比宮、將擊熊曾國之時、天皇控御琴、而、建内宿禰大臣、居於沙庭、請神之命、於是大后歸神、言教覺詔者、西方有國、金銀爲本目之炎耀種々珍寶多在其國、吾今歸賜其國、云々など見えたり、さてその後、神功皇后、神託にまかせて、新羅の國を伐たまひ、高麗百濟も從ひ參りて、つひにこの財の國を得たまへり、

古ことを今につばらにつたへ來て文字も御國のひとつみたから

○古ことは、神代よりはじめ、上代のかたり傳への古辭なり、○つばらは、つまびらかなり、上にも出たり、○もじは、漢字なり、かの神代よりはじめ、御代々々の古事ども、日本紀、古事記、そのほかこれかれの古書どもにつたはれるは、その文辭、みな漢國の文字を、借り用ひて、かき記したるなれば、後代の今にいたるまで、そのかみの有樣を、つまびらかにうかゞひ見るは、文字の德なり、よてこの文字といふ物も、御國の一つの御寶なりとよめるなり、上の歌に、たからの國をとよめると合せて味ふべし、日本紀應神ノ卷に、十六年春二月王仁來之、則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達、故所謂王仁者是書首等之始祖也、とあり、古事記には、又科賜百濟國、若有賢人者貢上、故受命以貢上人名和邇吉師、即論語十卷千字文一卷并十一卷、付是人貢進、とあり、王仁とあるも和邇吉師のことなり、御國に文字あることは、この時より始れり、さて此二首は、近世の學者、異國より萬の事の來れることを、ひたすらあしきことにのみいふが、偏なることをいきどほりて、よまれたるなり、あしきのみにはあらず、益あることも又おほかるを思ふべし、

こすげよし蘇我のうまこは天地のそこひのうらにあまるつみ人

○こすげよしは、そがの枕詞なり、万葉などには眞菅よしとあり、よしは、助辭なり、さて、眞すげといひては、いさゝかほむるこゝろあるやうにきこゆれば、言をかへて、小菅とよまれたるなるべし、○天地のそこひのうら、そこひは、限といふこと、うらは、内といふことなり、いはゆる六合の内などいふが如し、万葉十五卷に、安米都知

乃、曾許比能宇良爾とあり、○あまる罪人とは、天地の間にもおき所なき大罪人といふなり、日本紀崇峻天皇ノ巻に、五年冬十月云々、蘇我馬子宿禰、聞天皇所レ詔、恐レ嫌於己一、招二聚儻者一、謀レ弑天皇一、云々十一月云々、馬子宿禰詐於群臣一曰、今日進二東國之調一、乃使三東漢直駒一殺二于天皇一、とあり、いとも〳〵ゆゝしくまが〳〵しく、うへもなき逆し事になんありける、

くなたぶれうまこが罪もきためずてさかしら人のせしはなにわざ

○くなたぶれは、頑狂なり、續日本紀第廿の宣命に、悪逆在奴、久奈多夫禮麻度比某某、逆黨伊射奈比率而、云々また、久奈多夫禮、詐誤百姓、云々などありて、朝廷にむかひて、凶逆のふるまひをなす、不忠不義の者をいへり、○きためずては、不罰而なり、これも同紀第四十巻の宣命に、是ヲ任法ニ問賜比支多米賜倍在止云々 日本紀皇極ノ巻の歌に、禹都麻佐波、云々宇智岐多麻須母、とあるも同じ詞なり、○さかしら人のせしはなにわざとは、その代に賢き人のし給ひしは何わざにてありしぞ、といへるにて、天皇を弑し奉りし、蘇我ノ馬子が大罪をだに、罰せずして、賢人がましきかほして、かしこげに行ひししわざは、何事を行ひしぞ、と深くとがめたるなり、まことに、かゝるいみしき大事をばさしおきて、いさゝかもとがめずしては、外にいかばかりの功ありとも、善行ありとも、そは取ルにたらざるなり、かれ大平ひそかに思ふに、この歌は、作者の下のこゝろ、聖徳太子の御事を指るか、さるは皇太子にましませば、はゞかりて、御名をばさゝれざるにや、こはおしはかりなり、

馬子らが草むすかばね得てしがもきりてはふりて耻見せましを

○草むす屍は、年を經て、草などの生たる、死屍をいふなり、續日本紀十七巻の宣命に、海行者美ツク屍、山行者草牟須屍とあり、万葉十八巻の長歌にも同じさまにあり、○得てしがもは、得まほしきなり、○きりてはふりては、斬散なり、はふるは、屠と同言なり、古事記垂仁ノ段に、斬二波布理其軍士一とあり、○耻見せましをは耻を與へ辱しめん物をといふなり、○一首の意、逆臣馬子等が死骸こそ、

得ふはしけれ、得たらば、斬て〳〵、はふり散して、耻かしめん物をとなり、いたく怒りにくめるなり、

わたのそこおきついくりにまじりけむ君のまもりのつるぎだちはや

〇わたの底は、海底にて、瀛の枕詞なり、〇おきついくりは、瀛津石にて、海中にある石をいふなり、万葉六卷の長歌に海底奥津伊久利二とあり、集中に猶多し、〇まじりけんは、海底の石に交れるにて、この寶劒の、西海に沈みうせ給へるをいふなり、〇君のまもりのつるぎ太刀は、かの三種の神器の中の寶劒を申すなり、〇はやは、その寶劔の、海底にうせたる事を思ひて、歎きたる詞にて、倭建ノ命の、吾嬬はや、とのたまへるに同じ、さて、此寶劔は、かの神代の物は、尾張ノ國熱田にまし〳〵て、御代々々、天皇の御許にましますは、そのかはりとして崇神天皇の御代に、摸しつくらせ給へる御劔なり、かの文治元年三月廿四日平氏滅亡の時、相國淸盛の後室從二位平ノ時子、安德天皇をいだき奉り、神璽を懐にいれ、寶劔を腰にさして、海底に入ぬるは、いとあさましかりけるわざなりけり、その後、神璽は浮みいでゝ、内侍所と共に、京に還り入らせ給ひぬるを、この御劔のみは、いまだ出たまはずとなん、

鎌倉のたひらのあそがさかわざをうべ大君のいからせりける

〇あそは、朝臣なり、平氏のかばねは、朝臣なればなり、鎌倉の平ノ朝臣とは、北條氏をいふ中に、ここに逆臣義時泰時をさすなり、〇さかわざは、逆さまの事なり、朝廷をはじめ天下の事、恣に執行ひて、天皇の大御心に、そむき奉れるをいふなり、〇うべ大君の怒らせりけるとは、義時泰時が跋扈なるを、後鳥羽の帝、順德の帝、逆鱗まし〳〵て、誅伐し給はんと思したゝし御事を、諾なり、まとにことわりなり、と申せるなり、

おきの嶋はみ矢かくみていでましゝ御心おもへばなみだしながる

〇弓矢かくみては、弓劔を帶したる武士ども、圍奉りてなり、万葉六卷の長歌に、しゝじもの弓笶圍而とあり、いでましは、行幸御幸などのとなり、〇涙しのしは、助辭なり、そも〳〵後鳥羽ノ天皇、北條をこそ、打ほろぼさんと思ほしめしけるに、かへりて、御みづから、隱岐の國に、遷

されましますほど、武士どもの、あさましく取圍み奉りて、うつし奉りけるをり、うれたくも、口をしくも、思ほしめしけむと、大御心のうち、今思ひやり奉るにも憤りの涙とゞめがたしとなり、

おもほさぬ隱岐のいでましきく時はしづのをわれも髪さかだつを

○おもほさぬは、思食シもよらぬなり、○しづのをわれは、賤の男吾なり、○髪さかだつを、をは輕くして、よといはんが如し、歎息のてにをはなり、髪逆起とは、いみしう憤り怒る時は、髪も逆だつやうに思ふなり、清少納言ノ枕双紙に、笛はしかくといふくだりに、篳篥は云々、いみしううるはしきかみ、もたらん人も、みなたちあがるべきこゝち云々、狹衣ノ物語に、まことにかしらの髪も、さかさまになるこゝちしてなどあり、漢書にも、髮盡上指レ冠、また壯士髮衝レ冠などあり、

おほくらのたひらの子等がたはわざはそがの馬子に罪おとらめや

○平の子等は、かの北條の義時泰時らをいふなり、○たはわざは、狂態なり、こゝは、朝廷にむかひて、無道なるをいふなり、まとや、承久三年、北條追討の事、思食シたゝせ給ふよし、鎌倉に聞えければ、時房泰時時氏、十万餘の軍を率て、東海道よりせめのぼり、東山道、北陸道よりも、武士どもおびたゞしくせめのぼり、六月、宇治勢田にて、いみしうたゝかひて、官軍敗北しければ、泰時等、京に入て事おこなひ、七月後鳥羽帝を、鳥羽の院にうつし奉り、新帝を、九條の院にうつし奉り、さてつひに、後鳥羽帝を、隱岐に、順德帝を、佐渡に、雅成親王を、備前に、土御門帝を、土佐に、後に阿波に物せさせ給へりうつし奉りぬ、暴逆に暴逆をかさねたる北條がしわざ、馬子が罪にも異なるとなしとなり、そも馬子は、天皇を弑し奉り、北條は、遠所にうつし奉れるのみにて、弑し奉れるまではあらざりしを、その罪、馬子におとらじといへるは、北條を、深く惡みてなり、

大きみをなやめまつりし多夫禮らが民にぐゝみて世をあざむきし

○大きみは、天皇なり、上にもあり、○なやめまつりは、令レ惱奉とかゝれたるが如し、○多夫禮らは、狂賊の輩をいふ、日本紀神武の巻に、狂心を、たぶれごゝろとよみ、

万葉十七卷にも、多夫禮多流しこつ翁とあり、久奈多夫禮の、たぶれも同じ、○民はぐゝみて世を欺きしとは、北條の代々の中に、泰時時賴などは、政事正しく、あつく民を撫しと、その聞え高し、又泰時に、三位のくらゐを賜はんとありし時、恐れあるよし申して、辭したるなどは、ことに、例の世人をなつけんためにいひし、漢人流の僞なり、三位の位になることをだに恐れんものゝ、朝廷を蔑にし、天皇をなやまし奉り、遠所にさへうつし奉れるは、いかにぞ、かれらが仁政、みな僞にて、世人を欺ける事いちじるし、もしまことの賢人ならば、いかでかさることのあらん、

まがつひのそのまがわざに世の人もあひまじこりし時のかなしさ

○あひまじこりは、禍津日ノ神の心に厭はれて、世の人、禍事を行ひしをいふなり、御門祭の祝詞に、四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言悪事爾相麻自許利相口會賜事無久云々、道饗祭の祝詞に、根國底國與利麁備疎備來物爾相率相口會事無云々などあり、北條が代のほど、天下の人、みな欺かれて、かれを、まことの賢人と思ひて、從ひなびきしは、皆禍津日ノ神に、まじなはれたるものなり、かけまくもいともかしこき、天皇の御位を、はゞかりなく、いろひ奉り、まして鎌倉將軍の嗣々などをば、むげに思ふまゝにはからひて、ひたぶるにほしいまゝなりしは、あさましきわざなりけり、そも〳〵、禍津日ノ神の御あらびは、保元平治のころほひやゝさかりにして、北條足利が代は、荒びの極みにぞ有ける、

よき人といふはたがこと鎌倉のたひらの子等はくにのつみびと

○よき人といふは誰言とは、世に賢臣といひもてはやすは、いかなる人の、いふ言ぞと、深くとがめたる詞なり、○鎌倉の平の子等は國の罪人とは、かの泰時などが輩は、天下の逆臣にてこそあれとなり、然るを、當時の人のみならず、後世の物しり人どもまで、實の賢人と思へるは、皆禍津日神に、まじなはれたるものなり、

おふけなく御くにせめむともろこしのからのこきしがたはわざしける

○貧氣なくは、俗にいふ、分不相應なるをいふ、上にくは

しくいへり、此句は、結句のたはわざしけるといふへかけて心得べし、〇もろこしのからとは、西ノ方なる外國を、惣て戎といへば、唐土も、その戎の内なる故にいへり、唐といふからといはんが如し、〇こきしは、王なり、外國の王を、こきしとも、こにきしとも、いふなり、もとは、百濟國の語にて、百濟王をいひしが始なれど、すべて、異國の王をもいふよし、古事記傳にくはし、この歌にては、蒙古の王をいふなり、〇たはわざしけるとは万國の元首たる、此神國を、犯し奉らんと謀れるは負氣なき狂態なり、万葉廿ノ巻に、いざ子ども、多波和射なせそ、天地の、かためし國ぞ、やまと嶋根は、とあり、弘安四年七月、蒙古の兵船おしわたり來て、西國に寇す、其ほど、京六波羅にも、西國加勢の軍をしたてゝ、とりどりに評定あり、朝廷にも、いみしうおどろかせ給ひて、諸所に、祈どもあり、伊勢石清水加茂春日廿一社を始として、國々に、勅使奉幣の事どもあり、さるほどに、閏七月朔日、俄に大風吹いでゝ、蒙古の船、悉く破損して、十万の勢、たちまち底の水屑となりてうせぬ、此度の大風は、まことに天神地祇の靈驗にて、朝廷をはじめ、京鎌倉の、貴きみじかき老たるわかき、ありがたき神の稜威を、感ぜぬはなかりけることなど、書どもに見えたり、うごき無き、神國の御稜威は、かくはかり、いちじるきものを、異國の王の、うかゞひしは、まことに、おふけなき狂態にぞありける、

かしこきやすめらみくさにいむかひてなやめ奉りしたぶれあしかゞ

〇かしこきやは、恐れ多きなり、やは助辭なり、上にも出たり、〇皇御軍は、いはゆる官軍なり、〇いむかひは、射向にて、敵たふとなり、〇なやめまつりしは、上にも出たり、こゝは足利が不臣、宸襟を惱しめ奉れるなり、〇たぶれば、狂賊なり、〇あしかゞは、尊氏直義をさすなり、建武元年より暦應康永貞和觀應の間あまたたびの戰に、官軍にいむかひ奉りて、いともゆゝしき朝敵にて、かれらが、暴逆のふるまひ、その間の軍ぶみに記して、世の人みなしれる事なり、

いかなるや神のあらびぞ眞木のたつあら山中にきみが御代經し

○神のあらびとは、世の亂れ方の逆しま事などのあるも、皆神の御心のあらびより起るとなればいへり、そのよしは、上の歌どもに所々にいへり、○眞木のたつは、荒山の枕詞なり、○あら山中は、あら野、あら海、などいふと同じく、はるかに人け遠き山中をいふなり、こゝは、吉野の山の奥をいへり、○君が御代經しとは、天皇の、御代々經給ひしをいふなり、いともかしこく、天皇の、さる荒山中に、皇居をしめさせ給ひて、御心にもあらず、御代々を經たまひし事は、掛てもあるまじき、世のありさまにぞありし、これみな足利が罪にて、かの惡神の御心よりおこれるなり、その御代々は、後醍醐天皇、後村上天皇、後龜山天皇三代なり、

から國にこびてつかへてあしかゞのしこのしこ臣御國けがしつ

○醜の醜臣、醜とは、そのものを、にくみ罵ていふ詞なり、上に醜のものしり、又いなしこめ、などの所にいへるも同じ、万葉十七の卷の長哥に、多夫禮たる之許都おきなのともあり、こゝにては、足利義滿將軍より代々、唐土の明王に、媚へつらひて、臣と稱して、かの國の、封を受られたるとを、にくみていへるなり、その間の事ども、すなはち師の馭戎慨言に、くはしく論ぜられたり、ひらき見べし、万國の上にたつべき、尊き御國の大將軍とある人の、いとあぢきなく、さるいやしき唐土の王に、媚諛ひしたがひ給へるは、まことに、尊き御國を、穢せるにて、いとも〳〵口をしきわざなりけり、そのかみ既に此事をいひて、我國開闢已來、異朝の爵を受し例なし、義滿が時に及て、異朝に臣と稱する事は、日本の耻なりと評ぜられたり、

天のしたとこ夜ゆくなす足利のすゑのみだれのみだれ世ゆゝし

○常夜ゆくとは、常闇にて過行なり、天照大御神、天の石屋戸を閇て、さしこもりまし〳〵けるほど、高天原みな暗く、葦原中國こと〴〵に闇し、これによりて、常夜往と、古事記に見ゆ、日本紀には、常闇とあり、さてその時、萬神の聲は、狹蠅なす皆涌、萬妖こと〴〵に發りきとあり、古事記傳を見て、そのよしをしるべし、さて此足利家の末のころ、朝廷、いみじく衰へさせ給ひて、將軍家も、

威光おとろへはてゝ、天の下、亂れに亂れたるありさま、かの神代の、石屋ごもりの常闇の間の、妖怪おこり荒ぶる神あらびたりしに、甚よく似たるゆゑに、常夜行那須とよあるなり、那須は如くなり、かの應仁のころより、京都も、大に亂れ、足利の家人、たがひに權をあらそひ、國々には、大名おの〳〵威をふるひて、天のした、戰なき國もなく、一日片時も、安き心なくて、代々の將軍も、いく度か都を逃出て、近國に漂ひたまひ、朝廷の御政も、よろづ廢れ、百官も、京の住ひ堪たまはずして、遠き山里、或は田舍にさすらへ給ひなどせし、世のありさまはまことにあさましく、常闇に異ならずなんありける、○一首の意、天下のありさま、かの神代の常闇なりし時の如く、みだれにみだれたりし、足利の末の、亂世のありさまは、ゆゝしくいま〳〵しとよめるなり、

いつまでか光かくらむ久かたの天のいは戸はたゞしばしこそ

○いつまでか光隱らむとは、何時までか光の隱れてはあらんとなり、かくらむは、かくれんといふと同じ古言のいひさまなり、○天のいは戸はたゞしばしこそとは、天照大御神の、天の石戸にこもりまし〳〵ける間は、暫の間の事にてこそありけれといふなり、そは、北條の代のことさまど、足利の代の天下のみだれも、かの常闇の如くにてありしかども、それは、何時までか然らん、ほどなく、めでたき靜謐の世に、立かへりたるものをと譬へたるなり、そもそも其亂れは、白川堀川鳥羽崇德の御代のころよりはじまりて、後奈良ノ天皇まで、すべて五百年ばかりの間なるを、天地日月とゝもに、限なき御世の永き間にとりては、たゞ暫くの程の事にて、程なく、正親町ノ天皇の御代より、又やうやう治り始めて、つひに、明らかなる御代に立かへりぬるなり、そのよし、次の歌どもにてしるべし、

しづはたを織田のみことはみかどべをはらひしづめていそしき大臣

○倭文機をは、織といふ詞の枕詞におけるなり、倭文は、上代の一種の服なり、○織田の命は總見院ノ右大臣織田ノ信長公なり、命とは、人をあがめて、某の命といふ、上代の例なり、○いみしき大臣とは、功績ある大臣となり、此大

臣、正親町天皇の御代永祿のころ、尾張の國より出給ひて、京中の騷亂をしづめ、畿內近國を討したがへ、復平の基を開き、內裏を修理し奉りなど、勳功おほいなること、世の人よくしれる事なり、いそしき大臣とは、これを賛てよまれたるなり、

まつろはぬ國等こと〲〵まつろへて朝廷きよめし豐國の神

○まつろはぬは、不服なり、○國らことごとくは、國々盡なり、○まつろへては、平治してなり、○みかど清めしとは、朝廷を崇敬奉護し、京師を再興し給ひしをいふ、とよくにの神は、豐臣太閤秀吉公なり、慶長三年八月十八日薨、同四年四月十八日勅して、豐國大明神とあがめ給へり、

とよ國の神の御いつはもろこしのからのこきしもおぢまどふまで

○御稜威は、武勇神威の御勢ひなり、○おぢまどふは、畏懼惑ふなり、○からのこきしは、こゝは、明の王なり、かの朝鮮征伐のをり、明王が怖おそれけること、御國の軍書にも、明の書どもにも見えて、世の人のよくしれることなり、馭戎慨言にも委くしるされたり、そも〲〵、かの足利將軍の明王にこび諛ひ給ひしと、この豐臣太閤の、御いきほひとを、くらべて思へば、同じ御國にして、世代の盛衰は、いみじきたがひなりけり、

あづまてる御神たふとし天皇をいつきまつらす御いさを見れば

○あづまてる御神とは、字面のごとくなり、○天皇をいつきまつらすとは、朝廷を、崇敬し奉り給へる御事なり、奉らすは、奉り給ふといふと同じ詞なり、○御いさを見ればとは、朝廷を、あがめ敬ひ奉り給へる御事どもを見ればなり、これ、此神君の第一の御功なり、その功績を思ひ見れば、いとも〲〵尊しとなり、

安御代と君のおほ御代をあづまてる神の命ぞかためたまへる

○やす御代は、万たらひて安き御代をいふ、太平の御代の事なり、○神の命ぞ、此ぞもじ、重きてにをはなり、君の大御代を、かく永世太平にかため給へるは、此東照神の命ぞ、しかし給へると、つよくいへる詞なり、○固めたまへるとは、神君の、天下四海の外までも、いさゝかのみだれなく、万代までも、うごくまじく、固めたまへるをいふな

り、此哥も、三四の句を、上へめぐらして心得べし、

東照(アヅマテ)るかみのみことの安國(ヤスクニ)としづめましける御世(ミヨ)はよろづ代

○神君の、大將軍とまし〳〵て、天のしたの御政(ミマツリゴト)申(マウシ)たまひけるより、古(イニシヘ)にもたぐひすくなく、めでたく治(ヲサマ)りたる、此泰平の御代は、万々代の末々までも、動(ウゴ)きなく、變(カハ)るべからぬを、祝ひ奉れるなり、此哥も、三の句を、はじめへうつして心得べし、

明月記に文暦二年五月二十七日朝空晴云々予不レ知下書二文字一事上嵯峨院中院障子色紙形故予可レ書由彼入道懇切雖レ極見苦一染レ筆送レ之古來人歌各一首自二天智天皇一以來及二家隆雅經卿一入レ夜金吾示送云々

○後撰集秋ノ中題しらす

天智天皇御製

秋の田のかりほのいほの苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ

秋ノ田ノ稻ナカルコロ番ナドヲスルタメニ田ノ端ニタテヽアル庵ハ假庵トテサリソメニザツトシタモノデ屋根ナドモ苫ガマバラナレバ秋ノ夜アカシ番ヲシテ居ル我ガ此着物ハシツポリト露ニ濡ルル此ヤウニヌレナガラサウシテ居ルノハワビシイ事ヂヤ

此百首のはしめに作の如く田に稻をつくりそれを守りて辛勞を仕りますは世の中の大切なる儀て上一人百官人下萬民まて世のさかえの根元の事なれは天皇の御製にて百姓の身のうへをよませられたる歌なれば尤道にかゝりておろそかならさる御儀なり

萬葉集十卷　詠露　秋田苅借廬乎作吾居者衣手寒露置尒家留

○新古今集夏部題しらず

持統天皇御歌

春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふ天のかくやま

ハレヤカノヨイ天氣デ御簾ナドヲ卷上サセテアチコチト見ヤレバアノ香具山へ白ウ見エテ服物ヲ乾タワイアリヤ何時ノ間ニヤラ春ガ過テ夏ガ來タソウナ○藤原の都は香久山の近き所なり女帝の大御歌にして衣をほすにつけてよませ給へるをこゝにつられたるは卷頭の歌に農業の事ありて次に衣服の事を次第したるも甚よくえらまれまして心ある事なり

萬葉一卷　藤原宮御宇天皇代　天皇御製歌　春過而夏來良之白妙能衣乾有天香來山

○拾遺集戀ノ三題しらず

柿本人麿

足引の山鳥の尾のしたりをのなかなかし夜をひとりかもねむ

此歌は序歌はしかさりの歌と申て下句長々しといふことをいふために山鳥の尾のと申て長々しい夜を獨寢をする事よといふ戀の歌をはしかさりの詞おもしろくつゝけたるいにしへの歌のすくれたる一體なり歌は詞をかさる事をつとむる物なれはかやうに序歌とてはしかさりにおもしろく作りたるか一體なり

〔一二三〕コノヤウニ長々シイ夜ヲ思フ人ニモアハズモノサビシウタヾヒトリネヤウ事カヨマア一二三ハあし引の一山鳥の尾の二したり尾の上枕詞ナリ釋注スルニ及ハズ（）みかのはらわきてなかるゝいつみ川いつみきとてか戀しかるらむモ同シ

萬葉十一寄物陳思　念友念毛金津足檜之山鳥尾之永此夜乎

或本歌曰　足日木乃山鳥之尾乃四垂尾乃長永夜乎一鴨將宿

○新古今集冬部題しらず　山邊赤人

田子の浦にうち出てみれは白妙の富士の高ねに雪はふりつゝ

さつた山の磯山かけを打いてゝ田子浦といふ所あたり倉澤といふ所入江ありて東の方に高くゆつたりとしたるふしの山に時ならす雪のまつ白にかゝつてあるなとてもおもしろやとおとろかれたることくよめるなり

磯山陰ヲ出ハナレテ田子ノ浦ヨリヅヽト見アグレバ眞白ニサ富士ノ高根ニ雪ガ降テ有ルコトワイ外ノ所ニハ此節雪ノフルト云コトガアラウカサテモメツラシイ面白イトウモイヘヌ氣色ヂヤ

人まろの詠は專らかさり詞なよくよみたるなのせ次に赤人の此歌たゞことにて人一體おもしろく今見たることくよめる是も又歌の一體たる事をおもはせたるなり

萬葉三卷　山部宿禰赤人望ニ不盡山ヲ作歌一首幷短歌　天地之分時從神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎天原振放見者度日之陰毛隱比照月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久曾雪者落家留語告言繼將往不盡能高嶺者　反歌　田兒之浦從打出而見者眞白衣不盡能高嶺爾雪波零家留

右萬葉初句田子の浦ゆ三句ましろにそ終句雪はふりけるとあるを

頭詠新古今に今のことくかへて入られたり白妙のとしてはふりつつととまりたる事いかゝなりモシつゝと留んならは白妙にとこそ有へきをにもしさし合ふ故に歌さまを優にならしめんとて乃とは直されたるなれとことはりさたかならす後世これに説あれととるにたらす

○古今集秋上、是貞のみこの家の歌合の題よみひとしらず

おく山にもみちふみわけなく鹿の聲きく時は秋そかなしき

秋ふかくなり木葉の落るころおく山にて鹿のもみちをふみ分てなく聲をきけは物あはれにあはれを催すとなり蟲の音鳥の聲なとに感をおこすは心有人の情なり四季をり〳〵の移りかはるけしきによりて感するは人情なり物のあはれしり心ある人といふものなり

君ならてたれにか見せむ梅の花色をも香をもしる人そしる

○新古今集題しらず　中納言家持

かさゝきのわたせる橋におく霜のしろきをみれは夜そ更にける

鵲ノ橋ノ上ニアノヤウニ霜ガ置テ眞白ニ見ユルサテハ今宵ハモハヤキツウ夜ガフケタワイ○禁中ニ宿直スル人ノツトメ心ナリ○

淮南子　烏鵲塡レ河成橋以渡ニ織女ヲ　○唐詩蘇味道　鳳皇樓下交天仗烏鵲橋頭敞御筵傳聞銀漢支機石後見金輿出紫微織女橋邊烏鵲起仙人樓上鳳皇飛

大和物語　泉の大將定國卿左のおほい殿時平卿へまうて給へりけり外

にて酒なとまゐりゐひて夜いたくふけてゆうくりもなく物し給へりおとゝおとろきていつくに物し給へるたよりにかあらんなと聞えたまひて格子あけさわくに壬生忠岑御供にあり御はしのもとに松ともしなからひさまつきて御せうそこ申す「かさゝきのわたせる橋の霜のうへを夜はにふみわけことさらにこそとなんのたまふと申すあるしいおとゝあはれにおかしとおほして云々　外々へ寄てまゐられたるにはあらす大内から直にわさわさ御見舞申さるゝなりとなり

古今六帖　鵲のはしに霜ふりさむき夜をひとりやわかれん君まちかねて　夜やさむき衣やうすきかさゝきの行あひの橋に霜やおくらん

萬葉十卷　天飛也雁之翅乃覆羽之何處漏香霜乃零異年

○推古紀六年ニ夏四月難波吉師磐金至ニ自新羅一而獻ニ鵲二隻一乃使養於難波杜因巢枝而産之○和名抄鵲カサヽギ○宋孫穆ガアラハセル鷄林類事ニ朝鮮ノ語ヲ譯シタルニモ鵲ヲ鳴則寄ト云トイヘリ○鵲ハ尾長クハシ短ク水邊ニハスマズ山木ニスム白鷺ノ類ニハ非ズ冬至ノ日巣ヲ作リ初テ春子ヲウム○播磨風土記佐用郡船引山ニ鵲アリ世俗から國カラスト云枯木ノ穴ニスミ春ハ見エ夏ハミエズト云ヘリ○本草綱目ニハ鵲ハ鳥ノ屬なり大サ鴉ノ如ニシテ尾長トアリ嘴クロク爪ミトリ背腹白ク黑白マダラナリ上下シテ飛鳴トイヘリ今西國ニテ朝鮮ガラス高麗ガラスナト云○源氏物語浮船の巻にさむきすさきにたてるかさゝきのすかたと云るは青さきを言るなり夫木そのほか歌によめるはおほく青さきのさまによめり

○古今集四羇旅もろこしにて月を見て

安部仲麿

天の原ふりさけみれは春日なる三笠の山に出し月かも

今かう空をはるかに見わたせは海のうへゝ月か出たさてはあの月は故郷ならの京にゐる時いつも〳〵三笠山から出た月しやわ山とよみてかさりなきあはれなる人情をよめるなり人の情のまことをそのまゝにはる〳〵遠き故郷の日本を思ひやりたるなり

此歌は昔仲麿をもろこしに物ならはしにつかはしたりけるにあまたの年をへてえかへりまうてこさりけるをこの國より又つかひまかりたりけるにたくひまうて來なんさて出たりけるにめいしうといふ所の海べにてかの國の人うまの餞しけりよるになりて月のいさ面白くさし出たりけるを見てよめるさなんかたりつたふる

○土佐日記　廿日夜の月出にけり山の端もなくて海の中よりそいてくるかやうなるを見てやむかしあべのなかまろといひける人はもろこしにわたりてかへりくる時に船にのるへきところにてかの國の人うまのはなむけしわかれをしみかしこのから歌つくりなとしけるあかすやありけん廿日夜月いつるまてそありけるその月は海よりそいてけるこれを見てそ仲まろのぬしわか國にはかゝる

歌をなん神代より神もよみ給ひ今も上中下の人もかやうに別をしみよろこひもありかなしみもある時にはよむさてよめりける歌「あをうなはらふりさけみれは春日なる三笠の山に出し月かもさそよめりけるかの國人きゝしるましくおほえたれさこさのこゝろをさこもしにさまをかきいたしてこゝの詞ったへたる人にいひしらせけれは心をやきこえたりけんいさおもひのほかになんめてけるもろこしさこの國さは詞こさなるものなれと月のかけはおなしことなるへけれは人のこゝろも同し事にやあらん

都にて山のはに見し月なれと波よりいてゝ波にこそいれ

○古今雑下題しらず　喜撰法師

わかいほはみやこのたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり

出家遁世ノ意ヲヨメルナリコレ此遁(しかぞ)リニ難義ニ思ハズ心ヲスマシテ住デ居ル

○古今集春下題しらず　小野小町

花のいろはうつりにけりないたつらにわか身世にふるなかめせしまに

春雨のふるころつれ／＼と物思ひにこもりくらして世上には花見とておもしろくあそふ時分にわか身は世にふるなかめをしてゐていついなにやら花のさかりをいたつらに過してをしきことをしたりこれも身のうきおもひにくらしたるゆゑなりとなり

大平云古今集賞の部　いたつらに過る月日はおもほえて花見てくらす春そすくなきイタヅラはムダになり花見てあそふはいたつらならす花を見すにむなしく過すをいたつらといふなり

○後撰集雑一　あふ坂の關に庵室をつくりて住けるに行かふ人をみて　蟬丸

これやこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬも逢坂の關

逢坂の關といふ所はかねて聞及んだ時より人に逢といふ名の附とある所ぢやと思ふて居たか今此庵室に居てみれは東國北國より四方八方から人か行たり來たり逢たり別たり知もしらぬも皆こゝて逢ふ事ぢやすりやこれか逢坂の關といふわけぢや　詞たくみにおもしろくよめる歌なり

○古今集羇旅　おきの國へなかされける時船にのりていてたつさて京なる人のもさへつかはしける　参議篁

嵯峨天皇承和五年十二月

わたのはら八十島かけてこきいてぬと人にはつけよあまの釣船

ユクサキハイクラトモナクアマタアル島ヲスギテ行クベキ海上へ今船出シタトイフ事ヲ故郷ノ人ニ知ラセテクレイコレアノアチヘ歸ツテユクアマノ釣船ヨ

○古今集雑三　五節の舞姫を見てよめる　よし岑の宗貞

天つかせ雲のかよひち吹とちよをとめのすかたしはしとゝめむ

ヰキフク風ヨアノ天女ガ天ヘイヌル雲ノ中ノ道ヲ吹トヂテイナレヌヤウニシバシトヾメテクレイヨアノ天女ノ舞イ姿ガ面白イ残り多イニモソットアノ舞ヲ見タイ

舞のはては名残をしいものなれはそのおもふきをおもしろくよめるなり

○政事要略

五節舞は浄御原天皇之所製也相傳曰天皇御ニ吉野宮ニ日暮弾レ琴有レ興俄爾之間前岫之下雲氣忽起疑如ニ高唐神女ニ髣髴應レ曲而舞獨入ニ天矚ニ他人無レ見擧レ袖五變故謂之五節其歌曰

乎度綿度茂邑度端左備須毛可良多萬乎多茂度邇廣岐底乎度綿左備須茂

○續日本紀天平十五年五月癸卯宴群臣於内裏皇太子親舞ニ五節ニ云々

皇太子は孝謙天皇なり聖武天皇の皇女なり阿倍ひめみこと申す

五節と申すは十一月新嘗會の時丑寅卯三ケ日

○公事根源に中ノ丑ノ日をは五節の帳臺ノ試といふ常寧殿にて主上御覧あり五節舞姫は五人なり參りの儀式ありうち〳〵まゐるをは曉床といふ皆まゐりとゝのほりて帳臺に出御なり殿上人とも指燭にさふいふ云々

○花鳥餘情　十一月中ノ丑日舞姫參入或曉參トイフ即有帳臺出御　寅日御前試　卯日童女御覧　辰日節會舞姫進舞　裝束且日赤色唐衣寅日青色唐衣　辰日青摺唐衣赤紐日蔭鬘等也

○辰の日舞姫の正日にて豐あかりの節會といふ

○良家の女の嫁せぬをえらみて奉るなり

○後撰集戀三　つり殿のみこにつかはしける

陽成院御製

筑波嶺のみねより落るみなの川戀ぞつもりて淵となりぬる

ツクバ山ノ峯ヨリ段々ヲチテクル谷川ガツモリ〳〵テ美奈の川トイフ深イ川ニナルチヤウドソノヤウニワシガ戀ガツモリ〳〵テ淵ノヤウニナツタワイ

釣殿ノ院は光孝天皇の御所の名なり六條の北東洞院の東にあり綏子内親王居たまひしかはつりとのゝみこと申なり

萬葉十四卷　筑波禰乃伊波毛等抒呂爾於都流美豆代爾毛多由良爾和我於毛波奈久爾

○古今集戀四題しらず　河原左大臣

みちのくのしのふもぢずり誰ゆゑにみだれそめにし我ならなくに

コレ此ヤウニ心ガ亂レテ苦イカ誰故ニ心ガ亂ルヽ我レデハナイソコモト故ニミダレソメタ事ヂヤ

誰ユヱニ外ヘ心ヲチラサウゾオマヘヨリ外ニ心ヲチラスワシヂヤナイゾヘ

みちのくの信夫郡より出す摺衣のもたれたる模樣をいふなり

百人一首の方は四ノ句みたれそめにしとあり 左大臣は源朝臣融公
なり
○古今集春上　仁和の帝みこにおはしましける時に人にわか
なたまひける御歌
君かため春の野に出てわかなつむわか衣手に雪はふりつゝ
ソコモトヘ進上ト存シテ野ヘ出テコノ若菜ヲツンダガコトノ外サ
ムイコトデ袖ヘ雪ガフリカヽツテサテ／＼ナンギヲ致シテツンダ
若菜デゴザル
君か爲に寒氣をいとはす摘たるわか懇切をあらはすなり
○大御父は仁明天皇大御母は贈太政大臣總繼公ノ女澤子御諱は時
康
三代實錄ニ承和十二年二月元服同十三年正月四品元慶八年三月四
日百官捧ニ寶璽鏡劔等於一條宮ニ五日奉レ迎ニ新帝ニ廿三日卽ニ位大極
殿ニ御年五十五　天皇少而聰明好レ讀ニ經史ニ容止閑雅謙恭和潤仁慈寬曠
親愛九族性多風流尤長人事云々
山城國葛野郡田邑鄕立屋ノ里小松原　後ノ田村ノ陵小松原
○此御歌は御位にいまたつかせ給はさりつる時に人に若菜をおく
りたまふなり御同輩にても又下れる人にても人にとあるは同し
齡の賀に人に若菜をおくる事仁和の時代までには所見なしされと
古くよりありし事にても源氏物語卷ノ名に見えたるは全く御賀の

事なり
詞書に給ふとあるは御位にのほり給ひてより後に歌集に載る時に
かけるなり
君かため　天子の御歌にて人に君とよませ給へる事を仁慈の御心
よりといふは此御歌にてはあたらぬ說なり
御子におはしましける時にとあれは天子の御歌にしてといへるは
たかへりされと歌には元正天皇（萬葉）の左大臣橘諸兄公をさして君とよま
せ給ひ枕草子に定子の中宮の清少納言をさして君とよみたまへる
類ひあけてかそへかたし
大和物語に頁峯ノ宗貞にある女の母のよみて出せる歌　君かため
ころものすそをぬらしつゝ春の野にいてゝつめるわか菜と　是も
同し心の歌なり
萬葉
君かため山田の澤にわかなつむと雪けの水に裳の裾ぬれぬ　君か
ため春日の野邊の雲間わけけふの若菜を獨つみつる　六帖に
朝露にしとゝに袖をぬらしつゝ君かためにそわかなつみつる
○右の御歌遍昭僧正に賀をたまひたる時の御歌なりといふもたか
へり僧正の賀は卽位二年の十二月なりこの御歌は親王の御時とあ
れはたかへり
古は人に物を贈るにわか辛勞して心をつくしてふかく切なるよし

をあらはしいへるなり今の代のならひとはことなり

○古今集離別題しらず　在原行平朝臣

たちわかれいなはの山の峯に生るまつとしきかは今かへりこむ

今予ハ京ヲ立テ因幡ノ國ヘ下ルガツノ國ノイナバノ山ノ峯ニハエテアル松ノ名ノ通リテソナタガ此方ヲマツト聞クナラヂキニ又カヘツテコウハサテ

三代實錄に齋衡二年正月從四位下在原朝臣行平爲因幡守云々

○古今集秋下　二條の后の東宮のみやす所とまうしける時御屏風に立田川に紅葉ながれたるをかけりけるを題にてよめる　業平朝臣

ちはやふる神代もきかす立田川から紅に水くゝるとは

但し此歌の上に素性法師の歌あり

もみち葉のなかれてとまる湊にはくれなゐふかき浪や立らむ

コノ立田川ヘシゲウ紅葉ノナガルヽ所ヲミレバトント紅鹿子紅シボリト見ユルワイサテ〳〵奇妙ナコトカナ神代ニハサマ〴〵ノ奇妙ナコトガアツタヂヤガ此ヤウニ川ノ水ヲ紅ノクヽリゾメニシタト云コトハ神代ニモ一向キカヌコトヂヤ

伊勢物語には

むかし男みこたちのせうえうしたまふ所にまうてゝたつた川のほとりにてトアリ

古今六帖霜ノ題に

木の葉みなから紅にくゝるさて霜のあやにもおきまさるかな

クヽリ染ハ纐纈なり又ユハダとも結ひ機の意なり

○古今集戀二寛平の御時后の宮の歌合の歌　藤原敏行朝臣

すみの江の岸による波よるさへやゆめのかよひち人目よくらむ

晝ホンマニ通フ道デハ人目ヲハヾカルモ其筈ノコトヂヤガ〔一二三〕夜る夢ニ通フトミル道デマデ人目ヲ憚テヨケルヤウミルノハドウシタコトヂヤヤラ

同戀三　小野小町

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるかわひしき

○新古今集戀一題しらず　伊勢

難波かたみしかき蘆のふしの間もあはてこの世を過してよとや

短イ蘆ノ節ト節トノ間ハ短イモノヂヤガソレホドノ間モ思フ人ニ逢ハズニ一生コノ世ヲスゴシテシマヘト云フコトカサテモ〳〵

同雜下　津の國におはしてみきはの蘆を見給ひて　花山院御歌

津の國のなからふへくもあらぬかなみしかき蘆の世にこそ有けれ

○後撰戀五　事いてきて後京極のみやす所につかはしける　もとよしのみこ

わひぬれは今はた同し難波なるみをつくしてもあはむとぞ思ふ

内々ヒソカニ心ヲカハシタ中デアツタガ困ツタ事ニナツテトント
ジヤウモナイ難義ナ場ニ及ンダリヤ今トテモ此分デハ生テ居ルカ
ヒハナイスリヤ〔三〕身ヲシマウテナリトモ逢ハウトサ思フワイ

古今
わひぬれはしひてわすれむと思へとも夢といふものぞ人たのめなる
今しはとわひにし物をさゝかにの衣にかゝりわれをたのむる
わひはつる時さへ物のかなしきはいつこを忍ふ涙なるらむ

萬葉四卷　戀死六其毛同曾奈何二人目他言辭痛吾將爲

延喜式
凡難波津頭海中立澪標若有舊標朽折者採求抜去

○古今集戀四　題しらず　素性法師

今こむといひしはかりに長月の有明の月を待いでつるかな

ホツヽケソレヘ參ラウト云テオコシタバツカリニ此九月ノ末ノ夜
ノ長イニサテ待ツホトニ〳〵オソイ有明ノ月ガハヤモウ出タワイ
約束モセナンダ有明ノ月サヘ待タレタニソレニサ待ツ人ハサテモ
サテモ來ヌコトカナ是ハマアドウシタコトゾ

顯昭經に長月の長きに有明の月の出るまて人をまつとよめり

○古今集秋下　是貞のみこの家の歌合のうた　文屋康秀

吹からに秋の草木のしをるれはむへ山かせをあらしといふらむ

吹クト其マヽニ秋ノ草木ガアノヤウニシヲレヽバ尤ノ事ジヤワツ
レデ山ノ風ヲアラシト云コトデアラウ

新撰萬葉
打吹丹秋之草木之芝折禮者郁子山風緒荒芝云濫　古今六帖　吹か
らになへて草木の云々　古今序細注　吹からに野への草木の云々
和名抄孫愐云嵐は山下出風也　和名阿良之

○古今集秋上　是貞のみこの家の歌合の題　大江千里

月みれはちゝに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

月ヲミレバオレハイロ〳〵ト物ガサ悲シイワイオレヒトリノ秋デ
ハナケレド

古今
わかためにくる秋にしもあらねとも蟲のねきけはまつぞかなしき

白氏文集
燕子樓中霜月夜秋來只爲一人長大底四時心緒苦就中腸斷是秋天

○古今集羇旅　朱雀院奈良におはしましける時に手向山にて
よみ侍りける　菅原朝臣

このたひはぬさもとりあへす手向山もみちの錦神のまに〳〵

此度ノ旅ハ御供ユヱヌサモエ用意致サナンダソレユヱ神ノ御心マ

カセニト存ジテ卽チコノ山ノ紅葉ノ錦ヲソノマヽ手向マスル

萬葉三卷　長屋王駐馬寧樂山作歌　佐保過而寧樂乃手祭爾置幣者（サホスキテナラノタムケニオクヌサハ）
妹乎目不離相見染跡衣（イモヲメカレスアヒミソメトソ）

○後撰戀五　女のもとへつかはしける　三條右大臣

名にしおはゝあふ坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかな

逢坂ト云名ニ付イテアルソノ名ノ通リナラバソノ山ノサネカヅラヲ手ニトラヘテ引ヨセルヤウニソカ方ヘクリヨセルヤウニシタイ物ヂヤ人ニハ知ラレズシテシツカニ

内大臣高藤公ノ二男右大臣定方公なり

和名抄五味和名佐禰加豆良　都有二鹹味一故名五味也肉皮甘酸中核辛苦（クシ）

素性家集　音にのみならしの岡のさねかつら人しれすこそくらまほしけれ　後撰戀女のもとにまかりたるに早かへりれといひたりけれは　つれもなき思ひしのふのさねかつらはてはくるをもいとふへらなり

萬葉七三十三枚

をみなへし生る澤邊のまくす原いつるもくりてわかきぬにきむ

○拾遺雜秋　亭子院大井川に御幸ありて行幸もありぬべき所なりとおふせたまふにことのよし奏せむと申して

小一條太政大臣

○百人一首あつさ弓

小倉山峯のもみち葉心あらは今一たひのみゆきまたなむ

小倉山ノ峯ノ紅葉ヲコリヤ此度上皇樣ノ面白イコトヂヤト御賞美アソバサレテ今上ニモ行幸シ玉フベキ所ヂヤト仰ラレルガ有ガタイ御意ヲ承リテマコトニ心アルナラバ今暫ク散ラズニ居テ今一度ノ今上樣ノ行幸ヲモ待ウケ奉レ

貞信公は父は太政大臣昭宣公基經公なり天暦三年八月死贈正一位諡貞信公封信濃國と日本紀略扶桑略記等に見えたり

亭子院拾芥抄に七條坊門北西洞院一町ノ御所ナリ　宇多天皇下居　本朝文粹第八に八月十五夜侍亭子院同賦月影滿秋池

○新古今集戀　題しらず　中納言兼輔

みかのはらわきてなかるゝいつみ川いつ見きとてかこひしかるらむ

〔上〕イツミタコトガアツテ戀シイノヂヤシラヌツヒニ見タコトモナイ人ノ戀シイハカハツタコトヂヤ

三香原泉川トモニ山城國相樂郡ニアリ　聖武天皇ノ久邇ノ都ノ近キ所ナリ

兼輔卿父ハ左中將利基

○古今集冬　冬の歌とてよめる　源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬとおもへは

山里ハイツデモサヒシイガ冬ハサ別シテサビシサガマシタワイ人ノコヌコトヲ人目ガカレルト云ヂヤガ今マデハタマ〳〵見エタ人メ

モ草モ枯タニヨツテサ

宗于朝臣ノ父ハ一品式部卿是忠親王ナリ

○古今集秋下　白菊の花をよめる　凡河内躬恒

心あてにをらはやをらんはつ霜のおきまとはせる白菊の花

アノヤウニ初霜ガオイテ花ヤラ霜ヤラ知レヌヤウニマガウテ見ユル白イ菊ノ花ハタイガイ推量デ折ラバヲリモセウガナカ〳〵見ワケラル丶コトデハナイ

みつねは古今序に甲斐少目　後撰に淡路掾また御厨子所ノ預なりし事あり

○古今集戀三　題しらず　壬生忠岑

有明のつれなく見えしわかれよりあかつきはかりうきものはなし

マヘカタ女ト曉ニ別レタ時ニ有明ノ月ヲ見テシキリニアハレヲ催シテア丶アノ月ハ夜ノ明ルヲモシラヌガホデアノヤウニシツトユルリトシテアルニオレハ夜ガ明ケレバ歸ラネバナラヌコトトテ殘リ多イトコロヲ別レルコトカヤト身ニシミ丶丶ト思ハレタガ其時カラシテヨニ曉ホドツライ物ハナイヤウニ思フ

忠岑ハ三代實錄ニ左近衞將監兼播磨權少掾

壬生臣ハ天足彦國押人命後也　壬生部公ハ崇神天皇ノ後也云々コノ二ノ内イヅレノ子孫ナルニカ知カタシ

○古今集冬　大和の國にまかりけるに雪の降けるを見て

阪上是則

朝ぼらけ有明の月とみるまでによしのゝ里にふれるしら雪

カウ夜ノグワラリト明ケタ時ニ見レバテウド有明ノ月ノ殘ツタ影ト見ユルホドニ吉野ノ里ヘ雪ガフツタ

是則ハ拾芥抄ニ大内記トイヘリ

○古今集秋下　志賀山越にてよめる　春道列樹 父祖シラレス

山川に風のかけたるしからみはながれもあへぬ紅葉なりけり

山川ハアレ風ガモテキテシガラミヲカケタト見エルノハエ流レテユカズニ止マツテアル紅葉ヂヤワイアレハ風ガフクデアマリシゲウ紅葉ガチツテセキカケ〳〵流レテクルニヨツテサラ〳〵ト下ヘエ流レテハイカズニアノ通リニシガラミノヤウニヨドムヂヤ

○古今集春下　櫻の花のちるを見て　紀友則 古今序 大内記

久方の光のどけき春の日にしづこゝろなく花のちるらむ

日ノ光ノノドカナルユルリトシタ春ノ日ヂヤニドウイフコトデ花ハコノヤウニザワ〳〵ト心セハシウチルコトヤラ

○古今集雜上　題しらす　藤原興風

たれをかもしる人にせむ高砂のまつもむかしの友ならなくに

オレハコノヤウニキツウ年ガヨツテ今デハコウ同シコロアヒノ友モネカラ無イガ誰ヲマア相手ニセウゾ山ノ上ノ松ガ年久シイ物ナレバソレヲ友トセウトオモヘドソレモ昔カラノ友デナケレバ相手

ニハナラヌモウ松ヨリ外ニオレガクラ井年經タ物ハトントナイ
この歌の上によみ人しらず
かくしつゝ世をやつくさむ高砂の尾上にたてる松ならなくに
拾遺集につらゆき
いたつらに世にふるものと高砂の松もわれをや友とみるらむ
高砂といふ事古く見えたるは高砂ノサイサユノ尾上ニタテル白玉
玉椿玉柳

○古今集春上
初瀬にまうつるかごにやごれりける人の家に久しうやごら
（マヘカタ長谷ヘマヰル　タヒコトニ　トマツタ　イヘ　久シウ中絶シテトマラス）
でほごへてのちにいたれりければかの家のある
（ニヰテソノ後マタ久シブリテソノ家ヘイタワイソシタレハソノ家ノ亭主ガ中スニハ此宿ハコレコノ）
じかくさだかになんやごりはあるこいひ出して侍りけ
（通リニサマヘカタノマヽデアイカハラズニシッカリトアルツヤトロ上デ申シテ出シマシテゴサレバ）
ればそこにたてりける梅の花をりてよめる
（ソコニサイテアル　ウメノ花ヲ折トリテヨミマシタ）

紀　貫　之

人はいさこゝろもしらすふる里は花そむかしの香ににほひける
人ハドウヂヤヤラ心モカハラヌカカハツタカシラヌカナジミノ所ハ梅花ガ　サワシガ來タレバ　コレ此ヤウニ前々カラノトホリノ匂ヒニ相カハラズ匂フワイ○いさは不知トカキテドウヂヤヤラト云意ナリ
家の集に此歌のかへしあり花たにも同し心にさく物を植けん人の心しらなん

○百人一首あつさ弓

○古今集夏　月のおもしろかりける夜曉方によめる

清原深養父（父祖シラレス）

なつの夜はまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらむ
アヽヨイ月デアツタニ夏ノ夜ノ短イコトハマダヨヒノマデアケルマモナシニハヤ明ケタモノコノヨノミジカサデハ月ハ西ノ山マテイキツク間ハアルマイカアノ雲ノドコラニトマツタコトヤラ
古今題しらす貫之夏のよのふすかとすれは郭公たゝ一聲にあくるしのゝめ

○後撰集秋中　延喜の御時歌めしければ

文屋朝康（父祖シラレス）

白露にかせのふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉そちりける
草ノ葉ニ風カ吹シキツテ露ノチル秋ノ野ヲミレバ糸ニツナガヌ玉ノハラ〳〵トチルヤウニ見エルワイ

○拾遺集戀四　題しらず

右　近

わすらるゝ身をはおもはすちかひてし人の命のをしくもあるか
見捨ラレタワタシガコトハ何トモ思ヒマセヌタヽ末長ウ變ルマイト命ニカケテ御誓約ナサレタガソノ御誓言ニ御ソムキナサレテハ御マヘノ命ガ惜ク存ゼラレマス御氣ノ毒ナコトカナ
大和物語に男のわすれしと萬の事をかけてちかひけれとわすれにける後にいひやりけるとあり

後撰集　人の心かはりければ　　右　近
思はむとたのめし人はありときくいひしことの葉いつちいにけん
同集に法明　わひしさを同し心と聞からに我身をすてゝ君そかなしき

○後撰戀一　人につかはしける　　參　議　等
淺茅生の小野のしのはらしのふれとあまりてなとか人のこひしき
〔一二〕コノヤウニハ思フマイト忍ヒコラヘルケレド堪ヘシノブニモアマリテ戀シイガナゼニコノヤウニ戀シイノデアラウゾ推量シテタベ
古今　淺ちふのをのゝしの原忍ふとも人しるらめやいふ人なしに

○拾遺集戀一　天暦御時歌合　　平　兼　盛
忍ふれと色に出にけりわか戀は物やおもふと人のとふまて
ワカ戀ハ人目ニサウト見ラレヌヤウニ隨分トツヽミカクスケレドモキツウ物思ヒヲスルコトナレバソノヤウスガ見エテ御前ハキツウ物思ヲナサルサウナト人カ見トガメルホドニ色ニ出タワイ

○拾遺集戀一　天暦御時歌合に　　壬生忠見　忠岑ノ男ナリ官位シラレス
戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか
戀ヲスルト云フ我ガ名ハ早ヤ世間ヘパツト立ツタワイ人ハ知ルマイトコソ思フテ居タコトデ有タレ
家集に内のおほせことにて父忠岑か歌奉れとあるにかきあつめて奉る言の葉の中をなく〳〵たつぬれはむかしの人にあひにけるかな
君か代にさかゆかましと思ひせはとはましものをたゝみねの松

○後拾遺集戀四　心かはりける女に人にかはりて　　清　原　元　輔
ちきりきなかたみに袖をしほりつゝ末の松山波こさしとは
古今集に君をおきてあたし心をわかもたは末の松山波もこえなん
兩方カラ深ク思ヒ合フテ居タ時ニハ互ニ袖ヲヌラシテ深切ヲ盡シテ古歌ニ末ノ松山浪モコエナントヨンダ如クニ一生外心ハモツマイトシツカリト云ヒカハシタコトデ有ツタゾイヨウチボエテカ

○拾遺集　題しらず　　中　納　言　敦　忠
逢見ての後のこゝろにくらふれはむかしは物を思はさりけり
逢初テカラ後ノ今ノ物思ヒ苦シサニ引クラベテ思フテミレバ不ヒ逢ニ居タウチノ物思ヒハ物思ヒヲシタトイフテハ無カツタワイ今ノ物オモヒノ苦シサハ大キニマサツタ
萬葉十一　相見者戀名草六跡人者雖云見後爾曾毛戀益家類
古今　あひみすは戀しきこともなからまし音にそ人をきくへかりける

○拾遺集戀一　天暦御時歌合に　　中　納　言　朝　忠
あふことの絶てしなくは中々に人をも身をもうらみさらまし

逢フト云コトガアツテソシテ自由ニアハレモセヌニヨツテ人ヲモ
恨ンタリ我身ヲモイロ〳〵ナゲクヂヤガトント根カラ逢フトイフ
コトガナクバ一ッ向ウコノヤウニ人ヲモ身ヲモ恨ルコトハアルマ
イニ

父は三條右大臣定方公母は中納言山蔭卿ノ女

今昔物語にも朝忠卿の事みえたり

○拾遺集戀　物いひける女の後につれなく侍りて　さらにあはす侍りければ　一條攝政謙德公なり伊尹公なり

あはれともいふへき人はおもほえて身のいたつらになりぬへきかな

アヽ御イトシヤトモ云テクレル人ハナウテ吾身ハハカナク死ンデシマウコトカヨサテモフガイナイコトカナアサマシイコトカナ父は九條右大臣師輔公

謙德公天祿二年十一月太政大臣正二位同三年十一月薨贈正一位諡は謙德公封三川國號一條攝政

みつね集に物の名　比良の山かくてのみわか思ひてのやまさらは身のいたつらになりぬへらなり

元眞集に　戀わひて身のいたつらになりぬともわするな我によりてとならは

○新古今集戀一　曾根好忠

ゆらの門をわたる船人梶をたえゆくへもしらぬ戀の道かな

渡海ヲスル船ハ櫓楫ガ有テコソ自由ニ思フ所ヘ着キモセウケレヅガ戀ノ中ハテウド渡海ノ船ノ櫓楫ヲ失テ思フミナトヘ漕ヨセ爲方モナイ如クニ何ト成ウヤラシレヌ事カナ

由良崎ハ紀ノ國ニアルコト勿論ナリ

萬葉七卷九卷に　妹かため玉をひりふと木の國のゆらのみさきに此日くらしつ　朝ひらきこき出てわれはゆらの前つりするあまを見て歸りこむ　右紀國なりされと曾丹集に丹後掾ニナリテウヅモレ居タルコトヲ述懷してよめる歌多けれは此由良も丹後の由良にてもあるへし　夫木抄廿三に神祇伯顯仲あかつきやをしまかいそのまりするをしまかいその波まくらさこそはふかめよさのうらかせの松風に衣かさねよゆらの船人　新拾遺集旅部に大納言通眞卿とよみ合せたるに付て丹後由良なる事知へし

續古今雑中小野小町　すまのあまの浦こく船の梶をたえよるへなき身そかなしかりける

○拾遺集　河原院にてあれたる宿に秋來るといふこゝを　惠慶法師

八重葎しけれる宿のさひしきに人こそみえね秋は來にけり

荒ハテヽ彌カウヘニ葎ナドカ生茂リテ人モ不來キツイサビシイ所ヂヤニソレニ秋ガ來タソイ今カラハ猶サビシイコトデアラウ

河原院は左大臣融公の家なり拾芥抄に河原院は六條坊門の南萬里

小路東八町云々融大臣の家後寛平法皇の御所四町京極の西號東六
條院

○詞花集戀一　冷泉院東宮と申ける時百首の歌たてまつりけるに　　源　重　之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくだけてものを思ふころかな

風ガアラサニ磯ノ岩ヘ打アツル浪ハウチクダケルガツレナイ人ニ戀ナスル私ガ心モソレト同シコトデコノゴロハ物思ヒチシテ心カサマ〴〵トクダケルコトカナ先ノ人ハツレナイニワシバカリガサ

千載集待賢門院堀川　あらいその岩にくだくる波なれやつれなき人にかくるこゝろは

○詞花集戀上　題しらず　　大中臣能宣朝臣

御垣守ゑじのたくひのよるはもえて晝はきえつゝ物をこそ思へ

禁裡ノ御門ニ番チスル衛士ガ夜ハ御所ニテカヾリ火チ焼クソレチ衛士ノ焼火ト云ガソノ火ハ夜ハモエ晝ハ消ルモノナレバ燃ルトイヒ消ルト云ガ吾ガ物思ヒモヨルハ胸ノ思フ火ガモエ晝ハ打シナレテ心モキエナドシテ燃タリ消タリ晝夜ノ分チナクサマ〴〵ナンギナ物思チスルワイ

令義解　宮衛令云凡理門至レ夜燃レ火（謂内及中外三門皆衛士燃火也）並大器貯レ水臨ニ察諸出入者一

延喜式　凡黄昏之後出ニ入内裏一五位以上稱名六位以下稱ニ姓名一然後之聽レ之其宮門皆令ニ衛士一炬レ火門々亦同

○後拾遺集戀二　女の許より歸りてつかはしける

藤　原　義　孝

君かためをしからさりし命さへなかくもかなとおもひけるかな

逢ヒサヘセウナラト御前ユヱニハ命マデカ惜ウナカツタガ逢コトガ叶フタレハ又末長ゥ逢タイ心ニナツテサウ思フタ命モ又長ヲヘタウナツテ來タワイサテモ不思儀ナコトカナ

新古今廉義公　きのふまてあふにしかへはとおもひしをけふはいのちのをしくもあるかな

○後拾遺集戀二　母にはじめてつかはしける

藤原實方朝臣

かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを

カウトサヘ云タラ御推量モ有フニカウトモユハネバソノヤウニ有ウトハエ御知ナサルマイナア伊吹山ノサシ艾ノモユルヤウニワシガ胸ノ内ハ燃テコノヤウニ苦シイモノチ

さしも草は六帖に

あちきなやい吹の山のさしもくさおのか思ひに身をこかしつゝ

下野やしめしかはらのさしも草おのか思ひに身をやくらん　契りけん心からこそさしも草おのかおもひにもえわたりけれ　なをざりにいふきの山のさしもくさしも思はぬことかやけあらぬ

また双紙にまことや下野へくたるといふ人に
思ひえにかえらぬ人にさせもくさたれかいふきのさとはつけしそ

○後拾遺集戀二　女の許より雪のふりける日かへりてつかはしける
藤原道信朝臣

あけぬれはくるゝ物とはしりなから猶うらめしき朝ぼらけかな

夜ガ明ケレバ日ガクレ日ガ暮レバ又逢コトハモトヨリ知テ居ルガ夜ガ明レバコウ名殘惜サテモ別レネバナラヌスリヤニクイウラメシイモノハ此朝ボラケヂヤワイサテモ〳〵ウラメシイコトカナ

さて此の歌にかへるさの道やはかはるかはらぬとゝくるにまとふけさの沫雪○後撰に御くしけ殿にはしめてあひてつとめて　けふそへにくれさらめやはと思へともたへぬは人のこゝろなりけり

○拾遺集戀四　入道攝政まかりけるに門をおそくあけければ立わづらひぬこいひいれて侍りければよみて出しける
右近大將道綱母

なけきつゝひとりぬる夜のあくるまはいかに久しきものとかはしる

門ノ戸ヲアクル間ヲ待ツモ夜ノアクルマヲ待ツモアケルマヲ待ツト云ハ同シコトヂヤガ今門ノ戸ヲ遲ク開ケタルヲソレデサヘ門ノ外ニ久シウ立テキテ難義ニ有ツタト仰ラルヽカ君ノ御出ノナキ時タヽ獨居テウイコトヤツライコトヤト思ヒ〳〵夜ノアケルヲ待マス間ハイヤマウトノヤウニ長ウ久シウオホユルデ有ウト思シ召ス

○百人一首あつさ弓

カイヨウ御推量ナサレマセ

この歌蜻蛉日記には返歌もあり又詞書の趣も人に異なり委しくは引合て解くには却てまとはしう一首の趣の一興ある事も多し此拾遺の方にておもしろけれはまつ右のことく心得へしこゝには引かす

入道攝政は東三條攝政兼家公なり道綱母は正四位下藤原綸寧女なり

貞信公忠平 ― ○清愼公實頼 ― 廉義公頼忠
師輔 ― 謙徳公伊尹 ― 孝
東三條法興院大入道兼家公
法隆寺太政大臣爲光公 ― 道信
道綱
中關白道隆 ― 伊周（帥同三） ― 道雅
大納言公任 ― 權中納言定頼

○新古今集戀三　中關白かよひそめ侍りけるころ
儀同三司母

わすれしのゆく末まてはかたけれはけふをかきりの命ともかな

イツマデモ變ラヌ心トタノモシウ仰ラレマスケレドソリヤ當座ノ

聞ノコトデソノ御心ガイツマデモ末トゲテツヾキニクイ物ナレバ見ステラレテウイ目ヲ見ヤウヨリイツソコノ御詞ノサメヌ今日ノ内ニ死ンデシマイタウ存ジマス

中關白ハ道隆公儀同三司ハ伊周公也○母ハ從二位高階眞人成忠女從三位貴子ト云

後拾遺和泉式部　こよひさへあらはかくこそおもほえめけふくれぬまの命ともかな　同赤染衛門　あすならはわすらるゝ身になりぬへしけふをすこさぬいのちともかな

○拾遺集雜上　大覺寺に人々あまたまかりたりけるにふるき瀧を見てよめる　　大納言公任

瀧の音はたえて久しくなりぬれと名こそなかれて猶聞えけれ

瀧ノ流レノ絶タハマウヨホドニナルコトヂヤガコノ瀧ハ各別ノ樣子アル瀧デ世上ニ云ハヤス瀧ナレバ水ノ音コソ絶タレソノ名今傳リテヤツパリ名高ウ云ハヤスコトヂヤワイ

右拾遺集には初五文字瀧の糸けとあり千載集には入たり千載には瀧の音はとあり

三代實錄貞觀十八年正月以二嵯峨院一爲二大覺寺一云々宜下隨二太后御願一賜レ額同中大覺寺上

後拾遺赤染衛門大覺寺の瀧殿をみて　あせにける今たにかゝる瀧つせのはやくそ人はみるへかりける　山家集に大覺寺の瀧殿の石閑院へうつされて跡なくなりぬとて聞て見にまかりて赤染衛門か今日たにかへるとよみけんをり思ひ出られて　今日たにもかへるといひし瀧つせのそのをりまてはむかしなりけむ

○後拾遺集戀五　こゝち例ならず侍りけるころ人のもとにつかはしける　　和泉式部

あらさらむ此世の外の思ひ出に今一たひのあふこともかな

コノコロハ病氣デドウヤラ死サウニ思ハレマス戀シ御方ニモ不逢デ死ヌカト思ヘバキツウ心細ウ悲シウゴザリマスセメテ死ンテシマウタアノ世デノ思出艸ニサマウ一度ノ對面ガ出來ルヤウニシタイ

新古今　あらさらん後忍へとや袖の香を花橘にとゝめ置けん

○新古今集雜上　はやくよりわらは友だちに侍りける人の年ころへて行あひたるかほのかにて七月十日ごろ月にきほひて歸り侍りければ　　紫式部

めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな

空ノ月ノ毎月同シ日比ヘモドルコトヲ廻ルト云又何年モアハズニ居タ人ニ久シブリデ逢フコトデモ巡リアフト云フ稚馴染ノ友ダチ今宵思ヒカケズメグリ逢ヒヤレメヅラシヤ御ナツカシヤ年ゴロノ咄モセウト思フテ居ルウチモ程ナクアチヘ行テシマウタホンノ逢タカアハナンダカト云位ノコトデ今宵ノ月モ早ク入テシマウタガ

チヤウドソノヤウニササテ〳〵名殘チシイコトカナ
萬葉三　兒等之家道差間遠烏野干玉乃夜渡月爾競敢六鴨

〇後拾遺集戀　かれ〳〵なる男のおぼつかなくなどいひたりけるによめる

大　貳　三　位

有馬山ゐなのさゝはら風ふけはいてそよ人を忘れやはする

一向此方ヘヨリ付モセヌ人ヨリ却テタマ〳〵云オフサル丶ニハ一向何レノタヨリモセズ不沙汰ナコトナド丶云テオコサレタ自分ノブサタナコトハイハズニヨウマア此ヤウナコトガ云テオコサレタコトカナト腹ガ立テソレデコウ詠シテヤツタ

〔一二三〕ホンニソレヨ仰シヤル通リデアナタハ私チ少シモ御忘レナサレハセヌゾイヤマウ

萬葉ゝ者古今　しなか鳥ゐなのなくれは有馬山ゆふ霧たちぬ宿けなくして　有馬山は有高郡猪名野は川邊なり

〇後拾遺集戀一　中關白少將に侍りける時はらからなる人に物いひわたり侍りけりたのめてこさりければつとめて女にかはりて

赤　染　衞　門

やすらはてねなましものをさよふけてかたふくまての月をみしかな

コノヤウニ見合テ居ズトヨイカゲンニ寢タラヨカツタニ今宵ニ必ト御約束ノコトナレバ遲々ニモヨモヤ御出ノナイト云コトハ有マイト待マニキツウ更テ山ノ端チカク月ノカタフクコロマデムナシウ待テ居タコトカナサテモ〳〵

月をみしかなとあれは月をなかめつゝ月を見つゝなといふへけれとも深更まて寢すに待て居た事を月を見しかなとよめるなれはさの意を得て譯たり

〇金葉集雜上　和泉式部保昌に具して丹後の國に侍りけるころ都に歌合の有けるに小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを中納言定頼つほねのかたに侍りて來て歌はいかゞせさせたまふ丹後へは人つかはしけんや使はまして來すやいかにこゝろもとなくおぼすらんなどたはふれてたちけるを引とゞめて

小　式　部　内　侍

大江山いく野のみちは遠けれはまたふみも見ぬ天のはし立

母和泉式部ハ歌ヨミヂヤト世上ニ云故ニソシガ歌ハ母ノ詠ジテクレルモノト云フラシテソレデ此度ノ歌合ノコトニ付テ母ノモトヨリ便ガアツタカサゾ便チ待カネルデ有ラウナド定頼卿ノ御ナブリナサル丶ガ母ノ下ツテ居マス丹後ヘノ道ハ大江山ト云大イナル山ヤ幾野ト云イクラモシレヌ野チヘダテ丶天ノ橋立トタトウ高イ橋モアル國デソレハ〳〵キツウ遠イ國ナレハアノ方ヘユカレマシテカラマタ一向文ノ便モゴザリマセヌワイナ

萬葉十二　丹波道之大江乃山之眞玉葛たえむのこゝろ我思はなくに　日本紀天武卷大江山あり〇延喜式丹波國生野神社丹後風土記

與佐郡長方有二速石(ハヤシ)里一里中有二長大崎一長二千二百二十九丈廣九丈二尺是名天梯(アマノハシタテ)立

○詞花集春　一條院の御時奈良の八重櫻を人の奉りけるそのをり御前に侍りければその花を題にて歌よめとおほせごとありければ　　伊勢大輔

いにしへのならの都の八重さくらけふ九重に匂ひぬるかな

古ノ都ノ奈良ノ八重櫻ハサゾ見事ナコトデ有ウトヨソ外ニ聞及ンデバカリ居マシタガ今日此處ノ今ノ都ノ九重ノ内マデニホフテ參リマシテ居ナガラコノ花チナガメマスルコトハサテ〳〵アリガタイコトカナ

袋草紙三四十八丁伊勢大輔上東門院ノ中宮さ申す時はしめて參れり輔親の娘なれは歌よむならんと心にくゝ思召の間八重櫻を或人進之御堂殿御前に御座之時件の花の枝を大輔か許へさしつかはして御硯の上に檀紙を置き同くさしつかはしたるに人々目を屬ていかゝ申さ見にへるにとはかりありて硯ひきよせて墨をとりしつかにおしすりて歌をかきて進之御堂とりて御覽するにきよけにかきたりいにしへのならの宮この………殿をはしめたてまつりて萬人感歎宮中鼓動すと云々

砂石集六下へ奈良の都の八重櫻とそこにゆる當時も東圓堂の前にあり當初時の后上東門院興福寺の別當に仰て櫻を召けれは堀て車に入てまゐらせけるを大衆の中に見あひて事の子細を問へはしか〳〵さ答けれは名を得たる櫻を無左右まゐらせらるゝ別當返々不審なり僻事なり且は色もなし后の仰なれはとてこれほとの名木を爭か進すへきさゝめよとてやかて貝ふき大衆もよほして打さめ別當をもはらふへしとのゝしりけり此事によりいかなる重科におこなはれは我身張本に出べしと云ける此こと女院聞召て奈良法師は心なき者と思たれはわりなき文衆なり眞に色ふかしとてさらは此櫻を我櫻と名つくへしさて伊賀國に余野と云庄をよひて花かきの庄と名て牆をせさせられ花の盛七日宿直をして是を守らせらる今に彼庄寺領たり昔はかゝるやさしき事有けりとそ

拾遺集源寛信朝臣　折てみるかひも有かな梅の花けふ九重ににほひまさりて　同冷泉院御時后の宮にて人々翫庭菊といふ題にてよみ侍りける　大藏卿長房

朝またき八重咲菊の九重にみゆるは霜のおけはなりけり

○後拾遺集雜二　行成卿物がたりして侍りけるに内の物いみにこもればとていそぎかへりてつとめて鳥の聲に催されてといひおこせて侍りければ夜ふけりけん鳥の聲は函谷の關の事にやといひつかはしけるを立かへりこれは逢坂の關にて侍るとあればよめる　　清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさし
孟嘗君ガ鷄ノウソ鳴ヲサセテ函谷ノ關守ヲアザムイテ關所ヲ通タヲ其トホリニタトヘ夜深ク雞ノウソナキハ僞ルトモ男女ノ中ラヒニアル逢坂ノ關ノ關守ハ世ニ函谷ナドノ關トハ違ツテサヤウナウソ鳴ニダマサレテユルシテ通シハスマイ
史記孟嘗君列傳　孟嘗君至關〻法雞鳴而出客孟嘗君恐追至客之居ニ下座ニ有能爲雞鳴ニ而雞盡鳴遂發傳書

○後拾遺集戀　伊勢の齋宮わたりよりのぼりて侍ける人にしのびてよはひけるをおほやけも聞こしめしてまもりめなどつけさせ給ひて忍びにも通はすなりにければよみ侍りける

左京大夫道雅

今はたゝ思ひ絶なむとはかりを人つてならていふよしもかな
コレマデハシミ〴〵ト馴染テ心ヲカハシタ中デアツタニ今ハ公ニモ聞シメサレテマモリメノ番ナド付ラルヽホドノ事ニ及ンダレバ何ニトモセン方モナイ此分デ絶ハテルコトハフガイナイクチヲシイコトヂヤセメテ今一度外ノ事ハ云ハズトモモウハイツソトヤカク思ハズニ絶テシマハウト云フ一言ナリトモ直々對面ニドウゾシテ云タイコトカナ
後撰敦忠　いかにしかく思ふてふことをたに人つてならて君にかたらん

○百人一首あつさ弓

詞花に　よそなからあはれといはんことよりも人つてならていとへとそ思ふ

○千載集冬　宇治にまかりて侍りける時よめる

權中納言定頼

朝ほらけうちの川きりたえ〴〵にあらはれわたるせゝの網代木
宇治川ノアタリハ總體トウモイヘヌ景色ノヨイ所ヂヤソレニ今見レバ夜ガクワラリトアケテ川筋一面ニ立テアル霧ガアソコヽトギレガ出來テソノ間カラ川ノセヽニ立テアル網代木ガグン〳〵ト顯ハレテ來ルサテモ面白イケシキヂヤ

○後拾遺集戀四　永承六年内裡歌合に

相　模

うらみわひほさぬ袖たにあるものをこひにくちなん名こそをしけれ
恨ミテモ〳〵ツレナイ人故ナンギヲシテ常住泪ノカワクヒマモナイデ袖ガ朽ルガソレサヘツライニ其上ニ此儘デ戀ニ朽テシマハウ名ガサイカニモ惜イヲイナ

○金葉集雜上　大峯にて思ひかけて櫻の咲たるをみて

前大僧正行尊

もろともにあはれと思へ山さくら花よりほかにしる人もなし
大峯ノ山中ヘ來テハ總體ガ目ナレヌ樣子デ心ホソイヤウニ思フ所ニ思ヒカケナク遅櫻ガ咲テアルヲ見付タ所ガ櫻ハモトヨリテ近ク

見馴タル物ナレハチヤウド知ラヌ所デ近付キニ逢タヤウニ思ハレテ櫻花ヨオレモソチヲ近付チヤト思フホトニソチモオレチウトカラズムツマシウ思フテクレカウ云フ所ニテハソチヨリ外ニ近付ハナイコトヂヤ

○千載集雜上　きさらぎばかり月のあかき夜二條院にて人々あまたゐあかして物語などし侍りけるに周防内侍よりふして枕もがなといふをきゝて大納言忠家これを枕にとてかひなを（みすの下より）さし入て侍りければ

周防内侍

春の夜のゆめはかりなる手枕にかひなくたゝむ名こそをしけれ

といひ出し侍りければ大納言忠家　契ありて春のよふかき手枕をいかゝかひなき夢になすへき

春ノヨロ月ノサヤカナ夜ニ二條院テ人々ニアマタ打寄ツテ夜明シ咄ヲシテ居タ時枕ナトヘモタレカヽツテ枕カ有タラヨカラウトソツト云タラ忠家ソカ御簾ノ下カラ腕ヲサシ入テ是ヲ枕ニト申玉フニヨツテ詠マレタ人腕ヲ枕ニイタシタラウキ名ガ立ツハ知レテアル春ノ夜ノ短イホンノ夢ノ間ホトノ手枕ヲシテソンナ何ノカヒモナイチヨツトシタコトニ名ノ立ツコトカサ惜イワイナア

○後拾遺集雜一　例ならずおはしまして位などさらむとおほしめしけるころ月のあかゝりけるを御覽して

三條院

心にもあらてうき世になからへはこひしかるへき夜はの月かな

世中ニウキ事トモ多ク御心地モ例ナラス今ハ位ニ居ルモ心ナラヌヤウニ思ハレテ物思フヲリカラ十二月ノ十日アマリ清明（サヤカ）ナル月ヲツクヾヽナカメ居ルニイヨヽヽ心細ク物悲ウテ遠カラヌウチニ位ヲモサラント思フガソシテモシオモシロカラヌ世ニ長ラヘテ居タナラバカウシテ居ル今宵ノ月ガ戀シウ思ヒ出サル、テ有ウト思ハルヽテモマア清（サヤ）カナ月カナ

○御拾遺集秋下　永承四年内裡歌合によめる

能因法師

あらしふく三室の山の紅葉はたつたの川のにしきなりけり

三室山ノ紅葉ヲ嵐カ吹ナラシテミナ此立田川ヘ散テ來テ一面ニ流ルチヤガスリヤ今ハ三室山ノモミヂテハナイコノ立田川ノ錦ヂヤワイ

○後拾遺集秋上　題しらず

良暹法師

さひしさにやとを立出てなかむれはいつこもおなし秋の夕暮

アマリサビシサニ宿ヲ立出テアチコチ見テモ秋ノ夕ハ同シコトデドコトテモサヒシイケシキヂヤサテモヽヽサビシイコトヂヤ

○金葉集秋　師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風といふことをよめる

大納言經信

夕されは門田の稲葉音つれてあしのまろやに秋風そふく

片邊所ノ蘆バカリテコシラヘタ蘆ノ丸屋ノ賤ガ住所ノ秋ハサビシイ事ヂヤ門田ノ稻葉ガサワ〳〵サワ〳〵トシテ秋風ガサ吹ワイ

〇金葉集戀　堀川院の御時艷書合によめる

祐子内親王家紀伊

音にきく高師の濱のあた波はかけしや袖のぬれもこそすれ

御マヘハ聞及ンダ世間ニ名ノ高イアダ人デ高師ノ濱ノアダ浪ヂヤサウイウアダ人ニ思ヒハカケマイゾヤイヤヂヤ〳〵モシ思ヒカケタナラサキテハ物思ヒヲシテ泪ニ袖ヲヌラシテナンギナコトニ及ハウモシレヌ

〇後拾遺集春上　うちのおほいまうちきみの家に人々酒たうへて歌よみ侍りけるに遙に山の櫻を望むこいふこゝをよめる

前中納言匡房

高砂のをのへの櫻咲にけりとやまの霞たゝすもあらなむ

アレ向ヒノ山ノ高イ所ニ櫻ガ咲タワイサアコヽカラ見テ樂マウト思フガモシアノ花ヨリ一段コチラノ山ニ霞カ立テハ見エニクイチヤラウドウゾ立タズニ有テクレヽバヨイ

大江音人—千古（伊與權守）—維時（中納言）—齊光（三木左大辨）
—匡衡—擧周—成衡—匡房

うちのおほいまうち君は後二條關白師通公なり

〇千載集戀二　權中納言俊忠の家に戀十首の歌よみ侍りける時祈不逢戀こいへるこゝろを

源俊頼朝臣

うかりける人をはつせの山おろしはけしかれとはいのらぬものを

初瀬寺ニハ人々ワカ戀ノ叶ウヤウニト願ヲカケルコトヂヤワシモ日頃ツレナイ人ヲドウゾ心ノ和ラグヤウニナレカシトコノ寺ノ佛ニ願ヲカケタカドウイウコトカ人ノ心ハ和ラギハセイデ猶イヨイヨ此山ノ山オロシノヤウニ烈シウナツテ中々ヨリツカレモセヌケシキヂヤ此寺ノ佛ヨ此ヤウニ烈シウナレカシトハイノリハセヌモノヲ

〇千載集雜上　僧都光覺維摩會の講師の請をたび〳〵もれにければ前太政大臣に恨まうしけるをしめぢがはらこ侍りけれご又そのこしももれにければつかはしける

藤原基俊

契置しこせもか露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

世悴カコトニ付テ御賴申上タレハしめぢか原ト仰ラレマシタハカノさしもくさノ古歌ノ心デ拙者カ承知シテ居ルカラハ遲カレ速カレ捨置ハ致サヌトノ難有御意（ミコヽロ）サシト存シマシテ眞カネテ御約束下サレタさしもくさノ御一言ノ言葉ノ露ヲ命ニイタシテドウゾ〳〵ト心ノウチニ念願シテ居マス内ニアヽハレ今年ノ秋モ何ノ御沙汰モナシニ空ク暮ユクコトカトキツウ殘念ニ悲シウ存マス御推量下サ

レマセ

續日本紀寶字元年閏八月紫微內相藤原朝臣仲麿等天智天皇ヨリ大職冠ニ賜リテ傳ヘタル功田百町ヲ興福寺ニ入テ維摩會ノ助トセント請フ表ニ云今在山階寺山城山階鄉維摩會者是內大臣鎌足公之所起元明天皇和銅三年遷ニ大和奈良一

續日本後紀云承和六年十二月勅以經興福寺維摩會講師者宣爲ニ宮中最勝會講師一自今以後永恆例

延喜式玄蕃式云興福寺維摩會十月十日始十六日終其聽衆九月中旬僧綱管定先經藤原氏長者定之

興福寺の維摩會は十月十日より十六日までの間ありその諸師の請を蒙る僧は宮中の最勝會の講師にもせらるゝ例にて僧の望む事なり興福寺は藤家の寺にて藤氏の長者の處分なる故に基俊も子の光覺に此事をせさせて給へと請申したるに法性寺殿わかかくてあらんには思ひたのみてよとの心にてしめちか原と仰られたれはよもことしはたかはしと思ひしを其さたなくて九月も過ゆくをなけきたるなり十月に行はるゝ會なれは九月に講師さたまる例なれはなりしめちか原といふことは新古今釋敎歌淸水觀音ノ歌トテ猶たのめしめちか原のさしも草われ世の中にあらんかきりは

六帖　下野やしめちか原のさしもくさおのか思ひに身をやゝくらん

袋艸子　あふと見てうつゝのかひはなけれともはかなき夢そ命なりける

〇詞花集雜　新院位におはしましゝ時海上眺望といふことをよませたまひけるによめる

法性寺入道前關白太政大臣

わたの原こきいてゝみれは久方の雲井にまかふおきつしら波

アヽ晴ヤカナ面白イコトヂヤ海ノ上ヘ船ヲコキ出シテ沖ノ方ナドヲハルカニ見ワタセハ〔三〕天マデ繼イテ見エテソシテ雲ト波トガ一ツニ混フヤウニ見ユル惣體面白イドウモイヘヌ氣色ヂヤ

〇詞花集戀題しらず

崇德院

瀨をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末にあはむとそ思ふ

山川ノ早瀨ノ岩ニツキアタリテ兩方ヘ別レテ流レル水ハ末デハ行合フモノヂヤガ我中モ今ノ內ハ此ヤウニ妨ラルヽコトガアッテ逢コトハナラヌガ末デハ又逢ウトサ思フワイ

御父ハ鳥羽天皇御母ハ待賢門院璋子保安四年正月受禪御歲五同二月卽位永治元年十二月讓位長寬二年八月讃岐國崩

萬葉四卷　一瀨二波千遍障良比逝水之後毛將相今爾不有十萬

同十一卷　白高山出來水石觸破衣余妹不相夕者

〇金葉集冬　關路の千鳥といふことをよめる

源　兼　昌

あはぢ島かよふ千鳥のなく聲にいく夜寝覺ぬ須磨の關守

寝覺ハ惣體物悲シイ物ヂヤガ須磨ノ關守ハカウ云アハレナル所ニ住テ居テ淡路島へ毎夜〳〵鳴テユク千鳥ノ聲ハ物サビシイアハレナ聲ヂヤガ冬ノ夜ノ寒ク折カラ千鳥ノナク聲ニマアイク夜寝覺ヲ爲タゾイ須磨ノ關守ヨコリヤ

○新古今集秋上　崇德院に百首の歌奉りける時

左京大夫顯輔

秋風にたなびく雲の絶間よりもれいづる月のかげのさやけさ

秋ノ空ノ村雲ヲ風カ吹テ雲ノ間タカラ見ユル月ハ一向ニ雲モ何モナイ空ノ月ヨリモケツク格別ニ光ガマシテ見ユルサテ〳〵今宵ノ月ハドウモイヘヌケシキヂヤ

正三位修理大夫顯季──左京大夫正三位顯輔──太后大皇宮大進正四位下清輔

○千載集戀　百首の歌奉りける時

待賢門院堀川

ながゝらむ心もしらず黒髪のみだれて今朝は物をこそ思へ

末長ウイツマテモノ御心ガ知レネバ今朝ハコノ髮ノ亂レタヤウニイロイロト心ガ亂レテ物思ヲサイタシマスワイナ

堀川ハ神祇伯顯仲女ナリ

門院ハ閑院大納言公實卿女白河帝ノ御養女鳥羽院ノ后ナリ

○千載集夏　曉聞郭公といへる心をよみ侍りける

後德大寺左大臣

ほとゝぎす鳴つるかたをながむればたゞありあけの月ぞのこれる

アレ時鳥ガ鳴タハトテメツラシフ思フテ鳴イタ方ヲ見ヤレバ時鳥ハカゲモ形モ見エハセイデ只有明ノ月バッカリガサ空ニ殘リテアルタッタ今ノコトヂアツタニドチヘマア往タコトヤラ

祖父ハ德大寺左大臣實能公父ハ大炊御門右大臣公能公ナリ後德大寺ハ實定公ナリ

○千載集戀題しらず

道因法師

おもひわびさても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり

人ノ命ト云物ハ全體モロイモノナレドカハツタモノデコレホドウイツライト思フテ（思ひわひ）身モ世モアラレヌヤウデモソレデモ又持コタヘテカウシテ居ルノニ ソレニマアツライニエウ堪ヘヌ物ハコノ涙ヂヤワイ

道因ハモト從五位下右馬介敦頼ト云

○千載集雜　述懐百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれおもひいる山のおくにも鹿ぞなくなる

世ノ中ト云モノハサテモ〳〵ウイツライモノデドウゾ遁レウト思フテモノガレヤウモナイ物ヂヤ山ノ奥ヘ引籠ツタナラト思ヒ入ツタコノ山ノ奥テモサ鹿ガナクアレ鳴クカラハコノ山ノ奥デモサヤツハリ悲イコトガアルヂヤワイサテモ〳〵

らつほ物語山も野も猶らしとへは白眞弓いるへき方のおもほえぬかも

大納言忠家——權中納言俊忠——俊成

○新古今集雜下題しらず　藤原清輔朝臣

なからへは又このころやしのはれむうしと見しよそ今はこひしき

昔モ此ヤウニ憂ツライト思フタコトデ有タケレドソレモ昔ト成テ遠サカツテ來タレハ今デハ又ソノ時ノコトガ戀シウ思ヒ出サレルスリヤ今此ヤウニ差當ツテハ憂イツライト思フコトガ多ケレド今カラモ存生テ居タラバサキデハ又コノ比ノコトガナツカシウ思ヒ出サルヽデカナ有ウサウ思ハルヽ

家集ニハ三條の内大臣いまた中將にておはしける時つかはしけるトアリ

○千載集戀　戀の歌とてよめる　俊惠法師

夜もすから物思ふころは明やらて閨のひまさへつれなかりけり

コチノ思フヤウニ成テクレタノカツレナイト云物ヂヤガソノツレナイ人ユエ夜ガナ夜一夜物思ヲスルデサテ〳〵夜ガ長ウテ難儀ナコトヂヤ寢屋ノ戸ノ透間ノシラムヲマテヽトモ〳〵サテ〳〵コチノ思フヤウニハナウテマタ夜ハ明ケテクレヌツレナイコトカナ人ノツレナイハカリデナシニネヤノ透間マデガサツレナイワイ

俊惠ハ俊頼朝臣ノ子ナリ

後拾遺増基沙汰　冬の夜は幾度はかりねさめして物思ふ宿のひましらむらん

○千載集戀五　月前戀といふこゝろをよめる　西行法師

なけゝとて月やは物をおもはするかこちかほなるわか涙かな

物思ヒヲシテ月ヲミレバ泪ガコボレル此ヤウニナゲヽトテ月ガ物思ヒサセルデハナイニ何ゾヤ月ガ物思ヲサセルコトノヤウニ月ヲミレバカコツケガマシウ泪ガコボレルコトカナ

台記公ノ記ナリ左大臣賴長康治元年三月十五日云々西行法師來云々抑西行者本左兵衛尉義清也左衛門大夫康清子以重代勇士仕法皇自俗時入心於佛道家富年若心無愁遂以遁世人美之歎之也

百練抄ニ保延六年十月十五日西行法師出家廿三藤原秀郷朝臣後也

○新古今集秋下　五十首の歌奉りし時　寂蓮法師

村雨の露もまたひぬ槇のはにきりたちのほる秋の夕暮

深山ハイツデモサビシク秋ノ夕ハドコトテモサヒシイナラヒヂヤ深山ノ秋ノ夕ハ又格別サビシイアレ一シキリ降タ村雨ノ露モ雫モマダカワカヌウチニアレ又霧ガ立テ一面ニコクラウナツテ來タワイ眞木立山ノ秋ノ夕暮方ハサビシイ氣色ナ物ヂヤサテモ〳〵楚辭ニ山峻高而以蔽日今下幽晦ノ以多雨トアリ

寂蓮ハ左中辨中務少輔從五位下定長ト云父ハ俊海阿闍梨俊成卿ノ

第十
リ

○千載集戀　攝政右大臣の時の家の歌合に旅宿逢戀こいへる
こゝろをよめる　皇嘉門院別當

難波江の蘆のかり寢の一夜ゆゑ身をつくしてや戀わたるへき

難波ソタリノ旅ノ假寢ニ逢タコトハ只一夜ノコトヂヤニイツマデモコノヤウニ心ヲ苦シメテ戀慕テバカリ過ヤウコトカヨ

難波は旅の人の泊る所水派に串ト云物もあれは身を盡すこ云詞に用ひてそして身を盡すこは一生の命をすこすこ云詞にてそれを心を盡し苦める事に用ひてそして假寢と云も一夜と云も蘆の縁の詞なれはとり合せて歌によんた物ちや

○新古今集戀　百首の歌の中に忍戀を　武子内親王

玉の緒よたえなはたえねなからへは忍ふることのよわりもそする

命ノコトヲ玉ノ緒トイヘバ玉ヲ貫イタ緒ニタトヘテ絶ユトモ長フルトモヨワルトモ縁語ヲ用ヒテヨムハイノ顯ハレテハナラヌト忍ヒカクス心ツカヒヲ身モ次第ニオトロヘテ堪ヘカネルヤウニ思フ此通リデ存生テ居タナラカクシ忍フコトハダンダンヨワラウモシレヌ一向ウ今ノ内ニ死ンテシマヘヨコリヤ

御父ハ後白河院御母ハ從三位成子大納言季成卿女ナリ

大系圖續世繼物語ニ齋院准三宮トアリ

○千載集戀　歌合し侍りける時戀の歌こてよめる

○百人一首あつさ弓

見せはやなをしまのあまの袖たにもぬれにそぬれし色はかはらす　殷富門院大輔

松島ノ雄島ノ磯ニアサリスル海人ノ袖ハヌレヌレテ大ヌレニ濡テアル袖ダヤケレド ソレデサヘ色ノ變ルホトノコトハ無イニ我ガ袖ハヌレヌレニ色マデガサカハツタ コレガァノツレナイ人ニ見セタイナァ

門院ハ後白河院皇女ナリ大輔從五位下信成女ナリ

後拾遺　まつしまやをしまかいそにあさりせしあまのそてこそかくはぬれしか

○新古今集秋下　百首の歌奉りける時　後京極攝政前太政大臣良經公

きりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしき一人かもねむ

獨寢ハ寒イ物ヂヤガ蟋蟀モシキリニ鳴テキツウ寒イ霜夜ニ狹莚ト云テサムイヤウニ聞エル床ノ上ヘ着ル物ノ片一方ヲ敷イテ一人寐ヤウコトカヨ

伊勢物語　狹莚に衣片敷今夜もやこひしき人にあはてのみねん

萬葉十　秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之本蟋蟀鳴毛　和名抄蟋蟀一名蛩蛬木里木里須又蜻蛚古保呂木

○千載集戀　寄石戀こいへる心を　二條院讚岐

わかそては塩干に見えぬ沖の石の人こそしらねかわくまもなし

ツレナイ人ユヱ物思ヲシテ泪ニヌラスワタシカ袖ハ沖ノ深イ底ニ
アル石ト同シコトデ人コソ知ラネ常住カワク間トテハナイ
二條院ハ御諱ハ守仁　讃岐ハ源三位頼政ノ女ナリ

〇新勅撰集覊旅　題しらず　　鎌倉右大臣
世の中は常にもかもな渚こくあまのをふねの綱手かなしも
コノ海邊ヘ來テ見レハ面白イ氣色ヂヤ海人トモノ小船ヲイクツモ
漕キアルイテ大キナル綱ヲオロシテイロ〱サマ〱トシテ彼方
ヘ此方ヘト綱手ヲ引キユクコノ渚ノ氣色ハサテ〱面白イコトヂ
ヤマア此ヤウナコトガ常住見テ居タイ此世ノ間ハイツマデモ存生
居ラレル物ナラヨイ
古今　みちのくのいつくはあれと塩かまの浦こく船のつなてかな
しも

〇新古今集秋下　擣衣のこゝろを　　參議雅經
みよし野の山の秋風さよふけてふる鄕さむく衣うつなり
吉野ハ峯ノ秋風ガスゴウ吹テ寒イニ夜フケテ起居テキケバアレア
ノヤウニ衣ヲウツ音ガササムウ聞ユル
古今　故鄕はよしのゝ山しちかけれは一日もみ雪ふらぬ日はなし
又　みよし野の山の白雪つもるらし古鄕さむく成まさるなり

〇千載集雜中　題しらず　　大僧正慈圓
おほけなくうき世の民におほふかなわか立杣に墨染の袖
我立杣ニ住ンデ天下ノ萬民ヲ救フ祈念ヲスルコトナレバ萬民ニ袖
ヲオホフト云ヂヤガ智德モナイ余ガ此セバイスミゾメノ袖ヲ天下
ノ萬民ニオホフト云ハ分ニ不相應ナコトカナ
新古今釋敎　比叡山中堂建立の時　　傳敎大師
阿耨多羅三貌三菩提の佛たちわか立杣に冥加あらせ給へ法華法師
品々云樂王當レ知如來滅後其能ク書持讀誦供養說爲他人者如來則爲
以法衣覆レ之

〇新勅撰集雜　落花をよみ侍りける　　入道前太政大臣
花さそふあらしの庭の雪ならてふりゆくものはわか身なりけり
櫻ノ花ヲ吹チラス嵐ノフク庭ヲ見レバ見事ナ花ガアレアノヤウニ
雪トフリユクガ惜イコトカナト思ヘバホンニ此雪デハナウテ壯ス
ギテフリユクモノハコレ此ソガ身ヂヤワイ
入道ハ西園寺殿公經公ナリ父は坊城内大臣實家公母は前中納言基
家卿の女なり

〇新勅撰集戀　建保六年内裡歌合歌　　權中納言定家
こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ
來モセヌ人ノ戀コガレテ來ルカ〱ト待ツタクレハ松帆ノ浦デヤ
ク藻鹽ノヤウニ身モ胸ノ思ノ火ニ焦レテキツウ苦シイ
萬葉六卷　神龜三年九月十五日幸ニ於播磨國印南野ニ時笠朝臣金村
作歌一首並短歌

名寸隅乃船瀬從所見淡路島松帆乃浦爾朝名藝爾玉藻苅管暮菜二藻鹽燒乍海未通女有跡者雖聞見爾將去餘四能無者大夫之情者梨荷手弱女乃念多和美手徘徊吾者衣戀流船梶雄名三玉藻苅海未女等見爾將去船梶毛欲浪 高友

○新勅撰夏 寛喜元年女御入内御屛風に

從二位家隆

風そよくならの小川のゆふくれはみそきそ夏のしるしなりける

風ガソヨ〳〵ト楢ノ葉ヲ吹ク夕方ニ楢ノ小川ヘ來テミレバケシカラヌホト涼シイ此涼シサハトント秋ヂヤト思ハレルガ今夜ハ六月晦日デ御祓ヲナシテ居ルヲ見レバアノミソギバッカリガサ夏ヂヤトイフシルシヂヤワイ　楢小川は山城葛野郡

後拾遺　夏山の楢の葉そよく夕くれはことしも秋のこゝちこそすれ

六帖　みそきするならの小河の川風にいのりそわたるしたにたえしと

○續後撰　雜題不知

後鳥羽院

人もをし人をうらめしあちきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は

世ノ中ハ叡慮ニマカセヌコトノミニテ思フタリトテ何ンノ益モナキ世ナレトモトヤカクヤトアヂキナイ物思ヒヲスル朕カ心ニハ多衆ガ中ニハソレト顯露ハレネトモ道ノ誠ヲ忘レサル臣下モアッテアッパレヲシイ者カナト感シラルヽモアリ時ノ勢ニ引レテハサウハ有マジキ者ヂヤソノ意得ヌ者ヂヤト思ハルヽモ有テ道ヲ忘レテオノヅカラ不忠不義ナルモ有ルハニクイ物ヂヤ怨メシイ物ヂヤト思ハルヽモアルワイ

惣體コノコロハ鎌倉ノイヤシキ北條メガ恣ニ天下ノ政ヲミダラシテ日日ニ朝廷ノ衰ヘユクコトヲ心ニカケテヨンダホドニサウ思フテキケカシ

源氏物語須磨卷　かゝるをりは人わろくうらめしき人おほく世の中はあちきなき物かなとのみ萬につけておほす

○新後撰集題不知

順德院

百敷や古き軒端のしのふにも猶あまりある昔なりけり

百敷ハ宮城ヲ云ナレトモソレハタヾ朝廷ト云コトニキカセタルモノヂヤ今ノ内裡ノ宮殿ニ垣衣草ノ生スルホトノ舊キ軒端アルモアラザレトモ昔ヲシノブト云ハウ料ニふるき軒端の忍ふ草トイフタモノヂヤ今ノ世ノ朝政ノオトロヘタルヲ深ク悲シク思フニヨッテ昔ノ朝廷ノ御昌榮タリシ盛ノコトヲ思ヒ出スト云ヂヤソノコトハ思フテモ思フテモマダアキヽラヌホドノ昔ノウラヤマシサヂヤ

古事記雄略天皇大御歌　毛々志紀能淤富美夜比登波云々．萬葉一に百磯城之大宮處　和名抄垣衣之乃布久佐

○百人一首あつさ弓

本末のこゝろもしれと梓弓引てをしふる古ごぞこれ

たけちのおほ平

馬名合解

此馬の名合といふ歌巻は、いづくいかなる家につたはりつるものといふことはしらねど、夫木集廿七馬の歌の處に、源順家馬毛名歌合、あしはらのつるふち馬、一雲間よりとぶあしはらのつるふちに、なにはのあしげおひつかんやはとあればゞ此大夫の昔の歌としられたり、此人は後撰集の撰者、梨壺の五人のひとりにて、漢倭の學びにわたれる人なり、和名類聚鈔の撰述者たること、是また世に人のよくしれることなり、源順家集とて坂本あれど、其うちに此馬名の歌は見えざれば、又は別人の歌にて、此大夫の家にてもてあそびたる歌合にてもあらむ、夫木のさまも順の家の馬毛名歌合と詞かきに見えて、そのよみぬしの姓名はしるさゞれは、さもおもはる、かくて此歌巻のさま、いと古代のかきざまにて、假字の體まぎらはしきもありて、寫しあやまれる所々もありと見えて、歌の意ときがたきことごもあり、かたはらにかきそへたるも、よきもありよからぬもあり、猶よく考ふべきことなり

一番　左　山葉緋　ヤマノハノアケ

ほの／＼と山のはのあけはしりいてゝこのしたかけを見てもゆかなん（すきてゆくかな）

初句二句は、夜のあけてあかくなりたるをいへるにて、さてあけといふ馬の名をいへるなり、四ノ句は樹の下蔭といひて、鹿毛の馬をいふなり、一首の意、あけの馬の走りいでて、鹿毛の馬より先立てゆくよしなり、結句はすぎてゆくかなとあるかたよろし

右　木下鹿毛　コノシタカケ

山のはのあけてあさ日のいつるにはまつこのしたのかけそさきたつ

上の句は、山の端の明く（アカ）なりてといふにあけといふ馬の名をいへるなり、下の句は、木の下の影のさきたつといふなり、朝日の出たる曙の光に、山の木の下に日の影の見えあらはるゝよしにいひて此歌右かたなれば、鹿毛の馬が先きにたちて勝たりといへるなり

二番　左　海河原毛　アマノカハラケ

ひさかたのつきけそらよりわたるらんあまのかはらけ寄と（よせて）ゝめてん

つき毛を月にたとへて久かたのとつゞけたるより、空よりわたるらむともいへるなり、下ノ句は河原毛の馬を、これも天の河原といひかけたるなり、結句の景は、或人曰、景の字なるへしといへり、さては景といふ字を詞のかけといふことに借てかけるなるべし、かたはらによけてとあるも、かけかといふなるべし、此うたは久方の月毛が空よりわたるによりて、天の川原毛はかけとゞめんといふなり

右　比佐加多の月鹿毛　ヒサカタノツキカケ

雲間よりわけやいつらむ日さかたのつきけそらよりかちて見ゆるは

此歌の結句、かちて見ゆといふこと聞えがたし、誤字なるべし、また大かたの歌には左右の馬の名ともを二つながらよみたるを、これは右のばかりなり、左の馬の名をばいれざるもいかゞ、古今著聞集十ノ巻馬藝の部に、雲わけといふあがり馬を云々、といへることあり、此一二ノ句などにそのことばをこめたるか

三番　左　天葦原鶴駮　アマノアシハラノツルフチ

なみまよりとふあしはらのつるふちはなにはのあしけおひつかんやは

此歌夫木集廿七巻に見えたり、初句傍にくもと付たるかたよろし、三の句のは文字は、かたはらにつけたるにもじのかたよろし、其間よりとぶあしはらのといふは、つるといふ名によりてなり、なにはのあし毛、難波は芦の名所にて、さてなにはのといふは何のといふと同じ詞なり、古今集に津の國の何はおもはすなどよめるが如く、いかなる、いづれの、何たるなど、くらべいふ詞なり、つるふちの馬の名におひてとぶが如くにはしるには、いかなるあし毛馬のおひつくべきぞ、いかなるあし毛馬もえおひつかじといふなり、夫木三、春駒、源仲正はみやよき澤のぬなはにつながれて汀はなれぬつるふちの駒

右　何葉葦毛　ナニハノアシケ

いてかてにとぶあしはらのつるふちはあしけのそらはくり見てそゆみ

二三四ノ句の傍に付たる、なくもをもうまも用ふべし、結句のくりはよりなるべし、ゆみのみはくなるべし、いてかてに、なくあし原のつるふちを、あしけのうまはより見てぞゆくとすべし、一首の意は、いてかてとは外へは出がたくする事にて、芦原に住む鶴なれば、外へは出がたくして芦はらに鳴住るなりと、鶴にたとへて、つるふちの馬はいでがたくなきて、あるを、あし毛馬は近より見つゝ過ゆくといふ心か、又はより見てぞゆくとて文字をにごりて、あし毛馬はつるふちには目もかけず、より見ずして過ゆくとよめるにてもあるべし、

四番　左　安佐千不之虎毛　アサチフノトラケ

あさふちのとらけかみたるけしきにはあなくりかたのいとのくりけや

初句四ノ句、かたはらにつけたるかた用ふべし、あさちふの虎毛とつゞけたるは、虎の毛のさま、淺茅原のなたらかに生たるに似たればいふか、又は夫木集に、よみ人しらず、あさちはら小野のしの原いかなれば手かひのこらのふしこなるらむ、とよめる歌によれるか、二ノ句はとらげかけたるにて、虎毛馬の駈たるをいふか、とらげ馬の勢ひはやく駈行には、栗毛馬はあなよりかたといひて、よりつきがたくするなり、糸のくり毛といふは、糸は繰て用にたつる物なればかくいふなり、神樂歌あしげふちのとらげのこまとあり、和名鈔、驄、阿之布知、連錢驄、虎毛馬也、など見えたり

右　白糸之栗毛　シライトノクリケ

白いとのくりけひきいてゝ見るからにふすあさちふのとらけなりけり

此歌も夫木廿七馬歌のくだりに、白糸のくりげとて見えたり、白糸のくり毛とつゞけたるよしは、左の歌にいへるが如し、引いづとは馬場へひき出すなり、ひきいづも糸の縁の詞なり、見るからには見るがまゝにといふに同じ、くり毛馬を引出たるを見れば即チ、といふ事なり、四ノ句のふすといふは、虎毛馬が淺茅生の上に伏すとなり、夫木集の歌に、手かひの虎のふしとなるらんとある、考へ合すべし

五番　左　烏羽玉黒　ヌハタマノクロ

かたきまつみとりのあけにくらふれはかみとそみゆるんはたまのくろ

うば玉はくろといふ詞の枕ことばなり、初句は敵を待ッなり、かたきといふは俗に相手といふことなり、二ノ句あけとあるは誤にて、かたはらにをと付たるぞよき、緑の青にくらぶればなり、四ノ句も傍につけたるを用ひて、かつとぞ見ゆるなり、みどりいろの青馬に黒馬を引くらぶれば勝と見ゆとなり、或人曰、初句はたかきまつなるべしといへり

右　緑の青　ミトリノアヲ

みねのまつみとりのあけのなたかきをよるんはたまのくろやなからん

みねの松は二ノ句をいはん爲の枕詞として、また名高きをといふにもよくかけ合たる詞なり、みどりの青馬は名高き名馬なれば、よりつき立双ぶ黒馬はあらじとなり、

六番　左　神人之懸木綿鹿毛　カミヒトノカケタルユフカケ

ゆふかけのなりてわたらはおくれつゝとりめはくものよそにこそみれ

ゆふかけの馬のなりてわたらはとは、ゆふかけ馬のなりひびきてわしりわたらばなり、三ノ句は烏毛馬の立おくれてなり、四ノ句とりめのめは毛にて、烏毛はといふなり、結句ははるかに遠く見ゆるなるべしといふことを、空飛ぶ烏なれば雲のよそとよめるなり、拾遺、清原元輔、はしりゐのほどをしらばや逢阪の、關引こゆる夕かけのこま、袋草紙三、壬生忠見幼童之時、内裏より有レ召、無ニ乗物ニテ難レ參之由ヲ申ニ而竹馬ニ乗テ可レ參之由有ニ御詫一仍進ニ此歌ニ竹馬はふしかちにしていとよわしいまゆふかけにのりてまゐらん

右　相阪木綿付烏毛　アフサカノユフツケトリノケ

ゆふかみとくもあらしをなにしおへはかけるとりめをあはせさらまし

初句ゆふかけはなるべし、四ノ句もかけるとり毛になるべし、結句もかたはらに付たるかたにて、あはせずもかなのかたよろし、さて一首の意は、木綿鹿毛馬もとく驅ることもあるまじきを、烏毛馬は烏といふ名の付てあれば、烏は物よりことに空を飛かけりて早きものなれば、烏毛馬には木綿鹿毛馬はえかつまじければ、敵としてあはせずもがなとはよめるなり

七番　左　梅花粧毛　ムメノハナノカノツケ

にけなさもくらふめる哉いちしるくにほひすくれてはやきかすけを

初句もとのまゝにても聞えざるにはあらねど、ともじはくに

て、にげなくともあらばおだやかなるべし、二ノ句めもじの傍になとあるは、いづれにても聞ゆれどもなのかたよろし、三ノ句梅の花とあるかたよろし、結句を文字のかたはらにに。もじを付たるも、いづれにてもきこゆれどもにのかたよろし、さればにげなくもくらぶなるかな梅の花、にほひすぐれてはやきかすげに、と直してとくべし、似氣無ともいふ心は、似付はしからぬものをといふにて、相應ならざるをいふなり、くらぶなるかな、不相應の某に某をあらそはせ競ふなるかなといふなり、梅の華は香のすぐれたる花なれば、かすげのすぐれたるにいひかけ、にげなくの詞は、にげの馬の似氣なくおとりて敵對しがたきにいひつゞけたり、拾遺物名、いかるがにげ、みつね、ことごとも聞だにわかずわりなくも、人のいかるかにげやしなまし、似たることなれば引たり、躬恒集にもあり

右　一久留志木麗毛　クルシキニ、ケ可尋

ちりにける華のかすけも色まさるにけにし阿邊はかひなかりけり

本文には一くるしきとありて、片假字の註の語には一ノ字なく、クルシキニニケ可尋とばかりあれども、こは本文のごとく、一ノ字あらではきこえぬ詞なり、さてニヽケはにゝげか、にげとばかりあらばおだやかなるべし、そも／＼此詞は、中昔の諺に、一くるしき二といふことわざのありけんと思はれたることあり、此諺の意は一たる人より二たる人の勝れて、一の方のくるしく思ふとのよしなり、榮花物語月宴巻に、太郎は今の左大臣實頼ときこえて、小野宮といふ所に住給ふ、次郎は右大臣にて、師輔のおとゞ九條殿、二の人におはすれど、なほ一くるしき二とぞ人々おもひきこえさせためると書たり、實頼公は左大臣にて一なれども、師輔公の右大臣にて二なるを、二なれども時の威權盛なれば、時の人々一くるしき二といひたるよしなり、もとよりかゝることわざあれば、此諺もて一くるしき二にげといふなるべし、歌の意、ちりにける花の糟毛といふは花なれば花やかにすぐれてよろしかるべきものなれども、花のかすとなりてちりたる花なれば及がたき理なるを、もとよりちらずに、いろも香もすぐれてあるにけの馬にくらべて見れば、かひなく何の詮もなきことなりとよめるなり

八番　左　海の積礒菜草　アマノツムイソナソケ　クサ歟

すまのあまのあさなにつめるいそなくさけふかちふちはなみぞうちつる

二ノ句、朝の食の菜にするものを指たるよしなり、すべて飯にそへてくふ物を、魚にても野草にても海草にても菜といふなり、いそなくさといふ馬の毛色あるか、又なくさといふ毛色をいふに礒といふ言をそへていへるか、けふのかちふちとは、今日の勝をしらする鞭といふことなるべし、鞭をうつといふことを浪の淵の詞にてなみぞうちつるといへるなるべし

右　天奈留鶬鹿毛　アメナルヒハリカケ

なにたかくふりてあめなるひはりかけいとゝあしこそまさるへらなれ

初句名に高くこいふは、ひはりかけこいふ馬の名の高きよしにて、又ひばりは高くこびあがるをかねたり、二ノ句ふりては、羽をうちてこいふここを羽ふるこいへり、羽ふりなく鳴、或は打羽ふり鳥はなけごもなごいふふりにて、たかく飛ぶをいふなるべし、又馬の走るさまなごにもふるこいふ事なごもあるにや、天なるひはりかけこつゞけたるは、古事記の歌に、仁徳天皇の段の女鳥王（メトリノオホキミ）の歌に、ひばりはあめにかけるこいふ詞あり、雲雀はちひさき鳥なれごも、高く飛ぶさま天に至るが如く見ゆるをいふなり、一首の意は、高く飛ぶ鳥の名のひばりかけこいふ馬のあしは、いこゞ駿（ト）き事のまさりてありこいふなり

九番　左　無底井淵　ツコヰナキフチ

たくなはのたえてもやみねそこひなきふちにはかつくあまもあらしを

たくなはは栲縄こ書り、穀ノ木ノ皮もてなへる縄なり、船をつなぎ大綱を引よせなごする綱にて、古き歌におほくよめる詞なり、長（ナガ）し、不絶（タエズ）、くりよせ、引よせなごいふに、枕詞のやうによくよむ事なり、此歌にては絶こいふ詞をいはんために、枕詞のやうにいへるなり、二ノ句は絶はてゝ止ノよこいふなり、一首の意は、底ひなき淵にはえかつぎ入るまじければ、相手の馬にあはせて力をくらべんこ思ふ心は、たえこやめかし、おもひ止りてよこいふなり、俗にいはゞ、こても及ばぬ事なれば無用たるべしこなり　則ち淵は駿馬なるべし

右　海乃多久奈者區留淵　アマノタクナハノクリケ

ちはやふる神のくろといへとわたのはら白雲ゐのそらにすてゝき

千早振は神の枕詞、二ノ句神のくろこいへこゝあれご、是はのもじは衍字にて、神くろこいへごなるべし、四ノ句白雲ゐの、白雲こいふ間にきもじ脱たり、はらしろこいふ詞をこめたるなれば、かならずしかあるべし、十番の左の歌にしかあるにても知らる、一首の意、かみくろの馬もはらじろの馬にはえかたずして、雲ゐの空にすてられたりこなり、雲ゐるこははるかに遠きここなり

但し此歌は、次の十番の左の歌のこゝに入まがひたるなるべし、十番の左の歌こ同じ歌にて、いつか文字のうつしたがへたる所、こなたかなたたがひにあるのみなり、思ふに巻ノ末に或本こて書そへたる歌なごや、此九番の右にてもあらむか

十番　左　和多都美の腹白　ホタツミノハラシロ

ちはやふるかみみちてへとわたつみのしろきくもゐのそらにすてゝき

二ノ句かみみちてへこは、かみくろてへこの誤なるへし、三ノ句は九番の右にわたのはらこ有ぞよき、四ノ句結句此まゝにてもよろし、さて二ノ句髪黒てへこは、こいへごゝいふ事な

り、といふ詞をてふといふと同じ格なり、一首の意は、九番の右に既にいへり

右　千者也不留神黑　チハヤフルノカミクロ。

わたのはら（つうみ）白妙（の）なみのうちてこしその神（み）くろかち（かち）は（て）みえにき

初句本文のかたよろし、二ノ句の傍ののもじも、四ノ句の傍のみもじもよろしからず、但し四ノ句はそのかみくろのとかあるべきなり、此句のかたはらにかちといふ字そひたるは、のの字の寫し誤かとおもはる、結句のはもじのかたはらにて。もじを付たるは、いづれにてもよろし、さてわたのはら白たへなみのとは、うち出をいはん料なり、うち出こしとは、鞭うちつゝ出こしといふ事なり、結句は勝は見えにきといふなり、かみくろの勝といへるなり

或　本

左右くらぶるうまのあしはやみわかかたにうへかちふちをみよ

くらぶる馬はすなはち競馬なり、三ノ句あしがはやさにといふことなり、四ノ句はときがたし、我方に諸といふことは聞ゆれど、たしかに心得がたし、結句は勝鞭を見よといふなるべし

此歌九番の右の歌とすべきか、たしかに九番の右とも定めがたけれど、かしこにいへる如くなれば、猶よく考ふべきなり

文化十年癸酉七月八日註釋之畢

本居大平

序

くれ竹の世に、ここの心とけがたき書どもさはなるに、其をときごとせしふみはた多になも有ける、しかはあれど、其説どもゝよく見もてわたすに、大かたおのが意をのみおしたてゝ、本つひとのいひおきたる舊き説をもどき、かにかくに強説して、山菅のすが〳〵しく、秋の月夜のあきらかなるはありがたくなもありける、こゝに木國平の大平の翁世の人のときえがたくする神樂歌の釋をあらはして、此ごろ見せにおこせて、おのれに、これがはしがきをなも物せよとあるに、まづいとめづらしく、天の眞賢木てにとりみれば、眞弓槻弓本末たど〳〵しかりしも、庭火の光いちじろく、倭琴の音さやかに聞えて、天津神國津神も、おもしろときこしめで給ふべく解さとされたり、さるは本つ人々のふるき説どもをまづひきいで、又、鈴屋大人のつたへをむねとし、浦の松原まつばらに、椎のさえだのしひごとをまじへず、今いひいでられたるは、かくやあらむとしるして、猶朝霧のおほゝしきは、後の人のいひはるけむをまつべく、おだしく正しくわたくしなくさとしあげつはれたる條條、かへすがへす神も人もめでうべなふべき書になもある、味凍の綾にむかしく、空かぞふおほに見すぐすべきことならめや、とおもふまに〳〵かくしるして、これがはしぶみとす

文政十年四月　　大夫將監源朝臣武貞識

神樂歌新釋一卷

こりすべていふ事

○神樂歌、催馬樂歌は、世々に詠ひ僻めたるこ、時によりて詠ひ換たるこ、書寫とにうつし誤れるこありて、往古より歌ノ意わきまへ難きなん多かるを、此注釋書とては、先は梁塵愚按抄、ちかくは神樂歌催馬樂解こいふこ、二書のみになんありける、此二書のよしはつぎにいふべし こも〳〵歌は、詠ひ擧て迦那豆遊ぶなれ、歌の本意にしあるを、今世に傳へて詠ふ歌の古きは此ノ神樂、さては東遊風俗、催馬樂なれば、これが注釋いかであらはさむこ、思ひ起しゝかご、是いこ難きわざにして、いたり淺く、かごなきものゝ、なまじひに說試みたりこも、何ばかりの事か爲出さむこ、かつは慙おもひながら、かくて見すぐさむはた、心淺きになりぬべし、縣居、鈴屋、二翁の、さきざきに敎へおかれたるしるべ書ごもゝあれば、それにすがりて、力の及ぶ所までこそこ、此ごろ書著して、三卷四卷こはなしたれご、猶いこ堪ぬ所なん多かるべき、よしやさはれ、かゝ學びの道は、やうやくにあきらかになりゆく世なれば、又よく見考へ解直す人もあらんこ、後のたのみをさへなんかけて思ふなりける

○梁塵愚按抄は、あるやんごこなき人の物し給へるなりこかや、こゝにその御名あらはさんも、たやすきさまなればいはず、そのこきごこ、いたりふかき人は、よくわきまふべきことなれご、學びあさくては、猶いこまごはしきふしもあれご、すべては古よりつたへ來りて、今の人の及びがたきもありて、いづれをこりいづれをおくべしこも猶えわきまへねば、大かたもらさず引いでたり、後の人の考へ合すべき便りこもなりなんかし、此釋に、抄曰こいへる是なり

○神樂催馬樂歌解こあるは縣居大人 加茂縣主眞淵翁也 のかゝれたるなり、いこあらゝか物にて、其說も、ふかく思はれたるさまにも見えねば、いこ若きほごのすさびにやこも見え、又、こみに人にかきてあたへ示されたるにやこも見ゆ、中には梁塵愚按抄の說のまゝに、たゞ一言二言かへてしるされたるもあり、されご又冠辭考、萬葉考、に出たる說こ同じ趣きなるもあれば、むげにはかなきすさびにもあらぬさま見ゆれば、これも大かたもらさず引しるしたり、其說は、解曰こ出せり

○萬葉緯こて、今井似閑こいふ人のえらべる物、大半がもた

るは、七巻あり、その中に、神樂、催馬樂、東遊、風俗等を集め、猶何くれの畫物もかき集めたるにて、注解の書にはあらねど、契沖法師の川社より引よせて、書入たる説々も、便よく考へえらへる物にて、よしと思ふ説々は、今も取用ひたり緯目といへるこれなり

歌うたひ舞遊ぶこそのたふときゆゑよし

○古事記天石屋戸段に、高御産巣日神の御子思金ノ神に思はしめて云々、天宇受賣命天香山の、天の蘿を手繦にかけ天の眞折を蘰として、天香山の小竹葉を手草に結ひて、天ノ石屋戸に火處たき、覆槽ふせて蹈とどろかし、神懸して、胸乳をかきいで、裳緒を番登におしたれき、かれ高天原ゆすりて、八百萬ノ神共にわらひき、こゝに天照大御神あやしとおもほして、天の石屋戸を細目にひらきて、内より告給へるは、吾こもりますによりて、天原おのづからくらく、葦原ノ中ッ國も、みなくらけむとおもふを、なごて天ノ宇受賣は遊びし、又、八百萬神もろ／＼咲ふぞとのり給ひき、こゝに天宇受賣、汝命に勝りて貴き神いますがゆゑに、ゑらぎあそぶと申しき、と見えたり、樂遊びのはじめなり、また大國主ノ命、その御祖須佐能男ノ大神の御許より、生太刀と生弓矢と、天詔琴とを、取持して、宇都志國に歸ましける時、その詔琴、樹に拂て、地動鳴きゝ、かれその大神聞驚かして云々、はろばろに見とけて、その汝が持る生太刀生弓矢をもちて云々、意禮大國主ノ神となり、又顯國玉ノ神となりて、その吾女須勢理毘賣を嫡妻として、宇迦之山の山本に、底つ石根に宮柱太知、高天ノ原に氷木高知て、居是奴也とのり給ひき、と見えたり、御太刀、御弓矢、御琴の貴重ゆゑよしなり、又神功皇后紀に、更に小山田ノ邑に齋宮を造らしめて、大后親神主と爲給ひて、武内ノ宿禰に命せて、琴を令撫て、中臣ノ烏賊津使主を喚て、審神者と爲て、さて琴頭尾に、千繒高繒を置て、先日天皇に教給ひしは、誰ノ神にかましますぞ、と請給ひ、其名知まく欲しと願給ひしかば、七日七夜を逮て答曰く、神風ノ伊勢ノ國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神、名ハ撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉云々、と見えたるは、同じ雄略紀に琴頭尖來居影云々、萬葉九卷に神南備、神依板に云々とあるに引合せて、琴彈には、神の靈の依來ますよしをしるべし、大神宮の造宮使の造奉る物の中に、御琴一雙と錄して、長云々、闊云々、厚云々とあり、こは琴板と申て、糸などもすげたるにはあらず、御神事の時に、御教を請には、神主等の取持たる

笏にて、打鳴らすなりとぞ、延暦儀式帳に、六月の例、九月神嘗祭の條にも、十五日云々、以同日ノ夜亥時御巫内人第二御門司令侍御琴給請天照座大神乃御教云々また大神宮年中行事に、六月御祭十五日の條に、御巫内人自外幣殿鵄尾御琴請作御門外東方候御殿向先詔刀申其詞云云々、次以笏御琴搔三度、度毎有聲嘩。次奉下神其御歌云々、御巫内人以同詞又申御琴搔内嘯件嘯音鳴以清不淨知也云々、といふともあり、これには鵄尾琴とあり、こは琴板といふ物とは別なるが如きこゆ、かく引出ていへるは、歌ひ儛ひ琴かきならす態は、たゞ風流のもてあそび藝にはあらで、重き神態の事なるよしをしらしめむとなり、かくて古事記に、夷振、宮人振、天田振、夷振之片下、志都歌之返歌、志良宜歌、志都歌、天語歌など、日本紀に、夷曲報歌、擧歌、來目歌などあるは、すべて樂府にて、その振々をわけていへる曲の名どもなり、神武紀に、宇儛能多伽機珥鴫破和奈破蘆云々、是謂來目歌今樂府奏此歌者猶有手量大小及音聲巨細此古之遺式也とあるにて知べし、續日本紀十一ノ卷天平六年二月歌垣の時に、難波曲、倭部曲、淺茅原曲、廣瀨曲、八裳刺曲といふもあり、同十七卷、天平勝寳元年十二月、遣五位十人散位二十人六衛府ノ舍人各二十人、迎八幡神於平野郡云々、作大唐、勃海、呉樂、五節、田儛、久米儛云々、これはからあそびもあれども、田儛、久米儛どものありしはたふとし、同卅六卷、天應元年十一月丁卯、御大政官院行大嘗之事、以越前國爲由機、備前國爲須機、兩國云々奏土風歌舞於庭云々、己巳、宴五位已上、奏雅樂寮ノ樂及大歌於庭ともあり、三代實錄二卷、貞觀元年十一月丁卯、大嘗祭云々、悠紀主基兩帳、天皇御豐樂殿ノ廣庭宴百官、多治氏奏田儛、伴佐伯兩氏久米舞、安部氏吉志舞、内舍人倭舞、入夜奏五節、並如舊儀、と見えたれば、猶古世よりその舞どもありしことしらるゝなり、また古事記の應神天皇の段に、吉野ノ國主等の、横臼に大御酒を醸て、其大御酒を獻る時に、口鼓を撃伎を爲て歌曰く、加之能布邇余久須袁都久理云々、此歌者、國主等獻大贄之時々恒至于今詠之歌者也とあり後の式どもにも、吉野ノ國栖獻御贄奏歌笛あるは於承明門外奏風俗など、あり、上古の古事にて、いと貴し、寛弘のころは既に此事絶ぬるよしにて、いと〳〵くちをし、近代年中行事元日節會に、國栖ノ奏とてあるは、樂人にて、笛の音取を吹て、ありし其まねをのみしたるなり、聖武紀、天平十五年

五月、宴群臣於内裏、皇太子親儛五節、右大臣橘宿禰諸兄奉勅奏太上天皇曰天皇大命坐云々、上下齊和無動靜、令有禮有樂、二並平長可有隨神所思坐此舞始賜云々とあり、皇太子にましまして、御自舞給ふことは、いとも恐し、大命の詞に、禮と樂と二並坐云々とあるは、當時漢時學びの賢しら事好み給ふこゝろばひの御志にて、皇御國の大きなる道の中にありては、さしもとるべき事にはあらざめれど、猶立かへり神世上古の古へにさかのぼりて思ひ見れば、禮は、ゐやびにて、まづ神をゐやまひ大君をゐやまふぞ道なれば、から國にいはゆるれい、といふことにはあらずして、神と君とを、ひたぶるにかしこみゐやまふは、天下のみたれあるまじき道なり、から國のさかしらごとまじりて、ゐやまひかしこむ心の、あさくなりぬるぞなげくべきことなる、琴ひき歌うたふは、神をおろし奉り、神の御心を和び奉り、神の御心をなぐさめ奉り、君も臣もにきび、こゝろよく樂しむわざなれば、重みすべきゆゑよし、此條に拾ひ來たる事ども、見わたしたまふべし、されど後のさかしら心つぎて、漢事學びして、優美をよしとする中昔より、古風をうしなへるはなげかしき事なりかし○古事記應神の段に、天皇太子にまし／＼て、角鹿より還上ましゝ時、御母、息長帶日賣命の、御酒獻り、御歌よみましゝに、建内宿禰命の、太子の御爲に答まつれる歌、此御酒袁釀祁牟人波、其鼓臼邇立弖、歌比都々釀祁禮加母、舞都々釀祁禮加母、此御酒乃阿夜邇宇多樂斯佐々とあるが如く、酒をつくるにも、歌ひ舞ひて、壽き祝ひてつくりしなり、田人の田うゑ田苅るにも歌うたひ、稲穂を臼にするにも、黑米をしらぐるにも、歌うたひなごする、その業の苦しきを思はず、心よく樂しみ、ゑみ榮え、たはふれごとするは、やがて豐壽の賀詞にして、人の歡喜は、神の御悦なり、同清寧天皇の段に、針間國人志自牟が新室の室壽に、次第のまゝに皆儛たるに、詠ありしも、家作は、いはひよろこぶべきゆゑあることにして、地なりし、棟上に歌うたふも貴し、かの新室樂の御詠は、物部之我夫子之取佩於大刀之手上丹畫著其緒者載赤幡立赤幡見者五十隱山三尾之竹矣本訶岐苅末押靡魚簀如調八絃琴所治賜天下云々、こは袁祁命にて、顯宗天皇なり、此事日本紀には又異様にて、億計王起儛旣了（億計王は仁賢天皇）天皇次起自整衣帶爲室壽曰、築立稚室葛根、築立柱者、此家長御心之鎭也、取擧棟梁者此家長御心之林也、取置椽橑者此家長御心之齊也、取置蘆萑者此家長

御心之率也、取結繩葛者此家長御壽之堅也、取葺草葉者此家長御富之餘也、出雲者新墾、新墾之十握稻之穂於淺甕醸酒美飲喫哉吾子等脚日木此傍山牡鹿之角擧而吾儛者旨酒餌香市不以直買手掌𢮦亮拍上賜吾常世等、壽畢乃起節歌曰、伊儺武斯廬、哿簸泝比野儺擬寐逗愈凱麼儺弭企於己陀智曾能泥播宇世儒、小楯謂之曰、可怜願復聞之、天皇遂作殊儛誥之曰、倭者彼々茅原淺茅原弟日僕是也、小楯由是深奇異焉更使唱之、天皇誥之曰石上振之神榲伐本截末於市邊宮治天下、云々、こは歌もあれども、古事記のも書紀のも、詠辭に、詞をうたへるが、催馬樂などによしあれば、ついでに引出たり

○允恭紀に、七年冬云々讌于新室天皇親之撫琴皇后起儛こもあり、古事記雄略天皇段に、天皇幸行吉野宮之時云々、後更亦幸行吉野之時云々、坐其御呉床彈御琴令爲儛其孃子之好儛作御歌其歌曰、阿具良韋能、加微能美弖母知、比久許登爾、麻比須流袁美那、登許余爾母加母、この事によく似たる事は、江家次第十七五節の條に、五節舞者、淨御原天皇之所製之、相傳云、天皇御吉野宮、日暮彈琴有興、俄爾之間、前岫之下、雲氣忽起、疑如高唐神女、髣髴應曲而舞、獨入矚、他人無見、擧袖五變、故謂之五節云々、其歌云、乎度綿度茂、邕度綿左備須茂、可良多萬乎、多茂度爾麻岐底、乎度綿左備須茂こもあり、これらは風流事なり

○後世いはゆるかぐら歌は、古今集の第廿卷、大歌所の歌に、神遊びの歌こあれば、かみあそびこいふぞ正しかりける、かくて此神あそびの歌にも、上古の歌もあり、後に增加たるもありこ見ゆ、代々にこりかへて用ひられしもあるべし、同じ採物の歌にも、或說、或本、こていく歌もあればなり、又曲も、上古の正しく御神あそびに用ひられたるは、榊、幣、杖、篠、弓、劒、杵、杉、葛、これの九種こ、さては韓神、さては晝目歌、竈殿遊、酒殿歌、弓立こ、これの五種の歌もちて遊ぶをや、正しく神遊びの歌こはいひけんを、大前張の宮人、何波形、木綿志天、前張、階香取、小前張の薦枕、志都夜乃小菅、鶴鳴、幾良前、篠波、葦原田、殖舂、總角、大宮、湊田、蟋蟀、これらも次々に加增て大さいはり、小さいはり、こ名づけたるなるべし、まづはじめに正しこいへるは、採物九種と、韓神、晝目歌、竈殿、酒殿弓立と也 上古よりのなるべし、次に大さいはり四種こも、後におもしろかる事を、加增たるなるべし、此加增りたる大さいはりは、咏ふ振やゝ轉りて、一ふりおもしろき振にぞあ

りけむ、歌の體は、五言七言のつがひ等も異さまにて、常語のさまにて、たゞに辭のもあらず、やゝ異なれば、うたひふりも、しかめづらしく、當時の今めきたるにやありけん、そのつぎに又加增へられけむは、かの小さいはりこいふにて、又めづらしくやありけん、これは薦枕、しつやの小菅、磯等前、さゝ波、あし原田、うゐづき、擧卷、大宮、みなこ田、蟋蟀にて、これらも大さいはりの詠ひ振に異ならずやありけむ、されば小さいはりこいふにやあらん、其後に又しも加增りたるは、歌の體もいよ〳〵變りて見ゆれば、詠ひ振はためづらしく、花やかにぞありけむ、そは千歲、早歌、ほし、得錢子、木綿作らにて、かの上古よりの採物九種、ひるめ、竈殿、酒殿、弓立らは、ふるめかしく神さびて聞ゆるに引くらぶれば、いこいたく花やきおもしろく、かつたはれたるにてありけむ、かくいふは、皆同じ神遊ひながら、歌のさまの、さま〴〵見ゆるがあるによりて、考へいふなり、これらも本方末方こわかれて詠ふさまは、風俗、催馬樂、こはことごとにて、神あそび振になんありけらし

神樂の事

○解曰、神あそびこ唱ふべし、樂のとを、後世の物語書に、あそびこいへるは、古より傳れる事にて、古事記仲哀天皇の段に、建內宿禰大臣白、恐我大皇猶阿曾婆勢大御琴こ見えたり、これをかぐらこいふは、後世の言なれば、古書にはなきことなりし、玉勝間の山菅卷曰、かぐらは、古は神あそびこいへる、されば其歌をも、古今集には、かみあそびの歌こぞしるされたる、神樂こかけるも、ふるくは、かみあそびこぞ訓べく、かぐらこいふ名は、いかなるよしにて、いつのほごよりいひそめけむ、六帖の題には、かぐらこかけり○今いふ、神樂を、かみあそびこよむは、古今集大歌所の部に、神あそびの歌こあり、中昔の何くれの物語に、管絃のわざを、あそびこも、御あそびこも、大御あそびこもいへれば、是は神あそびこいふべきなり、古事記仲哀の段に、大御琴阿蘇婆勢こあり、これより先天若日子の喪の段に、日八日夜八夜以遊也こ見え、山城風土記にも、神集々而七日七夜樂遊こ見え、舊事紀饒速日命の薨ませる條に、日七夜七以爲遊樂こあり、續日本紀十五ノ卷、天平十五年五月、宴群臣於內裏、皇太子親儛五節云々、於是云々、又今日行賜態見行直遊止乃ミ而爲不在天下而君臣祖子乃理乎教賜比此趣賜布而有良志止奈毛所思こあるは、遊こ書て、管絃歌舞の事なるあかしなり、その態をあ

そびこいひ、其態をするをあそぶこいへるここ、これらにてしらる、あそびこいふここの元(モト)は、今の世にもこつねにいふがごこく、樂しきわざをなして遊ぶをいふなれご、管絃歌舞は、ここに人の心を樂しましむるわざなればいへるなり、記傳の八卷卅卷等に委しく解きおかれたるによりて、考へ合せてかくいふなり、かくて又、神樂を、かぐらこよみ、又、かぐらこいふここのゆゑよしは、日本後紀桓武天皇、逸史三ノ十一ノ枚、延暦十三年十一月戊寅遊獵于康樂岡、かうを、かくこよむは、香山を、介遇夜慶こよめるに同じ、三代實錄一ノ卷二十一ノ枚天安二年十一月廿六日、遣源朝臣啓於神樂岡家告以贈位、延喜式一卷四十二ノ枚霹靂神祭三座、山城國愛宕郡神樂岡西北こあれば、かぐらこいふ語も、早く其ころよりある也、後世の歌なれど、辨乳母家集に、かくら岡にて子日せし時に、船岡も近きあたりに子日して網手にちよの松やひくらん　かくてかぐらこいふ語意は、太平か説のことなり迦具禮阿比こいふ語の約まれるなり、其は早歌の說に、すべて本末二方にわかれて、互にあらそふが如くいひしらふなん、かぐらこいふ語の由なる、こ云るが如く、詞をかけあはする事なり、古事記の清寧天皇の段に、故將治天下之間、平群臣之祖、名、志毘臣、立于歌垣、取其袁祁命將婚之美人手、云々、爾袁祁命亦立歌垣、於是志毘臣歌曰、意富美夜能、袁登都波多傳、須美加多夫祁理、如此歌而乞其歌末之時、袁祁命歌曰、意富多久美、袁遲那美許曾、須美加多夫祁禮、爾志毘臣亦歌曰、意富岐美能、美古能志婆加岐云々、爾王子亦歌曰、意布袁余志、斯毘都久阿麻余云々、如此歌而闘明各退こ見えたる、此等ノ說に、記傳四十三枚廿七ノ歌垣(ウタガキ)は書紀に、歌場此云宇多我岐こあり、攝津國風土記に、雄伴郡波比具利岡、此岡西有歌垣山、昔者男女集登此山、常爲歌垣、因以爲名、常陸國風土記に、香島郡童子女(ヲトメ)松原、古有年少僮子俗云、加味乎止古、加味乃乎止賣、男稱那賀寒田之郎子、女曰海上安是之孃子、云々、經月累日、嬥歌之會俗云、宇多我岐、又云、加我毘也邂逅相遇、于時郎子歌曰云云、孃子報歌曰云々こあり、萬葉九二十三枚に、登筑波嶺爲嬥歌會日作歌、鷲住筑波乃山之裳羽服津乃其津乃上爾率而未通女壯士之往集加賀布嬥歌爾云々嬥歌者、東俗語曰賀我比こ見ゆ、六ノ四十六ノ枚にあるは誤字なり歌垣のさま、正しく此長歌の如し、さて垣こいふ名の意は、垣は借字なり、書紀に、歌場とかゝれたるも、名の義には當らず、場とは、つれに歌垣とかきならへるによりてなるべけれど、此名は、その事をいへる名にこそあれ、其處をいふ名にけあらざれば、場といふべきにあらず歌加賀比にて、賀比を切めて伎こは云なり、淸濁はたがへれど然ある例なり　さて加賀比こ云は、右の長歌に、加賀布こある如く、本用言なるを體言になしたる名なり、其名は又、加其禮交の切まりたるなる

べし、萬葉九、三十四枚勝鹿ノ眞間ノ娘子を詠める長歌に、夏虫之、入㆑火之如、水門入爾、船己貝如久、歸(ヨリ)香具禮、人乃言時加具禮といふ言、此外には見えざれども妻どよばふ事を、然いへる古言の有しなるべし　これなり、嬥歌の字は、よく當れりとも見えざれども、古より書ならへる字なるべし、嬥歌は、往來の貌とも注し蠻人ノ歌也などはいへれども、加賀比に用ふへき由は見えず、さて又、今の世の言に、加氣阿比といひ、又、人と物を互に云ひあらそふを、加具畑布といふたども、加賀比よりうつれる言にやあらん　されば歌賀伎とは互に歌をよみて、加具禮交すよしの名なるべし、さて上に引る風土記萬葉なごに依に、歌垣は、田舍にては山上にてもしたりと見ゆるを、倭なごにては市にて爲しにこそ、此時のも、書紀に依に、海石榴市なり、万葉十二に、海石榴市之八十衢乎立平之結紐乎解卷惜毛、歌垣の處にての事と聞ゆさて續紀十一に、天平六年二月癸巳朔、天皇御㆓朱雀門㆒覽㆓歌垣㆒男女二百四十餘人、五品已上有㆓風流㆒者皆交㆓雜其中㆒、正四位下長田王、從四位下栗栖王、門部王、從五位下野中王等爲㆑頭、以㆓本末㆒唱㆓和難波曲、倭部曲、淺茅原、廣瀨曲、八裳刺曲之音㆒、令㆓都中ノ士女縱觀㆒、極㆑歡而罷、賜㆘奉㆓歌垣㆒男女等祿㆖有㆑差、また三十に、寶龜元年三月庚申、車駕行㆓幸由義宮㆒云々、辛卯、葛井船津文武生藏六氏男女二百三十人、供㆓奉歌垣㆒、其服並着㆓青摺細布衣㆒、垂㆓紅長紐㆒、男女相並分行徐進歌曰、乎止賣良爾、乎止古多智蘇比、布美奈良須、爾詩乃美夜古波、與呂豆與乃美夜、其歌垣歌曰、布智毛世毛、佐與久佐夜氣志、波可多我波、知止世乎萬知天、須賣流可波可母、毎㆑歌曲折擧㆑袂爲㆑節、其餘四首、並是古詩、不㆓復煩載㆒、時五位已上内舍人女孺亦列㆓其歌垣ノ中㆒、歌數闋訖、河内大夫從四位上藤原朝臣雄田麻呂已下奏㆓和儛㆒、賜㆓六氏歌垣人商布二千段綿五百屯㆒、西京は、河内の弓削にて卽由義宮ある是なり、博多川も、其あたりにあり此時、行幸ありて彼宮に留りますほどなり此續紀の頃のは、實の歌垣にあらず、古の歌垣の狀(サマ)はかりをまねひて爲し、一種の風流藝(ミヤビワザ)にぞありけん、とあり、伴の廻賀比、廻具禮安比ぞ、卽廻具良と一つ語(コトバ)にて、本末二方に分れて、互にうたひ與をあらせて遊ぶには、廻具良と云つべきさまなり、それが中に、採物九種、韓神、竈殿遊等を、神あそびと云、大さいはり、小さいはり、早歌等を、加具良といひけんかとも思はれ、又、本末にわかれてうたふを、すべて神あそびとも、加具良とも、二さまにいひつたへたりとも云つべし、攝津風土記、波比具利岡の西歌垣山、常陸風土記、嬥歌之會かならず其處あるべし、萬葉に見えたる筑波山の裳羽服津ならんか萬葉九の、筑波嶺嬥歌會、又武烈紀の海石榴市等にして嬥歌會、出雲風土記、上の廿五意宇郡邑美冷水(オフミノイツミ)云々、男女老少時叢(コリ〳〵)集(ツトヒテ)常燕(ウタゲ)會地(アツトコロナリ)矣、同下の前原埼云々、男女隨時叢會、或愉樂歸、或耽㆑遊忘㆑歸、常燕喜之地矣、とあるをためしにて思へば、猶其

餘の所々にても有しならむ、仙覺が萬葉抄十四卷の歌、あしからのわをかけ山の說に、建長三年、關木の宿にて老人に問しかば、當時は加具良の嶽と申をこそ、昔はわをかけ山とは申けると承れ、とこたへつる山も、歌垣ありし處ならむかと思ふ事あり、そはかのわをかけ山の歌は、東遊の一歌二歌に、左加尤乃禰、奈乎加介也末乃可川乃介也とあるも、舊來(モトヨリ)この歌は彼處にて有し、加賀比の歌なればならむかと思ふをかぐらの嶽といへりしが故由あればなり、此說もていはゞ、神あそびと、いふは、正しく加具良といふも、ひがことにはあらずなんありける　〇件のかくれあひのちなみに思ひよれる事あり、歌は、人のよみかけたるに、必かへしすべきことなり、そも〳〵歌は、思ふ事を獨語(ヒトリゴト)にも詠出る物にはあれど、猶いはゞ、思ふ心を顯はして、人によみかくるなん、歌の一ッの本意ならむとは思はれける、神代のはじめに、二大神御の、あなにやし云々と唱和給へる大御詞をはじめ、八千矛大神と、沼河日賣神ノ大御長歌、豐玉毘賣命と、天津日高日子穗々手見命、そのゝち大久米命と、神倭伊波禮毘古ノ命、さてはかの倭建命と、火燒翁、同じ命と、美夜受比賣命、また息長足比賣ノ命建內ノ宿禰ノ命、大雀命、八田ノ郎女、同じ命と、建內ノ宿禰ノ命、とよみかはし給へるさま、たゞふと答へ給へるにはあらず、かくて又、互にあらそひまけじとして、かけ歌の心を、もとくが如く、おしけつが如く、答へたるなむ、古より中昔の頃までの、返しの一ッの格なりける、古事記神武段、あめつゝちどりましとゝなどさけるとめ、大久米命、をとめにたゞにあはむとわがさけるとめ、萬葉二の十二枚天武天皇の、吾里に大雪ふれり大原のふりにし里にふらまくはのち、藤原夫人、吾岡の於可美にいひて降しめし雪の摧之彼所に散けん、同三、十二の枚持統天皇、いなといへどしふる志斐能がしひ語此頃きかずて吾こひにけり、志斐嫗、いなといへどかたれ〳〵とのらせこそ志斐伊はまをせしひがたりちふ、同二、大伴宿禰安麻呂と、巨勢郎女、同、石川郎女と、大伴宿禰田主、同八、二十の枚紀郎女、戲奴之爲云々、晝者咲云々、大伴家持、吾君爾云々、吾妹子之云々、古今集、あたなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人もまちけり、今日こずは明日は雪とぞふりなましきえずはありとも花と見ましや、同、つゝめども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの淚なりけり、おろかなる淚ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたきつせなれば、同、つれ〴〵のながめにまさる淚川袖のみぬれてあふよしもなし、淺みこそ袖はひつらめ淚川身さへな

がるときかばたのまむ、同、君が思ひ雪とつもらばたのまれず春より後はあらじとおもへば、君をのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆる時ある、後撰集、大輔が後涼殿に侍けるに、藤壺より、女郎花を折てつかはしける、をりて見る袖さへぬるゝ女郎花露けき物は今やしるらん、かへし、萬代にかゝらん露を女郎花なに思ふとかまたきぬるらん、又、おきあかす露のよなよなへにければまたきぬるともおもはざりけり、又かへし、今ははや打とけぬべき白露の心おくまで夜をやへにける、同、雪の朝老をなげきて、ふりそめて友まつ雪はむば玉のわが黒髪のかはるなりけり、かへし、黒髪の色ふりかふる白雪のまちいつる友はうとくぞありける、又かへし、黒髪と雪との中のうき見れば友鏡をもつらしとぞ思ふ、又かへし、年毎に白髪の數はます鏡見るにぞ雪の友はしりける、同、男のかれはてぬに、こと男をあひしりて侍りける女、もとの男の東へまかりけるをきゝて、つかはしける、ありとだにきくべきものを逢坂の關のあなたぞはるけかりける、かへし、關守のあらたまるてふあふさかの木綿付鳥はなきつゝぞゆく、又、ゆきかへりきてもきかなん逢坂の關にかはれる人もありやと、又かへし、もる人のありとはきけど逢坂のせきもとゞめぬわが涙かな、同、わが戀のきゆるまもなくくるしきはあはぬなげきのもえわたるらむ、かへし、きえずのみもゆる思ひは遠けれど身もこがれぬる物にぞありける、又男、うへにのみおろかにもゆるかやりびのよにもそこには思ひこがれし、又かへし、川とのみわたるを見るになぐさまばくるしきことぞいやまさりなる、又男、水まさるこゝちのみしてわがためはうれしき瀬をば見せじとやする、拾遺集、躬恒、忠岑にとひ侍りける、伊衡、しら露は上よりおくをいかなれば萩の下葉のまづもみづらん、躬恒、さを鹿のしがらみふする秋萩は下葉や上になりかへるらむ、忠岑、秋萩はまづさす枝よりうつろふを露のわくとは思はざらなん、又とふ、同、よるひるの數はみそぢにあまらぬをなど長月といひはじめけむ、こたふ、秋ふかみ戀する人のあかしかね夜を長月といふにやあるらん、伊勢物語の、鳥の子の贈答も、これらに同じ、すべて物語書にある問答のさま、歌のみならず、いひかはすみやびごとは、いひけちもとくぞつねなる、萬葉二、久米禪師と、石川郎女との歌、みすゞかる信濃の眞弓わがひかばうま人さびていなといはむかも、みすずかる信濃の眞弓ひかずして弦はくるわざをしるといはなくに、梓弓ひかばまに〳〵よ

らめども後の心をしりかてぬかも、梓弓つかをとりはけひく人は後の心をしる人ぞひく、すべてかくよみかはしたるは、おのづから此神樂の早歌の、あかゞりふむなしりなると、われもめはありさきなると、とねりこそうしりこそう、われもこそうしりこそう、或は、ゆすりあげよそゝりあげ、そゝりあげよゆすりあげ、又、谷からゆかば尾からゆかん、尾からゆかば谷からゆかむ、かくいへるも、又、おくる歌をかけ歌といひ、答る歌をかへしといふも、本末かけ合ひうちかへすも、迦賀比加具禮といふにちかき辭なり、これはしも、いはでもありなむことなれど、かぐらといふ語をいひときたるちなみにいへるなりけり

東遊の事

○あづまあそびとは、一歌、二歌、駿河舞等、駿河相摸の地名みゆれば、東の歌をうたひて遊ぶより、いふなるべし、一歌の詞の中に、左加尤乃禰とあり、萬葉十四に、相摸禰乃乎美禰云々とあり、二歌に、奈乎加介也末乃可川乃介とあり、これも同卷に、阿之賀利乃和乎可鷄夜麻能可頭乃木能とあれば、これを據とす、次に駿河歌に、宇止者末、また以者太之太江などあり、和名抄志太郡あり、日本惣國風土記とて、殘篇なる書に、駿河國止駄郡浦二ヶ所云々、止駄郡東限二岩田山一などあれば、是らによりて、東遊といふなるべし、はたかの迦具良といふは、其處にて歌垣の遊わざの有けむを、やがて朝廷の樂に用ひはじめしが、それはじめにてやあらん、上古の國栖の歌笛を召したためしなどにやありけん

催馬樂の事

○解曰、神樂に前張あり、それが拍子にうたふ故に、是をさいはりの名を負しものなり、其三度拍子になること、上の卷にいへるが如し、然るにこれをばからの唐の世に、催馬樂てふ樂の有しをもて、好事の者の、後に催馬樂とは書キつらんを、三代實錄にもしか記せしが、さて後々の人、其字につきて、或抄の如き說をなせしこともしるし、かゝる說は、後人のくせなり、催馬樂と書ても、猶さいはりと云べくおぼゆ○玉勝間の藤浪卷に、長瀨眞幸がいはく、催馬樂といふ名は、その初についでたる吾駒の歌によれるものなり、その歌は、伊天安我こまはやくゆきこせまつちやま云々、此歌はもと萬葉集十二に、乞吾駒云々とある歌也、はじめの二句、馬を催す詞なるをもて、催馬樂とは名けたり、樂は、唐の樂曲どもの名、某樂々々といふによりて添たるにて、やがて其字音をと

りて、良こよぶなり、さて此吾駒の歌を初こする故に、其名をもろ〳〵の曲の惣名させる也、こいへる此説よろし、體源抄には、狛ノ朝葛新作續敎訓抄云催馬樂こいふは、催馬樂こいふ樂あり、これより事おこれり、此樂の唱歌に、駒をもよほすこいふここの有けるを、やがて歌になして、國々よりうたひ出しなり、或駒こいふ催馬樂これなり、こいへれご、これは、かの歌もこ萬葉の歌なるここをしらずして、唐樂の唱歌より出たり、こ誤りつたへたるひがごこなり、國々よりうたひ出したりこいへるも、ひがここ也、又或說に、催馬樂こいふは、いにしへ諸國より御貢物を納る時、民の口すさびにうたひたる歌にて、御貢物を負する馬をかりもよほす意也、こいへるは、催馬こいふ名につきて、造りたるつたなき說也、又縣居の大人は、さいはりをさいはらこいひなせる也こて、やがて催馬樂をさいはりこかゝれたれごも、これも誤られたり、さいはりこいふは、もこさいはりに衣はそめむ云々こいふ歌の一曲の名なるを、十六曲の惣名こして、大前張小前張こ分れたる、皆神樂歌の方につきたる物にて、催馬樂こは、もこより別物なるをや、さてついでにいはむ、さいはりを前張こ書は借字にて初棒也、さて又或說に、催馬樂こいふは、もこ唐樂の名也、和名抄音樂部曲調類雙調の條に、桃花苑、春庭樂、催馬樂、狹鰭河、和風樂、こならべあげたり、みな唐樂也、こいへるも、ひかここ也、これは吾駒の歌など、雙調に奏る故に、雙調の曲の中へまじへ擧たるにこそあれ、唐樂に催馬こいふある事なし、さる故に、その催馬樂こ擧たる分注に、我駒曲是也こあり、又、其次なる狹鰭河も、催馬樂の中の、澤田川の曲也、すなはち分注に澤田川ノ曲是也こあり、唐樂に、狹鰭河こいふ名あるべきかは、又、春庭樂和風樂など、これも皇國にて作れる曲にして、唐樂にはあらざるをや、さてついでにいはん、催馬樂こいふ名は、三代實錄にはじめて見えたり　○今いふ、上件神あそびの事をいへる條にいへる如く、採物九種こ、ひるめ歌、竈殿遊、なご五種もてあそぶを、神あそびこいひ、後に加增りたるを、大さいはりこいひ、其後にくはゝりたるを、小さいはりこいふは、上古のは、いたくいにしへぶりにて、のちにおもしろきを加增られたるにて、大さいはり小さいはりは、五言七言の句も正しからず、あいそなごいふ囃辭もあり、妹ものりたりや、われものりたりや、ふねかたふくな、或は、一夜はたふれ、あやまりしにより、こりもこられず、又は、しつや小菅、かまもてからば、

おひんや小管、などいひみだしてつきはおもしろげにきこゆる、それらになん此さいはらも似たるさまありて、たかさごのさいさごの、をのへにたてるしら玉つばき、或は、夏引の白糸なゝはかりあり、さ衣におりてもきんを、五言七言のつがひいひみだらしたるさまの似たれば、これをも今さいはりといひつべきを、かれは本末二方にうたふを、これはさもなければ、今さいはりともいはず、たゞさいはりといひて、さてから樂（アソビ）になぞらへたる文字にて、催馬樂とかきては、まぎるゝ事もなかりしなり、さいはりのりをらにうつして、樂の字かけるなり、樂をらとよむは、奈良を、乃樂、寧樂、三川ノ國郡名に、したらを設樂ともかけるその例なり、物の名は、かく其物の義理をとらず、たゞありにいひならへるまゝにいふぞ、古のならひなる、いで吾駒早く行こそといふ意義をもて、名づけん事はあるまじくなん、但し似たる事は、和名抄に、水調曲に、拾翠樂律歌有（ルハ）伊勢海曲是とあるを、翠の字は、字書に、碧玉といふ註もあれば、玉を拾ふ意義もて、いせのうみの歌に、さる名を付たりとせんか、體源抄に、拾翠樂云々、承知大嘗會時、豐樂殿前作海濱奏此曲、集砂石植樹木成山阜之形、敷標布散萍藻像海渚之體、引船於其中似海人之拾藻、曲畢云々、舞作尾張濱主（ヌシ）といふこともあり、催馬樂は、我駒の一名、拾翠樂は、伊勢海の一名といはんは、さる事なれど、古本のさいはら歌に、高砂に、長生樂破、青柳に長生樂序、伊勢海、拾翠樂とはあるを、吾駒には、何ともしるしそへたる事なければ、同じなすらへにもいひがたし、猶よく考ふべきことなり、解の説と、大平か思ふとは、同じ意にて、玉勝間の説はことなり

風俗の事

〇これは字音に、古よりふうぞくといへるなるべし、くにぶりとか、くにぶり歌とかいふべけれど、さいふ例も見あたらず、かの難波曲、倭部曲、廣瀨曲、さては古今集に出たる東歌、みちのく、さがみ、常陸のたぐひ、これに同じかるべし、こは代々の大嘗祭のをりに、詠ひたりし歌の、其代におもしろかりしを、後々の代にも、物の興にうたひなれて、かく一ふりの歌ひ物とつたはれるにやともおぼゆ、體源抄に、四條大納言の仰られけるは、風俗うたはぬ人、雨のふる日のつれづれをいかにしてくらすらん、又、風俗は、古人は、戲言の口すさびの樣にうたひしなり、今の世近方よりしたたかになりたるなりなど有り　〇古本の難波方、歌の裏書に、難波方不入

此譜以二他本一所二書入一ナリ、また、儀等前の所に、或説云、此歌、貞觀神宴之時撰定歌、次日云々、又、朝倉、此歌云々、延喜廿一年勅定也、神樂遊仕ル時、榊ノ音振ニ唱、又、其駒此歌人長立座云々、本、風俗云々、○體源抄に、其駒は、本體風俗なり、しかるを一條院の御時、朝倉、其駒は、神樂のむけに尾もなき様なるよしにて、神樂にうたひ具するなり、當時は神樂なれども、本體は風俗と習ふなり、また、神樂のあさくらは、本は風俗なりけり云々、あさくらや木の丸殿にわがをれば云々、これはみかどの御歌なりけるを、民どもきゝてえいじけるを、延喜の御字に、神樂にくはへられけるにうつされける、その駒も云々、これをくはふといへり、また、朝倉は、越前國風俗なり、延喜年中に、神樂にくはへらる、仍て朝倉其駒は、風俗拍子を打也　○上件の如く、神樂のはてつかたむけに尾もなきが如く、何の興もなくて、さう〴〵しきさまなるに、風俗より取りて、後に加增へられたるが如き事あり、それをも思ひ合すべし、そに宇治拾遺に、堀河院ノ御時、内侍所御神樂の夜仰にて、こよひめづらしからむこと仕れとおほせありければ、職事家綱をめして、此よし仰けり、承りて何事をかせましとあんじて、弟行綱をかたすみへまねきよせて、かゝる事仰下されたればわがあんじたる事の有はいかゞあるべきと云ければ如何様なる事をせさせ給はんずるといふに、家綱がいふやう、庭火白く燒たるに、袴を高く引あげて、ほそはぎを出して、より〳〵に夜のふけて、さり〳〵に寒きに、ふりちうふぐりを、ありちふあぶらん、といひて、庭火を三めぐりばかり走りめぐらむと思ふはいかゞあるべきといふに、行綱がいはく、さも侍りなん云々、まことに寒げなるけしきをして、膝を股まで、掻揚て、細脛をいだして、わなゝきさむけなるこゑにて、より〳〵に夜の更て、さり〳〵に寒きに、ふりちう陰嚢を、ありちふあぶらんといひて、庭火を十まはりばかりはしりまはりたるに、上より下ざまにいたるまで、大かたどよみけり云々、賀茂臨時祭の歸立に、御神樂のあるに、行綱に云やう、人長めしたてん時、竹臺のもとによりて、そそめかんずるに、あれは何するものぞとはやい給へ、その時は何するぞやといはゞそれにつきてちくべうといはんとまつほどに、家綱、かれはなんぞのちくべうぞととひければ云々、此事上まできこしめして、中々ゆゝしき興にてありけるとかや、などいふこと見えたり、そのほどのたはふれ事のをこが

ましさは、今の世にては、をこごこも何こも聞えねご、上下大かたこよみけりこあれば、さここをこにはありけむ、神樂のうたまひは、古代の御神態の古質にて、おもしろくめつらかなる方はなくて、かう〴〵しく尊く、まめ〳〵しくのみなりて、かゝるをこわざもまじへさせ給へるなるべし、さて此たはふれここぞ、神代のわざをきにもおのづから相かよひて、上下こよみけりこあるも、いこよく似たれば、神の御心にもかなひて、大御神さへいかにおもしろしこみそなはしけむ、こいこ〳〵尊くなん、かくいふも神樂の末つかたの、興なくむげに尾ゐなきが如くにて、おもしろからぬに、興あらせてにぎはゝしからんここを、こ物させ給へるなりけり、これにつけても、後々におもしろげなるを加へ給へることこしるべし ○吹物、引物のたぐひ、すべて其なる聲によりていふなり、布曳こいひ、許登こいふも、布宇曳地こきこえ、許渋登渋あるは許无登无こきこゆるによりて、名づけたるなり、さて許登は、絃のひゞきにはあらずて、板のなるによれるなり、そは伊勢ノ神宮ノ御神事に、琴ノ板こいふ物を笏にて打ここあり、これ世のつねの如く絃すけたる物にはあらず、檜ノ木の板なり、重き神事なり、かくて萬葉九ノ卷、神南備神依板爾爲杉

乃ノこあるも同物にて、武烈紀の、琴頭爾來居影云々こあるをも合せて、神依板、琴板は、神代の古法にて、琴の元のはじめを考ふべき物なれば、許无登无こなる者よりいふこいふなり、又、絃をすげて彈も、古きとなり、阿都麻こいふは、其絃を搔ならす音の、阿无都无麻无こひゞくによりて、倭琴を、東琴こ名づくる也、又笏は、歌詠ふに拍子に打板にて、これは比佐玖、玖佐こきこゆれは、佐久こいふなり、鼓、琵琶、篳、篥も、皆その音もて名づけたるも、又、竹葉を佐々こいふも、鈴を須々こいふも同じ、いひもてゆけば、琴、瑟、箏、笙のたぐひ皆同じ

天詔琴、吾妻琴、倭琴の事　此一條すべて記傳の說たり

○記傳十、五十二ノ枚天詔琴、天こは、天上の製に同じければなり、詔琴は、此琴の名にはあらず、凡て琴の正しき元の名なり、さて其意は、詔言所こ云ことなり、然いふ所以は、まづ古世何事にまれ神の御心を問んこて、其命を請申すには、かならず琴を彈なり、其ノ時琴頭に神の靈降りまして、人に着て命を詔給ふ、此事は、中卷訶志比ノ宮ノ段に委しくいふを合せ見て知べし、又、武烈紀に、擧騰我彌爾枳謂屢箇皚比謎こあるは、琴頭に降來てまします、神の御影こいふ意もて連たるな

り、かれ琴といふは、神の來て詔言し給ふ所といふ意につゞけたるなれば、元は凡て詔理許登といひしを、後には略きて許登とのみいふ也、さて琴は、神代より有ことは更にもいはず、大刀弓矢に並て、此にかく云るを思へば、有が中にも重き器財なることこそ知れたり、後に漢國より此類の樂器くさ〴〵渡り來ては、御國に元素より有をば、倭琴といひ、後のをば、唐琴といへり、さて後には、琴のことゝ箏のこと、琵琶のことゝいへりかくて中昔までは、此倭琴をも、常に弘くもてあそばれて、殊に諸の樂器の中の最上と定められしも、神代より深き故ありて、元來大御國の物なればなるべし、さて然重く貴まれしあまりにや、後の世には、其家に深く祕て、弘くは傳へぬことになりぬるから遂に世ノ間には、たゞ名のみを聞て、如何なる物ともその形狀をだにしらず、況て彈法知る人は絶はてゝ、其家にのみ傳へて、わづかに神樂などにのみ用ふることゝなりぬるに、いとも〳〵くちをしく心うきわざなりかし、凡て何事も、あまり深く祕めて、世にもらさぬから、知ル人まれになりもてゆきて、遂に絶る物なれば、貴み重みすと思ふが、返りて棄り失る方になるわざなりかし、これは物を重みし貴とならば、ます〳〵弘く世につたへて、盛にせまほしくこそ、かゝるめでたき神代の物の廢れて、世に知ル人もなくなりぬるが歎しさに、かく長々とは云なり、さて上古の琴は、木を以ても、竹をもても造りしと見えて、木をもて造りしことは、續紀の歌に見ゆ、絃の員は六帖の歌に、むつのをたとよめり中昔よりのは六なり、上古より然るか、甕栗ノ宮の段に、袁祁命の御詠言に、八絃ノ琴とある八は、彌の意ならんか、但し東遊の歌に、七絃の八絃の琴を調べたる、とあれば、定れる數なかりしにや、凡て製も上古のとは、いさゝかかはりきぬることなきにしもあらじ　さて今かく大刀と弓矢と琴とを取持て逃出給ふ其中に、大刀弓矢を用ひしことは、次の文に見えたるに、此琴の用は見えず、かれつら〳〵思ふに、上古には、夫婦の結びをなすに、必女の親の方より、聟に琴を與へて、其を永く夫婦の中の契とせし事にぞ有けむ、其さだかなる據はいまだ見あたらねど、吾妻といふ名の有も、此故なるべくおぼゆ、後までも倭琴に此名あり、これを中頃東國より奉りしことありし故などいふは、名につけて設たる妄說ぞかし　さて今此琴を取持て出給ふは、須世理毘賣ノ命を御妻とし給ふ表物となるべし、されば次の文に、父大神の詔に、其汝所持之生大刀生弓矢以云々とあるは、大刀弓矢の用をいひ、其我女須世理毘賣爲嫡妻ニとある所に、此詔琴の用をばこめたるべし、さて夫婦の中を絶ときには、其表の琴を婦の方へ返渡しゝなるべし、上卷黃泉段に、女男神各對立而度事戸ニとあるも、こゝと合せて思へば、表の琴を、女神の方に返し渡すと云意なるべくや、かの段と此段と相似たる事多く云云、事戸を度すといふ事と、此詔琴の事と、遂に相應て、妙なる理ある事を思ふべし、但し、かの伊邪那岐伊邪那美ノ大神の御時には、現に琴を返し給ふにはあるまじけれども、然いひて夫婦の中を絶ことゝなれる詞を以て、語りつたへたるなるべし、河海抄に、和琴に、伊邪那岐伊邪那美尊ノ御合時に作出給云々といへるは據ある事歟、もし古き傳へならば、少しこゝによしありてきこゆ　出雲風土記に、飯石郡琴引山、古老傳云、此山峯有ニ窟、裏所ニ造ラシ天下ノ大神之御琴、長七尺、廣三尺、厚一尺五寸、又有ニ石神ニ、高二丈、周四尺、故云ニ琴引山ニ

○倭琴を、あづまとあるは、中昔の物語ぶみに多く見えたる

事にて、體源抄、或名日本琴、又名鵄尾琴云々、古神之所レ造也、長六尺三寸、弦六筋、又東琴ともあり、花鳥餘情御序に、あづまをもろ〳〵のうつは物の上におき、むらさきをよろづの色の中に貴むがごとく云々箒木卷、よくなる和琴を云々、河海抄に、和琴は云々、諸樂器の最上に置也、あづまごとも、あづまとも、いふなりなど見えたり　○今いふ、又思ふに、東遊といふは、神樂につきたるものにて、神樂ある時には、あづまあそびなきことなく、後拾遺集には、後三條院ノ御時、日吉社祇園社などに行幸ある時、東遊つたふべき歌とて、あらたによましめたるを、うたひたるよしもあれば、必しもあづまの國風をうたふにかぎりたる事とも思はれず、神樂には、唐國の箏琵琶などいふからことは用ひず、倭琴のみをもてあそぶ御態なれば、あづま遊びといふにやあらむと思ふなり、源氏物語若菜下の卷に、住吉詣に、神樂ありしくだりに、ことごとしき高麗もろこしの樂よりも、東遊びの耳なれたるは、なつかしくおもしろく、浪風のこゑにひゞきあひて、さる木高き松風に、吹たてたる笛の音も、外にてきくしらべにはかはりて、身にしみ、琴にうち合せたる拍子も、鼓をはなれてととのへとりたるかた、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすごうおもしろく、所からは、ましてきこえけり云々、求子はつる末に云々、いと白く枯たる荻を、高やかにかざして、たゞ一かへり舞て入ぬるは、いとおもしろく、あかずぞありける云々、夜ひとよ遊びあかし給ふ云々、ほの〴〵と明ゆくに、霜はいよ〳〵深くて、本末もたど〳〵しきまでゑひ過たるかくらをのこどものおのがかほをばしらでおもしろきことに心はしみて、庭火の影しめりたるに、猶まさい〳〵と榊葉を取かへしつゝ祝ひきこゆる云々、件の文の狀、神樂をすべて、東遊の耳なれたるは云々、といへるさまにきこゆ、よく考へ合すべし

○笏を、さくといふは、打音の、ひさくとも、さくとも聞ゆれば、名に付たるなり、板を二枚打合する音は、今ノ世の人は、ぴっしやりひしやとも、手を拍音は、しやん〳〵、ちよんちよん、ひしや〳〵、とも聞ゆるが如く、笏拍子は、ひさくとも、さくとも聞ゆる也、後世の說に、こつといふは、骨の音にわたるを忌嫌ひて、さくと唱ふるなりといへど、骨の音にかよふとても、きらふべき謂れあらめや、こちといふは、音なり、さくといふは御國の名なり訓なり、和名抄に、服玩の部に、四聲字苑云、笏音忽、俗云尺手板、長一尺六寸、闊三寸、厚

五分也、唐笏品、天子玉諸侯象大夫魚鬚、文士竹木とあり、字書にも、笏呼骨反、音忽云々、許月切音血云々、また文弗切笏などあり さて和名抄に、俗云尺とあれば、もとより佐玖といひしなり、此書等に俗云といふは、後世の雅俗とわかつとは別なり、文字などには拘らで世のつねに云といふことなり萬葉に、嬥歌東俗語曰加賀比ノ又、東風、越俗語、東風謂之安由乃可是也、などあるが如し、かれ和名抄の木ノ部に、栐、唐韻云、栐音永、漢語抄云、佐久木、可ㇾ為ㇾ笏也とあり、字書にも、栐於丙切音永、可ㇾ為ㇾ笏とあり、唐國にて笏に作る木にてあるを、其書に云るを以て、此皇國にても云るにもあるべけれど、笏に作る木を、佐久ノ木といへるは、笏の字を佐玖と云し事はいちじるし、笏の用は、漢國にては、受命於君前ㇾ書ㇾ笏畢用也とあるが如く、皇國にても、早く漢様の服飾を用ひ給ひてよりは、ことなる事なかるべし、そのかみ諸國禰宜祝部などに許執笏などいふこと、史どもに所々に多く見えたるも、朝儀につねに執よりの事なり、かくて樂の時に笏拍子とて用ふるは、平常に手に持たる器なれば、とりあへずその笏を二つ打て、拍子をとりつるならんとたれしも思ふべけれど、但し、後世樂の方にて、拍子に用ふるは、二つに割たるさまにて、服玩のとは異なる物なれど、そは又後の事にて、平常にとる笏にては、音ハひどさよろしからねば、よく考へて、ことさらに作りたるにてもあるべし、もとは一つ物たるべし そのはじめを思へばしからず、漢國の朝服を移されざりし上古より有つる物ならむ、上古の神態に、御占などの時に、琴の板、また神依板などいふ物を打なり、それうつには、笏もてすることなるべし、今も大神宮の琴の板うつには、笏もて打なることあり、此事は、あるが中にも秘事にて、その板の尺寸など、こゝにはあらはしがたし、延暦儀式帳遷宮ノ條、六月十五日御占ノ條、また月次神嘗豐明の歌舞等のをり、又、氏經卿記にも、此琴の事見えたり神依板は、萬葉九卷廿六の枚にあり、こは竈殿歌に、豐へつひ御遊すらし、久方の天河原に、比佐の聲するといふ所にあげつらへる事と考合すべし、又いふ、體源抄に、琴佐木は、長一寸八分、牛角にて作るなり、雁の歸る時、麥葉をくはへて歸る、其心を摸すなりと云り、神寶ノ圖に見えたる笏の形は、すべて上下兩端圓く、緣も角なしとあれば、上古の笏は、また麥葉の形に似てやありけん、笏もて御琴掻こと三度云々とあるに考合すべし、かくて又いふ、記傳廿四十の枚に、四尺一寸を余佐加比登伎とよむべし、尺は、十量の約りたる名なり、尺ノ字の音とするは非ず、尺字の音と思ふにシヤクな直音にいへはサクなるを、クをカに轉して云と心得たるなり、然れども、古言の字音とおのづから似たるも彼此とあることなり音と思ふは偏なり とあり、此

佐加も字音ならざることゝ、杖たらぬ八尺の嘆などよみ、又、八尺鳥いきづく妹などよめるに合せ知べし、一尺を比登佐迦といふも、笏より轉じていふにはあらざる歟、漢籍大中記曰、唐顯慶中、前融州黄士令、王玄策使西域、毘耶黎國有維摩故宅、以手板縦横量之得十笏、故號方丈云、かしこの唐の代の書にも、十笏を一丈といへれば、笏もて度量をさしたる例もあるなり、まして皇朝にては、杖もてはかり、笏もてはかりなどせん事、手に取物なれば、つぎ〳〵しきわざなり、かくいふは、もと樂の事に預れる器なればなり、和名抄鐘鼓類に、拍子云々、拍板樂器ノ名也とあり

和笛の事

○延喜式雅樂寮に、凡諸横笛ノ師等、不解和笛、不得任用とあり

○雅樂の家の事は不知事なればともかくもいへることなき事

○古本に、片折、折說、諸擧、籠出、折體、尻上、靜歌、末音振、弁頭、などいふことあり、かゝることは、雅樂寮との家々の秘事もあれば、いさゝかもとかくいふことなし、大平がしらざる事なれば也、古事記、日本紀に、夷振、夷振之上歌、夷振之片下、來目歌、天田振、志都歌、志都歌之返歌、志良宜歌、擧歌、讀歌、本岐歌、酒樂之歌、思國歌、片歌、などいふことあり、記傳にとかくいはれたる事あれど、その家家に傳へたる說をしらねば、其說あたらぬ事もあるべし、神武紀に、今樂府奏此歌者猶有手量大小及音聲巨細此古之遺式也、といへること、又、天武紀十四年九月云々、是日ノ詔曰、凡諸歌男歌女笛吹者、即傳己子孫、令習歌笛とあるも、その家々を立おかるゝよしなり

○

凡例

○抄曰は、梁塵愚按抄なり、其說の是非を斷ることは稀なり、○解曰は、神樂催馬樂歌解なり、其說の非なるは、其よし云り　○緯とは、萬葉緯なり、便りとなる事のみを引たり

○記傳とは、古事記傳なり、大かたは本文のまゝに出せり、十に二三は省きて出せり引書の書名どもゝ皆そのまゝに出せり

○古事記は、古事記と出せり、天皇の御名は、後の漢様の御謚もて、神武天皇段に云々、崇神段に云々など出せり、神代の事は、石屋戸ノ段になど云へり

○日本紀は、日本紀と出し、神代卷は神代紀、神武卷は神武

紀と出せり、日本紀神代卷に云々、日本紀神武卷に云々と出すべきを、かく出せるは略きたるなり景行紀、仲哀紀など出せるも、准へ知べし、續日本紀以下は、文武紀、平城紀、仁明紀などは出さず、日本後紀一卷、續日本紀二卷、文德實錄三卷、三代實錄四卷など出せり、後の史どもには、引出ることまれ／＼なれば、略かざるなり

○歌集ども、古今集、後撰集、拾遺集と、和歌といふことは略きてかゝず、物語なども、伊勢物語、竹取物語は、そのまゝに出せり、源氏、榮花、うつぼは、卷の名ばかり出せることもあり

○此書に、うたふに咏の字をかくは、歌謠唱詠の字に別にするなり

神樂歌新釋二卷

神樂

○神あそびは、其おこりは、舊き說どもにいへるが如く、彼神代の磐屋戸の段に、天宇受賣命の、俳優の御神態の古事ぞ其始には有ける、故レ今更にいはむは事あたらしきに似たれども、いはではたあるべきならねば云なり、古事記曰、故於レ是天照大御神見畏閉二天岩屋戸一而刺許母理坐也云々、天宇受賣命、手二次繋天香山之日影一而爲レ鬘二天之眞拆一而手二草結天香山之小竹葉一而於二天之石屋戸一伏二汙氣一蹈而登杼呂許志、爲二神懸一而掛二出胸乳一裳緒忍二垂於番登一也爾高天原動而八百萬神共咲、これははぶかれたる詞とは聞ゆれど、次々の傳へどもと見合せてよく心得べし、日本紀曰、是時、天照大神云々、乃入二于天石窟一閉二磐戸一而幽居焉、故六合之内常闇而不レ知二晝夜之相代一云々、又猿女君遠祖天鈿女命則手持二茅纏之矟一立二於天石窟戸之前一巧作二俳優一亦以二天香山之眞坂樹一爲レ鬘、以レ蘿爲二手繦一而火處燒覆槽置、顯神明之憑談、是時天照大神聞之而曰、吾比閉二居石窟一謂當豐葦原中國必爲長夜、

云何天鈿女命嗜樂如此者乎、乃以御手細開磐戸窺之時云云、とあれど、猶これよりくはしきは、古語拾遺曰、又令天鈿女命、古語、天乃於須女、其神強悍猛固、故以爲名、今俗強女謂之於須志、此縁也以眞辟葛爲鬘、以蘿葛蘿葛者比可氣爲手繦、以竹葉飫憩木葉爲手草、今多久佐手持著鐸之矛、而於石窟戸前覆誓槽、古語宇氣布禰、約誓之意擧庭燎、巧作俳優、相與歌舞云々、于時天照大神中心獨謂、比吾幽居天下悉闇、群神何由如此歌樂、聊開戸而窺之云々、當此之時、上天初晴、衆俱相見面皆明白、伸手歌舞相與稱曰阿波禮言天晴也阿那於茂志呂古語、事之甚切、皆稱阿那、言衆面明白也阿那多能志、言伸手而舞、今指樂事謂之多能志、此意也阿那佐夜憩、竹葉之聲也飫憩木名也振其葉之調也云々、かくくはしくしるしたるにて、其時の状よくしらる、あはれ、あなたのし、あなおもしろといふ語の意をいへる事らは、後世のさかしら心もていひたるにて、上古の意にはあらねど、そのさかしらはさしおきて、すべて此語は、歌舞のおこりをしるべきことにて、おもき神態なることを尊ふべし

庭燎

みやまにはあられふるらしとやまなるまさきのかつら色つきにけり

○抄目神樂の濫觴は、古語拾遺に見え、庭燎の事は、禮記に載たり、又毛詩の篇の名にもあり、但み山には霰ふるの歌は、古今集第二十の内、大歌所の中に、神遊の歌として載侍る、其中也、是は、後の世の人のよめるを、庭火の曲と名付て、うたひ侍る也、正木のかつらは木の名也、天の宇すめの神の、かつらにせる木なれば、そのよせなきにあらざるにや ○解曰、庭燎は、古事記には漏たり、神代紀天磐戸條に、火處燒と有を始とす云々 ○今いふ、此歌の釋は、葛とある條にいふべし、庭燎は、古本にも、拾芥抄にも、庭火とかゝれたり、神代紀に、火處燒、古語拾遺擧庭燎とあり、これら神事の時のなり、又、つねのは、禁中には、衞士の燒火さらぬも大家には篝火を庭にたかする事あり、又、古事記の倭建命の段に、御火燒の老人、甕栗宮段に、火燒少子、今世にも、神社の祭にも御火燒といふ神事あり、神樂歌次第の語にも、先仕長庭火の前に出來云、鳴高々々、次云々則上殿寮佐、唯稱、仰云御火白獻云々とも見えたり

阿知女作法

本

阿知女於於於於

末

於介 阿知女於於於於

○抄曰、あちめの作法、慥なる所見なし、但うすめをあちめといへるにや、阿と宇と五音相通せり、天鈿女神の岩戸の前にたゝして、俳優のたはふれをなし給へるを、今の世に、あちめのさほうと名つけたるべし、於々於々は、わらふ聲也、日本紀には、阿々と笑ふ聲をいへり、あゝと、おゝと、又、同五音通也、於介は、天鈿女ノ神の、手草にして、ふるひ給へる木の名也、古語拾遺に見えたり、以上愚案の所レ及也更に信用すべきにあらず、但又歌のふし歟下にもあまた所にあり、

○解曰阿知女は、宇受賣を轉ぜし辭といふ人あり、さも有なん歟、然らば知を濁るべし、神代紀、宇受賣ノ命の神遊し給し形をもて、人長のわざを阿知女の作法といふならん、其宇受賣ノ命の様を、八百万ノ神の笑ふをうつして、於々々々といふ歟、又於々々々は、警蹕也御前追と唱ふ事の始なれば、かくいふ也、次の前張の末に、本方あいさしゝしゝと云同じ、さて應答には口を閉、於介を木の名とするも、僻事ぞ、こゝに其一のみいふべきかは ○記傳八、四十九枚天宇受賣命、名義、古語拾遺に、天鈿女命、古語天乃於須女、其神強悍猛固、以爲レ名今俗強女謂之於須志一此縁也、此注を思ふに、此書の傳には、淤受賣とありしなるべし、源氏物語に、かくおぞましくは、又、うたておぞましかるべきわざを、又、おぞかるべきことを思ひよるなりけむかし、など皆婦人のことにて、右の意なり、今世の言には、於曾伊、或は於受伊といふ事あり ○今いふ、此神の御名の意は、此説によるべし、さてこゝの阿知女、舊説もたえて非じとはいはねど、いかに彼神の御わざになずらへて、舞うたふ時の事なりとても、阿知女と唱へんこと、猶いかにぞや思はるゝ事なり、猶考ふべき事なり、けだし吾妻琴もて遊ふ時の事なれば、其琴の音の阿豆廡と聞ゆるによりて、囃辭にも、あんづんまんと、人々聲を添ふるよりにはあらじか、かくいふは、又、於介といふも、儀式に、御巫覆ニ宇氣槽一立ニ其上一以レ杵撞レ槽云々、御巫舞訖次諸御巫猿女舞畢、また江次第に、次御巫衝ニ宇氣一衝ニ宇氣一神遊ノ義也、以ニ賢木一衝ニ槽上一也云々此ノ宇氣の音の、おんけんと聞ゆるを、人々も聲を添て、於介と囃辭によふよりの事にはあらじ歟と思ふなり、されどつねの囃辭とはことにて、阿知女の作法としもことたてるを思へば、猶深きゆゑよしあることなるべし、さて於於々々は、男建が云く、今世唱るさまを聞に、於々々々と、長く引く聲の末つかた、何とかや鶏の長鳴の聲の末つかたによく似たるを思へば、御神態は、彼天ノ磐屋戸の開くるをりの事なれば、

夜の明方の鳥の聲によそへられつとなんいへりける、かゝる事も考へ合すべきことなり

採物歌

○抄曰、とり物は、榊以下皆手にとる物なり○解曰、神遊の時、人長が取て舞などする物をいふ、則その取物の事を、古歌をうたふなり、賢木よりひさごまで、八種のとり物あり○今いふ、舊説ともによるべし

榊

本

さかきばのかをかぐはしみとめくればやそうちひとぞまとゐせりける

○抄曰、拾遺集神樂歌にいだせり、草木は、花にかぎらず、皆其氣かうばしければ、榊葉の香をかぐはしみとよめり、八十氏人は、もろ〳〵の氏人也、まとゐは、遊事也、神あそびするをいふべし○解曰、草木は、花にかぎらず、皆其氣かうばしければ、賢木葉の香をかぐはしみとよめり、八十氏人は、神につかふるもろ〳〵の氏人也、まとゐは、集ゐるをいふ、神遊などするを云べし、本の歌は、拾遺集の神樂歌にもとれり、○冠辭考、まさきづらの條に曰、眞賢木と云も、眞榮樹の意なるを思ひ合すべし、さるはいにしへ神事にも公事にも、言擧するには、常磐堅磐になど稱へ云こと多し、其をりは、木をも蘿をも、常磐なるを以て、眞榮木といひ、眞榮葛といへる也、且神社によりて、松、杉、樒などを、さか木といひて、一種ならぬを思ふに云々、其常葉なる榮樹か中に、かの鏡幣をかけ、髻華にさしなどせしは、樒なる據あり云々○記傳八、三十三ノ枚眞賢木、書紀には、眞坂樹とかけり、ともに借字也、仙覺か萬葉解に、榮たる樹と云なりといへり、師說に、こはもと一ツの樹の名にはあらで、たゞ常葉なる木を神事公事に讃稱て、眞榮樹といひしなり、そが中にとり分て、鏡幣をかけ、髻華にさしなどせしは、樒なり、後世さか木といふ物に非ず、といはれき、新撰字鏡には、杜ノ毛利、又、佐加木、また、龍眼ノ佐加木、また榊梶樅三字、佐加木とあり、榊ノ字は、日本後紀廿六にも見えたり、和名抄にも、漢語抄、龍眼木、佐加木、今按、龍眼は、其實の名なり、此は後世のさかきにあてたるべけれどおぼつかなし、まして上代のには叶はず○同十九廿一伊知佐加紀微能は、田中道麻呂曰、今近江の彦根のあたりにて、知佐加紀といふ木あり、尾張にて、志良(シラ)者氣(シャケ)美濃にては、毘者加紀といへり、黑く小き實の、いと多くなる木なれば、多けくの序によく叶へり、といへり、此說宜し、其木は、和名抄に、柃、漢語抄、比佐加木

とある是也、栲字を當るは未詳今も、比佐加紀といへり、伊勢にては微佐加紀とも毘者許ともいふ、北國にては、此木を佐加木といふとぞ、何處の山にも多かる木也、是に大小二種あり、實の多きは、大きなる方なり、小き方はいと低く叢り生て、春の若葉の色赤し、契沖は、嚴龍眼木歟といへり、師も是に依て、古へ佐加紀といひしは、多く樒にて、樒の實の獨と、萬葉によめるが如く、大の序なり、といはれつれどいかゞ、古へ嚴樒とはいへれども、嚴坂木といへる例もなく、又、此大御歌には、嚴といふこと由なし、又、樒の實の獨とはよめれども、その實は大きなる物にあらざれば、大の序とせむこともいかゞ、となり○今いふ、かく人々の說どもをまづ引たるは、次々にいへる論ひにも、考へ合すべき事あればなり、和名抄祭祀具部に、龍眼木、楊氏漢語抄龍眼木佐加岐今按龍眼者其子名也、見二本草一日本紀私記云、坂樹刺立爲二祭レ神之木一、今按、本朝用二賢木二字一、漢語抄用二榊字一、並未詳、また同木類部、栲、玉篇云、栲音考、一音冷漢語抄、比佐加木似レ桐可レ作二染灰一者也、また仙覺萬葉抄五枚冊賢木之枝備、さかきといへるは、かの木常葉なれども枝葉しげらぬもあり、又、枝葉しげゝれども、いたくこまやかにくだ〳〵しきも侍るべし、此木は、中をとりてよのつねなり、さればわきてさかきとして、神祇をかさり奉るなりと見えたり、かくて萬葉榊落葉從四位下荒木田久老神主萬葉三卷注釋之書也に曰師の考に云、賢木は、榮樹にて、もと一樹の名にはあらで、松杉樒、などの常葉なる木を、神事公事に用ふるは云々とあれば、さも有なむと思ひをりつるに、一とせ越後國高田なる日吉神社の社人猪俣茂吉が古事學びせんとて、己が許に在つるをり榊の事を云つるに、茂吉が云らく、今神宮に用ひらるゝ榊といふ木は、越の國には無き木也と云るに、しからば何ぞの木をさかきとはいふぞと問に、今此あたりの人の、美者々木とも美者呉とも云なる木を、國にてはさか木とこそいふなれと云るに、本居氏の古事記に、田中道麿が說とて有が、全く同じ事なるを、又、此所の弟子西村重波が云るは、神樂歌に、榊葉の香をかぐはしみ云々とありて、貫之主の、おく霜に色もかはらぬさかき葉の香をやは人のとめて來つらむ、新古今集神祇の部又源氏物語榊卷に、少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそくれ、などあれば、必葉に香氣有べきに、樒も、榊も、美者々木も、葉に香氣無ければ、古の榊とて用ひたる物にはあらじ、と云るによりて思ふに、和名抄、字鏡等に、龍眼木の字をあてたるは、叶へりやいかゞおぼつかなければ、其

はおきて、いにしへ佐賀木と云るは、何にまれ常葉木を用ふる中に、もはら神事公事に用ひしは、樒なるべくこそおぼゆれ、（或人云龍眼木は、から木なり、その葉香氣ありて、形樒に似たりといへり）さるは卷廿に、奥山乃志伎美が花の、とよみて、必深山に生たつ物なれば、奥山の賢木の枝などいへるにもかよひ、和名抄に、樒は香木なりと有て、其葉に香氣あれば、さか木葉の香をかぐはしみ、といへるによく叶へり、さて樒をしも佛の前に奠るは、元來神事に用ひ來れる物なれば、佛にも奠る物とせる也、かくて今世は專一佛事の物と思ひて、神事には、他し一種の常葉木を用ふる事となりて、樒は、花とのみ名付て、さかきてふ名は失へるならんと思へりしに、吾外宮神宮に、十二月晦の夜、小内人等、花賢木が參つたと申て、玉串御門に（内ノ玉垣御門とも云）奉るなるは、樒にこそ有けれ、是を以て思へば神武天皇の大御歌に、伊智佐介幾未廼云々と詠ましゝは、賢木にて、（和名抄、比佐加岐とは是にて比と美と通ふ例也）美者々木をいひ、此神宮に、花賢木といふは、樒を云るにて、古世の榊は、專一樒を用ひしならむとは思ひなりぬ、又、秦文樹が云く、丹後國にては、すべて樒を神事に用ひて、其をさかしばといふと云り、又或人、伊豆國箱根邊にても、樒を用ふといへり、といへり、此說むげによしなきことにはあらず、同じ伊勢の松坂あたりにても、正月の門松にも、櫁椎樒など、取交へて結添ふることもあり、大方佛の前、墓などにさしたつる事は、神の祭と、人の靈を祭ると、元來同一なれば、しかる事あるまじくはあらねど、中むかしのころより、樒は樒、榊は榊にて、よくぞしれりけん、そは源氏物語に、榊の枝を折て、榊の歌をよみ、又、榊の枝に文を付て、贈給つる事もあるも、又、尼になり給へる人の、靑にびの紙に歌かきて、樒にさして贈給へる事、そこの詞に、例の事なり、といひ、あかの水に樒そへて、佛に手向もする事も見えたれば、神事によれるに榊を用ひ、佛事によれるに樒を用ひたれば、まぎるゝ事あるまじく覺ゆ、又一ッ己が思ひよれるは、古事記に、湯津楓、湯津香木、とかゝれて、訓二香木一云二加都良一とあり、神代紀に、湯津杜木、湯津杜樹、百枝杜樹、などあるに、字鏡に、杜毛利、又佐加木とありて、同書に、椿は加豆良とも有、杜木、杜樹、香木、椿、など通して、一物二名にて、佐加木と、加豆良と、同物なりとも云んか、是もいかゞあらん、桂は、加茂の祭に用ひらるゝ事名高く、物語ふみに、桂の木のおひ風に、祭のころを思ひいづ、或は、下風なつかし、などいひたることあり、（今世加茂の祭に用ひらるゝかつらと

いふ木は香氣たき木なり、そは葵の葉に形の甚よく似たる物なれば、用ひらるゝにてもあるべし猶しひていはゞ、桂を加茂の祭に用ひらるゝも、やかて榊なればなりともいふべけれど、一物二名の物ならましかば、代々の歌の中には、さるよしを風雅に取なして詠るもあらましを、物語ぶみにも、しかいへることも見あたらねば、桂ぞやがて榊なるともしひては云がたくなん、かくいひ〳〵て考ふるに、猶はじめの抄の説と、解の説の、おだやかなるは、さまたげなくなんありける、うつほの物語さがのゐんの神樂歌四首の中、三首は榊葉、一首椎の木なるも、又いかゞ、かくて又思ふに、今世、大神宮をはじめ、加茂、春日、すべて諸國の大小の神社に用ひらるる榊は、香氣こそ無けれ、又別に某といふ名もなく、何所にても、たゞ佐加木とのみ云て、枝葉の姿もうるはしく、よろしき木にて里中の社地にては、椎樒ばかりの大木は見あたらねど、奥山にては、立榮たるもありぬべければ桂樒など、しひて考へいはむよりは、もとよりの榊に、思ひさだめんと思ふに、此歌に、香をかぐばしみとあるは、けだし古世よりうたひたがへたる詞にはあらじかと思ふよしあり、そは榊葉の陰眞細しみ云々とありけむを、後世の神態に用ひらるゝ榊葉は、陰まくはしみといふばかりにはあらで、木のほど大きからぬによりて、おのづから香をかぐはしみならんとうたひかへられたるにやあらん、榊葉の蔭といふことは、さしたてたる其樹の大きなるをもていへるなり、此事、次々にいふべし、眞細は、物を稱美ていふなり、萬葉十三五枚八隅知之和期天皇云々、神風之伊勢乃國者云々、見渡島名高己許乎志毛間細美香母云々朝日奈須目細毛暮日奈須浦細毛云々、とあるにて知らる、そも〳〵榊をたつる事は、古事記磐屋戸の段に、天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而、於上枝取著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉、於中枝取繫八尺鏡、於下枝取垂白丹寸手而、此種々物者、布刀玉命、布刀御幣登取持而、天兒屋命、布刀詔戸言禱白而云々、これ五百津眞賢木を根許士に許士といひ、上枝、中枝、下枝、といへる、木のほど大きなりけむ事しらる、又、景行紀曰、爰有女人、曰神夏機媛、聆天皇之使者至、則拔磯津山賢木、以上枝挂八握劒、中枝挂八咫鏡、下枝挂八尺瓊、亦素幡樹于船舳、參向云々、仲哀紀曰、時岡縣主祖熊鰐、聞天皇車駕、豫拔取五百枝賢木、以立九尋船之舳、而上枝云々、筑紫伊覩縣主祖五十迹手、聞天皇之行、拔取五百枝賢木云々、古事記垂仁段、本牟遲和氣御子出雲大神宮に詣給はしめ給ふことあり、

其文、出雲國造祖名岐比佐都美、餝青葉山而立其河下、將献大御食之時、其御子詔言、是於河下如青葉山者見山非山、若坐出雲之石硐之曾宮葦原色許男大神以伊都玖之祝大廷乎問賜也、伊勢物語に、昔田村の帝と申帝御坐しけり、其時女御多賀幾子と申いまそかりけり、それ卒給ひて、安祥寺にて御法會爲けり、人々捧げ物奉りけり、奉り集たる物、千捧ばかり有、許多の捧物、木の枝に著て、堂の前に樹たれば、山ながら堂の前に出たるやうになん見えける、山のみな遷りて今日に會ふ事は春の別を訪ふ事となるべし、云々、大神宮儀式帳、職掌雜任の條に山向物忌并父某右二人云々、供奉職掌太玉串並八重榊取備供奉、齋内親王二枝、大神宮使二枝、禰宜四枝、宇治内人八枝、並枝別木綿懸之、卽第三重御門東方一列八枝八重、數六十四本、右方亦如左、員並高四尺枝別木綿懸之、此太玉串並天八重榊乃天發山者、天照大神乃高天原御坐時乃云々、天磐門閉給時爾云々、天香山爾立在留眞取樹云々、此今賢木懸木綿太玉串止號之、以之天乃八重佐加伎并禰宜乃捧持太玉串爾隱侍弖天津告刀乃太告刀厚廣事乎多々爾申玉串發由如件云々、延喜大神宮式にも、大中臣太玉串爾隱侍天云々、天津祝詞辭乎稱申云々とあり、神代、上

古のは更にもいはず、安祥寺の法會の捧ヶ物著たるも、山と見えたるよしにて、大中臣（大中臣氏の人をいふ）の太玉串（木綿つけたるさか木をいふ）の陰に隱れ侍りて、とあるをも考合すべし、（後世には省略して、少き枝もてする事は、さまよくこと／＼しからぬさまにふるまひて古實を失る也）とめくればゝ、欽明紀、廿一枚尋、萬葉十九枚十河瀬尋、古今集春上、同春下に見えたり、八十氏人は、中臣忌部、猨女、鏡作、玉祖、大作、久米など、その掌れる職の名、それ氏となれる也、八十氏人は、百官人をいふこと、氏々名の考にいへり、記傳三十九枚十二をも見べし、圓居は、古今集雜上思ふ共圓居せる夜は、後撰集春上これかれ圓居して、同雜一、むかしおぼゆる圓居同じ返歌にもあり

末

かみかきのみむろの山のさかきばゝ神のみまへにしげりあひにけり

○抄曰、此歌は、古今集採物の歌に載たり、みむろとは、神の社を申せば神垣とは、枕詞に置たる也○解曰、みむろとは、神の御あらかを云、さて神垣は、其社をひろくさす也、されど重ねいへる例はなし、神なびのとありしを誤りし也云々、神なびの御むろは、飛鳥の雷岳のこと也、もしは他の社にてうたふ時、神垣とかへしにや○今いふ、抄にも解にもいはれた

るが如し、神垣といふも、神の社ある所をいふなり、三室といふも神社をいふことなれば、三室の山は、神を祀れる山にて何所にもあれ、神社ある山をいふなり、古事記、雄略天皇の大御歌、美母呂能伊都加斯賀母登加斯賀母登云々、また赤猪子が答へ奉れる歌、美母呂爾都久夜多麻加岐云々、又、萬葉七（三十七枚）木綿懸而祭三諸乃云々、三諸といふも三室といふも、同じ事なり、その三諸山といへるは、三輪山を云るなり、又、解にいはれたるが如く、飛鳥の神岳をも云なり、萬葉に、神奈備の三諸とも、三神の神奈備山とも、よめる歌おほし

或說

本

さかきばにゆふとりしでゝたがよにか神のみむろをいはひそめけむ

○抄曰、神の三室は、神の社也○解曰、しでゝは、したらして也、神代紀に、垂の字をかけり○記傳八、（三十八枚）書紀に、下枝懸一以粟國忌部遠祖天日鷲所レ作木綿一と見え、古語拾遺に、令下天日鷲神一以二津咋見神一穀木種殖之以作中白和幣上○今いふ、萬葉六、（三十九枚）木綿取之泥而、また同九（三十枚）齋戸尓木綿取四手而、古事記に、天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而、於二上枝一云々、中枝云々、於二下枝一取二垂白丹寸手一而、（訓レ垂云二志殿一）

劒の歌に、組の緒しでゝともあり、日本紀竟宴歌、（延喜六年、物部安興）太玉命、比佐嘉多能阿麻弖流阿美乎伊能留度曾要多母須惠々彌奴佐波志弖氣留

末

しもやたびおけどかれせぬさかきばのたち榮ゆべきかみのきねかも

○抄曰、古今集、とり物の歌なり、霜八たびは、霜のこしこし置をいふ、神のきねは、かんなぎを云、又は、神の御前に神樂する八乙女などをも、きねといふべきにや、榊葉の常葉なる色によせて、祝の心に、立さかゆるとはいへり○解曰、霜八たびは、霜のいや度もおけども也、神のきねとは、巫女の事にて、きねは、ねき女の略なり、ねをはふきめをねにかよはして、しかいふときこゆ、さて賢木の榮ることによせて、巫女をいはふなり、一二の句ども、よろしき古語なり、此歌は、古今集にも、採物の歌とてのりつ○餘材抄第廿、（大歌所歌、神あそびのとり物の歌）顯注云、神樂には、巫女はつねにはなけれど、やをとめとて、八人の巫女相具たり、石清水御神樂にもあり、今いはく、（契沖の說なり）のふるくは、男女にわたりていひけるを、後に女をのみいふやうにはなれるなるべし、巫覡の字を思ひ合すべし、立さかゆべき神のきねとは、さか木によせて、立さか

ゆるといはふなり 〇遣鏡曰、きねは、木根にて、すなはち榊をいへるなり、木を木根といふは、萬葉に、草を草根とよめる歌多く、又、岩を岩根、屋を屋根、矛を矛根、などいふ例にて、根は、添たる言なり、されば神のきねは神の木なり、然るを、拾遺集、貫之主の歌に、あし引の山のさかき葉ときはなる陰にさかゆる神のきねかな、とよめるは、既にこゝの歌を、巫覡の事と心得誤りて、よまれたりとぞおぼゆる 〇大祓後釋に、語問[シ]磐根樹立草之垣葉[ヲモ]語止[テ]云々、磐根はたゞ磐にて、根は添ていふ言なり、屋を屋根、羽を羽根、杵を杵根、矛を矛根、島を島根といふ類なり、考私云、考とは、縣居翁の祝詞考を云なりの大殿祭の下に、岩の高く顯はれたるを、いはほといひ、深く土にあるを、岩根といふ、といはれたるはわろし、樹立は、紀藺多知と訓べし、大殿祭ノ祝詞に、木根乃立[ヤ]とある乃ノ字は、決て衍なるべし、乃といふ辭ありては、調もいとあしきうへに、乃といふべき詞にあらず、きねたち也、さて他の祝詞には、みな木立とあれども、こたちとよみては叶はず、これはつねいふ木立の事にはあらず、考の說の如く杌[キリクヒ]なれば、根ノ字あるに依りて訓べきなり、書紀に、木株とかゝれたるも其意なり、株は、字書に、木根也と注せり、然らばたゞ樹立木立など書るはいかにといふに、かの岩根屋根などの例の如く、たゞ木の事をも、根をそへて、木根ともいふ故なり、されば木立など書るは、木の一字を、きねに用ひて書るにて、屋の一字をも、屋根、羽の一字をも、はねと訓が如し、さて意は、木根立にて、是は根に意あるなり、さてたゞ木をきねといへるは、古今集、神樂のとり物の歌に霜やたび云々、此きねは、卽[チ]上の榊をさしていへるにて、神の木かもといへるなり、然るを後に、是をあしく心得てよめる歌ありて、人皆巫覡のことゝ心得たるは、いみじきひがことなり、榊の歌に、巫覡をよむべきよしなく、又、巫覡を、立さかゆとはいふべき物かは、萬葉一に、岡の草根をいざむすびてな、同十四に、久佐禰可利曾氣、これらも、むすぶといひ、苅といへれば、たゞ草を、草根とよめるなり、木を木根といふことも、准へて思ひ定むべし、又思ふに、大殿祭の詞の、木根の根ノ字は、上の磐根の根より紛ひたるにて、衍にて、木の立賦とも思へど、きのたち、このたち、などいふ言はあるべくもおぼえず、なほきねたちなるべし、〇今いふ、神のきねは、かんなぎにて、覡巫をいふなり、との舊說のひがことなることは、わが翁のいはれたるがごとし、されど猶、かの木根立の說は、うべな

ひがたく思はるゝことあり、大殿祭に、磐根木根乃立知草能可岐葉とあると、神代紀に、木株とかゝれたると、此歌の、神のきなかも、とを考へ合せてとかれたるは、さることなれど、祝詞の中にも、此大殿祭と、大祓と、祟神遷却と、出雲ノ神壽と、四通のうち、大殿祭にのみ、木根乃立知とありて、餘の三通には、みな樹立木立とのみあり、三通を正しと見れば、木根乃立知は、根乃の二字衍(アマレ)るにて、いづれもいはねこたちくさのかきはをも、とよむべきなり、日本紀には、いらぬ所へ字を添てかゝれたること、此ほかにも多ければ、あながちにかゝはるべからぬこともあり、此歌のきねは、おのれ思ひよれることあり、そはつぎにいふべし、まづこゝに要と解クべきは、此歌の一首の意なり、いでや此歌は、榊の歌なりといふなれども、後世に歌作者(ウタヨミ)の、榊などいふ題を得て、そをよみ出たるが如くはあらざるなり、如是(カク)よめる歌のあるを、採物の榊の歌としてうたふを、こゝに記したるなり、一首の意は、霜はおけども冬枯せぬ、立榮えたる榊葉の如く、此神垣はさかゆべき神垣なり、とよめるなり、神垣といふは、御社をいふなり、さるは御門と申て天皇の御事になり、殿といひてその御あるじの事になり、神垣と申て、その神の御うへになることをも思ふべし、此きねといふは、樹木の事にはあらず、きは、城(キ)なり、根は、垣根の根と一つことなり、萬葉十一に、寸戸(キヘ)が竹垣(タケガキ)、同十四に、伎倍林(キヘノハヤシ)などのきへと同じく、社地の境牆をいふなり、縣居翁の久爾都知の考に、久爾といふは、限(カギリ)の意なり、東國にては、垣を久爾といふにて知べしとあり、卽くねときねと、同語なるにても心得べし、六帖夏ノ部、神まつる卯月にさける卯花は白くもきぬがしらげたるかな、これ垣ねをきねとよめるなり、此歌、神まつるといふ語(コトバ)あるによりて、きねを巫女の事と心得て、舊說みなこと誤れり、神まつるは、卯月のみへ係りて、きねには拘らず、卯花にて垣根が白くしらけたりといふが表にて、裏に米をしらぐる杵の事にかけたるなり、巫女が、白くしらげて見ゆるといひて、きこゆべしやは、垂仁天皇の都を、古事記には玉垣宮とあるを、日本紀には珠城宮とあり、垣と城と一つことなり、かれ神の城根といふは、神の垣ねといふと一つにて、神社ある所を神垣といふも、社地をさしていへることしるべし、かくてはやくより、きねを巫女の事と思ひひがめてよめる歌ども、忠見集、四月家のかみまつる、年ごとにまつらむかずはきねぞ見んいたゞくかみのしらくるまでに、金葉集連歌、加

茂御社にて云々、神主成助、しめのうちにきねが音こそきこゆなれ、かへし行重、いかなる神のつくにかあるらん、夫木集夏、神樂、顯、山人のたける庭火のおきあかし聲々あそぶ神のきねかな、同、神祭、信實朝臣、ちはやぶる卯月のみしめあらためてきねがもろこゑはやうたふなり、同、正三位知家、庭火たくけぶりこゝもに立ごまふかなづるきねが袖の風に、同、皷、寂蓮、さよふかききぶねのおくの松風にきねがつゝみのかたおろしなる、又、神まつるこいふ詞、六帖、貫之、神まつる時にしなれは榊葉のこきはの陰はかはらざりけり、夫木、土御門内大臣、神まつる卯月になればその花の垣ねもせみの衣きにけり、同、従三位賴政卿、神まつるころにもなればうつきさすこやの袖垣花咲にけり、などあり、猶よく考ふべし、

幣

本

みてぐらはわがにはあらずあめにますとよをかひめのみやのみてぐら

〇考曰、拾遺集神樂歌なり、みてぐらは、御幣なり、とよをか姫とは、大ひるめのみことを申す、天照大神の御名なり、

〇解曰、みてぐらは、充座にて、社に奉る多くの物をいふが中にも、絹布幣をのみいへる事多し、豐をか姫とは、大ひるめの命を申す、と或説にいへり何に出たるにか、今考ふるに、豐宇氣姫を、うたひ誤れる物ならん、豐宇氣姫は、古事記いさなみの命の末の御子に、和久産巣日神、此神謂二豐之子宇氣毘賣神一とあり、又天孫天降り給ふ條に、登由宇氣神、此者坐二外宮度會一者也とある神なり、此大神は、大殿祭にも、屋船久々能遲命、屋船豐宇氣姫命といひ、廣瀨神和加宇加乃賣神も同じと見ゆれば、こゝに祭給ふ時の歌歟、天照大神なりといふは、かの外宮にませばなるべし 〇祝詞考にも、みてぐらは、よろづの物を、置座に充て奉るをいふなりとあり、〇記傳八四十三枚布刀御幣、和名抄、美天久良、靈異記、幣帛、美天久良云々、何物にまれ、に神獻る物の惣名なり、諸祝詞なごを見て知べし、名義は、いにしへ神に奉る物、また人に贈りなごする物を、凡て久良といふなり、此次の段に千置位戸とある位、位は借字なり又、貞觀儀式、大嘗祭條に、倉代十輿、代は實にて、即具物を云續紀一に、國造出雲豐持等、奉二神壽一幷獻二白馬一匹、生雉一翼、高机四前、倉代物五十荷一などある倉これなり、倉ノ字も借字なりさて美天は、御手なり、又は、手牟氣の切りたるにて、御手向久良の意にてもあるべし、師の祝詞考の説は、賢

木枝に着たるにかなはず、また御ノ字を添て書るにもかなはず、蜻蛉日記に、みてくら一夾二夾（ヒトハサミフタハサミ）とあるは、絹布を串に夾みて奉るをいふなり　○伊勢二宮さき竹の辨（此書は、わが翁のかゝれたる書なり、）こゝに引いだせるは、（古事記傳十五ノ四十ノ枚にも見えたれども委き方を云なり）に曰、豐受大神を、天照大神の祭らせ給ふ神なりといふことは云々、さて神樂採物の歌に、幣、みてくらはわがにはあらず云々、みてぐらにならましものを云々、杖、このつゑは云々、篠此さゝは云々、桙、このほこは云々、とある此豐岡姫と申す神は、古事記日本紀にも、其外の神典にも、見えたるとなき神なるに、かくやごとなきさまによめるは、なみ／＼ならぬ神とこそ聞えたれ、これを天照大神なりといふは、たゞおしあてにて、さらによしもなき説なり、宣長つら／＼思ふに、こは決して豐宇氣姫を、豐乎加姫とうたひ誤れるなり、これを源氏物語の歌には、とよわかひめとよめり、さやうにもうたひしなるべし、すべて神樂催馬樂の歌は、うたひ誤れる例多し、萬葉に、ひさかたの雨も、とあるを、ひちかさの雨も、と誤りてうたふ類なり、さて豐宇氣を、豐乎加と誤るべきよしは、まづ宇氣を宇加ともいふは、常のことにて、宇氣之御魂を、宇加之御魂とも申し、宇と乎と通はしいふ例も多し、然れば豐をか姫は、豐宇

氣姫なること、何かうたかはん、然らば豐岡姫、いづれの神とせむ、かくてかの歌どもに、此神の宮といへるは、卽高天原にして、天照大御神の、此神を祭らせ給ふ宮にして、かの幣の歌に皇神の御手にとられてとあるも、天照大御神の御手にとられてなり、是も豐岡姫ノ神を祭らせ給ふとての、御幣なることは、前後の歌にてしられたり、取物の歌ども、一首のみならず、幣杖桙篠同じさまにうたへるも、おぼろけの神わざならんやは、天照大御神の祭らせ給ふ、重き御神事なるが故なり　○今いふ、みてぐらの說は、記傳によるべし、さてわがにはあらず云云といふ事をいはれたる論らひどもは、今一つ大平が思ひよれることもあればいはむとす、そも／＼崇神紀、八年夏四月、以高橋邑人活日、爲大神之掌酒、冬十二月、天皇以太田田根子、令祭大神、是日、活日擧神酒獻天皇、仍歌之曰、許能瀰枳破和餓瀰枳那羅孺、耶磨等那殊於朋望能農之能、介瀰之瀰枳、伊句臂佐、伊句臂佐、伊句臂佐、如是歌之、宴于神宮、とあり、此歌の意、此御酒は、我なみ／＼の私の物にはあらず、尊き大倭なす（なる）三輪ノ大神、大物主ノ命の製造（ツクリ）給へる、凡ならぬ尊き御酒なりと申て、天皇に獻れるなり、いくひさひさは、我名をいひ、佐々と申て、御酒をすゝ

ゐ奉れるなり、こゝといふよし け、御の條にいふ また神功紀三年春正月、立㆓譽田別皇子㆒爲㆓皇太子㆒、因以都㆓磐余㆒、是若櫻宮 十三年、命㆓武内宿禰㆒、從㆓太子㆒令㆑拜㆓角鹿笥飯大神㆒、云々、太子至㆑自㆓角鹿㆒、是日、皇太后宴㆓太子於大殿㆒、皇太子擧㆑觴以壽㆓于太子㆒、因以歌曰、虛能彌枳破和餓彌企那羅儒、區之能伽彌等虛豫珥伊麻輸、伊破多々須周玖那彌伽未能、等豫保枳保枳茂苔陪之、訶武保枳保枳玖流保之、摩莬利虛辭彌企層阿佐孺塢齊、佐佐、古事記にも、同じさまにあり 此大御歌も、此酒は、わが凡につくれる御酒にはあらず、遙に遠き國の常世にいます、いはたゝすとて、磐にて立給ふ、少名彦名神の、豊ほぎして、いろ〳〵さま〴〵いはひことして、作り給へる、なみ〳〵ならずいみじく尊き御酒なりとなり、

因に、いはん、件の如く、此酒は少彦命ノ神の、神造の酒なりといふ事、上古の世のことわざならはしたるべし、之になぞへて、朝夕の食飯の饌も、保食神、豊受神の作り給ふ御飯なりなどいひていたゞきうやまひて給へなどせしならはしもありつらんかし、そのはじめを思ひて、神の御惠は、わするべからざるなり また日本後紀、延暦廿二年、遣唐使藤原葛野麻呂卿に、御酒を賜ひし時の大御歌、許能佐氣波於保邇波安良須、多比良可爾何陪理伎末勢止、伊婆比多流佐氣、おほにはあらずとは、大凡ならず、大方ならずなどいふが如し、みなみなならず重みして、大御心こめさせけるよしなり、上件の上古の歌によりて、考へ知るべし、かくて此みてぐらは、わがにはあらず云々とあるも、天照大御神を、天皇の祭り給ふ時の歌にて、此幣は、わが大かたの御幣にはあらずて、はるかに遠き天にましますゝ豊岡姫の神の宮より出されたる物ぞや、なみ〳〵みならず重みして、さゝげ奉る御手ぐら物ぞやと、天皇の申させ給ふ心ばへなり、杖篠鉾も並同じ、此柞は、いづこより出たる柞ぞ、天にまします、ここに尊き豊受大神の宮よりいたされたる、おもみすべき柞ぞとなり、神あそびは、かの天の磐屋戸の古實(フルコト)によりて、天皇の、天照大御神を祭らせ給ふ、御神わざにて、そのはじめここに尊きことなり、かくてわが翁の考へと、大平が考へと、意ことなり、見る人、よしと思はんかたによるべし

末

みてぐらにならましものをすへ神のみてにとられてなつさはるべく

○抄曰、此歌も、拾遺集にのせ侍り、すへ神天照大神の御事なり、なつさはるは、馴むつるゝ心なり ○解曰、なつさはるとは、馴むつるゝ心なり、と或説にいへり、是は、後世さも轉じ用ひたるなり、此言、もとは山路をなつみ來る、又、船の澳になつさふなど、萬葉にいひて、とゞこほる事なり ○記傳四十二、三十五枚、那豆佐比は、浮ぶをいふ、凡て此言は、或は水

に浮ふをもいひ、或は底に沈むをもいひ、或は渡るをもいひて、何れも、水に着ことにいへり云々 ○玉勝間六、からあるの歌ごもを考へ合すに、海川なごにうかべること、船よりわたることなごにいひて、枕詞にも、引綱の鳥しもの、にほ鳥の、なごいひて、水に着ことのみいへり、三の卷の長歌に、引綱のなつさひこむこ、九卷長歌の反歌、いこまあらばなつさひわたり、此二つは、あらはれたる詞には、さはなけれごも、さるよしありてよめりこ聞ゆ、此外はみな、海叉川なごのみよめれば論なし、然るに此詞、中昔の物語書なごにいへるは、いたく意異にして、なれしたしむことにいへり、神樂（カミアソビ）の歌に、すめ神の御手にこられてなつさはましを、こあるも然なり、いかにしてかくまではうつりかはりけむ、萬葉にいへるこは、いさゝかも似よれるかたなし ○今いふ、すへ神こは、ここに尊み崇めて、申奉る詞なり、此皇神は、天照大御神をさして申せりこきこゆ、幣は、天皇の朝廷より、天照大御神に獻り給ふ御手ぐら物なれは、皇大神の、安けく平らけく受給ふべきによりて、安けく平らけく受給ふはとゝ、御手に取給ふべき物なるによりて、さも尊き皇神の御手に、したしく觸給はんことを、たふときことゝ思ひて、しかいへるなり、二十七枚萬葉に、なつさふこいふ言、あまた所に見えたり、今そなつさふは、御もこちかくよりなつくをいふなり、拾遺集十六、雜春、藤原長能、雪をうすみ垣ねにつめるからなつなつさはまくのほしき君かな

杖

本

このつゑはいつこの杖ぞあめにますとよをかひめのみやのつゑなり

○抄にも解にも、上のみてぐらの歌こ同じさまなりこあり、○今いふ、上二句は、下三句をいはむためにまうけていへるなり

末

あをさかをけさこえくれば山人のちとせつけとてきれるみつゑぞ

古本四五ノ句、われにくれたるやまつゑぞこれこあり、古本のイに、ちこせつけこてきれるつゑなりこもあり

○抄曰、此歌は、拾遺集にあり ○解曰、山人は、仙人の意也、萬葉に仙人をよめる歌、扇はなたず山にすむ人、また、山人の我にえしめし山つここれ、こよみましゝも、仙人をの給ふこ見ゆ、○今いふ、解に、山人は仙人なるべし、こいはれたるはいかゞなり、薪なごこりにゆきかよふ山人をいふ

なり、抄の本にも、イ本にも、ちとせつけとてきれる杖なり、とあるは、上よりのつゞき、その心にはかにして、わろし、古本、われにくれたる山杖ぞこれ、とあるは、けさこえくれば、といふによくかけ合て、よろし、萬葉廿、十枚安之比奇能山行之可婆、山人乃和禮爾依志米之、夜麻都刀曽許禮、とある、此大御歌によく似たるさまなれば、かくいふなり、人の我に物得さするを、くる、くるゝ、くれたり、などいふは、歌集にも、物語書にも、をさ／＼見あたらねど、土佐日記、正月七日の段に、かゝるほどに人の家の池と名ある所より、鯉はなくて、鮒ふりはじめて、川のも、海のも、こと物も、長櫃にいれて、荷ひつゞけておこせたり云々、此長ひつの物は、みな人々にわらはまでに、くれたれば、あきみちて船子どもは腹つゞみをうちて云々、又、十四日の段にも、梶取、また鯛もて來たり、米酒などくるかちとりけしきあしからず、などあり、枕草子四巻、雪の山の段に、十五日までさふらはせ、よく／＼まもりて、その日にあたらば、めでたきろく給はせんとす、わたくしにも、いみじきよろこびいはむなどかたらひて、つねに臺盤所の人けすなとにこひて、くるゝ物やなにやといとおほくとらせたれば云々、宇治拾遺集十四ノ巻、珠の價无量事の條に、さたしけまことに玉や持たるとこひければ、しふしふにさふらふよしをいひければ、いてくれよとこはれて、袴の腰より取出たりけるを云々、猶別書にもあるべけれど、さのみやはとてとゞめつ、此くるといふ辭は、記傳八、四十三枚幣の解はも、いにしへ神に獻る物、人に贈る物を、すべて久良といへりと見ゆ、後世の語に、人に物を與ふるを、久流といふも、是より出たることなるべしとあり

或說

本

あしひきの山をさかしみゆふつくろさか木がえたをつゑにきりつる

古本、四ノ句、イに、さかきのとあり、五句イに、きりつゝとあり、抄にも、解にも、つるとあり、變格なり

〇抄曰、さかしき山をこえむために、杖をきることよめり、ゆふつくるは、木綿を付たる也 〇解曰、さかしき山を、越んために、神をいはひ奉り、木綿を付たる榮木を、杖に切つるといへり、〇今いふ、ゆふつくるは、榊といふへかゝれる枕詞なるべし、解に、さかしき山を越んために、といはれたるは、萬葉四廿六枚周防在磐國乎、將越日者手向好爲與、荒其道、ともありて、旅ゆく人のならひ、山路のみならず、船越にも、

幣とり手向て神を祈る事あるを、思はれたるなるべし、されど杖に木綿を付て、さかしき山路をこゆといふことは、猶いかゞなりとおぼゆ、此歌、六帖にも出たり、三四ノ句誤字ありてたしかならず、續後撰神祇ノ部にも出たり、五ノ句、杖にきりつゝとあり、杖は、古事記上御禊の段に、投棄御杖に成座る神名(ノミナ)は、衝立船戸神(ツキタツフナドノ)とあり、息長帶日賣命の、新羅國主(シラギノクニキシ)之門(ガ)に、其ノ御杖を衝立給ひき、といふこともあり

末

すへかみのみやまの杖とやまひとのちとせをいのりきれるみつゑぞ

古本、五句、きれるの禮の傍に、多イとあり、こはいかゞなり

○抄曰、前の歌と大略其心一同なり、すへ神の宮を、みやまとつゞけよめるなり ○解曰、此杖は、われらがにはあらず、皇神の其眞山を越ます爲の御杖とて、仙人の千年をいはひてきりたる、神の御杖といふなり ○今いふ、解の説、いひさままぎらはしけれど、皇神のましまず其山を、つねに皇神のあるき給ふための御杖に、つねの人ならず、命長き仙人が千とせましませと、いはひをこめて切たる杖なり、といふ心おしはかりて意得べし、又思ふに、皇神の宮所なる此御山のうちにてつくべき杖とて、その山にある山人が、ゆく末の千とせをばいのりこめて、切たる杖なり、とよめるにてもあるべし、傍に付たるイの説、きこえがたし、六帖に、すへかみのみやまの杖は山人のちとせいのりにきれる杖なり、とあり、四ノ句つたなし

篠

本

このさゝはいつこの篠ぞとねりらがこしにさかれるともなかのさゝ

古本、古乃佐々波伊都古乃佐々曾安母仁萬須止與遠賀比女乃美也乃美左々曾美也乃美左々曾とあり、古本傍にも、トネリラカこしニモカレるトモチカ乃左々トモ乎カ乃さゝ、とあり

○抄曰、とねりは、舍人といふ近衞などの、弓いる物を云鞆は、弓いる時の裝束なり、鞆といはんとて、腰にさかれりとはいへり、ともをかは、所の名にて侍らん、○解曰、こはいづこの篠ぞ、とも岡の篠といふ中に、二句の序をおきたる歌なり、とねりらは、舍人等にて、殿守をすれば、常に弓矢をもてり、鞆は、弓いる時、左手に付る物なれば、つねに腰に付てゐるなるべし ○記傳三十三五十四枚舍人は、左右近(アタリ)く親く仕奉る者なり云々、此記、書紀に見えたるを考へわたすに、天

皇、また王たちの使ひ給ふ物にて、萬葉の歌によめるさまも、皆皇子に仕へるよしなり云々、名義は、殿侍、トノハヘリ ノハヘなつじむればねさなる、侍の意は、十四の四十四枚に云云々、師は、殿守こいふ意なり、こいはれしかご、殿守は、もこより別なり云々こあり、同書八三十九枚鞆は大神宮式神寶ノ中に、鞆二十四枚、以₂鹿皮₁縫之、胡粉塗以₂墨₁畫之、納₂檜龐笥二合₁、經一尺六寸五分、深一尺四寸五分、著₂緒一處₁、用₂紫革₁、長各一尺七寸廣二分こあり、兵庫寮式に、熊皮一條、鞆料、長九寸、廣五寸、牛革一條、鞆手料、長五寸、廣二寸こ見ゆ、西宮記に云、天皇欲₂御射₁時、侍臣一人候₂御座南方₁奉₂御鞆₁、張₂御弓₁、又持₂御矢₁こあり、云々、師云、鞆は、射るに左臂に着る物にして、形は、古部秘訓抄にも見え、着たるさまは、古き畫に見ゆこいへり、さてこれは何の料に着る物ぞこいふに、古歌なぞにも、鞆には音をいへるを思へば、此物に弓弦の觸て、鳴る音を高からしめんため也云々 ○今いふ、鞆の岡は、山城國乙訓郡鞆岡、和名抄に見えたり、清少納言枕雙紙こも岡は、さゝのはへたるがおかし、なごあり

末

さゝわけはそてこそやれめとね川のいしはふむともいさかはらより

○抄曰、此歌は、新勅撰集第九、神樂歌にえらび入られ侍り、こね川は、上野國にある川の名なり、篠をわけば、袖がやぶれんずるほごに、石はふむこも、河原よりゆかむこよめり ○解曰、こはたゞ初句の言のみを、篠の歌にこりたり、こね川は、上野國にある川なり、萬葉に多く見ゆ ○今いふ、刀禰川、萬葉十四、十三枚刀禰かはのかはせもしらずたゞわたり波にあふのすあへる君かも、こは上野國の地名なり、此歌のさまは、京ちかき大和山城なごの地名なるべく見ゆ、猶考べし

或本

本

さゝのはにゆきふりつもる冬のよにとよのあそびをするがたのしさ

○抄曰、こよのあそびは豐明の心なり、日本紀に、宴こいふ字を、こよのあかりこよめり、すべて宴遊をいへり、豐明の節會にかぎるべからず ○解曰、豐のあそびこいふも、豐のあかりして神遊びする心なり、されご豐の遊こいへる古言は聞えず、今の京なごにいひ初し略言こおぼゆ、これもさゝは一ここを取のみ 私云、豐のあかりと云事の説もあれど、そは記傳の豐明の説の中に、師の説さへあれは、こゝには除きたり

○記傳三十三、五十七枚豐明は、登余能阿迦理こ訓べし云々、豐樂こもかき、萬葉には、豐宴こもかけり、明は、言のまゝ書る

なり、書紀には、宴また讌宴樂宴會宴饗肆宴などあるを訓り、豐は、例の稱辭明は、もと大御酒を食て、大御顏色の赤らみ坐を申せる言にて云々、中臣壽詞に、悠紀主基乃黑木白木乃大酒ヲ云々、赤丹乃穗ニ所聞食止豐明ニ明御坐止云々、などある是なり、祈年祭祝詞などに、赤丹穗爾聞食とあるも同じことにて、御酒を食て、御顏の赤るを申せることと云々、大嘗祭祝詞の、豐明明明坐年とある段の師の考に、豐ノ明を冠辭として、豐明節會は、卯日の祭の事はてゝ、辰ノ日夕へに、豐樂院にて宴聞食を云そは夜にて、庭火立あかしなど、おびたゞしくかゞやく故に、豐明といふ凡ての夜宴をも、公なるを豐明といふは、これに同じ、豐は大なることなり、といはれたるはいかゞ、明坐をば、御顏の赤きことゝ云ながら、豐明を、庭火立あかしなどの明のことゝせられたるは、心得ず云々、さてこは大嘗新嘗には限らず、何時にてもいふことにて、類聚國史に、天長四年正月蹈歌ノ宴をも、詔に、今日乃豐樂埋とあり、後世には、新嘗の節會に限れるが如くにて、是を豐明の節會といへり ○今いふ、解に、豐の遊びといふ言を、古代の言ならぬさまにいはれたるは、いかゞなり、酒宴のかたにかけていふと、管絃の方などにかけていふとのおもふきあれば、これは豐の遊びといはむぞ、正しくあたれる言なるべき、催馬樂の美濃山の歌、みの山にしゞにおひたるたまかしにとよのあかりにあふがたのしさ、同じさまながら、これは柏をいふにて、豐のあかりにあふがとあり、引くらべてわきまふべし、

末

みつかきのかみのかみよゝりさゝの葉をたふさと採てあそひけらしも

古本、四ノ句、たふさとのと、イに爾とあり、遊びけらしも、のけイに爲と有

○抄曰、瑞籬は、久しき事にいひならはせり、人丸の歌にも、袖ふる山のみつ垣の久しき世よりとよめり、是によりて、みつ垣の神の御代よりといへり、たふさにとりてとは、折つればたふさにけかるたてなから云々といへるも、手に折こゝろなり、天鈿女の神の、竹の葉を手草にするよし見え侍り、竹は、さゝの事なり ○解曰、萬葉に、人まろが、みつがきの久しき時ゆ、とよめるは、崇神天皇の磯城瑞籬宮の、遠く久しき世なるをもて、久しきことにいひ冠らせたり、こゝに神の御代てふに冠らせて、彼岩門の條に有し、手くさの事にせしは違へり、後の歌には、かゝる事多きなり、浮ふさは、手くさを誤りしなり、或說に、遍昭の手ふさにけかるとよみしを

引たるは、強て助るにて、かなはず、あそびはうたまひの事也〇記傳二十三、三枚水垣宮、すべて水垣といふは、みつ〳〵しき垣と、美稱たるなり、水は、借字なり、書紀に、瑞字を書れたるは、當らぬことなるを、美豆に用る字なき故に、普く此瑞ノ字を書ならへり、なほ水垣の事、師の冠辭考に委し、さて歌に、水垣の久しとつゝけよむは、此ノ宮ノ號によりての事といひならはしたれども、よく思ふに然にはあらず、抑そのはじめは、萬葉十一に、處女等乎袖振山、水垣久時由、念來吾等者これなり、此歌を、四卷には、人麻呂の歌とて載たれど、人麻呂よりは古く聞ゆ、石上ノ振社は、いと上代よりの神社にて、其水垣は、久しき世々を經たる故に、久しの枕詞とせしなり、かくて後は、振山といはで、たゞ水垣の久しとのみもよむは、右の歌に委て省けるなり、若此宮號に就ていはゞ、水垣の宮のといはでは、言たらず、水垣とのみには、宮ノ號にはなりがたし〇同書八、五十四枚小竹葉は、佐々葉と訓べし云々、神樂には、小竹葉を用ひ、其を打振音の佐阿佐阿となるに就て、人等も同じく音を和せて、佐阿佐阿といひける故なるべし、猿樂の謠物に、さつ〳〵のこゑでたのしむといふも、松風の颯々といふ音より、是にいひかけたるなり、葉の名を佐々といふも、此音よりぞ出つらん、神樂歌の古本、殖槻、總角大宮、湊田、などの條に、安以佐々々々といふことあり、こは佐々佐々と唱へたか、又は佐阿佐阿をかく書るか、いづれにまれ、かの小竹葉の音に和せたる聲より出たることなるべし、古語拾遺には、以竹葉飫憩木葉爲手草（今多久佐）とありて、飫憩振其葉之調也とあり此飫憩のことゝ疑し、まづ神樂歌古本に、於介と唱ることは、處々にみえたれば、此言は、古への傳へなるべし、然れども、これを木ノ名とせるは、いかゞなり、さる木の名は、古へも今も聞ざること也、又、木葉を振音の、オケと鳴るべき謂なし、こは小竹葉の音の佐々よりまぎれつる、ひがことなるべし、かれ思ふに、於介とは、次に見えたる汗氣の事を、神樂にかく唱へしを、木名と誤れるなるべし、手草云々、たふさに執て遊びけらしも、手草を、多夫佐と謠ひ誤れるなるべし〇今いふ、水垣小竹葉などの説、記傳にくはしくいはれたるが如し、解の説は、たしかならず、冠辭考にいはれたるもきはやかならず、かの歌どもにつきてのあけつらひは、ともかくもあれ、此歌は、水垣の神の御代といふは崇神天皇の御代を、かくいへるなるべし、神代の岩屋戸の前に、小竹葉を手草とゆひてとあ

るも、もとよりの事にて、たれもその時のことゝは覺ゆることなれど、これは崇神記に、六年云々故以天照大神託豐鍬入姫命祭倭笠縫邑仍立磯堅城神籬云々とあれば此御代にはじめて別殿に遷し奉り、いつき祭らしめ給ひしかば、その時の大神遊びは、ことにおごそかにありけむ事、古語拾遺にも、至于磯城瑞垣朝漸畏神威云々其遷祭之夕宮人皆參、終夜宴樂歌曰云々、とあるにてしるく、此小竹葉の手草のことを、よみつたへたるなるべし、上古の天皇を神と申、その御代を神の御代とよめるは、萬葉一、十六枚橿原乃日知之御代從、阿禮座師神之盡云々、天下所知食之乎云々、同十九枚安見知之吾大王、神長柄神佐備世須登云々、山川母依氏奉流神乃御代鴨、同六、四十二枚八隅知之吾大王云々、皇祖乃神乃御代自云々、これら其證なり、又、たふさは、たくさをうたひなせるなるべし、二翁の說も同じ、手にとる物なれば、手草とはいはんは、よくあたれることなり、萬葉三仙柘枝歌に、あられふりきしみが高嶺を險と草取可奈和妹が手乎取、同十、同十九には、霍公鳥の草取といふこともあり、後世、鷹の歌にも、草とる鷹といふこともあり、こと〳〵なれど、似たることなればいふなり、又、手ふさは、手の末をいふにて、後撰、をりつれば、手ふさにけがる云々、うつぼ俊蔭卷、十五枚より十六枚までとしかげ今は日本へかへらんとす云々、もてかへるべき琴には、おのが手ふさの血をさしあやして、琴の名をかきつく、いせ物語に、およびの血して、岩に歌かけるに同じ允恭紀、元年冬十二月云々、大中姬命所捧椀水溢而腕凝云々、曾丹集、水草生る淺香の岩井夏來れば、手ふさをひちてむすびあぐるかも、などあるにて、いふべきことはなけれど、萬葉八、三十七枚射目たてゝ跡見の丘べのなでしこの花總手折われはもていなむ寧樂人のため、ともあれば、手にとる草花などの總やかなるは、手總ともいはゞいはれなんかし、

ついでに飫憩の木の思ひよれる事をもいはむ、木ノ葉を振音の、オケと鳴べき謂なしといはれたるは、さることなり、古語拾遺に、木ノ葉と記されたるは、まがへられたるにて、こは思ふに、古事記に、伏汙氣而蹈登杼呂許志、古語拾遺に、手持着鐸之矛而云々、貞觀儀式、鎭魂祭儀の條に神祇伯喚琴師名云々、御巫覆宇氣槽立其上以桙撞槽每十度畢云々、江次第にも、次神祇雅樂神樂次御巫衝宇氣御琴師彈和琴衝宇氣、神遊儀也云々、以賢木衝槽上也云々などあるにて、その槽を桙ノ柄ノ榊本にてつく音の、伏たる槽の下腹の空虛なるに音なひて、於牟氣牟宇牟氣牟などきこゆるを、宇氣とも、飫憩ともいふなるべし、

さてその槽は、木もて作りたる物なれば、木の名として、かの竹葉を振るこゝ對にして、木ノ葉とつたへ誤れるなるべし、かの琴の板を笏して打音の、許牟登牟（コントン）と鳴にやといへる說をも、考へ合すべし

神樂歌新釋三卷

弓

本

弓といへばしななき物をあつさゆみまゆみつきゆみしなこそあるらし

古本、五ノ句、志奈毛々止女須とあり

○抄曰、此歌は、新勅撰採物の歌なり、但し、終の七字、集にはひとしなもなし、といへり、歌の心は、品は、弓にあまたの品々也、さればその品をいふにおよばず、神の手向とするなり、その品をばいはねども、しかも又梓弓眞弓つき弓の字は可有といへるなり、一しなもなしは、第二句の心をかさねていへるなり、伊勢物語に、梓弓まゆみつき弓年をへて我せしがごとうるはしみせよ、とある梓も槻も、木の名なり、

○解曰、梓弓檀槻弓その木によりて、種々のわかちあれど、おしこめて弓といふ時は、何のくさもわかず聞ゆる、といふにて、此品とは、種といふ心也　○今いふ、和名抄に、梓孫愐切韻云梓音子、和名阿豆佐木名、楸之屬也、檀唐韻云、音彈、和名萬由三、木名也、槻唐韻云槻、音規、和名豆木木名、堪レ作レ弓也、古事記允

恭の段に、衣通王の御歌に、都久由美能許夜流許夜理毛、阿豆佐由美多弖理多弖理母、また仁徳天皇大御歌、知波夜比登宇遲能和多理邇和多理是邇多弖流阿豆佐由美、麻由美などあり、かくて此歌も次のも、戀の歌なり、此歌のこゝろわきまへがたし、試にいはゞ、弓は男の手にとる物なれば、弓を女になずらへたとへて、よめる歌、萬葉に多し、此歌、弓といへば、品なき物をとは、わが妻といへば、たゞ妻とこそいへといふ心、梓弓まゆみ槻弓品こそあるらし、とは、世にはさまざまの女こそあらめといひて、それらには、心もうつさず、女はわが妻一人をこそ思ふべけれ、といふ心ぞこもるらん、古本の、品も求めずとあるにては、女は世にいろ〳〵さま〴〵とり〴〵なるがあれど、何かはわれは他には又もとむることろはなしといふなり、伊勢物語には、梓弓眞弓つきゆみ年をへてわかせしがごとうるはしみせよ、とよめるも、他の女には心をうつさず、一人をたてゝ、節義を守れり、とよめるなるべく思はるれば、合せて互にその心をしるべし、いせ物語の此歌、昔よりよく解得たる説なし、弓を女にたとへてよめる歌、万葉にも多あれば、これをかよはしてさとるべし さて又、新勅撰に、五ノ句を、ひとしなもなし、とのせられたるも、もとよりの一說と思はるゝなり、さてその意は、一品も無しといふ

意かとおもへど、さは聞えず、等し名もなしといふ心にて、品こそあるらし、といふと同意におつるなるべし、眞弓つき弓とて、品々の名ありて、同じ名はなき物ぞといふ心なるべし、いづれにしても、もとよりさたかにはわきまへがたきことなり、弓を女にたとへたるは、萬葉二、十一枚みすゞかる信濃の眞弓わがひかばうま人さびていなといはむかも、みすずかる信濃の眞弓ひかずして弦作るわざを知といはなくに、梓弓ひかばまに〳〵よらめども、後の心を知かてぬかも、梓弓絃緒とりはけひく人は後の心をしる人ぞひく、同書七、三十二枚陸奥の吾田多良眞弓弦はけてひかばか人のわを言なさむ、南淵の細川山にたつ檀弓束纏まで人にしらえじ同十一、四十七枚梓弓弓束卷易あて見ではさらにひくとも君がまに〳〵、同十四、三十四枚おきてゆかば妹はまかなし持て行梓の弓の弓束にもかも

末

陸奥のあたちの眞弓わかひかはやうやくよりこしのひ〳〵に

古本、四ノ句、やうゝ與里古とあり、やうゝとありしを、ゝ一つ脱せしなるべし、緯には、也宇也久とあり、古今集には、末さへよりこ、とあり ○抄曰、此歌は、古今集採物の歌なり、第四ノ句、末さへよりこと有り、安達原の檀は、木の名な

り、それを弓にとりなして、よみならはし侍り、弓は、ひけば本末が我方へよる物なり、此歌は、戀の心なり ○解曰、こは戀の歌を、弓の採物の歌に用ひたり、古今集にも、取物の歌に入つ、其集には、末さへよりこそあり、後にやう〳〵こ轉じたるならん、檀の弓、梓の弓、槻の弓、その木にて作れるを、則それの弓といふなり、安達は、陸奥郡の名なり、そこよりいづる弓をいふべし、萬葉に、信濃のまゆみてふ類也、かくて弓をひけば、本末の我方へよる物なれば、よるといへる多し、且やう〳〵となど萬葉によみしかば、やゝ〳〵よりこといへるを、後にやう〳〵といへるが、やう〳〵は言のべていふ常言なり、雅言には、やゝ〳〵とこそいへ、同頭書曰、古今集に、末さへよりこ、とあるをよしとす ○記傳廿八三十六枚 稍は、やゝやゝと訓べし、萬葉五、同七に、漸々とあり ○今いふ、和名抄、陸奥國安達郡あり、萬葉七、三十二枚陸奥之吾田多良眞弓著絲而引者香人之吾乎事將成、同十四十六枚美知乃久能安太多良末由美波自伎於伎氏西良思馬伎那婆都良波可馬可毛、などあるにて、かの國の弓は、ここに名高かりけんこと しらる、延喜式には、安達郡なし、此郡は、延喜六年に、はじめて置りといへり、歌の意は、わが引よせはやゝやゝにわ

れになびきよれ、人にはしられず、しのび〳〵に、とよめるなり、六帖にも、みちのくのあたちのまゆみたむれども心こわさはやまずざりける、拾遺、みちのくのあだちが原の白眞弓心こわくも見ゆる君かな

或説

本

さつてらかもたせのまゆみおく山にみかりすらしも弓のはす見ゆ

古本、初句、佐川乎良加同傍に天々イとあり、緯に、薩天天我とあり

○抄曰、さつてらは、薩人の父といへるにや、薩人は、狩する人の惣名なり、もたせば、もたせるなり ○解曰、弓の幸ある人、弓矢をもて物を得るてふ古言よりして、弓矢もて獵する人を、さち人といふを、はやくより轉じて、さつ人、さつを、とはいへり、もたせば、たゞもつをのべていふのみ、從者などにもたせたるをいふにはあらず ○冠辭考に、萬葉卷十に、佐豆人乃弓月我高荷云々、こは古事記に火照命は、海の佐知彦として云々、此幸弓の事より始りて、弓矢もて山の鳥獸をかる人を、山さつ人、山のさつを、などいふなれば、さつ人の弓とはいひかけたるなり云々 ○記傳十七三枚書紀に、

海幸山幸とかきて、幸此云二左知一とあれども、幸の意のみにはあらず、佐知は、幸取にて、伎を省き、登理を切めて知といふなり、登理を知と云例多し さてまづ幸とは、凡て身のために吉き事をいふ、海佐伎山佐伎といふも、凡て物を得るは、身の爲に吉き事なる故に、幸といふなり、海山の佐伎を取給ふを以て、幸取彦と申せるなり、萬葉一、二十六枚、二四十四枚、六十四枚なごに、得物矢、五九枚に、佐都由夫、三十八枚に山能佐都雄、十四三十九枚四十枚に薩雄、又、五枚佐豆人、なごある佐都も、佐知と同じ云々 ○今いふ、さつをは、右にいはれたるが如し、さつてらは、得物手等なるべし、手とは、追手、搦手、寄手、先手といふ手に同じかるべし、獵の時に、鳥獸を狩出す人等をいふなるべし、射部立而、財部人の、云々といふも同じ、萬葉六、十四五枚見芳野乃飽津之小野笑、野上者跡見居置而、御山者射目立渡、朝狩にしし履起し、夕狩にとり蹋立云々、とあるさま思ひ合すべし、さつてかは、得物手々々之にても有べし、又、てらを、てゝと誤れるにてもあるべし、もたせのは、解にいはれたるが如し、弓のはず見ゆ、和名抄、四聲字苑云、弓音宮、和名由美所二以遣一レ箭之器也、釋名云、弓末曰レ簫音蕭、和名由美波數 中央曰レ弣、音撫、和名由美都加 古事記、弓端之調、神代紀、弓彇、神武紀、弓弭萬葉十六、三十枚御弓之弓波受、同二、三十四枚弓波乃腰などあり、弓の末の端に、角などにて造る物なり

又

本

よもやまのまほりにたのむあつさゆみ神のたからにいましつるかな

古本、二ノ句、まもりまほりといふイもあり、緯、萬保里にたのむ、又、ヒトノマモリニ爪ルユミウとも有り

○抄曰、此歌は、拾遺集の神樂歌にあり、但集には、よも山の人のたからにする弓を神のみまへにけふたてまつる、とあり、よも山は、四方の山なり、こゝにはすべて世界の人をいへり ○解曰、古事記に、山を、楯山といひ、萬葉に、楯名附青垣山、などいふを思へば、四方山は、その國の楯にて、まもりとなるに、弓矢はた、もとより守なれば、かく重ねいふとぞ聞ゆる云々 ○今いふ、冠辭考、たゝなつくの說にも、山は、國護る藩屛ぞとて、青垣山といへば、其楯と垣との理り同じき故に、楯の名附てふ辭を冠らせし也けり、神樂歌に、四方山の守りとたのむ梓弓、てふをも思ふべし、などいはれたれど、山も護なるに、又山の護とたのむ、といはんこと、今すこしおだやかならず、此四方山といふは、國の四方にあ

る山といふにはあらずて、四方八方といふ詞にて、世の人のこいふ詞ときこゆ、そはまづ玉勝間九、花の雪の巻、三十八枚今の世の言に、よもやまのといふことあり、拾遺集神樂歌に、四方山の人のたからと云々、榮花物語、花山ノ巻に、今年は、世の中に、もかさといふやまひいで來て、よも山の人、上下やみのゝしる云々、といひおかれたるを猶よく思ふに、これらのよもやまといふ辭は、四方八方といふ言の、いさゝか轉訛る辭ときこゆ、今の俗にも、いふ辭なり、又、さまによりては、字音にて、しほうはつほうといふ辭もあり、雄略紀、十八枚八維、顯宗紀、廿一枚四維安閑紀、四枚八表、欽明紀、三十四枚四表八方、續日本紀十、二十七枚天平元年ノ詔に、天地八方調賜云々、これら考合せて、よもやまは、四方八方といふ辭にて、世の間の人のこいふことなり、まもりといひ、たからといふ辭は、萬葉三、二十七日本の山跡國の、鎭ともいます神かも、寶ともなれる山かも、駿河なる不盡の高嶺は、雖見不飽かも、清寧紀、七枚室壽詞に、此家長御心之鎭也、また、たらちねの親の守とそへてやる、などある、しづめ、まもり、たから、などいふこと考合すべし

末

梓弓はるくることにすめ神のとよのあそびにあはむとそおもふ

○抄曰、豐の遊び、上にいふがごとし ○解も同じ○今いふ、此歌にては、春の枕詞に、梓弓といへるのみなり

劒

本

しろかねのめぬきのたちをさげはきて奈良の都をねるはたかこそ

古本、五ノ句、禰留波多賀古曾の波の傍に、也とあり、又、禰リワタルカナともあり

○抄曰、拾遺集神樂の歌なり、ねるは、あゆむことをいふ、○解曰、ねるは、足ふみをひとしく靜にわたる意也 ○今いふ、大刀の目貫は、他の古書にいまだ見あたらず、大神宮神寶、玉纏御大刀一柄、身長三尺五寸、赤木柄長七寸一分、以五色錦張之、以五色吹玉黏裏表裏、有金銅花形目貫五枚、有金銅鍛鍔同緣同甲金一枚有輪金一丸付鈴十口金銅鮒形二雙有鼻輪金鞘長三尺六寸七分塗黑漆以五色錦張之以五色、吹玉編菱有足金黃芝引金鞆尾等飾金物有金銅居金物表裏有麒麟形以錦爲帶取長四尺弘一寸五分、平緒一條長一丈三寸五分總長一尺弘四寸、以五色絲有繡、後孔雀前鸚鵡裏縹綾納赤地唐錦袋裏縹絹納朱漆韓櫃一合、有金銀鎖鑰、また鴟尾御琴一面云々、有星目貫二十六云々などあり、さげはきて

は武烈紀、二十枚太子歌曰、飫裒陀徴鳴多黎幡枳多徴氏云々、ねるは、舒歩なり古今著聞集第三十三四枚承元二年十二月九日、京官除目おこなはれけるに云々、後鳥羽院入道殿上に内辨の作法をならはせおはしまさむとて、瀧口殿に御幸なりて、門みなさしまはされけり、入道殿下墨染の御衣はかまに笏たゞしくして、院の御下重の尻を給はらせ給ひて、御腰にゆひて、ゆきはきて、ねらせ給ひたりける、目も心もおよばず、めでたかりける、をさなき殿上人一二人、上北面には重輔朝臣ぞさふらひける江次第一、四十九元日先召二外記一云々、凡内辨以下重不レ返顧不レ動不レ付砂於跡一爲レ事練作法有レ二、或荻虫樣足毎レ歩落立也、爲レ凡猶如レ糊可レ放レ靴也、齊信卿蹴表衣前練、故攝政殿不レ練給、故二條大關白被レ難云、末代無練人口惜也、さいばら我門の歌、我門をささんかうさんねる男子云々

末

石上ふるやをとこの太刀もかなくみの緒して〻宮路かよはむ

○抄曰、此歌も同集にあり、いそのかみふるやは、大和國布留といふ所の名なり、そこにある男子をいふべし、又、ふるは、古きとそへて、年老たる男といへるにや、くみの緒は、をとりの組にてしたるをいふ、みやぢは、都の道なるべし、○解曰、布留の社などに在し人よき大刀はきし事あるか、又此神宮には、古寶劒を多く納め給ひしかば、それに准へてよき太刀はく人有しか、今考ふるに、萬葉に、虎爾乘古屋乎越而青淵爾鮫龍取將來劍刀毛我、てふ古屋は地名と見ゆ、今も是なり、石上は、冠辭なるべし、然らば此古屋は、何處とも知がたし、且かの劍刀も我は、古屋によしある事とは見えぬを、今によれば、古へのかの地に、よき太刀もたる男ありしか、又雄略天皇の御時、すかるといふ人、神奈備の蛇を取來しと似たり、その人古屋てふ所に在しにはあらずや ○今いふ、石上神宮に大刀を納め給ひしことは、垂仁紀十三ノ枚三十九年十月、五十瓊敷命、居於茅渟菟砥川上宮一作劍一千口一因名其劍謂川上部亦名曰裸伴、裸伴此云阿箇播娜我等母一藏于石上神宮也、是後命五十瓊敷命一俾レ主石上神宮之神寶一、一云、五十瓊敷皇子居于茅渟菟砥河上一、而喚鍛名河上一作大刀一千口一、是時楯部倭文部、神弓削部、神矢作部、大穴磯部、泊橿部、玉作部、神刑部、日置部、大刀佩部、并十箇品部賜五十瓊敷皇子一、其一千口大刀者、藏于忍坂邑一、然後從忍坂移之、藏于石上神宮一云々、日本紀略、延曆二十三年二月丙午朔庚戌、運收

大和國石上社器仗於山城國葛野ニ云々、類聚國史、延暦二十四年二月庚戌、造石上神宮ニ云々、勅曰、此神宮所ニ以異ニ於他社ニ者何哉、臣奏云、多收ニ兵仗ニ故也云々、かく引いでゝも、此歌の、ふる屋男といふこと、猶ときがたき辭なり、布留のやしろのとか、布留のほぐらの、とかあらばさも聞ゆべし、萬葉の、虎爾乘古屋をこえて、といふも、きこえぬ辭なれば、ともにおたやかならぬことごもなり、萬葉四ノ廿九枚難波壯士、同八ノ十六枚飛鳥壯士とあり、宮路は、御所へ出仕る道なり萬葉二、三十一枚八多篭良が夜晝といはず行道を吾はことごと宮道とぞする、同十一ノ三枚内日左須宮道爾相之云々、同五枚打日刺宮人雖滿行吾念公正一人

或本

末

いはひこし神はまつりつあすよりは組の緒してゝ遊へたちはき

古本五ノ句、あそべたちはきのべの傍に、比といふイあり〇抄曰、神の祭はすぎつ、隙あるをりなれば、太刀はきてあそばむとよめる也〇解曰、いはひは、非常をいみつゞしみて祭るをいふ、組の緒は、上によるに、太刀の緒をたるゝ事なり、されど装束して太刀をはくは常の事なり、此歌には、紐をときて遊べといふべきなり、されどくみの緒を太刀のをとせざれば、劍の歌にはよしなし、强て太刀の緒とすべし、意は、神の祭は過て、いとまある折なれば、太刀はきてあそばむとなり〇今いふ、此歌、もとより心得がたきさまなれば、解の說にても、よく聞えたりとは思はれず、そもそもいはひこし神はまつりつは、潔齋して嚴重にいみつゝしめりしほどの神の祭り神事はをへたりとなり、さて今日神事はさることなくをへたれば、今よりは心ゆたかに太刀の緒したらせてあそばん、大刀帶等よといふなり、萬葉十九四十五枚袖垂ていさ我園に鶯の木つたひちらす梅の花見に、同九ノ廿二枚劍之緒解而家如解てごあそぶ、などよめるが如く、大刀緒ゆるゝかにたれて、心ゆたかに遊ぶをいふなるべし、直會大直會といふは、嚴重に忌つゝしみたる祭式をすまして、神官どちの打とけ酒のみあそぶをいふなり、今の俗に、これを後宴とぞいふ、あそべといふを、あそびとあるは、うたふ便りにかよはしたるなり

末

おきつきにすめ神たちをいはひこし心は今ぞたのしかりける

古本五ノ句、たうとかりける、とあれど、諸本皆たのしとあるによれり

○抄曰、おきつきは、人をゝさめたる墓のことを申侍れど、こゝは神のほこらをおきつきといへり、すめ神は、皇神なり、太刀の歌なれば、すめかみたちとそへよめるなり　○解曰、奥つきは、奥つ神籬てふ意にいへり、常に、人の棺柩をいふも、本言はひとしくて、きは、萬の物のかこひなしたるをいふ○今いふ、いづれの説とても、さためていひがたき事ともなり、そもそもつかを、おくつきといひ、又神をまつる所をしも、おくつきといはむこと、いともあるまじきことなり、けがらはしき所と、忌清めたる所なれば、たれしもうべなふまじきことなり、しかりとて、此歌にかくあるを、誤字とも、うたひひがめともいひがたし、たゞいさゝかも、よしあることを考へ合せて、後のよきことをまつべきなり、まづ墓をかまといふことあり、續日本紀三五枚冬十月丁卯、任二太上天皇御葬司一、以二二品穗積親王一爲二御裝長官一、從四位下廣瀬王、正五位下石川朝臣宮麻呂、從五位下猪名眞人大村爲レ副、政人四人、史二人、四品志紀親王爲二御竈長官一、從四位下息長王、正五位上高橋朝臣笠間、正五位下土師宿禰馬手爲レ副、政人四人、史四人、同書ノ廿七枚六月云々辛巳天皇崩、遺詔擧レ哀三日凶服一月、壬午、以二三品志紀親王、正四位下犬上王、正四位上小野朝臣毛野、從五位上佐伯宿禰百足、黄文連本實等一供二奉殯宮事一、擧レ哀着レ服一依二遺詔一行之、自二初七一至二七七一於二四大寺一設レ齋焉、冬十月丁卯、以二二品新田部親王、從四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位下佐伯宿禰太麻呂、從五位下紀朝臣男人一、爲二造御竈司一、正四位下下毛野朝臣古麻呂、正五位上土師宿禰馬手、正五位下民忌寸比良夫、從五位上石上朝臣豐庭、從五位下藤原朝臣房前、爲二造山陵司一、正四位下犬上王、從五位上采女朝臣枚夫、多治比眞人三宅麻呂、從五位下黄文連本實、米多君北助、爲二御裝司一、などみえたり、さて今の世にも、紀伊國牟婁郡の内、伊勢國度會郡に近き、長島浦といふ所ちかき、赤場といふ奥山里にて、里人のいふは、塚を竈といひ、炊爨所を玖度といへり、さて延喜諸陵式に、竈山墓彦五瀬命在二紀伊國名草郡一云々、また神名帳、同國同郡竈山神社とあるは、今若山ちかき和田村天霧山の南にある御社なり、此神社は、平地にちいさき小山の上にあり、かくて竈山御墓は、いづこにありともしられず、記傳に、丸山といふ山の事いはれたれど、猶よく考ふべきことなりもしくは此社は、御墓の上にまつれるにてもあるべし、さらば竈山神社と申すは、御墓の上にまつれるよしの名にもやあらん、尾張國愛智郡氷上ノ末社に、常世ノ社と申す神社あり、これは宮酢媛の御墓なりといひつたへたり、また和

名抄に、同國同郡に、下蒲鄕といふがありて、神名帳に、上知我麻神社、下知我麻神社といふもあり、これらも考へ合すべし さてしか引出たるは、塚を竈といふのみにこそあれ、神社を、奥津城といふ考へには取用ひがたかるべし、古事記に、大年神娶天知迦流美豆比賣ニ生ㇾ子、奥津日、次奥津比賣命、亦名大戸比賣神、此者諸人以拜竈神者也、此奥津は、地名などにてあるべけれど、また竈神なりとあれば、もしくは上古(トホツイニシヘ)炊爨所(ヘツヒトコロ)を奥津城といふことありて、さる御名は申すにもやあらむと思ふなり、元來(モトヨリ)炊爨所を奥津城といへるに、人はふる所の形、上を築きあけて、その中に棺柩を置所を堀うかてるが、炊爨所に似たるより、墓をも迦麻といへるならんか、造(ツクリ)構へたる形によれる名にやあらむ、かく思ひよりて、此歌の意、奥津城に皇神たちをいはひしことは、炊爨所に、奥津日子神、奥津比賣神、また大年神、御年神たちを合せ祀れる神社をいへるにてもあるべし、一首の中に、太刀のことの見えざるはいかに、二ノ句、神の御太刀をなどはあらざりつるか、又初句、奥津日子とありて、二ノ句、皇神たちにてもあらんか、後の考へをまつなり

梓

本

このほこはいつこのほこそ天にます豐岡姫の宮のみほこそ

古本五ノ句、宮のみほここそにほこなり、といふイあり

〇抄曰、此歌は、さきの杖の歌と一同なり、太刀ほこなどは、神社のたから物の中にあれば、採物によめるなり 〇解曰、此歌は、前の杖の歌と同じ、太刀鉾などを神社に奉るは、上代よりの事にて、祝詞などにも多し、よりて採物とす 〇今いふ、豐岡姫の宮の云々、前條にいへるが如し

末

よもやまの人のまもりにするほこを神の御前にいはひつるかな

古本五ノ句、伊波比多天多留とありて、傍にツルカナといふイあり

〇抄曰、さきの弓の歌と心詞おなじ 〇解曰、又さきの弓の歌とひとしく、其中に、人の守といふ時は、よもやまは、たゞよもといはむがごとし 〇今いふ、古本は、いはひたてたる、上にそのかゝりなくて留と結べり、つるかなは、諸本みな同じくて、よくとゝのへり

杓

本

大はらやせかゐのみつをひさこもてとりはなくともあそひてゆかな

古本二ノ句、しみづこあり、同五ノ句、あそぶせをくめこあり
○抄曰、せか井は、清和井こかけり、山城國大原郷に清水の名なり、此歌は、六帖に載たり、第三句は、手にくみてこあり、ひさこもても、くむ心なり、鳥はなくこもは、曉の鳥鳴比までも、猶納涼してあそばむこいふ心なり ○解曰、せかるは、堰之井なり、大原や堰の清水をこ伊勢物語にもあり、これなり、六帖には、手にくみてこあるを、杓の歌こせむこて、杓もてこかへたるなり、よりて涼こるにはかなはぬなり、さて曉まで遊ひてかへらんこなり、同頭書に、古本、安曾不世遠久女、こあるは聞えがたし、うたひ誤つるならん、清和院、枕さうしに、せかゐこいふより、こゝをも清和井こかくは、いかにぞや ○今いふ、ひさご和名抄、唐韻云、杓音與酌同、和名比佐古斟水器也、瓠符宵反、和名奈利比佐古瓠也、瓢音與薄交反、同瓠可爲飮水器者也、鎭火祭祝詞に、火結神生給氏云々、更生子水神匏川菜埴山姫四種物生給氏、此心惡子乃荒比留波水神匏埴山姫川菜持氏鎭奉止事敎悟給支、こあるもあれば、杓は、神樂のこりものゝ一つなるにてもあるべし、せかゐは、清和井こかくこあるは、万里小路を、までのこうぢ、近衛をこのゑこいふ類ひにて音便なるべし、建正云、榮花物語御裳着の巻に、土御門殿にて、田植のわざを見給ふこて、東の對の見わたしの田にうゝるわざを、すみの築地くづさせて見給ふ事をいふ所に、此殿の御馬屋のまくさの田は、殿の北わたりせかゐのもこにぞうゑける、こありこいへり、かくては田に水まかする井溝にてもあるべし、また田の小路にある井にて狹小井などいふにてもあるべし、又あそぶせをくめこあるは、いよ〳〵聞えがたし、もしくは鳥はなくこもゝ、鳥はたつこもの誤にて、水鳥のうかびてあそぶ溝井の瀬こいふにてもあるべし、すべておたやかに聞えがたき歌なり、夫木集神樂、修理大夫顯季、おもしろくなりぞゆくなるひさごもて神の心をくみてけるかな、匡房卿、夜をさむみせか井の水はこほるこも庭火は春のこゝちこそすれ、又、萬葉十九三十三枚打羽振鷄者鳴等母如此許寄敷雪爾君伊麻左米也、又、同枚鷄者彌及鳴杼落雪之千重爾積許曾吾立可氐爾、なごあれば、抄說にしたがふべし

末

わか門の板井の 清水里遠み人しくまねはみくさゐにけり

古本五ノ句、美徒さひにけり、傍に、水草爲イこあり、又、みくさおひにけりこもあり
○抄曰、此歌は、古今集こり物の歌なり ○解曰、末の句、古

今集に、水草おひにけり、とあるぞよき、ゐるとは、うき草のゐることぞと思ふはわろし、それも生ることそいはめ、萬葉にも例有り、古本、美徒佐比耳介里とあるは、水澁の浮たるなり、板井は、板をたてたる井をいふ

片折

本

おほはらやせか井やせかゐの水をひさこもて鳥は鳴とも遊(アソ)ひてゆかな

末

わかかさのいた井のし水里とほみ人しくまねはみ草ゐにけり

○抄曰、片折といふは、歌曲の節の名也、杓の歌にとりて、せかゐやせか井、板井やいたゐ、と第二句をかさねてうたふをいへり

諸擧

本

せか井やせかゐの水をひさこもて鳥はなくともあそひてゆかむ

末

いたゐや板井のし水里とほみ人しくまねはみくさゐにけり

○抄曰、もろあげといふも、歌のふしなり、第一ノ句を畧して、第二ノ句を、二かさねてうたふをいへり、たとへば陽關三疊の曲といひて、王維が詩を、行人を送る時の句を、三度かさねて謠事のあるになぞらふべし ○解の頭書云、古本によりて、折說本とすべし、板井やのことのみを重ねうたふをいふ、又、求子歌の末に、加太於呂志云々と有り、古事記に、片下てふ事もあり、今の折も、おろしの意にて、下の借字歟、されどかなたがへば、たゞ折たゝむ事歟、同頭書に、古本は諸擧本とあるは、上の折說本と同じ ○今いふ、片折、諸擧、抄の說正しく聞ゆ、解の說もたしかならぬさまなり、記傳三十九五十三枚に、夷振之片下につけて、いひおかれたることどもあり、初ノ卷、くさ〴〵のあげつらひの條に出せり

葛

本

わきもこかあなしの山の山人と人もしるかに山かつらせよ

○抄曰、古今集採物の歌には、まきもくのあなしの山とあり、萬葉集卷向と書て云々、山かつらとは、神事にしたがふ時、正木のかつらにて額をゆふを、山かつらとはいへるなり ○解曰、古今集採物の歌に入しには、まきもくのあなしの山とあり、此山、古事記に、麻伎牟久、姓氏錄に、卷椋とあり、萬葉に卷向とかけるを、まきもくと誤りけん、それを又わきも

こと唱へ誤れるなり、まきもくは、大和國城上郡あなし山もそこなれば、つゞけていへり、あなしの山人といふこと、垂仁天皇紀に、天照大御神を、磯城ノ嚴橿が本に鎭座せ奉り、倭大神をば、定神地於穴磯邑て祭給ふといへり、これより穴磯は、神祭る地と成て、此歌もよめるならん、又、只あなしを祭る人のよみしを用しか、山かつらとは、神わざする人は、眞拆葛を、冠の上の心葉にまとひてたるゝを、山かつらといへり ○今云、古事記纏向之日代宮、萬葉七、(六枚)卷向之病足之川、同十二(卅二枚)纏向之痛足乃山、垂仁紀、穴磯邑、延喜式神名帳、大和國城上郡穴師坐兵主神社、同二(九枚)四時祭式、穴師社、また、卷向社などもあり、山人は、樵夫、杣人をもつねに歌に、山人とよむなることはあれど、さにはあらじ、こは神事に仕うまつる山人なるべし、山かつらをかくるよしあればなり、あなしの山のといへるは、解にいはれたるごとく、垂仁の御代の神事によりてなるべし、江家次第、園韓神祭の條に、二月用春日祭後丑云々、神祇官獻供神物(内侍女藏人等參進)先供南(園神)次供北(韓神)次發絲竹音迎山人、左右衞士山人申畢取薪置南北炬屋(主殿寮然庭火)同、平野祭の條にも、辨外記各一人先參行供神膳云々、神祇官率御炊女四人於東門彈琴歌舞以迎山人(盛酒肴於八脚机)山人廿人左右相分執賢木立机前申祝詞炊女四人受賢木復座、給酒肴於山人、立薪祭場退出云々、同梅宮祭の條にもあり、全文を引出たるは、山人の爲態大かたにしらるべければなり、(辨以下著行事所屋)盃酌并羞饌如常、上卿參入、辨以下立屋前、次上卿揖、辨以下答揖、次上卿着座、故隆俊卿自屋東入、他人多經西砌着、辨着座自東(着之)山人候南門外、御琴師御神兒等迎之、盛酒肴於高机在門内、御琴師西面御神兒南面山人二人列立(北面東上)申鎭神詞畢、御神兒二人進受賢木着座、次琴歌發聲、次御神兒舞、次賜酒肴於神兒等御琴師御神兒復座、内侍供神饌、山人左右相分立薪庭中而退出、上卿喚召使二聲、召使稱唯趍立庭中(若日讀宣何誰其人)(申姓名他准之)上卿召大藏省云々、召使唯出召大藏丞立、上宣賜縵木綿丞唯出賜之畢、上卿并辨以下諸司判官以上錄目餘史生以下神主着座、左右御馬列立東舍前神主起再拜(衆官居再拜)神主申祝詞畢上卿以下拍手三段上卿以下箸下、(先盃酌三獻上卿擬辨飲之辨不擬六位)左右馬寮允各一人立御馬前巡社四度次山人燎庭火於東西外記以見參祿法覽上卿云々覽畢、返賜之、大藏省積祿於庭中辨召官掌二聲、次吹歌御神兒舞次倭舞(山人神主神祇侍從内舍人大舍人)辨召官掌二聲、

官掌立、及暗間日何神辨官、宮乃内乃省左官掌出召、宮内錄立辨官御飯堅樂給錄唯出又進立申云、御飯多々樂給畢、上卿以下退出、かくの如く見えたり、山人の仕うまつるわざかろ〴〵しきわざならず、山人、御神兒神主など、此神事にあづかれるさま、又、庭火の薪によれることもあれば山人といふにやあらん、延喜式四時祭式、園幷韓神三座祭の條にも、五、色帛各八尺云云（已上神祭料云々、朝神樂料、神祇官所充云々、已上解除料云々、已上釀神酒料）飯五斗六升、酒一斗八升（已上膳部八人、卜部二人、并山人十人料）とあり、この神山人とあるは神事に仕奉る山人なれば、かむやまひとなどいふ司の號か、又は神の字の下に、部某人など三字を脫して、理部何人、山人十人とあるにてもあらむか、西宮記、北山抄、儀式（貞觀儀式か延喜儀式か）江家次第等に見ゆる山人にて、江次第の頭書に、平野祭の山人の注に、西宮以二左右衞士一爲二山人一とあれば、左衞士右衞士の中よりつとむるなるべし、山かつら、清輔奧義抄下古今歌の釋に、百八といふ所に、まきもくのあなしの山の云々、山かつらとは、神樂するには、眞辟葛にてかしらをゆふ也、それを山かつらとはいふ云々、曾丹歌云、まきもくのあなしのひばら春たてば花かゆきかとみゆるゆふして、とあるは、かの山に神のおはすれば、ゆふなどの白く見ゆるが、花にまがふ心也萬葉十九（四十五枚）新嘗會肆宴歌、足日木乃山下日影可豆良家流宇倍爾也左良爾梅乎之奴波牟、同十三（四枚）五十串立神酒座奉神主部之雲聚山陰見者乏文、同十四（三十五枚）安之比奇能夜麻可都良加氣麻之波爾母衣可多伎可氣乎於吉夜可良佐武、和名抄祭祀具に、蘿蔓、日本紀私記云爲レ鬘以レ蘿（和語云、比加介加都良）同苔類、蘿、唐韻云、蘿（魯何反、日本紀私記云、蘿比可介）女蘿也などあり、神祭る卷向の穴師の山にある山人と見ゆるがごと、山蘿をかつらにかけよとよめるなり

末

みやまにはあられふるらしとやまなるまさきのかつら色つきにけり

○抄には、此歌こゝにもあれど、卷の首に、庭燎と題して出せり ○解にも、此歌卷の首にあり、云ク庭燎といふ事は、古事記には漏たれど、神代紀に、火處燒とあれば、それを始とす、眞拆は、常磐なる葛にて、十月と四月と古葉の紅葉いとよき物なり、夏のころ白き花さきて、ちひさくさゝげの如き實のなるもの也 ○今いふ、此歌、古本には卷首には出さず、ここにあり、但し傍に、庭火唱之と細注あり、神樂歌次第とてある條には、先人長庭火乃前に出來云、鳴高云々、二度次ニ不留末不々々々（次云）今夜乃夜御神態乃人乃長佐云々、笛篳栗乃音留了（取）琴

獨搔ク開ニ合兩手テ爲拍子テ出音ヲ其詞云、美山ニハ安良連布留良志止也末奈留歌庭火云々と有り、さて美山は、眞山といふに同じ、つねには深山とかく人もあれど、古き書には見あたらぬ事なり、外山は、つねに歌によむ外山なり、古事記に、迦具土の神の御頭御手御足などのなれる山津見の神たちの御名に、奥山、志藝山、羽山、原山、戸山など申すあり、その外山まさきのかつらは、冠辭考まさきづらの條にも、此歌も同じを引て、すべて常磐なる草木も、冬のはじめは、古葉の色付落る物なるが中に、此かつらは、ここに山の岩木などにまとひて、葉は、南天燭に似て黒みあるが、冬の初に、えもいはず紅づるあり、これなん山路にてよく目につく物なれば、又しかぞよみつらむ、此かつらを、神事にも、まさきづらといひて、用ひたるなるべしとあり

韓神

本

みしまゆふ肩にとりかけわれ韓神のからをきせむやからをきせむや

○抄云、みしまゆふ、伊豆國三島といふ所より出る木綿なり、木綿は、紙に作る木なり、それを四手にして、肩にとりかけ神を祭るなり、韓神とは、宮内省にます韓神二座を申侍るにや、からをき未詳、たとへば神を祭とて、神前に、ひもろぎなどをするおきたる心にや ○解曰、三島木綿は、伊豆國三島といふ所より出る木綿にて、賦役令別貢に、安藝木綿十兩とあり、木綿は、穀の皮を麻の如く作りなしたるにて、式に、麻はいやしく、木綿は貴く用ひたり、それを頭より肩までたる故に、かたにとりかけといへるなり、頭にかくること、蘰にみゆ、韓神、こは宮内省にます、韓神三座を申す、からをぎ、古本に乎支とかければ、俳優のをきなるべし、然らば、からわさをせしならん、古雅樂の後種々の伎樂ありし中にありつるなるべし、或説、ひもろぎを居置事とあるは假字たがへり、古本はすべて假字正しきに、乎支とかけり、置は於支にて異なり、同頭書に、旋頭歌なれば、五言を本とし、五言を末とす、然るに本に五言なきは異體なり、今うたふには、われを下へ付るなり、本意にあらず ○今いふ、古事記に、故其大年神娶ニ神活須毘神之女、伊怒比賣ニ生子、大國御魂神、次韓ノ神、次曾富理ノ神云云、記傳十二三十三枚に、韓神、名義未考得ず韓は、借字か、正字か、地名などか、はた韓國に由あるか、凡て知がたし、書紀に、素戔嗚尊帥ニ其子五十猛ノ神ヲ降ニ到新羅國ニ居ニ曾尸茂梨之處ニ云々、といふことあれば、其時に、此韓神をも率て往たまひて、かの國にして、功などありしにや、こは試にいへるのみなり、云々、曾富理、此も未考へ得ず云々、さて神名式に、宮内省に坐神三座云々、又、神樂歌に、韓神あり、其歌

は、三島木綿云々、からをきは、韓招禱（カラヲキ）か、後拾遺集資良朝臣藏人に侍りける時、園韓神の祭の內侍に催すとて、被すれど、此世の神は驗なければそのから神にいのらん、といひて侍りける返りことによめる、少將內侍、ちかきだにきかぬみそぎを何かそのからかみまでは遠くいのらん、辨內侍が日記に、建長三年十月十六日、新大納言實房夜番にまゐりて云々、なにとなきさまに、韓神をよきほどにうたひすてゝ出給ひしと、少將のもとより申つかはして侍りければ、辨內侍、きかはやなやまとにはあらぬからをきの身にしむ風は秋ならずとも、返し、少將內侍やまとにはあらぬ物からからをきのかへすがへすもなほぞわすれぬ、體源抄、私云、から荻は、かれたる荻をいふにや、淸暑堂の御神樂の試樂、執柄家にて行はるゝとき、人長、枯たる荻の枝をもつ事あり、是祕藏事也といひ、又、內侍所御神樂式に、韓神之事、素盞雄尊子也、有二帝基安泰之誓一、故宮中祭レ之云々加良於幾座置也といへり、枯荻、座置の說、皆ひがごとなり、抑此二神を、かく崇祭たまふ由緣は、江次第頭書に、園韓神、口傳云、件神、延暦以前坐レ此、遷都之時、造宮使欲レ奉レ遷二他所一、神託宣云、猶座二此處一奉レ護二帝王一云々、仍鎭二座宮內省一、此由ハ故事談にも見 とある是なり、さて常に園韓神と一つにつらねて申しならへる故に、此曾富理の神を、卽園神ならむと、たれも思ふことにて、信に然もありぬべし、但し園神とは別にもあらんか、彼宮內省なるは上古より二神並て鎭座故に、都遷されて後、つれにつらねて申しならへるにこそ 其故は、若此曾富理神ならば、韓神の御弟に坐せば、韓園と序次づべき事なるに、園韓神と序次て、其祭祀も、園を先にせらる 且（ソノウヘ）彼は園とのみ、何れの書にも見えて、曾富理といへることなく、又、曾能と、曾富理と、言の通ふ由もなし、若くは韓神二座のうちに、一座や曾富理ノ神にてはあらん、猶よく考ふべしとあり、さて此韓神を祭る時の歌なることは、後拾遺集の歌、辨ノ內侍日記の歌、などにてしらるれど、一首の意は、いかにともわきまへがたし、まづ三島木綿の事、解に、伊豆三島より出る木綿にて、賦役令別貢に、安藝木綿十兩 とあり、といはれたるは、たしかならぬいひさまなり、寫しひがめたる文か、いかゞ、そも／＼此神の御神態は、儀式にも、江次第にも、つばらかに記され、延喜式の神名帳をはじめ、他のつかさ／＼にも、その事にふれて出されたる條々多し、木綿の事は、大藏省式、二月十一月、園韓神祭、懸レ幔又所須臺料安藝木綿二斤五位已上料 凡木綿四斤六位已下料 丞率屬官依例班給、同一卷四時祭上、園幷韓神三座祭園一座、韓神二座

五色帛云々、安藝木綿一斤、凡木綿八斤などあり、三島木綿は、同十五卷、內藏寮十八枚三島木綿四十枚云々、同卷二十枚三島木綿二十八枚云々、と見えたり、さて此歌、みしまゆふ、かたにとりかけ、われからかみの、からをきせむや、とばかりにて、第三ノ句五もじたらはず、又は、われは、はれといふ囃辭にて、みしまゆふ肩にとりかけからかみのからをきせむやからをきせむや、といふ歌にてもあるべし、前張以下には、五もじ七もじの句を、ことさらにみだりたるが多かれど、採物の歌には、句のもじのみだれたるは、外に見あたらず、八平手の歌も同じ、さて又、からかみといふは、園神韓神とて、此神あそびして仕奉る神の御名なるに、からかみのからをきとつゝけたるも、いぶかしきことにて、からをきといふこと、はたいかなるをいふにか、韓擣招にて、俳優の一つにてもあらむか、解に、からわざといはれたるは、體を輕く躍揚などする舞のさまをいはれたるにか、もしさもあらば、下に大平が思ひよれる說をいへるに、思ひ合すべきことなり、かにもかくにも上古よりの事にて、考への及ばぬなりけり、又解に、肩にとりかけを、頭より肩までたるゝ故に、といはれたるもいかがあらん、たゞゆふをたすきにかくるばかりの事なるべし、又いふ、此からかみといふは、宮內省に坐す、園韓神の、から神にもあらず、又古事記に見えたる、大年神の御子の韓神にもかゝはらず、たゞ舞の手のさまによりていふなるべし、そはいかにといふに、いさかひあらそふことを、あらがふとも、又、からかふともいふ事あれば、からかみとは、神の人に着て諍鬪ふ事を、からかみといひて、からをきは神のかかりて、物あらそひをするが如きさまをして、舞ひくるふを、からをきといふにてもあるべし、今の俗に、いさゝかのことにつきて人のいふことをもどき獨言に繰語して、くねくねしくいさゝかごといひて、やくなきくねりごといふを、かみごとをいふといふなり、そは人を嚙が如く、人ににくにくしくいふによりて、嚙言といふなりともいへど、そはいかゞなり、世に狂氣亂心の人は、理もなきことを、口やまずいふものなれば、神のつきて、いはしむる言といふにて、神言なるべし、かみことを、又こゞとをいふともいへり、此小言神言、即ちからかふといふと同じ、さてかの天宇受賣命の、小竹葉を手草にゆひて、汗氣蹈登杼呂許志神懸して云々とあるは、わざをきをなすなれば、からをきも、これがさましてくるひまふことをいひて、後には、たゞ俳を舞ふことをいふにてもある

べし、枯たる荻を手にとり持さゝげかざして舞ふといふも、はじめは小竹葉なりけんを、からをきに思ひよりて、枯荻をとり持たるは、一時の興より例となれるにてもあるべし、かくいふは、皇極紀三年六月、國內巫覡等折取枝葉懸掛木綿伺大臣度橋之時爭陳神語入微之說云々とあり、今世にも、猿樂の能の舞等に、狂氣、物ぐるひの者のまねをするに、竹の枝をかならず取持ことあり、繪にも、亂心物ぐるひの姿を見するには、かならず竹枝を持たるさまなり、からをきの舞は、わざをきと一つ事なるべし（これ大平が今いふ說なり、解に、からをきをせしならんといはれたる、思ひ合すべし）此說による時は、かの少將內侍、辨內侍の歌によめるは、園韓神の祭に、此神樂のからかみを取合て、まうけたる歌のとりなしの一つの趣意となしたるなり

末

やひらてを手にとり持てわれからかみのからをきせむやからをきせむや

○抄曰、八ひらては、八枚の平盤なり、柏の葉にてさして、神供を盛物也 ○解曰、八ひらては、おほくの平盤なり、柏の葉を集て、竹串をさして、器の形に作りて、神の御食物をもるなり、大嘗祭式に、葉椀（久菩氏、似笠形）、覆葉盤（比良氏、似笠形）と有りこれなり

○記傳三十（五十三枚）比羅傳は、神武紀、作葉盤八枚盛食饗之、葉盤、此云毘羅耐、大嘗祭式に、凡供神御雜物者大膳職所備云々、並居葉椀（久菩氏）覆以笠形葉盤（比羅弖似笠形）云々、延曆廿年の御制の祓物の中にも、柏十五把（枚手六十枚料）柏十把（枚手四十枚料）柏五把（枚手二十枚料）外宮儀式帳に、大御饌に供奉御枚手五十六枚、また湯貴進御枚手合千二百六十枚など見ゆ云々、比羅傳といふは、久頖弖に對たる名にて、淺く平なる由なり、其形は、笠形に似たりとあるにて知べし、葉を刺合せて作れる物也云々、神樂歌韓神に、也比良天乎天耳止利毛知天云々、惠慶僧歌集（新勅撰に出）に、霜枯や楢のひろ葉も八葉盤に刺こぞいそぐ神のみやつこ、刺こは、刺作るなり今ノ世、大嘗祭に用ひらるゝ葉盤も、柏葉を、竹ノ釘にて、盃の形に刺作る物なりとぞ云々とあり ○今いふ、八ひらては、これらの說にてしらる、延喜宮內省式（四枚）大齋內膳司十四人（膳部）釆女司二十八人（官人二人釆部六人釆女廿人）云々、供奉神事諸司行列第一前頭膳司云々、次釆女八人（一人執刷筥一人執巾筥二人執神食薦二人執神八枚手筥二人執飯筥一人執鮮物ノ干物筥二一人執御菓子筥但新嘗祭加二人分執箸筥干物筥）云々、こゝに、八枚手筥といふとも見ゆ、夫木集冬の部、神樂、爲家卿、かれのこる楢の葉かしはとりしてゝけふ八平手に神まつるらし、此歌、かなへりやかなへらずや、いかゞあらん、同じつぎに、民部卿光範卿、御火白きかげに立まひいのるか

な昔が千代ふるからかみの袖、又いふ、體源抄に、韓神は、神樂譜本云、又號二八枚手一韓神は、取物外也こいふとあり、此曲の號を八ひらてこもいふなり、さればから神こいふも、神の御名をいふにはあらで、儛の狀をいふにてもあらんか、こいへる說に考へ合すべし、又いふ、手をうつに、八ひら手こいふあり、大嘗會式に、五位以上共起、就中庭版位一跪拍手四度、度別八遍神語所謂八開手是也云々大神宮式にも、再拜拍八開手一次短手再拜云々こあり、八ひら手こは左右の手を兩方へひろくひらきて拍をいふなるべし、ひろげてうてば、其音大きになるなり、高く大にならすを、八ひら手こいふなるべし、短手は、兩手のひらきをちかくひらきて、音なきばかりにうつをいふなるべし、かくいへるは、八ひら手を手にこりもちてこいふも、神供の葉盤を手にもちて、舞をまはむことすこしいかゞなりこ思ひて、もし八ひらてこいふ物は、笏なごを手に持つゝ、うちつゝ舞ふにはあらざるか、こも思へば、おごろかしおくなり、今世の田舍の國々にて、をごりこいふわざするには、音頭こいふものゝ、うたひあぐる歌にあはせて、おのおの手うちならして、囃辭なごこゑ〲にいひはやして、くるひをごることもあればなり

或說

本

わかあれはみやひもしらすちゝおかたははかかたとも神はしるらん

○抄曰、みやびは、日本紀に風姿こかけり云々、此歌の心は、我心は、みやびかなる事をもしらず、父かたこも、母方こも、神は知べしこなり ○解云、これは、幼き時養はれたる子にて、本の方をしらぬ人なれば、我生れし系をば、官人等も知る事なし、父方の氏より養はれしか、母方の族より養れしか、神こそ知給ふらめこなり ○今いふ、古寫本には、此歌も、次のしてさかゆるの歌もなし、此二首、いかにいへるにか、その意さだかならず、猶しひていはゞ、續日本紀二十六卷、天平神護元年大嘗會の時の宣命に、必人方父我可多母我可多能親在天成物に在こあり、父方母方の親族ありて云々こいふことなり、さて又、わがあれこいふここ、神に仕奉る事をいふならば、加茂ノ齋ノ内親王を、阿禮乎止賣こいへるここ、類聚國史、三代實錄等にあり、此阿禮こいふ辭、萬葉一ノ卷の、藤原の大宮仕へ安禮衝むをこめがこもは乏しきろかも、同六卷にも、長歌萬代爾安禮衛之つゝ天ノ下知之食むこ、なごありて阿禮は、仕へまつる事をいふ辭なり、加茂の祭を、御阿禮こいふも、同じ

意の辭なり、委しき由は、玉勝間十一、さねかつらの卷に記されたるが如し、かくて此歌、己が神に仕へまつるよしは、父の方の家の職にて仕ふるよしも、母が方の家の職にて仕ふるよしとも、宮人たちはしるまじけれども、神はよくしろしめすらんとなり、かくいふは我家の職、代々をかさねて、神に仕ふる家なることはもとよりにて、母の家さへ神に仕へまつる職にて、それを受繼て、代々神に仕へまつるは、わが阿禮の功のほどは、人はしるまじきを、人々もしらぬはあらねど、神のしろしめすらんをいはむとて、設けていへる例なり神はよくしろしめすらんといへるなり、こはせめて思ひよりたる説なれど、遠ついにしへ人の歌には、かくさまによめることとあれば、かつはいたくたがふまじくもおほゆかし

末

みなひとのしてはさかゆるおほなほみいさわかともに神さかもとに

○抄曰、しでは、木綿四手なり、おほなほみは、古今集に大直日といへると同じ、神を祭る時に、百官の集る事をいへり、諸社に、直會殿とてあり、神事にしたがふ人のゐる所也○解曰、しでは、木綿垂也云々、おほなほみは、古今集に、大直日といへるに同じ、神を祭るには、祭りはてゝ後、その事に預りし人々集りて、悦の酒宴するをいふ、かつここにいみ清まはり、つゝしみたるを、もとのつねに直す意にて、なほひといへり、ひとみと通ふ例にて、なほみと唱ふるとなり、さて大とは、公の神事なるによりていへり、他の神社にては、直みといへり、直會殿とて、いづれの神社にも殿あるなり、同頭書に、異本に、いさわかともに神さかもこに、とあり、いさわかともからに、かむさかほきに、といふ歟○今いふ、此歌は、又ここに、とき得がたし、二ノ句も、四五の句も、きこえぬことなり、上の歌の二ノ句、みや人を、一本に、みな人といふもありとあれば、此歌の初句は、又宮人のにてもあらんか、さて二ノ句は、來ゐてさかゆるか、しつゝさかゆる、にてもあるべし、大直みは、諸説のごとし、今世にいふ、祭の翌日の後宴の事なり、四ノ句、いさもろともにゝてもあらんか、五ノ句は、神の御もと、にてもあらむか、さらば直會殿につどひて、酒給へ、ここちさかえむ、と宮人どもぐにいざなふ心にてもあらむか、宮人のしつゝさかゆる大直會の殿に、いざもろともにゆかむといひて、神の御もとゝは、すなはち直會殿ある、神の御社をさしていへるにてもあるべし、猶よき説もあるべし、考ふべきことなり

大前張

○抄曰大前張に七首あり下の小前張に九首ある前張は一曲の名なるを、惣にわたりて大小と名付かへたることいとおぼつかなし、たとへば大前張七首の中の前張は本曲にてあるを、その調子にて十六首ながら歌ふにとりて又呂律などちがひめあるによりて大前張小前張とはいひかへたるにや、ひとへにこれは僻案なり云々○解曰、さいはりに衣はすらむてふ歌によりて此名あり、さいはりは初萩なり、今は傍なるに似たれど物の名はさる類多きなり、神樂さいばらといふは後の好事のいへるにて、此さいはりをすべての名にもせしなり○今いふ抄にも解にもいへるが如く一曲の名もてこゝの一振の名とせるなり、大前張小前張も神あそびの歌にてはあれど韓神までは本方に一首末方に一首にて本末にて二首づゝうたふを、これより下晝目竈殿遊酒殿までは本末に片歌づゝうたひて、たとへは本難波潟しほみちくればあま衣たみのゝ島にたつたちわたるも、一首を本末にわかちてうたふことなり、さて大さいはりとは古本宮人の歌の下に、裏書云作歌宮人由不志天前張階香取以レ此號二大前張一と見え、階香取の歌の下に裏書云作歌宮人由不志天前張階香取以二此等一號二前張一至二于階香取一世絶歌也云々次以下號二小前張一止とあり、次は薦枕の本末ありて志都夜乃小菅などつぎ〳〵あり、うたひふりによりて大前張小前張とわけて名づけたるなり、解にさいはりは初萩なりといはれたるはひがことなり、そのよしは前張の歌の下にいふべし、又さいはりといふ名は此さいはりによれる號なりとの說はよくいはれたりとぞ大平も思へる、そははじめの卷にも委くいへりき

宮人

本

みや人のおほよそ衣ひさとほし

末

ひさとほしきのよろしもよおほよそころも

○古語拾遺曰磯城瑞垣朝漸畏神威同殿不安故更令齋部氏率石凝姥神裔天目一神裔二氏更鑄鏡造劍以爲護御爾是今踐祚之日所献神璽鏡劍也仍就於倭笠縫邑殊立磯城神籬奉遷天照大神及草薙劍令皇女豐鍬入姫命奉齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂

日歌美夜比登能於保與須我良爾伊佐登保之由伎能與呂志茂於保與須我良爾（今俗歌曰美夜比登乃於保與曾許呂茂比佐止保志由伎乃與倶志茂於保與曾許倶茂詞之轉也）

○抄曰宮人の歌は崇神天皇の御宇に天照大神を大和國笠縫の村に遷し奉りし時齋宮にてましましける豐鍬入姫のみこと宮人と共に終夜豐明し給ひけるにうたひ侍る歌なり、古語拾遺に載たる歌の詞世俗に用る所轉々の誤あることをいへり、おほよすからにをおほよそ衣と歌ひ、いさとほしひさとほしとうたへるは就れも五音相通なり、歌の心はおほよそは凡の心なり、ひさとほしは膝より下までの衣のたけの長きを云、ゆきのよろしもは雪の宜しきといふ心なり、神樂の曲には此一首を本末にわかちて歌ふなり云々、きのよろしもはきて宜しといふにや、ゆきのゆを略していへるにやしりがたし ○解曰おほよそは凡也、ひさとほしは膝より下まで衣のたけの長きを云、きのよろしもは着てよろしと也、同頭書にゆきのよろしもとある本はわろし、又云歌の左に宮人木綿して前張階香鳥以此號大前張と古本に注せり、然るを難波潟をも今は書入たり、されど本不入此と注せり○今いふ、抄の御說も解の說も明らかならず、解の頭書の說はさることなり、そは元は宮人木綿志天前張階香鳥四種を以て大前張といふなり、難波潟を加增て五種を大さい張となしたるは後の事なり、とをしへたるなり、此宮人の歌はもとより解かたき歌にて今も試にいふなり、大よそ衣は大よそひ衣なるべし（大裝衣といふ事物に見あたりたる事なし大うちき小うちきといふこともあればしか思ひよれるなり）ひさとほしは膝とよもしなるべし（舞の手に膝打手といふかあれはなり歌うたふにも笏もてうちならすこともあるべく思へはなり）きのよろしもよは着たるさまのよろしきなり、もよは助辭なり、內宮年中行事に齋內親王御參宮之間次第事云々大和舞歌、美奈豆支乃於保與曾古呂毛比佐津支天與呂豆與萬天仁加奈天阿曾婆牟、大よそ衣といふ例これなり、膝つきての膝も同じさまにつゞきたればもしくは此宮人の歌をうたひかへたるにてもあらんか、膝つきてとは御神樂歌次第にも仰云膝突給へといふこといくつもあれば、座に着居る事をいふなれど、かなてあそばむとあれば膝を打事をいふにてもあらんか、大和儛は袖をゆるらかに振て立て拜し居て拜する態なれば其狀をいふにてもあるべし、かくて古語拾遺の本文の宮人の大夜すからにいさとほしと云歌の意は、まつ日には眞日晩て（萬葉十四ノ廿枚）夜には左夜中（万葉十十八ノ枚）とあれば（眞熊野三熊野眞男鹿狹男鹿狹日隈と見えて眞も狹もそへていふ言にてほむる意あり大もまたほむる意ありてそふる言なり）大夜といふこともあるなるべし（今世の俗には十二月のつごもりを大つごもりといふことあれとそけあくれは年かはりて又の年となる大さかひの夜なれは其意こととことなり）いさとほしは目の速覺るを

寤さとしといへり、又夜すがらねぶたく思はず起居るをもいさとしといへば御神態に心すゝみておもしろく樂しむをいふなり、ゆきは悠紀主基のゆきにて齋場まはりて神事に仕奉るここにて、よろしは歡び樂しみて仕奉る意をいふなるべし、此歌かく二さまに傳へたるも神代遠くつたへこし歌なればなるべし、夫木冬部神樂といふ題の次に宮人といふ題にて、霜のうへに雪をかさねて宮人の大よそ衣さえあかしつゝとあり

木綿志天

本

由ふしての神のたき田のいねの本の

末

いなのほのもろほにされはこれといふなし

古本、由不志天乃加美乃佐支多爾伊奈乃保乃とあり、同末方、伊奈乃保乃毛呂保にし天與古禮千保毛奈之とあり、古本よろし○抄曰たき田は田の名なるべし、もろほはいねのほのながき心にや○解曰ゆふしてのとては此下の言に續かず、ゆふしてるを誤つらん、古本に佐支田とある佐は加の誤也、神代紀に垣田萬葉に垣津田とあるも堤などかこひたる田也、してよは垂よにて、もろほ云々は八束穗にしなへと也、これちの千は一本に留とあるをよしとす、のこれるの略歟、又かれるほもなく歟、同頭書にこれといふなしては、後人の直したる物にてさたかにも聞えず、古本にしたがふべし○今いふ、此歌も上古の歌にて遠くつたはれるなるべし、一首の意さだかならず、解の說もくだ／＼しく聞ゆ、垣田の說はさもと聞ゆ、今も試にいふなり、初句は田を祭るに齋串たて水口まつるなど後世の歌によむが如く、玉くしに木綿を垂て祭よりいへるなり、二ノ句は神のまもり給ふ幸はひある田なるべし、又神田なれば他より早く出來る田にて先田の意か、初穗初物の貢を荷前といへば先田にてもあるべし、三句稻の穗をいなの穗といふは船の舳を布奈能閉といふに同じ、四句もろほといふ穗あるにはあらず、諸向の穗なり、風にしたがひて西へも東へもなびく物なればなり、萬葉十四八枚武藏野の草は諸向かもかくも君がまに／＼吾もよりにしを、此歌に草は諸むきといへるに同じ、もろほにされはのされはゝもろほにしあればといふなり、さて五ノ句の意も此歌にて心得べきなり、異本の說どもゝ大かた聞えざることなし、これちほもなしはこれちふもなしにて是とさして意に思ひよる心はなし、一向にたゞ君が心のまに／＼といへるなり、此歌神を祭るに一重心なるをい

ふか又戀の歌と見ればこともなし

難波潟

本

なにはかたしほみちくれはあまころも

末

あま衣たみのゝ島にたつなきわたる

古本には多つ多地王太留とあり

〇抄曰、此本末は古今集に入一首の歌なり、田簑をいはむとてあま衣とはいへり、雨にきる衣は簑なればなり〇解曰、われも云々雨衣はたゞ田簑といはむ料のみ、同頭書に此歌古本に本綿志天の上に出て注に難波方不ㇾ入二此譜一以二他本一所ㇾ書入二とあれば、一本にはあれど此さいはりには入ましきなり〇今いふ、此歌古今集雜部に題しらずの古歌の中の一首なり、解の頭書の説は古本の裏書の語を引れたり、元は前張の歌の中の歌にはあらざりしをそのころさいはりの歌に加へられたるなりとをしへたるなり、かく後に加増られたるは上古のは振も何も素朴にておもしろからずめづらしからねばなり、朝倉其駒などみな後に加増られたる歌なり（朝倉其駒なとを後に加へられたる歌なりといふことは證あることなり抄にも解にもすべていまだきとしたる説はなけれどはじめのくさ／＼のあげつらひにもいへると考へ合すべし）田簑島は津の國西生郡にあり

前張

本

さいはりにころもはそめむあめふれと

末

あめふれとうつろひかたしふかくそめては

〇抄曰、此歌は拾遺集神樂殿歌なり、さいはりは初萩なり 云云前は初といふ心なり、はりは萩なり、萬葉集に云々榛の字をはりともはきともよむなり、衣はそめむとは萩の花に染る心なり〇解曰、こは拾遺集云々はぎを萬葉にはりともいへり、よりて榛の字をかりて書る所おほし、衣はそめんは芽子の花にそむなりとはいへども、ここは摺ことなり、萬葉に摺を染といへるもあり、さて前張は一首の詞なるをそれが調にうたふ神遊びを皆大小の前張の中にこめていへり、然して今別にさいはりといふも此返しを三度拍子にするを、その如くする拍子なればかれにもさいはりの名をおほせし物なり、然るを好事の人催馬樂と書なしてよりさいはらといひて別の意と思ふはひがことなり、貞觀紀にもしか書しかど後のことなり、頭書に萬葉十六卷に紅に染てし衣雨ふればとあり〇今いふ、さいは

り杯榛なるべし、杯鬪たる榛の木にて衣を染ることなるべし、初萩なりとの說はよろしからずさいはらの更衣の歌にわが衣は野原篠原萩の花摺やとあれどそは異ことなりそのよしはそこにいふべし榛は古事記雄畧天皇の條に一時天皇登幸葛城之山上云々天皇以鳴鏑射其猪之時其猪怒而宇多岐依來故天皇畏其宇多岐登坐榛上爾歌曰云々和賀爾宜能煩理斯阿理袁能波理能紀能延陀と見え記傳四十二枚、榛は波理能紀と訓べし今俗に波牟能木と云物なり萬葉の歌に榛とあるも是なり契沖云顯昭萩と榛とを一つに云れど云々日本紀に蓁摺衣などあり萬葉に衣を染とよめること多し今も田舍には榛を植おきて染具とするなり萩も萩が花ずりといふことある故に顯昭は誤られたり榛は芽子にあらずよく萬葉を見て辨ふべしと云るが如し云々凡て萬葉に榛は衣に摺ことをのみよみて花をよめることなく芽子はむねと花のことをよめり然るを師の萬葉考の別記に榛をも花さく芽子と一つなりといはれたるは誤なり云々とありこの說にて思ひ惑ふべき事はなけれどかの萬葉考の別記に引馬野爾仁保布榛原云々或人榛と書しは秋はぎにあらず今はんの木といふ木にてその皮子などもて衣を染ればかくよみ又秋花さくをば皆芽子とかき云々その上この幸は十月にてはぎが花有ことなしといひたり眞淵考るに右はうはべの理りもてふかくおもはざるなり古にありけん人のもとめつゝ衣に摺しまゝの榛原いさ子とも云々ま野の榛原手折てゆかむ思ふ子が衣すらむにほひこそ島の榛原秋不立とも此外にもあれど歌の意は惣て秋はぎなり何ぞといはゞ何所にも多かる且なつかしからぬはんの木の枝を妹が爲に折て行んとも思はじをや思ふ子が衣すらむには夏にして秋たゝすともあれば秋はぎなくて何にかあらん此引馬野のはぎも花ならずば入亂らずとも衣に色のにほひうつらめや古の人は有がまゝにこそ歌はよみたれ皮などの汁もて染てふ木の立たりとて卽にほふはぎ原とよまんやは又此幸は十月なれど遠江は世に暖にて十月に此花にほふ年も多かり云々などいはれたりかくまでいひおかれたるはいたづらにや はけつべき又槻落葉別記に白菅の眞野榛原の說に集中の波里波良の歌を引出て榛は秋はぎにはあらぬよしをいへるに卷ノ九（二十一丁）詠榛、思子之衣摺牟爾保比與島之榛原秋不立友（遠江國の人云秋にいたりてその實の熟するをもて衣に染と云り）ともありまた卷十九（二十五丁）安氣左禮波榛之狹枝爾暮左禮婆藤之繁美爾遙々鳴霍公鳥（榛は高木にあらずはろ〴〵とはいふべからず）古事記（雄略條）に其猪怒而云々和賀爾宜能煩理斯云々波理能紀能延陀と見えたり是に

ていよゝ榛は波嬖ならぬを知べしともあり 玉かつま十三思ひ草ノ巻廿五枚萩の大木の事みちのくの宮城野わたりの萩は高さ二丈あまりばかりなる多し同國の津輕の弘前の二里ばかりこなたに大鰐といふところに大日堂の在前たる林の中に一木の大木の十餘丈ばかりの高さのかこみ四圍ばかりなるあるを見れば葉も花も全(モハラ)萩なり又薩摩國にも大なる萩ありといへりとある物に記したりまことにや うつろひがたしすべて然させまほしくねがふことの然なりがたきを何かたしといふはつねなれどかくさまにいへるはめづらしかくても又うつろひがたからんといふべきをうつろひがたしと治定(サダメ)ていへるも且めづらし雄畧紀の大御歌にしたかたくやかたくとらせともあり又雪ぞふりつゞきたりてにすることもあれは考へ合すべし 摺衣は天武紀下四五ノ十枚朱鳥元年春正月云々 蓁摺御衣三具延喜儀式第三大嘗會儀中十五ノ枚神祇伯已下云々榛含[illegible]摺綿袍一領云々延喜式七踐祚大嘗祭ノ十八枚凡齋服者云々榛藍摺綿袍一領云々また同十二中務省八枚また同十四縫殿寮四枚にも同じさまにあり

階香取

本

しなかさりやゐなのみなとに 安以奈 つる船のかちよくまかせ

かたふくなかたふくな

古本初句しなかさるや三句以留不爾の五六ノ句不禰加太不久奈云々とあり初句はわろし三句五六ノ句は古本よろし

○抄曰しなかさりゐな野とつねには申し侍り、しなかさるはめづらしきやうに侍れど云々つる船はつり船なりかちよくまかせば風にまかせはよくされと云心にやかたふくなは船をくつがへすなと云心なり ○解曰 階香取は假字にて尾長鳥なり此鳥群(ムル)る故に率(ヰ)といふ冠辭とす、ゐなの湊は津國の地名也あいそは助の辭つる船は古本にいる船とあるそよき、湊なればしかいふ也同頭書冠辭考に種々擧たれど群の義をよしとす○冠辭考にし長鳥云々こは和名抄に胡鷰阿万止里とある物にて田舍人は雨鳥とも尾長鳥ともいふ 鵯(ヒエトリ)ばかりにて頭黑く背より尾かけてうす縹色にて尾長くふさやかに垂たる、雨の降んとする時にいづこよりともしらず群わたり來て里の林なごに木つたひ遊ぶが其雨の多く降に及びては又いづちともなく去うせぬ其尾をしり尾ともしりともいひ且しりをしとのみ畧きいふと古書に多し、しり尾長き故にし長鳥といひ必群て遊ぶに依てゐなの地のゐにいひかけしなり○記傳五四十三枚神風志那都比古神云々 其由は師ノ説に此神は大御神の御息より成ませれば志那都比古と申すなり萬葉歌に志長鳥といふは鵜鵩のことにて息長鳥(オキナカトリ)と云はんに同じ同廿卷に爾保杼里能於吉奈我河波

とつとけよめるを以知べし此鳥水底に入て浮出て長く息つく故に然云かけしならん云々とありと見えたり○今いふ冠辭考の志長鳥を尾長鳥とせられたる說はよろし居名の枕詞にも大半も鸊鷉鳥の方をとられたるはよろし居名の枕詞にも大半も鸊鷉をよしとすさてゐなと受たるは率の一言のみにかゝれるにあらず居並ぶの意なり萬葉五ノ五枚衞保鳥能伊多利那良敝爲とあればなり古本にしなかとるとあるは早くよりうたひひがめたるなり和名抄攝津國川邊郡爲奈とあり延喜式には豐島郡にあり萬葉七ノ十二枚志長鳥居名野をくれば有間山夕霧たちぬ宿はなくして一本云猪名の浦廻を榜來れば同卷ノ十七枚大海にあらしなふきそ四長鳥居名之湊に船泊るまで解にもいはれたるが如くいる船をつる船とある本はわろし、かたぶくなといふ句に船といふ言のなきもわろし梶よくまかせは梶よくまかせよといふなり萬葉五ノ十四枚下邊の使負し通らせおひて通らせよといふなり古事記允恭天皇の段に愛しと眞寢し眞寢ては苅薦の亂れば亂れ寢眞し寢眞ては厚顏抄にみだれの下に乎の字を加へて心得べしとある拾玉集立田川紅葉の船のとわたるをまかする梶や木がらしの風、玉かつらの卷ゆく先も見えぬ渡路に船出して風にまかする身とそうきたれ船をかたぶくるとなかれといふなり古事記上卷八重事代主神の卽蹈傾其船而云々ともあり又中卷大山守命の事ある段に令レ傾二其船一云々ともあり

末

わかくさのや妹ものりたりや安以甘 われもものりたりや
船かたぶくな不ねかたぶくな

○抄曰若草の妹は若草の妻と云が如し云々○解曰若草は夫婦にたとふと記にいへり○今いふ若草の妻とは古事記に出たりくはしくは冠辭考にいはれたるがごとし

本

しながとりやゐなのふしはら安以甘とひてくる鳴が羽おとおもしろきしきが羽おと

○抄曰此歌も拾遺集神樂歌にしながとりゐなのふし原とひわたる鳴が羽音はおもしろきかなといへる歌をかやうにうたひなしたるなりふし原はふしの木の生たる原なりあいその詞は音曲の節なり○解曰拾遺集云々抄の說のごとし○今いふふしは古事記神代に靑柴垣とあり、しぎは和名抄羽族云鷸野鳥也揚氏抄云之木一云田鳥神代紀に雖此云之伎とあり萬葉二十ノ七枚旅衞之而物戀之伎尓鳴事毛所聞有世者云々同十九枚春儲而物悲爾三更而羽振鳴志藝誰田爾加須牟

末

しなかとりやゐなのふし原（あい皆）かみさすや我背の君はいくらかとりけむいくらかとりけむ

古本初句之奈加止る也　三ノ句阿美太須也とあり初句古本よろし三句古本よろし

〇抄曰かみさすやは髪にさすなりかんざしの事をいふべしわか世の君は夜妻を云いくらかとりけむは幾夜かわが妻にとられしと云心なり　〇解曰　鳴とらんとて鳥あみをさすその鳴をいくらか取しとなりつねはふせおきて鳥の飛立まへゝ俄にさし立るあみをさしあみといふ〇今いふ古事記神武段宇陀能多加紀爾志藝和那波留和賀麻都夜志藝波佐夜良受萬葉十四巻五枚足柄の遠面此面に佐須和奈の云々同十三巻鳥網張坂手乎云々同三巻十二ノ枚保登等藝須夜音奈都可思安美指者云々　同　橘乃爾保界流苑爾保登等藝須鳴等比登都具安美佐散麻之乎　同四十七ノ枚二上能乎底母許能母爾安美佐之底安我麻都多可乎云々同十九十九ノ枚霍公鳥雖聞不足網取爾獲而奈都氣奈可禮受鳴金とありあみさすあみとりにとりて云々とあるにていくらかとりけんといふをも知べし

本

わきもこにや一夜はたふれ（安以皆）あやまちせしよりとりもとられずとりもとられず

古本五ノ句止利毛止良禮須夜とあるよろし

〇抄曰わきもこは女の名なり一夜はだふれて誤りしよりといひて又とも逢ぬをいふべしさて心うければとられずといへり

〇今いふ誤にしとは俗にいふ機嫌をそこなひたりしといふなり、とりもとられずきげんを取んとすれどもえとらぬなり萎巻男君は云々　女君は云々　かゝる御心おはすらんとはかけても思しよらざりしかばかく心うかりける御心をうらなくたのもしき物に思ひ聞えけむとあさましう思さる云々よろづにこしらへ聞え給へどまことにいとつらしと思ひ給ひて露の御いらへもし給はず云云日ひとひ人居てなくさめ聞え給へどとけがたき御けしき云々すべてのこゝろ誤にしといふにあたれり萬葉十一廿五ノ枚はねかつら今する妹がうらわかみ咲み慍み著し紐解このいかりも處女の腹立つことなり、あやまる眞木柱巻に御こゝろもあやまりてとありたがふといふこと也

末

しかりともわがせの君は（安以皆）五つとり七つとり八つとり九のよ十はとり十はとりけむや

○抄曰しかりともは然ともといふなりさあれども五夜六夜より十夜はあひたりと云にや○解曰しかりとてとは然有と雖なり五とり云々はたゞ鳴のことのみなり又五夜六夜より十夜逢たりといふにか同頭書曰こゝのよのよは助字なり。○今いふとりといふ辭はさまぐ\につかひていと廣き辭なり政をとる心をとる敵(カタキ)をとるなどさまぐ\あり 此歌はいたくたはぶれたるにやたはぶれごとは此外にもさいはらにかれこれ類あることなり

小前張

○今いふ古本朱書にて小前張とあり薦枕とある下に作法如例とあり又加頭ともあり

薦枕

本

こもまくらや高瀬のよどにや 安以曾 たかにへ人そしきつきのぼるあみおろしさてさしのぼる

古本には此下に 安以曾 たかにへ人そしきつきのぼるあみおろしさてさしのぼると四句あり

○抄曰高瀬の淀は河内國の名所なりまこもの多き所なりこも枕高瀬のよどゝつゞくるは枕の高き心なりにへ人は鳥魚など

をとりて供御に備る人のことなり鳴をとるをはつくといひならはし侍りさでは小網なり河の中にさしておけば魚のとらるる物なり ○解曰 こも枕は冠辭なり高瀬の淀は河内の國の地名なりにへ人は魚などを取て御贄に献る人をいふ鷺は手あみしてつきてとるかつくといひならはせりさて小網なり萬葉にさて刺といへり是は魚取なり ○冠辭考曰武烈紀擧暮摩矩羅(コモマクラ)挖箇幡志須擬(タカハシスキ)云々 神樂歌にこも枕高瀬の淀や云々 三代實錄清和天皇 薦枕(コモマクラ)高御座栖日(タカミムスヒノ)神社ともいへり萬葉七卷薦枕相卷之兒(アヒマキシコ)毛(モ)云々 日本紀私記に師說古以蔣爲枕云高之眼曰須流故欲言高之始有此言乎云々又掃部寮に大嘗祭の神坐の料坂枕一枚長五尺廣三尺料編薦一枚生絲一兩とあり或傳にこの神床の八重疊の下には其薦枕をかひ敷て高くすといへり然れば枕の高くて床の上料なれば坂枕てふ名も有歟是ぞ上つ代の臥床のさまなるべければこも枕高してふも此意ならむかとも覺ゆといへり細注に漢籍梵楚九辨の説を擧られたれどこゝにはひかず○今いふ和名抄河内國茨田郡高瀬とあり又艇釋名云艇小而深者曰艇和名太加世俗用高瀬舟とあり 三代實錄四十六元慶八年九月十六日令近江丹波兩國各造高瀬舟三艘其一艘長三丈一尺廣五尺一艘長一丈廣五尺一艘長一丈廣三尺送神泉苑續後

撰に見わたせば末せきわくら高瀬川ひとつになりぬ五月雨のころ新拾遺新續古今にもあり又新古今に鵜飼舟高瀬さしこすほどなれやむすぼゝれゆくかゞり火のかげともありたかにへ人夫木集冬鷹狩万代集ノウタにへまつる豐の明になるほどは御かりの鷹のやすむ日もなし三品のみこ輔仁同みしま野に神の御鷹を引すゑてからぬ日もなし大年のにへ權僧正公朝同あられふる長野の原に御狩して天の日つぎのにへ奉る俊憲東鑑廿卷八枚可ㇾ禁ニ斷狩一事被ㇾ仰ニ守護地頭等一但於信濃諏訪大明神御贄鷹ノ者被免之由云々同廿一卷卅六枚にもありさてにへは新嘗のとなり稲穀をはじめ諸國の産物何によらず供御のためにみつぎ物として奉ることをいふなり古本に鷹贄人を誰贄人とかきたるは尾長鳥を階香取とかける類ひにて萬葉十二卷三ノ枚竹葉野にとあるべきを誰葉野と書たると同じ　古事記神武天皇段到ニ吉野河之河尻一時作ㇾ筌有ㇾ取ㇾ魚人一爾天神御子問汝者誰也　答曰僕者國神名謂贄持之子此者阿陀之鵜養之祖云々とあり　又同上卷に島之速贄といふとあり延喜内膳式諸國貢進御贄云々收ニ贄殿一とあり、しきつきのぼる、つくとはさすといふと同意歟鏑もてさしとるをいふなるべし網おろしさてさしのぼる和名抄爾雅云鳥罟謂之羅和名度利阿美同廣雅云罟阿美魚網也同文選注云羅

佐天網如ニ箕形一狹後廣前者也、夫木秋鴫法橋顯昭こもまくら高瀬のよどにたつ鴫の云々

末

あめにますやとよをかひめのや安以甞そのにへ人ぞしきつきのぼるあみおろしさてさしのぼる

○抄曰天にます豐岡姫は天照大神の御事なり御神の贄人といへるなり○解には此歌も注もなし○今いふ此歌は時にとりて又かくもうたひて興あらせたるものか豐岡姫は天照大御神の御事にはあらず豐受姫の神なりそのよし卷のはじめにもいへり

又本返

たかにへ人ぞたかにへ人ぞしきつきのぼるあみおろしさてさしのぼる

又末返

そのにへ人ぞそのにへ人ぞしきつきのぼるあみおろしさてさしのぼる

○今いふこれらの歌抄にも解にもなし今もことさらにいふべきこともなし古本にはこゝより下にさまざまの事書たる事多しまた古本にうら書にいはくとて左の如くかきたる事あり

裏書云件歌各一度唱後末籠出次本籠出如此本末共籠出也自二度以來各從誰賛人唱數之從末折唱次本折唱也此歌以後至于千歳安以赦各兩度云又云此歌以後鶺まてあい志各兩度云此つきにも猶あれこそは畧たり

閑野

古木には志都夜小菅如韓神音振とあり

本

しつやのこすけかまもてからはおひむやこすけ

○抄曰しつやのこすけは菅の名なり萬葉にしつまろこすけともよめり ○解曰 しつやのこすけは菅の名なり萬葉にしつまろこすけともよめりおひんやは二度もおひんやなり同頭書曰閑野を古本には志都夜の小菅とあるぞよき○今いふしづやはいやしき民の庵なり賤か家とがといふ言を加へていふ例なれどもかくがをいはぬもあるなり萬葉十八巻十二ノ枚保里江欲里水乎妣吉之都追美布禰左須之津乎能登母波加波能瀬麻宇勢右件之歌者御船以綱手泝江遊宴之日作也とありしづをは賤男なり登母は猶なり古事記神武段鵜養之登母とあるに同じ川之瀬申せとは川瀬を船引て仕奉れとなりまをすは仕ふる事なり天下をさむるを天下申給ふといふが如し小菅は笠に編菅また麥門冬之鬚なとをもいふなり萬葉十三ノ廿二枚息長の遠智の小菅編なくにい苅もち來云々同十一ノ四十枚眞野浦之小菅の笠乎云々同同枚眞野池の小菅を笠に不縫して云々 同十四ノ十八枚湊の蘆の中なる玉小菅云々同廿五ノ枚海原の根やはら古菅同七廿七ノ枚河靜菅十一ノ廿八枚在間菅同四十八枚三島菅同枚 三吉野水具麻か菅 これらがほかに山菅菅の實菅の根古事記仁徳段に一本菅ともあり○緯の頭書に重好按千載集顯輔五月雨の日數へぬれは刈つみししづやの小菅くちやしぬらん、道經、うつらなくしつやにおふる玉小菅かりにのみきてかへる君かな、しづやは名所なるべし、可追考とあり

末

鶺鴒

あめなるひはりよりこやひはりとみくさとみくさもちて

○抄曰雲雀はあかりて空に囀る鳥なれば天なるとはいへりよりこやは寄來といふ也富草は稻をいふ也○解曰雲雀は天に囀れば天なるといへりこやは古本によるべし頭書におりこやは下こやなり○今いふ古本には末の字の下に注の如く鶺鴒の字あり今本にはなし天なるといふ語は神代の歌にも見えたれどこれはたゞ高く飛ことをいへるにて意はことなりよりこやは

おりこやにても寄來やにても事の心は同じ富草は稻をいふとの說はあれども後世の說なるべし風俗歌にあら田に生るとみくさの花手につみれ宮へまゐらむとあるにて考ふべし詞花集家經朝臣打むれて高倉山につむものはあらたなる代のとみ草の花とあり相摸家集には、み山なるとみ草の花つみにとてゆるきの袖をふりてゝそこし俊成卿九十賀權中納言隆房、九十齡を君にゆつりおきて猶春秋にとみ草の花これは詞をかれるのみなり、くひもちてといふ語は萬葉十六ノ十八枚白鷺の鉾くひもちて同十五ノ十枚青柳の枝くひもちて

礒等

古本礒等前とあり

本

いそらかさきにたひつるあまのたひつるあまの

末

わきもこかためとたひつるあまのたひつるあまの

古本本方歌三ノ句たひつると或本元あまもとあり 末方の三四句たひつるあまもたひつる已たひつるあまのとあり

○抄曰いそらか崎は名所也たひは鯛也○解曰式に常陸鹿島郡と那賀郡とに礒前あり云々されど下の弓立の歌に伊勢島やといひて末にいそらかさきにかほりあふとよめればたゞ礒の前てふ事也○今いふいそらが前は志摩國地名しるしたる書に礒良崎は桃取村にあり此島の南に突出たる所をいふとあり桃取は鳥羽ちかき島山なりたひつる萬葉九ノ十八枚水江之浦島兒之堅魚鈎鯛鈎とあり同七四九十一に妹之爲といふ詞もあり夫木集有房いせ島やいそらが崎の朝きりに棚なし小舟こぎはなれつつ

篠波

本

さゝなみやしかのからさきやみしねつくをみなのよささや

それもかもかれもかもいとこせのまいとこせにせむや

○抄曰みしねつくはおしねなどの如く稻の名なるべしそれをつくをんなといへりさゝやは詞なりそれもかもかれもかもはそれもかれもといふ詞なりそれもかれもいとこにせんとは妻にせんといふなるべし○解曰みしねつくは御稻舂なり女ををみなと云は古言にて麻績女の意なりよさゝは吉さ〳〵やと重ねて云なりひさ〳〵をひさゝあら〳〵をあらゝなどの類ひなりそれもかもかれもかもはそれをかれをもとすべていへる詞なりいとこせはを或說にいとこなりといへるはいかに、

かゝるとにはせといふは男をこそいへいとこめといふを唱誤りつらん末の歌によめをえすとてやといへるはこゝの事なり然れば寢床妻也○冠辭考に萬葉一卷左散難彌乃志我能大和太もた樂浪之思賀乃辛崎云々こは近江の志賀郡にある篠なみてふ地にてそこの大號なる故に其邊りの所には冠らせたるなり云々とあり○記傳卅一ノ十八枚沙々那美は近江國の地名にてその由師の冠辭考に委く說れたるが如し　志賀は古へより廣き名にて郡ノ名にもなれるを猶いにしへは沙々那美は志賀よりも廣き名にやありけん云々樂浪之平山云々同シ卷に逢坂云々　孝德紀大化二年詔に近江狹々　波合坂山と見えたり　○今いふ近江の地名はくはしく引くまでもなしみしねは御稻なりをみなのを嘛績女との語はいかゞなりいとこは記傳十一三十九ノ枚　伊刀古夜能は妹と云む枕詞と聞えたり伊刀古とは人を深く親睦む稱にていとほしき子てふことなり云々神樂歌篠波に御稻春女之美乎其哉彼哉伊止己世之いとこせは世はこゝろえず云々風俗知々良々ノ歌に伊止古世の云々　これらは彼萬葉なると合せて思ふに夫婦は殊に親睦しむ物なれば互にそ伊刀古と云けん又從父母兄弟も元は互に親睦て云しが定れる名となれるなるべし今世にも幼稚の兒な男にても女にてもさしていとゝもいとさまともいふなり愛していふよりしかいふなり　さていとこせの世は女の誤なるべしと解にいはれたりさもあるべし風俗にもある詞なればまぎれたるなるべしみしねつくは御稻春なり萬葉十四ノ二十枚稻春者如此有我手乎今夜毛可殿之若子取而將歎靈異記上ノ第二にも稻春女あり金葉九石山にまゐりけるに大津にとまりて夜ふけて聞ければ人のけはひあまたしてのしりける尋ければあやしのしつの女かよねしらけ侍るなりと申けるをきゝてよめる和泉式部さきのゐる松原いかにさわぐらんしらけはうたて里とよみけり

末

古本に葦原田とあり

あしはら田のいなつきかにのやおのれさへよめをえすとて
やさゝけてはさゝげやさゝけてはさゝけやかひなけをする
や

古本五六句さゝげては於呂之也於呂志天波さゝけやとありこれよろし

○抄曰葦原田は萬葉歌にあり、いなつきは稻をつく人也、にのやはかたにになふ荷也、よめは子の婦也、さゝけてはきを持あくるをいふ、かひなけはかひなをさゝくるによせてかひもなきといふ心を添たり、自さゝげてかひなきといへるな

り○解曰盧原田は浦廻の盧邊の田をいふべしいなつきかには蟹の名也、のやは辭也、よめは童女をいふと古書によめの齋鋤を童女の齋鋤こいへりさて新婦は專ら童女なれば後には新婦の事このみ思へりさゝげてはおろしやは蟹の手をあげおろしする物なるをいふかひなけは腕擧をするにて則かのはさみの手を擧るをいふなりさて紀の大御歌萬葉の歌などにも蟹にたこへて身のうへをよみ給へるもありされごこゝはたゞ蟹がさまをいふのみこ聞ゆ○今いふいなつきかに和名抄蟛蜞揚氏漢語抄云蟛蜞彭其二音海濱稻春蟹之類也こ見えたりおのれさへはじさへ也よめをこすこやは祝詞考大殿祭に夜女乃伊須々伎こある夜女は女の童をいふ儀式の大嘗祭の條に童女を與米こいふこ注せり記傳二十卷十八ノ枚大殿祭に夜女は夜目にて云々師の童女なりこいはれたるはいかゝなりこいはれたりされご夜の御床に仕奉る童女を夜女こ稱ふる心得ればいかどこも思はれず御侍偕な夜居の附と稱ふが如くなるべし猶酒殿歌にうねりめとねりめなどいふことある條に云べし　和名抄婦爾雅云子之妻爲婦和名與女えすこやは不得か得爲か萬葉十一卷二十ノ枚面忘太衛毛得爲也登手握而雖打不寒戀之奴これ得爲にて面わすれを爲ることを得やこ思ひてこいふ意なりこれによれば婦を得ん事を爲こて云々こいふ意なり又婦を寄こいふ意かうちよするを萬葉廿東歌に宇知江須流こもありそは手をさしあげて打麾をいふか又思ふに婦は子妻なればいづれにても其意得がたしさらはよねは好稻よめは好米を能精つきしらくこすこて手をさしあげさしおろすにやの意にてもあらんか此歌古本にはさゝ介天波於呂之也於呂志天佐々介也こありて口傳云於御前歌時さゝげてはさゝげこ歌也可ㇾ忌ニオロシチ一也こあり御前にてはおろしこいふ詞を忌てうたふよし此古本の注にてよくしられたり

殖春

本

うゑつきや田中の森やもりやてふかさのあさちかはらに

古本一說アヒチカ乃ハラこありこはいかゝなり

○抄曰うへつきは槻の木を植たる森こ云也又田をはつきはつきにうゝる物なれば田こいはんこて枕詞にいへるにや覺束なしもりやてふは名のもるゝこいふにやかさのあさち原は所の名也○解曰槻の木を云々私云ことく抄の說と同じければ略きたり　○萬葉考三卷三卷は今の十三ノ卷七此万葉考いまだ彫刻なしうつし卷にてあるなり　桂纏毛文恐藤原王都云々　春避者殖槻於之云々こある注に今昔物語に敗下郡殖槻寺こあり神遊に田中森こ云も同じこあり○緯の頭書にウヱツキは大和

國添下郡也○記傳四十三五十七枚淺茅原は書紀崇神紀に神淺茅原此卷に彼々茅原淺茅原神樂歌にかさの淺茅原なごあるも是にて今も城上郡に笠村あり○今いふ或云嶺楓は今の郡山なりといへり靈異記中第卅四條に諸樂古京嶺楓寺之邊里云々とありもりやてふといふ事聞え難し末の歌に考合すれば妻を守といふ辭にかけたるにてもあるべし田中本三代實錄貞觀七年四月廿五日授大和國無位田中社從五位下かさの淺茅原は萬葉三三十六枚雨零者將蓋跡念者笠乃山人爾莫令蓋霑者遺跡簑この笠の山を三笠山なりといへる說ありまここに笠を打置たらむ樣なる山なれば御かさの山とも笠の山ともいへるなるべしかくて笠の淺茅原は同十一ノ枚春日野之淺茅之上爾念共遊今日忘目八方同十二ノ廿三枚春日野に淺茅標結云々同卷ノ卅九枚春日野之淺茅之原爾後居而時其友無吾戀良苦者後世の歌に三笠の野べといへるも同じかるべし

末

われをきてふたつまとるやとるやてふかさのあさぢがはら
に

古本和れ乎支て不留川萬止留也止留也天不かさのあさちか波良に、又說止利志宇多留奈也とありすべて考ふべきよしなし

○抄曰我をきては家を置て二人の妻をむかふるなといふなりとるなてふはとるなといふ也○解曰我をおきなるをおを略きていふは古言也依て古本に我乎支天とあり古事記にほつえは天をへりとあるも天をおへりのおを略けるなり○今いふわれをきての事は解の說の如し畧りたるよしは袁の韻に於あればなり下にも其をおもふとをそをもふとあり但し古事記には阿米袁淤幣理と淤の字もありさる一本の有て引いでられたる歟此本末にもりやてふとりやてふとあるてふといふ辭心得がたし囃辭としてもいかゞなり二妻とるの說は抄にの給へるが如しとるなは取ことなかれといふなりとるやにては二妻をとる歟といひてとかむる意あるなりとるは娶るむことりなどの如し猶しひてとかはもるやとるやのやはよにて我一人を守てよといふに其心にしたがひて二妻をとるようらめしき事といふにてもあるべし笠の淺茅原は男をたとへてその人にさしていふが如くいへるなるべし

總角

本

あげまきをわさ田にやりてやそをもふとそをもふとそをもふと

〇抄曰あげまきは上意をいふ男女ともに云詞也〇解曰あげまきは男の童の髪を卷あげて有をいふわさ田は末に春日といひたれば早稻を作る田を則しか云るなりやは上へつく例の詞なり曾乎毛不とはそれを思ふなるをおを略ていふ古歌のつねなり萬葉に多し下みな同じ 〇今いふ和名抄總角毛詩註云總角和名阿介萬岐結髪也崇神紀是時廐戸皇子束髪於額而云々古俗年小兒年十五六間束髪於額十七八間分爲角子今亦然之さいはらにあげまきやとうくひろはかりやとうくと云々とあり早稻田解の説によるべし晩稻のよくいてくる所こそ早稻のよく出來る所とあるにてもやあらんことつけことなれとしまつ田を十町つくれり見てかへりこむなど遠き所にあるしにてもあるべし歸り來んほどまつに久しきよし末の歌に見ゆればしかいふなり又早稻の種まくべき春の田にてもあるべし

末

そをもふとなにもせずしてやはるひすらはる飛す羅春日須良春日すら春日須良

古本一説云ソラオモフトナニモトリセズハルニクら之ツハルヒクら之ツ

〇抄曰あけまきを戀しく思ひをる程に何わさをもせずして長き春の日をすらいたづらにくらすといへるなり〇解曰あげまきを戀しく思ふに何わざをもせずして長き春日をさながら徒にくらすといへり同頭書に萬葉に春日すら田にたちつかる君はかなしも若草の妻なき君が田に立つかるとあるすらもさながらてふことにて其日も其まゝといふ意也〇川社曰總角は今は使ふ童なり早田を治せんとて童を出し遣つるが長き春日すら何もせずしてや遊びをるらんと心つかひするとなり萬葉七に春日すら田にたちつかる君はかなしも云々〇今いふ解もことなることなし川社の説はいかゞなり何もせずして遊びをらんは後世人のいやしき心なるべし又抄にも解にも其を思ふとあるによりて戀の心ありと思はれたるもわろしこれは父なくして母一人おほしたてたる十三四の總角わらはを春の早稻の種まくべき苗代田など打かへさせにいでたゝせて留守の女親のいかに立つかるらん父いまさましかはともにゐておはせましをまたいと力たらはぬ童べのしらぬうひわざをやと春の長日をうしろめたく思へる心なるべし何もせずしてとは實にたゞに居てそを思ふにはあらねどみづからのするわざは心にいらず手にもつかぬさまに思ふよしをいへる詞なるべし春日すらはすがらといふ辭に同じ春日すからなり夜もすがら日す

がら道すがらなどのすがらにて終日のこゝろなり世と共にひたすら日一日夜一夜などいふ辭に考へ合すべしかの七巻廿八ノ枚春日すら田に立つかる公はかなしもわか草のつまなき公し田に立つかるといへるも與共に助くる妻なき人の終日耕し羸るをあはれみていへる思ひ合すべし　春日すらのつかひさまはことなり万葉のは耕す人のたり此歌のは共を思ふ人のなり　一説云何も取爲不は手に物のつかぬと俚語にゆふが如し

大宮　本

おほみやのちひさことねりやてゝにやてゝにやはたまならはてゝにや　古本天々仁也波天々仁也波とあり

○抄曰大宮は内裡を云ちひさことねりは少小舎人童也殿上童をはことねりと稱する也てゝにやは手にもとらはやの心也さて玉ならば手にとらむといへり○解曰大宮は内裡をいふちひさことねりは少小舎人童也殿上童をはことねりといふてゝにやは手にやはとらるゝいかてとしはやしも玉ならばこそねにとらめをといふ　○緯頭書禁祕抄云　小舎人六人近代及十二人賦　昔白張裝束也○小舎人召加藏人下知有名簿賦○川社曰内舎人は昔廿一歳より召仕はるちひさごとねりとは後には年にもよらざりけるにや○今いふ大宮は古事記下巻清寧の御段に意保美夜能云々といふ歌あり舎人は同中巻應神段に大山守命と宇遲能和紀郎子との事ある段に舎人と見えたり日本紀にも近習舎人近侍舎人左右舎人とあり記傳に天皇また王たちの使ひ給ふ物にて萬葉十三巻に舎人之子等ともあり　名の義は殿侍かなとありされど此歌にては中昔の物語ぶみに小舎人童と見えたるたぐひにて形のすぐれよそひのうるはしくとしのほどよりうつくしきをめでゝいへるなりてゝにやは手にやといふをかさねていへるなり

末

玉ならばひるは手にとりよるはさねてんてにやよるはさねてんてにや　古本太萬奈良波比留波天耳止利也與留波佐禰天女天々仁也與留遠禰女天々仁也　又説佐禰牟やとあり又の説もあれどこゝには略けり

○抄曰玉ならばひるは手にとらんよるははやくねんといふなり○解曰玉ならば晝は手にとり夜はねむといへりさねのさは發語にて渡るをさわたるといふ類なり　○今いふ萬葉七二十一ノ枚白玉乎手者不纒而匣耳置有之人曾玉令詠流同枚　照左受豆今本ニトアレトモ受ナルハク大平思フ　我手爾纒古須玉毛欲得其緒者替而吾玉爾將爲同　秋風者繼而莫吹海底奥在玉乎手爾纒左右二玉を手に卷變るこ

こ集中にありさねてん古事記に倭建命の御歌佐泥牟登波同輕太子の御歌佐泥斯佐泥豆婆なこあり人こ與に熟く寢るとをよめり此語萬葉にも多くあり

湊　本

みなこたにくゝひやつをりやころちなやころちなややつながらころゝなや　古本みな止多仁くゝ比やや川乎利也止呂地名也云々こあり

○抄曰湊田に鵠八をりたりこいふなりころちなやこは是をこる智のなきこいふ心なり○解曰湊田に鵠八居たるなりころちなやはこる鷸の無こいへりこるも知の留毛約呂なればなり○記傳廿五卷六枚鵠之音は多豆賀泥こ訓べし云々上代には鶴をも鵠をも鸛をも共に總て多豆こいへるなり久具比意富登理など分れたる名あるはやゝ後のことなるべし云々和名抄に四聲字苑云鶴似鵠長喙高脚者也和名豆流唐韻云鸔鶴別名也揚氏抄云多豆また野王按鵠大鳥也漢語抄云古布日本紀私記云久々比また本尊云鸛水鳥似レ鵠而巢レ樹也和名於保止利こあり天武紀には鸛をオホトリこよめり字鏡に鵠久々比又古比こあり漢語抄の古布こ字鏡の古比こは通ひて一つ名なるべしさて今右の三つを字にていはゞ鶴は都流鵠は白鳥こいふ物鸛は許布こいふ物なり然るに右の書こもに鵠を古布こも古比こも云るは違へるに似たり今許布こいふ物は鸛にあたれりさて又久具比こ云しは鵠のことなりこもいひ鸛のことなりこもいふ鸛なりこいふは誤なるべし神樂歌の湊田に美奈止多仁久々比也川乎利也云々東遊彼乃行に加乃由久波加利加久々比加云々師云久々比は今白鳥こ云物なり古布には非ず古布はたゞ雌雄一つがひのみ居る物にして群居る物にあらざれば八居こ云るにかなはず白鳥は多く群集る物なりこ云れたるが如し○今いふ湊田は海邊の田なり久々比は縣居の說には白鳥なりこいはれたれご猶古布にてもあるべくおぼゆ群居る物にあらずこいはれたるもかたおちなりおのれ此紀の國にて古布の十二羽むれゐたるを紀の川の淵にあるを目のあたり見たりむかし伊勢に住し時も見つることありもやしつらん心のつかざりしかばしらす此こしごろこの八つをりこあるを思ひて心つて見しかばまさしくしれるなりころちなや解の說もさることなり又こる手無やこいふにてもあるべくおぼゆ

末

八つながら物もはすほちやころちなや〳〵八つながら
於も八爪をり
古本也川奈加良毛乃毛波須乎利也止呂知奈也云々また毛乃毛

伊波須遠わとら千奈や云々ともあり

○抄曰物もはすをりは物もはまてをりたるなり○解曰物もはすをりは物と思はてゐるといへり○川社曰八つ居鵲をとる智なきなりとらんするやうをえしらぬをいへりやつながら物もはすをりやところちなやとは物もはす物も思はずなり云々何の心もなく居るをいへり○今いふ物もはす云々は物もいはずをりなるべし鴫す在をかくいふなりおを省くもいを省くも心は同じ古本の又の説にも乃毛伊波須遠わやとあり

蟋蟀　本

きり／＼すのねたさうれたさやみそのふにまいりきて木のねをほりはんてをさまさ心のをれぬをさまさ

古本支利々々須乃禰多佐宇禮たさみ曾乃不仁萬爲利天支乃禰乎保利波弁天遠佐萬さ遠き萬佐於佐萬つ乃於禮ぬとあり

○抄曰きり／＼すは蟋蟀なりねたさは姤なりうれたさはうれはしきなり御園生にまいりて木の根をほりてはむといへるなりおさまさは歌曲の節なるべしつのをれぬとは蛩は角ある物なり木のねをはむとて角が折たりといふなり○解曰蛬古本に蟋蟀とありされど蟋蟀はこほろきとよむことなるを今京此方誤りてきり／＼すとすゝはきりきりすと書べし秋の虫なりねたさは姤なりうれたさは角をれたるをねた／＼うれはしとよめり御園生に集り來て木根をほりてはむとてあやまちせしなりおさまさは歌曲の助辭ならん角をれぬとはきり／＼すの顏は頭に角ある物なりこは何ごたとふる意にていひし歌なるべし○今いふ解に蟋蟀は古はこほろきとよむことなれば云々といはれたるさることなり萬葉にはこほろぎとのみあるを古今集よりはきり／＼すとのみ見えたり今の世には又伊勢にても紀の國にてもこほろぎといへりかうの文字にも蟋蟀蜻蛚蛬などかけりをさまさおさまさともかけりこは囃辭ともいひかたけれど又いかなる心ともわきまへかたし角をれぬは解にもいはれたるが如し古本にはいさゝか異なり後の考へに全く出せり

末　　ねたさうれたさ御そのふにまゐり來て　○今いふ此末の歌抄にも解にも又緯にも何とも說なし或說したらかまうとのひとへの狩衣なとれりそねたしなとりそを　　イ本になごかれそともなねりそともあり

○抄曰したらは所の名なりかまうとは高麗人なり○解曰したらは三河甲斐にもある地名なりそこにをるこまうとなるべしひとへの狩衣をとりいるゝことなかれといふ也莫戀そ莫佗そ

なごの如く莫をさきにいふは古言の常なり○緯頭書曰したらは所の名歟まうこは萬葉に臣女古今集序にまくらこあるも臣等にてまうこ等なり榮花物語に道長公人をのりてのたまふここばにまうこたちこの給へり○今いふしたらかまうこの諸説したらを地名ならんこあれご猶いかゞなりこはもし誤字ならはらははにてうはらにてこは上には下にて古袴こ其一重の狩衣こいふにはあらざらんや又思ふ説あり下にいふべしなこりれそもなごかれご或はなねりそなごイ説あり緯には奈止禮里曾こあれご抄にも解にもなこりれそこあればそれによるべし取入る事なかれこいふなり小雨にそほぬらせ夜かれするいこねたし諸説の如しかくてしたらかの一説はしこけなしこいふ語はこりしまりのなきをいふなりつゝしまずみだりなるを俚言にもじだらくこいふ語ありみだらなこいふにもちかし古今集にわがやごの花ふみしたく鳥うたむ云々千載集にふちしたき朝ゆく鹿や過ぬらんしごろに見ゆる野邊の萌萱うつぼ藏開の上に左大將よろこびて入給へば中納言しごろもごろにゑひて西の御方に御おくらして酒をたうべてたへゑひてもいこおもしろきこゑにうたひいりおはすれば云々狹衣わかこゝろしごろもごろになりにけり云々かくて此したらかまうこは俚言にじだらく人こいふが如しまうこは諸説にもいへる如く眞人にて物語ふみに多くある語にてねしわこぬしそこなごいふが如く同じほごそれよりすこしおこしていふ辭なりしたらか眞人はつゝしまずみだりにあだ〳〵しき男をいふ也夜かれするいこねたしこいふに考合すべし

末

なこりれそこさめにそほねらせよかれするいこどねたし

○抄曰よかれするはねたきにその狩衣をこりいれずして雨にぬらさんこいへる心なりそほぬらせばそこぬらせ也○解曰夜かれするがねたきにその狩衣をなこりいれこに雨にしほ〳〵ぬらせこいへりそぼぢしぼるなりほの濁こ不こ通ふ也此言後世人は誤れり○今いふなこりれそよかれするいこねたし解の説の如し小雨和名抄霢霂兼名苑云細雨一名霢霂小雨也麥木二音和名古左女萬葉十六二十九枚伊夜彦於能禮神佐備青雲乃田名引日須良霢霂曾保零古今集伊勢物語に雨そぼふりこあり俚言にしよぼしよぼ雨こもいへり

○抄曰これまでは小前張の曲也○解曰或説是までを小前張の曲こいへご古本裏書に千歳までをかけて云たれば千歳も小前張の中なるべし○緯曰以上に前張○今いふ小前張を以上まで

なりといふ説又千歳までをいふとも二説あれば二説ともすてがたかるべし

千歳　本

せんさい勢んさいせんさいやちとせの勢さいや

末

まんさいまんさいまんさいやよろづよのまんさいや

○今いふ抄にも解にもいへる説なしせんさい〳〵まんさいまんさいといふ問にちとせのよろづよのといへる詞あるはいとみやびたることなり文選千字文などの訓にさること多し遊仙窟の訓にも見えたるが如し

神樂歌新釋五卷

早歌　本	末
一 いづれぞもやことゞまり	一 かのさきこえて
二 みやまのこつゝら	二 くれ〳〵こつゝら
三 さきのくひころんと	三 いとはたながうて
四 あかゝりふむなしりなると	四 われも目はありさきなると
五 とねりこんそしりこんそ	五 われもこむそしりこんそ
六 あちの山せ山	六 せ山のあちのせ
七 このゑのみかどにこしおといつ	七 かみのねのなければ
八 ゆすりあけんすゝりあけむ	八 すゝりあけんゆすりあけむ
九 谷からゆかは尾からゆかむ	九 尾からゆかば谷からゆかむ
十 われからゆかばかれからゆかむ	十 かれからゆかばわれからゆかむ
十一 をみなのこのさえは	十一 しとつきしはすのかいとほち
十二 あふりこやひはりこ	十二 ひはりこやあふりこ

(一)抄曰いづれぞもことゞまりはいづれの所にとゞまるぞといふ也かのさきは山の崎をこえてゆくなり○解曰いづれの所にとゞまるぞと云て彼崎をこえゆくとみづから問答ふるか○今

いふ舊說のまゝに心うへし本末つより十二と次第のまゝに數の文字を付たるは注の次等に引あてんが爲なり　七ノ次に八の歌をついてたるは大平が心なり

(二)抄曰つゞらはかつらなりくれ〳〵は野くれ山くればまはると來る意なり○解曰みやまは眞山なりつゞらはかつらなり其れをくりひけといふ也○今いふくれ〳〵はくりぬ〳〵といふなり萬葉七廿三ノ枚姫押生澤邊之眞田葛原何時鴨絡而我衣將服、素性集音にのみならしの岡のさねかつら人しれずこそくらまほしけれ

(三)抄曰さきのくひは鷺の頸歟ころんとはころんと云ふ意なりいとはたは最將といふ詞なるべし○解曰鷺の頸をとらむとすればいとはたして長くて也いとはいたく、はたははたしてと意得る言也○今いふ舊說の如く鷺の頸とは聞ゆれどもしくは先の杙にはあらじか古事記倭建命の大御歌に久方の天の香山敏鎌にさわたる杙とある杙は鎌にふれて刈らるばかりの細き木の木立といへるなり小葛を繰よせむとして其わたりの木の杙株に取つく時のさまなるべしいと將長くては小つゞらのかつらの長くてといへるにてもあらむか

(四)抄曰あかゝりは足にきれたる胼胝の事なり、しりなるこはうしろより來る人也我も目はありは後なる人我にも目はあればふむましきそと先なる子に答へたるなり○解曰後より來る人を尻なる子といふさて我にも目はあれば石などにあかゝりはふみつけじと先なる子にこたふ○今いふ皸あらん足にて越ゆく山路の石などに踏あつることなかれ心せよといふなり萬葉十四十一ノ枚信濃道者伊麻能波里美知可里婆禰爾安思布麻之牟奈久都波氣和我世、ふましむなはふむなといふに同じ平家物語八をた巻の事といふ段　母方のをちを大丈夫といふ間是を大たここそつけたりけれ夏も冬も手足にひまなくあかかりわれたりければあかゞり大太ともいはれけりとあり我も目はありとはあぢきなきをしへごとする人かなとまけし心にこたふるなり

(五)抄曰とねりは舍人なりしりこんそは後よりこんそといふ心也○解曰とねりは舍人なりしりこそうは後よりこんそといふなるべし○今いふそも〳〵此早歌は神樂をかぐらといふはかくれあひといふが轉りたるよりいふなりと惣論にいへるがごとく本方末方西方より互に對ふ人のいふ詞をいひやぶりもごくが如くいふ詞にてあかゞりふむな云々われも目はあり云云などいひかけいひかへしなどあらそふがごといへるなりさて舍人こそうのこそうはこむぞにて諸說は將來ぞといふ意

と解れたり又體源抄に多親方云人長は其歌の詞を舞ふなり云云舎人こせうにはこせう尻になりてとあるは屈從尻といふ意かされど今思ふには舎人古曾といふなるべくおぼゆ同しほどにていさゝかうやまひたる詞なり夕顔の卷大和物語等に右近の君こそ北殿こそとやくしこそ西こそ後拾遺集にすまひこそ宇治拾遺に地藏こそ秦兼久か歌に花こそ物は思はざりけれといふを通俊卿女のわらはの名にしつべけれとて云々小右記に藤原親通といふ人の妻を藤原小忌古曾さて又古今集俳諧歌によそながらわか身に糸のといふ歌の作者久曾うつぼ藤原君十九の枚あるまじきこといふくそたちかな又おもしろきことといふくそたちかな三代實錄四十九ノ十三枚下毛野屎子さては貫之主の童名阿古久曾などいへることありさるは舎人古曾尻古曾といひて惡口にたはふるゝなりしりこそうは後よりゆく人をさしていへるにてやがて尻といひ久曾とも聞ゆればいやしめいへるなりかくてわれとこそうといへるは汝もこそうといへることゝ聞ゆおのれわれと云ふことは自己のうへをいふ語にして又他人をいやしめておれといへること古事記に神代にも神武天皇の段にもあり杜册子に田植女の謠へる歌郭公よ於れよかやつよ於れなきてど我は田にたつ宇治拾遺五三枚宇治ノ左大臣の御物忌の時橘以長が參らんとする土戸の入口にて舎人がとゞめたる時やくれおれらよめされて參るぞといひければとあり此くはしき說は記傳十の五十七の枕同十九の九の枚などに見えたりそこに又今世の俗言には自意禮といひ人を罵に己とも我ともいふは古世と相反なりとも見えたり此歌のわれもこそうと云ふを考へ合すれば昔よりも然いへる事の有が如しさるは汝をと云べきを罵ておのれわれといふは敬ひて云には君とも御前ともいふを罵ておとしむる時に臨ては其の對者の自稱ふおのれわれを其の儘に用ひて汝がおのれと稱ふ其のおのれ其方がわれと稱ふ其のわれといふ意にていひそめたるにてもあるべしわれを舎人古曾尻古曾といふもその身も尻古曾なるぞと答へたるなり古曾といふも久曾といふも同意なれば尻こそと云にいやしむる意はあるなり欽明紀二十三年の段に任那官家さて日本の御領の司所あるを新羅王かた〳〵敵なひ奉れるころいつもの如くおさへしづめて討手の軍をつかはしたりし時その軍打やぶられて新羅王の方へ虜となりし調の吉士伊企儺といへる人さらはれながらもつひにしたがはざりし事をしるされたる所にいはど調吉士伊企儺爲人勇烈終不降服新羅鬪將拔刀欲斬逼而脫褌進令以尻臀向日本

大號叫曰上日本將軍我膽騅郎號叫曰新羅王咽我膽騅雖被苦逼尚如前叫ごあり尻云々ごいふがいやしめはづかしむる詞のたぐひ思ひ合すべし

(六)抄曰あちの山はあなたの山ごいふ心なりあちのせもあなたの川の瀬なり○解曰あちの山せやませやまのあちのこあちの山はあなたの山なりあちのこは妹をいふにて山賊に妹をおきて思ふよしか、さらばせ山は背山なり同頭書曰是は古本に或説ごて小字也○今いふあちは遠ごいふに同じせやまは狹山なり狹く小き山をいふなりをやまごいふに同じあちのせごいふは遠の狹山ごいふが如し

(七)抄曰このゑのみかごは陽明門をいふなりこしは冠の巾子なり昔は磯額ご巾子ごをはごりはなつやうにこしらへたる故なりかみのねは髮の根なり髮のなき故に巾子をおこしたるぞご云なり○解曰このゑの御門は陽明門をいふなり此こしはかむりの巾子なり式のころまでは額ご巾子ごをば別に作りてさしたる故なり髮の根なければ巾子の落たるごいふなり○今いふ舊説みなさる事なり近衛御門のここ次にいふべし巾子おつごいふ事體源抄に多親方云人長は其歌の詞を舞なり早歌に近衛御門に巾子おつごいふ所には冠を抑へ赤雁踏なには後を顧見て前へ進み舍人こせうにはこせう尻に成けり如此して取物にも狹居張にも詞にしたがひてかくぞ舞ける云々陽明門拾芥抄に山氏造之五間戸三間號兵衞御門北端ごあり但し兵ノ字は近の誤なるべし○ちなみにいふ拾芥抄中末卷宮城部に延暦十二年云々造山背新宮同年云々令諸國造新宮諸門尾張美濃二國造殷富門伊福部氏也越前國造美福門壬生氏也若狹越中二國造安嘉門海犬甘氏也丹波國造偉鑒門猪使氏也但馬國造藻壁門佐伯氏也播磨國造待賢門山氏也備前國造陽明門若犬甘氏也備中備後二國造達智門丹治氏也阿波國造談天門玉手氏也伊與國造郁芳門達部氏也ごあり陽明門は備前國造陽明門若犬甘氏也ごあり若犬甘氏の作れりごあるは誤なるべし播磨國造待賢門山氏也ごある此山氏ぞ陽明門は造りたるなるべきそは次の門號起事の條に陽明門山氏待賢門建部氏郁芳門的氏ごあるにてしらる但し此條にも談天門玉生氏殷富門伴橘氏なごあるは又前條に伊福部氏玉手氏なるよしあればこれも考合すべし山を陽明建部を待賢的を郁芳若犬甘を皇嘉なごその訓を字音になしたるここは國名郡なごの例にてしるべし

○抄曰ゆすりあげむすゝりあげんすゝりあげんゆすりあげんは人のおほくてすりあげらるゝごいふなりすゝりも同意なり

○解曰ゆすりあげよそゝりあげそゝりあげよゆすりあげ或說云ゆすりあげは人のおほくてすりあげらるゝ事といへり必人の多き事とも定めがたし何にてもあるべし○今いふ此歌こゝにはなくて次のひはり戸やあふりとの次にある卷もあり解の本もしかなり古本もひはり戸あふりとの次にありされど緯にもまた譜の卷にもかみのねのなければゆすりあげむとついてたりかくて此ゆすりあげんすゝりあげんは髮上髮あらひなどする時にゆすりあげんといへるつゞきよろしきさまに覺ゆゆするは髮あらふことなれば髮の根の云々といふにかけ合たり源氏物語にも御ゆする云々といへることいく所にもあり冠辭考うちゆするするかの國といへる條をひらき見へし打泔る泔る髮てふ意につゞけしなりけんかし髮を櫛梳る時に用ふる水をゆするといへばなりとあり雅輔裝束抄にもわらは殿上の事の段にもゆするつぎに水いれて云々みつらをいふ事の段にゆするつぎの水にぬらしてともあり云々ゆするつぎの水はいとの結びめぬらさむれうなりなどありゆすりあげすゝりあげといふ詞髮の根云々といふにかけ合たり

(九)抄曰たにからゆかばをからゆかむをからゆかば谷からゆかん、をからゆかんは山のをからゆかむといふ心なり○解曰をは山の末をいふ○今いふ谷からは谷川の川づらつたひに道あるなるべし、をは山の峯つゞきの道をいふなり嶺の上ををのうへといひて山の高き所をいふなり

(十)これからゆかばかれからゆかむかれからゆかば是からゆかん此こゝは不審なり○解曰みなたがふさまにすることなり○今いふ聞えたるが如し緯の傍注に是彼の二句御神樂式に无之とあり

(十一)抄曰をみなこのさえはしもつきしはすのかいこほちをみな、このさえは女子の方なりかいこほちは垣を破りて薪にする心なり○解曰こは稻を納めなせる時にかきこぼちたる籾を女兒ども財とすといふなり古のから歌にも有なりまた穗を拾ふ事は式にも其後の物にもあり其類を女が得物にするのみ同頭書云かいこぼちはかきこぼちの意○緯曰加木保里○譜にはかきこほり○今いふ女のさえといふこと藝道をさえといへば女の藝をいへば琴ひき手かきおりぬひあらはひなどをもいふべけれど末の句にいさゝかもかけ合さることなりさて抄の御說も解の說もよろしとも思はれず秋の稻を取をさむとてとかくしたる所にて落穗を拾ひたる事もあれど財といふばかりことごとしき事にはあるべからず調物(ミツキモノ)をとりはからふには

霜月十二月にては時おくれたるこぞなり九十月なごこそさるべきことゝはおぼゆれかくても末の句にはむげにかけ合がたし猶よく考ふべき事なり霜月十二月のかいこほちを緯にも譜にも加木吉保里とあれば氷のことゝは思はるれご氷にしてはかきこいふこご猶おだやかならずかくて思ふに竹取物語にしも月しはすのふりこほり六月のてりはたゝくにも（てりはたゝくのはたゝくははたゝかみハ事なりはたゝかみはなる神の事なり萬葉にも光る神なりはた云々とてなりはた少女の夕に冠らせたり）云々とあれば霜月十二月のかきこほろにて伊勢物語に雫こほつがことふりてひねもすやまずこあるが如くかきこほちにてもあらむか漢籍にも傾盆大雨といへるを思ひ合すべしかきこほりのかきはかきたれて雨も涙のふりそほちつゝ又かきくらし雨もふらなんなごの如し　わが友江戸ノ人伴信友が説には古本に加伊々木千とあれば本は毛の誤にてかいこもちなるべし今民家にて米麥蕎麥なごの粉を水にて搔合せかためて餅にして炙て翫び喰ふことあり古き節用集にも搔餅こいふ物ありと云へり次の歌のあふりこやひはりこをも炙處火有處なるべしこいへり

（十二）あふりこやひはりこひはりこやあふりこ、あふりこは賤戸等の風にあふらるゝを云なりひばりとは板のひわれたる戸といふなり○解曰雨を障る戸を雨降戸といひ日を障るを日張戸といふ○今いふあふりは風あふちふくなりひはりこは氷降時といふなるべし眞淵大人歌に神な月たちにし日より相摸嶺のあふりの雲のはれくもりする此あふり風のはげしき事が雨ふりといふこご歟これら考へ合すべしすべて本末わかちていふは神樂ひの歌なりかくて此早歌の體を見ればたがひに人のあらそひいへるが如しかく二方にわかれてあらそふが如くいへるはかくれ合にてかくらといふことのよしなりこのことを卷の首にあげつらへるが如し

星

吉々利々

本

きゝりゝせんさいいやうひやくしゆとうちやうせつしむてうしやう〳〵けやあかほしはみやうしやうはくはやこゝなりやなにしかもこよひの月はたゞこゝにますや

○抄曰きゝりゝせんさいやうは吉々利々千歳榮といふ心なり吉々利々は吉利ともによきなり千歳やうは千歳のさかえなりみな祠願の心なりひやくしゆとうは白衆等なり衆等にまうすといふなりちやうせつしんてうしやう〳〵けやは聽祝晨朝清

淨偈なり心は淸淨の偈を說をきけとなり法花懺法の六時の讃の晨朝偈にも此詞あるなりあか星は明星を聲と訓とにいへりくはやはこれよなといふ詞なりこよひの月は明星のいづる時は有明の月のことなりこの下の三首はみな星の曲なり○解曰或說に吉々利々は吉利ともによきなり千歲やうは千歲のさかえなりひやうしゆとうは白衆等なり衆等にまうすといふなりちやうせつしんてうしやうしやうけて聽說は夜朝淸淨偈なりかならず晨朝の偈を說をきくとなり　法花懺法の六時の讃の晨朝偈にも此詞あるなりあかほしみやうしやうは明星を音と訓とにいへりくはやはこよなといふ詞なりこよひの月は明星のいづる時は有明の月なりといへり此下の三首はほしの曲なり○今いふすべては抄解の舊說によるべく覺ゆ明星は兼名花云歲星一名明星此間云阿加保之六帖に月かげに見かくれにけりあかほしのあかぬ心に出てくやしきくはやは人をめすときこれよなといふが如し末つむ花の卷にくはや篝火卷にくはやとて出給ふ今の俚言にこりやといふ詞なりこよひの月の云々明星のころなれば有明の月にてたゞこゝにますとは月は曉方には西の方にあるを見なれたるこゝろに有明の月の天の最中か又は東方にあるをばかく打思ふがまゝにいへるさまなり體

源抄云神樂に難儀あり星歌に白衆等長說晨朝淸淨偈この詞は涅槃經の文なり而神樂は我朝の事に起る樂なり神世也者如何とあり古本には吉々利々千歲榮(壽イ)(永イ春イ長節晡朝イ上々下)白衆等聽說晨朝淸淨偈安加保之明星波久波也古々奈利也名仁志加毛於々々古與比乃川支乃多々古々仁萬須也太々古々仁太々古々仁さ(佐留々)須也

本あかほし波　末明星波　本し末し本し末しとあり本にあるほしといひ末みやうしやうはといへり

末

ひやくゆとう

○抄曰本歌の詞に同じ仍略之○解曰下は本の歌に同じ

得錢子

本

とくせにこかねやなるしもゆふひはをたれかたをりしとくせにこやたゝらこきひよやたれかたをりしとくせにこや

○抄曰とくせにこは得選なり思ひ入たる女を云今の世にも女官に得選といふ名あるなりね屋は閨なりしもゆふはしめゆふなりひはゝ檜の葉なりたらちこきひ未詳但したたらたきはよきといふ詞なるべしひよやは檜なりといふべし○解曰これを或說のまゝにいはゞとくせにこかは得選子之にて今の世にも

女官に得選といふ名ありねやは閨なりしもゆふはしめゆふなりひはゝ檜なりたゝらこきひよはたゝありなる檜よといふ心かよは呼出す辭されごも閨とてたゞの檜葉は似つかず聞ゆれば末歌にてさと聞ゆ頭書云比興なりもしくはひとやとよまんかたゝらこきはあたらこきか○河社曰しもゆふひはを誰がたをりしとは毛と女と五音通ずれば標結檜葉といへるか又下結檜葉にて檜葉もて垣をゆふに下をゆひて上をばさておくをいへるか萬葉七旋頭歌水門なる葦の末葉を誰かたをりし吾勢子が振手を見むと我ぞ手折しすべて此歌に似たり○今いふ此歌すべていひさだめがたき事多かれど大かたは舊説どもによるべきなりとくせむは禁祕御抄云得選三人也又髮上釆女兼之近代華族云々江家次第云得選厨子所女官於釆女中選其人故得名云々などありねやなる下ゆふひはを云々契沖の引たる萬葉七二十八枚の水門なる云々の歌は考へ合すべきことなりまづその歌はつねにかよひくる男ある女の家のわたりの水門の蘆の生たてるをやがて此家の垣にもなしたるその蘆の末葉を誰か手折しとよめるなりさてしか手折し所はその女の許へ通ひくるこの兄子とさす人の別に袖うちふりまねきなどするさまをさやかに見むとてその女の家ぞ手折しとよめるなり男女の間樂に袖を振相別るゝ時山の木の間よりそのふる袖をさやかに見まほしとよめるたぐひもあれば思ひ合すべしたゝらこきひよやはたゞある檜よといふ意かひよのよは呼たす辭なりかくいひても閨なるといふ事猶いかゝなり解の頭書に比になりはもしくはひとやといはむかたゝらこきはあたらこき歟とあり此説は枝を手折しを見てをしみてその人をとがむる意との説なれどいひざまくはしからねば心得がたしそも〳〵此歌本末ともにたしかならぬが中にたゝらこきひよやといふ詞はことに心得がたしまづあたらしき檜よやといふなりとの説ともありと聞ゆ又立血(タヽラ)在好(ヨ)き檜よの心なりともいふべし檜の葉垣のもと(モト)に來て立てあるに好き檜よやの意にてもあるべしかくて本歌の心は舊説の如く得選子之閨在檜葉を誰か手折しなり、しもゆふは河社に下結ならむとあり此説宜し閨のわたりに檜葉あらむこと似つかはしからねど下結とあるによりて思へば閨ちかき籬とは聞ゆるなり檜葉といひ手折しといへるさま垣にほどよき檜の樹をいく本も植並べて今の世に生垣(イケガキ)といへるさまに結たるなるべし山里めきたる所には卯花垣杉垣竹垣などあり萬葉十四の十九枚東歌に戀しくば來ませ我勢子垣内柳末つみからしわれ立待むとあるも柳の生垣の末を何となく手すさみ

に或はつみ或はをりなごするをいへるなりかくいへご又柴垣萩枝或はくろもしの如く松の枝杉の枝檜の枝などを結びたてるにてもあるべし檜木の葉を物におほひたるこごは延喜儀式大嘗祭中前祭一日云々次黑酒二瓶各納二一斗五升一以白木盤爲レ蓋覆フニ以二曝布一結ニ以二木綿一載二六角黑木輿一共著レ表以二檜葉一云々さて夕顏卷に檜垣こいふ物云々こあるは檜材の板を組などしたるなればこれごは別なり猶末の歌にてくはしくいふべし

末

われこそはみれはやこれたさにたをりてこしかやさくせにこやたゝらこきひよやたをりてこしかやさくせにこや

○抄曰われみれはうれたさに手折てこしこいふなり○解曰われみれはうれたさに手折てこしこいふなり○今いふ我こそは見れば愚愛(ウレタ)さに手折而來しか得選子たゝらこき檜よこいふなり句〳〵の所々にあるやはやし辭なり、てにをはにはあらず本末こもに得選子に心を懸る男のいへるなり誰歟こいひて我こそこいふは萬葉七の芦の末葉の歌の如く自問自答の體(サマ)なり見ずは憂たさにこいふは深き閨の内にこもれる女の容姿を垣間見せんこ立よれ共葉細やかに茂き檜葉垣なれば見えがたきがうれたさに我こそ手折しかこいふなりたゝらこきひよやはあたらしき檜よの意なるは垣の結びさまのうるはしく爲なしたるを押折たるをあたら物なりこいふなり立而有好きこの方ならば此垣に立倚り好き檜なる物をやの意なり見ればうれたさにこいふは女の容の見えがたきにつきていふなり得選子こいふここを所々にいへるは折かへし〳〵歌の榮(ハエ)あらせたるなり此歌古本には本方末方互に同じ詞をいくたびもうたへるさまに見え猶詞の異同も附たれごこれぞこ思ふもなければこゝには畧きたり

木綿作

本

ゆふつくるしなのはらにやあさたつねやあさたつねや

○抄曰ゆふつくるは木綿をつくるなりしなの原は信濃の原なりあさたづねは朝に尋行なり○解曰ゆふつくるは木綿をつくるなりしなの原は地の名にやあさたづねは朝に尋行こ云歟同頭書云しなの原を或説に信濃の原こいへごゆふは安藝こ伊豆三島こそ名あれ信濃はよしなくや○緯曰見牛云木綿を作らんこて信濃の原に麻を尋にゆく也末方歌は尋行あひてます〳〵好楮を得て木綿を作りぬれば神樂はせよや〳〵こうたふなり主計式信濃の調庸をいへる所に中男紙紅花麻子などいへば麻

多國にや云々かみそやは紙麻やなり主計式凡中男一人輪斐の紙麻三斤穀三斤とあり斐は今かむびといへる木にて和訓紙斐なり云々麻穀を東國に植らるゝ事は古語拾遺に見えたり云々〇記傳八三十八枚木綿は穀木皮を以て織れる布にて古はあまねく用ひたりし物なり古語拾遺に穀木種殖以作白和幣是木綿也已上二物一夜蕃茂也とありまた穀木所生故謂之結城郡とありこれ下總國の郡名なりまた豐後國風土記に柚富郷此郷之中栲樹多生常取栲皮以造木綿因曰柚富郷云々　和名抄穀加知木也字鏡にも穀楮也加知乃木とありさて布にせしことはいと古へのことにてやゝ後には紙にのみすきて布にすることは絶つと見えて和名抄にも穀紙は見えて布のことは見えずさて穀の字をやがて由布と訓れきさもあるべきこと也云々同十四二十ノ枚科野國云々此國には倉科穗科御科蓼科など志那てふ地名いと多かり又一說に志那といふ木あり古へいはゆる栲これなりその皮しなしなしきゆゑに志那とはなづくるなるべしまた其皮色白ければ志那は志良なりともいへりさて此木は皮を剝て木綿に作れり衣裳などにもし紙にもせしを此信濃國に生るは殊に色白くて名產なり神樂歌にも木綿造る科の原と見え又諏訪神社の御賽束鎭のおごし馬の飾船の綱などにも用ふ然れば科野てふ國の名も此木より出たるなり今も級布紙布藤布多布布など出し更級郡などは殊に多く出して名產なり右の多布布といふも楮の皮にて織れる布なれば多布は多久の訛なるべしといへり今思ふに此說もかた〳〵由ありて捨がたし栲を志那といへることは古書に見えざれどもこは此國の方言にても有ぬべしまた神樂歌に木綿造る志那のはらとあるも國名とは聞えざれば木綿を造る此志那の木の生たる原といへるなるべしよし又地の名にまれ元は此木によれる名なるべし大平云上件の一說といふは信濃地名考といふ書の說なり其書の文甚まぎらはしければ此記傳によくわきまへられたるによりてこゝにも引しるしたるなり信濃國人吉澤好謙といふ人の作れるなり明和八年にかきたり藤原宇万伎か序文ありさて安永二年に板に彫たるなり　〇玉勝間山吹巻十二ノ廿ノ枚曰いにしへ木綿といひし物は穀の木の皮にてそを布に織たりし事古はあまねくつねの事なりしを中むかしよりこなたには紙にのみ造りて布におる事は絶たりと覺えたりしに今の世にも阿波國に太布といひて穀の皮を糸にして織れる布あり色白くいとつよし洗ひても糊をつくることなく洗ふたびにいよ〳〵白くきよらになるとぞ此事出雲國の千家淸主の許より文の便りにいひおこせて彼國より得たりとて其少きさいて見せにおこせたるを見るに地かたく色白く淸らかなる布にぞ有ける阿波の國人に猶よく尋きかまほし猶外の國々

にもある所あるべきをひろくたづねしらまほし○今いふしなの原といふは信濃の國をいふにもあらじ更級郡などをいふにもあらじいづくにもあれしなの原といふ地名なるべしゆふつくるは志那の原といふ地名に志那といふ木にて木綿をつくるよしにて冠らせたる枕詞なるべしあさたづねは麻たづねなるべし麻は畑にまき生す物なれど山におのづから生たつもあるなればかくもいふなるべし阿波の春枝廣高が許より玉かつまに見えたる太布なりとておくれるをはじめてその後又同じ阿波の殿人賀島正根が許より同じ太布又それおる穀の紵など見せにおこせたる中に山麻とて美馬郡の山中の戸ノ谷と名ある物とて書付ておくれりきそは木綿の布も上中下さま／＼ありていくはたもおくれりその布おりいつる村里そのつかひさまのいろ／＼あたひのいろ／＼など一巻にかきつらねておくれるなり又陸奥人石金吾主が文の便にいひおこせたるは東國に志那太といふ布あり俗に萬太といふ木の皮を麻の如く績て織る布なり此布つよく麁き物にて今の世には酒つくりうる家の酒袋といふ物にのみ用ひ他し物には用ひず萬太の木の皮は會津山より出す物なり此木の皮或は山賤の簑にも作り又績たる糸は繭莚の緯にもするなり記傳信濃の地名の説に考合すべき事なり又云志那太は志那多倍の畧語ならんといへりきかくて大平思へらく記傳卅二ノ卅八枚志那陀由布佐々那美遲の志那は坂路の事其由は師の冠辭考志那てるしなてるの條にあり陀由布は平ならずて高く低く上りドりつゝゆく坂路のさまにて云々とあり今思ふにこれも志那の木もてつくれる木綿を志那たへのゆふといひてさてそれは神遊びの時に榊或は竹葉などに付て佐々といひて打振などすることありて佐佐那美遲とつゞけよみ給へる枕詞なるべく思へり是又萬葉にさゝなみといふに神樂聲浪神樂波樂浪とも書たるに考合せたるなり

末

あさたづねましもかみぞやあそべ／＼あそべ／＼

○抄曰ましもかみぞやは汝も神ぞやといふが如しあそべは神遊びせといふなり○解曰ましも云々抄の説にことなることなし○今いふ緯に書入たる見牛と云人の説も猶さだかならずましもかみぞやは舊説の如く汝も神ぞやなるべし古本のましものイにきみもとあれば汝といひ君もといへるなれば誤字にはあらず本方末方いくたびも兩方よりうたへるにもましも神ぞやといへばこなたよりは君も神ぞやといくたびもいひかへせばその心を得て解べきなりあそべ／＼は神あそびせよといふ

なり

書日

古本書日歌

本

いかばかりよきわさしてか天照ひるめの神をしばしとごめむ

○抄日天てるやひるめの神とは天照大神をまうす大ひるめのむちと御名を稱する故也○解曰天照大神を萬葉に天照ひるめの命とあり　紀にも大ひるめのむちとも申せり　頭書に古寫本五ノ句重ぬ初句いかにしてとあり　○今いふ神代紀に大日孁と見え萬葉二巻柿本朝臣の長歌に天照日女命云々一云指上日女之命とありいかばかりよきわさしてかしばしとゞめむとはより來ませる大御神の御影をしばしあがりましまさずもがなととゞめ奉る心歟又日の御光は榮えたる物なれば入日の山端にくれゆくを惜む心よりかくはいへるにてもあるべし

末

いづこにかこまをつなかむあさひこかあさるさはへの玉ささのうへに

古本四ノ句さすやをかへのとあり

○抄日拾遺集に神樂歌わが駒は早くゆかなん朝日こがやへさすをかの玉さゝの上に此歌と心同し朝日こは朝日をいふあさるは求食とかけり食物をもとむるを云人にも鳥獸にも云詞なり朝日のあさるとはいひがたけれど彥とは人をほめたる心なれば人にとりなして日の影のあさるといへるにや又朝にも事よせていへると見えたり拾遺集の八重さすは日の影のしげくさす心なり　○解曰四ノ句を今の本にあさる澤へとあるは誤なり古本の裏書にも或本を引て佐須也乎加邊とあり且朝日照岡とは萬葉にも多よめり拾遺集に我駒は早くゆかなん朝日子かやへさす岡の玉篠の上にと有も誤れりさて日子とは男をいふ故に日神を申す例なし此歌は唱へ誤れる歟又さるわかちをもわきまへぬ人のよめるを用ひ來れる歟玉さゝはまろくつぶらかに生茂りたる小笹をいふ此初句を古本に伊止古爾加と有もつとゝの通にて古有事なり○今いふあさひこかといふ詞はあさひかげとありてよろしき詞なりうたひひがめたる事あるべし本歌にもイ說あり何わざをわれはしつゝか天てるやひるめの神をしばし留めんいかにしてよきわざしてか云々末歌も六帖にてる日といふ題にて朝日子がさすや岡への松の葉のいつともしらぬ戀もするかないづこにかやごりとるらん朝日こ

がさすや岡への玉ささのうへになどありやどりとるらんとい
ふと駒はつながむといふと意似たる詞なり（飛鳥井にやどりはすべし御馬草もよしなどの類にて）つなぐを厚顔抄に齊明紀のいゆしゝをつなぐ川邊とい
ふを繋（ツナク）なり鹿の跡を詠るを俗に跡を繋ぐといふこれなりこ
もあり古今集にはひるめ歌としてさゝのくまひのくま川に駒
とめてといふ歌をも載たり拾遺集わが駒は早くゆかなん朝日
こか八重さす岡の玉さゝのうへに河海抄に箒木巻にいづくに
かやどりはとらん朝日このさすや岡への玉ささのうへに朝日
子のやどり給ふといふ義なりとあり顯昭袖中抄十三いづこに
か云々あさひこは朝日なり或本にはあまひことあり天の日と
いふ歟云々神樂には天照おほむ神をおろし奉れば神擧とてあ
げ奉る歌もありさればいかなるわざをもてかしばしとゞめ奉
るべきとうたふなり

或説

なにわざをわれはしつる（つ、イ）か

○今いふ抄にも解にもかく載たり古本にはなし緯には全歌を
載たり

弓立

本

いせしまやあまのとねらがたくほのけ　おけおけ

○抄曰とねらは刀根等也節會などにとねめせといふ六位以下
の人をとねとはいへりこゝにはいやしき人をいふにやほのけ
は火のけ也おけはあちめの曲にいへる詞と同じ但しこれらは
みな歌のふしなるべし○解曰いにしへとねりといふ大内に宿
直する人をみな云りそれより轉じて刀禰といふ意は舍人なが
ら太なる人をいふ事となりて里の刀禰など祝詞にもいへりさ
れどこゝにはかなはずほのけは火氣也おけは上に出づ頭書云
今考ふるにあまをとめらをあまのとめらとうたふのみ古本に
あまのとめらと有よし今本は誤れり○河社曰とねは上にもい
ふが如しほのけは火氣なり萬葉には火氣をけぶりと訓りほの
けといひては氣に煙をかぬるなりかをりあふとは鹽氣のにほ
ふなり萬葉二長歌云神風乃伊勢能國者興津藻毛靡足波爾鹽氣
能味氣乎禮流國爾云々同九云鹽氣立荒礒丹者雖在云々これら
はおのづからなる鹽氣なりましてやくには猶かをりあふべし
日本紀第一云伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉霧に
も香ある物なり○緯頭書今按弓は借字也拾介作湯立貞觀儀式
園緯神祭儀云御巫先進再拜兩段云々始奏歌舞訖御神子先廻庭
火供湯立舞云々ゆきは湯を沸する木也○同附紙云種季が貞觀

儀式ノ見牛點ヲ改ヰ先廻ニ庭火ニ供レ湯立舞云々　今世ノ御湯ノ花ヲ献スル出處トスベシ始奏歌舞訖トアリテ湯立歌ナラバ亦供スト云コトモイロヽ供トウタヒモノヲ云ンコトモイカヾ○今いふ伊勢島は伊勢國の海邊をいふ伊勢は元來志摩國と一つ國にて海邊といへば專ら志摩の國にかゝれりあまは海部海人也漁者鹽燒礒の藻菜をとる者なり　これらは刀禰等なり　刀禰の事は記傳三十三(五十四ノ枚)　舍人の說の下次に委しく見えたり　大かたに要をとりていへば延喜式廣瀨大忌祭龍田風神祭の祝詞に見ゆ王等臣等百官人等倭國乃六御縣能刀禰男女爾至萬弖云云續日本後紀九に公卿百官及刀禰等また諸祝刀禰等西宮記五月五日條に內辨云刀禰召少納言唯出召王卿以下列入また釋奠條に上卿宣云刀禰率入禮與諸大夫以下入自南門また九日宴條に云々大節大夫稱ニ刀禰ニ云々仰レ召ニ刀禰ニ云々大神宮儀式帳に二箇郡司子弟及諸刀禰等中右記に嘉保二年云々大原刀禰等爲兩院下部不レ隨ニ行事所ニ召レ戾また西七條刀禰云々また伊勢神宮の書どもに宇治鄕刀禱沼木鄕惣刀禰諸鄕刀禰小俣村惣刀禰職射和村刀禰職などあり後拾遺集神祇部詞書に里の刀禱ともとあり里の刀禰は村の長などをいふなるべし神樂歌に海人の刀禰とあるも海人は公の御贄を捕る事を仕奉る故に此も刀禰といふなり云々とあり　刀禰といふ意の義また縣居翁の說ともいひてさまざまくはしくあれどことに要なければ略けり　かれ海人の刀禰は海部の業もて仕奉る者をいふなり伊勢國志摩國は上古より調貢に海魚御藻の類を奉る事古事記に御世島之速贄獻之時云々萬葉六(十九丁)　御食國志摩乃海部有之眞熊野之小船爾乘而奧部榜所見同十三(八丁)　隅知之云々日之皇子之聞食御食都國神風之伊勢國者云々延喜式には主計民部內膳式等に伊勢國志摩國調庸交易雜物貢進御贄旬科などにその品物を擧たるにもしられ主計式に凡志摩國供御贄潛女卅人などありたくほのけは鹽燒煙歟又は潛女の海底より出て礒の巖の蔭などに休息時に寒氣を苦痛て流木藻屑などを燒て身を溫むることもつねなればその燒火の氣にてもあるべし

末

たくほのけいそらかさきにかほりあふ　おけおけ

○抄曰かほりあふは薰の字也火の氣をかほるとは云也○解曰こは火氣のあかくもゆるをかほりといふ萬葉に朝かすみかひやしほけのみかほれるなどはくもるなり後に烟にもいひたり○今いふ薰は萬葉に香乎禮留と見え字鏡にも加乎留と有を此歌に加保利安布とかけるは誤にはあらで正しきにてもやあらむ此古寫本にも加保利とあり於介々々はやし辭なりいそらか

さきは地名にはあらで礒の崎をいへるなるべし志摩の事出たる物に礒良崎在桃取村圓位曰此島南突出之所曰礒良崎也歟夫木い勢しまやいそらか崎の朝霧にたなゝしを舟こぎはなれつゝ

本

おほきみのゆきとる山のわかざくら　おけおけ

○抄曰ゆきとるは弓に作る木をとる也わかざくらは若木の櫻也○解曰靫に作るには櫻の若木を用るか或説に弓の木といへど弓に櫻を用し事なし○河社曰靫に櫻の木を用る事有にや若櫻は清正集にいつしかとうゑて見たれば若ざくらさかずて春の過ぬべきかな○今いふ靫を作るには櫻の皮を用ることはあるべけれどそれを作らむ料の櫻を取にゆかむ山なればとて打まかせてゆきとる山とはいふまじきなりゆきとるといふことも櫻をとることゝはことことなるべしかくてまた弓立を湯立ならむといへる説にゆきは湯木なるべしといへればさては大君のといふ詞大神のとありしをうたひまがへたるにてもあるべし大神のゆきとる山は次にいふべし此ゆきは湯立の湯を沸す薪の事にはあらずてすべて忌み清まはりたる所にて用ふる薪の事なるべし神代紀に齋庭之穗とある所のゆ台記の別記の康治元年の中臣壽詞の大嘗會の齋場のゆ悠紀主基のゆ由志理伊豆志理清まはり齋まはりなどの由にて神事に清まはりゆまはり仕奉る時の齋薪といふなるべしかくて櫻は由木の事には拘らずたゞ其の山の美好き花を採りに行となりさてその山海をへだてたる所の島山か川のあなたなどに在なるべし此歌伊勢の神宮より傳はりたるならば志摩國の鳥羽の近き所に土具島坂手島須我島などの事にてもあらん歟土具島より三角柏を今も大神宮に貢進る事もあり此島には鳥羽より十四五町離れて舟にてかよふ所なりわかざくらは櫻の好美なるを稱ていふなり履中天皇の都を伊波禮之若櫻宮と申し又稚櫻部造などの姓を賜りたる故由にてするべし古老口實傳の書なり伊勢神宮神事部年中行事正月十五日御竈木伐事楠栢白檀花木桃此五種木者不用之也とあり中原康富記文安元年九月廿九日粟田口神明有湯立參詣拜見

末

わかざくらとりにゆくや船かちさを人かせ　おけおけ

○抄曰櫻をとりにゆくに舟のかちさほと人かせといへる也

○解曰人かせは他人にかせと乞也○今いふ船檝棹を人よ借せといふなり萬葉三卷ノ十六枚　香具山ノ歌に大宮人乃退出而遊船爾

波梶棹毛無而不樂毛已具人奈四二ある本ノうたには竿梶母云云古事記に梔檝敏達紀に檝櫂などあり和名抄にくはしく見ゆ文字はさまざまかきたり夫木抄春四花檝僧正公朝河むかひゆきこる山のわかざくら手折てもこむわれに舟かせといふ歌もあり

本

すへ神のけさの神あけにあふ人はちとせのいのちありとこそきけ

○抄曰かみあけは神遊びはてゝ神の天にあがり給ふをいふ也
○解曰神あけは神の遊はてゝ天にあがり給ふをいふ○今いふ神おろし神あげの事は大神宮年中行事六月御祭十五日條に御巫内人自外幣殿鶏尾御琴請作御門外東方候御殿向先詔刀申其詞云云々等不淨事疑於御前御占清淨令古定給恐々申次以笏御琴搔三度每有警蹕次奉下神其歌阿波利矢遊波須度萬宇佐奴阿佐久良仁天津神國津神於利萬志萬世阿波利矢遊須波度萬宇佐奴阿佐久良仁奈留伊賀津毛於利萬志萬世阿波利矢遊波須度萬宇佐奴安佐久良仁上津大江下津大江毛摩伊利太萬江云々御巫内人以同詞又申御琴搔内嘯件嘯音鳴以清知以不鳴不淨知也云々其後又御巫内人三度御琴搔警蹕之後奉上神御歌如本但所奉下神御名申今度歸御申云々拾遺集

みな月のなごしのはらへする人はちとせの命のぶといふなり

末

そへかみはよき日まつればあすよりはあけの衣をけ衣にせむ

○抄曰そへ神はすへ神と同じあけの衣は五位のきぬ也け衣はつるの毛衣を云へし千年の命に對して云り○解曰そへ神はすへ神に同じあけの衣は五位の衣也け衣は常の衣にきんといふなり此祭仕まつりしるしに五位になるべしといふ也○緯の傍注朱書に褻衣とあり○今いふそへ神舊説のまゝたるべしあけの衣舊説五位の衣といふは萬葉十六ノ廿四枚比來之吾戀刀記集切に申者五位乃冠此歌にならひて殷富門院大輔我戀に五位の冠たまはらば泪にそむるあけの衣きむ又拾遺戀草子をおもふふかき泪のいろに出てあけの衣の一しほもかな又後撰雜ノ一藤原さねきか藏人より冠たまはりて殿上まかりおりなんとしける夜酒たうべけるついでに兼輔朝臣むば玉のこよひばかりぞあけ衣あけなば人をよそにみるらんこれらなりきれを神事には明衣とて又ことなる裝束もあれば此明衣をあけの衣といふなるべくもおぼゆ明らかといふと清明といふと同意にて

あけの衣は清淨の衣こいふこさなりけ衣は毛衣の御説はこりがたし解に常の衣こあるによるべし俗に褻にも晴にもこいふ語ありて晴の時に對へて褻は常の時の事こきこゆれば異の意にはあらずされはあけの衣は明衣にて神事に忌淸めて淨澄なるをいふなり褻衣にせむこは今日まで神事に着て平日の服には用ひざりしを神事過て明日よりはつねの衣に用ひんこいふなり直會直衣事遂て後平日の心に立かへる時の事なり（神事忌情まはるをいとふ事にはあらねどさはりなく御祭事なすましたるをよろこふは人情なり）清輔袋双紙に竹田大夫國行こいふ者陸奥に下向の時白河關すぐる日は殊に裝束ひきつくろひむかふこ云々人問云何等故哉答云古曾部入道の秋風ぞふく白川の關こよまれたる所をいかでかけなりにては過んこ云々殊勝の事歟こあり此けなり思ひ合すべし夫木卅四神祇前大納言隆季卿いにしへもまつれるをりはけ衣にあけの衣をきるこいひけり

朝藏

本

あさくらやきのまろこのにわかをれは

末

わかをれはなのりをしつゝゆくやたれ

○抄曰天智天皇御製朝倉や木の丸殿に我をれば名のりをしつつゆくはたか子ぞこいへる末の詞をいさゝか略して朝倉の曲にうたひ侍るなり朝倉の宮は天智天皇行宮筑紫に在よし奥義抄八雲御抄等にのせられ侍れご慥なる所見及び侍らずこゝに日本紀をかんがへ侍るに齊明天皇御時（皇極天皇重祚の謚號也）百濟より高麗をせめし時高麗救の軍を我國にもこめ侍りしかば天皇筑紫へ赴き給はんこて伊豫の國に幸して熱田津の石湯の行宮にこゞまり給へり其時天智天皇いまだ太子にて供奉し給へり其時朝倉橘の廣庭の宮にうつり給ひて朝倉の社の木を伐はらひて此宮を造り給ひしかば朝倉の神いかりをなせりこなん齊明天皇は終に朝倉の宮にして崩じ給へり朝倉社は延喜式神名帳には土佐國土佐郡にありこ記せり風土記にも土佐國朝倉鄕に朝倉の社ありこ見えたり四國の中なれば伊豫の國より土佐の國へ遷りましましけるにや朝倉の木丸殿は土佐の國に侍るを古來あやまりて筑紫に在こいへり木丸殿は行宮を云まろ木は黑木にて造れるなり天智いまだ東宮こ申侍る時齊明天皇にしたがひ給ひて朝倉の行宮にこゞまり給へる時此宮へ參る百の官名謁にて罷在侍る事を名のりをしつゝ行はたか子ぞこ詠じ給へるなり郢曲に朝倉返しこいふ事あり神樂譜云朝倉吹返催馬

樂拍子或云搔返糸竹云々神樂に朝倉をうたふ時は笛も和琴も別にしらべてさいはら拍子にてうたふを返すといふといへり朝倉の歌をは御前返しと延喜帝の勅定也朝倉は皇居なりしによりて御前返しと名付給へるにや○解曰こは齊明天皇筑紫へ幸して朝倉てふ所にかり宮を造せておはします時中大兄皇子のよませ給へる御歌ぞと後の抄どもに見ゆ古き物どもには見えねどさもあるべくおぼゆ朝倉は書紀には見えねど筑紫ならでは似つかはしからず木丸殿は行宮なれば全く玉をもほどこさずよろづ木のまゝにて作ればなり名のりは名謁とて其夜のとのゐ人の名を申て云也○緯頭書云體源抄云朝倉越前國風俗也延喜年中に神樂ニクハヘラル仍朝倉其駒ハ風俗拍子ナリ新古今雜中朝倉ヤ云々此歌天智天皇ノ御製ノヨシイヘドモ日本紀竟宴ノ歌ノ躰ニ似タリ袖中抄カヘシ物ノ條下云神樂譜云朝闇吹返催馬樂拍子云々或本云朝クラヤ云々此歌爲御所返歌是延喜廿一年勅定也神樂遊仁時ハ榊ノ音振唱又云早已畢搔返絲竹可仕朝倉之催馬能志[illegible]人顯昭云朝倉ウタフヲハアサクラカヘシト云或ハ吹返トイヒ或搔返絲竹ト云或ハ催馬樂拍子トイヘリ仍カヘストハ云カカヘストハ其歌ヲ又トクカヘスヲコソイヘ此返シハ笛モ琴ノモ別ニシラヘアラタムル也催馬樂拍子トイフニテシリヌ又古今カヘシ物ノ歌ト云ハ多クハ催馬樂呂律歌ナリサレハカヘストハ催馬樂拍子ニフキナシヒキナシテ朝倉ヲウタフナルヘシ云々○體源抄云朝倉カヘシト云ハ朝倉ノ歌ヲ催馬樂拍子ニウタフヲ云神樂ハ一越調ナルヲ催馬樂拍子に琴ヲシラフル○河社云但三善清行の意見封事の中に備中國下道郡邇磨郷の事をかゝれたるには彼國の風土記を引て筑紫へおはしましたるやうに見ゆれば今傳る説は筑前國の風土記などより出たるにや○今いふ朝倉の事記傳四十一卷披き見て考ふべし齊明紀云七年五月御船西征始就テ于海路ニ云々五月天皇遷居于朝倉橘廣庭宮是時斮除朝倉社木ヲ而作此宮之故神忿壞殿亦見宮中鬼大舍人及諸近侍病死者衆云々此宮を一説には筑前國上座郡今其故墟宮野といへりされど土佐國土佐郡なるをいふなりともいへり土佐には同郡に葛木男神社葛木咩神社といふありて釋日本紀に一言主神の事を云るに雄略天皇に逐退られ給へるよしにいへることは非にてたゞ土佐に此神をまつり奉れゝば葛城の神のまし〳〵し故由ありてさて乎女の湊といふも葛木男社葛木咩社といふ社あるを其男咩の神社のある地に湊ありてそこを男女の湊といひならはせる故にもやあらんこゝの歌ども朝倉男咩葛木と三ッ箇の歌ど

もに土佐によしある事ならむと思ふなり猶よく考ふべし

或説

本

朝くらやをめの湊にあひきをれば玉のめざしにあひきあひにけり

○抄曰織面の湊は所の名なるべしめさしは古今歌にめさしぬらすな沖にをれ波といふに同じ二つの説有り一説にはあまの漁するとてかひつ物など取いるゝ籠のやうなる物をめさしといへり又説は女の童をめさしと云めなどをさしとるあまをとめ也玉はほめたる詞也いづれにもたがふべからず○解曰をめの湊は地名なるべしめさしは古今歌にめさしぬらすな沖にをれ波枕草子にちわのめさしなるともいひていまだひたひ髪のみじかくて目ざすほどなるをいへりそれより後わらはとて成ても同じこといふならんこゝの目ざしはよきほどに成し女をいふと聞ゆ玉は當りたる詞也○今いふをめは古本に乎女とあり筑前なるは遠賀湊といふ所あり是ならは乎女は乎加の誤なるべし葛木男葛木咩の神社の男咩よりいふにはあらざる歟との説前條にいへり玉のめさし解の説によるべし狹衣にめざしなるかみこもありわらはの事なり玉のはあまのゝ誤なるべし

末

かつらぎやわたるくめちの繼橋の衣もとらずいざ歸りなむ

○抄曰くめちの橋は常の事也衣もとらずはいそぎ歸る意也○解には此歌なし○今いふ古本には裏書云或本云々などありてはてに片假字にてカツラキヘワタルクメチノツ支ハシノコゝロモシラズイマカヘリナンとあり心もしらずにてはときがたし衣もとらずにても聞ゆとはなけれどとり袴とて裾をつみあげて道いそぎはしるをり又小川など歩わたりするをりの事もあればかつらぎの繼橋のあやふければわたる人衣の裾つみあげてまろびおつまじく心してわたるならひなるをこれはあまりにあやふくおぼゆれば衣をつみあぐるばかりの心もちにも及ばずいでやとくかへりなんといへるならん葛木久米路橋は續紀一に役君小角流ニ于伊豆島ニ始小角住ニ於葛木山ニ以ニ咒術ニ稱。韓國連廣足師レ焉後害ニ其能ニ讒以ニ妖惑ニ故配ニ遠處ニ世相傳云小角能役ニ使鬼神ニ汲レ水採レ薪若不レ用レ命即以レ咒縛レ之と見えまた靈異記上卷第二十八役優婆塞者加茂役公氏今高加茂朝臣者也云々大倭國金ノ峯與ニ葛木峯ニ度ニ椅ニ而通於レ是神等皆愁云々かの一語主大神者役行者前咒縛至ニ于今ニ不ニ解脱ニ云々とありすべて靈異記に記せる事どもは僧の徒の佛の位の奇

く妙なるよしをいひて世の人に尊信しめむとのしわざなればうるさしかし此役小角が鬼神を駈使して自在なりしなどみなうるさきとのみなればこゝに引べきにもあらねど一言主の神のことにつきていさゝかいふなり釋日本紀十二枚七據に神名帳曰大和國葛上郡葛木坐一言主神社云々　土佐國風土記曰土佐郡郡家西去四里有土佐高加茂大社其神名爲一言主尊など見えたり記傳十一六十ノ枚細注に一言主神と高鴨神とは本より別なり然るに右に引る續紀の葛城山の事と此記書紀に見えたる一言主神の現ル給ひし故事と共に雄略天皇の御世にして處も同じく事のさまも似たる故に一つに混て土佐の高鴨をも一言主と申傳へしなるべし釋日本紀に右の風土記の文をも引て次に暦錄曰雄畧天皇云々文德實錄三代實錄云々とありて細注に同書廿四に肥前國葛木一言主神に從五位下を授られしこと見ゆ云々そも〳〵此風土記の説は高賀茂神と一言主ノ神とを一つに混へたる物にして非なりかの土佐國に遷されましゝは高賀茂神にこそあれ一言主の神にはあらず此天皇の此山に御獵の時に現坐りし事の狀よく似たるに依て混ひつるなりされど一言主神の御事は此記書紀に見えたる如くなれば放逐られ給ふべきよし無ればかの高賀茂神の事は別ごと也されば書紀の釋に此一言主神の處に彼風土記を引るも誤り也と見えたりしかるに此神樂歌古本に阿佐久良也支乃萬呂止乃仁云々裏書云朝倉本両兩歌也末伊ッ己ニカ己フヲツなカム安七比古加佐寸ヤ乎加への太末佐丶の宇倍ニ叉說本安佐久良や乎女のみなとにあ比支せハタマノメヒシにあひきあひにけりカウラキヘワタルクメヂノツ支ハシノコヽロモシラす(イ)七カヘりなんとあれはかの朝倉は抄の御説に天智天皇御製朝倉ヤ云々朝倉の木丸殿は土佐の國に侍るを古來あやまりて筑紫に有といへりと見えたるも考合すべきことならんかと思はるればかくいふなり

其駒

そのこまぞや我にわれにくさこふくさはとりかはん轡とり草はとりかはん

○抄曰草こふは草飼也わが五音通也一云駒が我に草をこふといふ心なり○解には注はなくて古本の眞假字かきを十三字傍にかけり○緯傍注云躰云恒方上拍子ハ韓神ト其駒トニカナツル歌ノ心ヲ舞也其駒ハ本體風俗ナリ而ヲ一條院ノ御時朝倉其駒ハ神樂ノ無下ニ尾モナキヤウナルニトテ神樂歌ニ具スルナリ○今云古本に其駒と題目を擧たる下に或本云葦駿歌本アミ

フチノヤモ利ノ々々々之多ナルワカコマキテユアシフチノ比ラケノコマ末ソノコマノ歌云々とありされば本歌はあしふち葦駮にて其駒は末なるべしされど葦駮は詞くだ〳〵しくしらへものひやかなしぬふりに聞え其駒は詞おだやかにきこゆる歌なれば其駒のみをうたひて芦駮はうたはぬがちなるよしなどやありけんとはしらぬことなれどおしはかりにいふなりさるは古本には本文に其駒のみありて芦駮はたゞ細書は題號の下に加へたるさまにしるせればしか思ふなりさて古本には其駒は一巻の巻尾についてゝ神樂のはてにうたひたるさまなり此事も惣論にいへるがごとくかの體源抄に其駒はもと風俗なりしかるを一條院の御時朝倉其駒は神樂のむげに尾もなきやうなるにとて神樂歌に具するなりとあるがごとくすべて上古よりつたへたる神樂の歌は歌もおだやかにてしらべもあやふしすくなく朴素なるかたなれば代々におもしろく今めかしき舞歌増加せられたるなるべしそのこまぞや、そはてにをはにてやは添ていふ助辭なりそのとは本歌のあしぶちの駒をさすなり轡とりは物はむにさまたげとなればなるべしされど古本にも一說にも水はとあれば水はとり草はとりかはんとある方よろしかるべし此二歌には抄にも古本にも本末を不記

或說

あしふちのやもりの下なるわかこまゐてこあしけふちのとらけのこま

○抄曰あしふちのやはあしけふちの駒といふ心なりわかわざは若草なりゐてこは將來なりもちて來れといふなりとらげのこまは虎毛なりあし毛ふちはまだらなるとらけといふにや○解には注はなし或說とある下にこれを古來には葦駮駒と有とあり○今いふもりのしたなるわかこまは抄の御說の如くなるべけれど若草ゐて來といひてはおだやかならず古本にはわかこまとあれば萬をさとあやまれるにもやあらん解にもわかこまゐてことしるされたりされど緯にも和加古佐とあればいづれよけんあしふちとらけなどみな和名抄に騮阿之布知連錢驄虎毛馬など見えたりかの森の下に在る若駒すなはちあしふちの虎毛馬なるべし躬恒集にあしぶち「おそき馬はあしぶちなくてあふれども心のみこそさきにたちけれ　源順馬名合に左「あさちふの　とら毛右白糸のくり毛「あさちふの　とらげかけたるけしきにはあなよりかたの糸のくり毛や「白糸のくり毛引いてゝ見るからにふすあさちふのとらげなりけり

竈殿歌

本

ことへつひみあそびすらし久かたの天のかはらにことのこゑするひわのこゑするさゝの聲する

○抄曰竈殿はへつひとのなり神供を調する所也とよは豐なり豐みきなどいふがごとしゆたかなる心なりみあそびは御遊かくらをうたひ遊ぶ事なりあまのかはらは昔八百萬の神のあつまり給ひし所なればへつひとのになずらへていへりさゝの聲するは文字の誤あるべし笛の聲するとそあらまほしき○解曰竈殿はへつひとのにて神供を燒所也とよは豐みきなどいふが如しほめていふ也みあそびは神遊をいふ天のかはらは昔八百萬神のつどひ給ひし所なればへつひとのになぞらへていふ歟○緯頭書云一本琵琶の聲須留一句尤登左乃古衞また登左乃古衞須留或云胡笳聲ナリトサコサ聲通ス藻鹽草にコサフカハクモリモヤセムト陸奥ノエゾニナミセソアキノ夜ノ月夷カ海ニ入出テ鹽ヲフクカ霧ノヤウナル也笳吹の字也角笳トモ云○今いふ此歌はここにいと古き歌ときこゆ惣論にもかへす〴〵いひたるがごとし　豐へつひ御遊すらし竈祭の事上古にはおごそかなりけんとおしはからるれどくはしきさまは古書どもにも見えず竈神の事は古事記建速須佐之男命の御子大年神の御子興津比賣神亦名大戸比賣神此者諸人以拜竈神者也とありくはしき事は記傳十二ノ四十枚に見えたり續紀に天平三年正月神祇官奏庭火御竈四時祭祀永爲常例と見え大膳式に御膳神八座高部神一座竈神四座容神四座また臨時祭式にも御竈祭云々中宮御竈祭東宮准之など見えたり久かたの天の川原にこは物の聲の高くとよみて聞ゆるをいふなり琴笛の音の高くすみのぼるをも天つみそらに聞ゆといふがごとし上古のみやび詞にて下石根に宮柱太知立高天原に比疑高知氏云々又天原動而八百萬神共咲とあることもとより天上にての事なりしかばかくいふべき理なれど猶空高くひゞきわたるよりいへる古言にてもあるべし藥師寺佛足石讀歌に御跡付留石乃比鼻伎波天爾伊太利などいへるも思ふべし琴のこゑするはさることなりびわのこゑするいかゞなり續日本後紀十二卷承和九年の童謠に天爾波琵琶乎會打那留云々といふことあれどこれもこと〳〵なりさゝのこゑすることはとに心得がたしびわの方はわの字さ、ことの方はこの字ひにてこもにひさひさなるむかさるは古本に比與戸川比みあそび須良之毛比さかたのあまのかはらにひさのこゑするひさのこゑすることありて琴とも琵琶ともさゝともなければなり、ひさの聲する記傳卅九ノ三十八枚　打膝は阿怜く樂む時の態なり大神宮儀式

帳に六月月次ノ祭の條に同日夜御氣奈保比良云々奈保良比御歌仕奉其歌波佐古久志侶伊須々乃宮仁御氣立止宇都奈留比佐婆宮毛止々侶爾爾歌令ニ仕奉ニ其歌波毛々志貴乃意保夫也人乃多乃志美止宇都奈留比佐婆美也毛止々侶爾　九月ノ祭の時も同歌なりとあり　神樂齋殿遊歌に 本 止與戸川比云々 末 比左可太乃云々 體源抄に儛に膝打手と云ことも見えたり 萬葉十一巻積山ノ歌の左に云々舌前采女風流娘子左手捧觴右手ニ持水撃之王膝而詠此歌とあるは膝に水をうちそゝぐなり俗にも水を打といふこれなり膝を打にはあらず とありまづ此說にしたがふべし今一つ大平が思へるはまづこゝに說しるされたる記傳の說は遠飛鳥宮の御段の大前小前宿禰の家に輕太子の逃入おはしましゝ時その家をかこみせめ給ふ穴穗御子に向ひ奉りて大前小前宿禰が擧手打膝儛訶那傳歌參來とある所の解に考へ解出られたるなりそも〳〵膝を打とは件の宿禰の御しわざと陸奥采女の葛城王の御心をとりたるなりと體源抄に打膝手とあるなれどまづ釆女のは王の膝に水をうちかけたるなり體源抄のも宿禰のとは儛舞ふ時の足ぶみのさまによりて手をかなて膝をうちて曲節をあらしむるわざにてその音なども手を打笏拍子を物するばかりは高く聞ゆましくおしはかるかしはた琴のね草の手はこゑともおとゝもねともいへど手をうち膝をうつおとをこゑともねともいはんことといかゞなり

さねは膝をならさむからに膝の聲すといはんも又いかゞなりひさのこゑとは正しく笏拍子の音をぞいふべきそはひさ〳〵ひしや〳〵ときこゆればなりかくて膝をうつは立儛にはえあらしむるわざ手をうち笏拍子をうつは歌うたふにはえあらしむるわざなるべしうつなるひさはといふもひさのこゑすといふも笏拍子のおとをいふならんと思ふなりされど膝の聲と比佐の聲とよく考へてとる方をとるべし

末

久方の天のかはらにとへつひすらしひわの聲よし琴の聲する

○抄曰とへつひはとよへつひといふと同じ○解の頭書に曰この末の歌今の本は誤多し古本のまゝにしるすとあり○今いふ古本にはひさかたのあまのかはらにとよへつひみあそびすらしもひさのこゑするひさのこゑするとかきたり

酒殿

本

さかとのはひろしまひろしみかこしにわかてなとりそしかつけなくに

○抄曰酒殿はみわつくる所なりまひろしは間廣きなり殿は廣

き事をいへりみかは甕の字也神酒をもるかめなり祝詞にも甕の腹みちならべてと云こしも則腹を云へしわかてなごりそは我手にはなごりそはけがるへき故なりしかつけなくにこれごはつけざる故にご云なり○解曰酒殿は神御酒をかむ所なりまひろしは眞廣にする甕なりみかわしは其甕越に女の手を男のごりてたはくるなりよりてしかせよごはつけはいはぬにご云り且古き或說にしかはせぬわざごもあり○今いふ延喜式造酒司祭神九座（春秋並同）二座酒彌豆男神酒彌豆女神並從五位上四座竈神三座從五位上大邑刀自從五位下に邑刀自次邑刀自年料釀酒數御酒料云々山城國云々大和云々河内云々和泉云々攝津云々並隨時增減就中割二十石一付東殿但山城云々　新嘗會白黑二酒料宮田稻二十束右九月二日省率神祇官云々　春稻仕女四人即祭其地神所須五色薄絁云々　祭訖テ木工寮造酒殿一宇臼殿一宇並三間麴室一宇（草葺）構以二黑木一掃部寮以二苫八枚一葺二殿（別葺四枚）十月上旬擇吉日始釀十日內畢酒部二人供奉料酒一石二斗云々殿釀酒二石一斗云々縣酒四十八石右豐樂日料其給酒者三位已上ニ口二升五位已上ニ一升（並殿釀酒）六位已下并歌儛人等六合（並縣釀酒）件の文中に東酒殿また木工寮造酒殿一宇また殿釀酒などゝ見えたるにて酒殿しるべしまた神名帳に造酒司座神六座（大四座小二座）大宮賣神社四座（並大月次新嘗）酒殿神二座（並小）酒彌豆男神酒彌豆女神三代實錄二（四ノ枚）无位酒殿神從五位下同五（卅枚）造酒司從五位下酒美豆男神酒美豆女神並從五位上また因幡國正六位上酒賀神酒同十三（卅枚）造酒司從五位下次色刀自甕神准大色刀自小色刀自甕神等預春秋二季祭文德實錄八（十二ノ枚）造酒司酒甕神從五位下大邑刀自小邑刀自等並預春秋祭延曆大神宮儀式帳御酒殿一院酒殿一間務所廳一間倉二宇盛殿一間大炊屋一間などゝ見えてめぐりに四十四丈の防籬をしめぐらしておごそかなりし古の狀思ひはかるべし又職掌雜任の條には酒造物忌無位山向部刀自女父無位山田部虫麻呂請酒作物忌磯部大河女父無位磯部稻守云々碓舂白御酒備供奉云々ご見えたり台記の康治元年の大嘗會別記に載られたる中臣壽詞に酒（サカ）造兒酒波云々ご見えたりみかこし和名抄瓦器類に甂（和名美加）天甕（和名同上）祝詞に甕上高知甕腹滿雙古本に五ノ句之加川。世那し爾（或云）世奴和左ごあり

末

さかごのはけさはなはきそむれりめのもひきすそ引けさははきてき

○抄曰けさはなはきそは掃除すべからずご云なりむれゐ女はうれり女ごもいへり五音通ぜり加茂のみごしろにかたらひに

裳きたる女の色こりたるみかはたもつものをなりめこ云それをうれりめこもいふにや神田つくるものゝ食物をもつをみかはたこは云なりむれりめは群女こ云心なるべし○解曰けさはなはきそは卽女ごものはきつれはこ云なり其女のたちふるまふさまを裳ひき裾ひきこはいへりさて今本にむれりめこあるは聞えず古本に宗宇云々こあれごそれも聞えず宗は誤にて宇爾利女歟字も猶誤にて一本に依て止爾利女こすべし其殿にこのいする女ごもをこねり女こ云べし且刀爾こいふもこねりの畧なる歟六御縣祭の祝詞にも六御縣能刀爾里女爾里萬云々こいへり○今いふむれり女は群居女なるべし古本に宗宇爾利女乃こあるを解にもかくいはれたれご猶さだかならず舍人女よろしけれご例も見あたらぬこごなればさだめがたし儀式の大嘗祭の條に造酒童女あれごもさかつこのよめなご訓むか猶よく考べし裳引裾引は聞えたるが如し萬葉十二枚七ノいかならむ日の時にかもわきも子が裳引のすがたあさにけにみむ同九枚八黑牛潟鹽干の浦を紅の玉裳裾ひきゆくはたが妻今世の俗語にも水などのこぼれたる所霜のこけたる所雨後の庭中などのぬれたる所にて服物の裾のぬれけがれたるをすそはきつこいふ語ありそは箒して掃くさまなればすそはくこいふなり此歌に合すべし雜藝のうたひ物に宇波良古支伊與湯遠江相坂安乃由久古名利女こいふ歌あり古名利女は「こなりめは來にけるものを鳥てふ黑鳥やつのヤレソヨヤナヤいまだこすてつや

或說

あまの原ふりさけ見ればやへ雲の雲の中なる雲のなかこの
なかこみの天の小菅をさきはらひいのりしこごはけふの日
のあなこなやわかすゑの神のかみろきのよさこ

○抄曰あまの原は天なりふりさけ見れはゝふり仰ぎて見るなり雲の中なるは中臣こいはんこてまうけの詞なり中臣こは中臣氏なり天のこやねのみここを申なりあまのこすけは小菅なりさきはらひはさきはらふこ云なり菅にてはらふは菅貫もて祓する事なりあなこなはなこむるこ云心なりなこむるはやはらくるなりなこしの祓こ云心なりわかすへの神は末孫の神なりかみろぎこは神呂伎こ云神の父を申なり神ろみこは神の母なり中臣の祓詞にある事なりよさごこはよき事なるべし神の孫子たる人のなこむるはらへをする事をいふなり○解曰あまの原は天原なりふりさけみれはゝふり放て遠くみるなり雲のなかなるは中臣こいはん序のみ中臣こは中臣氏天のこやねのみここを申なり菅にてはらふは古へ有しわざこ見えて大祓の

詞にも天つ菅曾を云々といへり中比より此事絶たるなるべしあなこやなはけふは日かげもよくあなこやといふ心なるべしよさことはよき子なるべし神の採たる人のなこむる祓をする事をいふなり同頭書に此も今の本は誤多しよりて古本のまゝにしるす萬葉に造酒歌とて中臣のふとのりとこといひはらひあかふ命もかためになれ○緯曰天乃原振放見禮波見禮波八重雲乃久毛乃中奈留雲乃奈加止乃中臣乃天乃小菅乎左支波良比祈里志古止波今日乃日濃多女安那古奈也和賀皇神乃神魯岐乃與左古、頭書に萬葉中臣のふと祝詞言いひはらへ云々○今いふ此歌古本にはもれたり抄の歌も聞えぬ詞多ければ御說も心得がたき事多し解にもよき事もあり又末つがたはわきまへがたくもあり餘の本にてはやう心得らるゝ事多しされど安奈古那也と與左古とはいかなることゝもときかたし安奈加斯古也安奈多佑止かなるべし與左古は與左也か與古止なるべし

　にはとりはかけろとなきぬなりおきよおきよわがかとによ わかひとよまつ解

　のつま人もこそ見れ

○抄曰かけろは庭鳥のなく聲かけろと聞ゆるなりおきよおきよは夜もあけたれば起よと云なりよのつまは夜の妻なり家門に見る人もこそあれよをこめてかへれと云なり○解曰かけろは庭鳥のなくはかけろと聞ゆよりてくたかけとも云り夜もあけたればおきよと云なり緯曰仁波鳥波加介呂止鳴奴奈利於支與起與和加止夜妻人毛古曾見禮加止夜妻今按加與日（カヨヒ）草書互に書誤レル事多シ然レバ一夜妻ナルベシ萬葉十六吾門爾千鳥數鳴起尓起尓我ニ一夜妻人爾所知名此歌ナヨミカヘテ一夜妻ヲカト夜ト書誤レルナルベシ又幾日トイヘルニ日ヲカトモヨメバ日止夜妻ナトカケルヲヨミ誤レルニテモアリナン○今いふ此歌も古本にはなし萬葉の千鳥しはなくと元はひとつなるをかくもつたはれるなるべし又同じこゝろばへのかよひたるにてもあるべしかとよつまは忍びてかよひくる男にていつも門に立よれば門夜妻といへることもあるべきなり一夜妻といふもたまたまならでは來らざるよりいふなるべけれど猶いはゞ理り明らかなることにもあらず此歌もさいはらなどに入べき歌なり後に神樂になりたるにてもあるべし

二種の書を合せ彫らしむる故よし

三十六人の撰歌は四條大納言公任卿のこの人々こそはとその世にかきつめ給へりしがおのづからさる數となりたるにこそあれことさらにもこめられたるにはあらざめるを繼て刑部卿範兼朝臣後の六歌撰とて同じ數に書つめられしよりまた新撰續三十六歌仙とて正元二年のはし書せしふみをはじめてまたおなじさまなるはふみせし撰もあり中古のそれといひ女房たちのとよひその續とゝなへなどしてえらび出せる人もさだかならぬがくさ／＼出來たり釋門の人々のとてあるは貞和三年のはしがき見えて勸修寺の榮海僧正のしわざなりとか近き世には烏丸光廣卿の職人歌仙といふもありくさぐさの貝の名をよめるをさへ同じ數にあつめたるもありかけまくもかしこき

後のみのをの上皇の宸筆にあそばしゝ集外歌仙といふもあれば今の世にてはつひにひとつのさだまれるあとの如なり來にけるはさかづきうかぶる江の水のためしなるべしその流をくみて我家の父翁も多藝津瀨のはやくの年近き世の人々のうたひとつづゝえり出て長江の蘆のかりそめのみかき殘しおかれつるを國々の教子のいかで見てしかなといへとはつかなる物ながらいく卷も寫し出むが煩らはしさにもたありけるを高階の三子かはからひてふみ商人春霞堂にあたへて彫板にものすることゝはなりぬこれのみもいさゝかの物にてはえなからむに已未紀行は松坂の里より此若山にものせられつる道すがらの歌どもにいさゝかはし書をくはへたるのみにて後にくはしくかきあらためむとさしおかれしがつひに忘艸やしげりつらむそがまゝに書篋の片隅にとゞまれりしを見出て汐干の潟のかたなりなる物ながらはふらさむもしかすがになき父のなごりとゞまれるをとしのばしきまに／＼たぐひならぬ物なりながら末にふりそへてなむとも／＼父のあらはされし書どもはなほむね／＼しき物も多かるをさしおきてと人思ふらめど書やはことすくなゝらむものよりともとむ

るによりてなり國々の敎子たちわがおこたりこなあやしひそ

嘉永こいふ歳の名の三こせこいふ秋

本居内遠

近世三十六人撰

みよし野の山分衣櫻色に心の奥もふかく滿てき

豐臣勝俊

白雲にまかはゝまかへ山櫻心はおなし色にそめなむ

柳澤隆季

みよし野の花にめなれし山人は外の櫻をさくらとは見し

尾關正林

四方やまにあくかれ出へき此頃の心おちゐる家櫻かな

下河邊長流

なのめなることたにそはぬ櫻花たゝちるのみのあかすも有かな

契沖法師

山櫻人にくからぬ花なれはまたもあた名の風にたつらむ

田邊通直妻

山はとく出もやせしと郭公里をあまたにけふは尋ねむ

荷田東麿

初瀬路や初音きかむと尋ねてもまたこもりくの山郭公

柳瀨方塾

賀茂眞淵

橘の島の都のあとゝめてなくは昔のほとゝきすかも

民子

ほとゝきす此夕くれのむら雨にまち得てきかは物は思はし

橘枝直

里わきしうらみはあれと時鳥聞つと語る人もなつかし

荷田在滿

つくはねの峯になれてしいの女かこのもかのもに早苗とるなり

平春郷

にほ鳥のかつしかわさ田露ちりて穗の上に秋の初風そふく

猶諸成

いつも見る光よりけにさやの山さやけくも有か秋の夜の月

藤原兩雄

ちはやふる神の垣つ田色つきてたり穗を今そ雁鳴渡る

藤原美樹

武士の草むすかはね年ふりて秋風寒し桔梗かはら

多氣綾足

谷川にかつちる色そ見えにける峯の紅葉をいさや尋ねん

倭文子

やまさとの黄葉の色を見ぬ人は秋に心やそます有けむ

源長昌

駒なへて紅葉見に行かた山の日かけのとけき神無月かも
伊久米子
白雪は濱の上にもつもりけり清名の橋の松のむら立
きよい子
み雪ふる清名の橋に立とまり眞袖はらふは都人かも
大伴俊明
東路を旅ゆく人のあはと見むあはゝか嶽に雪降にけり
橘千蔭
晴くもる雲の絶間を見渡せは箱根の御坂雪降にけり
平春海
あしからやあしの海面氷る日そ神の御坂にゆきはふりける
楫取魚彦
驛路のはゆま馬や早馬のはやくそ人をおもひ初ける
荒木田久老
から國にありてふ鳥もわきもこか言しまねはゝまきてなつけん
富士谷成章
まくすはふ小野のしの原しのふにもあまるや中の恨なるらん
小澤蘆菴
下にのみくゆるおもひのくるしさを何につけてか人にみせまし
伴蒿蹊

夢の間もいかてこてふに身をなして思ふあたりの花に馴なん
上田秋成
玉たれのをすにかけたる蟬かれ／＼にして秋にあふかな
小津正啓
國津風ここふくえその千鳥まて惠になひく草はをそ見る
平宣長
あふき見てから國人も天てらす神の御かけはしるらむ物を
須賀直見
清濁る世々の心を水莖にうつしとめける跡そかしこき
藤原棟隆
世の人の心をたねのことのはゝ月に日にけにいや榮えゆく
田中道麿
たかへこし世のひかことをいせ人そ直くたゝしくときさとしける
平千秋
うつせみのよの人皆は人なれとまことをしれる人そまれなる

文政八年正月十七日
本居大平撰

山常百首序

あなたぬしのこれの大御代やいにしへの日知の御代にかへらひ國内こと〱鞆の音なひ弓弭のさわきもたえはてゝいや平らけくいやすらけくみさかりにさかゆくまに〱よろつのこともいにしへをまねひ内日刺宮こはさらにもいはす天離ひなの末野にすむ人らも石上ふるき代の大御手ふりをとめてうたふことにはなりにたりかれ紫の名高の浦の名にたかき藤垣内の老翁を古言のまなひの親と大船のおもひたのみて宮こゆひなゆはろ〱にこの木のくにゝまゐきたりかきかそふ五日あるは十日はかり旅居して古こと學ひの書とも日つからときさとしたまはむことをこいふ人なもおほかりけるかゝるをりものせむには萬葉集は巻の數も歌のかすも夏草のいとしけくて苅はらふ焼鎌のとくはよみきかせかたけれはと思ひはかりて心もとはもよくとゝのひて暑き夜のをくらきこころなく春のこゝりのとけかたきふしもましらす夏野行男鹿の角の短歌のみならす海士のたくなはうちはへ長きをもえりあつめて其百歌をかく一巻になもしるしおか

れけるをこのころかりえておのれまつうまらによみこゝろむるにまことに古人の眞心を種としてやまとたましひのまことをあらはしたる言の葉ともにて味凍のあやにめてたくおほえてよろこほひ思ふまにまやかてうつしとりてかくなも板にゑらしめける時は文政三年庚辰八月の晦かくいふはおやし木國人安田長穗

萬葉山常百首

一ノ七 高市崗本宮御宇天皇登香具山望國時大御歌

山常庭。村山有等。取與呂布。天乃香具山。騰立。國見乎爲者。國原波。煙立籠。海原波。加萬目立多都。阿怜國曾。蜻島。八間跡能國者。

一ノ十二 近江大津宮御宇天皇大御歌

渡津海乃。豐旗雲爾。伊理比沙之。今夜乃月夜。清明己曽。

一ノ十六 明日香清御原宮御宇天皇幸于吉野宮時大御歌

淑人乃。良跡吉見而。好常言師。芳野吉見與。良人四來三。

同 藤原宮御宇天皇大御歌

春過而。夏來良之。白妙能。衣乾有。天之香來山。

一ノ十八 平城宮初御宇天皇越勢能山時大御歌

此也是能。倭爾四手者。我戀流。木路爾有云。名二負勢能山。

一ノ十六 過近江荒都時柿本朝臣人麿作歌

玉手次。畝火之山乃。橿原乃。日知之御世從。阿禮座師。神之盡。樛木乃。彌繼嗣爾。天下。所知食來。虚見。倭乎置。青丹吉。平山越而。何方。御念食可。天離。夷者雖有。石走。淡海國乃。樂浪乃。大津宮爾。天下。所知食兼。天皇之。神之御言能。大宮者。此間等雖聞。大殿者。此間等雖云。春草之。茂生有。霞立。春日之霧流。百磯城之。大宮處。見者悲毛。

反歌

樂浪之。思賀乃辛崎。雖幸有。大宮人之。船麻知兼津

一ノ十七 高市連黒人感傷近江舊堵作歌

古。人爾和禮有哉。樂浪乃。故京乎。見者悲寸。

樂浪乃。國都美神乃。浦佐備而。荒有京。見者悲毛。

一ノ十八 幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之。吾大王之。所聞食。天下爾。國者思毛。澤二雖有。山川之。清河內跡。御心乎。吉野乃國之。花散相。秋津乃野邊爾。宮柱。太敷座波。百磯城乃。大宮人者、船並氐。旦川渡。舟競。夕河渡。此川乃。絶事奈久。此山乃。彌高良之。珠水激。瀧之宮子波。見禮跡不飽可聞。

反歌

雖見飽奴。吉野乃河之。常滑乃。絶事無久。復還見牟。

一ノ十九

安見知之。吾大王。神長柄。神佐備世須登。芳野川。多藝津河内爾。高殿乎。高知座而。上立。國見乎爲波。疊有。青垣山。山神乃。奉御調等。春部者。花挿頭持。秋立者。黄葉頭刺理。遊副川之。川之神母。大御食爾。仕奉等。上瀬爾。鵜川乎立。下瀬爾。小網刺渡。山川母。依氐奉流。神乃御代鴨。

反歌

山川毛。因而奉流。神長柄。多藝津河内爾。船出爲加母。

二ノ十二 明日香清御原宮御宇天皇賜藤原夫人大御歌

吾里爾。大雪落有。大原乃。古爾之鄕爾。落卷者後。

同上 藤原夫人奉和歌

吾岡之。於可美爾言而。令落。雪之摧之。彼所爾塵家武。

二ノ廿七 日並知皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

天地之。初時之。久堅之。天河原爾。八百萬。千萬神之。神集。集座而。神分。分之時爾。天照。日女之命。天乎波。所知食登。葦原乃。水穂之國乎。天地之。依相之極。所知行。神之命等。天雲之。八重搔別而。神下。座奉之。高照。日之皇子波。飛鳥之。淨之宮爾。神隨。太布座而。天皇之。敷座國等。天原。石門乎開。神上。上座奴。吾王。皇子之命乃。天下。所知食世者。春花之。貴在等。望月乃。滿波之計武跡。天下。四方之人乃。大船之。思憑而。天水。仰而待爾。何方爾。御念食可。由縁母無。眞弓乃岡爾。宮柱。太布座而。御在香乎。高知座而。明言爾。御言不御問。日月之。數多成塗。其故。皇子之宮人。行方不知毛。

反歌二首

久堅乃。天見如久。仰見之。皇子乃御門之。荒卷惜毛。

茜刺。日者雖照有。烏玉之。夜渡月之。隱良久惜毛。

三ノ十二 天皇御遊雷丘之時柿本朝臣人麻呂作歌

皇者。神二四座者。天雲之。雷之上爾。廬爲流鴨。

三ノ十三 長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麻呂作歌

八隅知之。吾大王。高光。吾日乃皇子乃。馬並而。三獵立流。弱薦乎。獵路乃小野爾。十六社者。伊波比拜目。鶉己曾。伊波比回禮。四時自物。伊波比拜。鶉成。伊波比毛等保理。恐等。仕奉而。久堅乃。天見如久。眞十鏡。仰而雖見。春草之。益目頰四寸。吾於富吉美可聞。

同上

久堅乃。天歸月乎。綱爾刺。我大王者。蓋爾爲有。

三ノ廿七 山部宿禰赤人望不盡山作歌

天地之。分時從。神左備手。高貴寸。駿河有。布士能高

嶺乎。天原。振放見者。度日之。陰毛隱比。照月乃。光毛不見。白雲母。伊去波伐加利。時自久曾。雪者落家留。語告。言繼將往。不盡能高嶺者。

反歌

田兒之浦從。打出而見者。眞白衣。不盡能高嶺爾。雪波零家留。

十四 詠不盡山歌

奈麻余美乃。甲斐乃國。打緣流。駿河能國與。己知其智乃。國之三中從。出立有。不盡能高嶺者。天雲毛。伊去波伐加利。飛鳥母。翔毛不上。燎火乎。雪以滅。落雪乎。火用消通都。言不得。名不知。靈母。座神香聞。石花海跡。名付而有毛。彼山之。堤有海曾。不盡河跡。人乃渡毛。其山之。水乃當曾。日本之。山跡國乃。鎭十方。座神可聞。寳十方。成有山可聞。駿河有。不盡能高峯者。雖見不飽香聞。

反歌

不盡嶺爾。零置雪者。六月。十五日消者。其夜布里家利。

布士能嶺乎。高見恐見。天雲毛。伊去羽計。田菜引物緒。

右一首高橋連蟲麻呂之集中出焉

十三ノ八 雜歌

天橋文。長雲鴨。高山文。高雲鴨。月夜見乃。持有越水。伊取來而。公奉而。越得之牟物。

反歌

天有哉。月日如。吾思有。公之日異。老落惜毛。

右二首

沼名河之。底奈流玉。求而。得之玉可毛。拾而。得之玉可毛。安多良思吉。君之。老落惜毛。

右一首

十三ノ九 相聞

蜻嶋。倭之國者。神柄跡。言擧不爲國。雖然。吾者事上爲。天地之。神毛甚。吾念。心不知哉。往影乃。月文經往者。玉限。日文累。念戶鴨。胸不安。戀列鴨。心痛。末遂爾。君丹不會者。吾命乃。生極。戀乍文。吾者將度。犬馬鏡。正目君乎。相見天者社。吾戀八鬼目。

反歌

大舟能。思憑。君故爾。盡心者。惜雲梨。

十三ノ十 柿本朝臣人麻呂歌集歌曰

葦原。水穗國者。神在隨。事擧不爲國。雖然。辭擧叙吾爲。言幸。眞福座跡。恙無。福座者。荒礒浪。有毛見登。百重浪。千重浪敷爾。言上爲吾。

反歌

志貴島。倭國者。事靈之。所佐國叙。眞福在乞曾。

十三ノ卅三
木國之。濱因云。鰒珠。將拾跡云而。妹乃山。勢能山越而。行之君。何時來座跡。玉桙之。道爾出立。夕卜乎。吾問之可婆。夕卜之。吾爾告良久。吾妹兒哉。汝待君者。奧浪。來因白珠。邊浪之。緣流白珠。求跡曾。君之不來益。拾登曾。公者不來益。久有。今七日許。早有者。今二日許。將有等曾。君者聞之二二。勿戀吾妹。

反歌

杖衝毛。不衝毛吾者。行目友。公之將來。道之不知苦。

直不往。此從巨勢道柄。石瀨踏。求曾吾來。戀而爲便奈見。

六ノ十二
神龜元年甲子冬十月五日　幸于紀伊國時山部宿禰赤人作歌

安見知之。和期大王之。常宮等。仕奉流。左日鹿野由。背上爾所見。奧島。淸波瀲爾。風吹者。白浪左和伎。潮干者。玉藻苅管。神代從。然曾尊吉。玉津島夜麻。

反歌

奧島。荒礒之玉藻。潮干滿。伊隱去者。所念武香聞。

若浦爾。鹽滿來者。潟乎無美。葦邊乎指天。多頭鳴渡。

五ノ十二
山上臣憶良詠鎭懷石歌

筑前國怡土郡深江村子負原臨海丘上有二石大者長一尺二寸六分圍一尺八寸六分重十八斤五兩小者長一尺一寸圍一尺八寸重十六斤十兩並皆楕圓狀如雞子其美好者不可勝論所謂徑尺璧是也 或云此二石者肥前國彼杵郡平敷之石當占而取之 去深江驛家二十許里近在路頭公私往來莫不下馬跪拜古老相傳曰往者息長足日女命征討新羅國之時用茲兩石插著御袖之中以爲鎭懷 實是御裳中矣 所以行人敬拜此石乃作歌曰

可既麻久波。阿夜爾可斯故斯。多良志比咩。可尾能彌許等。可良久爾遠。武氣多比良宜弖。彌許々呂遠。斯豆迷多麻布等。伊刀良斯弖。伊波比多麻比斯。麻多麻奈須。布多都能伊斯乎。世人爾。斯咩斯多麻比弖。余呂豆余爾。伊比都具可禰等。和多能曾許。意枳都布可延乃。宇奈可美乃。故布乃波良爾。美弖豆可良。意可志多麻比弖。可武奈何良。可武佐備伊麻須。久志美多麻。伊麻能遠都豆爾。多布刀伎呂可儛。阿米都知能。等母爾比佐斯久。伊比都夏等。許能久斯美多麻。意可志家良斯母。

右事傳云那珂郡伊知郷蓑島人建部牛麻呂是也

六ノ廿四 藤原ノ宇合卿。遣二西海道節度使一之時高橋連蟲麻呂作歌

白雲乃。龍田山乃。露霜爾。色附時丹。打超而。客行公者。五百隔山。伊去割見。賊守。筑紫爾至。山乃曾伎。野之衣寸見世常。伴部乎。班遣之。山彥乃。將應極。谷潛乃。狹渡極。國方乎。見之賜而。冬木成。春去行者。飛鳥乃。早御來。龍田道之。岳邊乃路爾。丹管土乃。將薰時能。櫻花。將開時爾。山多頭能。迎參出六。公之來益者。

反歌

千萬乃。軍奈利友。言擧不爲。取而可來。男常曾念

六ノ廿五 天皇賜二酒節度使卿等一大御歌

食國。遠乃御朝庭爾。汝等之。如是退去者。平久。吾者將遊。手抱而。我者將御在。天皇朕。宇頭乃御手以。搔撫曾。禰宜賜。打撫曾。禰宜賜。將還來日。相飮酒曾。此豐御酒者。

反歌一首

大夫之。去跡云道曾。凡可爾。念而行勿。大夫之伴。

右御歌者或云太上天皇御製也

六ノ廿六 中納言安倍廣庭卿ノ歌

如是爲管。在久乎好叙。靈剋。短命乎。長欲爲流。

五ノ三十 山上臣憶良好去好來歌

神代欲理。云傳介良久。虛見通。倭國者。皇神能。伊都久志吉國。言靈能。佐吉播布國等。加多利繼。伊比都賀比計理。今世能。人母許等期等。目前爾。見在知在。人佐播爾。滿弖播阿禮等母。高光。日御朝庭。神奈我良。愛能盛爾。天下。奏多麻比志。家子等。撰多麻比天。勅旨 反云大命 載持弖。唐能。遠境爾。都加播佐禮。麻加利伊麻勢。宇奈原能。邊爾母奧爾母。神豆麻利。宇志播吉伊麻須。諸能。大御神等。船舳爾 反云布奈能閉爾 道引麻遠志。天地能。大御神等。倭。大國靈。久堅能。阿麻能見虛喩。阿麻賀氣利。見渡多麻比。事了。還日者。又更。大御神等。船舳爾。御手打掛弖。墨繩袁。播倍多留期等久。阿庭可遠志。智可能岫欲利。大伴。御津濱備爾。多太泊爾。美船播將泊。都都美無久。佐伎久伊麻志弖。速歸坐勢。

反歌

大伴。御津松原。可吉掃弖。和禮立待。速歸坐勢。

難波津爾。美船泊農等。吉許延許婆。紐解佐氣弖。多知婆志利勢武。

天平五年三月一日良宅對面獻三三首一山上憶良　謹上ル

大唐大使記室一

五ノ卅七 老身重病經年辛苦及思兒等歌

靈剋。内限者。平氣久。安久母阿良牟遠。事母無。喪無母阿良牟遠。世間能。宇計久都良計久。伊等能伎提。痛伎瘡爾波。鹹鹽遠。灌知布何其等久。益益母。重馬荷爾。表荷打等。伊布許等能其等。老爾弖阿留。我身上爾。病遠良。加弖阿禮婆。晝波母。歎加比久良志。夜波母。息豆伎阿可志。年長久。夜美志渡禮婆。月累。憂吟比。許等許等波。斯奈奈等思騰。五月蠅奈周。佐和久兒等遠。宇都弖弖波。死波不知。見乍阿禮婆。心波母延農。可爾可久爾。思和豆良比。禰能尾志奈可由。

反歌

奈具佐牟留。心波奈之爾。雲隱。鳴往鳥乃。禰能尾志奈可由。

周弊母奈久。苦志久阿禮婆。出波之利。伊奈々等思騰。許良爾佐夜利奴。

富人能。家能子等能。伎留身奈美。久多志須都良牟。絁綿良波母。

麁妙能。布衣遠陀爾。伎世難爾。可久夜歎敢。世牟周弊遠奈美。

水沫奈須。微命母。栲繩能。千尋爾母何等。慕久良志都。

倭文手纒。數母不在。身爾波在等。千年爾母何等。意母保由留加母。

天平五年六月丙申朔三日戊戌同作之

六ノ廿六 山上臣憶良沈痾之時歌

士也母。空應有。萬代爾。語續可。名者不立之而。

右一首山上憶良臣沈痾之時藤原朝臣八束使河邊朝臣東人令問所疾之狀。於是憶良臣報語已畢有須拭涕悲嘆口吟此歌

六ノ廿八 紀朝臣鹿人跡見茂岡之松樹歌

茂岡爾。神佐備立而。榮有。千代松樹乃。歲之不知久

六ノ廿九 海犬養宿禰岡麻呂應詔歌

御民吾。生有驗在。天地之。榮時爾。相樂念者。

六ノ四十三 讃久邇新京歌

明津神。吾皇之。天下。八島之中爾。國者霜。多雖有。里者霜。澤爾雖有。山並之。宜國跡。川次之。立合郷跡。山代乃。鹿脊山際爾。宮柱。太敷奉。高知爲。布當乃宮者。河近見。湍音叙清。山近見。鳥賀鳴慟。秋去者。山裳動響爾。左男鹿者。妻呼令響。春去者。岡邊裳繁爾。巖者。花開乎呼理。痛𪫧怜。布當乃原。甚貴。大宮處。諸己曾。吾大王者。君之隨。所聞賜而。刺竹乃。大宮此跡。定異等霜。

反歌

三日原。布當乃野邊。清見社。大宮處。定異等霜。
山高來。川乃湍清石。百世左右。神之味將往。大宮所。

右田邊福麻呂之歌集中出也

十七 天平十八年正月白雪多零積地數寸也於時左大臣橘卿率中納言藤原豐成朝臣及諸王諸臣等參入太上天皇御在所中宮西院供奉掃雪於是降詔大臣參議并諸王者令侍于大殿上諸卿大夫等者令侍于南細殿而則賜酒肆宴勅曰汝諸王卿等聊賦此雪各奏其謌

左大臣橘宿禰應　詔歌

布流由吉乃。之路髮麻泥爾。大皇爾。都可倍麻都禮婆。貴久母安流香。

紀朝臣清人應　詔歌

天下。須泥爾於保比底。布流雪乃。比加里乎見禮婆。多敷刀久母安流香。

紀朝臣男梶應　詔歌

山乃可比。曾許登母見延受。乎登都日毛。昨日毛。今日毛。由吉能布禮禮婆。

葛井連諸會應　詔歌

新年乃婆自米爾。豐乃登之。思流須登奈良思。雪能敷禮流波。

大伴宿禰家持應　詔歌

大宮之。宇知爾毛刀爾毛。比賀流麻泥。零流白雪。見禮杼安可奴香聞。

藤原豐成朝臣　巨勢奈底麻呂朝臣
大伴牛養宿禰　藤原仲麻呂朝臣
三原王　智努王
舟王　邑智王
山田王　林王
穗積朝臣老　小治田朝臣諸人
小野朝臣綱手　高橋朝臣國足
太朝臣德太理　高丘連河內
秦忌寸朝元　楢原造東人

右件王卿等應　詔作歌依次奏之登時不記其歌漏失但秦忌寸朝元者左大臣橘卿謔曰靡堪賦歌以麝贖之因此默止也

十八 賀陸奧國出金　詔書歌

葦原能。美豆保國乎。安麻久太利。之良志賣之家流。須賣呂伎能。神乃美許等能。御代可佐禰。天乃日嗣等。之良志久流。伎美能御代御代　之伎麻世流。四方國爾波。山河乎。比呂美

安都美等。多豆麻都流。御調寶波。可蘇倍衣受。都久之毛可禰都。之加禮騰母。吾大王能。毛呂比登乎。伊射奈比多麻比。善事乎。波自米多麻比弖。久我禰可毛。多能之氣久安良牟。登於母保之弖。之多奈夜麻須爾。鷄鳴。東國能。美知能久乃。小田在山爾。金有等。麻乎之多麻敝禮。御心乎。安吉良米多麻比。天地乃。神安比宇豆奈比。皇御祖乃。御靈多須氣弖。遠代爾。奈可里之許登乎。朕御代爾。安良波之弖安禮婆。御食國波。左可延牟物能等。可牟奈我良。於毛保之賣之弖。毛能乃布能。八十伴雄乎。麻都呂倍乃。牟氣乃麻爾麻爾。老人毛。女童兒毛。之我願。心太良比爾。撫賜。治賜婆。許己乎之母。安夜爾多敷刀美。宇禮之家久。伊余與於母比弖。大伴能。遠都神祖乃。其名乎婆。大來目主登。於比母知弖。都加倍之官。海行者。美都久屍。山行者。草牟須屍。大皇乃。敝爾許曾死米。可弊里見波。勢自等許等太弖。大夫乃。伎欲吉彼名乎。伊爾之敝欲。伊麻乃乎追通爾。奈我佐敝流。於夜能子等毛曾。大伴等。佐伯氏者。人祖乃。立流辭立。人子者。祖名不絕。大君爾。麻都呂布物能等。伊比都雅流。許等能都可佐曾。梓弓。手爾等里母知弖。劔大刀。許之爾等里波伎。安佐麻毛利。由布能麻毛利爾。大王能。三門乃麻毛利。和禮乎於吉弖。且比等波安良自。等伊夜多弖。於毛比之麻左流。大皇乃。御言能左吉乎。聞者貴美、

反歌

大夫能。許己呂於毛保由。於保伎美能。美許登能佐吉乎。聞者多布刀美。

大伴能。等保追可牟於夜能。於久都奇波。之流久之米多底。比等能之流倍久。

須賣呂伎能。御代佐可延牟等。阿頭麻奈流。美知能久夜麻爾。金花佐久。

天平感寶元年五月十二日於越中國守館大伴宿禰家持作之

十八ノ加 天平感寶元年閏五月六日以來起小旱百姓田畝稍有凋色也至于六月朔日忽見雨雲之氣仍作雲歌

須賣呂伎能。之伎麻須久爾能。安米能之多。四方能美知爾波。宇麻乃都米。伊都久須伎波美。布奈乃倍能。伊波都流麻泥爾。伊爾之敝欲。伊麻乃乎都頭爾。萬調。麻都流都可佐等。都久里多流。曾能奈里波比乎。安米布良受。日能可左奈禮波。宇惠之田毛。麻吉之波多氣毛。安佐其登爾。之保美可禮由苦。曾乎見禮婆。許己呂乎伊多美。彌騰里兒能。知許布我其登久。安麻都美豆。安布藝弖曾麻都。安之比奇能。夜麻能多乎理爾。

許能見由流。安麻能之良久毋。和多都美能。於枳都美夜敝爾。
多知和多里。等能具毛利安比弖。安米母多麻波禰。

反歌

許能美由流。久毛保妣許里弖。等能具毛理。安米毛布良奴可。
許己呂太良比爾。

右二首六月一日晩頭守大伴宿禰家持作之

十八ノ卅三 賀雨落歌

和我保里之。安米波布里伎奴。可久之安良波。許登安氣世受
杼毋。登思波佐可延牟。

右一首同月四日大伴宿禰家持作之

十九ノ十四 慕振勇士之名歌

知智乃實乃。父能美許等。波播蘇葉乃。母能美己等。於保呂
可爾。情盡而。念良牟。其子奈禮夜母。大夫夜。無奈之久
可在。梓弓。須惠布理於許之。投矢毛知。千尋射和多之。劍
刀。許思爾等理波伎。安之比奇能。八峯布美越。左之麻久流。
情不障。後代乃。可多利都具倍久。名乎多都倍志毋。

反歌

大夫者。名乎之立倍之。後代爾。聞繼人毛。可多里都具我禰。

右二首追和山上憶良臣作歌同作之

十九ノ卅六 天平五年贈入唐使歌 作主未詳

虚見都。山跡乃國。青丹與之。平城京師由。忍照。難波爾久
太里。住吉乃。三津爾船能利。直渡。日入國爾。所遣。和我
勢能君乎。懸麻久乃。由由志恐伎。墨吉乃。吾大御神。船乃
倍爾。宇之波伎座。船騰毛爾。御立座而。佐之與良牟。磯乃
崎。許藝波底牟。泊々爾。荒風。浪爾安波世受。平久。率而
可敝理麻世。毛等能國家爾。

反歌

奧浪。邊浪莫起。君之船。許藝可敝里來而。津爾泊麻泥。

右件歌者傳誦之人越中大目高安倉人種麻呂是也但年月次者
隨聞之時載於此焉

十九ノ四十 壬申之亂平定以後歌

皇者。神爾之座者。赤駒之。腹婆布田爲乎。京師跡奈之都。

右一首。大將軍贈右大臣大伴卿作。

大王者。神爾之座者。水鳥乃。須太久水奴麻乎。皇都常成都。

作者不詳

右件二首天平勝寶四年二月二日聞之即載於茲也

十九ノ四十一 閏三月於衛門督大伴古慈悲宿禰家餞入唐副使同胡麻呂
宿禰等歌

韓國爾。由伎多良波之氏。可敝里許牟。麻須良多家乎爾。美
伎多氏麻都流。
右一首多治比眞人鷹主壽二副使大伴胡麻呂宿禰一也
梳毛見自。屋中毛波可自。久左麻久良。多婢由久伎美乎。伊
波布等毛比氏。
右件歌傳誦大伴宿禰村上同清繼等是也
十九ノ四十 勅從四位上高麗朝臣福信遣二於難波一賜二酒肴入唐使藤原朝
臣清河等一御歌
虚見都。山跡乃國波。水上波。地往如久。船上波。床座
如。大神乃。鎭在國曾。四舶。舶能倍奈良倍。平安。早渡
來而。還事。奏日爾。相飲酒曾。斯豐御酒者。
反歌
四舶。早還來等。白香著。朕裳裾爾。鎭而將待。
右發遣勅使并賜酒樂宴之日月未得詳審也
十九ノ四十 十一月二十五日新嘗會肆宴應レ詔歌
天地與。相左可延牟等。大宮乎。都可倍麻都禮婆。貴久宇禮
之伎。
右一首大納言巨勢朝臣
天爾波毋。五百都綱波布。萬代爾。國所知牟等。五百都々奈
波布。
右一首式部卿石川年足朝臣
天地與。久萬氏爾。萬代爾。都可倍麻都良牟。黑酒白酒乎。
右一首從三位文屋智奴麻呂眞人
島山爾。照在橘。宇受爾左之。仕奉者。卿大夫等。
右一首右大弁藤原八束朝臣
袖垂而。伊射吾苑爾。鶯乃。木傳令落。梅花見爾。
右一首大和國守藤原永手朝臣
足日木乃。夜麻之多日影。可豆良家流。宇倍爾也左良爾。梅
乎之奴波牟。
右一首少納言大伴宿禰家持
十九ノ四十六 天平勝寶五年正月四日於治部少輔石上朝臣宅嗣家宴歌
新。年始爾。思共。伊牟禮氏乎禮婆。宇禮之久母安流可。
右一首大膳大夫道祖王
廿ノ五十 喩族歌
比左加多能。安麻能刀比良伎。多可知保乃。多氣爾阿毛理之。
須賣呂伎能。可未能御代欲利。波自由美乎。多爾藝利母多之。
麻可胡也乎。多波左美蘇倍氏。於保久米能。麻須良多祁乎乎。
佐吉爾多弖。由伎登利於保世。山河乎。伊波禰左久美弖。布

美等保利。久爾麻藝之都都。知波夜夫流。神乎許等牟氣。麻
都呂倍奴。比等乎母夜波之。波吉伎欲米。都可倍麻都里弖。
安吉豆之萬。夜萬登能久爾乃。可之婆良能。宇禰備乃宮爾。
美也婆之良。布刀之利多弖氐。安米能之多。之良志賣之祁流。
須賣呂伎能。安麻能日繼等。都藝弖久流。伎美能御代御代。
加久佐波奴。安加吉許己呂乎。須賣良弊爾。伎波米都久之弖。
都加倍久流。於夜能都可佐等。許等太弖氐。佐豆氣多麻敝流。
宇美乃古能。伊也都藝都岐爾。美流比等乃。可多里都藝弖氐。
伎久比等能。可我見爾世牟乎。安多良之伎。吉用伎曾乃名曾。
於煩呂加爾。己許呂於母比弖。牟奈許等母。於夜乃名多都奈。
大伴乃。宇治等名爾於敝流。麻須良乎能等母。
之奇志麻乃。夜末等能久爾々。安伎良氣伎。名爾於布等毛能
乎。己許呂都刀米與。
都流藝多知。伊與餘刀具倍之。伊爾之敝由。佐夜氣久於比弖。
伎爾之曾乃名曾。

右緣淡海眞人三船讒言出雲守大伴古慈悲宿禰解任是以家持
作此歌也

廿ノ五十四 大原櫻井眞人行佐保川邊之時作歌

佐保河波爾。許保里和多禮流。宇須良婢乃。宇須伎許己呂乎。
和我於毛波奈久爾。

廿ノ五十五 三月四日於兵部大丞大原眞人今城之宅宴歌

安之比奇能。夜都乎乃都婆吉。都良都良爾。美等母安加米也。
宇惠弖氣流伎美。

右兵部少輔大伴家持屬植椿作

廿ノ五十六 十一月十八日於大監物三形王之宅宴歌

三雪布流。布由波祁布能未。鸎之。奈加牟春敝波。安須爾之
安流良之。

右一首主人三形王

宇知奈婢久。波流乎知可美加。奴婆玉乃。己與比能都久欲。
可須美多流良牟。

右一首大藏大輔甘南備伊香眞人

安良多末能。等之由伎我敝理。波流多多婆。末豆和我夜度爾。
宇具比須波奈家。

右一首右中辨大伴宿禰家持

廿ノ六十七 三年春正月一日於因幡國廳賜饗國郡司等之宴歌

新。年之始乃。波都波流能。家布敷流由伎能。伊夜之家餘
其騰。

右一首守大伴宿禰家持作之

卷のしりへにとりすへていふ事

此百歌は。神の御陰のたふとき大道。天皇の大御稜威の畏き大本。臣連のたけく雄々しきまめ心。世の中の親思ひ。妻子うつくしみ。所由ある古事。みやひある言の葉。すへて。いにしへならふ倭心はへのむねをしるへき哥ともなり。そもそも。此一卷を思ひよれるは。世に古こと學ひ教ふる學ひの親のもとに。遠き堺よりしたひ來たらむ教子の。二日三日旅居して。古書とききかせ給ひねと。ねきたらむに。萬葉集の一二の卷。或は古語拾遺。または神代正語。玉鉾百首。何よけん。くれよけんと。思ひめくらしもすへけれと。一つとひ二つとひのほとに。一部よみはてむことはえあるましく。又一卷をたによみをへすて。なかはにてやまんは。のこりおほつかなかるこゝちすへけれは。かく一日二日の。よみとき書に。其ほとをはかりとゝのへて。はつかに此百歌をなもあつめける。或人のいはく。此一卷。世にほとこらさむには。そのしるへことをも。なとかそへては出さゝるといへと。それそへさるゆゑは。此百歌に引よせて。あまたの古意をいひさとさんには。もしくは。九日十日にも。六日七日にも。又は。一日二日にも。引はへても。つゝめても。其所。その時によりて。いかにもはからふへく。とく人の心々にまかせてんと思ひよれるなり。世にひろく。古學ひのむねを教へたてむと思ふ人は。此一卷をふところにさしはさみゆかは。ゆかむ所所。こひねかふ人のあらむ時々。まつとりいてゝ。よむにもたよりよろしかるへく。又その初學の人々に。朝夕によみうかへくちならさせんにもよろしかるへく。思ひよれるなりけり。端詞は。いさゝか私にかへたるもあり。哥は。もとより寫しひかめなく全く正しきかきりをえりとれるなれは。たゝ一歌二歌の中に。一もし二もしかはれるかあるのみなり。しるしさまは。今のすり卷の字くはりのまゝなり。もとつ卷の面影見えて。初學の人々異物とも思ふましく。思ひおきてたり。これはしめてえらへりしは。文化十二年の秋なりけるを。その後あらたにとりかへたるもありき。かくいふは文政三年の春。本居大平。

藤垣内答問録の一

左之趣者、日比標疑書付致候分を聊書集たるにて、道の事ならぬも、これかれ御座候、殊に不文にて、御覽分られ難く候はんなれども、御むつかしながら、御推覽下され、何とぞ早き御便に、並木方へなりとも、御差下被下度奉希候、追々あとより書記奉問たく候、私心えに可相成儀ともは、不奉問とも、夫よりも御諭被下度奉希候、繁多に罷在候故、御疎遠仕候事も可有御座候へども、毛頭怠慢は仕まじく候、穴賢

亂筆の上、所々墨消など仕、失禮恐入候、淨書の暇なく候間、取あへず此まゝ差上候、御免被下度奉存候

天ッ神の御事を、萬國にかけて申奉らんことは云もさらなり、國ッ神とても、外國へわたり玉ひし歟とおもはるゝもあれば、又他の國々より御國へかへり玉ひ、又今もゆきゝし玉ふもあるべし、されば、他國に生し神も、御國へも渡り來り玉ふべきか、されば天竺にて所謂佛などの類にも、神なるも有べければ（天竺にかぎれるには非れども、佛のことは、御國にも普くまつりなれたれば、姑くしか云なり、その餘の外國のも、意は同じ）その神も、（いはゆる佛たり）御國へ渡りたるもあるべく、今現に、其佛の靈を祭りて、所謂御利生などもあれば、其靈のより來たるもあるべし、是等の事は、古傳説はなけれども、吾神道の上より見る時は、しか見ゆるなり、元より唐天竺の書の趣は、僞のみ多ければ、信じ難きことども多けれども、今世に多かる佛の御利生の、眞にしからんには、儒意のさたするやうに思ふべきに非ず、されば傳へある天神々國神々などを置て祈んにこそ、たま〳〵心のむかはん佛を、吾神の道をもつて、齋祀いのらんも、則道の意なり、と或人のいはんに、なにと答侍るべき

御問のはじめに、天ッ神の御事を、萬國にかけて申奉ることは云もさらなり、國ッ神とても、外國へわたり玉ひし歟と思はるゝもあれば、又他の國々より御國へかへり玉ひ、又今もゆきゝし玉ふもあるべし、されば他國に生れし神も、御國へも渡來り玉ふべきか、されば天竺にて所謂佛などの類にも神なるもあるべければ、（天竺にかぎれるにはあらざれども、佛のことは、御國にも、普くまつりなれたれば、姑くしか云なり、その餘の外國のも意は同じ）その神も（いはゆる佛たり）御國へ渡りけるも有べく、これまでの御説はよろし、其次に、今現に其佛の靈を祭

りて、所謂御利生なども あればこの段は、いかゞなり、其佛神の御利生といふ者は、甚いさゝかの事にて、その御利生は、有ても無ても、事たるほどの事なり、其靈とてより來らんも、御國の神の御功德の、まことの尊き筋にくらぶれば、枝の枝なるが如き事のみなり、わが古意のまことをさとりたらん人は、左樣の佛神に心のむかはんことは有べからず、こは道の心をしらぬ、いまだしき人の心なるべければ、その人もし御國魂のすぐれたることを慕ふ心あらば、今一度、神の道のまことに尊きゆゑよしを解きかせ、又異國の佛などいふ物の、取にたらぬゆゑよしをもいひをしへ給ふべし、そのいまだしき人の、たま〳〵にても心むけて齋祀して祈り得たらむ御利生といふ物、いかなるを御利生といへるにか、その御利生と思ふらんことのさまによりて、論ひさとすべし〳〵○そも〳〵古へ神を祭りしさまには、大かた大やけ事にて、古事記、日本紀の條々に見え、又神祇令、儀式、延喜式にも見えたるが如し、そのこまかなる事は、祝詞どもに見え、又わたくしにも、身のほど〳〵に祭りもし、願ふこと祈りけんさまなども、祝詞の趣をはじめ、萬葉集の歌に、往々見えたるさまにて知るべし、こは神の恩賴の、もとより高くかたじけなきをあふぎて、なほ家の幸はひ、身の幸ひをもいのるなり、今の世の佛神などを信ずる人の、ともすれば身のうへのいささけきことをいのりて、御利生靈驗をこひねがふ心ばへとはことなるべし○さて外國の神の事は、もろこしの國のは、書どもにも見えたれば、あらはにしられたり、天竺てふ國のは、たしかにはしられず、觀音、藥師、などいふ神は、もと釋迦の、佛道てふ道をたてんとして、作りかまへたる、寓言の神なるべければ、まことは左樣の神、在こと有まじければ、釋迦の口より出たるは、悉寓言なり、もし所謂外道てふ方に、古き傳へなどありて、祭れる神あらば、それぞ實物なるべき、天つ神、國つ神の、外國にくだりもし、渡りもし給ひたるにても有べし、とおしはからるゝなり、此二ケ條は、甚事長ければ、こゝには盡しがたし、その大よそをいへるなり○又須佐之男命の、御子、五十猛神をゐて、新羅の國に降ましゝ事、少名毘古那命の、常世鄕に渡りましたる事、三毛入野命、浪の秀を蹈て、常世國に往ましゝ事、また應神天皇の御代、新羅の國の王の子、天の日矛の、御國に渡り、但馬の國にとゞまりて、たじまの俣尾が女、前津見を娶たるより、その子孫終に、息長帶姬命の、御母なりし事、その同じ古事記に、新

羅國、阿具奴摩のほとりの賤女の、晝寢したりし時、日耀紅のごとくにして、その陰上をさして、つひにはらみてうめりし赤玉は、その日矛の妻にて、つひに吾祖の國に行むといひて、小船にのりて渡り來て、難波に留り、難波の比賣碁曾の社、あかるひめの神といふと見えたるなど、天ッ神と國ッ神との外國へ渡り玉ひ、又御國へ歸り玉ひ云々とある御說の證なるべし、又日本紀、古事記、姓氏錄に見えたる歸化の諸蕃などの內には、その祖は天つ神などにて、子孫のつひに又御國に歸り來れるにやとも思はるゝあり、又もろこし古書どもに見えたる、上代の古事には、御國の神の、彼國へ渡り給ひ、其子孫の其國にして、くさぐ\の事を成し給へるかとも、思はるゝもあり

國々の一郷一村に、生土神として齋祀るに、祭神のたしかならぬが多し（天神、山王、山ノ神ノ類）世の大方の說に、件の神は、式外のなれば、淫祀なりといふやうに云は、非じ、祭神のたしかならざるは素よりあかぬことながら、古よりしか祭り來んには、仰ぎ尊べきことにや、さりながら式外の神には、みだりなることも有べきなれば、よく／＼由來を正して、斟酌すべきにや

御說の如く候なり、淫祀なりといふは、非なり、仰ぎ尊むべき事なり、由來はたゞさまほしき事なれども、此事は、今にてはしられぬ事のみなり

折にふれて祭らんと思ふ神のあるに、其社の近きあたりになくて、詣ることの難き、或は其御社の今にきこえぬなどは、吾家の奧の床などを、心のかぎり忌清めて、清き札代物奉りて祭るべきか、さらば其御靈實はいかにすべきや

わが家の奧床にいはひ清めて祭らんもよろしかるべけれど、古へより、遙拜といふ事あれば、わが身をいみ清めて、はるかに拜まんもよろしかるべし、その御靈實は、鏡、劒、笏、玉、鈴、石などをまつれること、古書どもに見えたり、清淨の土地より得たらん形よき石をするも、又臨時には、榊、松、竹、何にても常磐木の枝も茂み結び立て、御室として祭らんもよろしかるべし、事のさまによりて、今の代の俗のまゝに御札祓の大麻などやうの物も、御靈實とあがめまつらんに、何てふことかあらん

直日神、禍津日神をまつれる神ありや、神名帳によりていまだ尋ねず候へば、麁忽に候へども、年序奉問候なり

延喜神名式にも見あたらず候、倭姫命世記は、ひがこと多く

て、信られぬ事ごもあれごも、大神宮の荒祭宮を、皇大神の荒魂、伊弉那伎大神所生神名ノ十狂津日神也、一名瀨織比咩神是也ご見え、外宮の高宮を、豊受の荒魂也、伊弉那伎神ノ所生神、名伊吹戸主、亦名田神、直日大直毘ノ神是也ご見えたり、これのゐありて尊き古傳說ご見えたり、これにつけて、大半、かつ〴〵思ひよる事ごもゝあれご、爰には略けり、こは大祓後釋にも出たり

凡世の善事ご云は、人萬物を養ひ惠み、上の御令を恐み尊み守り、その外親族をしたしむなごやうのこご、惡事ご云は其反なり、神の御上の善惡をさたするも、大むねしかるべし、學問するも此心ばへを以て、云々の善惡邪正眞僞をよく辨へて、こゝを迷はじご心がけて、心の及ぶ限り、なるべきたけは、善きすぢのこごは行ひ、惡きすぢのこごは一向(ヒトスヂ)すまじご心がけて、世を渡るべきなり、さて佛儒の教、その外のも、すでに大本を忘けるこごは、云もさらなり、心法のこごも、かの陰陽の理、或は天命の說なごを行て、言痛く云へるは、みなひがめるこごなるは、既に故人の御議論にて明なり、然れごも唐天竺の、さすが智深き聖人佛ごもの、世々に思ひ計りたるこごなれば、御國の道の大本を辨へ、倭魂をそなへたる上にて、取用んには、心法のこごを云へる内にも、取べきこごあるべし、譬しかみ〳〵の意ばへを失はざれば、奉公のすぢ、全く或は一家親類共の、むつまじくなるなご、くさ〴〵日用の益ごなる心えごもをこけり、元より是らのこご、聖佛ごもの教をからざれごも、人其足のこごなれごも、其教のあればあるにまかせて、取捨して用べきなり、これは世にあやまちある時、人の心つき異見をするなご云ここをさくに因し心ばへなるべし、されごも大本の違たる道ゆゑ、よく選ばざれば、學問の害ごなるべきなり、かく思ひ侍るも、なほ彼毒酒の醉言なるにや、今一匙の葛花を配劑し玉へかし

御問のはじめ、凡世の善事ご云は、人萬物を養ひめぐみ、上の御令をかしこみ尊み守り、その外親族をしたしむなごやうのこご、惡事ご云はその反なり、神の御上の善惡邪正眞僞をよく辨へて、こゝを迷はじご心がけて、心の及かぎり、なるべきたけは、善き筋のこごは行ひ、惡きすぢのこごはひたすらすまじご心がけて、世を渡るべきなり、ごある、これまではよろしけれご、唐天竺の、さすが智ぶかき聖人佛ごもの、世々に思ひはかりたることなれば、御國の道の大本をわきまへ、

倭魂をそなへたる上へにて、取用ひんには心法のことをいへる内にも云々、異見をすると聞入るに同じ心ばへなるべし云云、この段は、無益の論と思はれ候なり、倭魂をそなへたらん上には、異國の聖人佛などの教は、たのむべきにあらず、それもこのより用ひんと思す事のさまをきゝえて、ともかくも論ひ候はん、そも／＼倭たましひをかためて、道をまなばんと志したらん人は、私の身の上の少事にはかゝはらず、世の業のいとまだにあらば、古書を明らめ古意をあらはし出て、道を大やけに張ひろむべきなり

世に云枕詞のことを、加茂翁の、冠辭といはれたるを、故大人には、また枕詞と仰られ候、其御心ばへ承度候

世にいふ枕詞といふ物、いまだ適當の名を得ず、枕詞といはんよりは、冠辭といはんぞ叶へるに似たる、秋成が論ひもあれど、いまだ盡さず、「故翁の、枕詞といはれたるは、もとよりの名なれば、しばらくそれにしたがへるなり、玉かつま第八、ひらき見給ふべし

冠辭考に、にひばりと云は、つくと云へかゝる枕詞とせられ候、愚按には枕詞ならずおぼえ候、新治はもとより、つくばも、共に常陸の地名に候へば、たゞしかく／＼の地をさしたりを過來まして、いくかにかなれる、と倭建命のよませ玉ひしかと、おもはれ候、いかゞ

にひはりつくばの御說、甚よろしく候

葛花に、眞心とは、産巣日神の御靈によりて、備へ持て、生れつるまゝの心をいふ、さてこの眞心には、智なるもあり云々、善もあり惡きもあり云々、されば神世の神たちも、善事にまれ惡事にまれ、おの／＼その眞心によりて行ひ給へるなり、此御文意につきて、今難者ありて、云はんに、如此なれば、盗の心のおこるも、くさ／＼の惡事をなすも、眞心のまゝに行ひてよしといへるにや、たとへば上代は然るにもせよ、そは惡き事なれば、今學者のさる心有べきに非ずと云んに、いかゞ答候べき、乍序奉問、眞心てふ言は、上代より云ならはし候や、道の論あるにつきて、言別てしかの玉ひしにや

眞心の論に、盗の心のおこるも、くさ／＼の惡事をなすも云云、とある御問、今すこし聞とりがたし、何にもせよ、眞心とは、うはべをつくろひかざらざるをいふなり、盗の心のおこりて物をぬすむは、眞心の行ひなり、盗の心のおこりても、おこらぬかほするは、うはべのつくろひなり、盗の心おこり

ても、刑せられん事をおそれてつゝしむも、又眞心なり、或は、ぬす人のとらはれても、われはもの盗まずと陳ずるも、又眞心なり、學問せぬ者も、すべて中人などより上は、眞心をうしなへるぞおほきを、むげにいやしきわたりの人は、大かた眞心なるぞおほかりける、○眞心といふ事は、中昔の物語ぶみに、をり／＼見えたり、榮花物語月宴卷にもあり、されど今の古學者流のいふ眞心とは少し異なり

御國の異國にすぐれてめでたきことを曰ふとしては、稻穀の美を言擧したまへり、こは聞及たるほどの外國に對して曰へるか、また瑞穗國など、上代より言擧したまへば、その意ばへを以て云れたるか、然れども世界の內、皇國に類せる稻穀の美なるも有まじきとも決めがたし、猶言はゞ、他の國々に、食物そなはりて命をつぎ、其食をうましとして暮すことなれば、不自由とも思ふまじきなり、紅毛人は、皇國の稻穀は馴ざる故にか、養ふにふさはずとて、欲せざるよしなり、すべて物の美惡をいはゞ、皇國と異國と、互に得失あるべし、いかに

今の世、紅毛の國の學問委しく行れて、世界萬國のありさま大かたしられたるに、世界の內、皇國に類せる稻穀の美なる國ある事をきかず、紅毛人の、皇國の米穀を欲せざるは、皇國に在るほど食し馴たらんには、歸國の後のさまたげとならん事を、かねて思ふ故なるべし ○異國船、長崎に逗留の間に、あの方より牛を乘せ來りて、一年二年皇國にある間、皇國の米穀にて養ひおきて、歸る時節に、それをころし、鹽漬にして、彼國へみやげにするよしなり、是まさしく皇國の米穀の美なるを、各別に賞重する事となり、その牛を生ながら乘せ歸るもありとぞ

世に軍學と唱へて、戰法の習、それに付て、心法のことまでを敎る道ありて、小弟も、いさゝか聞置侍り、當時武士として其すぢに疎くても、あかぬことなれば、もとより心がくべき業なり、言まくも畏かれども、天照大御神の、すさのをの命の、天上に上りますとき、雄たけびをなし玉ひしも、勇威を逞して、仇なふものを待の古證なり、その外神代に、仇なすものをまつろへむために、くさ／＼のことをはかり、勇武を振ひしことあり、人の代となりてはさらなり、されば世亂て、專合戰のはげしかりし世には、さる筋にいよゝ深く思ひはかり、よく行ひぬれば、天皇の御爲にもなり、國家を守る爲にもなるほどに、その筋に思ひかね

の深き人、一つの教のやうに立て、武士の職のごとくなれば、治世にも、これを修し磨き、且外賊の仇ありし防ども爲べし、然れば件の軍學てふことも、世の亂によりて、はじまりたる筋なれども、上代よりのさまを思ひはかるに、代移りては、必さる學の、なくてかなはぬ自然の勢ひともおはれ侍るなれば、是また顯事の盡すべき一道なるべきにや、もとより其學の内の眞僞、善惡、邪正は、道の大本をとらへて、用捨すべきことは申に及ばず、此心得いかゞ侍らん

御論、すべてよろしく候なり、此術はまことに實事なれば、今日の用にもちひて、仇を防ぎ敵に勝ん事を要とすれば、その學びの内には、佛家の語にもせよ、道家の語にもせよ、専要と心がくる手術にだにたがはずば、それらにはすこしもかかはるべからず、心法とかいへることをいへるも、道の爲にいはんことなれば、何ぞきらふべき、上の條に、聖人佛の教の内にも、用ふべきことあらば、用ひべきにや、との御論とは、同旨にはいひがたし、これは見識を定むる教の如く、目に見えぬ論にはあらず、顯事の盡べき大道なれば、つとめてその道の物の上手にしたがひて　術を得べきなりと覺え候なり

總じて、上の掟にそむかず、うやまひ尊み仕奉るが、道の本意なり、今大名の臣として、其主君、天皇へ對し、きたなき心あれば、死を以て諫め、其黑心に從はぬを、正道とすべし、これおのれが主君の令にはたがふが如なれども、道の大本、こゝにとゞまるべし、こは稚き論にて、理屈がましけれども、何も大道のせんさくなれば、つゝむことなく思ふ所を奉問なり

大いなるかな此御論、即御問說の如く、道の大本をだにたて通さば、枝葉の忠義は、時に臨みて、いかにも打捨て、かゝはるべからざらんぞ、道の本意なるべき、元來天皇に對して、逆しま心あらん主君には、死を以て諫るは、理の當然なり、されども此事は己が潔白のみはたてども、其主人遂に逆心ひるがへらずして、大事に及んこともはかりがたし、此事は、豫てしか〳〵と論定しがたし、逆意のさまにしたがひて、よくよくいかにもはからふべき智惠有べきなり、あなゆゝしく〳〵

天文者は、神の御所爲の世に行はるゝさまを、世々をへて、いさゝか見覺考覺たるものなり、其天文者の意には、理を以て測りえたるとおもふめれど、實は神の御所爲の、大かたたがひなく行はるゝさまを、伺ひ覺たるまでなり、され

ども、其中にも、日月の運行の度をはかり、蝕などを測り覺たるなどは、いと委しき思ひかねなり、眞暦考に、委く示され候へば、外にうたがひも無く候へども、天文者の測りえたる處は、件の趣と思はれ候故申試候

天文云々、すべて御説の如く候なり

日月の蝕あるくらくなるを云は、石屋戸の故事の趣もあるかとおもはれ候はいかに、さて蝕のことの古書にみえたるは、いつのころに候や

日月の蝕を、石屋戸の故事の趣にやとの御説は、僻事なるべし、地震を、須佐之男命の、天にのぼります時の、山川動みの故事にや、などいはんも、同じ僻事なり、富士の山の炎煙(ケブリ)を、天となゐのぼりし時のなごりの氣にやと、三大考にいへるとは、ことなるべし、○蝕の事の、古書に見えたるは、紀に、推古天皇三十六年三月二日、日有蝕盡之、と見えたるは、ふと思ひ出たり、これよりまへにもありしか覺えず

今古をせんには、いかにして神にうかゞひ侍るべきにや、古の遺法ありて、そを習ふべきにや、亦其こゝろばへをはかりて、今の世にはともかくもすべきにや、奉問、今日用に立候樣に、御教示下され度候

古の事は、神代の巻に見え、萬葉集中にも、さま〲の占の事見えたれども、わが神代の古法は、絶て傳はらねば、今は、いかにすべきにかしるすべなし、邊國の山中などに、里人のつたへたる法もあらば、其の名殘とも見つべきなり ○今日の用に立候やうにとならば、易はもとより、何がしのみくじてふ物にても、信ずる心だにあらば、何樣の術にても、今日の用はたりなん

神武天皇より後の天皇は、神にましまさゞる故に、已上を神世と申候や、但し後の天皇を神と申奉るは、則神の御子(ミコ)にまして、畏み尊みて申奉ることにて、漢ざまの神の意にはあらず、さて神と人との差のこと、こゝかしこに示され候へども、今少し徹得仕かね候、記紀に、神世を分たる意ばへいかにや、これらのことを耳近く御示諭下され度候

すべて事の轉り變るありさまは、漸くにうつろひゆく物なれば、際限をたてゝ、さやかには定めがたきことなり、神世といふより、神代ならぬ時にうつりかはるも、その堺を、きはやかには定めがたし、されども古事記にも日本紀にも 神代は神代と分かれたれば、しばらくそれにしたがひてよろしきなり、されども神武天皇の時、又その已後とても、神代めきた

る事は数しらずありしなり、熊野高倉下が夢のさとし、龜の甲にのれりし人、尾有人、さま〴〵の事ども、あげてかぞへがたし、かく神武天皇已後も、やゝ後々の御代まで、神代めきたることはをり〳〵あれども、日本紀の神代巻、古事記の上巻等の、神代と別られたるほどの事は、たゞあやしき事のみにて、後のありさまとは、堺へだてゝことなればなり、神と人との差別は、まづ神とは、世に勝れて奇しき、御しわざか、御いきほひか、御心か、いかにも普通に秀て、靈異なるをいへるなり、人とは、その反なり、○さて後の天皇を、現神と申奉るは、その尊く座ます事、凡人とは、はるかに尊くかしこくましませばなり、大神の御末なるのみの御稱にはあらず

　八幡稻荷の神はいかに

八幡稻荷御神は、世の人のしれるまゝなるべし、神號の心はえしり候はず、天平勝寶元年十一月の宣命に、豐前國宇佐郡ニ坐廣幡ノ八幡大神と見えたるぞはじめにはある、幡の事によりて、ことさらに稱へ奉りし神號なるべし、社の記などに、さま〴〵由縁もありげなれど、その說も、受がたき事なるべし ○稻荷は地名歟、稻といふ字は、うがのみたまの神なれば、よしある歟、荷の字も、神主の姓を、荷田といへば、よしある歟

　某の宮に天下しらす御代と書は、漢とぞしたるがごとし、然云例によらば、今の都になりて、平安の都に云々と云むは、いよゝ紛らはしかるべし

某の宮に天下しらしゝ御代といひても、奈良以前は、まぎはしき事なく候なり、今の都にては、年號などを記さゞれば、まぎらはしかるべし

　天皇の號を停られ院號を以てせらるゝ後の天皇を、某天皇と稱し奉るは私に似たり、いかゞ

天皇の謚號をやめられたるにはあらず、某院など申は畧したるなり、正しくは、某院天皇と申べきなり、正しき書には、をり〳〵しか見えたり、太上天皇など申奉るは、近き世とても同じ事なり、公け事なり

　古事記、日本紀などの表題は、字音に唱ふるやうに號けられたるなるべし、されども幸ひ皇國言にもいはるゝ故、ふることぶみ、やまとふみ、など云めれど、そは強て言たるが如し、其餘の國史の表題を、皇國言以ていはんは、彌しひたることなるべし、いかに

此事、すべて御説の如く候なり

神寶、三種二種の事、先達て伺候は、左のことを所見御座候て、疑く御座候故に候、何こぞ御明辨奉希候　○繼體紀に、上天下鏡劍璽符　○持統紀に、奉上神璽劍鏡　○光孝紀に、奉天子璽綬神鏡寶劔　○桓武紀云々、璽並劔云々　○延喜式、大嘗會式に、忌部入奉神璽劔鏡　○大殿祭祝詞、天津璽乃鏡劍乎捧持賜天　○神祇令、上神璽之鏡劍　義解、謂此即以鏡劔稱璽　○公式令、天子神璽　義解、謂踐祚之日壽璽寶而不用　○古語拾遺、卽以八咫鏡及草薙劒二種神寶、賜皇孫永爲天璽、所謂神璽劔鏡是也、右の外にも御座候はんか、見聞の及處書付候、三種の神寶こ申せども、二種のやうに書たる處有之候て、大疑仕候、御明辨奉仰候

神寶、三種二種の御疑、先の度は何こ答申候歟、今度、證の文御引出候て、御疑ひの趣、さる事に候なり、此明辨は、古事記傳第十五卷其哀岐斯八尺勾璁鏡及草那藝劍云々、こある段の注解に、委く辨せられたり

日本紀のこと、續日本紀には、修日本紀云々、拾芥抄にも、日本紀こあり、類聚國史、延喜六年、三統宿禰理平が文に、日本書紀記者云々、其後往々書紀こある歟、もしは延喜六年に議ありて、書の字を加へ玉ひしにはあらずや、いかに

此事いまだ不考候、但し弘仁私記序にも、大日本書紀者一品舍人云々こ見え候なり、延喜六年よりは、八十餘年前なり、養老四年よりは、九十年ほご後なり

日本紀の定本、御所持候はゞ、拜借相願度候、古語拾遺、同斷、

鈴屋藏本、少々書入られたる事ごもあれごも、校正こいふほごの事はなく候なり、古語拾遺も同じ事なり

紀の歌の御注釋御座候はゞ、何こぞ拜借相願たく候

記の歌の注解こては、別に記されたるはなく候、古事記傳に、往々引出られたる所々に、その意をも、因に解れたり

延喜式の祝詞、不殘の御解はなく候や

後釋の附錄に出たるのみなり

城を志呂こよむは、國名の山城よりあやまりたるには非ずや、城はきにて、古くは志呂こ云たることこ所見なく候にや、さて城を志呂こ云たるは、いつのころより云たるにや、山(ヤマ)城(シロ)の國も、諸國名、好字を用ひらるゝこきに、山城(サンジャウ)の義を以て、用られたるにはあらじや、其國體不案内に候へごも、

字義の如きの地勢のやうに承り及候、いかに

城を志呂といふは、もとよりの訓なり、そは苗をまき生す田を、なはしろといひ、材にすべき木を蒔生す所を、也麻斯呂といふなり、萬葉に、開木代と書るも其意なり、つきねふといふ冠辭も、續苗生なり、材の續苗を蒔出す山代といふ事なり、代城は、境を限りて領たる一ッの地をいふなり

出雲風土記解、印本に御座候や、なく候はゞ、是又いつにても御拜借奉希なり

出雲風土記眞龍の注解、印本にはなく候、鈴屋藏中に御座候、追てかしまゐらすべく候

若狹の國號の御考、定て記の傳、仲哀の御卷に記され候はんと奉存候、本國の義、早くわきまへ度候間、御示可被下奉希候

若狹の國號の考、古事記傳にも何の考もなく候、眞龍の國號考にも、取にたらぬ事見えたり

朝日に匂ふ山櫻花の御歌、凡そに感吟仕候て、本意なく候、御論下され度候

うるはしきよしなりと、先師いひ置れたり

今いふ志呂は、古への磯と云たるにあたるべくや

今の城も、古へのきにはあれども、大石を積重など、今の如く嚴にはあらざりつらんとおしはからるゝなり、守屋大連の立籠りましゝ稻城といふも、貢物の稻を刈藏め置く、ひと構への地をいへるなり、郭中ひろく、屋形などもある樣に押はからるゝなり

國に坐神は、みな死をまぬかれず、さて既に死すといへども、その御靈は止りてあることにて、時としては、現身をもあらはすことあり、と故大人の御説にあり、是に因て見れば、元より人もしかあるべし、世に云幽靈の類も、其止りたる靈の現身を顯すにや、さて上に云先祖は云に及ばず、其德をしたふとか、或は其怨をかしこみなどして、其靈をも祭るべきことにや、其祭りやうのことは、既に前文に奉問たり、さて神も人も死すれば、黄泉へ靈のゆくことなれども、此世にも靈の止まることせんや、靈の全體を、火にたとへての御説も承候へども、黄泉へゆく靈と、此世にとゞまる靈とは、其趣かはるやうにおもはれ侍るはいかに

これらの事は、一定さだめがたき事なり、黄泉へゆく魂と、此國に止まる魂とは、其趣かはる樣に思はるゝとの御説、今少し聞とりがたく候

荒魂和魂の御說につきて猶思へば、世に死靈生靈など云て、人に人の魂のとりつくも、荒魂なるにや、生靈とて、正身は其儘にて、靈の人にとりつくなども、彼の火の物に移りて、元の火の全き譬へと同理に候や、又あづさみこと云者の、くちよせと云ことをするも、人の靈をおのれによする術も、元神のはじめ玉へる術なるにや、例の儒者たちも、此くちよせには理すまぬおほく、子曰怪力亂神は語らずにて、すませたるやうに聞え候、さて口よせのごとき術、古くも聞え候や

此所、御說の如く、火のたとへ同理なり、梓みこの術は、神代よりありし事なるべし、仲哀天皇、筑紫之訶志比宮にまして、御琴ひかして、建内宿禰、沙庭に居て、神の御言を請なごし給ひしを思ふべし、榮花物語、後悔大將の卷に、めのとなく／＼御口よせに出たつ云々、などあれば、古へよりありし事なり、但し今の代のは、まことの薄輕にのみなりつらむ

火忌のこと、上古黃泉と現國と往來絕たる後、此現國にて、黃泉の火の穢に觸べきやうなし、人の死を穢とするも、黃泉の穢を云ふ故なるべけれども、死をかなしみ惡むことは云もさらなり、既に黃泉と往來の絕たる後は、上古とは其むねかはれり、猶いはゞ、黃泉へ往來のありたる當時には、死者も黃泉の國へゆきたれども、彼の帶されはなれたる後は、死者のゆかぬことゝなれると見えたり、然れば火忌の意は、上古現國黃泉國と、往來ありたるときのことにて、今は其說いたづらごとなり、是にも古傳說ありや、と論破する人あらんに、何と答へ侍るべき

此問條の如く、論破する人は、世にあるまじき事なり、そはいかにといふに、上古黃泉と現國と、往來絕て後などいふことは、御國の古書にもゆきわたり、神代の古事深く考へ見たるうへの論なり、それらの事をよく學びたらんには、はた穢の事、火忌の事の、御國の道なることをも、よく知るべきなり○そも／＼神世以降、現身にして、黃泉に往來する事こそ絕たれ、死すればかの國に往ことは、萬葉集中の歌にも見え、其餘の物にも、をり／＼みえて、少しも疑べきことにあらず、されば人の死たるは、黃泉へゆきたるなり、その黃泉へゆきたりし人と一所に在し間は、同火せし人々は、即黃泉の火の穢にふれたるも同じ事なれば、これらの穢はなしといふべからず○さて又黃泉國の往來、絕たりといふ說も、不絕といふ說も、穢の事のありなしの說も、後世人思慮もておしはかり

考へたる說にて、まことはかりしられぬことゞもなれば、火の穢をおごそかにいみはゞかるは、古への重き法にて、露ばかりも、おろそかに思ふべき事ならぬをや

死穢のかぎりは、武家にては、當所の御令の通りに心えて、その日數（いはゆる服なり）を經過れば、淸まりたる心えにて然るべきにや

當時の服忌令によるより外なし、此御令、今の世のさかしらを加へたる物にはあらず、もとよりの天下のならはしいまゝと見えたり、古書どもに見えたることは、いさゝかは轉り變れるもあれども、そもさかしらにはあらず、自然なり

產穢、又は月水の女を穢とするも、古意に候や、その外にも穢となるくさ〴〵の事有之候や

產穢、月の障の事穢とするは、最も古意に候なり、其外穢となる事ども、神祇、服忌令などいふ物にも見えたるも、古書の趣にいたく異なる事なし、神祇令、儀式、延喜式をはじめ、北山抄など、記錄にも見えたり、伊勢神宮には、文保記花園院永正記（後柏原年號）などいふ記錄にも見えたり

江戶を、みやこと申は、僭號なるべきにや、ことほのみかどと、先達は申され候、しか云意はいかに、當時の風俗よりみれば、みかどゝ云言は、天皇の御事のやうに、世に心えたれど、公方樣のことを云んには、當時の忌諱にさはるべきか

江戶を都といふは僭號なり、伊勢國ノ齋宮內親王の御所を、多氣都など歌にはよみたれども、例ともしがたし、遠朝廷といふはよろし、太宰府を、遠みかどゝ歌によみたり、又越中國の國府をも、遠つみかどゝ、家持の歌にみえたり、みかどは、天皇の御うへをも申事、古へよりある事ながら、御門（ゴモン）といふ意なれば、官府役所をも、みかどゝいふなり、されども記錄する事には、東ノ遠朝廷などゝ書ん事は、猶はゞかるべきなるべし、歌にやはらげて詠出んは、苦しからじといふなり

公方樣の御事を、雅文に稱し奉らむには、何と申べき

大將軍と申ぞ、重く尊き官職なれば、しか申より外はなし、と先師いへり、治世には、あるまじき職のやうに思ふ人もあるべけれど、今の世には、現に將軍宣下とて、嚴に任給ふ事なれば、外にいふべき事なし、雅文などには、ものゝふの大まへつ君などもよむべし

大名の領國に趣き玉ふを、雅文には何と云べき、又夫れに

従ひて行くことを何と云べきや

今の大名の領國は、中昔の受領などいひしが、その任國にまかりしとは異なり、その領國ぞ、大名のわが國なれば、その城下の地名にもせよ領する國名にもせよ、それの地、それの國に歸り給ふといひてよろしかるべし

諸國より、京へ行をのぼると云、京より諸國へ行を下ると云事、何かの書に有しか、今たしかに思ひ出さずにて見たるやうに候、則今世にもしかなり、然れば、のぼる、くだると云は、京と諸國と往來の上にのみ申ことがもとにて、夫より移りて上方筋へ往をのぼる、上方筋より諸國へ往をくだる、とやうに云ならひたるにや、今の世にて、諸國より江戸へまゐるを、雅には何と申べき、くだると云ならひたれども、今の世にては、なめしきやうにも思ひ候、さてのぼるてふ言は、高き方へゆく意ばへなれば、京へ、諸國よりまゐることも、その意もていへるにや、さらば古意の言にはあらじ、高天原にのぼると云へるはさらなり、いかに

諸國より京にゆくをのぼる、又諸國へゆくをくだるといふと、弘く尋ねしらねば、慥にはいひがたけれど、和名鈔、國郡の部に、或は和泉國國府在和泉郡、行程上二日下一日伊勢野………上四日下二日など見えたる、古事記上卷、八千矛神の段、自出雲將上坐倭國而とある、これは後に倭に都を立給ひて後に、かたり傳へたる語なればなり、萬葉集第十七の卅二葉あまさかるひなにくだりき、第十八卅七葉に、すゞかけぬはゆまくだれりなどみえたる、さて常陸より尾張國、或は近江より信濃國などに、往來するをも、上り下るといふこと、中昔の物語ぶみにあらんか、いまだ考へず

當時大名旗本衆などの、官位ある人ならでは、朝臣堂上は、いふ限にあらずのかばねを稱し書こと、はゞかるべきにや、先年出雲の國造、千家滿鰭彦が、遠流に處せられたる罪狀のうちに、出雲朝臣などゝ認、と御咎ありたると承候、眞人、連などのゐるのかばねは、世にしらぬものもおほければ、自らとなへても耳たつこともなきに似たれども、あそみのかばねは、朝臣の字義に泥み、殊に源氏御隆勢のときに當り、別に又一ッの尊稱の如くなり、これかれ思ひ合すれば、とにかく、朝臣のかばねは、憚るべきことのやうに思はれ候、鍛冶、菓子屋などの、官名稱することは反對なり

かばねを書こと、官位ある人は、歌書などやうの物には、書てよかるべし、公事に出すものには、今の世の通例に依べし、

勿論なき人は、憚りてかゝざるぞよろしき

氏姓は、朝廷より玉はるばかりにも限らねば、さらぬ氏のいくらもあるなり、されば吾姓も、古へにきこえたる姓も、つたはらず詳ならぬには、今いふ苗字を以て、則うぢとし、或は苗字もなくて有なば、地名とか何ぞ所由あることを以て、うぢとせんも、私の行ひとは云まじきにや、又源平藤のるゐの、當時其姓繁榮して、世に甚おほし、自のことを、源某某とは、名のりのことをいふ平某と云ても、苗字を云はざれば、親き人にだも、其人とはきこえ難し、又規模とし、名のるべき苗字もあり、いづれにそれと聞えざれば、名のせむもなし、されはとて、苗字と稱を書て、何の何右衛門とかゝんも、雅にはあらぬことといやうなり今の苗字より、よく其別は知らるゝなれば、今ものに書おきなどせんには、源氏なりとも、新田某、足利某、といはん方聞えやすし、されども、かばねをも臣はりたる姓のあるをおきて、苗字のみ書んも口惜きわざなれば、新田源某、足利源某と書んに、本意にもかなひ、人にもそれと聞こゆべし、いかに

此一條はすべて御說の如くにて、よろしく候なり、何も申事なく候

當世は、姓より苗字の重きが如きあり松平御稱號の類、其外にも規模とせる苗字あり

大名の位署を書かんに、其重する苗字を書ざるは、口惜きことなり、されば位署の式に依りて、件の本意をも失はじとして、私の物に書んには、苗字官位姓かばね名乘、とやうにかゝんはいかに、朝廷に向ひ奉りては、古式に從ふべきにや、されども朝廷にも、武家のは、何の何の守と苗字をも取唱させらるゝから見れば、不苦ぬにや

苗字に、規模とするありて、姓よりもいかめしく聞ゆるは、苗字をもかゝまほしとの御說、聞えたる事には候へども、位署式によりて物すべき時には、何ぞそれらにかゝはらん、朝廷にむかひては、勿論古式によるべき事なり、すべて何氏の家にもあれ、朝廷に、わが姓名を記し出すほどの家柄ならば、いとやんごとなき分際なるべし

在原業平朝臣とやうに、名の下にかばねを稱し候は、かばねの詮なきに似たり、さてかく書きたり候は、何れのころよりに候や、近き世の定にや、姓の朝臣、名の朝臣、と云式も聞ゆるはいかに、朝臣ならぬかばねを名の跡に唱へ候こともあるにや

在原云々朝臣とやうに、名の下にかばねを記候とも、詮なきにはあらず、姓名かばねと記し候例は、萬葉集中そこかしこ

に見えたり、一ッ二ッ引出候はん、朝臣ならぬも見えたり、巻十九大納言藤原豊成朝臣同巨勢奈良麻呂朝臣巻八式部大輔石上堅魚朝臣巻六丹比屋主眞人巻十七大原高安眞人巻十九大伴古慈悲宿禰同大伴胡麻呂宿禰など、いづれもうやまひてかけるなり、餘の古書にもあるべし、見あたるまゝに引出たる也、

三大考の説と、古事記傳の説と、處に依いさゝか違たることあり、中にも月讀命と、すさのをの命と、同神の如く聞ゆる考などもあり、故大人も、三大考を御賞美候て、傳の附錄となされ候は、三大考と傳とかはりたる説は、三大考の方を、是と定られ候おぼしめしに候哉

三大考を是ともさだめがたし、此外すべて二説ある事は、いづれもさだめがたければなり、されど見る人の心どころに定むべし

天の下と云言は、漢文の、天下と云に傚ひたる言の樣に聞え候は如何

天の下といふ言は、わが古言なり、古事記、祝詞、出雲風土記、萬葉、いづれもとよりの語と聞えたり

新羅王子天日槍は、字音にていふべきにや、御國へ歸化の後、御國言につけたる名にはあらじや

天日槍、字音にてはよむべからず、御説の如く、歸化の後御國言もて稱したる名なるべし

神籬、比母呂紀と云意はいかに

ひもろぎは、三室木なるべし、神の坐す所を御室といふなり、萬葉三に、我屋戸に御諸を立て云々、巻七に、木綿かけて祭る三諸のなどあり

奥墓と云意いかに、只つきとのみも云て、今云墓のことにや、はかとは、古くも申候や

おくは終のことなり、奥の城なるべし、墓は、古くいへり、おくつきよりも、墓といふぞ、上古の言なりける

古、いにしへ、むかし、と云は、共に同じことに候や、差別候や

古へ、むかし、差別あるやうにおもへども、いまだ考へ候はず

家定をていか、家隆をかりう、とやうに、名を字音にて唱る、世のことながら、定めのあることにや

玉かつま、九の巻見給ふべし

上古の衣服、古畫像などにて知るべきもの候や、今畫家に傳ふる、あまりつたなきことにてなげかはしく候、有職者

なども、上古のことに心を用る人きこえず候

御問の如く、古畫像などにてしるべきなり、今の代は、萬の事、次第に明らかになりゆけば、追々よく考ふべき事どもゝ有べし

はひふへほを、わいうゑをの如く云は音便なれば、古へは正しく、はひふへほと云たること疑なし、ぢじずづの濁音は、今の口語に分りがたく思はれ候、いかに、詳に御示下され度候

ぢじづずの濁音は今の口語には唱へ分ち難し玉かつま十三、いゐ、おを、えゑ、今口語には、只聲の上下ほどの分ちに思はれ候、聲の上下は、五十音共に同じければ、いゐ、おを、えゑの分ちは、それよりたしかに、口語に分るべきことゝおもはれ候、詳に示玉へ

いゐ、おを、えゑ、口語にもとなへ分まほしけれど、せんかた有べからず

古風ならぬ歌にも、清濁は、古語にしたがひ唱べきにや、たびひと、けぶり、うかぶのるゐ、今の世人の耳にたち、ことがましきやうなり、いかゞ、

清濁の事は、古書を讀誦する時には、よみ分るもよし、其外の事には、さのみきはやかにせんも、こと〴〵しかるべし

言に、すみにごりと云ことは、古くより云なれ候や、清濁の字義につきて、云出たる言に候や

言語にすみにごりといふは、清濁の文字によりていへるなるべし、もし又正しき證にても見及給はゞ、示し給へ

べく（可）ごと（如）など云辭は、言のとぢめにおく辭ゆゑ、初文字を濁ること論なし、然るにあとなきがごとなど云ときは、二字濁音つゞき候、古言の格にたがへるやうに思はれ候、されども、べく、ごと、などは元よりにごる辭にて、上のてにをはも濁るなれば、二字連濁害なきにや

いでず（不出）、はぢず（不恥）、などいふこともあり、これらは普通の格ともしがたかるべし、猶かやうの類あるべし、考べし

釋日本紀に、大藏省御書中有肥人之字六七枚許云々、肥人者何居曰我昔日有肥人書薩人書云々、此肥人薩人、いかに

本朝書籍目錄に、帝紀ノ部に、肥人書五卷、薩人書と見えたり、疑はしき事なり、萬葉卷十一十二葉に、肥人ノ額髪結在染木綿云々とあり、その訓に、コマビトと附たれども不知事なり、ウマ人と附たる一點もあれど、それもいかゞなり、次下に、

早人の云々といふ歌あり、そは薩摩の隼人なり、これらよしありげなれど、肥人書薩人書、いまだ不レ考候

龍田姫　佐保姫に、いかゞ

龍田彦といふことのあるによりて、秋の神を、龍田姫とはいへるなるべし、佐保姫、いつの御代より、いひ出たる言にか、意も由來も、正しくは知難き事なり、玉かつま二卷廿六葉に、佐保姫社の事あり

人皇何代と申こと、古くより申たることにや、古意にかなはぬやうに思はれ候

いまだ古書にも見あたらぬ事なり、中昔の正き書にも見えず

人を尊みて、某樣と云こと、殊の外鄙俗のやうに思ふ人多けれども、康富記に、寳德二年八月廿二日、是日室町殿云云、禁裏樣云々とあり、樣の唱、ゆゑあることにや、このと云さまと云語の意いかに

玉かつま七卷八葉見給ふべし

或書に、諸社根元記曰、生馬神坐二左馬寮一、扶桑略記曰、昌泰四年云々、左馬寮乾角御座從五位下生馬神云々、諸社根元記曰、保馬神坐二右馬寮一、右山城名勝志に引けり、保馬神、生馬神、共に保食神の別號にて、一神なるべきにや、

日本紀に、保食神の頂より牛馬生たることもみえたり、穀食の生たるに依ては、保食神と稱し、牛馬の生たるに依ては、生馬神共、保馬神とも稱せしなるべし（此說いかに、保馬生馬の訓いかに）

いまだ考へず候

推古紀に、俾レ祭二地震神一とあり、地震の神、これより前に所見無レ之や、これは其當時、かゝる神ある事の古傳により、祭玉へるか、又は時にとり、神のいかりをかしこみて、やがて地震の神として祭り玉へるにや、勿論傳說なければ知がたきことなれども、古意はいかに侍らむ

そのかみ、佛事多く、漢事多きころなれば、さかしら事成べし

延喜式の神祇式、齋宮月料條に、鯛ノ楚割鮫ノ楚割とあり、此楚割、なにと訓、いかなるものにや

鯛楚割鮫楚割、いかなるものにか、たしかにはしり候はず、延喜式中には、いとあまた所見えたり、賦役令、雜魚楚割五十斤雜腊（謂割乾魚也）和名鈔魚鳥類、魚條、遊仙窟云、東海鯔魚條魚條（讀波夜利、遊仙窟の注には、東海鯔條字指云、鯔魚出二北海一本朝式朝云楚割似レ鯢、十俗名曰爾創其眩爲レ可レ啖也、音仕飢反）などゝ見えたり、是らにて大かたはおしはからるなり、又雄略記に、割鮮などいふ物も見えたり 〇暗、橫に

切干（キリホス）をキカヒと云、堅に切をソワリと云説もあり、又あづま鑑に、鮭の楚割に小刀をへて、おしきに居（スヱ）て出しけるを、削て食たるよし、さて歌に、いはいはゝことよありしやうにおぼゆれど、何の巻といふこともおぼえず、ふと思ひ出たり、思ひ出候はゞ、のち〳〵入ㇾ御覽ㇾ候はん

曾丹集（曾禰好忠の集）に、へつくりが垣根の雪をよこ人は鶴の上毛とおもふらんやは、またへつくりにしらせずもがな難波江のあしまをわけてあそぶ鶴の子、此へつくり、いかなることにや

學問の書、印行の分は、いかにもして拜見すべく、もとめえたるも御座候、寫本にて、道の助と可ㇾ成御書、何卒第一に拜見仕度候、寸志御憐察奉仰候

享和三年正月十二日

青柳高鞆曰、この二條の御答原本になし、もとよりのとにや、もしくは寫す人の脱したるにや、いとあたらし、

奉問

若狹小濱家士　伴　州五郎信友

への假字は、いづれの假字を省き作りたるにや、んン同斷、

へんンこれらの假字の正字、たしかにはわきまへがたし、契冲は、へを乀（ホツ）といふ字なりといへり、さもあらん歟、大平などは、閉にてもあらんかと思へり、んンは、无歟毛なりといふ説もあり、にて仁なりといふ説もあり、猶可ㇾ考なり

此度御問之條々、古學御厚志之程、いかばかりか欣喜仕候事に御座候、此返巻いまだ不ㇾ盡事ども多からん、又もとひ給へかし

享和三年五月廿八日

本　居　大　平

立　入　信　友　主

藤垣内答問錄の二

過にし春の頃、雲井の雁のかきつらね音づれ給へりし御文よ、程遠き霞の關の年月をさへ隔てゝ、いと覺束なく心にはかゝらぬ折侍らねど、何くれとほどくにいとなむ業の繁ければ、こなたよりはふりはへてしもきこえ侍らざりつるを、たひらかにおはしますなる御有様うけ給はるより先嬉しう、見奉りもて行くに、縣居の大人の歌の教を世の人の思ひひがめたるよしを、つぶさにことわり教へ給へることの、かう物うくおもなきものとしもおもほしけたで、へだて給はぬ御志の、みやびの道にとりてもいと賴もしくなむ、加藤の翁、此十年あまりこなた仕へわざを退き給ひて、もはら此道に心をよせ給ひ、君はた此年頃、縣居の御教のまことをたゞして、たゆみなく物し給へば、やんごとなきわたりよりも、常にこと問はせ給ひ、國々より參り集へる人々も、其教におもむき、天の下に聞えわたり、かしこき雲の上人も、都に名高き歌人も、只其わたりの歌どもをめで給ふとかや、縣居の教とはいひながら、御自らの力しるく、とりくにめでたくなむ承り侍りぬる、さて物あらそひはよき人の好むまじき業なれど、あがりての代のみやび事にも、春秋の爭といふ事も見え、かの腹立ちたりし歌人のいへりけむ、歌合はいふも更なり、木草の花、繪合などいふ事も、早くよりきこえ、又歌の姿を、近代古體などいひて爭ひたる事も物に見えたれば、此度の御論ひも、いとみやびたる業かなと、興ある事に見給ふれば、おのれひとり見過し侍らんもこちなくて、親しき友達にも見せ侍りつるを、見る人ども見もてゆくまゝに、とあればかゝりなど定めあへりけるを、さるおのがどちのうちとけごとを、きこえさせむも片腹痛けれど、御徒然ならん秋の一夜は、さぶらふ人々に讀ませつゝまぎらはし給はんくさはひにもと、みだりがはしういひしろひたるまゝに、本末もたどらず書き續けて侍るを、伊勢の海によせける波の返り事とは聞えさせ侍るになむ、近き頃萬葉風の歌よむ人多く出で來ぬれば、大平が許にも、そこかしこより見せにおこせたるも、又殊更に物のついでに乞求めて得侍るも、そこらつどひて侍りければ、それ選り出でて、八十浦の玉と名づけて、弄ばんとし侍る事は、古き代の人の心詞を、千五百年の後の今にして、いとよくまねびうつせるさまなる巧の、めでたく、はた神代の傳へ事も

うとからず、我みかどのもとの手振も違はず、いふ言の葉のさまも、ゆがみ亂れざりつる程の源を、慕へる心ばへのまめまめしうおしはかられて、いみじう尊とまるゝ心よりなりけり、これはしも、もとより縣居の大人の御心にかなひて、いとよき事なるべくぞ覺え侍る、其よしは、わがみかどの物學びといふは、古への道を尋ねて、神代の妙なる有樣を、我もさとり、人にも示し侍るなむ、むねとたつる本意にはありける、今更なるきこえ事には侍れど、古への道をさとり明らめ、神代の尊とき物の始のことわりを、ほのかにも辨へてんには、萬葉集の歌をよく思ひ解きて、其代の調をよく知り、雄々しく直かりつる人の眞心を知らでは、得あらぬ業になん侍ればぞかし、さるはかの大人の、萬葉考の端書のをち〳〵、又新學などいふものにつぶさにあげつらひ置給へるを見侍りて、げにさる事と深く信じ侍るになむ、さるを此度こまやかに教へ給ひあげつらひ給へる、御文のくだり〳〵は、其旨違ひたるやうなるこそいとあやしけれ、などやうにいへば、一人がいふやう、抑此文に、縣居の大人の教とし樣々いはれたる中に、花山一條の御時に至りては稍下れる世の樣も出來ぬれど、猶古への心ばへの殘りたるふしも多かれば、まねびならふべきさまも少なからずとあるを、或歌人の、心得難く思へる由いへる答に、翁の古へ振といへるは、大方に廣く古へをさしていひ侍るなり、必いづれの御時などと狹く思ひ侍るにはあらず、そは專ら古人のみやびかにまことなる心ばへと、ゆるやかにのどかなる姿詞とを學び侍る事にてぞ侍る、とあんなるを、今よく思ひわたし侍れは、古へ振といふ事を、しひて花山一條の御時迄にいひ廣げたる也、古へを大方に學ぶべしといふ事を、くり返し〳〵いひたてられたるは、今の世に古へ振とて物する人々、花山一條の御時のよろづのみやび業の盛なりける程を、おのが古へ振の方に領じ入れて、こゝに憚りかしこになづむ事なく、所を廣くなして、珍らかに新らしき事をよみ出んと、かしこくかまへたるものなるべし、縣居の大人の著はし給へる書どもに見えたる、古へといふ事は、まさしく萬葉集のほどをさしてのたまへる事、いちじるかなるをやなど、此度の御あげつらひをいひ破らんとて、もとより淺はかなる人の、誇りかにいひつゞくるもいと惡くしや、又一人はさなのたまひそ、已れ等はかくなむ思ひより侍るとていふやう、先つ頃縣居の大人のよみ給へりし歌とて、四十四五首短歌の限を集めて、かの大人、始の程の、後の世の風に

よみ給へりしは更にもいはず、又いたく上つ代の振に長歌等もよみ給へりしかど、後にはそれらを心にもつかずおぼしければ、物にはかきとゞめ給はざりけるを、只此一卷ぞ、我志す旨なるとて、かきとゞめ置給へりしかば、此姿とかの御本意にはありけるとて、宇萬伎の翁の傳へ給へりきとて、人の見せけるを寫しもたるを、其歌どもの中には、全く萬葉風といふべきも交れゝど、多くは、本の句は古代の心詞ながら、末の句に至りて俄にゆくりなく後の世めきたる事も交り、或はあざやかに文字どまりによみとぢめたるなども見ゆるは、ひとへに萬葉風にはあらぬを、いとあやしき事と年頃疑はれ、又上つ代の言の心を考へ給へる註釋こそ、こし方行末にもあり難く世に秀給へる大人なれ、其古へ振の文とてかき始め給へるも、勢のみ強く烈しき所あれど、餘りに筆の力すぐれ給へるけにやあらむ、しひて聊なる事のとゝのへにかゝはり給はざりつる所々など交れるを思へば、此短歌どもゝ、萬葉風ながらここに一つの姿なるべし、唐やまと昔より物の始を起せる人は、さのみこまやかに物にかゝはらぬ所あるものなれば、此大人も齢の末にしかおぼしとりて、今一わたり考へただし給はんにいとまなくてややみ給ひにけむ、いとかしこく

心高く思ひおこし給へるにあはせては、又かたなりに行き足らはぬ所々も交れるを、さしもかゝはらで其まゝに記し置き給へりけるにこそと、愚なる心の中々に憚もなく、しかおしはかりて侍りつるを、今よく思ひ合せ侍れば、狹く萬葉風にのみより給へるにはあらで、廣く今の京花山一條の御世迄をとり給へる御心の仕業なりけりといへば、さかし、其歌どもの後の世めきたる事どもの交れるを、かしこきかげと頼みて、此くだり〳〵に古へを大方に學ぶべしといひ、又かの大人のすぐれたる事をいはんには、古へ振の歌を唱へられたるをこそ、よろづが中にとり出でていふべき事にぞ、などいはれたるなるべし、などいふもあり、今一人がいふやう、されどそは廣く物見しれるざえのきは異なる人こそ、後の鄙しき姿くしたゝめ出づべけれど、さやうに、藤原奈良の御時より花山一條の御時迄の歌を通し見て、そが中によきふしと悪しきふしとを心に辨へ置きて、其世々に上り下りて心のひく方につきて學ぶべしとは、あまり打ゆるべたる教にて、おのがなみなみのなほ〳〵しききはは、そらにしめゆふ心地してそこはかとたづきなく思ひ惑ふべし、みづからは心高く古へ振と思

ひ上りて物すべけれど、さては少しもかどあらむ人の眼にも耳にもとまるふしは少なくて、數多くよみ出む中には、ようせずば、むげに近き世の鄙しき方の心も詞もひきまぜつべううしろめたしや、などいひしらふ程に、皆人々、思ひ〱にいひ試むとて、只大方の歌の論ひになりゆくもあやし、又一人後鳥羽土御門の御時なるは、其頃一ふし異樣なる手振の出きて、まことなき歌のみ多く調ものどかなる姿を失ひ來ぬれば、まねびならふべくもあらずなむとのいさめは、誠にさる事にて、何がしなどもしかなん思ひとりて侍るを、かの頃ほひは、人々歌よむ業に殊に心を碎きて、其さま妙にあやしうすぐれたる御代なりければ、さる歌人の夜晝となく思ひいれて、われ人に劣らじときほひあへるから、心も詞も珍らかに面白きふしの、多く出來けるまゝに、そなたざまにのみ進みもてゆきて、あながちなるふしも交り來て、遂にいかにぞや覺ゆるさまとはなりにけるなり、されどそのかみの人々の歌には前にも後にも類なくすぐれたるが多ければ、今ともかくもいひくたさんは、且はおふけなき業ぞかし、猶いはゞ詞は三代集にならひ、心は人のいひふるさぬ事をとの教などは、此度のあげつらひの心ばへにもひとしきをや、又それより後は更にいふべくもあらずこのきはは、後深草龜山の御時の程より、大よそ今の世に至るまでをいひたるにや、さるは漸々に歌の道とて、これを物するをわざとのことにたてゝ、其家などこののしり、師のつたへなどいふ事を、こと〲しくもてあがめて、其のりにいさゝかもそむかじと思ひ守り、題よみのみ多くて、其姿は、或は人の家の調度がちにさま〱置き並べたらんやうなるも、又思ふ心をたゞことのやうに續けたるもあり、又人の詠ふるさぬ樣を思ひ巡らして、一ふしに又一ふしをとわりなくもてつけたるなど、すべて何の匂はしきくさはひも見えず、心にくゝゆかしき隈もなければ、いと淺々しう品下りたる、げにいふべくもあらねど、此際にも又きざみ〱ありて、其程のならはしにはかゝはらで、かのたゞしくことわりたるよきみちびきに從ひて、調なだらかに心詞たゞしくやすらかならんと心して、つゆにてもあやしく異ざまなる巧はまぜじと愼しめるは、耳とまり目とまるもありて、かのすぐれたる代の歌人たちの、心に任せていひ出たるにはまさりざまなるも選り出でつべうなむ、これを今の世の正風體とかやいひて、皆題よみのもととして、此のりに從ひ此姿を學ぶとはいひはいへど、ともすれば一ふしに一ふしをとたくめる

方にぞ流れやすかめる、さるは中昔の世のみやびわざはいかなりけん物ども知らず、只近き代の人のよみ置ける歌をのみ見て、それにならひもし、一ふし添へもして、心を遣りて過すなむ、いと淺ましきならひなりける、中昔の人々の集、又樣々の物語文などを、朝夕に弄びて、其世のみやびわざを心にしめて、腹の内に滿たしめたらん人の、見る物聞く物に觸れて、言の葉に現はれ出たらんぞ、物のあはれのまことを違へず、何のふしもなく打よみたるやうなるも、打聞くまゝに、艶にも、をかしうも、あはれにも、悲しうもあらむかしなどもいふなり、又は寛保寳暦などの頃ほひより、萬葉風に思ひよれるも、新古今風に心ひくも、又古今集より金葉詞花のわたりまでをと志して物するもありて、樣々にわかれたる姿、いづれもおのがじしの立てたるむねあめれば、今いづれをいかにとことわらんことはいと難しかし、されど此三つの姿も其程の姿をよく守りて、いとしるくけぢめ見えたるは、きはことなるを、なほ〳〵しきがしひてもてつけたるは、そこかしこ打あはず片腹痛き事多くて、かの題よみにのみかゝづらふ後の姿の品下れるにも、中々けおされぬべかんめりなどいふ、さて又かの或歌人にいひ聞かせ給ひつる、新古今集の頃ほひの姿詞に心入れて、えんにをかしうよめる歌どもを、難じ給へる御あげつろひどもを見て、又一人がいふやう、此あげつらひの中には猶いかにぞや覺えて、うけられぬふし〳〵もなきにはあらねど、大方かの代の歌どもを難ぜんには、此あげつらひのやうに、まことを失へりと見ゆる事の多かれば、大むねは違へるにあらねば、いかにぞやと心得ぬふし〳〵も皆おしこめて、げにさる事と聞なし侍り、此異ざまなる手振の、まことを失へるは、早く千載集の中にも、姿詞優に淸らなるが見ゆるなむ、其始めなりける、何がしの抄に、かの近代古體の爭とて、樣々いひたる中に、此異ざまなる姿を、中頃に心よせたるかたざまよりは、すゞろごとのやうに思ひて、だるま宗とかや譏りたる由見えたり、其だるま宗の人々の思ひ給へるやうは、中頃の姿の世によみふるしたるは、大方一やうに定まれるやうなるを、俗に近し見所なしなどいひおとして、更に古風にかへりて、幽玄體とかやもてはやしそめたる也、中頃の方の俗に近しといふは、後拾遺より千載集迄の中に、物のことわりなどをいひよそへ、詞のかゝりをむねとこりなしたるなどをいへるなるべし、古風にかへすとは、古今集の中に、心ひとへにして、姿詞のびらかに、たけ高くよめるによ

れるをいふ也、されどしか、古風による事をむねとして、それ又一つのさまとなりて、其中には、中々に厭へる中頃の樣にも劣りて、異さまなる事のいでこしなり、すべてのこと、よき事も餘りに盛になりぬれば、必惡しきふしの出くるわざにしあれば、こは必かくあるべきことわりなり、そのかみの人、かくまことを失へるよなど、後の人に譏られん物とは思ひはかり給はんや、これなんかしこき人のさかしうしいでたることは、かへりて思はずなる横さまのひがことも引き出る例なりける、されば、今かの新古今の程をわろしといひて、歌はかくこそあるべきものなれと思ひ定めたるあげつらひも、又後の世の人、いかにいはまし、とてもかくてもおだしう世に從ひて、おのづからに遷り行く勢あらば、それにさかふ事なくて、さてあしうもてまがり、いやしうおちあふれ行かむ事どもは、もてかゝげつゝ、ことが中に、てにをはの定まりと、詞のつかひざまとの、過ちだになくば、世のつねになだらかに思ひ靜まりて、此道のみは今迄も猶、から心にもうつろはず、道々しきさかしらごとも交らぬを、悅びに思ひて、えせ〳〵しう人の目とゞむまじきをも、あながちに耻ぢ思ふまじうなむ、さて古風とは、大方に廣く古へをさして、必い

づれの御時など狭く限る事なくて、一首をよくとゝのへたらんには、古へと後との詞を交へ用ふとも、其けぢめ見ゆべからず、心詞の大方は古へにならひて、さて新らしく珍らしきふしをこそよむべけれ、後の鄙しげなる手振はすつとも、又いたく古へになづむ事なかれ、歌は我心を述ぶるものなれば、一つ我姿をよむべきなりとの教は、いと心高くめでたけれど、それが中に我姿といふ事こそ、いと〳〵大事なるべけれ、萬葉集の卷々をよく明らめ、後の代々の撰集どもをもよく心得て、おのが物となし得たらむ人こそ、古へのまことを失はぬほどの、御代〳〵の間を上り下り、代々の歌人の拾ひ殘せるめでたき詞を、おのが物とはとりなしつべけれ、未だしきほどの人々の、此教を教と立てゝ、新らしく珍らしきふしなどを、心がけむほどに、もとより身は今の世の人にして、又代々にうつろひきたる後の歌とても、むげにことものならねば、おのづから入り亂れて、とりはづしては、鄙しき後の心詞などのまじり行かむには、彼幽玄體ならねど、又一つの異ざまなる流ともこそなるべければ、遂に又百歲の後の譏や猶苦しからむと、味氣なくいひ定むるもあり、又一人は、又思ひ侍るに、此縣居の教は、心は藤原奈良の手振にならひ、其詞

は、花山一條迄の程を廣く用ひてよとの御おもむけには侍らずや、扨はもはら藤原奈良の方によりながら、事のさまに從ひては、花山一條迄にもわたりて、廣くいごめ給へるにて、古風といふ名にもいとつきなゝしうなむ、さるを、新らしく珍らしきふしをと心懸けんには、おのづから心も姿も、花山一條の程どもはらとなりて、稀々に藤原奈良の御代の、古き詞などのふと立交るのみならむを、いかでか古風とはいふべき、今の世には、さる歌の多く見ゆめるは、かの縣居の教を守るといふは、只名のみにて、誠には後の世に流れたるなり、花山一條の御世までといひはいへども、其よめる歌の心詞、それより遙かに後なるが交りて見ゆるは、萬葉と古今集とのさかひは、けぢめいちじるく、古今集よりこなたは、代々のけぢめいちじるからず、定家卿ものたまひし如く、歌によむべき限の詞は、大方三代集に盡きぬれば、稍遙に後の世の言葉遣ひとても、さだかには見えわかれ難く、心はたましてふとわかるべくもあらざれば、おのづから、後の世の方には流れやすきなめりなど、はやりかにいふもあり、又いでや古風とは、萬葉集の程をこそいはめ、古今集よりこなたをば、古風とはいふまじくこそおぼゆれ、神代より今の世迄に、歌の風

つぎ〳〵いたくうつろひ變はりたりとは雖も、古今集と萬葉とのさかひばかり、いとけざやかに變はりたる事はなくなむ、まづ長歌のさまよ、古今集に始めて、七五とついでたる句ども多く見えそめたるは、古へに違ひたる始にて、すべて短歌ども、一首の趣も詞遣ひも、さかひへだてゝ異さまなり、されば狹くはありとも、萬葉集のさかひに關すゑて、此きははきはとけざやかに定めて、正しく物したらんにこそ、今より後幾千代を經とも、心も詞もゆがみ亂れ行く事なからめ、大方に古へを學ぶとて、花山一條の御世迄を、一つにおしこめて物したらんには、様々のまじりものになりて、いとこちたきさまならんといふもあり、又題よみは只、初學びの程のしわざとして、まことの歌は、世中の萬づの事に觸れ、見る物聞く物につけて、よみたらんには、古言に限るとも、藤原奈良の世の、口まねのみにはあらじ、古言といふもの、狹く少なきやうなれど、言葉の助とかやいふこともあれば、萬の事、歌によみ得られぬふしもあらじ、姿詞みやびかにをかしきをと、こと選みなどせん人は、われと異なりなどいひあへりける、（大平ノ詞）今の世の姿を守りて、えせ〳〵しき歌のみよみて、心遣らんも口惜しう、又奈良坂の手向に關すゑて、萬葉風をのみ守

り居たらんも、琴柱にかはさすとかいふらんやうにてこちたくはあれども、さりとて又、花山一條の御世迄わたりて、一首は其姿なるに、其世の人は聞きも知らざらむ萬葉詞を、折折引まぜて、それを一つの姿よと許さんも、とり／＼に捨て難き旨はあれど、猶いかにぞや覺ゆれば、いづれをいかにとも定め難きを、これは鈴屋の翁にことわらしむとも、翁の心、まさに大平が心と一つならんや、翁の心は、うひ山ぶみにもかつ／＼しるし、常の言ぐさにもいちじるきものをやとは、思ひ侍りしかども、かばかりめでたき御文見せでやむべきにはたあらねば、もてまかりて見せ侍りしかば、つら／＼によみ味ひて、いとよく書き給へり、猶あげつらふべきことは多かれど、あげつらひの心、本末通りてよくとゝのへり、かばかり詞よろしく物書きとる人は、今の世にはをさ／＼覺えずとて、我翁もいたくめで侍りきかし、そもまことの古風の捨て難きよしは、始めにもきこえさするやうに、人の物いひもいたくゆがめる事なく、其心もうらうへと飾りつくろふ事なく、大和魂とか、雄々しき勢を備へもたりける程の、いみじう尊ときなりけり、かゝるすぢはいひもてゆけば、かの大人の、新採百首の序、鎌倉右大臣の集の序などの口まねにやなり侍らむ、大平數ならねど、此まことの古風に心よせ侍りて、ひとへに此さまにこそと思ひよらぬにしもあらねど、吾師の翁の、古風は古風と物しながら、又後の世の樣なるをも、常に廣く物せらるゝも、深く考へわたされたる上にて、あるやうあるべしと、猶心ぎたなく從ひて過すになむ、しかはあれども、此八十浦の玉はしも、少しも萬葉風に近からんをとえり集め侍るになむ、これはたゞまことの古風に心のより侍ればぞかし、まことや、君はいさ知り侍らねど、加藤の翁、折折長歌は物し給ふなる、それはさはいふとも、萬葉風により給ふべければ、八十浦の玉の光に加へ侍らんこと許し給ふべくは、其由事のついでにとひ聞給ひてんや、これらの事いとこく物し侍るべかりつるを、もとより萬に物うかる身の、此四月の程より、さらがへりて、ちまたの塵に立まどるゝ事など侍りて、いとゞおこたり侍りつるを、秋霧の上になくなる聲を聞驚きてなん、あなかしこ、

八月朔日　　　　稻　掛　大　平

村田君の御許に參らす

又聞えさす、大平が返り事をも、我翁の見て、雨夜の品定の趣によく似たるかな、されど此あげつらひは、ゆきたら

はぬ所々多く、くだ〳〵しくて、はて〳〵はいづれによるともなきこといふかひなけれ、物定めの博士しあらば、かうはあらじをとて、打笑はれ侍りぬ、かくて猶翁があげつらひをも、問ひ聞かまほしけれど、板に忍り著はさんとする書どもの、よみ合せや何やと、いといとまなく物せらるゝ程にしあれば、さまではえ物せでなむ、又新古今の頃の人々の歌どもをあげつらひ給へるどもは、猶此外にもいと多かるべし、それらをこと〳〵く引きいでて難じ給ふを見せ給はゞ、其をり大平が思ひよれることわりをもきこえさせ侍らんかし、

稲葉集のはし書

此二卷は藤垣内翁の哥にて野への若草いとわかゝりしほとより鈴屋大人のをしへをまもりいにしへ學のかたはさらにもいはす歌よむことをもまめやかに心いれてやかてその大人のよみたゝしおかれたる姿にならひてみやひの心はへも言葉のことのへもひとつなかれはいとしるくなむありけるそれか中にはおのつからに汀の芦のひとふしをよみ出られたるもありてよにめつらしく紀の川水のいたりふかき心の底さへなむみえわたりけるさるはこゝらのとしころにいたつきて年ある秋の千町田ひろくわせおくてとうちましりてしなひさかえたるを稲葉集とみつから名つけおかれたるをはやく二十年あまりあなた稲掛氏と名のられしほとよりこひもとめうつしつたへて伊勢人のひかことおほきわかともからの哥まなひするには清渚の玉ともていつききたりつるをこたひさらに摺卷にとすゝむる人ありよりておもふに吉野の瀧のはやくより鈴屋集後鈴屋集なとは世にもひろくつたはりたるを此集のみそのまゝにうつし卷にておくへきにあらねは紫の名高の浦の名もいや高く吹上の濱のしら菊千代とほくつたへはやとそのよしこひ申てちかき年ころよみおかれたるをもあつめくはへてかくはものしつるなりかくいふは今の鈴屋のおしへ子にてこの翁にもものとひまなふゆゑよしあれはなりけり

文政七年甲申正月　　　　三井高匡

稻葉集題詠上之卷

本居大平詠

春歌

年のはしめによめる歌とも

あら玉のたつとしことに君か代をちよにといはふことそうれしき

君か世をいはふ言葉もうれしさのいろにいてたる春のはつくさ

はつ春の物のはしめのことのはゝまつ千代かけていはふ君か代

きのふまてこと／＼ならすいそき來てさらにそとろくけさの初春

物ことにめてたしとのみおほゆるはたつ初はるの人のまことゝろ

ともかくもたとらてたゝにうれしきは春こゝろけさの心なりけり

朝日影ゑみさかえつゝとりもちてかゝみにむかふ千代のはつ春

あら玉の初春ことに諸人のいはふちとせもわか君かため

元日

朝霞たちゐる袖もいろ／＼にはる來てみゆる九重の庭

あさゆふに君か千とせをかくなむとけふおきふしていのる初春

四方拜

となへます星の手向のともし火に夜ふかく春の光をそみる

供屠蘇白散

君かため千とせをこめて藥子のまつなめそむるけふのさかつき

小朝拜

春來ぬとたもとゆたかに引つらねうれしさみゆる雲の上人

腹赤御贄

仕へます臣のこゝろも似へしとやはらかの魚はたてまつるらん

國栖奏

春來ぬさことふくくすの歌笛は明の宮のためしとそきく

都立春

いつるより霞もそひて打日さすみやこのそらに春は來にけり

早春霞

きのふけふ雪けの雲も名草山かすみにかはる春ののとけさ

早春山

ほの／＼とたつは心のかすみかと山端たとるはつ春のそら

早春野

日影さすあしたの原のむらきえに春見えそむる雪のした草

早春海

紀の海や波路かすみてけさよりは春たちそむるうらの初島

うちけふり春たつゑみのさゆひさも波間にかすむ阿波の遠山

早春祝

たてわたす松にそしるき民の戸も君か千とせをいはふ初はる

天の下事なき御代を萬代と初春ことにいはふうれしさ

早春待花

うちつけにわかこゝろさへあら玉の春としいへは花そまたるゝ

霞たつみやまの雪のいろみてもまつにそかゝるはなの面かけ

子日興

子日とて袖ひきつれて姫小松こゝろを野へにあそふ初春

あかなくにかくて千代もとおもふとち松引あそふ野への初はる

野子日

いつるよりよはひをのへのけしきかな子日の小松ひきもひかすも
都人子日する野を見わたせは霞に千代の春そこもれる

子日祝

ねのひする二葉の小松ひきうゑて千とせすむへき陰とたのまん

また

千年つむよはひを野への子日とて松も若菜もためしにそ引

若菜

ふりはへてわかなつみにとゆく野へのたもとゆたかにみゆる春かな
七くさのそれかあらぬか同し名と春野のうはきけふやつまゝし
雪きえてあをむ波間のせり川につみつゝいはふ千代の古道
つめと猶つきぬわかなとしはの野にしは〳〵いてゝあさるくす人

雪中若菜

ふりつまぬほとにとてこそいそくらめみ雪かつちる野への若菜は
白雪はものうきほとにふる野邊もつむやといそく初若なかな

人の賀に若菜といふ題にて

老人をことふきくさとわかゝへる春野の若菜うへもつみけり

鶯告春

あひにあひて春とつけつゝ鶯のなくこゑさへにのとけかりけり

朝鶯

霧ふかみもとめわひてや朝妻のかた山さらすうくひすのなく
谷の戸はねくら夜ふかき朝きりにまとひてやなく春の鶯
竹ちかみわれも夜床にふしなからあさな〳〵きく鶯のこゑ
鶯の竹のねくらの聲ちかみわか朝床にきくものとけし

野鶯

うくひすのなくや初音も野へにいてゝまつとはなしにけふそ聞つる
あさな〳〵きけとも野へのはつ草のうらめつらしき鶯の聲

野亭鶯

ふしなからきけとや野へのさゝの庵にまた夜をこめてきなく鶯

谷鶯

いてたゝん都の野へのはつこゑをまつ口ならす谷のうくひす

山家鶯

世はなれて人來ともなき谷の戸にたれいとふらんうくひすのこゑ
山里の軒のたるひも下とけて涙あらそふうくひすの聲

故郷鶯

春くれは花やはさかぬふる里にいたくなわひそ庭のうくひす

梅

梅の花あかぬ色香と見るにはたをらまくもほしをらまくもたし

梅薫風

色よりもたか袖の香と思ふにそあはれ身にしむ梅の下風
いろ見えぬ風のゆくへも梅かゝのあはれは深くしる人やしる
見る人のあはれをそへて春風のまたたか袖にさそふ梅か香
めに見えぬ梅のにほひをふくかせのいかにしりてかさそひそめけん
心ありてよそにさそはぬ風なれや木の本ふかくにほふうめか香
めにも見えす音にもたてぬ春風をありとしらする庭の梅かゝ

水邊梅

咲にほふ下ゆく水に袖ぬれてをられぬ梅のかをやしめまし
さく梅の香さへやふかくうつるらん雫おちそふ花のかゝみは
影見えてしつく落そふ池水はそこにもうめの香やにほふらむ

梅

をしみつる隣の花もあるものを中垣こえてさけるらめかな

紅梅

色も香もあはれを外にやらしとや紅ふかくにほふらめかえ
はつ春の初花染のくれなゐにいろさへふかくにほふ梅かゝ
おくふかき色香をこめてきのふけふほころひ初る花の梅つほ
軒高くつまくれなゐにさく梅のいろかを誰かあふきみさらん

柳風

のとかなるかせのゆきゝは青柳のいとによりてそしるへかりける

水邊柳

たちならふ花の鏡の池水にほそきまゆねもうつる青柳

川柳

ゆく河のきしの柳の玉かつらかけにみえつゝなひく春風
うすこほりとけぬるせゝに枝たれて玉ぬさ川の青柳の糸

行路柳

さかぬまのみとりも花の都かなはきゝ春めくあを柳の陰
青柳の糸のみとりもあらたしく朱雀の大路春めきにけり

門柳

はるといへは柳のまゆそひらきぬるくる人しけき門ならねとも
心ひく妹か門とてゆくさくさなかめやらるゝあを柳のいと

泉暖草色緑

春風に野澤の氷うちとけてあふくみとりや涙の下草

野霞

もる人もたちいてつゝやたかむらん霞春めくとふ火野の原

水郷霞

心からわきてみなせの春かともとはゝや人にかすむ山もと

海上霞

花と見るたか家つとそいせの海やかすみの袖につゝも浦たみ

江霞

なには人わかすむかたやたとるらんかすむ入江なこきかへりつゝ

海霞

見てもしれかゝる霞そ津の國の春のけしきのたゝには立ける
みぬほとはなにはのうらと思ひこし春もくやし霞む海原

關霞

逢坂やこえし關路のほとよりもへたてゝみゆるはる霞かな

霞といふ題にて

春かすみ何からみむ花の枝にかゝるは同しこゝろとおもへは
うらやまし四方の山への花の枝をたちもはなれぬ春の霞は
野も山もかすみのとなみ春のきてのとけさもれぬ百鳥の聲

餘寒

くらへてはさしもあらしの冬よりも身にしみ増る春の朝出
きても猶はるの光のぬきをうすみ霞のそてにさゆる山風

春望

かくはかりかすむ難波のかたはしもいかてかたらんいへはえにして
いへはえになか〱なれと難波かたおしこめかたく霞む春かな
難波かたいはねとあすも立かへりこやとはかりにかすむ春かな
來てみれはかすむ海へにすみの江のあまも春をそほこらしけなる
春ふかみあさのとまやにかりてほすめもはる〱とかすむうたはら

いそちかくわかめかりほすあまの子の宿もしられすかすむ春いた
ひさかたのあまの子ともゝなかき日にみたれてあそふ浦のいとゆふ
浦のあまのめかり舟ゝくいとなみもかすみへたてゝ見れはのとけし
かすむ日はすむ浦人に立ましりみるめからはや春のうなはら
あま人の目かるゝ舟に引かへてかすみかけほす春のうみつら

同し心を古風にてよめる歌

春霞たなひくなへにこきいてゝ海原みれはあやにゆたけし
難波潟堀江こきわたり霞たつ長き春日にうらくしよしも
なにはとたこきいてゝみれは玉はやすむこ山遠ゝ霞きらへり

春曙

見なれつる松のたちともたえ／＼にあけほの遠、霞む山本
河浪ゝかすみのをちに見えそめて山はをくらい春の曙
春にのみありてゆかなん水無瀬川山本かけてかすむあけほの
あかめやはかすめる花のよこ雲もみねにわかるゝはるの明ほの
朝日山にほふさくらの見えすきてかすみも何かうちのあけほの

若草

消そめし雪まはかりと見しいろもひとつにあをむ野への若草

春雨

春雨の音もせてふる此ころよ人はましての庭のさひしさ

春月

のとけしな月の桂もうちけふり木のめや春のおほろ夜のそら
天の原みゆるまゝなる影ならはのとかにわたれ春のよの月
くれふかき花の木のまに見えそめて光もにほふ春のよの月

歸鴈

ちる花を羽風のとかになさしとやさかりすくさす鴈の行らむ
鴈かねのかへる雲路の春かすみたつといふことはたれやをしへし
さきぬとて軒端にきなく鳥もあるを花にわかれて歸る鴈かな
春霞野にも山にもたつよゝに鴈も田面にあるそらやなき
百千鳥花にさへつる春にもあれ今はとかへる鴈や何なり

野遊

思ふとちこゝろのへに長き日のくるゝもしらすあそふ春かな
みやこ人袖なかすみにこきませて野へのにしきもあかぬはるかな
立ましるをとめか袖のいろ／＼もかすみになひく野への春かせ

呼子鳥

春さむみまた花さかぬ山のおくに何を見よとのよふこ鳥そも

野菫

同し野のすみれつみにとこし人はしるもしらぬもむつましきかな
あくかるゝ心のはてもしらぬ野にかくてすみれの花やつまゝし

庭菫

うつしうゑて庭に朝夕みる／＼も猶なつかしきつほすみれかな

花

外にまたならふ色なき花なれは櫻そはなのみやこなりける
咲にほふ花の一よにあかす見るいくその人の戀かこもれる
春ことにあかぬ木陰に立なれていくしほそめつ花の衣手
あかす見るこゝろの色も年毎にふかゝなりゆく花のこのもと
かゝはかり心にふかくしむ花のはてなきいろを春にとはゝや
見る人の心の花は春をへていろこそまされうつろひやする
百鳥のさへつりかはすこゑ／＼もこゝろよけなる春の花園

あくるまをうめうくひすにいそかめやしつこゝろなき花の朝戸出
とふ蝶のぬるまはかりをわか身にてあくれは花になるゝ春かな
春をへて色香かはらぬ花みれは雪とふりぬる身のみはつかし
まちえては花も命もあたならてことしの春もさかりをそ見る
命たにをしむにとまる世なりせは花はさきちるいろもなけかし
春ことの命さへこそをしまるれ咲ちる花のあかぬいろかに
めてきつゝかしらの雪も年ふかくつもるを花よあはれとは見よ

待　花

うくひすのなくねうれしくきけは又木つたふ枝の花そまたるゝ
まつほとの心つくしを花もしれちりたにすゑぬ庭の木のもと
みとりそふ柳か枝のはるさめにならふさくらの花そまたるゝ
花もさはしりて中〳〵つらからん物いそきする老のならひと

初　花

雪をのみ見つゝうらみし山端にさけは櫻もさきそめにけり
かさりあれはまちし日數も明くれて花さく春になりにけるかな
うれしさそせはき垣ねにあまりぬる花待いてし庭の木の本
まちえつる心のいろのうれしさも一木ににほふ庭のはつはな
咲そむる花もしらなん外にまたうつさぬ人の春のこゝろを
立田山けふより涙のいろみせてをのへににほふ初さくらかな
白雲のたつたの山にけさよりはにほひくはゝるはつ櫻花

盛　花

たくひなき色香にいとゝ色も香も咲くはゝれる花さかりかな
けふそ又いつれの山をたつねんとわけぬにまよふ花さかりかな
たか里をまつはとはんのこゝろさへひと方ならぬ花さかりかな
見れは又われもさかりにかへるかと老わすらるゝはなの色かな

花下會友

さく花を思ふ友とちあひ見つるちきりもうれし春の木の本
たつことはたれかおもはん思ふとちなみゐてあそふ花の下かけ
心さへよそにちらさて花さかりあかぬ木陰にあそふ友かき
千世まてもちらすはちらてともに見むあかぬまとゐの花の木の本

折　花

さくら花をらてかへらは何ゆゑにくれし山路と人やとかめん
しつのをか眞柴にそふる山つともをりしる春の花さかりかな

朝　花

起出てまつ見る庭の花の枝に朝日のかけもにほふしら露
おきて見るあしたの袖はさむからて色香身にしむ花の白雪
雪とみる花にやよひの朝さむも袖にうれしくかをる春かせ

夕　花

まさるらん空のいろとも見えなくに花にあやしき春の夕はえ
長き日の夕くれまさる花みれは猶そよのまのいろもゆかしき

月前花

よるは又月の御舟のひかりさへあかすさしそふ花のしら浪
花にあかぬけふのこよひと木の間より月さへみえてにる時もなし
にる時もしく物もなし月に見るけふのこよひの花の下かけ

霞中花

ぬきうすき霞の袖のたえまよりちらてこほるゝ山さくら花
こゝかしこ花やさくらんみわたせは色のちくさにかすむやまのは
かすめともたれからみむ花のかけちくさなからににほふ山端

雨後花

ふるほとはしをれやせんとみし花もはれて色そふ庭の春雨

雨はれて色香もいかにそひぬるとたちやたれまし花の下露

山花

よしの山雲となかけそわけ入て花と見るたにあかぬさくらを

みよしのや花の雪きをみわたせは綠はつかにましる山松

御舟山かせそたよりのしるへにて花の香たとる峯の白雲

谷花

咲いつる花の色香は谷陰もみやこの春におとりやはする

森花

風ふけとちらぬさかりの白妙はさなからおほふ衣手の森

湖花

花ならしと思ふこゝろのうら風も比良の根遠くにほふ白雲

海邊花

しかの海人は花のみるめをかりそへて春の心やいかにいとなき

池花

きしちかきはなのにしきなおりそへてあやにえならぬ春の池水

山家花

世はなれてのとけき山のかけにこそまさるさくらの色もみえけれ

閑居花

さけはかく花はさかりの色みてもとはれぬ宿の春そさひしき

故鄕花

まちつけて花はさきぬる故鄕も人め見えてやちらむとすらん

田家花

さくらさく庵は背面のあら小田をかへす〳〵も花や見るらん

都花

咲しより野山の春にあけくれて花にいとなきみやこ人かな

ましるかな大宮人も山かつもはなにへたてぬ春の木のもと

咲花のみやこは四方の梢まてにしきにたゝむ春の山のは

名所花

雪と見てこまやなつまむ白妙ににほふ眞土の山さくら花

よしの山しるもしらぬもうとからす花に分いる春の旅ひと

さかりとて色もにほひもそらにみつ花や倭のみよしのゝ花

寄夢花

夜もすからちるとみるまの花よりもさむるそをしき夢の手枕

もろこしのよしのゝ山もほとちかく花にわけいる春のよの夢

花時鞍馬多

もの見ると馬もくるまも行ちかふ花の都は今さかりなり

依花客來

君こすはうらみてのみやちらさまし年にまれなる花の盛を

まちえすは待えさらましくる人もとしに稀なる花のさかりを

糸櫻

いとさくら梅かゝそはゝいかはかり柳くるしきしなひならまし

曉庭落花

ちるほとのうきめを人に見えしとていそくか花の明くれの庭

朝落花

やとりせし山櫻戸の朝ほらけきのふの花も春の夜の夢

やとりして春の山へに見しよはの夢もまさしき朝嵐かな

さくら花ちるまをたにも春のよの見はてぬ夢とさそふ山かせ
命かはみはてぬ夢もをしからす櫻ちりしく朝戸出の庭

夕落花

しはし猶ちるまをたにも人かたの目かけも花もをしさ夕くれ
くるゝ日とちりゆく花と二かたにをしむ心のいとなかりけり
花とちるけふの夕はあとたらてくれゆく色ををしむ雪かた
花と見るけふのゆふへは跡ならて散行雪ををしむ木の本

夜思落花

雪とみむあすよりもまつ色きえてくるゝをゝしむ花の夕かせ
櫻花ちりのまかひの面かけもこゝろにさわく夜はの山風

山落花

いかにせんおほふ霞の袖をうすみ花もみたるゝ春のやま風
風ふけは水なき空にたつ田山ちりかふ峯の花のしら波

野落花

うくひすの羽かせもつらし櫻花なく野へことにちりぬと思へは

川落花

又さらにをしまさらめやさくら色にちりてなかるゝ春の山河

池落花

かはつさへわれうくひすにおとらしとちりしく池の花に鳴なり

庭落花

雪ならはをしむこゝろのそはましや櫻ふりしく庭の木の本
ちりぬやと人のとひこは花の雪庭のいつこに跡ゆるさまし

落花散衣

ちりくるをはらひたにせし櫻花おほふはかりの袖ならすとも

春駒

人にこひ人にかはれすわかまゝに草はみあそふ野への春駒
日にそへてみとりそひゆく若草にわかこまなるゝ森の下かけ

梨花

しら露に袖はぬるとも一枝は折てを見はや山なしの花

桃花

山里の垣ねつゝきのもゝの花梅よりのちのいろかなりけり
桃のはなかきねつゝきに咲ぬらしうすくれなゐに霞む山本

曲水宴

から人のあそひし船の面かけも川瀬にうかふ春のさかつき
言のはを思ひめくらすほともなく川せにくたる春の盃
さかつきにかけをうかへてのむ人も下てるもゝの色にゝほへり

遅日

朝日山いてしやいつとたとるまてへたても遠くかすむ夕くれ

躑躅

岩のうへにさけるつゝしのくれなゐはなつるをとめの袖かとそみる

山吹

妹に似るすかたをやかてつまこめに咲山ふきのはなの八重垣
ほとせはみしつか垣ねに色も香もあまりてにほふ山吹の花
行春もこえしとしはしとまらなん八重やま吹の咲る垣ねは

藤

みとりそふ松の梢にむらさきの色さへかゝる春のふちなみ
櫻いろにそめし心も此ころは又世になひく藤の下かけ
ふち波のかゝるも春の花とみむ色はさくらのゆかりならねと

年ふりし老木の松もふちなみの若紫にかへるはるかな
さく藤を見しのはるへきかたみとやちらぬ日數に春のけゝらん
うちはへて春の日數に咲あまるしなひもなかし松のふち波

暮　春

くれてゆく春をおもはゝ八重霞野にも山にも立やへたてぬ
なれ〳〵し花のゆかりにあかす思ふ春さへ今は暮てゆくらん

夏　歌

更　衣

花染の袖のわかれのかなしさもねにやなかまし蟬の羽衣
はなのかけなれしも夢か空蟬の羽衣うすく夏はきにけり
さくら色にしめし衣をかへまくはあならの花の袖の白妙
ふる衣花にきならし里人はぬきかふるをやあたらしといふ
衣かへしつ山かつも櫻麻の袖にきのふの春やこふらん
花見つゝ野原篠はら分なれし衣かへまゝをしきけふかな

春後思花

かきりあれは春の日數は過ぬれと思ふこゝろにゝほふ花かな

餘　花

夏かけてのこるさくらの花かたみめならふ色もなき櫻かな
こゝろにはのこる色香をしろへにてたつ山ふかくたとる花かな
さきてとくちらぬさくらは夏も又よそなる谷にたつねてやみん

新　樹

しけりあふ同し緑もその枝とさすかにしるき木々のいろ〳〵
山さくら青葉のかけもにくからぬ名に立よらん露のぬれ衣

卯　花

さくら色のそれにはあらて夏衣ひとへにしろく咲る卯の花
此里のかきねはかりのうのはないつこの雪のゝたけなるらん
草ふかみ又とふ人も絕にけり卯の花さけるゆきの山さと
過にける春のとなりの垣ねにはまた雪かともまかふうの花

葵

神山やあひにあふひの二葉さへ松にたくひて萬世やへん
露なからかさしてそしる玉かつらけふにあふひの神のめくみを

待郭公

あふきつゝまつの梢にほとゝきす初聲たかくもらせとそ思ふ
わひつゝも寐なまし雨をふれは又またるゝことのやまほとゝきす
春くれはまつなく鳥もあるものをまつにほとふる時鳥かな

人傳郭公

人つてもまつそうれしきほとゝきす此里ちかくなきぬと思へは

尋郭公

たつねはや忍ふの岡のほとゝきすまつきまつまの音をやもらすと
とふ鳥の聲するほとをかきりにもたつねやいらんやま郭公

聞郭公

あたらしきこゝちこそすれ時鳥ひとりのみきくよはの初聲
わかきゝとわれのみそきくほとゝきすたれも待にし初音ならねに
人もまたきゝつときけは郭公ぬしさたまらぬけさのはつこゑ

初郭公

ほとゝきす世にふりいてゝなかぬまやからくれなゐの聲の初しほ
世にしのふ初ねときけは時鳥ほのかなるしもうれしかりけり

雨中郭公

ほとゝぎすつらく忍ふのころもへてさみだれそめし空になくなり

夜郭公

郭公夢かうつゝかさだむへき今一聲もこよひすくすな

山郭公

しら雲の親の古巣やおもふらんうの花山になく郭公

たれをさは思ひいるらんつくは山しけき梢に鳴ほとゝぎす

旅郭公

音羽山こえゆく今朝のわかれぢに聲はをしまぬ時鳥かな

山路郭公

ほとゝぎすなれもやまとふ夏木立いるかたくらきうつの山路に

故郷郭公

松杉も木高きあらぬ故郷にものわすれせぬほとゝぎすかな

とふ宿の松も軒端もとしふりて空におほめく山郭公

社頭郭公

まもりますその神山のほとゝぎすたひらは千代と今も鳴なり

古寺郭公

郭公こゑのむかしをたちばなの寺の長屋にたれかきくらん

五月郭公

さつき山峯も尾上もほとゝぎすなく聲しけき時はきにけり

まつよひもまたぬ朝も待えつる五月をときと聞ほとゝぎす

樗

さはかりもたちおくれすは藤波に又もあふちの花と見てまし

ほとゝぎすをりにあふちの花なれは聲のゆかりにあはれとぞみる

早苗

五月雨のはれまもけふを初苗とまちとりかほにいそくをやまた

ふる雨に袖いかならん早苗とる賤か田哥のこゑはしをれす

袖ぬるゝうきはおもはて年あらむ秋をたのむにとる早苗かな

うきひち　手なひちひちてうゝるなへなへて早苗に青む千町田

見わたせはひとつみとりに千町田の田面おしなへ植わたしけり

墨の江やうたふ植女の田哥にも神のこゝろをとる早苗かな

端午

かりそめのことの葉草もけふといへは引てあやめにかくる諸人

ためしとて六の司のあやめ草御階のもとにけふそひくなる

生出しうきをもけふは引かへて玉の臺にふくあやめかな

ほとゝぎすそれならぬ根も雲の上にけふもてはやすあやめ草かな

いつかともたれかあやめはわかさらんけふ諸人のかくるかつらに

をちこちに蓬あやめそかをりける風も軒端にふくとしられて

菖蒲

何ならぬ里のしつやの軒端にもけふのならひとふくあやめかな

賤か屋もあやめかりきてふきわたすけふのためしそみやひたりける

むかしより人にひかるゝあやめ草根さしにふかきゆゑかあるらし

おのつから高き軒にもふかるらんひく人の手になひくあやめは

むかしより沼のあやめの長きねにたえぬためしをひきてしるかな

五月雨

さみたるゝ心のはてもいつまてとしらて日をふる空のいふせさ

世にふれはかゝるや人のこゝろともなかめてしりぬさみたれの空

はれまゝつ人の心もはて〳〵はさみたれぬへきそらの雨雲

外よりもはらふ嵐の山見えてまつはれ初る五月雨のくも

新　竹

ことし生のみとりもいろは若竹のたわむをそれとおける露かな

照　射

ともしてまつ山かけにしかそおもふ戀する人の心つくしも

蚊遣火

すゝしさをまちとるほとの夕風にいふせくくゆる里のかやりひ

螢

やとる夜はなれもすゝしきかけそへて螢とひかふ飛鳥井の水

音羽川わたるとなしにゆきかへりせゝに見なれてとふ螢かな

夕つゝのそれかと見えてくるゝよりかゆきかくゆきとふほたるかな

思はぬをおもふ思ひか行水にかすかすうつるなつむしのかけ

蟬

いつまてかいくたのもりと秋風のちかき梢に蟬のなくらむ

夏　草

露をこそときとき風のはらへともかりもはらはぬ庭の夏草

なつ草のしけみか下に秋風のかくろひかねてたひくすゝしさ

夕　立

雲遠くゆふたつをちの山風にすゝしくきほふ軒の松かえ

風はやみ露も草葉も一かたに玉の横野をすくるゆふたち

ふきいるゝつゆのみたれも玉たれの內外すゝしき夕たちの風

かきくれて空も野山も墨染の夕立わたる雲の色かな

かきくれてふるの川水時のまにゆふたち渡る浪のおとかな

とりあへすぬるゝもすゝしかきくらしふるや三笠の野への夕立

夏　月

さしてこし岡邊の松の下すゝみたつをもしらぬ月の影かな

槙の葉井にもるすゝしさは夏としもしら玉しつくよはの月かけ

氷室山しけき木の間をもる月の光もさむき雪のむら消

あすか川ひる　あつさを淵と瀨にかへてすゝしき夏の夜の月

おりてきはすゝしからまし淸瀧や糸にかけそふ月のころもは

蓮

おもかけもよそへし池のはちす葉におくしら露や玉のかむさし

夏　川

すゝしさは此くれとてやこきつれて夕川くたるせゝのいかたし

氷　室

夏深き木立へたてゝよそにてるひむろの山のかけそすゝしき

納　涼

なにゆゑにこし松陰の圓居そと忘れてたとる風の涼しさ

入はてゝのこる光の暑さゝへすゝしくかはる夕やみのそら

消はかりひるまはありし露の身も夕はかゝる風のすゝしさ

水邊納涼

端居して月待よひの松かけにそゝくもすゝし庭のましみつ

日をさふる山松かねの岩間よりもりくる水の音のすゝしさ

里遠き板井の淸水むすふより夏もよそなる袖の涼しさ

袖ひたてむすふ泉のあたりには秋やとくると思ふすゝしさ

竹亭納涼

よるよるは夏をよそなる竹垣に秋風めくる庵のすゝしさ

風ならて露のかゝるも竹ちかみすゝしき庵のふしにしつへし

下くらきのきはの竹のよひよひに月吹わくるかせのすゝしさ

松下納涼

すみの江の浪よるきしの夕すゝみ松を秋風ふくかとそきく

船中納涼

濱つたひ吹上ちかくこくふねは秋かあらぬか風のすゝしき

すみのえの松かけちかくこきよせて夏わすれ草つみて歸らん

名所納涼

かつら川月の夜ころは影ちかく汀にいてゝすゝむ里ひと

すゝしさは外にもとめし水の上にすむ水鳥のかもの川つら

扇

草の露ひるまのみかは朝夕もおかれぬ物はたつのかはほり

盛夏不消雪　こは扇によみてかけるなり

あふきつゝ富士の高ねにくらへ見よなつのさかりにきえぬ白雪

六月祓

あらひてしこはへ螢の神もみなけふはなこしにはらふ川つら

住江の濱松かけにみそきしてのふるよはひや千代のとし波

衣手にすゝしくかはる川風ははらふみそきのしるしなるらむ

秋哥

初秋曉

みそきしてあかつきかへる衣手にすゝしくかはる秋の初風

初秋風

夏衣きのふなからの朝戸出に秋たちかはる風のすゝしさ

ふくかせもけさより秋のはつを花穗にいてゝ袖にかよふ涼しさ

玉すたれひまもとめつゝふくかせにわか身にそしむ秋の初かせ

おとろけは年のなかはも過にけり書みぬ窓の荻の上かせ

早秋露

秋の來て日數のほとはあさちふにふかくもおける庭の露かな

七夕霧

彦星の今や來ますと天の川霧のとはりをかけて待らん

七夕草

かきかそへこよひたむけむはつ秋の野へに紐とく七草の花

一夜あふ天の川原の戀草にわか七車つみてくらへん

七夕露

ひとよあふ天のかはらのさゝまくらうれしきふしも露そこほるゝ

七夕橋

一とせを思ひこかれし色見えてもみちをわたす天の川はし

たゝきよりかけてまつらん棚機の秋の手染のもみち葉の橋

あふことの遠きちきりをうきはしの名にさへかけてなけく大空

七夕川

天の河わたりせ遠く契りけんこゝろ淺さをたれにかこたん

七夕舟

いつしかとはつ秋風をまちいてゝこよひとわたる天の川舟

こよひとてとわたるあまの川舟はいくく夕浪かこかれきつらん

七夕虫

こよひとはかねてしるらん棚機になれもたむくるさゝかにの糸

なれもさは秋さり衣いそくらし天の川原にすたく機織

七夕萩

織女のあふ初秋とこまにしき紐ときわたす萩の花つま

七夕岡

こかれきて秋のあふせの舟岡にこよひなまめく女郎花かな

七夕門

神世より老せぬかとによりたちてこよひかはらす我をまつ妹

烏鵲成橋

かさゝきの羽根をためしによたく＼もたらへてわたせ天の川橋

七夕言志

ほし合のそらことゝはす此ゆふへあそふみやひそ雲の上人

空言とはすといふは實偽（ソラトイツハリ）を不論といふことなり七月七日夜奈牛織女の二星相會といふ諺は漢國にてもたしかならぬことをこゝにはた神代にもなきことなるをたゝはたつめひこ星なといふことのあるに思ひよせて奈良の御代の人々の歌におもしろくよめるうた万葉集に數十首ありて跡もなきそらことなれとも一つのみやひくさになりて後には乞巧奠なといふ事もありていよ＼もてはやして雲のうへ人の遊ひわさになりぬることをおかしのみやひわさやと思ひてかくよめるなりけり歌によむ故事ことわこはかゝるたくひそおほかるかし

同し題の哥

ならひとてむかしも今も言の葉をよみてたむくる星合の空

ぬは玉の一夜の戀をからやまとちゝによみたす言のはい友

七夕枕

久方の天の川原の七ふ菅秋のこよひのまくらにそかる

七相菅といふものは万葉集三ノ巻【四十六枚】天なることゝらの小野の七ふすけ手にとりもちて久方の天の川原に出たちて云云とありいかなるをいふといふことといまたつまひらかならぬことなれと菅枕といふこともあるに思ひよせたるなり

二星適逢

契ありて露のたま＼あふよはもふけておとろく天の川かせ

朗詠に小野篁村朝臣の詩に二星適逢未叙別緒依々之恨五夜將明頻驚涼風颯々之聲とあるによれり

星河秋久

はた物の石をためしにたつぬれは天のかはらな秋そ久しき

前漢張騫か故事に支機石あり万葉にはた物の云々といへることとあるに思ひよせたるなり

七夕別

漕かへる舟路夜ふかき朝霧にいそくもつらし天の川長

あまの川こよひ明ゆく朝きりや又一とせのへたてなるらん

野分

花さかりうたてあれぬる野分かたをしむ心もうちしをれつゝ

をしと思ふ花も心もをちこちにいりもみさせてふく野分かな

山家秋夕

時しらぬいほの中にのかれても袖にゆるさぬ秋の夕露

行路草花

露たからうつるを袖にしめ野ゆき紫野ゆきわくる秋萩

野草花

女郎花色めく野邊をさをしかのかよふやねたき秋の花妻

かすか野は秋さく花の七草も袖ふりはへて見にやゆかまし

庭草花

百草に庭を花野とうゑなしてわかやとなから心をそやる

草花映月

咲にほふ花野の秋をたつねすはいつこに見まし月の盛を

七くさに今一くさの數そへてひかりを花とましる月かけ

朝瞿麥

ぬれてそふ露の色さへちらぬまと朝いせられぬ床なつの花

あさかほ

月草のおたし花田に咲そめてあかすうつろふ庭の朝かほ

秋來ても閨の戸いそく明かたにみとりすゝしくさける朝顔

荻

あき立てすゝしき風をおのれしもまねきかほなる庭の荻原

いせの海やさやけき秋のをりしきて月にうれしきよはの濱荻

打しめり音こそたてね風みえてなひく朝けの霧の下荻

萩露

眞萩原玉ぬく枝の露なからをりてかさゝむ袖はぬるとも

萩のうへに鴈の涙のつゆ落て常世の玉のえたとこそみれ

おきわたす露をは露と誰か見ん玉の横野の秋の萩か枝

庭萩

中垣の露のへたてもおかめやは軒端にちかき萩の花つま

をしかふす野へをやなれも忍ふらん庭に露けき萩の花妻

野萩

秋の野の霧のたえまにからにしきはつれてみゆる萩の花妻

こゝかしこ花見てたてる小車の錦か野への萩のさかりは

霧中萩

秋萩のにしきえならぬ宮城野に夕のきりのたゝまくもをし

萩似錦

秋の野の花はちくさににほへとも萩の錦にしく色そなき

女郎花

さくはなけおほかる野へのめうつしもすかたことなる女郎花かな

朝女郎花

をみなへし霧もはれゆく名張野にいとゝ朝のおもなかるらん

月前女郎花

女郎花かゝやかしけにたてる野をおもひくまなくてらす月かな

雨中女郎花

をらすとも雨のふる野のをみなへしぬれきぬをたにきつゝたはれむ

初雁

をとめらかゆきあひのわせをかりかねも今朝めつらしく鳴てきにけり

雁

なくねさへそことさやかに聞ゆなり月によこきる鴈の一つら

雲外鴈

物おもふとなかむる空のしら雲にはれ打かはし雁も鳴なり

夜鴈

あくかれてねられぬよはの月影に鴈も床世やいてゝきつらん

關路雁

關こえてふく秋風に須磨の浦やおのか名づけて鴈もきにけり

田家鴈

わかれてはほとをへたてし鴈かねのいほちかくなく秋の小山田

鴈成文字

月のうちの桂ならねとそれと見て手にはとられぬ雁の玉つさ

野　鹿

秋さむく眞萩ちる野の夕風につゆ分ぬれてをしかなくなり

萩の花ちる野の露にわけぬれて妻とふ鹿やよはに鳴らん

あけゆけはなく音にそへてさをしかのいる野の薄露そこほるゝ

田家鹿

つまこひも今は穂にいてゝ小山田の庵のそともに鹿そなくなる

もりわふる秋の山田のいねかてに長き夜すからしかもなくなり

山家鹿

たつきりの籬のもとにまとひきて柴の戸ちかく鹿そなくなる

風前鹿

吹まよふあらしの風にきくつまもをちこちたとるさを鹿の聲

朝　鹿

小萩原ねての朝けのからにしきたゝまくさそなをしか鳴らん

から錦はさ咲野へにふす鹿のあしたたちうき音をやなくらむ

曉　鹿

鳥の音におとろかされてあかつきのわかれをなれもをしか鳴らし

夕　鹿

夕霧につままとはして宮城野の鹿も風まつねをや鳴らむ

霧中鹿

きり深き戀の山路にさをしかのいとゝまとへるねをやなくらん

庭　虫

むしのねもいろのちくさにみたるめり籬の花の露にきほひて

野亭虫

野邊ひろき四面の草葉の虫のねをあつめて獨きく庵かな

草の庵は壁の内外もひとつにて枕にすたくきり〳〵すかな

野　虫

秋萩の花のにしきなおる野へに手玉もゆらく鈴虫のこゑ

やちくさのにしきを野へにきてみよと人まつ虫もねやつくすらん

故郷虫

すむ人はあるかなきかの古里に虫のねしけし庭のあさちふ

月前虫

すみのほるかけにきほひてむしのねも月もてはやす庭の草村

霧中虫

きり〳〵すおのかなけきのそれなれや棚引のへに音をも立らむ

尋　虫

やとゝへは又ことかたにきこえつゝ松虫のねにまとふ秋の野

名所虫

すかたこへ見ゆやとちかく立よれはなく音も忍ふ野への松虫

宮城野の小萩か露をなみたにて風まつ虫そ聲うらむなる

秋　雨

こほろきのなく音やいかに村雨にしをれてなひく秋の庭草

月

たかめきて月やあらぬとかすむまて老となる身の秋そかなしき

つもりては秋もむかしの春の月わか身ひとつにかすむ老かな

なかめこしあはれはしるや秋の月秋の夜しらぬ老となるまて

秋をへてかはらぬ月の增鏡老となりゆくかけもはつかし

見る月の秋もむかしの秋ならてわか身ひとつにかすむ老かな

初秋月

涼しさもひかりもそひて夕月夜さすかにしるき初秋の空

上弦月

よひのまにいる弓張の月かけはをしめとえこそ引もとゝめね

八月十五夜

天（ソラ）にみつ秋津島根の月のかけもろこし人もこよひめつらん

さやけさの千夜に一夜の秋の月一夜に千夜の影やこもれる

ひかりかは夜にさへみてるもちのよの月をそ月のかゝみとは見む

八月十五夜の會に都の月といふことを

時も又秋つ島ねの最中にてこよひそ月のみやこなりける

同し夜山月

名に高きこよひの月も望の夜にふりそふ雪とみかくふしのね

望月

あかしかたこよひそ波のかへりてはひるもはつきの望月のかけ

あらたなる言葉の花もこよひさく月のかつらの光とそ見る

見る人の千里の外のあはれまてうつす鏡や秋のよの月

かそへつゝ日ころまたれしこよひとてくるれは出る望月の影

とことはにひるより晝につゝくかと月影しらぬ望の夜の空

くるゝより又も朝日のさし出て夜こそなけれもち月のそら

九月十三夜

咲菊の露にやとして一とせにふたゝひ月をめつる長つき

ゆたかなる水穂の國にめて初し千五百の秋の長月の月

見る夜はも長きか中の長月とめてそめし世をあふく空かた

めてそめし昔も遠き長月の月にちきらん行末の秋

長き夜を君にかけつゝ明らけき月もてあそふ雲のうへ人

おなし夜の會に月前菊

さく菊の星のはやしによる〳〵は月の御舟そ光さしける

廿日月

さしもまた光ほそくもあらなくにたれかはつかの月といふらん

翫月

影清み千里の遠の里人もねてあかさめや秋の夜の月

山月

をしみけん山のあなたのこゝろをもいてゝさやけき月にみるかな

野月

いつるよりいるをかきりと秋の夜の月にわけ行むさしのゝ原

森月

下草の下葉の露も見ゆるまて影さやかなる月よみの森

河月

月のうちの同し名におふ川のせに又かけやとす涙のさやけさ

石川や神もこゝろをうつすらん清きなかれにやとる月かけ

月の舟かつらの川にかつら梶かけてうかへる秋のよな〳〵

池月

月にうつす人の心をこゝろとややとしそめけん廣澤の池

海月

寐てあかす人もなにはの月影に誰さそふらむ海人のよひ聲

旅宿月

思ひいつる都のことは大我野にあはれをそへて月もやとれり

玉つしま清き渚の月見つゝさひかの野へにやとる旅ひと

宮人のかりねの露の跡とめてさひかの野へにやとる月影

名所月

水無瀬川あはれは今もありてゆく月にしるらん秋のさと人

引はへてたかさらしたの布なれは山の端しろき秋のよの月

雨後月

雨はれてよそなる空をゆく雲もあらしの末にみゆる月かけ

故郷月

深き夜の露にをれふすよもきふの月うちはらひとふ人もかな

月前露

鳴わたる鴈のなみたとおく露のかすさへ見ゆる月のさやけさ

月前管絃

ひくこともふく笛の音も大空の月にかよひてすめる夜はかな

糸竹のしらへは空にこゑすみて雪とふりしく月のさやけさ

いとたけのしらへも月の雲井まてすみこそのほれ秋のよの空

會友見月

おもふとちかたらふ月の圓ゐには心のくまも誰かのこさむ

圓居して見る夜の月も秋つしまくもりなき代の光なりけり

秋田

賤の男からきにぬれける衣手もうれしきいろにいつる小山田

擣衣

うつ人のあはれもいかにまさるらんふけて身にしむよはのさ衣

遠擣衣

よそなから打さゝ音も身にしむやいかなるいろの衣なるらん

里擣衣

さほかせの夜寒しられてふる衣きならの里に今そ打なる

月前擣衣

月清み千里のをちの秋風を身にしめつゝや衣うつらむ

月前菊

おく露のちと世の數もよむはかり菊さく庭にすめる月影

籬菊

菊の花にほふかきりは秋冬のへたてもしらぬ間垣なりけり

わかやとの籬の島にさく菊を波かとたにもよりて見なゝん

名所菊

吹上の濱のまさこのありかすに千世やゝらふる菊のしら露

松かけに盛久しき色そへてきくの花さく巖よしのはま

さく菊の花ある里と秋は又鴈もきつゝや住よしの濱

よせかへる浪もひとつににほふかな菊咲わたる吹上のはま

重陽宴

さゝ菊も星かとまかふ雲のうへにひかりさしあふけふの盃

千世いはふかさしの菊の露のまに老わかえぬるけふのさかつき

紅葉

秋山によせし心のみやひをもとりてそ忍ふもみち葉の色

庭紅葉

外よりは色もあはれもわか物と見るにそふかき庭のもみち葉

夕紅葉

かきくらししくれにくるゝ秋山の色は朝日にまかふもみち葉

霧中紅葉

秋きりの絶間にみゆる朝妻の片山もみち色そゆかしき

岸紅葉

舟なから手をるはかりに見し岸もよすれは高きもみち葉のかけ

山紅葉

あさ日かけむかふ立田の神山に照妙まつる秋のもみち葉

手向山神の手向のにしきとて千代へて絶ぬ秋のもみち葉

暮紅葉

こかれこしわか心をもされはよと峯のもみちの色にみるかな

秋木

山木のあかきの楢見わたせは葉のみか實さへ色付にけり

秋鳥

秋の田をかりもいつしか鳴て來む稲負鳥はけさそ聲する

倦秋

長月とたゆめられけて秋もはやつこもりころとなりにけるかな

つひに又紅葉も菊もと思へはうつろふ秋のをしくもあるかな

きゝ紅葉とたえのふけふめてそめて秋はてぬまにはつる秋かな

暮秋虫

うきなからなれこし秋のわかれちとをしみて虫のねをや鳴らむ

暮秋雲

ゆく秋の空のかたみとなかむれはたゝよふ雲そ袖にしくるゝ

冬哥

時雨

一しくれかわく日影もかきくれて又音つるゝ庭のもみち葉

そこかしこ落葉かうへにおとつれて雲もまはらにふる時雨かな

雨雲はおよはぬ里も吹まよふ風にたくひてふる時雨かな

音たてゝふるかときけはさむるまの夢よりはやくゆく時雨かな

吹まよふあらしの雲もうすくこく紅葉の山をゆく時雨かな

高砂の松にいくたひ下葉たにもみちよとてかしくれふるらん

たかさこの松もしくれの音はして外山にかゝる風の浮雲

山家時雨

をりしもあれ柴の煙に立そひて軒端しくるゝ嶺のうき雲

旅宿時雨

跡もなき落葉の庭をとひかほにしくれ來にけりみやまへの里

さゝまくら夢路の末もかきくれてしくるゝ野へのかたしきの袖

落葉

もみちつゝちるを思へはそめ／＼し露も時雨もうらめしきかな

はかなくて露のそめけるもみちとてさこそは風にもろくちるらめ

木枯にのこる梢もある物ををしむもみちのたへす散らん

山路落葉

ふかくのみ麓の道にたとるかな峯やあらはに紅葉ちるらむ

川落葉

川浪はしくれもそひてなかるらしぬれて色そふせゝのもみち葉

山家落葉

そめ／＼し峯のもみちのいろ／＼をあらしの庭に見する冬かな

峯の庵はたゆむあらしのほとはかりよそにさそはぬ落葉をそみる

とひかほにしかそまかきのもとちかく分來てそよく庭のもみち葉

すむ庵のやつれにたのむ陰はかりはらはて殘せ嶺のこからし

庭落葉

いとゝしく誰かとひ來ん冬のきて木の葉に深くうつむわかやと

庵落葉

もてかくす庵のやつれのかたかけも思ひくまなくちる木の葉かな

旅宿落葉

あらし吹木の下陰にかりねして夢もまはらにちる紅葉かな

残　菊

秋をおきて菊は時ある色香かな人目かれぬる霜の間垣に

夏かけて咲したためしか冬は又藤のいろそふ庭のしらきく

咲そめしやとはかはらぬしらきくも冬にうつろふ色そまされる

長月の日數にも猶咲あまるまかきの菊のいろそひさしき

なつ山にひとり櫻の花ならて菊はあまたにそふあはれかな

朝　霜

さす日にもきえせてむすふ朝霜のひかりそさむき野への玉さゝ

夕　霜

宿遠み猪名のさゝ原わけゆけは衣手さむくさやく夕霜

樵路霜

さえくれしきのふの眞柴こりすまに今朝しもふかくいそく山人

枯　野

見し秋の人目も草も霜かるゝうき世のさかの野へのさひしさ

木　枯

夜もすからきく木からしのはけしさはのこる梢もあらしとそ思ふ

寒　草

さひしさをおのか盛のいろかにて霜の花さく野への冬くさ

寒　芦

ほとちかき春とも見えすかれ葉のみそよく難波の里の芦垣

冬　山

冬くれは霞も霧もへたゝらていとゝめにたつ峯の松かえ

冬　庭

人目かは朝夕ならすあるしさへうとくなりゆく冬かれの庭

冬　鳥

朝霜のとくる垣根におりゐつゝしとゝなくなりふゆの山さと

冬　月

秋は猶もみちするかと見し月の雪にまかひてさゆる冬かな

霜夜月冴

おく霜かいつれ身にしむ色ならんさゆるも同し月の白妙

月前千鳥

月かけも清き川原の川かせにつまこひまさる千鳥なくなり

川千鳥

あすか風寒き夕の川千鳥なれもみやこや戀てなくらん

浦千鳥

いもか島あふ夜かたみのうらつたひ行かへりつゝなく千鳥かな

湖千鳥

しかのうらやさゝ波遠くこほりゐてしはなく千鳥聲さわくなり

島千鳥

涙路まてしつけき國をいはひ嶋いはひて千代となく千鳥かな

水　鳥

行かへり下にいとなきあしかものとかに見ゆる池の面かな

みたれてもあかぬすかたの池水につまとふをしのさこそすむらめ

もろともにかはす心のふかさをもかつきてやしる池の水鳥

おのかとちこゝろ〳〵のよるかたにむれゐてあそふ池の水鳥

炭竈

春をさはすみやくわさか面影にけふりかすむる大原のやま

埋火

ふくるまて昔見る窓に今ひとりられしき友は夜はの埋火
ふくるまてうちかたらひて思ふとちよるこそよけれ埋火のもと
埋火のもとの寒さはわすれても又おとろかす竹の雪をれ

曉神樂

天の戸の明かたちかくなるまゝにあかほしうたふ聲のさやけさ
たさそへてうたふ庭火のあたりには曉さむき霜もおかしな
日かけまつその山人の山かつらあかつきかけて遊ふ御かくら

豐明節會

御酒給ふとよのあかりに冬の夜ものとかにあそふ雲のうへ人
少女子か舞のすかたもあかなくに豐のあかりにあくる冬のよ
ゆたかなる御代のさかえも長き夜の豐のあかりの光にそしる

霰

雲はらふ風にみたれて玉あられ月のひかりもふるかとそみる

はつ雪

またえてはあはて日をふる人よりも雪めつらしき冬かれの庭
めつらしと誰か見さらむふるまゝにやかてさかりの雪の初花

朝雪

さえわひし夜のまのうさも思はめや雪にめさむる朝戸出の庭
ふりつみし夜のまの雪も下とけて朝日にそよく庭のむら竹

夕雪

風たえて夕ゝれふかくふるまゝにまかきも山とうつむ雪かな

雪中會友

圓居してめつるまに〳〵いや深くつもりかほなる庭のしら雪
思ふとちつとへるけふの庭の雪いやふりかくせ歸るさの道
ことのはもこと〳〵ませす思ふとちおもしろとのみめつる白雪

庭雪

とはれては庭より外にをしむかな人のかへらんあとのしら雪

山雪

少女子か袖にかさねてふる山のさむけさいかに雪のしろたへ

海邊雪

みくま野の遠山しろくふる雪や浪にかさなるうらの濱ゆふ
わたつみのこれやかさしの玉ならん雪もてみかく淡路島山

馬上雪

花と見てなれもや雪にすゝむらんなつまぬ駒のあしからの關
ちる袖におもらぬ春の花ならは駒なつまめや雪の山みち

雪中鳥

おのかとちつもるみの毛をはらひつゝ雪の洲崎にたてる白鷺

梅告春近

をりしれときゝのふにけふは咲そひて來る春ちかくにほふ梅枝
花とちる雪ならねとも中垣に春のとなりとつくるうめかゝ

歲暮

おろかなる身はおこたりをしりかほに暮ゆく年も何かをしまむ
としといへは何をしむらん明くるゝ月日おもはて過しこし身の
花もみちあかぬなけきにとしくれてけふのことよひに成にけるかな
ひまわたる駒のはゆまの驛路に水かふ川もしらぬとしなみ

しはすとはうへもいひけりすくらくのはしるかことくおもほゆる月
こきよせてとしのみなとにはつる船あけなは春に朝ひらきせん
いせのあまた數そふ老をいかにせん波は常世によせてかへれと
老の涙めにたつはかりこえぬ身もこゝろにしるくよする年かな
老ぬれはおろかさもそふならひとてとまらぬ歳を猶をしむかな
早瀬川日なみ月なみおちあひてひとつにくるゝ年のくれかな
月日こそはかなき物と思ひしかとしさへつひにとまらさりけり
跡もとめしたはむかたもしら鳥の關路かひなき年の暮かな
わかの浦や身にそふ老のとし波は所の名にもよらぬなりけり
とゝまらぬ年の來經のみなけくかなすわさ鈍(オソ)きわか心から
かきねこしわかおこたりも年月もかへらぬものゝかそへられつゝ
年ふりていたゝく雪をいかゝせむ老かくすてふ花はさけとも
きのふけふあしたゆふへと明くれてつもれは經ぬる年の一とせ

歳暮祝

もろともにめくると思へはゆく年をしむなけきそうれしかりける
なせることなきはなけゝと事なくてありふる年をいはゝさらめや

除夜

年くれてこよひねぬ夜の現にもなほそおとろく春秋の夢

年内立春

春たてはまたふるとしの内なから外山へたてゝかすみ初けり
ふるとしの日數も雪ものこれゝと春たちそめてかすむ山端

鷹狩

ふりかゝる雪の芝草ふみしたき鳥立ゆるさすすゝむ狩人
降かゝる袖もはらはすあらたかのゆく方たとる雪の夕くれ

神楽

琴笛のしらへ妙なる神あそひ神世に遊ふこゝちこそすれ
み山にはあられふる夜も雲の上の庭火のあたりさむからなくに
よもすから遊ふあつまの琴のうへにひかれてよらぬ神はあらしな

雪中待春

白雪のふりゆく身にも心たにわかゝへらはと春そまたるゝ
とは四十五四十六のひらにしるしもらせるなり

稻葉集題詠下之卷

戀

本居大平詠

初戀

さをしかの音にこそたてねはつ尾花いる野の袖に露そこほるゝ

忍戀

いはてのみしのふもくるしやまふきの下葉にしけき露のみたれを

通書戀

よそに又ちりもそするとゆくへさへこゝろにかゝる露の玉つさ

よそにまたふみやたかふとゆきゝにも心使のそふ戀路かな

くるしさもいつかはともにかたらましふみのみかよふ戀の山道

祈戀

神たにもあはれとは見よ貴船川人のうきせにしつむこの身を

祈久戀

いのりつゝ思ふあたりにすみの江の神のしるしをまつそ久しき

祈りても神のいかきのいかなれはあはてつれなく年のへぬらむ

をとめ子か袖のちきりをいつしかといのるも久しふるの神垣

疑戀

浅からすいひよる人の筆の跡もすみつくまてはいかゝたのまむ

おほふねの思ひたのめといひはいへといせをのあまのうけかたの世や

待戀

吹風はまつ宵過て萩かえに露おもりゆくみやき野のはら

つゆおもる小萩か枝はつれなくていつこの野へに風のふくらん

深夜待戀

それをたにまつともいはてまつ山のこゝろのおくにふくる月かけ

逢戀

須磨の海人の鹽なれ衣まれにきて逢みるよはも袖はぬれつゝ

別戀

大そらは又あふまても何なれやわかれかたみになかめらるらむ

後朝戀

あひみしは夢かうつゝかうつりかの袖にあやしき明くれの空

逢不逢戀

あひみしにかへぬ命のおこたりをせめてはなけく中となりにき

かへもせてのこるいのちのかなしきは見はてぬ夢をしたふ年月

をしからぬ命よなにゝなからへて又も逢みぬ世をなけくらん

被厭戀

いとはれて同しうき世にゆきめくる命さへこそつれなかりけれ

隔遠路戀

こゝろさへいかゝとそ思ふ山遠くへたてゝこふる中のちきりは

互恨戀

眞葛原おなしうらみを打かへしこなたかなたにさわく秋風

うさは猶われやは君にまくす葉とうらみあらそふ野への秋風

うらみてはうらみさらめやわかせこか袖ふく風ものへの眞葛も

吹むすふ眞葛か原の秋風につらさおとらぬ露そみたるゝ

欲絶戀

かれはてぬ露のちきりも眞葛原下葉にかはる色そ見えゆく

寄月戀

枕たにしらぬなみたをたつねきてよな〳〵袖にやとる月かけ

いつのまに山端いてゝ秋の月きみまつそてにかけやとるらん
うらむへき人は雲ゐのよそにしてふけゆく月をかこつ山端

寄風戀

定まらぬ人のこゝろのうき草にいつこのさそふ風かふくらん

寄霞戀

かすめてもいつかは人にしらせまし春野の草のもゆるおもひを

寄雲戀

よそにたにあはれともみよ晴間なきわかかつらきの岑の白雲
ゆふくれの空をかたみのなかめさへたえ／＼になる中のうき雲
天津空はてなき雲をかたみにて又あふこともなかめわひつゝ

寄露戀

蓮葉に玉ゐる露のともすれは涙こほるゝこひもするかな
みやき野の木の下露もわけなくにひとりぬる夜の袖のあやしさ

寄雨戀

戀草もえこそまされつれ／＼と身をしる庭の春のなかめに
いたつらに世にふる袖を春雨にひちぬやとたに人のとへかし
來ぬ人のかことはかりのよひの雨にかことかましきわか涙かな

寄雪戀

つもりけるうさもつらさも雪もよにとはゝそとけん中の通路
とけやらぬ人のこゝろを雪もよにわけきてまとふ中のかよひち

寄煙戀

身ひとつにくゆりそわたる夕煙そらにたつ名も下の思ひも

寄山戀

つくは山分みてのちもさはりおほみこのもかのもに猶まとふかな

寄野戀

たつねても根もみぬ草のゆかりとて袖にはてなきむさしのゝ露

寄沼戀

かつみてもちきり淺香の沼水にそてこそぬるれあはぬ戀路に

寄川戀

ありとのみきゝてはるけきみちのくのあふくま川をいつかわたらむ

寄浦戀

あしわかのうらみもはてぬうきふしに波のみ袖をこゆる年月

寄濱戀

われをかくわするゝかひはうと濱にいてゝや人のひろひそめけん

寄嶋戀

あひ見ても阿波の島山かけてのみ同し浪路を戀わたるかな

寄草戀

忘草しけりやするとをり／＼はつみても人をおとろかさはや
かすか野の雪間はつかにみてしよりわか戀草のもえまさりつゝ
おきそめてあたの大野の花のえに思ひみたるゝ秋草の露

寄葵戀

もろ人のけふのかさしの草の名をかけてそいのる加茂の神垣

寄山吹戀

袖ぬるゝ下のなけきをかくとしもいはてそこふる山ふきの露

寄梅戀

かけ見てもをられぬ水に袖ぬれてよそにやこひむ春の梅かえ

寄瞿麥戀

はらふへき風のたよりも吹たえて起臥たけく床夏の露

寄鳥戀

うらやまし梅の實もりはむ千鳥さへ妹かあたりの梢と思へは

寄鶯戀

たのまれぬ人のこゝろの花の枝に身をうくひすの音こそなかるれ

寄鴈戀

たかはこと又よるかたもなく〳〵そらきをたいむの秋のかりかね

寄鴿戀

露こそは鶉の床もしけからめちりさへつもるなけきやはせん

寄水鳥戀

あたゝみはたつとも何かをし鳥のたくひよるへき山川もかな

寄獸戀

逢坂もしらぬ戀路にたつむかた目のみたみたにさりはらの駒

寄虫戀

もゆあかし鳴くらさるゝ戀すれは螢も蟬もうとからぬかた

ひるよたき袖のちきりもあまのかる藻にすむ虫の名にやかこたん

いたつらに思ひたき世に夏虫もわかことをしき身をやすつへき

寄蝶戀

色かはる人のこゝろの花園をなにゝこてふのむつれそめけん

寄螢戀

あけたてはもゆる螢もきゆてふをよるひるとなきわか思ひかな

うきふしをいはてこかるゝ我やさはあしまにしけくもゆる夏虫

寄松虫戀

大かたも秋つく露の庭草に君まつむしの聲そかなしさ

こぬ人をうらむる露の淺ちふにみたれてきほふ松虫の聲

寄傀儡戀

むすひても夜ことにかはる草枕ちきりはかなき青墓のさと

かされても來もせぬ旅の衣手を一夜のつまと賴むはかなさ

契とて見るもはかなしかゝみやまやとかる人のこゝろ〳〵を

寄淚戀

なみた川なかれをくみてもの思ふわかみなかみをとふ人もかな

月日へて契あせぬる袖のうへになみたの色そ深くなりゆく

寄鏡戀

かねてよりうつりうつらすますかゝみ人の心を見るよしもかな

見れはまつ淚にくもるますかゝみかけとなる身をかけもはつかし

寄枕戀

袖のうへに淚せきあへぬかなしこもまくらはしるやあかつきの床

一夜ねしまゝの小菅のすか枕かはさてなかき音をのみそなく

寄床戀

今さらにあれにし床のうらなみは身さへなかるゝかひやなからむ

寄衣戀

いろ〳〵に思ひみたれてとさゝぬのきもせぬ人をこふるころかな

來ても猶夜深くいそく秋風にかへるころものうらみられつゝ

みるめいみかるとはすれとあま衣逢ことなみに袖そぬれける

寄糸戀

何にかくしつか手引のいとはれてくるしき戀にかゝりそめけん

寄舟戀

世をうみの沖にたゆたふ大船もはつるとまりはありてふものを

あまをふねはつる泊りをいつとしもしらて世をのみうみ渡るらむ

春　戀

かすめてもしらせてしかなくもり日のかけとは人にそふもかひなし

夏　戀

川も池もみなつきぬへきなつの日にかわかぬ袖やつらきたかゆゑ

秋　戀

いろことになりやしなんと思ふよりなひく淺茅の露そこほるゝ

冬　戀

おのつからとゝこほりゆく冬川の下の瀬たえをいかゝとそおもふ

題しらず

わか戀はゆくへもはても涙のうへにうきたる草のねをのみそなく

雜

天

いつよりか棚引そめし色ならんかはる世しらぬ空のあを雲

日

日の光てらさゝらめや天地のありのかきりのあらむかきりは

月

月たちて來經る日數もみちかけの空にしらるゝよな／＼の影

星

天とあふくわか大王の御齡によみとらまくもほしのありかす

雨　春

淺みとり雨ふることに色そそふ春の野山にもゆる木草も

雲　夏

立まさるものこそなけれふらはとてすゝしさねかふ峯の雨雲

風　秋

かきりあれはうすき袂にふきよりて秋たちそむる風そうれしき

雪　冬

冬かれの梢花さくしら雪はふりぬるものゝめつらしきかな

風　雜

海山のなみと雲とのたちも居も空ふく風のこゝろなりけり

山

神の代にまきし木種の御いつをも高く貴くあふくたか山

野

鷹はなち犬はしらせて宮人もかりにそいつる野への草村

關

過所なしにこゆる人なき關路こそ道ある御代の守なりけれ

橋

わたり瀬にはしてふ物のかゝらすはかはとのみ見てえやゆかさらむ

道

あし曳の山のおくにも分いれはなほゆきかよふ道はありけり

川

奥山の眞木の大木も杣川にうかへてやすく下すいかたし

池

いけしあれは水はこゝろのひく方にまかする小田のたのもしきかな

井

にこりてもすみやすけなる山の井にくむ人さへそうらやまれける

海

花もみちをけこそしられうなはらもしほひしほみち時はありけり

潮

君か代にあふみの海を見渡せは八十のみなとに船そいている

磯

ひとすちによきみちしらぬ磯のへちいはほに波のよるもおそろし

海村

あし火たく星の林をしるへにてわかすむかたとこきかへるふね

漁舟

わたのはらつゝく雲ゐにこきいつるこや久かたのあまのつり舟

わたのはら涙の花さくらら風に木の葉もうかふあまの釣ふね

秋田

しつの男からきにぬれける衣手もうれしきいろにいつる秋の田

秋ふかく露にぬれける袖も今かひありかほの小田の賤のを

山家

木かくれて山下水のありとしもしられぬ宿そすみよかるへき

おもしろき水のなかれを軒端にてすむ人いかに心ゆくらん

すみなれてくむ山の井も淺からぬちきりとやしる庵の明暮

古宅

軒ちかき梢の鳥のから聲も物おそろしくあるゝ屋戸かな

都

彌照の神の御代より千世をへてひかりそひゆく玉敷の宮

禁中

御簾にふく風のゆきゝもこま犬の守かしこき九重のうち

松

花もさきもみちもせねと松かえのみとりはとはにめらしき哉

庭松

ふかみとりうゑそめしよりいくしほの春かへぬらむ庭の松かえ

栽松爲友

嶋好みつくれる庭に松をうゑてこゝろにかなふ友とこそ見れ

尾津崎松

つるきたちかけてそ千代に聞えける尾津のさきある松の言の葉

綠竹年久

かけひろくなひくみとりの呉竹にこもれる千世の末そはるけき

里竹

うきふしもうれしきふしもましりけりこや世のさかの里の竹村

絡石

岩かねに千世をかけたる蔦かつらくる春ことにわかかへりつゝ

弓

梓弓ひきもひかすも物部のみちのもと末わすれさらなむ

はし弓の神代のためし今の代に引てゆるへぬ國そかしこき

劔

大刀の緒はときおくとてもますらをの心は常にゆるへさらなん

たけき身にたけき守とはきそへて大刀のをゝしくみゆる物部

琴

松風入琴

ひく琴のこゑはたみても聞えぬをたれかあつまと名つけそめけん

端居してかきなす軒のつま琴にかよふもちかき庭のまつ風

琴の歌想夫戀のこゝろにて

思ひいてゝ戀しき時は婦人のわかつま琴をかきやひくらむ

鵄尾

ひくこゑもみそらにたかく聞ゆへし神のたからの鶏の尾の琴

琵琶

月ことのしらへもひきそしらるらん四つの時しる四つの緒の琴

琵琶の撥袋によみてかける歌

四つの緒のしらへさやかにあらはれてかくるゝ月も光そふらし

笛

よこ笛はことく〵しくも見えすして澄のぼる音そ高く妙なる

笙

澄のほるふえのしらへの妙なるにことものゝれもやめてきかはや

桐にすむ鳥の名におふ笛の音は琴のねにこそよくかよふらめ

玉

うるはしき物のたとひに玉といへは玉にはまたも何をたとへむ

鏡

くもりなきかゝみのうらにすむ鶴や君か千年をかねて見るらん

扇

四方の海浪も木末ものとかなる御世にあふきの風そ涼しき

杖

神國は紙もよろしとから人のやまとあふきにつたへてやしる

つゑのみそつきく〵しくは成にける本くたちゆく老のさかみち

燈

ともしひのかけにむかふもまはゆしな書見ても猶くらきこゝろは

書

漢やまとかしこき百の道々もふみ見てそしる跡のまにく〵

遠つ國しらぬ境のことの葉もふみみる道にゆきかよひけり

筆

とる人のちからそ筆にあらはるゝふみかくみちのこれやたま鉾

ふみてにはたぬきうさきもゆふといへとかせきの毛にはえしもまさらし

わか毛らは筆のはやしと古の歌にも鹿のしかいひきてふ

硯

すゝりの海墨の色こそふかけれとわかかく筆のいろ淺くして

ふつくゑの寶とそ見る朝夕にならすすゝりの石もかはらも

浪たゝぬ御代のめくみも文學ふすゝりの海によるひるそしる

鷹

墨筆のかみにそめおく跡までもくちぬ硯のいさをとそ思ふ

手にするてたかき人にもめてらるゝくちをしからぬ鳥は此鳥

百舌鳥

神無月はしのもみち葉ちりはてゝあらはになりぬもずの草くき

虎

冬こもる虫のすみかやたつぬらんあさるかれ野のもずのくさくき

鼠

なつけなはおたみあらふることもあらしとらへてやとにかひ見てしかな

鯉

さきはひをみちひくものととめる家にきはふかたにたつねすみけり

そこひなき淵にいこひてすむ鯉も岩はしる瀬ははしるとそきく

逢友述志

ゆたかなる御代のさかえにあふ友もかたらふことは同しうれしさ

おもふとち思ふこゝろをのへいてゝ玉の緒さへもゆるふけふかな

述懐

世の中をかこつなみたもはては又わか身のうきにおつる袖かな
ちりひちのつもる思ひよ天雲のたなひく山といつれ高けむ

懐旧

寝覚して夜深きまとに昔見れはむかしの人も身をなけきけり
いろふかくうつすむかしの世かたりを見れはわか身にしむあはれかな

夢

おもふこと見るはうへなりあやしくも思はぬこともみゆる夢かな
はかなくてさめさらましをよはの夢うつゝにかよふたゝちなりせは

暁更寝覚

わかかへる夢路はかりはむかしにてねさめかなしきあかつきの床
むかしへに見えしゆめちも暁のねさめは老にかへる手まくら

秋旅

なけくらん故郷人のおもかけも霧にたちそふ秋の海つら
朝たちて分行そてもほしあへすすかるなく野の秋秋の露

冬旅

分なつむ木の葉もふかく成にけりいるあしからのせきの八重山
ゆくへかはわくる野山のすかたさへしらぬ旅路にまとふ雪かな

旅泊

ふるさとの夢はくたけて梶まくらうきねにかへる波の音かな
いそなれてまとろむ夢もあはれなりかさなるよはの涙の枕に

神祇

五十鈴川八百萬代の君か世をいやとほなかにまもるみつかき
玉垣の宮の御代よりすみそめてにごりましらぬいすゝ川水
八雲たつ出雲の素我の宮柱神代なからにくちぬよろつ代
いそのかみ布留のやしろに千年ふるその神垣そ神さひにける
天の下たひらの宮な萬代にまもるもひさし賀茂の水垣
水くまりの神の恵のいちしるく御調にさはふ豊秋津島
稲荷山まうつる民のねきことをさそうけもちの神はしるらん
國かゝす神のまもりと國しらす君の御いつもいやかゝやかむ
大御神もとめ來まして御心をなくさの濱の宮居尊し

言葉道といふ題をさうけて

八雲たつ出雲の神のわけそめて今もさかゆく言のはの道
八重垣の神代人の世へたてなくいやさかえゆくことのはのみち
ちりうせぬ言葉の道のしるしとて神のうゑけん住の江の松
言のはの道しも神の道なれはみかけとまもる玉津島やま
ことの葉のさかえを御代のひかりとは玉つ島れの神やしるらん
玉鉾の中とる神にいのりなはみかく言はのみちもまもらん
神世より直きこゝろを種として今もかはらぬ言の葉の道
しらぬ世の人のこゝろも見るまゝにおもひやらるゝ言のはのみち

寄道祝

民草も心ゆきてそなひくらんかへりみふかき君か代のみち
末遠くなほふみわけよきしかたの跡をたつぬるふるの中道

秋祝

四方の海にあまるめくみも年ありてなひく田面のほなみにそしる

寄田祝

伊勢の海や穂波もよせて千世の秋御調にきはふ阿濃の湊川

萬民祝

安御代と野山の末の民草もつゆみたれなき風ののとけさ

寄巖祝

さゝれ石のなれる巖の苔のうへに松さへ生て花のさくまで

寄松祝

みどりかは千年の霜の後にさく花もまた見よ春の松がえ

伴松榮久

千代遠く松をしるへとともなひて老の坂ゆく道にたどらし

竹契齢

くれたけのきえたの露も末遠き千代のかずとや契おくらん

多年翫梅

春毎にをりてをかさせ千世までもおいかくるへきうめの花がさ

鶴遐年友

ともとみる人も千年やかさねましみきりになるゝ鶴の毛衣

寄亀祝

そこひなき淵にかくれてすむ龜のながきよはひぞかぎりしられぬ

寄鯉祝

淵のうちにいやとしふかくすむ鯉のそこひもしらぬ齢とぞ思ふ

寄藤祝

まつにこゝ千とせの春の花なれやさかり久しきやとのふぢなみ

菊契千秋

手をりきて君が千年のかざしにとちきることゝろは菊ぞしるらん

春松契齢

ちよをへてしる人やしる松の花さく十かへりの春の色香も

專修寺宮五十御賀寄竹祝

御園生の竹はたが杖君が杖よろつ代つかむ君が御つゑぞ

村田橋彦母九十賀寄竹祝

雪のうちの竹の子の道あとゝめてねがふ八千代はむなしからめや

七里長行五十賀に庭に小松五百本うゑたるに

五百本の松をみきりにうつしうゑて庵のあるしも五百代經まさん

藤堂南陽軒翁七十賀群鶴亭といふ名によせて

かさねきて千とせ〳〵や屋戸の名にむれつゝゆつる鶴の毛ころも

田中大秀が父七十賀に位山によせて

みな人のこれそうらやむ位やまいやすゝみゆけ高きよはひに

同し人父は七十母は六十なるよしいひてこへるに

父母の玉の緒琴を七つ緒の八つ緒のながきためしにはひけ

松平康定君の五十賀に春祝といふ題にて

春ふかゝ君がたのむにたつ民もかへす〳〵や千代いはふらむ

加藤千蔭翁七十賀武藏國石濱の名によせて

としなみはよせかへるとも石はまのときはかきはに君はおいせし

藤波の里堀田氏六十賀

いくかたたびかはらぬ春にたちかへりさかり見すらん藤波の花

ある人の賀に山田原の郭公によせてとこへるに

千代ふへき山田のはらの杉むらに聲はふりせぬ郭公かな

又ある人高倉山によせてとこへるに

秋ことに水穗の稻をつむとしのかきりもあらし高倉の山

伊豆國菊地袖子が祖父八十賀に田方森

たかはした田方の森の松の枝ともに千年をいはふこと葉は

安永五年春大平が祖父善教翁八十賀に

八十をも猶や若菜といはゝまし千とせつむへききみが齢は

安永二年山路孝正か父七十賀に
千代遠くにほふ山路のさくら花くる春ことに君そ見るへき
渡邊中庸か五十賀竹週年友
さす竹のたけきこゝろの友として千世たわみなく君につかへよ
森光保父七十賀寄竹祝
うちはへて色もかはらぬくれたけにちひろとちきれ老の玉の緒
益谷木壽主の母刀自七十賀寄鶴祝
子をおもふ鶴のよはひをためしにて猶いく千代も澤にとしへよ
ある人の賀の屛風の繪礒山の巖に千鳥ある所
山かけやいその岩ねにうちそへて夕浪千鳥千代よはふなり
又或人の賀に雲雀のとひたる所ある繪に
ひはりあかる春のみそらののとけくて經なんよはひもいや高くこそ
堺の赤尾氏六十賀寄菊祝
見る人の千とせをかけて住の江にさくしら菊や老わすれくさ
田丸城代久野何かし八十賀松契千秋
千代の秋さかえそゆかん末遠き湯田野のはらの松をためしに
藤堂何かし殿賀に鶴全千年壽
伊勢の海清き渚にすむつるの千代のよはひは君そかそへむ
植村何かし殿六十賀
君にこそかけていはゝめしきしまや青垣山にこむる千とせは
羽倉翁【從四位下荷田信美宿禰】七十賀歡遊不限年
かきりなく世にあらんこそかきりなき身のよろこひと君はしるらめ
小田郁子祖母【大内山秋の宮人亀井の君といふ人】八
十賀

小松にも又も小松の生そひてさかゆくいはほいく八千代そも
度會宮の神樂人田中重主か九十賀
九十よはひかさねて百とせはちかく手中（タナカ）にとるもたのもしきて
水澤村の高林通圭といふ人の母の百年の齡をことふ
世にこえて百のよはひも高はやし千年のかけを猶あふかんな
吹上里平井氏母六十賀菊契齡
老の波よるとも見えし吹上の菊に千とせをちきる齡は
本多越後守常義翁七十賀屛風の繪に四月の所藤の花
夏かけてさく藤浪そかきりなくなかき齡のためしなりける
鹽田光成七十賀
時々のさく花見つゝ花の屋にすむわかをちは千世そさかえむ
高村政常七十賀寄松祝
家の風よはひも高くさかえよと松やあるしの千代よはふらん
三上清里母七十賀菊契千年
秋をおきて盛久しき菊の露むすふちきりの千世そはるけき
井口三樂八十賀花契萬春
見れとあかぬ花にちきりて榮えゆく齡もしるし萬代の春
ある人の四十の賀に
今年より老のはしめのはつ若菜つむらん千代の春やいく春
石倉音主六十賀陸奥の名所にて
石ふみの常磐堅磐に老の坂いくちさとともかきりあらしな
鈴屋母刀自七十賀寄鳥祝
へたて來て雲井にこふる芦鶴のよはひはいとゝ高くとそ思ふ

文政三年庚辰おなし刀自の八十賀寄鏡祝

かけたのむ人の子のためますかゝみいのる千年のしるし見せなん

村田橋彦か母の曾孫なる人正月朔日男子うみたる七夜にあたれる日しも子日なりけれはその子の名をとみ松とつけたるよしにてその歌見せにおこせけれは

ひこひゝ子やしは小松の生たちてしける岩ねの千代や幾千代

あなめてた子の子の子たにまれなるに子の子の子の子得たる大おは

ある家の初幟の祝事に

五十日百日ゆく末遠く千世かけていはふ五月の玉のをのこ子

袴着

ますらをの武き姿もけふよりはそれとわく子のよそふ袴着

よろこひを千代にかさぬるはしめとてけふよりよそふうひのはかまき

初もとゆひ

末遠く千とせをこめてけふよりはそのもとかたくむすふもとゆひ

引むすふはつもとゆひのゆるなく千代まめやかに君につかへよ

八十八の賀に

升にもる米てふもしの今年より末のよはひそはかりしられぬ

湯淺の濱屋幸章年六十七にてちかきころあらたに齒の生ぬることをよろこひて「年もいま六十なゝつの老の身にかはり齒はゆることそたのしき　齒のもしはよはひとかよふこゝろあれは今ひこはえも千代のたねかもとよめるを見て細田喜徒か　なからへんためしもしるく出生るはかためいはふ千代のはつ春同し人の妻きの女　わかゝへり生いつといふ齒かためのもちひもをりにあふいはひかななとよめるを見て

大平もよみてつかはしける

年高く老となる身に葉も生て詞の花もこゝそたのしき

土屋安足ことし六十にたらひて世の人の賀とていはひことして歌よみ詩つくらせてとかくするをさるさまの事は好まぬ心はへ見せてことしも年の末つかた十一月廿六日家に人人つとへてこのころよみ出たる歌なりとて老の懐を述ふといふ心の數々の歌ともを見せてこのいへることにこたへたるこゝろにて年の數いたつらにつもりたる人はいとくるしと思ふらんなといふこゝろをけふのまとゐのよみくさによみて給へとこへるによりてことさらにことほくとはなしによめる歌ともはしめはその日の儲題千鳥なりけれは

友千鳥ともにむれゐてよそなからいはふ八千代は君しらすとも

花もみち咲ちる色を文に見て常磐の山にすむ人やきみ

鶴龜とことにはいはし世の中にありとある書よみつくすまてゆくよはひかきりなき世にまかせつゝ六十をものゝ數としもせし

松かねのあらはれてこそいはねとも下のこゝろに千代そこもれる

生いてし惠おもへは今よりの末のよはひも神そしるらん

服部敏夏かこへる題樂未央

今いくかありての後の若菜より雪間にあさるほとそたのしき

桃さくらいろ〳〵つきて見ん春のはつ花うれし庭のうめかえ

よしの山分見ぬ奥のいろかをもふもとの花にまつそおとろく

眞萩さゝ秋はあれともつほすみれさゝやさか野の色もめつらし
木の間もるついたちころの夕月夜まとかならねと秋はさやけし
立田山峯のもみちをまつほとに裾野に萩の錦をそ見る

荒木田經雅神主四座にすゝみて三位の宣旨かうふり
給へることをよろこひて

いろふかきみつのくらゐにいすゝ川すゝむも神のめくみとそしる

長崎諏方神社大宮司藤原光章主よろこひせられけるに

久かたの都路遠くのほりきてのほるかひあるくらゐ山かな

雲蓋院僧正權より正にすゝまれけるよろこひに

かしこした法の司の峯つたひたかねにちかゝのほる位は

物の名の歌

門松　しめ繩

いつしかとまつ野のわか菜雪の内に人のしめなは何をつまゝ

芹

都人わかなつむ野は春めきてみわのしら雪かすみかゝせり

蕣

垣こしに喰もこそすれ麥畑のあたりにちかく馬なつたきそ

御形

なには人春日うらゝに船こきやうかれゆくらんかすむ入江を

蘽　蔓

あかなくに一枝とこそ花はこ（乙）へら（狼）うせ（笛）きに梅をりやゝつさむ

佛座

霞たつ春野の駒のはしるほと毛のさまよくも見わかれぬかな

薺

涙かゝる袖もいとはすすたとりにあらそひいつるあまのつり舟

須々之呂

はしたかのしるしの小鈴白けれと雪のうちにもきゝはまかはす

又二種つゝこめて　せりなつな

ふけはかく櫻ちらせり風なくはうれしからまし夏ならぬまは
ゆするせりわか黒髮のかわくまてしはしはなつなぬれて露けし

こきやう　はこへら

ちるもみちこきやうすさやかきよせて持はこへらはとりわけてみん
こきやうき船のわらは子舳ら艫ら綱ときはなち帆かけてゆかむ

ほとけのさ【これは言長けれは一くさなりうたもひ
とうたなり】

はこふとてゆひつかねたる稻穗とけ野澤の水にぬれたるほさん

すゝな　すゝしろ

すゝならてたく火の上にたつ灰を煤白しとは誰か見るへき
うちすてすすなはち身には着ならさん君よりすゝし（生絹）祿に賜へり

源氏物語卷の名

桐つほ

杣山に眞木の柱の木はきりつほめていはひてとのづくりせむ
御ふぶみ見侍れどもめはきりつほどへていとゞまさるたげきに

はゝきゝ

玉あられひろはゞ聞し音ばかり堅くもあらで露ときえなん
琴の音も菊もといはゞきゝはやす心としりて又もかいひけ

うつせみ

明ぬとていそくか駒に鞭うつ兒見おくる妹をかへり見ずして

かくばかりのがゝる物とおもほさばいかどはせんにうつせ御こゝろ

夕かほ

床夏のなつかしきぞよ人のすむ野にしめゆふがほいならねども

かた時も御もとはなれぬ惟光の大夫（タユウ）が外にありしこよひか

わか紫

はつ草の草のわかむら先かけてこむるおひさきちとせとぞ思ふ

末摘花

難波がた末ふみしたきあさるらし芦のわか村鷺しろく見ゆ

紅葉賀

鳥の子をおしきの上にすゑつむはなりがたきことしひてするなり

花宴

月かげもみちのかぎりはまとゝなり本と末とは弓張となる

あふひ

橘のえむかしよりぞ常葉なる霜はおけども冬がれもせず

御車の所あらそひせいすべくありあふ人もゑひすぎやせし

さかき

並べあふ人給ひよりさらにさもおくにやるべき車ならぬを

ちはやぶる神の宮人みまほしさ垣をもこえてやどる野べかな

花散里

眉間より光をはなちるさとのみいふは片言るさなふつなり

須磨

あまの家なれなりときく里にすまばかくはしたなき世をのかれなむ

あかし

かずしらず物わびしくもなげくかな雨風やまずあかしくらして

みをつくし

からやまと書をつくして學び得て此物かたりかきし御もとか

いはねどもゆひもてわれは君をつくしたのこゝろをそれとしらなん

よもきふ

いく世々も來經る故郷きてみれば庭も籬も野へとあれたり

關屋

そこ清き清水に月も心よせきやどるかけぞあひにあふさか

繪合

門のとは人のふむゆゑ粟背戸にほして鳥おふ里のわらはべ

ふち袴

はひまとひ松かえからすいとねたし藤は鎌もてそこかしこきれ

にほふみや

そこかしこ浮巢たづねて池のにほふみやゆくらんをれふす芦を

夢の浮橋

おひつきてはねうちかはすをしとみゆ雌のうきはしる跡よりゆくは

われな君思ひたゆめのうき端としらでやきゝし人の中ごと

くゑんしの物語

うらめしく怨じの物かたりたらぬ詞みだりにかき贈るふみ

五十四帖

横ほれる名にや似たると見にそこしふじてふ山のたてる姿を

紫式部

綾にしきいくむらさきし着ふるさば父もなひかへ贈るたがため

か、よめりしはある人のよみて見せたるをみて又あ
る人の四五人はかりもおひつきてよみて見せにおこ

せしころそれには類せすこと言葉をまうけて五つ六つよみ見たれと中にはいとよみ得かたきかおほく猶思ひ見んにはいとまいりて中々學のさまたけともなり又しひこともいてくへけれはかくて思ひやみたるなり

ある人短册箱のふたにとこひたるに
代々をへていろ香あらたにさくはこの心をたねの言の葉の花

短籍掛といふものに人の歌こひたるに
ことかたにさゝかけとめてゆかむより言葉の花を居なからにして

紙雛の繪のうへにかけるうた
春ふかみ日長きころのすさみにやつくりそめけん妹と背の形

神路山の杉もてつくれる茶杓といふ物に歌よみてとをる桃の花の雫の香をふかみひたんのちさへ袖やにほはん

人のあとらへけれはかみちやますきのちやさくといふことをこめて
春の野の草ふか道やまつはすきのちや櫻の陰にあそはむ

七月七日によめる女郎花
なけきつゝ年と月日をみなへしは秋の一夜を待間なりけり

瑠璃君を筑紫の監にとられじと豐後の介こそ將てのぼりけれ
みをつくし

藤原仲文大夫の集に紀の國の郡ともをよめる　いと
なかき夜はなくさますあまりありたえす火たかむ宝にすまはや

此同し物の名を
いとゝなかなくさとあまたありたらひたかすむむろにゆく郭公

住吉神供の中の餢飳と糫餅との形を模してこれか歌をと北村清風かこへるに
神垣の内にはこふと墨の江のきし田の稻や今かりにゆく

ふかみくさはつかくさを句の上下におきて
ふかみとは香に名つけつゝ見る花かくる人おほくさゝけるうれしさ

ふることとふみ　やまとふみ
ちる花は雪のふるごとふみゆけと籬は山とふみもこえしな

古事記　日本紀
女郎花ふさたをりにと來し君は妹か門田に穗むき見かてら

律令格式
くもりつと見ゆるは梅のちりやうく池ちかくふく風そわひしき

西宮記　北山抄
とひきませいきうき道かかたへこそ嚴草むせうらの苫屋は

延喜式
いさゝらは波におりたち拾ひえんきしきはちかく玉よらめやは

まんえふしふ
くりかへしかむかへよまんえふしくわきまへられぬならの世の哥

古今歌しふ
えんきの世かしこきむかし古きをも今のもえらひあつめたる歌

後撰　拾遺
せきわけておこせむ水に袖すゝけ水しぶゐる田に早苗とる子ら

人の要によりてよめる歌とも
土佐國何かしの家に紀貫之主の筆の跡とて月といふ

一もしを額にてもたるありいとめつらしきものなれ
は是か哥よみて給へとその國人の許より物のたより
していひおこせけれはよみて遣しける

水くきにのこれるかけよこれも又世にふたつなき月の一もし

辛崎の松の木をゑりて作りたる香合によみてそへける

しほやかぬしかの濱松うちけふり幾代の春かかすみきぬらん

飛驒國吉城郡高原郷舟津村の藤橋を

是も又心たくみの組はへてわたしそめけん飛驒のふちはし

舟津より舟もかよはぬ高原の岩岸たかくわたす藤はし

同し國同し郡同し郷中山村より越中國蟹寺村にこゆ
る所の神通川といふに綱引はへて籠にて引わたすを
かこのわたりといふとそ

神の代の目なしかたまの小舟すら水なき空をわたりやはせし

見るたにもあやふきものをのるかこのめもくるめかす渡る里人

大坂岡野則衛か家の寶ともたる刀の歌

藤卷といふは鹿苑院將軍より給はり傳はれるよし
にて九條左大臣經教公の歌そへり「藤まるのさやか
にうつる小刀のやきはに涙のたつかとそ見る又鳩丸
といふ刀には細川兵部大輔藤孝朝臣の歌そへり國綱
か作りし短刀のいみしきをみて「是そこのかまくら
山のうち刀世にたくひなき腰燒刃かな

花見ても身のめてたさやしらるらんいはんかたなくよそふふち丸

男山さかりの人も杖ならてこの鳩丸を腰につくらむ

龜二つを蒔繪にしたる香箱の蓋によみてそへける

ゐる龜の千代萬代をふたなから身にとりそへてぬしやたもたん

むしろ田といふ所の土をとりてつくらせたる盃にう
たよみてかけと人のこひければ

さか月のひかりも千代を幾めくりいつぬき川のせゝにすむらん

伊賀の上野の何かしかの國の戀の森戀の湊をよみて
とこひければ

戀の森

つゝみあまる袖の雫のしけければ名も世にこひのもりやしぬらん

國府の湊　あへの郡也

あへきつゝこきよるへくもなき國にいかてか船をこふの湊そ

近江高嶋郡万木村中江千別かこへる

万木社青柳里

住なれてゆるきの森にゐる鷺は風はふけともおとろきもせす

ふくまゝに鷺のねくらやいかならん梢ゆるきの森のゆふかせ

かたふやとかたきねかひも祈見んゆるきのもりを神の心に

ふく風に杜の梢はゆるゝとも神の宮居はうこきやはする

梢さへゆるきの森の下かけはふく風いかにすゝしかるらむ

糸により春くることやしられまし染てかけたる青柳の里

花さけは春の錦とこきませて都おほはゆるあをやきのこと

いにしへの朱雀の大路おほゆやといさ行て見む青柳の里

門垣ならくひす來なくはいりにも植て春まつあを柳の里

花も今さかりなりやと大路よりのそきて見てしか青柳の里

或人矢野神山に紅葉をよみ合せてとこへるに

はつ紅葉そめし衣のつま見えてうす霧こむる矢野の神山

出羽國人月山神社の歌こへるに
いにしへの御代の書にもまさやかにいてはの國の月山の神

門芷田の里三谷氏清満亭といふ屋に額におして懸お
かん料にとて歌こひけれは
底清きいさゝ小川のさゝら波さゝろをよせぬ人はあらしな

丹生の三井使次かもたる椿木の神像におのつからな
れる石に歌よみてそへよとこふに
そのかみのあまくれましける國の名をあらはれ給ふ石に見るかな

森川滄波かもとにて濱木綿を見て
百重山へたてゝこゝにみくま野のうらめつらしき浦の濱ゆふ

春のころ詩つくる人々龍泉寺につとひて韻とも分ち
てその日のこゝろをつくりけるにおのれも物して魚
といふもしを得て
うすこほり心とけたる詩人は龍のいつみにむれあそふ魚

長崎の青木永章主の書見る屋を秋い屋といひてその
うしろに谷川をまかせて名を時雨の清水とつけてそ
の歌こへるに
岩間もるしくれの清水とことはにやむ時もなく人そとひこむ

和田正主かよみてとへる歌　難波津に今は春へとさ
くやこの花といひしは梅か櫻か　此かへし
難波津の何をかいはむ木の花はさくやさくらの花にそ有ける

或人の庭にことにいつき生したる撫子を見に物した
るに歌をとこひたるに
朝夕の庭のをしへのことなれや世ににぬ色のなてしこの花

二見の浦の貝もてつくれる香合に名もつけてうたを
もといふに二見と名つけて
玉くしけ名におふ浦のかひありて千世もはなれぬ蓋身なりけり

京のやんことなきわたりよりつたへ給りたるよしに
て郭公の落し文といふものなりとておのつからほそ
くまかれる木の葉を見せにおこせて此めつらしき物
見侍りつるよしの歌おのれもよみて奉るたりそこに
も思ひよられたることあらはともにとおもふなりと
井口敬株かすゝめにおこせたるに催されていさゝか
いひつゝけ侍りける
鴈かねの玉つさならて郭公世にめつらしき落し文かな
ことの葉になさけをこめし落し文ほと時過て見るもめつらし
鳥の跡おもふこゝろを書つけてたれに見せんの落し文そも
まきなからかへしやせまし木のまよりとり落したる文と思へは

賀鴫正根若子あらたに作らせたる尾花空穂といふ靭
にやかてしるしおかん料によみてとこひおこせける
に
はなつ矢に得物のかすもしけき野の尾花いほまれ世にあらはれむ

同しちかき族何かしも作らせたりとてこへるに
いる人も尾花のかけにましりつゝ野への百鳥狩くらすらし

土佐國本山の里長瀬村次といふ人家にいつきもたる
富士の山のかたしたる石によみてそへよと或人のた
よりしてこひおこせたるに
不盡の根は國の御寶此石は家のたからと代々につたへよ

鴨の形したる石に人の哥こへるに
やかて又水のうへゆくく面影もうかみてみゆる石のかもとり
大坂人何かし霜𩆶によせて祝ひの心をとこへるに
世の中に又何をかはほりすへき命ながきゝ富たらん人
伊勢の朝熊山の野間政壽か家所より見わたしの歌よ
みてとこひけれは
ゐみさかえ豊坂のほる天つ日を浪間にあふく朝くまの山
日の本の國のたからとき、富士を朝夕に見る朝熊の山
總松寺の庭の池の蓮一本より二莖にわかれて花咲た
りこは三十とせはかりあなたにも咲てそのをりのめ
てたき例にさへあれはそのうたよみてとこひおこせ
けれはよみてつかはしける
ありし世のためしかはらす二またに又もさきぬる花蓮かな
伊豆國人石井みち春相模國大磯の濱邊に生たる草に
て此三とせはかりより人の見いてゝ筆くさとてもて
はやすよしふみてにいとよく似たるのみならすおき
からしたる筆のさきに墨さしぬらしてかきこゝろむ
るにもしもかゝれなとするいと〳〵めつらしきをお
くれるかへりことに
こゆるきのいそ栄ならねとめつらしく手にとりてみるふみて草かな
こゆるきの磯に生てふふみて草硯のうみのこかめにそさす
さくら貝の歌をと人のこへるに
よしの川なかれの末もわかのうらにかゝるさくらのかひもよるらん
ことの葉もかけてみよとやさくら貝うちよせぬらんわかの浦波
わたつみのかさしの花の櫻貝ちりてやわかのうらによるらむ
わかのうらやうす花染の櫻貝見るかひありと先やひろはん
わかの浦に心をよするみやひをのひろふかひある櫻なるらむ
善立法師藜してつくれる杖の哥こへるに
いつはらす命なかゝとねかふこそ心あかさの杖にはありけれ
ことに早咲のにはあらてよのつねの梅の十月十五日
ころ咲たるかめつらしとて菊の花をもそへてはなか
めにさしてこれを題にて歌よまはやと人のすゝめけ
れは人々とゝもによめる
秋の菊うつろはぬまに咲つきて冬かれ見せぬ梅のはつ花
春秋の菊と梅とのさくやとは花に冬なき神無月かな
冬こもり梅も咲けり菊の花さかりのとかににほふ小はると
春も秋も時をへたてぬ垣ねかな菊に咲つゝうめのはつ花
定めなゝ梅も垣ねに咲にけりしくるゝころの菊のさかりに
秋と冬と冬と春との菊と梅としにふたゝひさかりみせけり
待人の袖の色かとさく菊の同しまかきににほふうめかえ
ほのかなるいろかあらそふ籬かな菊は有明梅は三日月
むかしよりうつくしときくおと子にもあにおとらめや梅の初花
菊と梅左右にやかさゝましいたゝく霜の老かくるかに
竹の花いけといふものに歌かきてと人のこへるにそ
のかた橋杭といふ形なりけれは
木にもあらす草にもあらぬはしくひの竹の筒にも花は咲けり
高橋主馬か箟てふ名ある竹の花いけを殿より給はり
いたゝきてよろこへるに

春を經て花さく竹の筧にはかけつゝあふけ君か八千代を

三河國刈屋の中島希賢か國の八橋の跡よりとり出たる古杭のはしなりとてちひさき朽木を紙につゝみてその包紙に「朽のこるこの八橋の古木もて君にむつひのたよりとやせむとあるに

八橋のはし柱とて木の端もむかしをしのふ端となりけり

しをりにかける

けふわけし花の下道しをりしてあすもふみ見んみよしのゝ奥

よしの山分こしかたにしをりして猶奥深くふみやたつねん

つくは山はやましけ山しをりして猶ふみ見はやみねの木の本

雲ゐにものほる心をしをりにてふみ見さらめや峯のかよひち

しをりしてけふはこゝよりかへる山かへる／＼もまたやふみ見ん

きのふみし山路のしをり分過て猶嶺高くふみやのほらむ

しをりしてやすらひゆかはよしの山岩のかけ道ふみもたとらし

濱名橋の跡より掘出たる橋杭の古き材を板になしてしをりのさまにしたるに歌をとこひたるに

千代をへてのこる濱名の橋はしらくちせぬふみのしるへにはせむ

神路山の杉のしをり

千とせふる御山の杉をしをりにて深き神世の道もふみ見よ

玉つしまの松のしをり

しをりして世々の言葉の光をも猶たつね見よ玉津島まつ

わかのうらの松のしをり

世のわさのいとましあらはふみは見よ芦邊の田鶴の跡をたつねて

又

わかのうらの松をしをりにあしたつの跡もとめつゝふみ學はなん

天橋立の松のしをりに哥をと人のこへるに

はしたての松の梢をしをりにて高き神代の道もふみ見よ

ゑほうしの箱のふたに歌かきてと人のこへるに

みたれ世にかふときかためたゝかひし遠つ御祖の御かけわするな

故翁の像のかけ物の箱のふたに大平か筆そへよと常雄かこへるに

千代までもかけてわするなをしへおく此師きしまのやまと心を

故翁の雲の下ゆく雲の上人といふ歌かゝれたる懸物の箱のふたに歌よみてと人のこひたるに

咲にほふ言葉の花も筆の跡も雲にまかはぬ雲のうへかな

故翁の晴梅の歌かゝれたるによみてそへよと人のこふに

言の葉の花の色香もしる人に見せはや春のあけほのゝ梅

また杜部公とうつらの歌とかゝれたるにある人のこへるに

森の木の間尾花かもともとり／＼にあはれはふかくこむる言の葉

又若竹のゐに歌かゝれたる掛物の對にせんにとて喜雄かこへるに

わか竹のなひく姿も千代かけてかはらぬいろをうつす墨かき

又あすもまたしきて聞はやむしろ田になくなるつるのおもしろきこゑとかゝれし色紙のおくに大平か歌書そへよと中里常賴かこへるに

むしろ田のこの言の葉もすむ鶴の千年萬代かけてつたへよ

周防國吉敷郡大道村上田氏の庭の松は早くやんごとなき人植おき給ひて延齢松と名つけ給へるよしにてこれか歌をと木村豊平かこへるに

よき人の根こして植し松なれは見る人こへに千年經ぬへし

神路山の杉もてつくれる硯箱によみてかける

神路山千年すきにし松の板すゝりとともに萬代までに

年の始をいはふとてうからやから打つとひて酒たうへ物くひよろこへる所といふを題にて歌よみてと伴信友かこへるに

年あらむ御世のさかえを家ことに酒ほかひしていはふ初春

白十里久住氏紀の國の浦ノ初嶋の石を殿より給はりて庭のつき山におもしろく置ならへたるころその歌をと人々にこへるによみておくりける

かろからぬ君かめくみそしられける千代の紫の初島の石

藤垣内文集

契沖阿闍梨の古事學びおこされけるをいふ詞

輕島の明の宮の大御代に書ちふ物はじめてまゐき磯城島の金刺の宮の大御代に佛ちふ物わたりきて漢國の教の道を物たらひよきことゝ思ひ佛たふとぶことをめでたきことゝして此二ッの道のあめのしたよもにはびこれることは難波のうなひに芦原のおひしくことのごとくなもありける漢の道は下より根はへ佛の道はうへよりをゝりて大御國の大御風はこもりづの下にのみししる人もなくなりにて代々をしへぬればかしこきや神代の御ふみをとくにもさかしき漢理にときまけよしなき佛意にとりなしもする世となもなりにけるかれかの磯城島の御代にはほとけをまつらば神の御意かしこしと堀江のわたりにうてすてさせたまひ大同の御代には齋部なにがしの宿禰か漢字のいでくるは古書わすれぬべきはしとなげかせることゞも今なもいちしろく思ひあはさえけるしかるを元祿のころほひ難波の契沖の大人は佛の弟子としてその國字を學び漢國の書をしもよく見わたして御國の遠つ御代の手ぶり言靈のたすけさきはふことわりをしつはらにさとり言語のたふとぶべきことわりをなもかむかへしりてかりこものよゝ久にみだれてありつる假字つかひをたゞしみちびきあさきりのまとはしかりつる歌のこゝろをもねもころにときをしへられけるよりことおこりてなも世中に古事まなびする人々次き〳〵にあれつぎてかのあしごものしかさやれるこころ〳〵をとげる心の敏鎌もてかりそけかきわけ水底ふかくたづねて眞珠白玉たかく尊き遠つ御代の大御手ぶり神代の古事までやゝ〳〵に光みえゆく世となもなりにけるうれしきかもたふときかもそも〳〵かの漢の道をはじめておこなはしけるも難波の高津の宮の御代佛の道の世にさかえそめけるも難波の四天王寺なるをその難波にしもありける契沖のうしの功より神道のあらはれそめける事よ堀江のふかきよしあるわざになもありけらし安永九年二月

岡部翁のをしへより古風の歌のひろまりけることをしるす詞

遠御代の大詔に東人はつねにいはく額には箭はたつとも背には箭はたてしといひて君を一つ心をもて守るものぞと宣給へるはもまことにいさみたる武きいくさにこそはありけらしこゝに賀茂大人は遠つ淡海の國に生いでゝ山代の荷田大人にしたがひ古の書の八十書を見あきらめかの東の江戸の御里にまゐて田安の殿に仕へ奉りつゝ无邪志野の草はもろむきかもかくもと我天皇になびかひよれりしいにしへをたふとび眞葛葉のうらうへある心もて言よくかされる外國の道々のはひひろこ

りて人の心おのがむき〜さかしくなりにたる世のならはしのふさはしからぬをうれはしみ思ひていて益荒男やむなしくあるべきと燒大刀の利心をふりおこして梓弓身は末の代に在もなくえその心を遠つ古にかよはさはその世の手風もなどかさとりしらえさらんとをしらむにはまづその代の歌と其代の人の心詞にしあれはそをあつめしるしたる萬葉集をつねねもころに見つゝおのれもまねひよみ劔の大刀の短歌をも八尋桙根の長歌をも物部のたゝかひならふごとく朝夕によみなれてはその心も詞もわがおのづからの物となりてんしかしてこそ御代つぎの史等をも神代のはじめまで眞澄の鏡明らけくはしりあきらめてめこいひてなも人をもいさなひをしへ給ひけるそも〜かの集はしも石上布流野の道のふりにし時よりいりたちわけみる人もをさ〜なくて世々經けるをさきに難波人のいそしくも先たちわけいりてよきしるべをなもしおきけるを玉川にさらす調布さらに又此東人なもしめ野としめおきて年月まねく狩あそびつゝかの浦人は猶えがてにしける言の意もねもころ〜にうかねらひとさとされけるにそのことわり射はなつ矢のあたらぬはなくなもありけるしかのみ武き赤き心をきはめつくしてかにもかくにも古事をらまなはひましけれはなも此古事學びの道は世にひろくひろまりにけるかれ此大人を軍の君なすたふとみしたがふともがら此をしへのまにまに葛城の襲津彦眞弓ひきてゆるへす大伴久米部の取帶劔いよ〜とぎつゝまなびなはかの石根木立青水沫もことひきといふことの如く國もせにみちさやける外國のさかしき書の道々をもやゝ〜にことむけ掃ひてかけまくもかしこき神祖のはじめおかしし厳鉾いかしき道をばあらはさむ物そといそしくうれしくよろこほひてなもかの野にさくちふうけらか花の色にいでゝかくいふになもありける此詞ははやく安永九年のころ書たりけれとそこかしこしひたることもましれりければことし文化十年九月あらため正しつ

加藤千蔭におくりつる

芳宜園翁縣居大人の古學の志につきてその考へおかれける說ともを拾ひ又これかれの考をもみづからの考へをもものして板にゑらせられたる萬葉集の略解すべて三十卷この頃かしこき仰ごとを蒙りて奉られければそれほめ給ふとして卽白銀十枚をなん給ひけるよしはじめよりすべておほやけくして戸田采女正殿事とりて仰ごと出されけるなどありがたきことどもなればみづからの面おこしはさるものにてかゝるめでたき事は大かた學びの道にこゝろさしあるともはみなとも〜によろこぶべきことなり過にし鈴屋のをちなどもここによろこばれぬべきよしもあれはとてかの賜物のしろかねをあかちてその靈に手向てよとておくられければわれら同じ心の友達にもかたらひてこのことのよしをうれしみ此心さしをもめてあへりきかくてかの奉られけるをりよみ出られける歌とて「みめ

くみの露にしくれに神無月ならの落葉もいろやそふらんこい
ふをも書つけてみせられければ

ならの葉を大樹のもに吹あけし宗の風さへ四方にきこえむ

神無月しくれのあめの下ひろく楢の廣葉のさかえをそおもふ

或人のこへるまゝに日野の殿のよみてかき給へる歌の懸
物のうらに書そへたる詞

大君の御手もてかざす花のいろのしろかみまでもつかへまつらん

この歌は日野一位資枝卿また中將とかやまうし帝もまたいとをさなくおはしましゝころ南殿の御階の櫻の盛に御前にさふらひ給ひければ帝大御手つから此花の枝を此卿の冠にうちかつけさせ給ひて此心をつかうまつれと仰せ給ふまゝにかしこまりながらよみて奉り給へる歌となむさて事のさまも歌の姿も高き世の手ふりにかなひはた此卿のつかさ位も御よはひもいやたかくすゝみのぼり給ひけるはまことにいみしかりける言の葉のしるしかなとめでたく貴く覺奉りて

ことの葉の花のかざしのいちしるく君につかへし君そかしこき

かしこかれどかく思ひつゞけ侍りぬ

荷田大人の御像の掛物にそへおく詞

此荷田東麻呂大人の御像を得たるよしは大半が齡のほど歌土山王膳正武貞主古學ひの事につけてなんおのかをしへ子となれる人なるの贈られたるをりにその近隣なる羽倉豐前信美翁三十年はかりあなたおのれ京にありしほと橋本肥後守經亮ととももなひてゆきとふらひしかははやく一たひはあひてしれる人なりもともにおくられけるにそのよろこびいひつかはすかへりごとのついでに東麻呂大人の御像又そのはじめをはりの事ともしるせる書等もその家にもたまへらはかき寫して賜ひてんやとこひつかはしければうつしゑもつたへふみもすべてこれらが親族の家々にもつたはれるはなけれどしかこひ給ふにつけて思ふよしあればかゝせてまゐらせむとて前出羽守尚友此大人のはらからなる人ののちなるに大人のうからの家にちかきゆかりある人なりといふ人にかたらひはかりてやがてその人にこひてかゝせられたるなりかくてそのゑのうへに大人のはじめをはりのつたへごとをもかきそへておくられたるなりけり此信美翁はさきに大人の歌卷春葉集といふを板にゑらしめられたるをりの端書もかゝれたる言葉の力も心の願ひも人には勝れたる人なりけり文化十三年丙子秋

像の上にかゝれたる信美翁の文

東麻呂はじめの名信盛といへり父は稲荷社御殿預正五位下荷田信詮母は長尾氏女兄預に補せらる次子なれば氏人にてつかさ位に預らずいときなきより唐文をまなび國ふりを好めり國つ史は代々の跡をたづね歌集や物語くさぐさの書を見渡し楢の林(ハヤシ)に入ては繁き木陰ふみつくして人のまだ見いてぬ隈をもさぐりて秋の月のおぼろけならず春の花の香くはしき名はかへり坂の杉の木末高く鳥がなく東にも聞えてかしこくも大城の仰承りて考奉りしことの淀の澤水さはなりしかば久かた

の容のうへなき面おこしなるはた又つねにかたりて千代の古道分入らむに山口たど〳〵しけれど飛驒人の墨繩引はへ村肝の心にわたくしなくおのが力車おしたて石上ふるの川上にさかのぼれたれも獨すゝむべき道なればわがかき流せる水莖の跡家に殘して何にかせむとて文のかきりかくつちの神に奉りうしなひたれど賀茂眞淵志ふかく年月縣のもとにありて聞傳たる敎ことをつひに世に弘く傳へたるは翁のいさをなり子在滿むすめ在子等も東にて道を人につたへたり在滿世をさりて御風跡を繼たり元文元年七月二日齡六十あまり八とせにてみまかりぬからはいなりの麓なる蟻山に葬りぬ靈を家に祭りて嚴興靈と申す前出羽守大道尙友その姿をゑがけるその上につたなきを恥ず筆をとるは氏族の由緣なりけり從四位下荷田信美

わが翁の像のうへにかける詞

此繪はわか鈴屋の翁六十一の秋みつから書うつしてその上にしきしまのやまと心を人とはゝ朝日ににほふ山櫻花といふ歌をかきおかれけるそのかたをうつしとれるなりそも〳〵おきなは池大納言賴盛卿六世の後本居縣判官平朝臣建鄕の末にて建鄕主の曾孫左馬助直武主より世々伊勢國司北畠の家につきて一志郡阿坂になん住れけるそのゝち翁が五世の祖左兵衞武秀主は蒲生宰相氏鄕卿につかへて陸奧の會津にうつり天正十九年といふとし南部九戶といふ所の戰ひに敵あまたうちとり武きふるまひありて軍のうちにうせられきとぞそのつぎ〳〵は此松坂にすみて民にてありしかどむげにいやしききはにはあらで家も富榮えてなんありけるを父定利主の世に年經て子なき事をうれひて大和國吉野にます水分の神にこひ申されけるそのしるしありてなん享保十五年五月七日此大人は生れ出られけるかくて十一のとし父主におくれてのち大かた母刀自の心おきてにしたがひ相はかりて廿三の春より京にありてまづからふみ學び次に醫師の學びと六とせばかりをへて國にかへりて醫のわざをなん家のなりとはせられける又をさなかりし時より書見る事を好み歌學びの道にふかく入たち古き集どもの注さくなどに心ざしそめられしよりありこし學びのありさま又縣居の大人の敎子となりて古事學びにまめやかなりしも玉かつまの書にしるされたるが如し神の道のために心をくだきてねもころにをしへおかれたる功のほども又こゝろばへのみやびかに正しくて萬にいたりふかくきは〳〵しく雄々しかりしもみなそのあらはされたる卷々の筆の跡どもにしるければここにはしるさず六十あまりにてわが紀の殿にめされてより度かさね若山にゆきかひつゝ殿の御前にさふらひて文どもよみつかへまつりてさま〴〵厚きめぐみの賜物どもありけりその字はじめは春庵といひしを末の頃ほひより中衞とぞ改められけるすべてよはひの末まで物かく手つき書よむこわつかひをはじめ立居のさまも世の老人のやうにはあらでわかく

物きよげにいづこ一つ老おとろへたりとも見えずて耳のみなん年月にそへてたど〳〵しかりけるしも齢長かるべきしるしなるべしとみな人たのもしう思ひわたりけるを享和元年九月廿九日とし七十二にて十日ばかりがほどはかなきこゝちにわづらひてうせられぬるぞあかずかなしきわざなりける墓は松坂の南同じ飯高郡山室の妙樂寺山の上にて松と櫻をうゑたるその塚のまへに石ぶみをたてゝ本居宣長之奥墓としるせり神の代の古事をときあかし大御國の道のまことをさとしてうつせみの世にくちせぬ功をたてられけるも皇神の御靈の人よりはことにさきはひ給へるゆゑよしぞありけむといともかたじけなく尊くなんありけるかれ後の名秋津彦美豆櫻根大人とたたへいふ

わかうしのうつしゑみれは宇都志意美今ありつゝにますことおもほゆ

享和三年八月廿五日翁がをしへ子にてやがてその家つける本居大平しるしつ

殿村安守がもたる掛物に書てそふる

此わが翁の像は京に名たる繪師たちばなのもとあやがうつしかきたるなりこは翁がうせられむとする年の九月はじめつかた人の形をよくゑにかきとるゑしにかゝしめおきたるをもてうつさせたるなりほかの人のもたるは翁が六十一の年みづからかゝれたるをうつせるなりこれは七十二のとしにて今そのほどの姿かたちよくなん見えわかれけるゑの上なる翁の歌は中山大納言殿にねぎ申てしるし賜はれるなり此君のかくさえも優たましひも世にすぐれさせ給へることは世の人皆しれるか如しさて此君にしもねぎ申しゝよしはかの享和元年の夏翁か京にのぼりける頃此殿にめして書ともよみとかしめてきこしめしねんごろにのたまはせけるゆゑよしのあれはなりけり此事しるすへくあとらへいへるは此かけ物の持ぬし大神安守かくしるせるは此事のゆゑよしよくしれるたひらの大平

故翁染筆物に書添る詞

ちかきころいかなるものゝしわざにかわが翁の筆の跡なりとていつはりかけるたぐひ所々かしこにあなればそのつたへたたしきをこそ得まほしけれといふにおのが家にもたりしも今はいとまれなるを此一ひらたづねいでゝおくるとてかく書そふるになむ文化十一年三月

八重だすきに書そへたる詞

此四季戀廿四首の歌に題のもじ廿五をくばりおきてたてぬきにもなめゝにもすぢかひにも句ごとの上にひろひかなへてつらねたる所の巧あきらかにはみゆめれど歌もをさなくかなづかひも古の正しきにはよまれざりしほどのしわざにて大かたほめて傳ふべき物にもあらぬを世にいみしき功あらはされたる鈴の屋の大人と聞ゆる人のわかきほどのすさみなれはこれもまたひとつのめづらしきくさはひとてもていつくあまりにつくりぬしの名もしるさであるをとしへて後たがのぞこもし

られずやなりうせなん事をあやふみてそのよし一くだり書そへてよと此ごろ持ぬしのこはるゝまゝにかくなむ

村田光彦にかはりてしるす詞

此繪は光彦が祖母の刀自なり刀自の父君は小津道圓翁にてわが祖父光重君それの年めとり給ひてそれのとしわが父光階君をうみ給へるなり今年文化十四年とし八十六になり給ひて身も心もおいおとろへ給へることなく眼も耳も齒もよく物うちわすれなどいさゝかも事にたど／＼しきことおはしまさず世にまれなる老人になんおはしますみつひこをはじめはらからみな父君にも母君にもいとけなきほどにおくれて此刀自の手にひさゝなりてあけくれ御うつくしみをかうふれるに千年の後うみの子の末かけて御めぐみわすれぬかたみの御かたにせんとてつねのすがたのまゝにかくうつしとりたるなりけりこれがゆゑよしかくいふは村田光彦この詞かはりてかけるは本居大平文化十四年二月二日

岡山正興が江戸にくだるをおくる詞

連歌を筑波の道といふなるはなへての歌を八雲の道といふになぞらへて倭建命のあつまのえみしをしづめ給ひて甲斐國酒折宮におはしましてよみたまへる大御かた歌に御火たけるおきなのなつき奉りけるをおやとはすればならんかしそもそも此すがたそのかみよりはしまりて古き代々のせん集にも見え中むかしの歌人もをり／＼にはよみ出けるを後にはおのづから一ツのながれとなりてわざと此すがたをのみたてゝ物することゝなりにたりこゝに岡山のまさおきといふ人あり東なる山田のなにかしにしたがひてかの道にわけいり此里の本居のうしにもつきて大かたの言葉の林の陰にもたちよりつゝみやびをすくさぬ心にて春のあしたは霞をあはれび秋の夕は露をかなしみ何くれとおかしきわざをこのみたまひければおのれはた花紅葉につけてをりふしことのあはれをとひかはしつゝへだつる心なく明くれになれむつふるをことし二月廿日ごろ東に出立給ふよしきくにその驛路のほどこそ夜には九夜日には十日ばかりとなんきけどむさし野の草の枕は猶いく夜ならんといとはるかなるこゝちのするを

なれ／＼し友なわすれそ旅衣日かすは遠くかさねゆくとも

右天明元年辛丑二月十八日作

弘訓朝臣におくれる詞

神の御郷の事執たまふ大河内の主その里に物學びのわざに志深くつねに人々に書ともとききかせなどしつゝ物をしへらる人々四人何かしくれがしえり出てこたびその功をほめねきらひ猶をりもあらはわか小林の舘にもこひ出て口説なときかまほしく思へりなといとねんごろにつけ給ひけるよしおのがをしへ子度會弘訓神主かく明らけき御代にあひてかゝる仰こうかゝふれることのうれしきよし歌よみてみせにおこされければ同し心によろこびてかへしによみておくりける

伊勢の海の渚の眞玉みかきおく光はましもあらはれにけん

後藤親明か家の松の詞

松園のあるしその庭の一木の松もていつきたまふはよのつねの前栽めで嶋このむたぐひにはあらで親思ひの深くまめやかなる心より根ざしたりとかさるは木のもとにはちりもあらせずはきゝよめつゝあら玉の春ごとにまさりゆくわかみどりのめでたきをめで本つ枝しづえの枝さしも武く雄々しき物からなつかしくおもしろきけそひて花もみぢのあはれにもおほく立こえたるをよろこび月の夜ころ雪のあしたのすがたなどいとおもひの外なるけしきなるをいつもいつもめなれたる園の梢とも見ずめづらしくおぼえ琴の音かよふ松風にをりをりは笛ふきあはせて世のうきふしをわすれ子をおもふよるの鶴のすみかもよそならんやとおもひをこりなでよろづにもてはやさるゝもげにもとおしはかられぬ此一木には千世萬代のことぶきさへこもりてうみの子のゆく末遠くいや榮えにさかゆかむことのしるしともすへし思ふにかのうゑおきたまひし父君の御蔭わすれぬあるじのまめ心をめでゝかしこきやくゝのちの神の御靈もたすけ幸ひ給ふべくたのもしく尊くてかくいふになん

近藤好通か家の花かめにそふる詞

花瓶に花さすことはいにしへより歌卷などにも見えて今もくわひんとてあるがそれなりけむを今の世には床といふ所に押板の上などにすゑおくもあれど又床の柱に釘うちおきてかくるがおほく柱ならでも床のあたりつりてかくるもあり今の世には花かめとはいはずてすべて花いけとなんいふかめなるもあり黑きかな物のもあり竹の筒なるもありかたみにつくりたるもありなりひさごもてつくりたるもありそのかたちいづれもさまざまに大きなるありちひさきありふくらかなるありほそくたてるもありへいし酒つぼのまゝなるもありこゝに近藤健安藤原よしみちの家にいつきもたるはかめにてすべての長さ七寸五分ばかりくちのわたり一寸七分くちのかたより下二三寸のほど筒のさまにてそのあたり横にまとへる筋物のゑやうのあやもありせのかたにくぎにかくべく紐か何かぬき通すべき穴もありそれより下つかたはやうやうにふとくなりてそこにては三寸あまりまへのかたへはりいでたるは木うりのゆか〜さまにてしりのさまなすびのふくらかなるがそこは平らかなるが如くそこより四寸ばかりのほどはがつき松かさの青きほどのうろこだちたるさまながらはた孔雀の羽のかさなりたるさまにていろはすへて黄いろのくすりかゝりてむらむらといろのこき所はくろう栗皮いろしたりかくことごとしくいひたつれば何とかや世にことなるかたのさまにきこゆなさるれどさらに世にことなるにはあらずはじめにいへるかのさまざまなるが中の一つにていづこの里にもたが家にもよくあなるよのつねの花いけなりけりかゝれど此花いけのたふときゆゑ

よしは今はむかし安永八年己亥四月五日先君香巖院の殿物のたよりに此家に立よらせおはしまして床のはしらにかゝれりけるをふと御手にとらせおはしましてうち御覧してよき花いけなりと御詞かけさせ給へるなんいとゞたふとくいともかしこくて此家の寶としてうみの子の末遠く長く久しくつたへむとすなるゆゑよしをいさゝかしるしてよとこはるゝまゝにかくいふは本居三四右衛門平おほひら

さしそふる君か言の葉とことはに萬代かけてあふく花かめ

櫻嶋の詞

駿河國安倍氏その家よりいとちかく見わたさるゝ淡嶋山の櫻の詞をほしきよし伊豆國江間の里石井近春か許にふりはへ物していかで〳〵とこひねがはれけるよし此ごろ文のたよりにいひおこされたるまゝにかきてつかはすしかいふ所は二國の堺こなたかなた五町ばかりをへだてて南を重寺の里といひて伊豆國の入海の海つら北は同じ海づらの口野の里といひてするかの國なる打よする波さはちかきところにてをちこちの浦のみるめもここになん有けるまづ北のかたに大鳥の鷲頭の山いと高く海の面十町ばかりへだてゝ見やらるゝにつゞきてそれより下つかたは端山ども立かさなりて猶西の方へ浦つゞきに見わたせば夏草の沼津の驛の千本の松はみどり深く見やらるれどそれより末はいと〳〵遠くてさつたの磯山清見がた三穂の松風音にきこゆる所々は波の關守ならねど雲霞にへだてられて心あてにそなたとばかりたどらるゝものから物のけぢめもみえやらぬは田子のうら波うらめしけれど富士のたかねの雲井に白くあふがれたるは又およぶ物あるまじくこそ伊豆の國の物さへに大瀬の神社の松原は北のかたへ此入海の西のかた三里ばかりむかひにさし出たれば大海の沖つ白浪は此松の上より見ゆればたこの末の松山こゆらむさまにめづらしくおぼゆかし南は玉鉾の眞城の山より東へつらなれる山々もとり〴〵におもしろき所なるが物よりとにおかしきは此いとちかき重寺の西に二町ばかりへだてゝ波間にたてる小嶋になん有ける此家の左のかたにあらずはつかに三四町ばかりと見やられてただ此庭につくりすゑたらんさましたり此嶋こぎめぐれば一里ばかりありめぐりの巌さま〴〵扇石せにいし何くれとめづらしく釣する船も此あたりの渚に心よすらむとおぼゆ山の上には島の神何がしとかや申すをいつきまつれりその宮ゐに分のぼる道はつゞらをりにて十八町あり松竹おほくしげりあひてときはかきはにいつとなきおもしろさ人ならば都のつとにもいざなひてやんとなきあたりの御園にもまゐらせまほしく此家あるじはおもはるらんとさへにおしはからるかしさるはかゝる見所のとみたらへるのみならず家の業もゆたかにたりとゝのへるにあはせて心ばへさへ敷島の倭心まめやかにて富士の高く貴き古の道をあふきわが鈴屋の翁のあらはせる書どもに心とゞめて代々の風雅をもてあそばるゝは打あ

ひたのもしくなんまことや此嶋山の松竹に立まじりて咲にほふ櫻の花の花ざかりこそいはんかたなけれそは南のかたはすくなく西の方はいと多けれど大かた若木とのみ見えて飃風はげしく吹なびかして立さかえがたく北もしもと原かやなどばかりしげりて花の木多からず此つねにまづよくみやらるゝは東おもてなり年ふりたる大木ども五十もとあまりいとよくさかえて咲ちる春毎に雲と見え波とまがひ雪とたどらるゝも所がらはことにあかず面白く見る人ことに心うつさぬはなくなんまして此家あるじのみやどの心はいづくはあれ此嶋山の咲のさかりは世にたぐひあらじかしとたゞわが物がほに思ひほこりて朝日ににほふ花の梢のゑみさかえつゝ波の立るにめではやさるらむと又おしはからるゝもおかし櫻花さきそふまゝに島の名のあはと見やらぬ人はあらじなかくいふおのれは紀の國人雲井はるかにへだゝりて見もしらぬ海山なれど此詞こふとてそこかしことしるへしおこされたる石井の水をくみわけわきまへてしるしたるなりけり文化十一年二月廿三日

道俣居の詞

駿河國阿倍郡國府の宮ヶ崎町なる栗田貞良の翁がかくれかの名を道俣居と名づけてその家に人々つどへて古こと學びせらるなるはいとおむかしきわざになんありけるそも〳〵此翁十あまり二のとし猿樂の大皷をよく物してその名早くよりをちこちに聞えたりそのゝち俳諧の言の葉をこのみて友だちこなたかなたと行まじらふ中に遠つあふみぞ故郷にて城飼のこほり平尾の里とはつねにしげくゆきかよふほどにこのかみ土麻呂の翁の學びのさまを見きゝてつひに縣居の大人のはじめたまへる古こと學びの尊きゆゑよしをわきまへわが鈴屋のあらはされたるかず〳〵の書どもをよみ見つゝいにしへのまことの道はすべて心あらん人のしらではえあるまじきことわりをしりておのがするがの國人にもすゝめて學ばせばやとおもひおこして同じ里人森直樹村松春枝などかたらひかはしつゝまづ古風の歌をよむことをとさためたるにさだよしの御たちをよしとて春枝の言の葉もゝき萬葉集に志し直樹の直く雄々しきいにしへの心をふかくたどりつゝよみならふほどに神の道のおくかをさへさとるべくもよほしすゝめられたるはかの大皷の音に笛につゞみうたひ物のこゑ〳〵も一きはもてはやされたるが如くかのはいかいの言の葉のあさはかなるさましておかしきによれるを好めるもいにしへぶりにのぼりすゝむべきはじめなりけむとぞ思ひあはされけるかくて年へぬるほどに直樹春枝は風にちり霜にかれてはかなくなりぬれど又直船直里などつぎつぎにいそしみてちまたゐのつどひは今もゆきかよふ人たえずなんありけるかけまくはかしこけれど御孫のみことの御あもりの御供御さきにつかへまつり給ひし天の神たちもかの國津神の天の八衢に出たちむかへて道引給ひしに雲路やすく行とほり給ひしためしおぼえて此道俣居の名のつ

きつきしく翁の道引の功のことにいそしく思ひかよはされてかくいふになむ文化五年正月九日

萩園詞

夏目甕麻呂主いにしへのみやびに心よせてつねにふみ見給ふ所の庭に朝夕露はうはぐに白玉なしておきわたし紫ふかく咲にほふいろもうるはしう露にしなふしなひも世にことなるをなんうゑなべてその所を萩の園となん名づけられける此花よ萬葉集にはことにいとおほく又よゝの集どもにもをりもをらずもかざしもかざゝずもめであへりける歌ともかずしらず見えたることなどは今さらにあげてもいはじ承和のはじめのとし八月十二日清涼殿に豐のあかりきこしめしけるを芳宜醼と申しきとかや同し十一年八月朔日の日天皇紫宸殿に大ましまして此花をみそなはしまし（原本ノマヽ）く〳〵ておとなしき臣たちに大みきたまひけるをり皆復古歎あり日くれて五位已上にかつけ物給へりなどその世の御ふみに記されたるをおもへばおほろけの野山の物ともおもはれずいにしへしのぶ人々つどへて歌よみ遊ばん所にはいとふさはしの園のうゑものやとそのよしいさゝか書つくるになんありける

萩原廣滿がかしの屋の詞

空見津大倭の國隱口の豐初瀬の里萩原廣滿主のやまと心をいそしみてその物學ぶ屋の名をかしのやとつけむとしてそのはじめの事ともいふ父維正ぬしといひしは二十とせあまり三とせ四とせさきつとしになくなられて今はむかしのことぞかしその人わかゝりし時より皇御國の物學びにこゝろさし深くそのかみ世に名高かる物しり人どものしるべ書によりてそのすぢの事ども見明らめて近きあたりの學びの友これかれとひねくまに〳〵延喜式の八の卷なる大祓の詞また日本紀の神代の卷神日本磐余彥天皇の卷なにと言のこゝろときゝかせつゝ神の道の高きゆゑよしをなもいひをしへられけるとそしかあるのみにあらずみやびのかたにも心をよせてをりふしは歌をもよみ出つゝすべてよき心ざまの人にてなどありしとぞかくてそのふみよみ學ばれし所なもその家の二階の屋にて明くれ此高き屋にのぼり入居てかの書どもよみきかせなんとせられけるとぞそも〳〵此高き屋の四方の見わたしはしもまづ北西のかたは名高き長谷寺にてその寺々いかめしく立つきてめもはるばると櫻さく春べはここにくれ橋の左右寺々のこのもかのも雲かとのみ見わたされてあかずみかほしく又東南の方はまぢかきよき山の神の森にて松杉の梢もまじりてはあれどもすべては檀の木のかぎりにてしみさびたるに露霜の秋にしなれば錦なすもみぢのいろ水鳥の鴨の羽色の青きにまじりて見のうるはしくみゆるも此高き屋のはえ〳〵しさなるに又此里のにぎはひはしもすべて觀世音の名高きによれるここにて大かた世にはつせといへば此大寺のことゝ人皆おもふばかりなる此里にしもかの維正主の神の道のたふときをもはたかのす

めらみことうねびの橿原の宮に宮敷ましゝによりつがの木のいやつぎ〳〵に此大倭の國に天の下浦安國としろしめしゝその御代つぎの書ともをも尊くかしこく見あきらめられけむ倭心のいそしきにつきて今のあるじは同し心にいよ〳〵ふかく思ひまなびてとしごろわが鈴屋がをしへ子となりて歌も古ふりによりてよみつゝ人々をもをしへすゝめらるゝは又いそしくおぼゆるに今の世の諺にわが佛尊しとかたくなにほこれるたぐひにはあらずて此里人のかく清く正しき遠御代の大御手ぶりを尊ばるるなるまじめ心をうむかしみ思ふにかの白檮原の宮の御名に似たるはいとかしこけれどそはこと〳〵として此よき山のいこまぢかくしみさびたてる橿村を此高き屋の名におほせてかしのやと名づけつがの木の花のあまひなくときはにかきはに古學びのこの初瀬の里にはじまりて此大倭の國内にいやひろにいやたらひ萬代にいやさかえゆかむことをしねぐなりけりかくいふは文化七年正月廿八日

賀島正根が穀之屋の詞

正根主の物學びせす屋の名をゆふの屋といふはその砌ちかく此木をなもうつしうゑられたればなりけりそのよしは日本紀の神代の巻に天の香山の眞坂木を掘（ネコジニ）してしか〳〵下つ枝に粟の國の忌部の遠祖天日鷲命の作らせる木綿をとりかけてとありて又古語拾遺に橿原の宮のはじめ大御殿造り仕奉れる事のくだりに天日鷲命の御孫木綿麻阿良多倍をつくり給ふとして天富命日鷲命の孫をゐて肥饒所求むとして阿波國に來まして穀麻の種を植給ひしかばその神の裔今その國にあり御代々々大嘗きこしめす年には木綿麻布また種々の物をたてまつれりとも見え延喜の式にも阿波の國より獻れる麁布一端木綿六斤云々となもあるを思ひてこれしかめでたく尊き國つ物なれば古こと學びする人のおほろかに見過し思ひすぐすべき事ならめや此國をしもよき所と求來まして神のうゑましゝゆゑよしとあれば庭中にうゑ生しもし屋の名にもつけて朝夕にたふとみうむかしみし給ふべきわざになもあると思ひよらせる倭心のまめ心をし我も又たふとびうむかしひおもひてかくいふになんあるかくいふは紀人大平

賀島安河が家の名橘垣内の詞

安河主の家の名をたちばなの垣内といふは園のうちに此木あるにあはせて思ひよられたる故よしあるなりそもそも橘のそのはじめの事は古ことぶみにも日本御ふみにもつばらにしられ續紀にも菓子之長上人所好云々ともあるはさることにてここに大嘗祭の悠紀主基二國の外に國々より貢る物も多けれど由加物とてことにいみじく京にのぼしいたす道々をも掃清の祇承せよとあるは紀伊阿波淡路の三國の貢る物なりこれが中の阿波の國より貢る物の中に橘子七籠半と儀式の文にも見え萬葉集にも新嘗會肆宴應詔歌島山に照在橘宇受嘗之仕奉者卿大夫等とあるも此同し大御業によれるなればしか尊さはゐ

よしをうへな〳〵阿波の國人よくも思ひよらせることゝうむかしひたふさひ思ふことをかくいふになもありける紀人大平
文政元年十一月中卯にかきしるすなりけり

多羅尾靱負主の家の櫻屋の詞

近江國甲賀郡信樂の多良袁里に代々を重ねて住ませる多良袁の君の物學びせす屋の名を櫻の屋と名づくらくは砌しみにうつしうゑられたるがおほかればなりけり家所ひろく園ひろく背面の丘山にも池のをちこちにももみぢする楓と綠はえある松との木だちあはひよく立まじりて春秋の見わたしおむかしくなもあるに椿躑躅萩女郎花百種千種さきつがざるにはあらねどこゝに多かるは櫻なりけり櫻はしも大御國の道の姿にあえてめでたき花と縣居大人のあげつらひたぐひなき花は此花とわが鈴屋翁もいたくめでおかれたるは眞事なりけりかれ此君の御學びには淡海の國のあひにあひて倭心も鹿深の郡のいやふかくすゝみ給ひ紫香樂のしかあらくはふさはしき屋の名ぞと思ふに御齡はた多良袁の里のいやたらひましていや木高く榮えませと櫻の屋のゆゑよしにあはせてことほきすらくは
文政元年五月十五日紀國人姓名

阿波德島人枝廣高が櫻園の都賀の屋の詞

春枝廣高の子がその家の庭に櫻をうゑて櫻園と名づけ又その物學びする家の名をも都賀の屋とつけたるそのゆゑよしをも思ひていふそも〳〵縣居大人の櫻の詞の大むねかきかぞふ四つの時はゆけど春にしく時もなく十まり二の月はたてど三月にくらぶる月はあらず久かたの空つらゝかにしなどの風なごやかなるにあえてにほひさかゆる櫻の花なもちゞの花にすぐれたるそうべならずや此花は言さへぐから國には生ずして空みつ倭の國のはたてにさけるとはまことなりけりから國の代代のをしへのこちたきに過てその政なごやかならず人の心うらゝかならず民の心堪ず國のあるじも代々にかはりてつひに思ひの外なる國人に得られぬるを思ふに春にしく時もなきが如く櫻にしく花もなきがごとくやまとにくらぶる國もなく神の道にしく道もなしといひてもろこしの人にみせばやみよしのゝよしのゝ山の花の盛をとよまれたるにつきてわが鈴屋の翁

たぐひなき花はこの花百に千に花はさけども花はこのはな

あだし木草のことけやけくこちたくはあらずて淺らかにあやなるか又なくみやびたる花になもありけるわが學びのおやなりし縣居の大人のこれぞ此大御神國の道のすがたとほめられしはうべなるかもよといひおかれたるゆゑよしもありて此二大人の古學びの道引にひかれて神ながらをさめ給ひし古の大御手ふり久方の天に始めし天つ日嗣のかぎりなく都賀の木のいやつぎ〳〵にうけ傳へまし梓弓今のをつゝに天の下しろしめすすめら大御國の尊きゆゑよしをもしりあきらむるなる事と此學びのいとかしこく此道引のいと尊くおもほゆるに此學のいや弘に此學びのいやたらひにたらひゆかむことはそのを

しへ子の枝々しゝにさかえそのうみの子の繼々いやつぎ〳〵に敎へ傳へ學びつたへて弘くたらひゆくべきわざなれば此家あるじの志ふかきにめでゝあはせてあなめでたの園の名やあなふさはしの學び屋の名やこかくいふは本居大平文化八年辛未九月五日

桃の門の詞

これの家の名を桃の門こつけたるは家あるじのものよりここにめでらるゝゆゑよしありてこのはひいりにも一木うゑられたればなり桃はしも遠方の野山かすみてみそらふく風さむからず人の心ものごけさおぼゆる二月の末つかた三月の始のほごに花さきいでゝおもしろき時の盛は紅の下てる陰にたちいで並ゐて長き日のくるゝもあかずみな人の酒のみあそぶ花にしあるを此あるじのおもひよられたる心はしかのみにはあらずて世にあらゆる人草の身のまがここをうちはらひやらふかしこきや意富加牟豆美の命こ名におはせる功をおもひて此門内に上よりゆかば上よりまもり下よりゆかば下よりまもりよるひるまもりしそけて禍事をいれぬ家の守門の守こめでたふこみて根こじうゑられたるまに〳〵かく名づけて桃の門こはいふにざりける

伊原富壽がこへるにかきてつかはしける詞

鈴屋の翁がをしへ子松屋の藤井ぬしのそのをしへ子伊原富壽こいふ人庭に一むらの竹あれば家の名を竹屋こいふこいひおこせこおのが詞をここはるに何事をかはいひつゞけむこまづ思ひめぐらせばからふみに宋の王元之が竹樓こ名づけたることもあれごその心ここ〳〵なればよしなしかし梁の孝王が築かせたる修竹園は方三百里などいひていこ廣き竹むらをなむいへるにてこれまたこゝにつぎ〳〵しきこここにもあらずかし中殿の東庭にうゑさせ給へる吳竹川竹の臺はいこも〳〵かしこき例[タメシ]にてあなかしこかけても引いつべきことかはこおぼゆかし夕顏のうへのかりのやごり揚名介なりける人の家に源氏の君の入おはしましで端ちかきおまし所なりければやり戸を引あけ給ひてもろこもに見出し給ふほごなき庭にされたるくれ竹せんさいの露はなほかゝる所も同じこごきらめきたるこあるなん廣き所ならぬによきほごにうゑたるさまなればそのさまいこよく似たるここゝおぼゆれごよろづ物はかなきさまに見なし給へるをりのここなればこれも又なぞらへいはむここはこちなくぞおぼゆるさらば竹取の翁がかくや姫をえつるより竹をこるここにふしをへだてゝよごここにこがねある竹を見つくるここかさなりぬかくて翁やう〳〵ゆたかになりゆくこいへるも此家あるじ野山にまじりて竹をこりて萬の事につかふ人にしあらねばいかにぞやおぼゆれごその名富壽こいひて何こかやよしあるかたに思ひよせらるればしひて求めいでたりさるは此あるじ家の內にたらはぬことはたなかゝめるままに家わざのいこま〳〵にはからの倭の書みるここをこのみ

て心のみやびもやう〳〵たらひゆくまゝに春の朝は竹のねぐらに鳴いづる鶯の初音をめで夏は若竹の風になびき露にたわめるをすゞしき物とし秋の夕は葉わけていづる月の光をまちとり冬はうつやあられの音のみだれを物あはれにきゝなしなどまたうきふしうれしきふしなどそのをり〳〵の思ひをのぶるにもこれによらぬことなく千代をこめ萬代をいはふこと葉も外にもとめず此君なくてはと一日もへだてぬ友と契りて春秋の花にも紅葉にも思ひおとさず槇の板屋の明くれにめではやさるらんかしこおしはからるゝまゝのはかなしごとをかくなんかいつゞけて竹の屋の竹の詞とかきつくる物から猶さし過したる心かなとかたへはいひけたまほしくなむ

木にもあらず草にもあらぬ言の葉をそへてそいはふ千代の竹の屋

文化十二年七月

石見國齋藤直道がこへる竹屋の詞

直道の子が國にかへらんとするに此人の物學びする屋の名を竹の屋とつけてこれが詞をたゝ一くだりかきしるして得させよと早くよりあとらへられたれど事しげきにえかきあへずて過しけるをかくいとまなくいますかるをしる〳〵しひてこひ申さむことは心なきわざになもあれば今はたゞ何となき竹の歌をだに一ひらかきて給へとをだに家づとにもちかへらむとあながちにこはるゝにしか思ひなだめていはるゝ事をやと思ひなりておのが机の書は見さしてかゝむとするにけふしも事にふれて冠辭考のさす竹のくだりよみ見たるついでにふと思ひよれることのあればそをとゝにかきつくそも〳〵竹は生のぼるさまたゞにみそらをさしてすゝみさしのぼる物なればさすたけといふなるべし昔とつゞけたるは蘗身の意なるべしくゝは久々能智の神の御名のくゝ思ひ合するなり宮とつづけたるは身彌の心なるべし身とは枝ならぬ木を身木といふが如し身は柄といふと一つことなるもよりところなりかしかくてたしみ竹もたゝし身の意かいくみ竹も活身の意かこれはた角杙活杙の神の御名おもひ合さえてなりさてつゞけたるいくみは伊こもりにまれ人組にまれ又たしはたし〳〵の意にて竹にはかゝらず辭のよせにつけたるはしかざりなるべしかく思ひよれることを竹の屋の詞とかきしるすも同じ學びのしわざなればなりけり刺竹のゆがみなくくるひなくすちりもちりまかれることなく高くたちのびてつよくたけき心のしかすかにうちなびきて心こはからぬさまあらば古こと學びして人にも物をしへむ人の爲にはふさはしきあえ物なるべしかしかくいふは紀の國人姓名

竹の屋の六十賀の詞

いせの國白子の里くすみ見といふ翁ことし六十のよはひたらひてをちこちのみやびをたちのことほきの歌唐のもやまとのもよみておくらむことをこひもとめむとするその詞をとおのがもとへつねに文かよはす與安海の子がいひおこせければか

くかきておくるなりけり翁はわかき時より手かくわざに思ひふかめて後の世のすがたはあきくなりにたりと見しりて大王小王なにといふいにしへの妙にすぐれたるをならひえられたりとぞうべな〳〵萬葉集にかなつかひにもてしといふ語に義之とも大王ともかきてはやくより名高き手師にてなもありければ今もしか思ひよらるべかりけりしかのみならず箏ひき茶たて香のわざ鞠もてあそびなどよろづの遊びのわざにも心よせたればその道々につけてむつびかはす友だちおほくおのおの此ことほきのもよほしかたらひはかりて同じくは同じ心にみやびわざ物する遠き近き人々にもすゝめばやといふにみづからもいかでさもあらばやとねがひてその題寄竹祝といふをさだめてもとむるなりけりかくさだめたるは此翁のかくれがの西なる庭に竹一むらをうゑて竹の屋といへばなりけりことぞうべな〳〵日本御ふみの十七卷にはつせの川ゆながれくる竹のいくみたけよたけもそへば琴につくりとありて竹もてつくれることもあればことひきあそばるゝによしある家の名とは思ひよりぬかくておのれまつほぎことすらく

竹の屋にうゝる植竹世もゆたにやすけく住てたちさかえてよ

京の何がしが書うる店のみやび名を幸之倉とつけて額にかける詞

佐知は幸取にて古昔の事しるせるそを讀見て事しり物しるをなもいふそは野山に遊び海川にゆきて獵し漁して山佐知海佐知あるがごとくしあればなり倉とは板擧にも櫃にも其物つみたらはひおく所にしあればなり

宵森記

四五百の森古き書にその名見えたる事なし永享五年癸巳三月普廣院義敎將軍伊勢參宮の時ともなひましてし堯孝權大僧都の道の記に歸るさの廿一日の段に

このころの月見るよひの森ならは猶旅人の立やよらまし

とありそのかみ松坂の里はいまだあらざりしかば三渡より松か島牛江津岸江なごを經てかよふ道のそのわたりより見わたしてよまれたるさまなり義敎將軍伊勢參宮永享三年二月ト物ニ見エタリサテ翌四年九月富士見物ノ旅行アリ其時ニ堯孝法印ノ道ノ記アリ 永享五年ノ參宮ノコトハ物ニ見エネド足利將軍ノ代々參宮ノコト度々アリシコトナレハ 一年ヲ置テ又有シニヤ 又ハ三年ト五年トノウチ誤アルニヤ堯孝ハ新續古今集ノ作者ナリカノ集ハ同シキ十年ノ撰ナリ そのゝちははるかに二百五十七年を經て後の元祿二年己巳九月季吟法印の伊勢詣の日記に

木の間もる月にそふらし宵の森都を思ふ心つくしは

此所は四五百の森といへど和歌所法印よひのもりとよめるにしたかへりとあり和歌所法印とはかの堯孝の事なり 伊勢軍記蒲生軍記などいふ書には此所の城郭の事につきて此地の事をいへるには四五百の森とかき勢陽雜記明暦二年津藤堂家ノ士山中兵助作ナリにいはく此所は古は城もなく四五百の森とて名所なり

いせの國四五百の森のほとゝきす名のりすてたるこその古聲

とあり又元祿七年甲戌のとしにかける此里の清水百齋が俳諧集の序には

伊勢國よいほの森の時鳥わすれやはする去年の古聲

てる月のよひほの森のほとゝぎすしのぶにあまる音をや鳴らん

この二の歌は里人の久しく語りつたふる所にしてよめる人つまびらかならずといへり神風抄（伊勢ノ御領神戸御厨御園ノコトヲ記タル書ナリ）多氣郡の條に四前生御園四前生御厨などあるを或人は（石藥師ノ驛萱生ノ由宣松木村古谷久五郎長ナトノ說）おもひよせて飯高郡に今四五百あればそのこゝに錯置たるにてもあるべしといへりそは郡の名たがへるのみならず與伊保と與爲布と假字もたがへればよろしき考へとも思はれずかくてわが翁宣長の說には延喜式神名帳飯高郡九座の內意悲神社と見えたるは今の本にはイヒと訓つけたれど意の字は古書にはすべておの假字に用ひたればオヒと訓べしおひとよひと音かよひ はた神宮雜例集に飯高郡內宮の御領に五勾六於非二ケ里とあり そのこまかりの村は此森の西のかた三町ばかりの程に大川にそひて今もある里なりかの神鳳抄にも五勾とありされば よひの森はおひの森の訛り言なるべしされど慥なる證據見いづるまでは必とは定がたしといはれたり又宵森とも四五百森とも二やうにいひならへるもいぶかしきによりて大平かく考ふるに此わたり一里二里のほどは山々をはなれてひろき平原の地に此森西北は藪の里の東大川のそひより南のかたは黑田まちの口まで茱町あまり長くつゞきて横は東より西へ茱町ばかりにてやゝ高く松しげく立さかえたる岡山なりとて常にも宵の森とも宵尾の森ともいへるなり尾とは岡といふと同しここにて古書ども峯をも岡をも尾とよめりよのつねの森ならず山の如く高き岡の森といふこゝろなりわが翁のよまれたるうた

民の戸もさゝて月見る宵の森惠のかけのくもりたき世に

宵の森木高きかけに里人の家居もしけく今そさかゆく

とよめるは此所はわが紀の殿の御城高くしめ給ひて此松坂の里のにぎはひ榮ゆくを思ひてなるべしかく書しるすは寛政九年丁巳八月廿八日

壽春居士の傳

稻掛昭隆がいはくこたびわが高祖父松光院陀譽壽春居士の百五十年の跡とふ御靈まつり仕へまつらんとす鈴屋大人の玉鉾百首にも世々の祖の御蔭わするな代々の祖はおのが氏神おのが家の神とよみおきたまへりそはもとよりのことなれど此歌を見ればいよ〳〵その心になりて身のほど〳〵につけてあがまへまつらまほしくおぼゆるなり此居士は本國も氏も御名も御墓所もたしかなるつたへなし是法翁の本生の御父なるよし過去帳（過去帳といふ物は先祖親族の靈を祭らんとするにその忌日を月次に次第して年月をしるしおく物なり）に明曆三年丁酉八月喜右衛門父としるされたるのみにて位牌もただ惣位牌の內にありてすべてはかなく外戚の先祖の靈號の如

しいでわが兄この居士の内緣をあらたにしるして給へ一卷によそひて永くうみの子の末に傳へさせてんといふこはいとよくこそも思ひよられたりしかおごろかさるゝにつけて大平も同し心にしかおもふことなりそも／＼われらが曾祖父是法翁は延寶五年のころ本家須賀氏の養子となり給ひて須賀喜右衞門順適となんいひける男子はいとけなくてうせられたれば女子おまつの君（須賀正淸室法名妙須）に婿養子とりて須賀喜兵衞正淸主（一志郡久居藤堂何某殿家臣山口甚右衞門次男）となんいひける年經て後その家は此主にゆづりてみづからは隱居（致仕して世を經たるをいふ）となりて須賀四平翁といひけるをお松の君の母刀自は既く（須賀氏家つきの女法名智光院妙玄尼と云元祿六年八月三日死）過給ひて後の家刀自（飯高郡伊勢寺村の人松本氏女法名常法妙讃尼）のうみたまひたる男子十助導孝ぬしの十六になり給ふ年ともなひて別家になんうつり給ひけるこれ稻掛の家なりかくて是法翁は享保十年に過給ひ（正淸主）は延享二年に過給ひ導孝主は寶曆十三年に過玉ひて須賀氏は喜右衞門正繼主稻掛氏は十助棟隆主の世にて正繼主の子直見主も廿ばかりにて家のことかたらはるゝころほひ曾祖母（妙讃尼）祖母（妙須）などのまれ／＼事にふれてかたりたまひけるは是法樣は古田殿の孫にてあるし或は御隱居樣は大膳殿の孫にておはしつなどなごかたり給ひけることとありきとぞされごそのよしはいかなりとも女のよくもきゝしり給はざりけることゝや代々につたへたる家業とて日毎にいそがはしくるたちいとなみてつねはさるゆゑくしきゆゑよしなごいひいづることもなきならひなるをいかなるをりふしにかありけん又そのころつねにいでいりしてうちとけかたらふこともあるかろきものゝへつらふ心もなく又はゞかりものへだつる心もなきおい人のこれの御祖母樣は大膳殿の御子孫とやらにて何をかはいはん〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇などそのかみいかなるをりにたがいひきかせたるをもりきゝおきたることにかありけん思ひの外なるものゝしかいひたることもあれはこれをもこゝに引出たり又かの妙讃の尼君は明和二年九十五にて大平が十にてあること過玉ひぬる人なるが大平が七ばかりのことにかありけむ何の物のついでにかありけむそはおほえねと誰とかやは石見くづれにけておはしつるなりとのたまひしをそのをりそはおそろしかりし事にてやとばかりふと思ひて外にともかくも思はずかしこきその詞は耳のそこにのこりてたゞ夢のやうにおぼゆるばかりになんありける（石見くつれとは古田兵部少輔重恒殿家のみだれにて一家中散亂したる時の事なるへし）これらのことのみ此居士のゆゑよしなるへくおもへばたゞそのまゝにかきつくるになむ稻掛といふ苗字は古く物に記したるは此居士の内室の君にて是法翁の母君慈貞院蓮地妙祐大姉とて延寶六年九月十九日過給ゐる墓の石碑に稻懸氏とあり法八寺の墓地にありしがて此大姉が家の氏にやあらんと直見主も考へおかれたる事あるかよし／＼にある老人（是法翁のよはひの末つかた骨事ねしのあるしにておはすなころわらはにてめしつかひ給ひし男なり西黒部村の勘七と云此事とひしは安永九年の冬なり）に大平がとひきゝたるにも同

しきまにいへりしかば母方の苗字にてありしなりこれにつけてもおもふに古田といふもじは此松坂にてはそのころつゝしみはゞかるべきゆゑぞありけんと思ひやられぬかし古田殿の事はこゝにいはでもありなむことながらついでにかきそふるなりかの大膳大夫重治主は慶長十一年に御兄兵部少輔重勝主の跡をつぎて元和五年七月石見濱田に引うつり同じ六年に御甥重恒主十五になり給へれば六萬石の領地家寳のこらずゆづりわたしてみづからはものさびしきさまにてなん江戸にすみ玉ひけるとぞその心清さのほど世にたぐひなしとそのかみ世の人いひたりと物にしるしたりさて寛永二年十一月廿五日御とし四十八にて過給ひぬとぞ吉山道輝大居士と聞ゆ北の方は丹羽宰相殿の妹君にて寛永十一年九月十二日これも江戸にて過給ひて圓光院殿壽林宗永大姉とぞ云つ御墓も同じく淺草の海禪寺といふにありとぞ又そのはじめをたづぬれば平姓にて高望親王の五男村岡五郎平良文主より山邊何がし中村何がし土屋何某大苗大谷垣屋古田とつゞきて十三代の後古田吉左衛門重則主つぎに重勝主とついてたりかくて是法翁は須賀氏の婿養子なれば古田はいはゞ外戚の如くなれ物に一家を別けて更に稲掛氏をたて給へるを思へば猶この居士のすぢをたてむの御志なるべくおもふことなれば

今さらに穂にこそいつれふるの田に生るひつちの末の末葉も

しのふかな百五十とせの秋をへてふりし古田の君か御かけを

石の上布留田の末の稲かけは千秋五百秋とかえゆきたんかく穂にいでてといへるは文化三年丙寅七月晦日稲掛の昭隆がはらから

本居大平

草まくらの日記

安永二年閏三月十日の日鳥がなく東路のはるけき旅になん思ひ立けるさるはをちなる人のかしこに物することありてさそはれたるなりけりきのふよべまで雨ふりしかどけさはやみぬ

　ふるあめは晴ぬるけふもたび衣猶袖ぬらすわかれぢのそら

花はちりて青葉がちなる森のこずゑもなにとなくながめられていとこゝろぼそくなんあいゝ濱白子(シロコ)里を過てその日は神戸の里にやどりぬ

十一日巳の刻ばかり桑名(クハナ)よりふねにのる

　漕いでぬといさつけやらんいとゞしく戀しきかたにかへるしらなみ

やゝ遠くこぎはなるゝまゝに故郷の山も見えずなりゆきていと心ぼそきに何のしつらひもなき船なればひたすら打よする浪に旅衣の袖いたうぬれぬ

　さらでたにかはらぬ袖の衣手をなみさへいとゞうちぬらすかな

かくてたそがれ時になん尾張の熱田(アツタ)に船はてぬればやがてそこにやどりぬ

十二日なるみを過とて

　行まゝに故郷遠くなるみかたひかたもなみに袖ぬらしつゝ

智立(チリフ)ちかくなるほどより雨ふり出でいと行くるしかりければ日はまだ高けれど岡崎(ヲカ)の驛にやどりぬ夜もすがら物さびしく雨もいとゞふりまさるにあすさへかくふりてはゆくさきなる大井川などいふ大きなる川々の水まさりなばとみにえわたらずやあらましこたびはことにいそがるゝ旅にしあればいたづらに日數經んもいとくるしかりぬべし木曾路はやゝ遠く山なども多かれど川のうれひはなき道なればとてさらに道かへてかなたにとさだめつ

十三日きのふのやうにいみじくはふらねどけふも猶雨やまず

さてよへ定し木曾越の道へ物するにはことゝよりすこし歸りてころもといふ里より山入のかよふ細道あれどいとまぎらはしき所々おほかればきのふこし道をいたづらになして又あつたまでかへるに二村山をすぐとて

　旅ころもころもへすしてきのふけふふたゝひ越る二むらの山

けふは熱田のやしろにまうでゝ故郷ゆくさきの事どもねぎ奉りて

　立かへりいのりこそすれ尾張なるめぐみあつ田の神のやしろに

それより音にきゝわたる名古屋(ナゴヤ)の町を過て川ありかち川とはいへど船にてわたるさて日くれぬればやがてその里にやどりぬ

十四日みのゝ中山を過るほどもけといふ花や又つゝじなどの今をさかりに咲つゞきたるいとをかし猿山ともをこえて釜戸(カマト)といふ山里にやどりぬよもすがら耳かしましき谷川のほとり

なるだにあるを軒の松風さへいとはげしう吹て心ぼそくそゞろさむし

十五夜まきかねといふ山をこゆるほど雨ふりいでぬ

いとゝしく袖こそぬるれ雨衣みのゝ國にはきつる物から

中津川といふ里を過てよこぎるといふをこゆるほど雨はれぬ落合村をへて馬籠といふ里ありこゝより信濃の國なり木曾のみさかをこえて妻籠といふ山里にやどりぬ

十六日つまごめを出でいとゞふかき山路を分ゆく木曾川は左をながる三留野といふ里を過てむかひの方に木曾の御嶽こまがたけなどまたいと白くみゆやゝゆけは山のそは道にかけたるいとあやうきかけはしをわたる此わたりはこのめもまたいさゝかけしきはみたるばかりにて鶯のこほれる聲も心もとなきにこのゆくみちのほとりに櫻の花のたゞ一木春しりがほにさけるもいとめづらし

山ふかくたどり木曾路のかけはしの思ひもかけぬ花を見るかな

小野といふわたりをゆくに山川にわたせるおほきなる橋あり右の方を見やればいと高き山のうへよりとゞろきおつる瀧ありしばしとて

たちよればわかそてかけてたかねよりみたるゝたまのをのゝたきつせ

絶ずして幾代經ぬらんたかねより落くるをのゝ瀧の白糸

ながき春日におくかなくしらぬ山路を猶行〱て寢覺の里あけ松などをへて福島といふ驛にやどりぬ

十七日あけぬとておきいづればたどほのかにおとなふ鳥のねもいとあはれなり關をはなるればあたりの山々いとたかしう霞わたりてこのわたりには桃さくらなどところどころに咲たるにも

花みてもなくさみはせて中〱に戀しさまさる故鄕のそら

こぞの春よし野に物せし友などおもひ出られてなん宮のこしやぶ原の里などを過て鳥井たふげといふいとさかしき山ありからうじて手向にのぼりてこし方をかへり見れば霞のそこに行かふ人のいとちひさくみゆるもめづらしくだればならゐといふところなりゆき〱て荷部川本山などいふ里を過て洗馬といふ里にやどりぬこゝはすこし山も遠くなりぬ戀しきまゝにねこし山こし吹風のたよりだにあらばことづてやらんと故鄕への文かく

おもひやれおはすて山の月を見てなくさめかぬる草のまくらを

十八日こゝよりたゝにゆけば鹽尻諏訪などいふ所にいたるなり善光寺へまうづべしとて分れて左のみちへゆくその左にいと遠く飛驒のおきくらが嶽といふみゆ郷原といふ里を過て松本といふ所にいたるこゝは此國にてもいとよき所にて家ともいとおほく立つゞきたり岡田といふ里を過てあた坂山といふをこゆ、かりや原會田などをすぎて久立峠といふも鳥井峠にもおとらずいとさかしゆきくれて青柳といふ里にやどりぬ軒の松風いと心ぼそく吹ば

鶯のいとによるてふ青柳の里もかりねの夢はむすはす

故郷のみ戀しく思ひみだれてなきあかしつ

十九日をみといふ里を過てまた山路なり分のぼるまゝに霧いとふかくてこしかた行さきも見えずたゞ谷川のながるゝ音のみ心ぼそく聞ゆからうじてみねにいたればいときりふたがりてなにのあやめも見えわかずこの山をばさるかたうげといふとぞすこしくだれる所にてわが故郷の名しるしたる笠きたる人の行きあへるを霧のたえ間に見つけたるいとうれしうていでしばしまたせ給へわれらも松坂のものになん侍るが君はいかなる人にかとゝへばまろはそのちかき塚本むらにてしかじかのものになんといふにさらばやゝさきにものし給ひしは何がしの尼君にてはおはさすやとをぢなる昭方(アキカタ)のとへばさなりといふにさはもとよりよくしれる人なりけり物いひてましをよくも見しらで過し事よといひてかたみに戀しきかたの物がたりしつゝうれしといはむかたなしさてよべ書おきし故郷の文とうでゝおのが家はかのあま君のよくしり給へるにつたへ給へとて此人になんつけけるかくてゆくさきいそぐ道の空なればあかずなんわかれけるやう〳〵くだりゆくまゝに霧はれゆきて夜のあけたることゝちすいなりといふ里を過ておひ分丹羽島といふ里ありさてさい川といふおほきなる川を船にてわたるたきりて落るせゝの岩波いと早くふかければさをなども立べうもあらねばかなたこなたのきしにいと高く大なるはしらをたてゝそれにふときつなどもをつけてかなたへ引わたしたるを船の中よりわたし守どもの手ごとにくりよせつゝからうじてわたり付ぬこの川原のほどは廿丁ばかりとぞおぼえしさて善光寺にはまうでけるたふとき事いはん方なし日くれぬればやがてそのわたりの里にやどりぬ

二十日きのふこし追分にかへりて左の方へゆきてちくま川をわたりてそのちかきみちをかみへのぼりて戸くらさかきなどいふ里を過て上田といふ驛になんやどりける

廿一日海野の里を過て小諸(コムロ)といふ里ありそのこなたの道より左の方にいと高く大きなる山みゆさと人にとへばこれなん朝間がたけといふにいなさにはあらし煙りのたたねばといへばこの四年五年のほどはけぶりたゝすなんなり侍りぬるされどみねにのぼりてちかくて見侍ればいさゝかなごりばかりは今も猶たち侍るとこまやかになんかたりける

なか〳〵におちこちひとやとかめまし淺間の峯に煙たゝねは

猶ゆくさきもいと廣くながくつゞきたるすそのにてをりしもあさまおろしとてかの山よりはげしく吹かぜいとさむきにまさごをさへふきたてゝいとくるしやう〳〵おひわけの里にたどり付て火たかせてあたり物などくひてすこしさむさもわすれつさてこゝをはなれゆくに里ありそこに神のやしろのましましけるを入てをがみつゝ見れば鳥居に遠近(ヲチコチ)の宮とかきてがくかけたりあなをこがましいかなる神にもかの在原中將の歌

もてなゝさかしき人の付たる名なるべし里の名もやがてをちこち村となむいふとぞくつかけといふ里を過るほどより雨ふり出ぬかくてこよひはかる非澤といふ驛にやどりね

廿二日猶雨ふりていと寒きに旅衣のすそ高くからげて出たつ朝のほどに碓日(ウスヒ)山をこゆとて

いとゝしく雨さへふりてたひころもうすひの山の今朝の寒けさ

又

衣手はさやにふれともうすひやま故郷遠み見る人もなし

此山は信濃とかみつけのゝ境になんありける坂本にくだりて雨はれぬやゝゆけば右の方に妙義(メウギ)といふ山みゆめづらしき岩山なり立よりても見まほしけれどこたひはえ物せず

廿三日高崎のやどりをいでゝ倉賀野(クラカノ)といふ里を過てかんな川といふを船にてわたるこの川よりあなたはむさしの國なりかくて熊谷(クマガヘ)といふ里にやどりぬ

廿四日けふも日いとよし吹上(フキアゲ)といふ所をゆくほどふしの山又ひたちのつくばねなども見えてけしきいとえならぬ所なりと人のいへどけふはいたう霞こめていづこも／＼見えさるこそくちをしけれ

かくまてもかすむをみれは春風のふきあけの里は名のみなりけり

廿五日大宮(おほみや)といふ所より立て戸田うらわなどいふを過てわらびといふ所をゆくとて

名にしおはゝつとにやせましもえいづるをりにあひたるさわらびの里

かくて午の時はかりに江戸につきぬ神田といふわたりより物うる人の家どもゆきかふ大路のけはひいとにぎはしく俵どもおほくつみたるちから車をあやしのをのこどもの引ちがひののしるこゑなどいとらうかはしくめもあやなり

廿六日雨ふるけふはしれる人々のもとへ物して物がたりなどす

廿七日けふも又雨ふる

廿八日猶雨ふる

廿九日けふもはれやらずながめくらしつ

四月朔日空はれぬ更衣のこゝろを

はるかなるたひの日數もしろかさね袖におとろへ夏はきにけり

なつの來てけふぬきかへつ旅衣木曾路の花はなれし袂を

二日ひよし

三日すこしくもれり人にさそはれてすまひを見にまかりぬ所は深川の八幡宮の御前にてなん有ける

四日淺草の觀音へまうづべしとてまづ神田の明神へまうづこの春やけぬればかりどのにおはしますいみしき石すゑども殘てみゆ又湯島の天神へまうづこれも同じくかり殿なり此所より江戸の町ども見おろしたるけしきただやねどもつゞきにつゞきてかぎりもなく末はかすみたりさて石のみはしをくだりてゆくほど空すこしくもりぬされど雨ふらぬかぎりは猶ゆきてんとて上野(ウヘノ)にいたりぬ二王門のあとゝてこれも石すゑのみ

残れりそこをいさゝかのぼりて山王權現宮をゝがみかなたこなた見めぐるに花の木ごもいと多かるに春思ひやらる叉門を入て中堂ををがみ奉るたふとさいはんかたなし下りてしのばずの池とていと大きなる池あり中に辨才天のましますあり
そこにまうでて歸らむとするほご雨ふり出ぬしばし人の家にやすらひつれご猶やまねはさてかへりぬ
五日夕つがた雨ふる
六日けふは淺草寺になんまうでけるいと大きなる門を入て御堂をゝがむさてかの上野の山のふもとをめぐりやなかといふ所を過て日ぐらしの里といふを行て見るいごおもしろき所にてせうえうする人たえぬ所になんありける
七日日よし
八日人々うちつれてかた〳〵見めぐりつゝ白ひげのわたりといふ所より船にて角田川をくだることは音にきゝわたる川なればなにとなくむかし思ひ出られてこなたかなた見まはせご都鳥などいふべき鳥もみえねば

みやことり今はいつこにすみたかはたえぬながれに名のみ殘して

日くるゝほご兩國橋といふにつきぬ
九日堺町といふ所に芝居といふ物見にまかりぬ
十日ざうしがやの法明寺といふ寺にまうづべしとて出たつひるつがた牛込といふ所をすぐことにもしたしき人有ければ立よりて物かたりなごするほご空のけしき夕立めきてにはかに雨ふりいでぬ酒のみなごしてとかくするほご名殘もなくはれたればそこのあるじもともなひてゆくかの寺また護國寺赤城の神社なごへもまうづこのごろやごれる所は大門通といふ町にていそぎけれごかへさは日くれぬ
十四日芝といふわたりに增上寺へまうづ
十五日雨いたうふりければいつこへもゆかでつら〳〵こゝもりをるにひるつがたすこしをやみければ鮫町といふ所へもいせんとて出ぬこれもいと遠ければわらくつはきいでたつ四谷赤坂などまでありきてかへりぬ
十八日けふも叉淺草へまうでぬ
十九日けふあすのほごにかへりなむとすればかた〴〵にまかり申しにありく
二十日あさてばかり出たゝんとさだめつ水鳥のたちのいそぎともなにやかやとらうがはし
廿一日人々來て夜ふくるまで酒のみなごして名殘をしみける
廿二日まだ夜ふかく江門を立いづるにしばしなれご聞つる所とてはかなくこなたかなたながめられて名殘をしきこゝちす
池上はいさゝかまはる所ときけば品川よりこなたの道をゆきてまうづ本門寺といふてらなりすこしゆけば新田明神とてまうすにもまうづこの社は矢口のわたりにてうたれし新田義興をまつれる神なりとぞさてやぐちの渡よりこの多磨川のつゝみをやゝくだりて六郷のわたりといふをわたれば川崎なりなま

麥こやす村などいふを過るに左は海つらにてこゝかしこ見わたされ沖つしら浪のたちさわぐけしきいとめづらしかな川をゆくほどはげしさことにおもしろしいとちかくむかひにほんもくとかいひてさしいでたる松山のさまもめづらしけさ出し江戸の方をかへりみればいとはるかに波路へだてゝ見ゆその日はほどがやの國なる十塚（トツカ）といふ驛にやどりぬ

廿三日鎌倉江の島も物せんとて左の方へ入て山本つたひにゆきゆきてそこかしこ古き寺どもをがみめぐりて鶴が岡の八幡の社にまうづ

千代までも世をまもれとや宮柱つるかをかへにたてはしめけん

石のはしを下りてゆけばこゝにもはつせの觀音と申あり大和なると同じほとけにてましく給ふとぞそこの御堂の前より見わたしたる海つらけしきよし

見わたせはうらをちかみあまをふれこゝそはつせの名にはおひける

たきゝこるかまくら山ゆ見わたせはみこしの崎に波立わたる

くだりてやゝゆけばかの見えし海べに出ぬいなむらが崎とぞいふいそづたひに行つゝ海のおもてを見渡せば空もひとつに立つゞきてかぎりもなき波路なりこのわたり浪のたゞあしもとまでうちよせかへるさまにおもしろしといふもよのつねなり

まさこちをわかふみゆけはうちよせて跡つけしとやあらふしらなみ

江の島もやうく見えそめてはいよくいはんかたなくて家づとにもせまほしき所なりはるかの沖にいはほと見えて浪の打よするごとにくだけちるさま玉のわきいづるやうなるも又なくめづらし海人（アマ）のすむ里を過て又みきはに出ぬかの江の島こゝよりは海のむかひたゞ五六丁のほどなりいと木ふかく木どもしげりあひたる山にてみきはにかさなれるいはほのさまもいとめづらしかしこにわたり付て

こしみちのくるしきこともわすれけりうらわの浪にこゝろうかれて

かまくらよりこゝまでは一里なりとぞ島のうちに家どもたちなみたり坂をのぼりゆきて貴き所々をがみめぐりてあなたにくだればいとひろき岩のうへにて海みやりつゝ酒のみなどすこゝはあたりなるにもおもしろき所なれば日數へて見るともあくよしあるまじけれどさてあるべきならねばしばしやすみて立さりぬさて一里ばかりきぬらんかと思ふに藤澤といふ驛に付ぬ十塚よりこゝまでたゞにくれば二里なりとぞ

廿四日馬入川（バニフ）といふ船にてわたるよろぎのはまを過こて

ゆくまゝに月日はいたくこゆるきのいそけととをさふることのそら

さかみちのよろきのいそによる波のいつかかへらん故郷のそら

こゝにしぎ立澤といふ所もあり西行法師のこゝろなき身にもあはれはとよみし所なりとぞゆきくて小田原を過てはこね山にかゝる左の方は早川のながれいとあらましくむかひの山の木だちうちしげりて嶺の松風もこゝろすごくきこえわたされたるいとあはれもふかき山路なりほとゝぎすなきて過けれ

ば

せきとめむしからみもなし早川のはやく過行山ほとゝきす

湯本なごを過て日くれかゝりぬれば畑こいふ山里にやごりぬこの家はおのづからなる山を庭にいこをかしうつくりなしてやがて谷川の水をもせき入たれば山の中より瀧おちて軒ちかくながれゆくもいこ涼しければ人々おりたちてむすびあけ手あらひなごす

たちよりて、ゝる人ことにむすふかたのきはにおつる瀧のしらいと

廿五日の曉松ふくかぜに夢たえたるをりしも例の郭公の鳴ければ

二聲も三こゑもきゝつほとゝきすはこねの山のあけかたのそら

ここはにながるゝ山水の音は雨のふるやうなれごけふも日はよし朝またきにさいかち坂かしの木坂なごゝていこおそろしき坂ごもをのぼりつゝいりもてゆけばいこおほきなる湖あり關をこえて家ごも立つゞきたる所にしばしやすみて又坂をのぼる下ればすこしひろくてさゝの生しげりたる所ありさがみ伊豆の界なり猶下りゆけばいづの海見ゆ「はこねぢをわがこえくれば伊豆の海や沖の小島に浪のよるみゆこ古ここなごうちずしつゝ過ゆく猶さかしき坂ごもをくだりゆく此わたりよりふしのねよくみゆこきけごけふは雲のみ立ふたがりて見えす三島沼津の里をすぐればするがの國なりさて原の宿にいたる此わたりはやがて富士のすそのなれご雲なほはれやらず

いつしかとこゝろにかけしふしのねをつれなく雲のたちかくすらん

かくてはつひにふじ見でやみぬべきにやこいこくちをしあまのすむ里ならねごうらふつゝ浮島がはらを過てたそがれのほごによし原の里に付ぬ

いとせめて夢にもみむとたのみつゝふしのすそのに旅ねをそする

廿六日朝こくおきてやごのさうしをなにこゝろもなくおしあけたればかの空にたに見んこ戀しのびし人はたゞ目の前にならん立たる

雲のみかうらみもはれて朝日出にほふあさかすかきふしの柴山

高しなごはいふもさらなり今朝はいこさやかに右のかたに見つゝ富士川を船にてわたる岩ぶちこいふ所を過るほごはかの山ひだりにみゆ遠さかるまゝにいよ／＼高くなりゆくこゝちす猶かへり見つゝゆくにふもこより雲かゝりそめてやう／＼立のぼりつゝはづかにみねのほごいささかのこりて見ゆ

はる／＼とふりさけみれはしら雲のうへにもしろしふしの高根は

かんばらゆひをへて倉澤こいふ所より山路なりこれをさつた峠こなんいふ左の方は田子の入海にて浪立さわぐ

するかなるたこのうらなみ立わかれとしふる里をこひぬ日もなし

この山をくだればほうこてあまのすむ里なりこぬみの濱を過て清見にいたる三保の松原をみわたせば波のむかひにさし出て船こものちひさき鳥のうかべるこ見やらるゝもいみしくめづらかなり

故郷にいそぐこゝろも清見かたしはしとゝむる波の關守

江尻府中(エジリフチウ)を過て阿部川をわたるかくて宇都の山ちかきまりこといふ里にやどりぬ庭の松風たえず吹てよもすがら心ぼそく物思はしうて

旅ねするまくらの松にかよひきて夢路ゆるさぬ宇津の山風

廿七日松の下道より山路にかゝるうつのやといふ里あり十團子(トヲダンコ)といひて家ごとにうるそはもちひをちひさくまろめて青くあかくいろ/\にそめて玉のやうにつらぬきたる物なりけり

夢にたにいまたみとりしうつの山うつゝにこゆる蔦のほそみち

岡部の里猶ゆきて藤枝西戸(フヂエダセト)などをすぐれば島田の驛なりさて名にながれたる大井川をわたるあやしうむくつけき男のかたにまたがりてさしもふかくおそろしき早瀬をわたりゆくほど目もくるゝこゝちす事なくわたりはてゝみな人よろこぶ事かぎりなしかなやを過て山路をこゆれば菊川の里なり

幾千代も老せざるらんきく川の流をくみてすめる里人

さてつゞける山なんさやの中山なりけるおもしろきやまぢのさまなるをかたはしをだにとておもひめぐらせど

名にたかきさやの中山なか/\に家つとにせんことの葉もなし

飴うる家にやすらひければあめなん付てくはせけるいとうまし坂をくだれば西坂(ニツサカ)といふ所なりかくてかけ川にその日はやどる

廿八日かけ川の宿をすこしはなれゆけば道のひだりに秋葉道とかきたる石ぶみたてり此神は遠き國よりことさらにもまうづるいと尊き神にしませばよきついでなりとて友なへる人のまうでんといふをいざなはれてほそき道に入ゆき/\てゆたしろ村といふあり掛川より一里また二里へてもりといふ里ありすべていとさびしき道なり川あり歩みてわたる猶行てまた川をわたる二里ばかりがほどはたゞ此ひとつながれを行めぐりあひつゝよそたびばかりもかなたこなたにわたりゆきて里あり何とかや名はわすれにきさて又山路をのぼるほど雨ふり出ぬいとくるしってこの秋葉の山のふもとにいぬ井とかいふ山里にやどりぬ

廿九日雨はやみぬれば朝の間にのぼらむとていでたつ五丁といふに金明嶺(コンミヤウレイ)といふがくかけたる鳥井たてり人もてゆけばいとゞ山ふかく谷よりをちなる山々もきり立こめてみねばかりみゆる浪のうへにうかへる島のやうなるもめづらし五十町といふに二王門あり入て秋葉のやしろををがむかゞみをかけ玉をかざれるさまいとたふとしさてこゝより鳳來寺といふ寺のかたへ物する道をくだる下りはつれば戸倉といふ里なり又さい川村といふを過て川をわたる天龍川のかみなりみなもとは信濃のすはの湖より落くる水とかやこゝより船にてくだれば二時ばかりに濱松にはつくとぞ大みねといふ里をゆくに酒うるおほきなる家ありかゝる山のおくにはめなれぬもののさま

なりさて行〳〵て石くちくま村かん澤などいふ所をへてはほりといふ里を過るほど日もいたくかたむきぬれど猶大野といふ里までゆかんとていそぐにくれはてゝ谷のかけ道いとたどたどしきをついまつのひかりにかゝりて遠江とみかはの界といふ山までのぼり付ぬそれよりなほ一里ばかりからうじてくだりてす山といふ山里には付ぬすべてけふの道は九里といへど雨さへをり〳〵ふりてさかしき山路にし有ければかく暮にたるなりけりかくてその里のあやしき賤かさゝ屋にこゝろよりほかに一夜あかしぬあらましきよものあらしをきくにもいと物こゝろぼそくかなしくてかゝる山のおくまでいかでたどりきつらんとまで思ひつゞけらる

晦日またすやま峠といふをこえてほそ川といふ里ありさてまた山路をこえてそかの大野の宿なりけるしばしやすらひて又山路をゆくゆきゆくまゝにいと〳〵さかしき道にてむかひを見あくれば行者岩(キヤウシヤイハ)とか名付たる十丈ばかりなる高さに見えてべう風をつきうゑたらんやうなるいはほ山ありかれをこえゆく道ぞときけば玉しひもきゆるここちすされどせんかたもなければ道もなき岩のはさまに手をかけ足をめぐらしつゝからうしてよぢのぼりてなんかの鳳來寺の御堂のうしろにおりぬるその御堂はいといかめしくみかきかされるさまいみしうたふとしさてあなたよりのほど道は九丁がほどうるはしき石のはしにて行かうじにたる足はいとたゆくてくだるだにくるしされどかのいはほにくらぶればなにばかりにもあらず追わけ村を過て川そひの道をゆきてその川を船してわたる又かなたも川にそひたる山道にてかわちしん城大木などをへて日くれぬされどこよひは秋葉ほうらいしへまはらでたゞにゆきつる人の赤坂の驛にてまち居たればかならずかしこまでは物せではあしかりなんとてくらき夜にいと遠き野原の霧をわけわけてからうして御油(ゴユ)にいて子の時ばかりにかの赤坂には付ぬ露ばかりまどろむとせしにはや夜はあけぬとておき出づ

五月朔日きのふをとつひの山路にはこよなくかはりて旅人のゆきかひいとにぎはし宮路山をこゆるほど郭公のなくをきゝて

それかとよ雲井にのみになきすてゝすくる宮路の山ほとゝきす

藤川を過て岡崎にいたるくだるをりよそに過けるみかはの八橋このわたりより立よる道ありときけば行て見る

からころもきてこそぬるれ八はしのはる〳〵遠きむかしおもへは

ちりふ鳴海を過てまたあつたにやどる

二日空すこしくもりて雨もふり出ければ船路はいかゞあらんとおぼつかなけれど例の故郷いそぐこゝろはえためらはでのりぬさてこきゆくほどに雨はれぬれば苫のうはふき取はなちたるよものながめいとはれ〳〵し桑名ちかく見ゆるほどより又雨ふりきて風さへ吹いてぬされど午の時ばかりに船はてぬ

つゝみなく遠き船路をこきはてゝ熱田の神のめぐみをぞしる

雨いたくふるけふは神戸までゆくへしさていそぎにいそぐ四日市おひ分を過ぎてうつべ川何はかりの渡にもあらねどけふは水まさりていと深きを人に引たすけられてわたりぬされはかくても過しかとまた高岡川ありやゝおほきなる川にて水いと高かればわたるべきかたなくてほいならねどこのたか岡といふ村にやどりぬ

さみだれにみかさまさりてたかをかのかはのこなたにたびねをそする

三日雨はれてひるころよりやゝ人もわたるばかりに成ぬればかの大井川わたりしやうにてわたりぬけふはかならず古郷につくべかりけれど川にさへられて時うつりぬれば日くれてあのゝ津にとまりぬ

いせの海やあこぎかうらに引たひの旅ねもたひをかさねきにけり

四日いとはやくかへり付ぬ

ふるさとのことゝもたひのこゝろかたむすぶゆめのくさまくらして

靈ちはふ神代より今にいたるまで、世中にあとある萬の事ども、人の力もておしはかりがたきなお、いとおほかりける、そが中にも、神の御上には、ことにあまたあれば、さかしだちてとかくさだしことわりなどせんは、いみじきひが事にこそ、たゞありのまゝにいひつたへかきつたふることこそ、眞の道にはあるべかめれ、神風の二大宮のあるか中にもたふときゆゑよしなどは、あなかしこかけていはんも中々なるべし、世におかげまゐりとて國々よりむらがりきそひまうでける事は、かのはかりしられぬひとつにて、われも人も聞しれる事ながら、書などにかたはしつゝしるせる、またまうでたる老人たちの、又も／＼かたりいづるなど、ひたぶるにむかし語とのみ見聞てこそすぎしか、ことしやよひの半すぐる比より、阿波國の人々百千萬とかぞへもあへず、いやまうでにまうづるをはじめにて、今はおほくの國々みさかりにまうづと、まさめに見もきゝもして、老人のもの語、ふみのかたはしなど、おもひよそへられつゝ、いとめづらしき事どもなりかし、こゝにもかへり來て、とありかゝりなどものがたる人々のあなるに、おのれもいにし年比まうでつる事さへおもひ出て、こゝかしこのさまをもとひきけば、大方の年とはなぞらへがたく、めざましううちおどろかれぬはなくなむ、先のたびに松坂の里にて、稻懸のしげほといふ人の、其事こまやかにかゝれたる双紙、やがておかけまうでの日記とうは書せる一とぢありけり、さいつ比かの阿波人の中に、瀨邊ノ春根ぬしも家人のうかれゆきしをおひしきて、まうでつるかへるさ、師の翁の許に立よりけり、翁、此ひとゝぢをとりいでゝ、昔も今もおなじき事、かはれる事など、かたり給へるにしばしかし給ひなむやとて、ひたすらにこひもてかへりぬとなむ、ある日おきな、おのれにさとされたるは、此文は源氏榮花の物語あるは枕雙紙などの文を見て文章を書ならはん爲に、しひてさるさまにかきたるなれば、所所文章めきたる事もあり、文中の人の物いふ詞をさへ入たるなど、中々初學のしわざしるくいとつたなし、すべて今ノ世の事を後世に書傳へんには、玉勝間などの如くさとし記すべき事なるを、かの物語文などのふりをまねびたるは、かへすがへすつたなき初學のわざになむ、雅詞（ミヤビコトバ）をもて書たるが、かへりてはさまたげとなりて、木に竹をつぎたらんが如き事もあるべし、其ひとつ二つをいはゞ、ぬかづき奉ることよ、又日ごとに見えまさり、又たぐへる友を、又おほくまじり

きぬる、又萬をうちわすれて物ぐるほしくかたはらいたく世にうつし心とも見えず、又あるまじきさるがう事、など初の二ひら三ひらの中にもいとおほければ見る人心してゆるし見るべし、かくいふは、文化文政のころの目にて見るまゝをいふなり、とやうにいはれたり、さはいへど、いたり淺き何がしらがかきてもおよびがたく、さる若き程にいかでかくはとおもはるゝあやこと葉なりや、さとび事をかくさまにうつしてかゝむを、いとよき事なりと心得ひがめたる人々も世にはありて、中々のものぞこなひも多く聞とりがたきふしもまじるべかめれば、わが翁のいさめもげにことわりときこえたり、さるを、かく板にさへゑりたるは、つくりぬしの本意にはたがふものから、今はそのをりの事かくだにしるせる書も、をさ／＼なかめるにつきて、春根主のもとめもせちなるに、かのまうでそめたる國の人にさへあれば、ひとへにいなむべくもあらで、したがはれたるになむ、たゞ文のあやにのみ心うつさで、あるが中にもたふとき二大宮の御蔭、また人の力もてはかりがたき事、などつら／＼おもひめぐらさんには、翁もあしくはおぼさゞらましと、ありのまゝにはしがきせるわかうどは、

文政十三年四月十六日　　加納諸平

おかげまうでの日記

たきゞこる山人、しほくむあまなど、下が下までも、この神風の五十鈴の宮にまうでゝ、いとしもかしこき大御前ちかく、ぬかづきたてまつること、いつのころほひよりはじまりけん、むかし熊野にこそはかくまうでけらし、今もことわざに、蟻のくまのまゐり、といふことのあゝめるは、そもそも二月三月のころは、空もうら〳〵とのどかにて、人の心もあくがるるを、花さかりのほどなどは、旅路もことにけう有て、おかしきほどなればにや、いづれのとしも、この伊勢まうでも、いとおほかるを、ことし明和八年辛卯春のころは例よりすくなく見えたりといひたるほどに、四月の七日ころより、にはかに山城ノ國丹後國などより、にぎはしく、こゝらともなひいで、いくむれともなく、まうでくるもあやしくなん、かくていとあやしと思ふに、日毎に見えまさりて、きのふよりはけふといやましにまさりもてゆく、さるはそのひとごとに、「おかげでさぬけたとさといふことをなん、道ゆくあしのはうしにいひつゝゆくを、七十八十になれる老人のきゝて、むかしもかくおほくまうできけるを、おかげまゐりといひて、そのをりもかくこそいひつゝ物せしか、此たびのさま専らそのをりのやうなりなどいふ、かの蟻の熊野まうで見るやうに、ひまもなくゆきつゞけば、たゞへる女などはすしなひなどするたぐひも、日々にあまたあれば、思ひはかりて、紙してしたるのぼりといふ物を、たかくさゝげもちてなん、一むれ〳〵のしるしとはしける、此のぼりといふもの、はじめのほどは「いせまうでいくひとつれなどかき、國所などうるはしく、記したりけるを、後にはうちたはふれゆきて、さま〴〵のゑやうなどを、かきたるなん、おほくまじり來ぬる、さるはいとあさましく、あらぬもののかたちなどをゑがきたり、さるはをこがましくて、あらはには、えこそまねばね、たゞ思ひやるべし、又のぼりの絵のみにもあらず、物のかたちを、ことさらにもつくり出て、杖のさきなどにさして、口々に、大ぐちとていみじきことゞもをいひはやしつゝ、或は手打ならしなどもして、うきたちて、わかきをのこは、さらにもいはず、おきなおんな、又物はぢしつべきわかきをんなまで、よろづをうちわすれて、物くるほしく、かたはらいたく、世にうつし心とも見えず、萬にたはれつゝ、行かふさまよ、あさましなどいふもおろかなり、神代のむかし、猿田彦大神の神こころをとかむと、うずめの命の女たてゝたはぶれ給ひ、「神代巻」また大地主の神の御田に、田虫の出たりし時、御歳神のをしへによりて、まつり給ひしをり、あやしきわざもせしなど【古語拾遺】思ひあはするに、すべて神のまつりなどにも、かく思ふことなく、おもしろくたはふれさわぐをぞ、神もおも

しろしとはおもほすらん、さるをなか〳〵のさかしら心には、物まうでのかく心も空にさわぎたちて、あさましきさるがうことせんは、何のかひか有べき、物つつしみ、まことなる心にてこそ、神もうけひき給ふことわりならめ、など、よしなきあつかひぐさとさへなりにけり、さてまた人数おほくともなひたるなどは、かののぼりをさゝげもたるが先に立て、長き綱を引はへゆけば、それにとりつきつゝ、おのが一むれまよはじと心してゆくもあり、又常には、いといやしきものゝ、人にもしらせず、忍びてまうづるをば、ぬけまゐりとなんいひて、かたゐのごと思へるに、こたびは、さしもいやしからぬほどの人どもゝ、いざといへば、せちに心もよほされて、思ふどち家人にだにしらせで、ゆくりなく立出るたぐひも数しらずなん、さるは旅のよういことにふきまうけもなきさまにてゆくが、いと心ぐるしくみゆれば、山田の里、宇治の里をはじめて、所々の富る人ども、またさらぬも、ほど〳〵に物くはせ、さるべき物、あたへなどもすめり、雨のふる日は、菅笠、あみどもやうの物をさへなん、あたへける、この松坂にても、同じさまにぞ有ける、廿日ころより、やうやくに、京人なんおほく見えまじりける、廿四日よべより、いたう雨降出て、そこらの旅衣、しとゞにぬれつゝゆくもわびしげなり、よろづよりもいとほしげなるは、おけに、ちひさきちごを、おひいだきなどしたる、又みつはぐみたる老人の、雨もたまらぬこもむしろを、おほひかづき、杖にすがりつゝゆくなどよ、かうをさなき子どもをぐしたるが多くみゆるは、例は大かた旅路わづらはしとて、とゞめおきても物し、又おほくは、これにさはりてえものせぬならひなるを、こたびばかりはともかくも思ひたどらずて、ともなひ立出くるなるべし、廿五日ころは大津人奈良人などもとひて見ゆ、廿六日はちかき阿濃津などもまじりて、こゝの里人どもさへもよほされつゝ出るなん有ける、おほかた此ごろとなりては、夜中といへど旅人のゆきかひたゆるまもなし、ふしゐてきけば、夜もすがら物うたひなど行あらそふさま、いとらうかはしう聞えていもねられずなん、廿七日より、たゞ近き伊賀いせのほどなん、おほくみえて、京人のにはかにとゞめるは、御即位の御政、このころのほどゝきこゆれば、さるゆゑにもやなど聞えあへりける、晦日の日はたふるけにや、すこしうすらぎたり、月かはりて五月朔日の日きけば、いひしもしるく、廿八日なん、かの御ぎしきぞありけるとなん、六日難波人見ゆ、おほき事は、いふもさらなり、七日は同じなにはの中にも、よき所の人々おほく、さまよきになりぬ、京人とは、こよなくらうがはしくて、物いひさわぐもあらゝかにはげしくなん、すべて、此頃は四月のほどよりも、こよなう増りにまさりて、大かた大路は、ひねもすいさゝかのすきまもなきまで行ちがふに、とみの事などありて、むかひなる家に、あからさまに物せんと

するにも、今ぞすこしゆきゝのたゆめるほごよ、こためらひて、そのほごをうかゞひて、よこさまにおしわけつゝ、からうじて向ひの家に行いたるなご、いごくいみじき事になんありける、此ころ、久しう雨ふらで、世中うれひしほごに、八日の日午の時のほごより、にはかに空かきくもり、夕立はげしく降出ぬるに、かのぬけまゐりなるたぐひの、雨のまうけもなきは、皆わびまごひて、人の門毎に雨やごりす、いたうぬれひぢて、心くるしきさまにて、空をのみまもりつゝ、夕立なりな、今をやみなん、こいひてためらひをり、げに此はげしつしげき雨のしたも、しばしがほごに、晴ぬかば、又人人の足ぞ行かひける、かくてその日は晴み曇りみしばしば雨ふりつゝ日もくれぬ、九日は日ひこひ降くらして、十日ぞはれぬる、旅人こそあれ、天下の、民くさのためには、いこうれしき幸ひなりきかし、さて、此ころみれば、京難波は、さらにもいはず大津、なら、堺、ひめぢ、明石、なごしるしたる菅がさごもゝ、いご多かり、そのほか、大和、河内、あふみ、わかさ、播磨、さぬき、なごかぞへもあへず、天が下ゆすりてまうで來、かゝれば、此いせ詣の道のほご、宿々所々のちや屋、旅籠屋、なごいひて物うり、人やごしなごする家家には、たくはへおきてうる物ごもゝ、今はつきなんなごぞいふめる、中にも酒もちひなごはいふもさらなり、其外もすべて旅人にうる物つくる家々には、例よりも、人やこひくはへ、ながき日に夜をさへかけて、いかでおほくこいそぎつくれご、かぎり有て、さしもえつくりあへずなん、中にもわらうづは、いづこもく、のこりなくうりはてゝ、ちかきわたりに今は一つもなきよし、なごいひあへれば、まれくなほたくはへもたるものは、物の憐もしらぬ商人心に、いこかしこき事こ思ひて、こよなう高くなんうるめる、されば、まづしき旅人はえかはで、すあしにてゆくなごもおほきを、あはれしれる人は、いそぎつくらせてあたへなごもすめり、後には、かゝる事の聞えありて、その所々の司人より物高くうる事を、かたくせいせられぬるも、ことわりぞかし、かのはたごや松坂のほごにもあまたあゝなるを、ほごくにやごさるゝかぎりおほくやごす中にも、廣き家には、百五十人二百人なごもやごして、ひご家のうちおしあひ伏みちぬれば、おくれてもこめ來たるなごをば、今は所なし、ここやごりへ物したまへかしなごいなむめり、それも、よき旅人なごをば、さもいはで、せめてこかくして猶やごしもすめるを、さもあらぬは宿りもえこらで、人の門の本、橋の上、なごにはしたなく心にもあらで、草枕するも心ぐるしきさまなり、おほかた他驛等もかくぞ有べき、さればはたごやならぬ、商人の家なごにも、心あるは、さやうにわびしき目みるをば、こゞめて、物くはせ、湯あむせなごして、五人十人なご、錢もこらで、宿かす事も始まりにけり、これを、せぎやう宿こぞいひける又竹輿かきこ

て、世にいやしきむくつけ男の、旅ゆく人にすゝめて、竹輿をかき來て、その道程にはかりさだめて、價の錢を取りて、乘せゆく事を世渡りとする者あり、とはつねの事なり、此度は足いたみくるしとて、すか〳〵しくもえゆきやらぬ、ぬけ參りの足よわき人、わらはべおい人などを、施行駕とて、あたひの錢とらで、のする者もあまたあり、その町々にて、今日は、何かしくれかし、明日は、何かしくれかしと、家毎にさだめて、その家のあるじにもあれ、げすにもあれ、かはる〴〵、かごかきて、隣村あるは町の端々などまで、のせおくる事もあり、遠き國々より詣來るを、此大御神の國にまぢかくすむなるうれしさの、宮仕へにと思ひて、かゝる事を思ひよれるなりけり、されどまた今めかしきわかをのこどもなどは、これをめづらしく、けうあることに思ひて、髮つやゝかに、うちけさうし、紅のはなやかなる物きなどして、ゑひごゝちに、今やうのはやりかなる、こまかひふしなどうたひつゝ、さもあやしげなる抜參を施行馬に乘せつゝ、ゆきちがふもかつはをこがまし、又かし馬などをもやとひ、或は家にかへる牛などにものせ、或は板もて作りて屋形なき輿のやうなる物に、をさなきどもを、四五人ばかりのせこめなどもして、例のおかげでさ、などうちはやしゆくなど、常ならましかば、いかばかりをこがましからましを、此ごろは、目なれてめづらしうも思はぬまでなんありける、又友まどはして、いたうわぶめるたぐひおほかるにつきて、さる人をたづね出て、めぐりあはするわざをする事ありき、そは、まづ、上は、西町、下は、湊町とふたまちにて、その家をさだめおきて、門にのぼりをたてゝ、はぐれ人詮議所と大もじにしるしおけりければ、まどひ人のあるごとに、みなそこにたづねきて、事のよしかたれば、國所などくはしくとひきゝて、物にかいつけおき、さてこなたかなたと人をわかちつゝ、もとめありかせて、猶久しくえたづねいでぬは、阿濃津、また、山田までさへ、さるべきわたりをとひ合せけり、さるは、山田にも津にも同しさまに、はぐれ人せんぎ所とてその事ものする會所のあれば、そこにとひあはするなりけり、かしこより、又こゝにたづねくるも、同しさまなり、夜なども大聲にて、その國のその鄕の何がしは、やどりてはあらずや、とよばひつゝ、町のかぎりありきなど、よろづに心をつくして、たづねもとむめり、一日夕つかた、六七ばかりなる子の、そこかしこと見まはしつゝ、ゆきもやらぬあり、例のまどひたるなめりとて、たが子ぞとよ、國はいづこなどとへど、はゝよ〳〵とのみよびつゝ、泣より外なきもかなしく、ことわりなり、くだ物とらせなどとかくしつつ、こちやとてかのせんぎ所によびとりて、とゞめおきつるに、またの日母にやあらん、目もなきはれて、たづねきたる、そのたづぬるは、此兒ならずやとて、さしいでてあはすれば、まだこの世にはありけりな、あなうれしともうれし、あか君

逢の御かげにて、二たびめぐりあひ侍ることゝて、手をつくりてをがみつゝ、なごりもなうよろこぼひて、ゐていにし、その外もかゝる事、日ごとにありしとかや、これらは、ここに神の御心にも、いとしとぞおもほしめしなん、さるはいとたやすくもあらぬわざなりければ、かの一所ひとまちの人ども、かたらひあはせてなん、しけることぞ、十五日のころになりては、いよ／＼おどろ／＼しく、あまりなるまでまうでくめり、世中の人は、かくまで有けるかと、今さらにおどろきあつかふめり、十八日難波人はすくなくなりぬとみゆるに、又阿波紀ノ國よりむらがり出たり、かくて廿二日頃よりぞ、すこしづつ、うすらぎそめにける、此ごろ又しも雨ふらで、久しくなりていとどあつさのたへがたければ、まうづる人のすくなくなりゆくもことわりなり、さればこの暑さにえたへで病出などして、道のそらにいたづらになるも多かりとぞ、まことや、此ごろ、外宮なる一本の杉の梢に、ともしびのやうに、火ともりしなどいひ、そこかしこめづらしく、あやしき事ども、くさくさきこゆれどみなたしかならぬ事どもなれば、もらしぬ、六月のころは、まち／＼より、せぎやうとて（粥施行）かゆを煮てくはすることいできぬ、十日ごろは、又うすらぎて、例のとしの春の頃に、すこしまされるにや、と思ふばかりになりぬ、されど、廿日ごろより、また、越後、越前、信濃、ひたち、むさし、などはるかなる東路よりも、おほく／＼まうでゝ、これら

ぞ、かのじちのいやしきぬけまゐりてふ物にて、門ごとにものこひなどするもあり、又このほどは、江戸などもまじれり、かくてなほ世中には、あやしき事どもしきりて、あらはる、まづ御祓といふ物の、空よりふるなること、こゝかしこにあまたあり、又は、しろかね、つゝみせになどもふりて、そこにもかしこにも、ひろひつといひ、或は、道かひにて、よのつねならぬ人の、ゑさせつなど、たふとみのゝしるたぐひ、すべて、めづらかなる事どもなりけり、されど、さる不思議は、狐木魂など、あしき神のしわざとおぼしきがおほければ、うるさくて、こと／＼にくはしくもまねばずなん、又やうやうにしぐににうつりて、安藝、周防、いづも、石見、ちくぜん、肥前、あるは、長崎、などいふもやゝ見えて、やう／＼になんうすらぎゆきぬる、五月のころ、おのれも詣しに、まづ、いとめづらしかりしは、宮川の橋なりけり、常は、たゞ船にてなんわたすなるを、此たびは、あまり人しげくて、あやふしとにや岸よりきしまで、すきまもなく、（宮川船橋）船をよこさまにつなぎあはせて、そのうへに、板をならべ砂をしきて、水のうへ一町ばかりがほどをしも、たゞ陸路となんなしたれば、いさゝかのわづらひなくて、馬も、人も、たやすく行かよふを、神代もきかずめづらしき事とて、宇治山田の人々まで、これを見物に引つれくるも、又めづらかなり、まして、遠き國國の旅人は、目をおどろかして、これも、大御神の御蔭と、泪

をおとらぬなくなん、さて、此おかげまうで、七月のなからまで、猶たえずいみしきことゞもなりけり、まことやこのたびのことゞもよ、なにもなにも、今やうかちにて、物のみやびたるかたはなけれど、世にめづらしくも、をかしうも思ゆる事なれば、むげにしるさゞらむもうもれいたくてなむ、かのをりいとくはしうしるしおきつれど何くれといそがはしさのまぎれにみだりがはしくかきみだしてみづからだによみわきかたかりければことしまたしるしあらためつ

安永五年四月十六日　稲掛茂穂

筆のついでのたはむれ

こま〳〵と茂穂のぬしの御蔭くさ
ぬけた事なき日記を見しかな

右故翁詠　大平臨写

御蔭詣日記後書

ことしやよひのころよりおかげまうですとて世中ゆすりて老若男女のけぢめなくわれも〳〵と神風のいせの國さく須受の五十鈴の宮にまうづることぞ出きにけるさるははやくよりも例あることなりしをまだよはひゝききわがともがらなどはたゞ聞つたふるのみにてうつゝに見しことはあらざりきかしさてこたみ此ことの出きたることはみけむかふこの阿波國の人々よりぞはじまりけるさるはやよひ廿日ばかりにやわがちかきわたりのわらはべども何事をか見聞出けんにはかにそゝろき出しをはじめにてわづかに三日四日がほどにまづ此德島の里人は大かたのこりなきまでにぞ出たちけるおのが家のわらはべどもゝこれに心もよほされて同じき廿四日の日またあけぐれのほどにたちまぎれつゝひそかに家をぞいでゆきけるおやにもしらせでおのれ〳〵が心のまゝにしのび出たつことはつみあるやうなれどこたびばかりはよのつねのさまならねばこれなんやがて神のしからしめ給ふにこそいともかしこく思ふ物からまた親の手はなれやらぬものどものうきことしげき旅路のやうをもわきまへしらでかく心もそらに出ゆきけることゝいとゞいたはしくこゝろぐるしきまゝにあとたづねかてらその日のゆふつかたにおのれもたち出けるにからうじてまたの日めぐりあひつゝゆくりなうともにかの大御宮にまうで奉りけるはい

となんうれしきわざなりけるさて道のほどところ〴〵なべてのありさま世にめづらしきことゞもにてかのむかしありけむもかくやとあやしみおもふまに〳〵かへりつきなばゆくさかへるさ見聞たりしやうをものにもかいつけてましとさへぞおもひけるさてかへさによきぬ道なりければわか山にて師の大人の御もとにたちよりて何くれと物がたらふほど此ほど見きゝたることゞもをもかたりきこえけるにさかしかの明和八年といひし年にも此おかげまうでといふことはありてしか〴〵なんありしとの給ひつゝやがてみづからかゝれし其時の日記といふ物とうでゝ見せられけるをみるにまうでし人の國々の次第ことこまかなれ此たびのにをさをさたがふことなくいまかゝれたらんやうにいともつばらにしるされたればこれなんぬけまゐりのよき家づとなるとたゞにこひまでかへりけるにかばかりめづらかなるものをおのれひとりひめもたらんよりはいかでをちこちなるおなじ心の人々にもみせまほしと思ふあまりにゐりまきとなさんことをふたゝび大人にこひきこえけるにはいとわかゝりしほどのことにて心やりに書たるものにしあなれば日記のほいならぬふしもまじれるをさまで物せらんはなか〳〵なるわざならましとてゆるし給はざれどおのれは時にあへる物えつるうれしさにあながちにこひまうしてかく櫻木にはゐらせつるになん

文政十三年といふ年の後のやよひ末つかた

阿波國人　瀨邊春根

關の驛

關のうまやをはなれて山路にかゝるほど右のかたおもしろき岩山にて松の木どももおかしくてたてりいと夜ふかくいそぎ出立ければ今こゝまで九里とかやいふ道をきぬれどまだひつしの時にはならずとなん人もてゆくまゝに秋ふかき山のたゝずまひ松のひゞきこふかく川のながれ岩ほのさまもいはんかたなくあはれに繪にいとよくおぼえたる所々もあり旅はかゝるこそおかしけれと心ゆきておぼゆ坂下を過てやゝのぼる坂路に鈴鹿御前(スヾカゴゼン)の社とてよろしきほどの御社まします木しげき中に紅葉のいろこきも二木三木立まじれり石の御はしをのぼりてぬさとり手むけてぬかをつく

おくぬさを御垣のもみぢちると見はなか〳〵神の心とわかむ

いとけはしき坂路五丁ばかりのぼりたるにたつみの山あひよりはづかに志摩の國の山々海などみゆれどわがすむわたりは南なる峯にへだてられて見ゆべうもあらずなびけ此山とはげにぞいはまほしき

ふりかへり見てこそおもへすゝか山とほくなりぬるいせのうら波

めかり鹽やくあまならねどいとなき世のなりはひにかゝつらひたいふせき苦屋のうちに年をへつゝをり〳〵の人の物がたるにつけても都の有様ゆかしく又ふることに見ならひたる野山のすがたもいつしかいかでと思ひわたりつるにとしごろむつひかはす人のとみに物することありもろともに出たちなんやとそひつるまゝになんこよひは十月十日土山といふ驛(ウマヤ)になんやどりけるうひ立のけにやいたくつかれて足のうらうごかれず風のこゝちさへそひたりがはしうてとばかりうつふしゐたるほどに母なる人の面影ゆめにはあらでふと見え給へる何ばかり日數ふべきわかれぢにもあらねど心にかなふ物にしあらねば立出んとせし曉にはたゞならずこそおもほしけなりしかこよひのやどりを思ひおこせ給ふらんかしとかなし

國の名をねてそたのまん夢のうちにふるさと人のことひあひ見は

こゝはゝや近江の國甲賀(カフカ)郡なり

すゝか山ふきこす風のつてもあらはことひ旅ねのやとりつけまし

夜もやう〳〵あけゆくほどやどりを立出たるに四方の梢そこはかとなく霧わたりて霜ふかくおきわたせる冬枯の草葉もおかしうあはれなり

旅ねせし夜はのさむさをおきいてゝゆく道芝の霜に見るかな

このともなへるは西村の信廣(ノブヒロ)とて京に年經たる人にてかしこのあないたど〳〵しからずそこはとありかしこはかゝりなど所々のけうあるとゝもゆく〳〵かたるをきくもあしかろむこゝちすされど冬こもりのころにて大かたにぎはゝしからず春夏のほどいかで御らんぜさせばやなどもいふめりたれもさは

思ひつかし道をゆけど日みしかく夜な〳〵は又さむくなどして旅ゆくにびんなきころなり三月のころにもやなども思ひしかどかならずさるをりしもさりかたきさはりはいでまうでくる世なりと思ひおこしてなん草津を過て野路(ノヂ)といふをゆく十六夜の日記に日くれかゝりていと物かなしと思ふに時雨さへうちそゝぐとて「打しぐれふる鄕思ふ袖ぬれてゆくさき遠き野路の篠原とよみ給ひつる所ぞかしと思ふに

村しくれふりしむかしもしのはれてまた袖ぬるゝ野路の夕露

この東くだりを都のつひの別れにてかまくらにてはかなくなり給ひぬときけはこの日記にしるし給ひつるこゝどもこそなにもなにもまめやかにあはれとおぼゆれ右の方にはるかに湖のいさゝかみゆるはめづらしき海にてそのほとりのけしきともそこかしこえり出て八景とか世にもてはやすなるはひとの國にいふらんことにあなかちにかぞへあてたることそこちなう心つきなけれされどそれはさるかたに耳ふたきてもありなんかし目にみむけしきいかならんとかつ〳〵見つくるよりうれしうゆかしうてくひさしのへらるゝ心ちす世多の橋まづめつらしうかなたこなたうちわたしつゝあかずやゝ見をれは下より船に奉りてんや大津までやつかうまつらん又石山にはまうで給はずやとせちにすゝむなげにその石山にまうづるなれどけふは日もくれぬなりつとめてのほどにこそとさだめてその里にやどりぬ又の日大津まで船に乗たるほどおかしうなん粟津の松原よりゆかんも見所なきにしもあらねど水のうへいかにおもしろからんとてなむぜゝの城といふを見つゝゆくほどみどりなる海の面にはるかに黑きものゝかすもしらすみゆるかれは何ぞ鴨にぞ侍るといみじうもとてやゝあはひ近くなりたれはみなとびたちたる羽音よいとおどろ〳〵しう空さへとどろきてかの平家のいくさどもの富士のすそのに陣とりたる夜そゝやかたきこそよせたれとておびえまどひけんもかうやうにぞ有けんと思ひあはさる大津の家居どもゝみゆ三井寺もみゆその上なる山をなんながらの山とはいふなる

雲井にははやくの代より聞なから山のけしきはけふぞ見てける

松本といふ所におりぬかの三井寺は山のほどいと廣うしめたれはまうづる所々おほかり海みやらるゝ所より見やりたるけしきあないみじともよの常なり目もはる〳〵殘るくまなき水の上に船どものそこかしこゐたる手にとりつへうおぼゆるもおかし一葉(イチエフ)のふね萬里の身とずせらるゝ所のさまなりさて相坂のわたりをゆくほど大きなる力車をうしどものこゝら引つづきてくるしげにあへぎつゝのぼりくだるもらうかはし此道はしも東の國々より京にいる口なれば米たきゞなど何くれと數もなくになひつゞけなど人も馬も行ちがひのゝしるさま常のことゝはきけとゐ中人の心には何事ならんな例ならず人の行さわぐはとおどろき思ふまでなん有ける御廟野といふに山科の御陵とまうすおはしますと聞おいつれば里人にたづねて

をかみ奉る道より五丁ばかり右のかた木しけき林の中にぞおはしましける日の岡粟田山など過て京にいりぬるいかゝはうれしからさらむたそがれのほど萬里小路にしれる人のもとへたづねつきて心おちゐぬあす故鄕へたよりありとて燈火のもとに文かきゐたるほどに伊勢のまらうどやおはするととひ來たる都人のことばながらいつしかと待思ふ人のこゑときゝなしつればやがてよびいれたりけふおはしつき給ふらんとかねてうけたまはりおい侍しにたゞ今京極なる粕淵の何かしの許よりたゝ今立よらせ給ひて萬里の小路なる所にやとらんとするよしのたまひつといひおこされしかばいそぎよろこびながらなんまゐり侍るまづ平らかにおはしましたることゝ國なる人人もことなることなくやおはするなどいふにかたみにいとうれしきこゝろたつなしかゝるにつけてもまづうち出まほしき事もあれとゆゝしうてやみぬ年ごろの事などかたりあはするほどにいぬの時にもなりぬれは五つはかりかこのかみなりけれといとさかなくかたみにいさかひつゝ常におやなとにさいなまれしを過しいつとせばかりかほどよりをぢのもとに子になりていきければ同じ家にありしほどこそ有けれいとかなしう思ひかはしけるを又ほどなく京に物せしかはいよ〳〵こひしう何くれのをりごとにまづ思ひ出らるゝを母なとはましてそこだにちかきほどにのぼりてあこか物すらんありさまをいかで家つとになどなんの給ひければこのたびの物見もかたへはそのほいになん有けるこよひは御影講になん田舍などのとはいとこよなく侍るつかれ給ひためれとその寺ともはた遠くも侍らずいざたまへといふまに〳〵本能寺妙滿寺などいふなる寺々へまうてぬ日蓮上人とまうすわか宗の祖師の御忌月なればその寺々はいつこも〳〵きやう佛くやうしたふとき事するなりけり御あかしひゐよりもあかくともしつらねてこゝらの大とこたちかしらさしつとへ物のわきかへるやうにもじのあやめもわかずはやりかにもはやりかにきやうよみゐたる御堂のおまへ所もなく立こみいさゝかみしろくこともかたき中にもあの世を思ふ心はさわがぬにや老たるもさらぬもすゝの音高うあなたふとゝ淚をさへおとしつゝをがみいりてをりこよひはげにいたくつかれてありければとくかへりぬまたの日茂樹がもとへ堀川のあたりに物して例のいさなはれてまつちかき本國寺にまうてぬいとにきはゝしそこより東寺にまうつ木のもとなる茶屋にいりて物くひなとしてやすむ時雨めきて空うちくもりければふらぬほどにといそぎかへりぬその夜雨ふる又の日三條の橋のわたりにたづぬる人ありてまかりぬ晝つかたより空はれぬ一日例の茂樹が來ていざなふまゝに祇園智恩院南禪寺永觀堂若王寺金戒光明寺眞如堂萬無寺銀閣寺などいふへまうてぬ吉田の御社へもまうでぬみなたふとし永觀堂の前なるもみちこそえならずそめつくしておかしかりしかのぼりてまちかくをがみたるにこの本尊ようしろさまにみ

かへりおはさうず常は御帳のうちにいふせうこもりおはすらむを今日たまさかにかくかゝけさせながら露霜の心つくせし木々の梢をつれなく見もやり給はぬ世にひかめる御こゝろこあいなうにくしや

うつりゆくうき世のいろにまよふなと見ずて人にみするなるらん

石のはしをいさゝかくだらむこする所に榎の木に似てたてるはぼだいずこなんいふめるその實の落たるをひろふこてきよけなるわらはこもの長き袖は左の手してまきながら落葉の下をかきわけてもこめゐたるもおかし

まけはおふるこの世の外の春まつとほたいの種をまつひろふらん

かへりてこのこもなへる人の堀川なる家にものしてその家の人々に見し所のありさまかたりなこしばしやすみて日くれぬこてたゝひこりかへるほご夕ぐれのそら何こなくものかなしきにむかひの山より月もあらはれいでぬこよひ十五夜の光いこはなやかにすみのぼる國にて見る同し月こおもふにいこただならず

ふるさとのかたとおもふにひかし山かはらぬ月も出にけるかな

通天橋こいふ所の紅葉此ごろさかりなりこきゝて見にまかりぬそは東福寺こいふ寺のうちにてやゝひろく山を庭にしめてこなたの御堂より谷へたてゝかなたの御堂へたてつゝけたるくれはしをなんいふなるそのはしわたるほごのけしきここにおもしろしげに紅葉もここにおほくていこ色こくにほへる中にきなるもましれるは錦おぼえて中々にはえありまちかき下陰をゆくほこはかほにもかゝやくこゝちすその日はここに人おほく見にくる日にてよしめきたる女こもの橋のうへにもたちさまよひ木木にもたれ居たるすゝろにおかしう心こきめきさへせられてちりはふる旅の衣の袖もうちはらはるゝこゝちす紅葉をここ見にきつるに樣はつかしうあらそひそめたる袖のくれなゐこもゝゐ中びたゝ目にはいこめつらかなる見物なりけり

たつねきて秋のにしきをけふそみる柳櫻の春はしらねと

おりかくる山のにしきもひとしほのにほひくはゝるたをやめの袖

所からはしの名におふ久かたのあまつをとめの袖かとそみる

富ノ小路に礪波（トナミ）のいまみちこて古代の事まなぶ人の有けるをゆかしうて一日物のついでにたづねてこふらひしをかへさいそがれし日にてしめやかに物がたりもえせで又ことさらにをこ契りてかへりしを思ひ出てのこやかなるよまかりぬ物學びの道に心ざしそめてはやう〳〵年ごろこいふばかりになりぬれこ何事もまたたこ〳〵しうてさえありこいふ人にたいめせんここなまはしたなくまして田舍人はよろづつゝましくていかにせましこたゆたひながら立よりしを思ひしにもにずいこうちこけやすく有しかは又しもかく來つるなりけり本居のうしのここなごこはるゝまゝにかたりいづ又日ごろよみおきつるこゝかしこの歌東福寺の長歌なご見すちかきよのふりなる

はむとくなりと思ひてとゞめつ物せさせ給へるめつらしきや侍るひとつふたつ見せ給へとこひたれば友だちよみかはされしをなんとうでられける又御らんせさすべき物侍りとて岡部翁の吉野の花の歌やかてみつからかゝれたるをなん見せられけるこれはわか宇萬伎大人のもたまへりしを去年こゝにてうせ給ひし後にその父のおきなののぼり給ひてかの例ならずおはしけるほとより何くれとあつかひつかうまつり侍しかはかたみにもとて給へるになん長歌はしらへおもしろき物になんいかゝ見給ふとてもろこゝろによみくだしみるさて古代のふりちかき代のさまと歌のしな〳〵何くれとさためなとするほどに夜もやう〳〵ふけゆく東福寺のもみぢさこそおかしからめされと猶仁和寺の花のをりならぬとくちをしき高雄なるはまだ見におはせすやこれはかならず御らんすべき所なりこそ見にまかりしに吉野の春にこそおよばさらめ山のほとひろくそこかしこと一日かほとたどりありき侍りき此ごろそのかりに侍らんのぼりあひ給へるも御さいはひそかしなと物語いとこまやかなり又の日はとくより宇治にものせむとさだめおきつるに朝の空くもりたりければ思ひたゆたひて

　雨ふれはせゝのあしろのそれならてこゝろいさよふ宇治の川波

されどあすはえさらぬさはり侍りいたくふらばこそあらめと信廣が來てせちにいさなふまゝに出たちぬ藤のもりといふより山路分入ほといみしうふりいつ

　とく藤のをりにしあらは春雨に袖はひつともいとひしもせし

たれを思ふにもあらねどこはたの山もかちよりぞ過て大和田村といふ萬福寺といふにまうついみしく唐めきてこゝかしこの御堂や門の柱とにぬりたる板にからの言葉ともをあかくもしろうも又はかねしてもこゝらかきたるなどこと所にもにず此寺はちかき代にわたりまうできつる何がしとかいふから法師のたてたりとなんこもりかなる竹村の中をとほりて御寶戸といふかたさしてゆく雨はやみぬれどけふの山路むけにさびしき道なりけり人の家のあるに立いりてくふ物やあるとたつぬれば侍らすといふかの寺の前なりし家には侍りけんをまゐらで過おはしつるやといふにさりやといとくちをしかしこゝにてやすむへかりしを翁あなたにもありなんと思ひたのみてこそ來つるをなしときゝにしもいとゝしうはらはこほ〳〵となりてせんかたなし立かへらむにもやゝ程遠しいかにかせましといふ〳〵杖をちからにそこはかとなき山路をたどる觀音の御堂にまゐるにていさゝかのぼる石の階もいとわりなくおぼゆるをねんじてのぼるものは階のなかはよりほとほとよろほひたふれぬへうなんおぼゆるひたふるにきもたふれてましかはこやせるたひゝとゝあはれかけん人もありやしなまし御たうたてかふるほとにてかりそめなる所におはしますくれざい木ともこゝらつみおきかたはらにけつりなともしつゝをり大かたはいとかごかに世をのかれすむにもつき〳〵しうよろし

き山寺なりけりきせん法師が庵は此山のおくにありとぞ宇治のかたにゆくほど西國巡禮としるせる菅笠きたるあやしきおい法師の一人ゆきあひたる御賽戸へはかうや詣侍ると思ふなりこれをおきては田長山人たになを〱見えぬところにていとさびしき道なりけりからうして河のほとりの里にたどりつきぬまつそこなる家に立いりてはしつかたにしりかけゐるほどもくひ物心もとなしやこの家のまへぞきゝわたる宇治川の瀬なるべき浪の音さへおそろしうきこゆすこしはらのしわのひると立いでゝみるこゝちもいてきぬる世の諺に花より餅とはかゝるをりやいひ出けんとおかしこゝは橋のありつる跡とてかなたこなたのきしの岩かきのみぞうるはしうてあるあはれ世にきこえわたれる物をかく絶ぬるもむけにちかき代の事とぞきく

待わたるかひやなからんとしをへて中絶はつるうちのはし姫

はしひめのかたしく袖とみゆるかな川瀬にかへる浪のしろたへ

うはそくの宮のすみ給ひけん跡はいづこならんあしろなどけちかゝりし所とか宇治橋のはる〲と見わたされ柴つみ船などの行ちかふをかをるの君のうき船の女君とふたり見出し給ひけんなどよこなたの山によりてぞ有けんそこならんかしこならむなどそらごとながら心あてに思ひよそへらるゝもおかし石山にまうでしをりむらさきの御のこもりゐ給ひてかの物語かい給ひしといふ屋のありて手ならし給ひしてうどなどいふ物どもさへありしを見しこそをこかましかりしかまことにくちをしと思ふ古の跡などはおほくはたつねてもしるべきかたなくなりはてぬる世にかうあらぬことをしも世にもてはやすめるはいかなるすきものゝしわざにかいせの濱荻わかの浦のかたをなみはつせに玉かつらの昔のいほり明石に人麻呂大明神の社などよ河つらをのぼりて興聖寺といふにまうづそのてらは川邊よりやゝ山のかたへいる所なりけり左の方は櫻の木ども多くかたへはかへてのかぎりにてみなもみぢしたるかけふの雨に一しほの色はえていとゝいはんかたなし堂のうしろの山をなん朝日山とはいふなる

やまのなの朝日のいつるひかりかとてりこそまかへ木々のもみち葉

山紅葉などいはん題によみかなへむとひねり出したらんやうなりやかゝるけしきにつけても思ひ出らるゝは故郷の友なりけり河のむかひをみやれば松のしけみに寺の見ゆるも紅葉のみゆるもいはんかたなしあしろはある法師のねかひにて今は制せられぬとぞ其ことかける石ぶみ川中の洲にたふれながら今もあり惠心寺といふ寺の前より船してあなたへわたるこぎいでんとするほど久しういたさざるはなとてかとおもへば大こゑにをい〱とよばひたるおびえてみやればはるかにおくれてはせくる人のあるそれまつとてなりけり

鹽ならぬわたりなれともさしてくる遠方人をしはしまつかな

としをふる宇治の川長なれはいかにあはれとみすやきしのもみち葉

この寺のまへなる一木の枝の水のうへまでさしのぞけるはここにおかしきなり船つきたる所なる寺はいたう物ふりてぞある頼政の三位のうちしにし給ひし跡とて扇のかたなる芝生に年ふりたる松たてり身のなるはてぞといひおき給ひし今もいとかなし

埋木とこけの下にはくちし身も残すこと葉の花そちりせぬ

夕つかたより又雨ふりいでゝ歸さの道いとわひしう物のはえなしまたの日も降くらしつ雨のふる日はわひしき物なりけり何はかり海山をへだてたる旅にもあらず日數はたつもるといふばかりもあらねどひるつかたかの物語せし人の許よりはかなきものかりきて寫しもし見もするにぞすこしなくさめける夕つけてはこきたれていとゝしうふるよさりのふ廣のぬし來てけふはいといふせうこそおはしけめいとくるしやすべきわざもきのふのつかれに物うくてあしたのほどはうちおき侍りてからうじて今しはてゝなんさも此雨はうたてもふるかな明日もなほ心もとなしやなどうちにがみてかくてこもりおはさんもこゝろくるしうは思ひ侍れど近きわたりといへどぬれつつ物せむは物のはえ侍らじあすあきてはれなばよど八幡などへいざなひ侍らんなほいとまもあらば北山わたり見ありきて見所ある所になんなといふけにその西山より鞍馬のかたへは一日二日旅ねしてもともなひ給ひね比叡へはいつごろか一日かほどに往かへるべき所にやここへはいてそよその山にこそまつはまうでめ山のほど見所おほく侍り京をはるかに目の下に見くだしつゝ雲母(キラヽ)坂といふをのぼりゆくほどのけしきえもいはず西塔(サイタフ)といふに御堂ところ〴〵さうりんたう(相輪堂)などめづらしき物も侍りまたかなたおもてにも東塔といひて中堂こうたうなど大きなる御堂ども侍りいづれも〳〵いかめしうたふとくなんとてこの人道心ふかき人にてたび〳〵まうでたる人なればくはしうつゞけかたるほども空をのみうちうれふとかくかたらひかはしそやもやゝ過ゆくほどより西風あらゝかにおこりて時のまに星の光きら〳〵と吹はらひたるうれしともさらなりもろともに手をうちてよろこびあへる天氣(テケ)の事はよにはかりがたき物なりけり露はかりこよひのほどにかゝらんとやは思ひしかゝるをりの風ばかり心ゆくものはあらじ

大空に吹いてしより旅人のこゝろはなきぬよはの山風

ひるまにうつしたりし本とよひかへさんとおもひおきてつれどかくせしほどにふけぬれば今はひんなし程もいとちかゝらぬに寒くもあればとてゆかずなりぬひえ(日吉)まうでの日はかれいひのまうけ心もとなからず物したれば所々にてとうつかなた西にこえて海見やりつゝやすみたるほどなどは酒御きかな何くれといかめしうてうしたらんあるしにもまさりてなんおぼゆる横川にも物せまほしかりけれどさては一日のほどにかへらむことかたしとてなん東坂本といふに山王權現とてまします御門の前をながるゝけうらなる谷川に手をすゝぎてをか

みめぐるうるはしうあざやかにたふとし日吉の神のやしろときこゆるはこれなるべしされどそれは一柱にてこそおはしましけめかういらかあまたたちならひみな同しさまに物し給ふはいづれかいづれならんとくちをし本地とかいひて佛の御かたを鏡のやうなる物の中につくりて御とひらのうへここにかけなどたゝ延暦寺につきたる鎭守などいふらん神のやうにもてなし奉りたるもめざましうかたしけなし賀茂はかみもしももさるかたはきよくはなれていとかうかうしうたふとく物せさせ給ふあなかしこともかくもさだめ奉るべき事かは唐崎の松はめづらしき木なりけりたゞ一本なるが枝さしあまたにひろごりて水の上までながうさし出たれば風雪などのためにや枝毎に抗をたてゝさゝへたり

枝ごとに千とせの坂やこえつらん杖つきたてる辛崎の松

これもまたたが代にひける子日にかそのかみのはいつのころほひまでかありつらん今のは天正十九年といふに何がしとかやいふ人の名高き木のたえうせぬる事をなげきてよしあるをもとめえてなんうつしうゑたりけるとぞこどし安永の六年まで百八十七年になりぬかへさには山中こえといふよりかへりぬけふの山ふみいとさけれど程遠き道なりければ白河むらといふより日はくれにけり

みやこをは朝日とともに出しかと夕霧たちぬしら川の里

また雨のふる日ありていとつれ〴〵なり日ひと日いづこへもえものせでまぎるゝことなきまゝに

かきくらし雨のふる日はわびしくてふるさとのみぞいとゞこひしき

今やうに柴の庵もわが里とひし都なれども旅はうしといふを家人などのうたふをつねはさしもみゝとゞまらぬをかゝるをりからははかなき事といへどさかしと思ひあはせらる

すみなれし柴のいほりのしはしたに見ねは戀しきものにぞありける

くさまくら雨も日かずもふるまゝにふるさと思ふそでぞぬれそふ

あめふれはことゝひかはすふるさとの友こそまづはこひしかりけれ

あすふる郷へたよりありといふに此歌どもゝかきそへてつかはしけるまた常雄のぬしのもとへも

浦千鳥たちわかれてはいせしまやむれゐし磯の友をしぞおもふ

一日ふつか西山わたり見ありかんてけもあやふからずと見さだめていでたつ鳥羽横大路などを過て淀なり小橋といふをわたる宇治川の下なりとぞ名にもにず大なる橋なり船どもの行ちがひ川そひを人あまた引のぼるもおもしろしまた木津川の下にわたせるを大橋といふまことにまたいとこよなしあなたは美都といふ里なりやゝゆきて八幡にまうでぬ御門いるほど鳩どものおほくとひ來て袖のうへかしらといはずとまりなどすまうづる人々手に物をいれてくはすればいとなれてむらがり來かさなりとびかへりなどするいとめづらし橋本の里といふより船して山崎といふに渡る淀川こゝにてはいと大きなり

離宮(リクウ)八幡の御社にまうつ寶寺また觀音寺なごへもこれより何くれの里こもをすき〳〵て粟生こいふに光明寺こいふあるにまうつ日くれぬれごこゝには宿かす家もなくて向日(ムカフ)ノ明神こいふに物せよこ人のをしへけるによりその御社にもまうでゝまへなる宿にやこりぬこゝよりは京へいこちかしこぞあけぬればよし峯へまうでんこて山のかたへきのふこし野原の朝露を分ゆくこのわたりまてすべて大原野こいふなり十輪寺こいふ寺ありて業平中將の君の塚なごありこいへご例のこをこがましくてかのまうでんこ心ざす寺にはやく高くのぼるなり杉の木こもこふかく生しけりて谷水の音も物すごしそのおくに三古寺(サンコジ)こいふもあり山のうしろにめくりてやゝゆきて西岩倉こいふにいつ京の方をはるかに見やれば大佛の御堂ぞいづこよりもまついちしるき大原野の御社にまうづいつく小鹽山はこゝへはよしみねの山なんそれこいふ

大はらやをしほの山のそのかみをまたもかみ代としのひこそすれ

花のてらこいふにもまゐりてかた木原こいふ里にいでゝ物くひなごす丹波の方に物する大路にていこにぎはゝし松尾御社にもまうづやかて道の左なる所なり法輪寺にまうでゝ川つらに出たるは大井川なりけりはるかに橋をなんわたせりける渡りもはてゞなかはのほこより見わたすに川かみのかたにこふかくみゆるは嵐山こぞきく小倉の山もおなじさまにてあり宇治の川つらにいこようおぼえたりむかひの森のしけみにいこあかくにほへる梢みゆ歌もよまゝほしけれこさしあたりては中々何事も口さへうごかでなんかゝるけしきは繪にかくこも筆およふましうこそ川のなかれゆたかに山のたゝすまひもおほこかに世にすぐれておかしうもあはれにも涙さへこゞめかたくおほゆるやげにこそむかしより御幸なごもたひ〳〵ありていみしういひたりけれ常雄のぬしにこそせちにみせまほしけれふかく物見しれるすき人にていづこにもいづこにもうちすぐさずこもすれはまついざなひ出て月をも花をももろこもにめづれはかゝるをりふしは猶おもひいづるぞかしかのもみぢみえたるはりんせん寺こいふ寺の庭なりけり天龍寺こいふもあり野宮の跡たづぬれば黑木の鳥ゐばかりはなん今も立たりけるそのわたりえもいはずしけりたる竹むらのかぎりにて下道をくらきこゝちすせいりやうじこいふにまうつよに名高くたふこきほこけぞかし猶そのわたり見し所々あれご日くれかゝりて道いそぎしほごなればこゝ〳〵もえしるさずなりぬあすはあたごにまうでんこすればそなたさまに物して山路をゆく木のうへに人の聲するをあやしこみれは柿の木にのぼりゐてこるなりけり下にもひこりゐてかたみにひろひいるゝなりむかし藤原の何がしの姫君のあづまよりのほり給ひしに大きなる柿の木のもこにいほりせしよ夜ひこよおちたりけるよしいへるいかにねられずやありけむこおかしなほ多くありて枝もたわゝになりつらなりたるかめづらかなりさてこのこゆ

る坂をばこゝろみの坂となんいふとぞすこしくだりて家のあるを見出てうれしくてまつ宿るべきよしあやしき女のたてるをよびていふ清瀧川は軒の下を流て橋もやがて此前になんかけたるおかしき所かな夏いかにすゞしからむと見ゐたるまゝにさむくなりてうちのかたによりて見まはせはうとましう軒のあたりあれまとひいたくすゝけたるいと物むつかしよくもたどら、何にいそぎとりつるやとりならん橋よりむかひを見やれば家は猶たちならひてぞみゆるをかへてややとらましさかにてさばかりとまりねとすゝめたりし物をあすのぼる道すこしたにとなどで心きたなくはいそぎけんとうきたるこゝちしてわらうつの緒も猶とかず信廣のぬしはすこし清げなる屋も侍りなんいつくたづねてといへどさまでやは家あるしの思ふらんもさまあしうとて今は足あらふもつめたしやかゝるこそ旅人いとゞがならめむかしは行くれたる所に野にも山にもやんごとなききはといへど庵をむすびてやとりけん松がね枕なと思ふにはいひしさもかつおかしきこゝちしてなん家人のすむなるかたとはすこしはなれてたゞ二人ふしたるに岩うつ音はいよいよたかくなりゆく心ちしてたとしへなくさむきにたけき事とはたゞわなゝきにそわなゝくよへのやどりのゆふげの煙のけふたさはいとかくやはたへかたかりし

清瀧や嵐とさむき冬の夜を山わけころもかす人もなし

夜もすから瀧のひゝきをまくらに一せゝの白糸ゆめもむすはす

とけてもねられずおきいでゝあけやしぬると柴の戸すこしおしあけたれば夜ふかき月の影身にしむやうなり

有明の月のひかりの清瀧にこほりて落る水のしらなみ

橋のうへをとゝと音してくるは三人四人柴とも荷ひたるなりけりいつのまに刈て來つらんまたきにとあはれなり

跡つけてけさかへりくる山人は霜よりさきにおきやいてけん

今朝は立いづるよりやがてけはしき山路なりやゝのぼりてちや屋のあるにやすむかたへはいとはるかなる谷にてさしのぞきみるもあやふきとこゝちす女どものゐてかはらけをなげて見するつばめなどいふものゝとひゆくやうなるかおかしうてまろもなげて見んよとてせしやうにすれどありしやうにもあらずむとくに谷のそこに落ちぬいでこのたひはといみじう心してなぐれど又しもしそこなひたるいとねたしかしのぼりのぼる坂路のいとくるしきにさきだちゆく人におくれじといそげばいとゞあせさへぞあゆるや

あしひきの山をさかしみ立とまり杖よりなかきいきをこそつけ

この山は丹波の國にて大江山また何がしの城などもそなたにはるかに見ゆやうやうのぼりて四十八町といふに門のたてる見出たるいとうれしさてかの今道のぬしのかたりつる高雄へはいとほそき柴人のかよひぢをひた下りに下るなりけりそのほど七十二町とかや何の見るめもなしからうじて下りて鏣ら

うのあたりに目とゞむれど紅葉はみな散はてゝまれ〳〵ちり残りたるもその物ともなく梢にしほみつきて落葉どもそこかしこの岩がくれに吹よせられたる心つきなく日ごろなどていそぎても物せざりけんとても世にのゝしる山のもみぢよいとかはかりにてはよもあらじかのかたられしやうもあれば猶たづねんと思ふにことゝふべき人もあはなんと立さまよひゐたるにそなたの木陰より四五人ばかり大きなるゑぶくろなど引さげていてくる者かなほもいてくる立よりて物うけ給はるとてたづねたればまづこなたのを見給へとて出來たるかたをゝしへしはおさう院といふ寺の庭より見る所なりけりはるかなる谷川のそひにかすもしらず生立たる木のなかれもいさぎよしとはずはいかにくやしからましといとうれし川はかの清瀧の上なりけりこの寺のひさしの間に人おほくつどへるは物くひなどやすみゐるなるべし猶見にくるもありそこをいでゝ山をくだればかの川のすこし上になんありけるこゝなるはなほことに山もたゝあけにかゝやくはかりにほひわたれるいへばおろかなり橋をあなたへわたれば川にのぞきたる茶屋などあるはかりそめのゆかをまうけてくだ物うるなどもありこゝにぞ女どもゝおほく春ならねど道もさりあへずなんたゞはいたくすゝろぎてよもの梢もいろ〳〵に錦をいろどる夕時雨などうたひ扇して拍子とりなど心ちよけにうちわらひたるつらつきどもはまことに霜葉のごとくといひけんやうなるもあやしうやうかはれる立田姫のしわざかなとをかし

下そめのしくれのほともうすくとくにほふもみちの色にしるかな

むらしくれ故郷人とゝもに見はなほいかはかりいろもまさらん

例の思ひ出られてちりしきたるが中にいろことなるをひろひなどあかすたどりありくやどりにかへりたればきのふ御國よりまゐりつるとて堀川なる君のもておはしつるけふもおはしつとてこの家とうじ文をさしいでたり長谷川の常雄とあるはかへりこゝにはあらしぶりはへてこそとかつ〳〵うれしうそくひはなちあくるほども心もとなくなん燈火のもとにゐよりてみるいかにめづらしき所々御らんすらむ猶いつこも〳〵御らんじのこさずこそこゝにはいとさう〴〵しうなんなどいとおほかりおくに

君かすむかたと思へはおけふくる月のみやこそ思ひやらるゝ

今ひとつふんしこめたるは中里常國のぬしのなり

あひ思ふ君をわかれて山城のとはにもわれは待わたるかな

とあり湯あみなどしたるに日ごろの山ふみにいといたうこうしてねふたくさへなりてかへしもえよますなりぬ東山ありきし日双林寺にまうでたりしに西行上人と頓阿法師の墓のならへりしかあはれにおほえしかの頓阿法師の四百年忌とかやいひしとしこの寺より春懐舊といふ題いたして國々の歌よみすすめけるにわが里よりもみな人々よみておくりけるその中に

直見の主のよまれし歌なんあはれにありしその歌「手むけはやうせしやよひにさくもゝのそのよかへりの花の一枝いまはこの人さへむかしがたりになりぬとあはれに思ひ出られぬ大内のとのへをかなたこなためくりありきて見るにまゐりまかて給ふ雲のうへ人の御ありさまいとめでたし今出川といふ町にいでんとする御門のわたりをゆくにこたかき松など生ひたる家におくふかくおかしきものゝ音のきこゆるにる物なくて錦小路の天神にも人のそゝのかしたるまゝにまうでぬたは廿五日の夜にてここにいといたうにぎはひぬ京極の大路のほどさま〴〵の物もて出ならべおきてうるを立とまりつゝ見るほどこのいざなひこし人の友なめり一人二人きあひたるいざとてやがて四條の大路をひんかしへ加茂川をわたりてゐてゆくはいづこならんと思ふにとよひめづらしきまらうどをたゝにやはかへさんとてとある家にゆくりなうひきいれてやがてろうめく所にのぼりたればきよげなる女さかつきもて出たるに人々さうどきたちつゝさるかひあそふめりをこめきたるをのこなども出きてあるしなどけいめいしありく花やかに引つくろひたるあそひどもすき〳〵に七人ばかり來つとひてみなゐたるけはひいとなれたりすゝりの蓋なるさかなを何よけんとはさみてさし出たるにおかしうてたうへてたへゐうてともいらへまほし今やうの物の音はやりかに引しらべこゑおかしうてうたひすましたるにはこのまめ人も猶えあらてあふきこりて

はらしをやうつはりのうへのちりならて心もそらに立うかれつゝ

ゐひなきはいとかたはらいたしやとかくしつゝ今はかへりなんといふことを國にいひやるとてかの友だちのもとへも思ひ出て

さしいつるそなたの月の影みてもたゝすみなれしかたぞこひしき

いせしまや壹志の浦のいつしかとまつらむ君を行てはやみむ

まかりまうしがてら例の富小路へ物しぬ人さまのいとむつひよく何事も心におもふことをくまなくうち出こちたきかしこまりもおかす物せらるればたどふる里人とひとしうあひかたらひてかくたび〳〵はなんをかへの翁の東にて人々をゝしへ給ひしより御國の物學びやう〳〵天下にひろごりて今は遠き國々にもそこかしこ心ざしふかきともがらいでき侍りてをりをりわが本居の大人のもとにたつねきてめづらしきあけつろひともするをきゝ侍るもたのしきわざになんなど例のそなたさまの物がたりとも猶つきせずかへるとて

さらはとてけふ立わかれゆく水の後もあはむと猶ちきるかな

古風ならねばかいつけつ　いさゝかなるものゝあかりして萬里の小路を四條にかへるほど此道ばかりはたど〳〵しからず通ひなれぬるもおかし物へまかるをり人のなにがしの小路へはいかにゆき侍るととひたるにかう〳〵とをしへやりたるわつかにわがゆきしりたる所をしもとひけん事よとかしこくした

りかほにうちほゝゑまれぬ北野はいつとなくにきはふ所なりけり一日またほの〳〵とするほどに詣たりしたにおほくまうつる人はありきよろづよりもいみしきははうくわう寺のほとけなりけりふりあふきて御くしのかたを見たるはまたおそろしきまでこそあすたゝむとての日はさすがに人々多くとふらひくめり物學びやなにやとむつましき人々ものほりゐたれば日ごろたづねかはしけるに今かへるべきよしいひたればおやはらからのもとへふみのたよりならでつてまほしき事なともあればなるべし茂樹は夕つけて來たりいかゞ御いで立のよういはよくはへりや家つとのまうけなどはいかにもとめきこえさせてんやこれはいもうとのもとにとておかしき女繪などくれたるもあはれなりわかれて後國にありしことのかず〳〵かたりいつ去年のあかもかさのをりの事などもかたりいつせうそこにて見侍りつればまろと同じ日よりこそなやみ出給ひにけれなさていとここにくるしう久しうわづらひ給ひけるよし母もおはせぬ所にてさこそ心ぼそくなげきおもほしけめいかかはさかりにくるしうし侍りしほどはむけにうつし心もや侍らざりけんくるしともいかにとも思ひ給へらざりしをのちにきけばあらぬことなどうちいひ侍りしとぞさはさばかりも侍りきやをぢのぬしのかへり給ひてもいとさまではの給はざりしをそのいそぎのぼり給ひしをりいかでもろともにと思ひ給へしかどおのれがこゝちたにおこたりもはてぬにしゝこらかしては中々にもとそなど人々にいさめられてなんゐの時とてつゞみうつといたうふけなは道のほどむづかしくやと思ひやりて今はかへり給ひねといへばさらはとて人々のもとへつてことなどすかへりてかくいひかはしつとおほちの入道などにきこえはいかにまちきゝてよろこび給はんこれをこそ日をかぞへつゝまたむとの給ひしかいでや今又たひらかにてこそこゝとかしここ何ばかりへたゝりたるせかいにもあらず思ひたちなはいつにてもたいめせんことはあへなんなおもほしそなどいひていなせたる名殘さう〳〵しう燈火のみうちまもるさかしうはいひつる物からともすれは思はずにえさらぬさまたけなどいできつゝ身を心ともせぬ世なればさはいへとたひ〳〵のほらんことはかたかべいことをと心よわくさしくまれつゝ目もあはすたちいづるあしたのそら霧いたうふりて三條の橋より見わたしたるにまちかき東山たに見えずひえの山のかたもむけに見えわかぬしもあながちにゆかしうかへりみかちにてゆきゆく松坂といふにて

ふるさとの名にはかよへとまつ人もなきまつ坂はこゆるかひなし

大津より船にて矢橋といふ所へわたるかはかりのわたりといへど風はげしきをりはいとかしこきものにすめるをけふはよきにはかなとみな人々よろこぶほどなくつきぬ今朝のほど立よる所々ありて道おくれぬるけにや草津にてははや午の時なりといふ目川といふにて物くふあるが中によきちや屋なりけ

ればのぼるをりもやすみつるに物わすれせて富士のむまこにやこ見ゆるは三上山こいふなりけりいつこの山にもつゞかずたゞひこり立はなれたるに心ぼそげに見ゆる人の心からなるべし

　ふたりして見つゝいはりし三上山われもはなれてたゝひとりのみ

かくよめるはのぼりしをりこもなひし人は京にこゞまりてこたひはあるやうありける中にかよふあき人にこもなはれてむけにしらぬ人なればたゞひこり物するこゝちしてなんまこごやその信廣のぬしはこしごろすけせんのほいふかきよしかねてよりほの〳〵きゝおいつれこいこさまでにはかにきはやかに思ひすつるこも思へらさりしをこのごろよき師の御もこにいひつきて今ちかきほごにつかふまつるへう思ひおきてたりこぞこのたびもろこもにえくだらぬよしいふこてぞさる心おきてをもうちいでられけるあはれにありがたくもこおごろかれぬるまたの日夜ふかく石部のすくをたつ柑子袋ひら松なごいふ里をゆけご月なきころにて物のあやめもわかずなつみ村こいふをゆくほご明はてぬ横手川こいふ船してわたる大きなる川にて水すくなきころなれば川原のほごをやゝゆく山本のかたおかしう霧こめて山のさまもなつかしう松にかゝれるつたの紅葉こゝろなかうちりのこれるもあはれにたゞならず思へごこの男には何事かかたらはれん物のあはれのかたこては露ばかりも見しらでたゞこちなく米のあたひのここゝ天のしたに錢のおほく出まうできて世のわたらひがたきここゝのみをご何につけてもいひうれふ今すこしたにまほならんここいへかしこにくゝていひてもかひなきわざになんなごあはつかにここなしひてもありしかごのちにはいざやかやうの人しもこりはづしては物はらたつわざもあらんさてはびんなきわざなりこすいふんにつき〳〵しう思ひめぐらしてあへしらふおのがいはまほしきこごは人の耳たゆきまでいひちらして人のいふここゝてはむけにきゝもいれぬが物すさましうむもれいたきにもかの俗ひしりの主なんいこゞ戀しかりけるまめやかなる行ひのかたはさるものにてめづらしき海山のけしきはかなき木草のあはれをもうちかたらふにをさ〳〵つきなからずさしいらへなごいこめやすくはたありけるものをこ引くらべては思ひいでらる水口の町をはなれて栗林新城今在家なご猶なにくれの里を過てゆくほご左のかたに長うつゞける は布引山こいふこぞまたこなたにながるゝは松屋川こかやそのわたりの森の梢こものぼりしほごは紅葉いこおほかりしを今は大かたまはらになりたるも又あはれにおぼゆ土山のうまやを過て山路にかゝる田村ノ神社こて道の左にかねの鳥居たてり川もあり橋をわたせり坂をいさゝかこえて猪鼻こいふにてしばしやすむかくて又坂をこえぬればめづらしきここ此男がいふやうあの坂ここの坂こよく似て侍ればよに鈴鹿のめをこ坂こなんまうし侍るこいふ三十里こいふ道のあひだにこの一つ

そすこしおかしきことにはおぼえける

　鼻ならて猪の耳ならはむつことに妻尖の坂やこゝろおかまし

　すゝかなるめをとの坂をけふこえぬ紀路の妹脊の山はしらねと

坂下といふ過て名にたつ波の八十瀬を左にもわたり右にもわたりてゆきゆくとまらせ給へやどゝとらせたまへと女どもの門毎に立出てうちまねくあしもくるしう日もかたむきぬればさもやと思ふをこの男なほ〳〵むく本にれいやとりなれたる所侍りといふにひかれてさりげなくつれなしつくりてすかすかしうゆくさるはやどりもしてんと思ふけしき見つくればあやにくにはしりよりて袖にも何にもとりつきせめてとゞめんとするを人わろくひこつらひむつかる旅人を目のまへにも見るがいとほしげにさへ見ゆればなりけりその夜よなかはかりにやあらむいといみしき音のするは神のなるなりけりよひの空はさりぬべきけしきもあらずはれわたりつるを雨いみしう風はげしうてひらめきとどろく夕だちのころにもあらてかゝるはいかなるにかあらむと旅の空にていとゞむくつけう身もたどきえにきえかへるばかり物もおぼえずやう〳〵遠さかるやうにてなほしづまらず故郷の人々思ひおこすらんと思ひやられて心ぼそしとほり物とかおそろしき神の天かけりたるらむさるはいといちはやく大木をうちをり野山をそこなふばかりなるにこそはあらさめれよろしきほどの物の過しならんなど二人してかたらひをればまちかきさうじのあなたよりあるじもきゝてさもいとこそかしこかりしかいちもくれんはくろさんなどのとほり給ひしなるべしなどもさだむめり今は音もきこえず雨もやみぬれど風はなほふきあれてまきの板戸とゝろとゝろとあわたゞしうとみにもまどろまれずかへりける日はまきるゝ事おほくてまたの日なむつね雄のぬしのもとへかのひろひこし落葉どもを紙におしつゝみてこれは名だかき高雄のになん見せきこえでやみなんかよるのにしきのこゝちしてなんなどかきて

　心なきわれのみ見つゝすきかねて袖にこきいれし山のもみち葉

といひつかはしければかへしいとゝくありいかにおもしろく御らんしつらむかの錦をきて故郷にかへりけんは何ならずうらやましくなん

　名に高きもみちのいろのふかさにもおくるなさけはおくれこそせね

有馬日記

年ごろこゝちわづらひける人ありけり有馬のいでゆに物せんとて秋のころいでたちぬさるはいとと〴〵しうくるしき物やみにもあらずたゞそこはかとなくをり〳〵心ちなやましうむすぼほるゝやうにて世のなりはひとてつとむるわざなんども物うくこのみてする學もんなんどもおこたりがちにて七日ばかりもしは十日ばかりいたづらにうちふしわづらひければそこかしことくす師などにとひきゝてやいとゝいふことなんどしつゝとしごろになりぬ此やまひふた月に一たび三つきに二たびなんどかならずおこりけるを今年はおこたりざまにてやゝ間遠におこりつゝよきさまにおぼゆるもかのやいとのしるしにやといとうれしけれど猶おこたりはてゞをり〳〵は例の物うさ出きつゝわれながらもどかしうわづらはしき物になん思ひわたりけるをこのたび鹽井新五郎といふ人かしこに物すとてさそひければいとよきことゝ思ひてもろともに出たつなりけり天明元年八月十七日曉ふかく立いづればいざよひの月まださやかにのこりてそこかしこあざやかに見わたされて常にめなれたる坂なる川のながれなんども何となくあはれにおぼゆ三渡の橋をわたるほど日さし出ぬ巳の時ばかり藤枝といふ所にてやすみてそこよりかごといふ物にのる久保田といふより松原いと長し椋本(ムクモト)といふ里にておりぬ林くす原なんどいふ里ども過て關川かちよりわたる水いとさむし八十瀬の浪なんどよめる鈴鹿川なり「いせ人はひがことしけり津島より甲斐川ゆけば泉野の原といへる所もこのながれにて川曲郡高岡といふにいづるまでの程なりとぞ關をはなれての山路のけしきいはんかたなくおもしろし筆すて山などいふわたりはさらなり茶屋のあるに立いりてしばし見やる右のかた川をへだてゝむかひの岩山なりむかし狩野の何がしといふ繪師の此山のけしきかゝんとせしをえかいやらで筆をすてゝにげにけるより名づけたりといふ

　ことの葉もいかにおよはんうつし絵にかきたにとらぬ山のけしきは

その日は坂のしたにやどりぬ

十八日いと夜ふかく坂下をいづ月はさやかなれど川ぞひの谷かげの道にてをぐらく物むつかし

　旅衣袖にともなふ在明の月も夜ふかき山のおくかな

旅人のゆきゝもまたいとまれなるにかゝる所にてとら狼または山だちなんどいふひたふる心なるものゝあひたらんにいかなることゝちせんと思ふだにむねつぶれてかくかすかなる旅人はいと夜ふかくはいそぐまじかりけりと思ひなりぬ岩にせかるゝ山水の音もあやにくに物すごしからうじて手向をこゆるほどほの〴〵と空もしらみぬ此手向のちや屋にぞあまたうち

つれたる伊勢まうでなんごもやすみあひぬるくだりゆく方は道さへけはしからでうれし山中猪鼻なんご過て田村川田村の社なんごあり土山をはなるゝ程また川ありそこの白川こかいふ右のかた布引山こいふ山いこ長うつゞけり此山はてゝぞ水口の町の口なりける石部までかし馬にのりてゆく此口こるをのこ馬の口はつここらへながらおのが口は心にまかせてはなちつゝうきしづむ世のありさまにつけておのが身のなりおころへたるうれへなんご長々しうかたりつゞくるをきゝつゝきぬれば道の程四里ばかり過ぬこいふそのあひだの里の名もなにもえかいつけずなりぬ石部の驛を過れば三上山見ゆ梅木こいふ里あり春ならずこも鶯のこゑたてつべき所ここそおぼゆれそこに和中散こいふ薬うる人の家めにたちて庭なんごよしあるさまにしなしたり草津を過て松原をゆく日くれはてゝ勢田につきぬ

十九日橋をわたりて粟津の松原にかゝるほごふりかへり見れば東の方鏡山より花やかなる朝日のかゞやき出たるにる物なし海の面にうつりてきらくこするにほてる海こはかゝるをりにや名づけけん

さしのほる山も鏡の朝日影神代のほかのものとやは見る

此松原より見つゝゆく水海のけしきいはんかたなし

さゝ波のかゝるうらわをしらでこそ見るめなしとは人のいひけめ

一こせ京にのぼりけるをりは膳所の城うみの上のけしきなんご見んこてせたより大津まで船にのりけるをこのたびはかちゆくもめづらしぜゝの町をはなれむこするほご道の左に木曾の義仲のつかありこいふに立よりてをがむそのかたはらにはいかいしばせをこかいふものゝつかもならびてありいでや此はいかいこいふ物今の代にはひろくもてあそぶわざにて何事ぞこおもへばむげにいこ近き代のものながら花鳥の色音につけておもひをのべたる心ばへいひもてゆけばしきしまの道のながれにやあらむそのはじめは連歌よりわかれて何事もそれにしたがひながら言葉なん今の代のいやしきをまじへていささかをこめきたる心ばへしたるこれぞ此名にしおひたるけぢめにはありけるその道おこしけるおやにてなむ此男はありけるこぞ大津より粟田口までのほごいこらうがはし午の時三條の橋のほこりにやごりをばこらせおきてまづ堀川なるおこうこがもこにこぶらひて年ごろの物がたりなんごす夕つけて富小路の礪波氏に物したればいたくよろこびていこ久しうふみしてもきこえうけ給はらでおぼつかなき心ちのし侍りつるをこて今日は此下の御靈の祭の後宴なれば此わたりの御里人あそぶ日なりのごやかにかたり給へ今道か常にかたらひかはす友だちもこぶらひ來べう契おいたれば今來あひ侍らん松坂の物まなびのさまもつねにきかまほしがる人々なればここによろこび侍らんこて伊勢のまらうごもあればこくこそこいそぎやらるゝなり例の古學の心ばへくづし出てかたらふいにし十

六日の夜月いとさやかなりければ人々にはかにきつどひて見あかしけるそのをりのとてみづからのも人々のも見せられける庭の池山なんどにつけていひ出せる歌どもなりふるめかしうおもしろくよみなしたりほどもなき庭にいとちひさくわらはあそびのやうにてうつくしうつきなしたる山の木立池のさまなど心ばへあさからず見ゆるにちひさき魚どものどのどとともなひありくさまもおかし

水たまる御池のいをのたつさひて君を見まくはあすさへもかも

なんとかたらふほどに日もくれぬ橋本經亮内池益謙なんといひてかのまたれし友だち入來ていよ／＼めづらしうかたらふ

廿日ひるつかたやどりをいでゝ祇園清水のわたり見ありきつつやがて京をはなれて稻荷の御社にまうで日くれかゝるほど伏見にいたりぬ京橋のほとりにて神崎にものすべき船のいづるをまつ戌の時ばかり船にのる月もいでゝ物あはれなり

ふし見山月の御舟も木間よりかけさしいつる波のうへかな

ふしまちの影はきのふを舟のうちにふしみの月はこよひなりけり

此ながれは宇治川の下なりとぞやゝこぎくだるまゝにまぢかく家ゐの見ゆるは淀なりとぞ風はふくとしもなけれど水の上なればにやといとさむし

秋の夜の月もこほれる波の上にとをとしくたるよどの川ふね

淀川やくたす小船の苫をあらみ袖にもりくる月のさむけさ

よそながらそこかしこ見やらまほしけれどいとかくさむければさるわざもえせずうすらかなるふすま引かづきてをりふすともなくいさゝかうちまどろみしをふとさめてこゝはいづこばかりぞとゝへば禁野(キンヤ)といふわたり今過侍りぬといふう殿渚なんど名にきゝわたる所々も早く過にけりこの禁野といふはむかし大やけの御狩場にてわたくしのかりをばせさせざりける所なればしか名づけけりとぞ「かりくらしかたのゝ眞柴をりしきてとよめるこのわたりときゝおきしかば

としくたる淀の川浪かくしきてかたのゝ御野の月を見るかな

天の川といふも又このわたりにありとかや又もふすま引かづきてうつぶしゐたるほどに今はふねはてぬべしとおどろかされておきぬきしちかくこぎてあしの葉風うちそよぐもきゝしらずあはれにおぼゆ有明の月光うせて明ゆくほど神崎につきておりぬしばしやすまんと思へどまだ門あけたる人の家もなければたゞに過て下食満(シモシヤマ)といふ里にてぞやすむ伊丹といふは町のほどやゝ長し家毎に酒をつくりて國々に出しうる所にて人の家居もよくゆきゝもいとにぎはゝし中山寺はいさゝかまはる所なるをまうでんとてそなたの道に物す一里ばかりゆきて道の左のかたに大なる池あり道ゆく人にとへば昆陽(コヤ)の池なりといふ名ある所なれば心とゞめて見つゝゆくに右のかたにもまた大にてあるこれも昆陽の池とぞいふなるこなたなるをばうは池ともすいが池ともいひ侍るといふいかなる名とやき

きしらすおぼゆ此道はやがて堤の上なればしばふにゐてしばし見る此池に大きさ蓮葉の程なる水の面にうかひてうへゝはさし出ずねぬなは(蓴)なんどの生たらんやうにくきもなよ〳〵とおひひろごれるをあやしう見もしらぬ水草かなと見るほどにゆき過る里人のあるに又とへば鬼ばすといふ物になんとこたふげにさも名づけつべきさまして葉のおもていらゝぎてちひさく角だちたるさまいと見にくゝなんありける花はさくやととはまし物をその人はやく行過てえとはずなりぬ

中山寺は里よりいさゝか高き所にて堂の前より海も見やらるさてほそ道をいづれば川面といふ里あり武庫郡なりこの道より武庫川の川原いとよく見やらるやゝゆきて大なる山川はしをわたれば生瀨(なまぜ)といふ里あり此川はかのむこ川の上なるをこゝにては生瀨川となんいふ此川を右になしてゆくほど又一つの山川左のかたより落あひたりさてこの川原をのぼりゆくさるは水いとすくなきころなりこゝをおきて又有馬にゆきかふ道はなければ雨ふりて水おほかるをりはゆきゝもたゆるをまれまれさるあないもしらで來あふ人は早瀨におりたちて命もほと〳〵しきたぐひおほかりとなん左右はべう風をついたてたらんやうなる山ぎしにてすべて此わたり立かさなれる峯どもゝ皆木なんといふ物はこゝちよくも生しげらずあかはだ山のかぎりにて岩のやうにも見えねとみなあかき岩山にて所々くづれそこなはれたるさまなんとすべて見もしらず物おそろしげなるにまれ〳〵はけしきある岩もとにさかさまなるやうに松の生とまれるなんとはさすがにおかしうめづらしやうやう川原をのぼりつゝ見もてゆくまゝに此あかはだいよ〳〵さらぼひとがりてたとへばつめ長きおよびをならべたてたらんやうなり大つるぎ小つるぎなんと名づけたるわたりはげにいとこに地ごくの繪に劒の山とかいふなる物のさましたりかくて此川原ははなれていさゝか木立ある坂路をのぼれは船坂といふ山里にてしばしやすむかの川原のほど道としもなき石のうへをのぼりつればいとくるしなま瀬よりこゝまで一里あまりありとなむそれより又のぼりくだる坂路はよのつねの山なれど猶そこかしこかたぬきたる所まじれり船坂より一里ゆきて申の時ばかりにぞ有間にいたりつきぬるぬり屋の又びやうゑといふものゝ家たづねてやどる廿二日こゝは國々よりそこら人のつどへる所なればこの家なんどもつぼね〳〵をへだてゝとゞまりをる人々おほかりおのがものするつぼねの西どなりに大坂人とて三四人ゐたるを日ごろのつかれに物うくてよべはえたづねさりければけさつとめていせ人なるよしいひてとふらふ六十あまりばかりの翁廿五六の女五つむつばかりの子なんどもゐたり今まゐりの旅人かずまへ給へしかるべきこと共はをしへなんともし給へなんとたのみいへばさは遠き所よりよくこそ物し給ひたれすべてこゝにはわづらふ所なき人の來べきよし侍らねばきつどふ人はみなぼうさのかぎり

になんあればかたみにかしこまりなんどもおかでうちとけ心やすくあそはむなむほいには侍るさて此里は朝夕の物なんどもよろづたらはぬ事なくちかき所々の里人の荷ひはこびもてまうでゝ京大坂にもをさ〳〵おとらず市をなしてうり侍るはいとにぎはゝしきわざにてよき見物にも侍りさることなんども見に物し給へ大かたやどりにのみたれこめておはしまさんはよくも侍らず湯あみのひま〳〵にはちかきあたりに落葉山つゝみの瀧なんどいふ名所も侍れば日毎にせうえうしつゝ心をやるなんいみじう御湯のたすけになり侍るなにがしら十日あまりもかくてありふれは今はあないたどたどしからずけふはつかれてもおはしますらむあすよりはいづこへも〳〵ともなひきこえんなんどいとこまめやかに心をつけてはじめてあひたるやうにもあらずかたらふも旅の空にてはここにたのもしうおぼゆ大かた所のさま見めぐらすに西も東もめぐりはみなあらましき山のみ立ふたがりて谷のそこに家どもは所もなくたてつゞけたりさるはいさゝかも平らなる所しなければたゞ山のかたそはに高くもひきうもくみあけて二階三がいにつくれる家どもになんありける此おのがやどれる家は出湯のいささかかみ北の山つらによりて南にむかひたり二かいの屋にゐてつれづれなるまゝにたゞまへなる道のゆきゝをのみ見おろしをり

廿三日おき出てもまづ見いだせばむかひなる高き山おかしうきりこめて空もいとくもらはしければけふは雨ふりぬべしと思ふを人々もしかいふなりとかくするほどに湯にいるべき時なりとしるべするまゝに此家にやどれる人々さそひあひてゆく湯はわき出る所一所なれどうへの屋の中をかなたこなたへだてゝ二かたよりいるなり南にむかへるをいちのゆといひ北よりいるを二のゆといふ湯船山の井なんどのやうにて石垣にしめぐらしたるを湯つぼとなんいふめるたてもよこもわたり九尺ばかりふかさは三尺あまりもあらむとぞ見ゆるいちのゆ二のゆ同じさまとなん底はさゞれ石のかぎりにていとよくすみわたりていさゝかにごれる所なきかよろしきほどにわき出るを湯つぼのかたぎしにしりかけゐて柄みじかきひさごもて汲つゝかたよりあむるなりけりゆはぬるくて今すこしあつからましかばとあかぬ心ちのすれどたゆみなく汲かくればさむくなんとはあらず物の香のいさゝかにほふはいわうといふものゝあんなるけなりとぞされぱたのごひなんどの白きかみなかうぞめのやうにそむめるをその色こくてもたるぞ日ごろになりぬるしるしなりとぞさしもなつかしからぬいろになりゆかんもうとましけれどまだいろあさきはうひ入しるくてよそのおぼえ人げなき心ちのするもおかし大かたひと日に三たび四度しるべすれどいたく身のつかれたる人年たけ老たる人なんどのしば〳〵あむるはかへりてあしかんなりとくすしなんどもかねていましめつればげに猶かゝることゝ中々にもてそこ

なひもこそすれどはゞかられてまづけふも一たびにてやみぬひるつかたより雨ふり出てよるもふる

廿四日雨猶ふる所のほどよりは家だちしげうてにぎはゝしきゐ湯治につどへるそこらの人々たえまなくしげうゆきちがひ日くるれば今めかしき言葉なんどはやりかにつゞしりうたひてすゞろきありくすきものどもゝおほくさま〴〵ににぎはゝしき所なりされど又しめやかにこもりゐてゐごすぐろくあるは將碁なんどいふたはふれにかゝりてつれ〴〵すぐすもあり此北おもてに物すなるはちかき兵庫の人なるをたゞふたりにてたゞ此碁をのみよとゝもにうつなるきのふもうちくらしたるをけふもさう〴〵しさたづねたれば猶さしむかひゐたりかく思ひ入てはよろづのこともうちわすれてしばしのほどもやめてはえあらぬわざなりとかやはて〳〵は湯のしるべするをさへわりなき事に思ひてわづらはしかるもいとけしからずなんこれを思へばげに見いりても斧の柄くたいつべきわざなりけり明日故鄕へのたよりありときけば文かく九月十三夜歌合せんと契おいたればその歌きのふけふのつれ〴〵につゞり出たるをもかいつけて此たよりに中里の常岳のぬしのもとへやるその歌

田上鴈

くれふかき秋の田面の夕霧にあはれをこめて落るかりかね

離　菊

へたておく露の心もうすくこく見ゆるまがきの菊のいろ〳〵

山紅葉

日にそへていろこそまされ村時雨ふるの山への秋のもみぢ葉

絶　戀

今は又よそにのみきく音羽川見なれしかひもなきちぎりかな

月前旅

草枕とゝふ露の月かげも袖にふけゆくさよのなかやま

海眺望

波さわぐいせ島遠く見わたせばたつもむれたつあこの松原

廿五日けふは日よくなりぬ朝とくおきてかの市のさま見る此湯よりいさゝか下さまの町のほどなりけりかなたこなた人の家の前になすびもいもゝ松茸もはじかみもおほねもなにも横山のごとく所もなくつみならべおきたる山にすむものゝみこそ見えねはたの狹物なんどはかの兵庫の海邊より荷ひもて來とてともしくもあらず見ゆかひにも見にも人々おほくゆきちがひていとにぎはゝし湯の大神にまうづ所は温泉より一丁ばかり東南にていさゝか高くのぼる所南の山のそばになん北にむかひてたゝせ給へるあた〔痢〕はらといふやまひにとしごろなやむよしまうして此やまひやめ給へ御湯のしるしあらせ給へとねんごろにねぎまうしてこゝにつきける日よりはじめて朝ごとにまうでぬ日なしそも〳〵此大神今は權現の宮と里人は申すなるは熊野權現三輪明神鹿香明神と申て三柱をまつれるよ

しいひつたふ千載集には有馬の湯に忍ひて御幸ありける御供に侍りける湯の明神を三輪のみやう神となん申侍ると聞て物にかきつけて侍りける按察使資賢「めづらしき御ゆきをみわの神ならばしるしありまのいでゆなるべしとなんあればむねとは大汝命をまつれるなるべし藥の神にまし〳〵て人の病をたすけ給ふときけばここにたのもし延喜式の神名帳に湯泉神社としるされたるはこれなるべし安永二年といひしとし此わたり寺また人の家ともそこらやけぬるをり此御社もやけ給ひぬとて今はかり殿になんおはします此東の今一きは高くて平らかなる所は藥師の御堂の跡なりとて竹の垣をゆひめぐらしたるにたくみともあまたして大きなるくれざいもくほとほとどうちけづるなり本尊は今は御社のむかひなる何がしの坊におき奉れるいと尊くきら〳〵と大きなる御ほとけなり此佛のたふときこと又出湯の深きゆゑよしなんと此坊につたへて物にしるしたるいにしへ大水いで來て山々くづれたるに湯のあたりも何もうせはてゝ年ごろへけるに行基ぼさつといふ法師すぎやうにありくをりふし熊野權現といふ神に出あひ奉りて尊き御さとしごとうけ給はりて衆生のやまひをすくはんためにたづね來てなん此御湯を二たびおこしけるとかやそのかみめづらかにあやしきしるしどもなんどあらはいけることなんとさま〴〵いふなるは例のおろかなる世人をあざむきならへる佛の道のくせぞかしこうるさくてなほざりにのみきゝすぐす

廿六日かの皷の瀧といふ見にまからんとて西の翁此ごろはわりなき雨につゝまれていづこへもえ物せざりつるけふは道なんともかわきてよくなりぬらんいざ給へおのがとくいの人ども此西のかたなる兵衛の坊にやどりをるよべ契りおきつと朝のほどよりそゝのかしたつるもいといそがはし御社まうでゆあみなんと例することどもしはてゝはしつかたに煙ふきつゝいつも〳〵心ちよげなる翁かな物いとやすげにかたらひゑわらひつゝあくればといひくるればかくいひよとゝもに物をのみおきつるいみじき物あつかひなめり此ものする子もちの女はよめなんめりいとけしうはあらずかしなど聽井とふたりかたらひをればかの兵衛とかやいふやどりの大坂人なんめり三四人此翁のやどりたづね來つればいみしうまちよろこべるけしきにてやがて此うまごなる子をおこせていざといへばたち出ぬ瀧の所はゆの本より十丁ばかり南いさゝか山路をわくればやゝうちはれたる松どもおほく立たる所に出ぬ西南のかたおもしろき岩山にてそのまへを清き谷川ながれて東北の山のはらは櫻の木どももおほくて此ごろもみちしたるもあまた立まじれり

春は猶いかにありまの山櫻秋の梢のいろもえならす

と思ひつゞく皷の瀧といふは此谷川の上大きなる岩山のきりたてたらんやうなるはざまを岩ねにつたひて入て見る所なり

けりさばかり大きなる瀧にしもあらず一丈ばかり岩の上より
たゝざまにおちくる水のひゞきかなたこなたほらのやうなる
岩ほの中なれば外にもるゝかたなくてほどよりはこと〴〵し
うなんとゞろく此の水のながれいといさぎよし

これやこの世のうきことをもきかざらむ岩ほの中にすめる山水

こゝはいとせばくさぐゝみたる岩のそばにて物見るべくもあ
らねばいでゝかの川原の清き所にゐてわりごなどこうでさせ
酒のむいつのころほひよりか出來けんさみせむといふ引もの
よ下ざまの今めく程はさらにもいはずやんごとなきわたりま
でふればひてさま〴〵手をつくしてもてあそぶそのかたちは
琵琶にちかくてよなういやしげなるを糸はたゞ三すぢなん
はげたれどいとたくみに千々の音をぞ引いづめるかうやうの
たはふれのむしろにはまづもてはやさるゝ物にてけふもおく
れざりけり今やうの小うたにあはせて引はやむるまゝにはす
ずろきまさりてゐひすゝめかはすもさるかたにいとおかし翁
が本にうちつゝきさゝれたる盃をかつはよろこびながらもて
わづらひたるさましてこれきゝたまへやおのれ歌よみしたり
とて

めつらしき契ありけりこの出あひにてうちとんじたるつゝみの歟みかた

こぞわなゝかし出たる人々おかしとやきくらんものゝ音もし
ばし引さしたり此見やりなる岩山にあやふげに生かゝりては
ひ出たる松のさまゆゑありて さる所には いかでか と見えて

「種しあればとはかゝるをやいふらむとゐにもかいとらまほ
しきまでおもしろきを猶見ればそのわたりひろくなゝめなる
岩の面に白き瀧のみすぢにわかれていとほそく長くつたひお
つるを見つけたるいとゞえもいはずあれは何といふ瀧ならん
名もしらねどけしきはいとよしやといふにをりつきなからね
ば

ほん〳〵となるか鼓か瀧ならば三すぢおつるやさみせむの瀧

といらへたればあなとくつき〴〵しうとほめゐたり
廿七日また曉ふかく目のさめぬれば故郷のことのみ思ひ出ら
るひるは所からの物さわがしきにうちまぎれてさしも思ひ出
ぬを五十里といふ道へだてゝ山のおくに見もしらぬ人々なの
みなれむつびて日ごろもへにけるかな立出んとせしほどはま
だこそ扇もおきがたかりしかしばしのほどにこよなく秋のけ
しき深くなりにけるかな夜な〳〵はさむくはた成ぬかし故郷
のかたもさこそは今はなりぬらめ京よりもこゝよりも文はつ
かはしてしをいまだかへりごともきこえず旅の空にて例のに
はかやまひの出來たらましかばなんと人々もうしろめたげに
いひ思ひてしを母なんとはいかに心もとなくおもひおこせ給
ふらん又人しれぬわたりにもいかにおもひいつらんなどつく
つくと思ひ殘す事なし明やしつらんと朝戸おしやりて見出せ
ば風いとひやゝかにてすこくすみたる空に月のいみじうほそ
くてさしのぼりたるたとへなくあはれなり

こひしさはたゞひもあらし有馬山有明の月いかすかなる影

いとひさしうてあけはてにければいづこも〳〵人さわがしう例のゆにかよふあしたの音から〳〵とゆきちがふなりけふは瑞寶寺などいふ寺にまうでゝとかくして日くれぬ鹽井のぬしは淨留璃といふことをこのみて常にものすなるその道とたてゝ何がしなどいはるゝものにもをさ〳〵おとらずなん有ければきのふ鼓の瀧にてもゑひのまぎれにはかなく口ずさみたるを大坂の人々きゝおどろきていかで猶かゝるたぐれならでしめやかに一二段きかせ給へとせちにこのましうしいるをやがてその夜こよひいかで〳〵と人をおこせてそゝのかしければいとからきことゝわづらはしげにいふものからこのめるすぢなればさしもすまはでかの兵衛の坊にものしつ

廿八日の夜は兵衛の坊の人々をよびて此ぬり屋にて酒のむ中のへだておしはなちて翁がつぼねとひとつになしてひろくしつらひてあるじのまうけも心ことにて待まうけたりさるは此翁今は大坂にかへるべければわかれをしみがてら出たちをいはひてとなりけりゆなといひて湯のあないしゆかたびらとりまかなひなどまらうとをあへしらふ女ひとやとす家毎に二人づゝなんをるひやうゑのもとゝのも盃もて出へいしとりなんとまじりゐて小うた長うたなんとこゑおかしうてうたひたりあそびなんといふものはしな〳〵はあれど大かたほど〳〵につけつゝ花やかにこと〲しくもてつけていとなめしきまでなれ〳〵しうつゝましからぬなんならひなんめるをこれはいとすくよかにうちかしこまりゐて物なんとはいふものゝさすがに引つくろひもてつけてえんなる言葉なんとうちまぜつゝたはふれうちわらひなんとしてかくこゑおもしろくうたひはやしたるにくからぬことゝちすいさゝかすゝめられたるだに目くるめくこゝちしてくるしき物をいみじうかたみにしひそしつゝのみかはすさまさまでやはあな心ぐるしとまでいふかひなくたへぬ心には見思ふ秋の夜のふけゆくもしらず心ちよげにうきたちて今ひとつうてなんと手打ならして又なくおもしろげにおのがかほのならむやうもおもはすゑみさかえけうするる人々よおもへばなか〳〵にさかしらがる心なんとなくて神の心にもかなふらんとおぼゆるにはかのさかしらがるをにくみて猿にかも似るど昔の人のあはめけんもげにさることぞかし

廿九日例の人々にさそはれて落葉山といふへゆきてあそぶ湯の西のかた十丁ばかりのぼる山なり東も西も南もみなちかく山々たちならびていつこも見えぬをたどうしとらのかたのみひろく見やられてはるかに有間ふじといふなるも見ゆるは三田といふ所の山なりとぞさしも高からねどかたちの似たればはなるべし鹿舌大明神の山といふもならびて見ゆ中野なんといふ山里の家居なんども見ゆるをそこかしこうち見やりつゝ酒のみなんとす供なるをのこ酒をあたゝむとてそのわたりの

松の枝のかれたるを手をり來て火たきたるは林間のふるここもふこ思ひ出られておかし

かきよせん落葉の山はまたしくて折たかへたる松の枝かな

かのゆなごもけふも二人三人まじり來てさかなまゐりなんこして所につけたる三田富士さん落葉やまなんこうたふさかなの中にくぢらの有けるをはさみてまゐりければある人こりてくふまゝにかゝる山のうへにて鯨をたうべ侍るもめづらしき一ふしぞやこ何こなくいへりければ

難波から擣湯をあみにこし人の山のうへにて鯨をそくふ

ふるく源のかね昌のぬしの「わたつ海ははるけきものをいかにして有間の山にしほゆいづらんこいへるをおもひたるなるべし此同しやうにせうえうする人そこかしこの木の本岩陰かくれになみゐたるなんこいこけう有所なりけり此たきすさみたる火のもこに煙草ふくこて火ひこつ給へやこてはたちばかりの男同しほこの法師こ二人より來て物打うそふきつゝたゝずめるをしばしゐ給へうちつけなるやうなれご何かはかうやうの所にてはならいのつみは見過し給へこて我かたなる人もたる盃をさしたればけしきばかりいたゞきてのむさまものなれたりうちつけにうちこけかはしてゆなんこにあざればみつゝ芝生のうへにうちおかれたる三味線こりて有間歌に引あはせなんこするすき物もあり又はにほひやかによそほしう引つくろひたる人のむすめだつ三四人なごこもなひてかろらかならぬ男の供人おほくなんこして山々なごうちわたしつついこすゞろはしうなんこはあらずしめやかに物なんこいひかはすさま一きはまさりて心にくゝ見ゆるもあり日くるゝほごおのかやこりく\にかへりけり九月朔日湯の大神にまうづるは例のことにてけふはそこかしこの社々にもまうでゝかへるに道のほごなる人の家より物け給はるいつこにか物したまひつるたゞにやはよぎさせ給はんたゝしはしこいひたるを見いるればきのふ落葉山にて酒のみかはしける二人の人なりけりふりはへても尋ね聞ゆべかりしかご御やごりもうけ給はりしらでなんこ立いりてこかう物かたりすきのふ此男の法師にいへるやうかゝる山上の絶景にて一首物せさせ給へやなんこいひつるをほのぐ\きゝおきしかばさりげなくて心のみやびかくしもたる人よこゆかしうて落葉山にてはめづらしきふしなんこは物せさせ給はざりつるやなごゝひ心みつるにいたくわりなげにてずんしたるから歌何こかやわすれにきまだはかばかしくも物せぬよしいひてはぢらふもこさらのひげにはあらざんめり此人々は大坂ちかきながらの里人なるよしいふそこはかこなくかたらひゐたるほごに又はりまの姫路人こてここつぼねより出來てまらうこ物し給ふこきゝ侍りしかばめづらしき御物語もそあるこてなんおしてまゐりつるこいふは人ざまも立まさり心ばせもありげなれは久しうかたらまほしけれご湯に物すべきころほひになりぬれば又こさらにをこ

われも人もたつそのやごりはすみの坊後に出來つる人は長野の何かしごぞいふなるその夜西の翁あすかへりなんこいふ十日ばかりかほごなれむつひさま〴〵まめやかに思ひたすけてへだてなき中こ成にければよみて遣はしける

ちかき代の諺に物の名も所によりてかはりけり難波のあしはいせの濱荻こかやうけ給はりさふらへごも心こ心こはへだつることなくめづらしき契ありまの里にしばしながらもなれまゐらせて明くれは故郷人こ同しやうによろつたのもしう思ひまゐらせつる物をあす出たたせ給ふよしうけ給はりさふらひてはいこ〳〵わかれをしう思ひまゐらせて

おきこゆく心そつらき夕露のともにむすひし草のまくらを

こかいて遣しければいたくめてよろこひてかへりこごしける

うちとけて宿もおほきにぬりやとの又(殿)の御えんをまつ坂のきやく

難波なるあしのかりねの一宿に心をのこすいせの濱をき

こよめるはいせ人のおのれらに心をこゞめてかへりうく思ふこの心こかやかうをこがましきここまねぶは心づきなけれご心さしの深きばかりなんもだしがたくて

二日朝こく京口の川原まで此人々をおくりてかへりぬけふはここなることもなくて日くれぬ明日は湯の大神の祭こてこよひよりてうちんこいふ物に御あかしおほくまゐりつらねなんこ里人おほくまうでちがひて此御前いこにぎはゝし

三日日いごよしけふは此御前にてすまひあり午の時ばかりこはじまるこてみな人まゐりつごひてやゝひろき御前所もなく立こみたりいにしへすまひのせちゑこて大やけにせさせて御らんじけんさまはくはしうもしらず今の代には下ざまにももてあそびていづこの國々にもすることなるを女の見るべきさまにしもあらねば一人だにたちまじることはあらぬをけふの物見よなかばは女なることそいこめづらかなれ物ごこそぎたる旅にしあれば中々物のつゝましさもさしおかれてこもりゐたらんかさうざうしきまゝにわれも〳〵こ出立てけさうじ引つくろひたる國々の男女こもかりそめなるさじきにも芝生にもなみゐたるはおかしきやう〳〵の見物なりけり左右かたわきてきほひのゝしるに行司こてかちまけこことわるをりこいはかまのすそいさゝかつみあげてさまことなるうちはをゆゑゆゑしうもちふるまひて土俵こいふ物を立めぐりつゝすまひのはしめをたづぬるに人わう十一代垂仁天皇の御代當麻のけはや野見のすくね御前にめされて力をくらべはじめてよりなんここ〴〵しう長ごこつどけてことあげするなんこいづこにて見るも同じさまなりけりさて土俵入こいひてまづ左のかたより廿人ばかりのすまひこもたけだち高くふつゝかにこえたるくろうひげがちなるなんこおの〳〵しゆすりんずびろうごなんこいふ物にさま〴〵の縫やうなんこ花やかにぬひたるたふさぎをこしにしたゝかにゆひめぐらして立ならびあし

ふみたけび手うちならしてかへり居れば右のかたのも同しさまにすなりさるはみな例のさほうなれどあまり物はぢせぬ尼なんとはあなめづらしかゝることはまだこそ見ざりけれ大坂にて常に見る人のかたるをきゝしかど女の見るべきわざならねばよそにのみきゝ過しつるをなんといふにわかき女共は心づきなしとつきじろひゐたりあはするほどになりてはいとあらましう打たふしなんとするかけあがる心ちしてむくつけしなんと見さしていづるもおほかり見もしらぬ人の始めてあひたるもになううちとけかはして年ごろのとくいひとしうにはかになりてあすよりはおのがもとへもなにがしかやどりへもたづねおはしませとふらひきこえんなんとかねごとするもあり申の時ばかりことはてゝみな人あがれぬ

四日雨ふる東本願寺殿の湯あみんとておはしつき給ふこのつどへる國々の人々物見るとていとかしかましう小家の門毎にゐなみていまやおはするとかなたこなたうちまもりつゝゐたり大坂よりはりま路にめぐりてのぼりざまにおはしたれはそなたの道よりなん入おはしましぬる未の時ばかり此家の前をわたり給ふうるはしからぬ御ありきなればいたくことそぎはぶき給へれど猶いといかめしう供人おほくなんとして物し給へりけふは雨いたくふりてみな雨衣のよそひなればきら〳〵しきかたは見えねどかゝる所にはめづらしうまれなる事とかや大かた法師なるはすくなくてものゝふ共をなんおほく引ぐし給へればいとまうなる御いきほひかなあなめでたたどよろしきほどの大名の行れつとこそ見奉れなどいひつゝかしこまりをかむ人々もおほかり夕つかた雨いみしうふることよひは[illegible]井かじやうるりかたるをきくとは此家にすぢかひてある川野屋といふ家は此ぬり屋のあるじかあはせてりやうぜる家なるそこに此ごろ大坂の今橋とかいふわたりの人女ふたりさるべき男を供にてやどりゐたるきのふの物見のさじきにゐあひてかたみに名のりかはしけるをその夜この淨瑠理きかまほしきよしいひおこせければ日ひとひすまひに見つかれてなんとていなみけるをこよひ又しもいかで〳〵とせちにいひければわたりてかたるなりけりゆなども來てうつふしゐてきくそもそも此じやうるりといふものは平家物語猿樂のうたひ物なんどよりも猶いたくくだりてむげに今の代のことばもてつくれる物語どもにておいたるわかき男女のさまにしたがひてこわづかひをうつしなんとこのさま今見るやうにてしかいやしうつくれるしも耳ぢかくて下ざまのものはいと〳〵おもしろき事と思へる中にもいとあはれなることどもいひたる所々なんとかたるをきゝてはみな人涙おとさぬはなしさみせんのあへしらひなければいみじうこゑのつかれてたへがたくなんとていたう夜ふけぬほどにやみぬるを人々あかず口をしがる

五日かの翁がすめりける西のつぼねにうつりすむ人ありこれも大坂の大平寺といふ寺の長老とか此やどりにつき給ひて三

日四日になりぬる下の屋におはせしを此二階をゆきかふ沓音のいとかしましうかしらいたき心ちしてねられずとてぐし給へるでし共のとかくうれひてこゝにはうつり給ふ成けりちか隣になりぬれば今よりはこゝにむつび給へとて大坂にとゝまれる弟子共がおこせたるとてまんぢうといふ物さゞやかなるをりひつにいれて給はる

六日朝のほどあたごの山にまうでぬ薬師の御堂のうしろよりのぼるいと高き山なりこぶかくみ山木のみ生しげりてはればれしき見やりもなければとくかへりぬよさり川野屋の今橋のまらうどのもとにわたりてあそぶ石なとりながらはじきなんといひてはかなきわざしゐたりおのれもかたきになりてとかくしたるまけにければなか〳〵にくみてやみぬるもわらはあそびおぼえておかし又紙たゝま〳〵に鶴にも箱にもたゝみたるそはよのつねにてふるめかしきを猶さま〳〵人のまだ思ひよらぬかたどもたゝみならべたるもはかなきすさみながらおかし

七日雨ふるいとつれ〳〵なればめづらしき物語もやとて例のすみの坊にゆくかの長柄の里人は二日三日さきにはやくいにければ姫路人のもとへなりけり心ありげに見えたるも猶まことにさる人はありがたき世なりけり此人は契ありまの翁にくらぶればいさゝか物のあはれも見しれるやうにてまさりざまにしおぼゆればありし對面の後たび〳〵とふらふとはすれど

たゞいたづらにかをりよき茶をさまことなるうつは物にかきたてさま〴〵めづらしきかしくだ物をことそぎたる高つきにもりなんといみしうねんごろにあへしらふはかりにて家づとにまねひつべき物語もをさ〳〵なしかへりてこなたよりなんいさゝかもかたりきかせけるをとゝしの冬伊賀伊勢尾張なんどへ灰のふりけることかたりいづそは神無月二日亥の時より空いみじうくらうなりてつねのやみの夜とはこよなくむくつけきまでくらうて子ひとつより丑三つの程まで物のふりけるをいとあさましうおそろしう世はいかになりゆくらんとおき出つゝ見おどろきのゝしりつゝ明ぬれば庭も籬もましろに屋根どもたゞ雪のあしたにことならずいと〳〵あやしうなん有けるそのほどは世の中にたゞ此事をのみなんよきことにやあらんあしきことにやあらむといひあつかひける此都ちかき國々はさること侍らざりけりなか〳〵東のかた江戸にてはいさゝか初霜のおきたるばかり心とゞめて見侍ればふりて侍りけりとなんなんどいへばさもめづらかなることども成けりその程ひがことまじりに人のかたりけるをこそけうのことゝはきゝ侍りしかどはいとくはしうもうけ給はりけることさても何事によりてさるわざは有つるならんなんど人々あやしがるいさやそのをりはいかに共思ひよるよしも侍らざりしを月ごろへてさつまの國櫻島といふがけしからず燒ぬるよしききてさはその山のはひにこそとは思ひさだめて侍るなんとい

へばその人の供なる男もちかうるてげに思ひ出侍ればはりまの海にかろ石のおほくながれよること侍りしもその程のことになん侍りける又何かしといふ船のかの國ちかくまかりけるなりしもその山やけて此かろ石のうきみちて船路をさへうしなひてほと〳〵しきめ見きとかたり侍りきなんといふ

八日けふも雨ふる西の大德とはかなき世の物語なんどしてくらしぬ夜も猶ふりつゞきていとさびしきにこの湯の歌よまばやと思ひめぐらせどおかしきこともいでくまじければ古風にてつき〴〵しくまぎらはしてんと思ひなりて

大なむちすくな彦なの神こそはつくりおきけめ津の國の有馬の山の山なかゆわき出るみゆはあめのしたあを人草のなやみをらたすくるみゆとやまひをらやむるいで湯と神代よりいひつききつゝやそ國にきゝつきわたりやそ國ゆきよりつどひて人みなの朝よひさらすあむらくよしも

また

あしかちる難波のうらゆ久方の雲ゐに見ゆるありま山その山のまにとこしへにしはゆぞいづる海にこそ鹽はみちひめたきてこそみゆはわきなめ高山の山のみ中ゆあやしくも鹽ぞわき出る御ゆぞわき出る

みしかうた

津國の有間の山に出るゆの鹽湯のみゆの出湯しよしも

わかやまひそゝかえらせなひとこも一そゝく出ゆにそゝかえらせな

つゝみの詞　常のふりにて

名にしおふ鼓の瀧の音きけは落くる水の岩をうつなり

落葉山

はかなくもそめける秋の時雨かなはては落葉の山の梢を

三田富士

とことはに雪もふりおかぬふしのねをいかでさむ（寒）たの山といふらん

ひろ山といふをよめる南のかたに朝夕へなれたる高き山なり

はた物のほといかならむひろ山に織てかけたる秋の錦は

旅のうた

風そよく秋の猪名野のさゝ枕都にかよふ夢もむすはす

まことや猪名といふ所はかの神崎より伊丹にかよふ道の程にて猪名寺といふもありとぞそのわたりは川邊郡にて此有馬はほど遠けれどかの「しなか鳥るな野をゆけは有馬山夕霧たちぬ宿はなくして」とよめるは旅路の夕ぐれその野べよりはるかに見やりてよめらんによくかなひておぼゆ

九日日よくなりて心ちもよしそこかしこまうづる所々へまうでとふらふ所々とふらひなんとしてけふのよろこびいひありく何かしの坊といふに日向の國人やどれるよしきゝつればたづねて物がたりすかの姫路人にわれは遠き國々の物語きくことをなんこのむと一日ものゝついでにかたりければかう〳〵なんとをしへてけれはきのふをとつひもたつねけれどなきほどにていたづらにのみかへりきぬるをけふはのどやかにあひ

むかひて國の物語かしこのありさまなんとかたらひかはす高千穂のたけのこと師の古事記の傳にさまざまあげつらひおき給ひたれど猶ことなるつたへもやあるときかまほしうてとへどそは何がしかすむ細島といふ所より廿里あまりへだたれるうへにさることにつねに心をしとゞめねば神代のふることある所とはほのかにきゝおき侍れどくはしき事はえしらずといふかひなくいらへてやみぬされどそのみねに十社の宮と申すか御あらかいとうるはしうやんごとなくておはしますよし又おん田といふ所ありて種をまかずして年毎に苗のおひ出つゝみのるありその苗の生たちのさまにしたかひてそのとしのよきあしきをうらなひしるよしなんどかたる又島津淡路守ときこゆる殿のしり給ふ所にさいまんの宮とて大きなる社のあるそこの池にすむ鮒のこと／＼に目のかためなるはめづらかなることなりこと所のをとりきてはなてばそれも同しう片目になり又こと所の水にうつせばもとのごとくになるなんとかたるはげにいとめづらかなるわざなりけり又生目の八幡と申すはかげ清か頼朝を見ることに心ちたへがたしとて手づからくり出でけるまなこをなん神とはまつれるなりける此神にいのり申ことはよろづいちじるきしるしありてたのむ人おほくて何かしがやうに船路をたのむあき人はことにふかく信じてあやふき波風にも此まもりにかゝりてあやまつことなしとかいひ侍れど何がしは法花の御法をしたのめばすべてさる世の神なんとをたのむ事はしはんべらずなんといふはいはゆるかたくな法華とかいふたぐひなんめりさてかのやけぬときゝし櫻島のことも猶くはしうとひきけばいといみじや十月朔日の朝よりもえはじめて十日あまりもっちはへて火しめらず煙高くたちみちて五六里も天つ空まで吹のぼりつゝかきくれたるけしきいみじうおそろしなんとはよのつねにて岩ほ共のやけくだけて飛ちるひゞきいはんかたもなかりけり大隅とさつまのあはひなる島なるが近くも遠くもえあがるを見る國のかぎりはかくて世はつきぬるにやとみな人いける心ちもせでなんおどろきさわぎけるとかやかしこより日向の國細島までは五十里ばかりへだゝれれど山なんとへのぼりてきけばそのやくるものゝひゞきいとちかく鳴神のやうに三日四日きこえけるをはじめはあやしきことゝ聞けるを後になんさとはしりぬると里人どものいひけるとぞその島はめぐり七里あまりなるをその島のうちなる瀬戸といふ里のわたりは大隅の地にいとまぢかくてわづかに十七八丁あんなるそのあひだ九十ひろばかりのふかさなる海なるをかのやけくだけたる石のつもりてひかたになりにければ後にはかちよりわたりてあやふき命いきのびける島人もおほかりしとなんさてそのわたりの海に又島五つなんあらたにいできて中におほきなるは一里半ばかりもありとぞさるにてはかの御たけのすがたかけそこなはれても見えつべかんなるをいとおもひの外にてあやしうた

だもとのさまなりとぞそはいと高く大きなる山にて世にさのき富士といひて三月まで雪しろき山になんなんとつぶ〳〵とつゞけりたる夕つかた西の大隠と物語してゐたれば國よりつかひの人の來たるに鹽井とふたりよろこびまどふ文のたよりばかりにてはよろづおぼつかなければなん此何がしをつかはす猶かへるさまには引具してよこゝもとの人々たれも〳〵ととなくたひらかなれば心やすくのどやかになんとをぢなる人のもとよりいとどこまやかなり文のもてきたり出でこし後國に有けるとのことかのことなんとかたるをきくほどに日もくれにけり

おきふしにとかれしかたのことつてもけふぞまちえてきくの白露

まことやおのれかくこゝにゆあむることもはら此をちのぬしのすゝめたるなりけり

十日御社まうでのかへるさ思ひ出て姫路人長野氏とふらふとのふ山里にまかりてなんとて松茸をおくられけるそのよろこびいはんとてなりけりいせ人參れるよしいひ入たれば例のまちふみこひてたどおはしませとて南おもての山のかたも見やられ木だちたて有なんどもよしある所になかへいれてあへしらふよろづたらはぬことなく世をゆたかに過す人なんめり同じき草のかりねもそのわたりせばくもあらずしめてあたりあたりいみじうきよらにはきゝよめなつかしきさまにしつらひたりあなんとや引ぐしたらん女がちにものさゝめきなんとさすがにほどなきかりのやどりなればやがて此もやとおぼしきさうじのあなたに立ゐるきぬの音なひもけぢかうきこえて心にくしかの草びらのよろこびいへば昨日はいとうれしうこゝに尋ね給へりつとか朝とくより物へまかりてえたいめんも給はらでかしこきことゝは此ちかき三田といふ所に相かたらふ人のもとになんそこの山に松茸はいとおほく侍りければふき山つとにて御もとにもまゐらせたるなりさそひ聞えんとおもひつれどかしこよりよびに人をおこせてにはかなりつればとなんそのさん田はこゝより三里姫路にいづる道の程になんさて播磨路はまだ御らんせずやこのたびはいかで〳〵とすゝむるにそはとしころ心にかゝる波のうら〳〵なればかへるさまにはかならずと思ひなりてそのわたりの有様とひきゝなんことさまかうさまにかたらふほどにやゝ久しうなりぬけふは山ぶみに人々をさそひおきつるよと思ひ出てぬり屋に歸りぬれば鹽井の君と長老の御坊とははやく立出給ひてむかひの屋の今橋の御もとにまち給へりと供の男がとゞまりゐていふものくひ引つくろひなんとしてみなともなひてけふも又つゞみの瀧に物す稍懸の君はいづこにか物し給ひつる契りおき給へればつとめてよりみなやういして待ゐたるをいと久しう見え給はざりつるいとよくかた〴〵におはする人よとなが鳴く里のあまたあればとやうに今橋の女どもの道すがらいふもおかし此山の紅葉ども見しをりよりはおほくそめ渡したるにおど

ゐかれて

秋ふかくなりゆく山のいろ見てもうつりし旅の日かずをぞ思ふ

と心のうちに思ひつゞけゝ契ありまといひける翁かこと思ひ出てそのをりのことなんとかたる今はかの翁がやうにかく先たちてあないしありくもおかし岩の上にしりかけてみな人たばこふきなんとしゐたればかの日向人も来たるに立よりて物なんといふかへさの道に清水と名つけて清らなる茶屋のあるに立いりてやすむこゝにても又日向人来あひてたけ立高くふつゝかに物々しき人の所せげなるさましたるをともなひたれば人々わづらはしがりてとく立さるをあなたにはたくるしがりしほどにことよおれどをりしも空のけしき時雨めきてふり出たる雨にことつけて

十一日けふも空くもれり竹のうつは物さま/\の筆なんとを里人のわざとしておほくうる所にて日頃ふるほどそのあき人どもつぼね/\の戸口にさしのぞきて籠はえうぜさせ給はずや御つれ/\のなぐさめに御らんじだにせよなとあながちにすゝむるまゝわづらはしうのみきゝ過しつるをけふも例の来てすゝむるに今は出たちぬべききざみにも成ぬればわらはべなんどの家づとにとめしよすくしげひげこふせご花籠など今やうのさま/\おかしうしなしたり夕つけてのどやかなりければめづらしきこともやと又日向人とふらふそこはかとなくかたらふほど隣のつぼねより人して客人もあらはもろともにおはせよかしといひおこせたるあるじもせちにいざなふまゝにしりにつきて入ぬればきのふ見し大きなる男なりけり下人ともあたらしきさかなてうじつれどたゞ一人ははえなくてなんとて所せうひろごりゐてさかづきとうでゝすゝむ日向人は此くれより二日三日つゝしむべきわざ侍れば此伊勢人を御かたきにてこそとゆづりたるぞいとわりなき瀧澤の何がしとて姫路の殿につかふる人にてとしはいそぢばかりいやしきさまには見えねどはづかしう物ふかげにはあらずいと心やすげなる人なり有馬といふ所よいづこにありきあそびてもけうある所もなくさう/\しう五日六日へて今は心ちくしにたりこの君なくては一日もえあらじといふまゝに大きなる酒づきにあふるあふるつがせつゝこともなげにのまるゝさま三つの友の中にこれはいかにぞやこちなくおぼゆれどいとよくもきこしめす哉げにかゝる所にては又なき御友にことなんとけしきを取ばいでやかたきなくてはむとくなるわざなりすみの坊といふに同し國人はやくよりやどり侍れど此道はか/\しからでよびに人やりても小弓もちて今物へいでゝ侍るけふは心ちあしうてなんといつも/\さう/\しういらへおこすなるといはるゝはかの長野氏の事なりけり此家あるじはたふみつくり和歌をも物すとかざえのかたはあはれかど/\しうてあれどむげに力なき男にて一つき二つきせめてのむとはすれどやがてかほなんとてりわたりてからがりまどふはいといふかひなけ

れば此日向のぬしをのみたのみ所にまちまうけ侍るをけふはえさらぬさうじとかけふはいかにまろかさいはひなき日ぞやそこしもむげにいふかひなきよとうちうめきてさて何わざをかこのまるゝまり小弓なんとはいかに碁はうち給ふかまたははいかいなど物し給はすやなんとゝはるゝにいづれもしらぬよしいひていでやいとあやしき身に侍ればいつも〳〵家人をいざなひそのこゝかのこゝなといひおきてつゝ世のいとなみに玉たすきかゝつらひ物していさゝかもいとまのひま侍らぬ身は何わさをかものし侍らんなといらふるもよのつねのひげなどにはあらずまことにさる身ぞかし猶つき〳〵しうあへしらひつゝ酒のみなんとするに日は早くくれにけりきのふともなはれつる女こそいみじかりしかかの法師のぐせられたる思ひものなりなあたら吉祥天女をやかのさだ過たるは父何人ぞいとめやすくて立そひたりつるはなんとゝはるゝこそいと心ぐるしけれこはなぞにげなの御おしあてやかの大德は日ごろなれ見給へしをいと心ぎよくいさゝかも女なんどに心つくる人に侍らずかの大德は大とこなどちは女どちとおの〳〵こと旅人にて同じやどりにものし侍れば大とこのもとへも女どものもとへもおのれなん常にゆきかひてなれ〳〵しうし侍ればおのづからよりあひ侍るばかりをさまことなる道の友にておもほしよせけんもさいひながらいとことわりに侍りなんといへば日向は猶さまよくの給ひなほすにはあらじか今朝も此事いひ出て二人いひあつかひつるよなんといふ瀧澤清水の茶屋にてさばかりとゞめつる物をあしばやにゝげて出られつるもされればよまばゆくやなんどそれにつけてもいよ〳〵うたがひなく思ひ定めつるをあらずといはるゝこそ猶いとあやしけれまだ十七八の程なんめりなよびかにいとらうたうこそ見えしかあまりよしめき花やきたるかたなんともなくてたゝけうらにあいぎやうづきいさゝかもてつけたる所なきがすぐれたるぞや女といひてそこら見わたす中にも見しばかりなるはをさ〳〵ありがたき物ぞとは此翁としごろに思ひしれるぞやなんとかたらるゝもげにさかしとはきけど物のふの江戸に年へたるしわざとて東詞にたみつゝほむるも心づきなうにくゝてさばかりすぐれたりとも見給へらぬ程を夜目遠目とかいふらんやうにふとよそながら御らんじたればにやあらんなんとのみすくよかにかしこまりことなしびゐたりゐの時も過てかへりたれば人々は早くふしたり廿日ばかりの日ごろへて今は三めぐりといふになりぬればかへるべき程ちかう成ぬれどおかしきかたの心ばへある人にはえたづねあはぬもさいはひつたなき心ちしてかくそこらの國人の來つどへる中にはいかでかはなからむ日ごろへて一人二人はゆきあひつべき物をえあらはし出ぬはわが心のあまり引いりつゝめるからにやともどかしうさへおぼゆかの瀧澤がかたられつる家主歌よむとかいかにしてかはたづねよらましさるべからむついでもがなと此こ

と思ひつゞけられてとみにもまとろまれず友だちの許へつとにもすばかりなる物のおかしさもがなと心にかけぬ時はなけれど人のおかしさ見つけんとてさもあながちにおのれ歌よみ侍るなんとゆくりがに名のり出んもひが／＼しうきのふそこの花ざかりにたゞずみける下陰にてかくなんなんとえんがましきとはずがたりもいひちらさんことはまめやかに心づきなきこと〻つねにおもへればたゞよのつねになだらかにて酒このむ人にも碁うつ人にもつき／＼しう女郎花おほかる野べにまじりては又今やうの男女の品さだめなんと所からをりからにしたがひてとかくかたらひつゝはかない事にのみあたら月日をすぐすもかつはをしき心ちすすみの坊の長野氏をおきては西の大とこそはさはいへど物も見しりたれば物とふたのみ所にてほうけづきこと／＼しきやうなれど法文なんどの心をもかつ／＼あきらむ

十二日又此大徳や今橋やとさそひあはせて落葉山にのぼりぬ陰よろしき山の片そはに所見さだめてもうせんといふ物うちしきて今橋が供の男待ゐたるに人々むれゐて例の山々見わたしつゝ清らなるゑぶくろよりくだ物なんどとりいづけふは日のけしきものどかにていさゝかくもらはしきかたもなくはるばると見わたさるゝによろづ思ふことなくのど／＼とうちとけたる物語なんどもかきくづしかたらふ山人のきりのこしたるみじかき柿の木ともいとあかくつや／＼とひかりてこゝかしこにもみぢしたるもおかし此のぼりこし道のべにもおりてゆきふるゝ袖にほろ／＼とちりたるもをしくさへおぼえきおのがつゝめることも日ごろの物語におのづから此大徳はしり給ひてければ花もみぢのおかしさもおふな／＼かたらひかはす和歌をなんよめるこれいかで引なほし給へとてたゝうがみにかいつけて見せ給ふ

　いせ路なる松坂の賓客と同しうゆあみしけるいとまのありければわがみにもあらざるやんごとなき姫君たちと打つれ難波のよしあしなど口ずさみて落葉山となんいふ所へまかりて法雲

　思ひきやきみと有馬の山深み花にまされる落葉見んとは

とあり常にかうやうのこと物せざらん人の思ひつゞけ給へるをりからいとあはれと見しかばそのかたはらにかきつく

　秋ふかくたつねいらすは落葉山かゝること葉のいろも見ましや

此今橋の橋姫よいづこかたほなりと見るへくもなくにほひやかにらうたげなるかたちよりも心ばへなんまさりてなつかしううちとけぬ物からあまりそば／＼しからず物うちかたらひたるかいみじうにくからず思はるればよのつねのすきものなんとならましかばいかでかかうでのみ見すぐさんあやしうかくよづかぬまでまめ／＼しきにこそかく人もゆるしてなれなれしうはすらめと思ひめぐらさるはかなき草の花や菊なんどのおかしきをゆく／＼手折れるもいとえんなりつたのさゞや

かなるがみ山木の枝にいと色こくてはひまつはれたるともの男にとらせてきぬなんともかゝる色にてあらまほしやともたる草の葉になびかしそへて人々に見するもおかし

下にのみ忍ひかねてやつたかつら深き思ひのいろに出けむ

あさからぬ下のなけきもことの葉のいろにいてねは人はしらしな

ともいはまほしけれどあぢきなき物をやと思ひかへして猶いろにもいでぬぞいぶせきや

十三日朝とくおきて湯の大神にまうづ明日は出たちなんとすればまかりまうしてねんごろにをがみ奉るすみの坊の長野氏とぶらひてしばしと思ひつれど何やかやとかたらふほど例の久しうなりぬとて日向人のやどりにも立よりたれば人々物がたりしてゐたり、此ものがたりする人けふも瀧澤に引とゞめられてあへしらひゐたるをからうじて今立さりぬるよしいふはかいきゝつる家主とおぼしくてさにやとといひしかばいとうれしうさなんなり年の程五十ばかりほどよりはおもりかにしづまりてかしこまりゐたり莞木の義白とかこなたよりも名のりかはしてとやかくやとかたらふわかきほどいづみの堺に在て大安寺の春山大徳とかやいふとしたしき友にて芝山の中納言殿に同しうしたがひて歌の道は學びけるよしいふ中納言殿うせ給ひけるころ人々題をわかちて無常の歌よみけるに稲妻をえて

はかなさはもろくもきゆる露にたにやとりもはてぬよひの稲つま

かの春山大徳ある時しようろといふ物をふめる

ひらふ手にもろくもきえぬ濱松の露も千とせの種よりやなる

なんと何くれと自のも人のもおほくかたられつれどこと〳〵もえ思ひ出ずおのが日ごろのこしをれどもゝずんじきかす契沖あざりの古學おこされけるをなんとはまだしらざりけりされどこなたよりかたりければそのあさりの自かきおかれつる歌とて此家にたくはへてあるよしいふいにしへより名ある人の高きもさらぬも湯あみに物し給ひてかきのこし給ひつる物ども何がしくれがしなんといふ家々につたはれるよしいふあすは出たつよしいへばかくばかり間近き所にやどり給ひつるを今までしらで侍りけることゝいふに物のことわりたづぬばかりのざえのほどにはあらねどさるべき古ことの心をかたみにさだめかはさんにおほな〳〵つきなからねばおのれはたくやしと思へどいかゞはせんはいでや今ちかき程に向ひゆとか又まうでこんといへばさらばそのをりかならずわすれ給ふなとちぎるやがて瀧澤にもあひてわかれのよしいひてたちぬつぎに今橋はしばしながらもいとねんごろにむつび給ひつるを今はとて立わかれ給ふかいとさう〳〵しきとこなたにはた今ちかき程に立侍るなりこむ春はむかひゆに物し給へいかで又同しをりにてをあらなんとあらましごとするもあひなのたのみや、大徳のもとにても同じさまなりさらばつゝみなくおはしませ日ごろもきこえけるやうに此世は心安くてこそわた

らせ給はぬ思ふにかなはぬは世の有樣を我といふ物をわすれて萬のことわづらはしからぬなんよく侍るなんど例のをしへこち給ふ今四日五日もち給はゞいかで大坂までは諸共にも物せんをなんともの給ふ夕つけては人々おほくつどひ來てわかれをしむ家とうじ湯女どもゝきてけしきとりつゝこの秋は例よりもはやく寒くなり侍りぬ又のおんたびは三月四月のほどにこそなんど日くるゝまでつぎ／＼に入來てあへしらひ居たりくらうなりぬれば月の光あらはれ出ぬよひ過るほど人々もしづまりなどしたるにたゞ一人見出しつゝ故鄕のことのみ思ひつゞけられて物あはれなるはむかしの人々のまねするやうなれどもよほす月のさがなればまめやかにしりうごつ心を何とかはせむ十五夜には人々と共に故鄕の何がしの寺にて見あかしつるをこよひはいづこにて見るらんいかにおかしうて笛なんどは吹あはすらんなんど常國常岳のぬしなんとせちに戀しうかの歌合もこよひぞかしとつく／＼とながめつゝ一人ことをぞする

さやけさは思ふ友とち圓居して見し夜ににたる長月のかけ

さやけさはかはらぬ秋を圓居して見はやす友そなかつきのかけ

峯あまたへたて來て見る山のおくに月はかはらすすめる秋かな

月影はすみなれかほにやとりけりかりのやとりの露の袂に

さやけさはなかはの秋にかはらねとなかむる袖にぬるゝ月かけ

旅衣露をたつねて山のおくにしたひ來にける月のかけかな

袖の上にやとるもうれし思ふどち見し故鄕のかけとおもへは

ひろ山のもみちのいろも深き夜の月の光にあかすこそ見れ

ひとりのみ月に見わたすひろ山のもみちは夜の錦なりけり

など筆くはふべき道のはかせもなければいとたへぬ所のおほからむを見ん人よきに引直してよふくるまでかうやうのそゞろごとしてはしつかたにゐたる夜ふかき山風のいとさむかんなるをよにひが／＼しの心やと人々むつがるもことわりなればいまにいとゞしうすみまさる月をひとりのこしてわれだに見すてんことこそあたらしき心ちすれど「かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうきとかへす／＼ずんしつゝ入てふしぬ

十四日いとよし朝とくと思ひしかど家づとや何やと引つゝみたるつゞらなんどやうの物とかくしたゝめなんとするほどにあけはてゝぞ立いづる此あけくれ見つるひろ山の紅葉をかへり見て

有馬山みねの錦よふるさとに立かへりては又やしのはん

こし時よりは所々もみぢいとおほく見ゆ

名にしおひて色こそことにこかれけれ舟坂山の秋のもみち葉

けふは空のけしきものどかに風もなくていとあたゝかなるにのぼりくだる坂路のほどいとあつし生瀨より一里川邊郡小濱といふ所にやすみて物くふありし有馬のかたを見やれば西の

かたいとはるかになりてかのむらはげのあかはた山なるにつづきてむこ山いさゝかひきう丸らかにてこれはくらう木ぶかきよのつねの山なり中野の里といふを過てゆくほどかのこやの池を二つながら左のかたに見つゝゆく昆陽の里あり「あしの葉にかくれてすみしとよめる所なるべし塚口といふ里をはなれてやゝゆけば道の左に石の地藏のたてる所より左のほそ道をゆくたゞにゆけば尼が崎にいづこぞ神崎にてやすむかのくだりつるをり舟よりおりつる所を舟してわたる鹿嶋みつや十ぞうなんどいふ所々を過て日くるゝほど大坂の町にいりぬ

十五日日よし

十六日雨ふる

十七日けふは日よくてすみよしにまうづよべ空はれぬるより鹽井をそゝのかして契おきつれば下うれしうて今朝はいととく目さめたるにこのかたのひましろう見ゆれば明ぬなりとねやの戸すこしおしあけて見出せば曉ふかくさやかなる月のすごく殘れる故鄕を立いでつるもけふぞかしと思ふにその曉のかげおぼえていと物あはれなれば

いるかたの空にいさよふ月影もわかこと出しかたや戀しき

ほしの光もきら〳〵といさゝかくもらはしきけしきもなきは天氣よき日なめりと心ときめきせられてこわつくりなんどもよほせば人々もまたいぎたなながらおき出てさるやういす御社に奉らむと思ひて長歌おもひめぐらす此ごろやどれる所は京橋といふ町の四丁といふ所なりまづ谷町といふ町をはる〴〵と廿丁ばかりゆきて生玉の御社にまうづ御社のうしろより大坂の町どもはる〴〵と見わたさるさて同じ町を猶南へゆきて四天王寺にまうづ五重の塔なんどいと古く大きにてありすべていと古代に思ひなしさへ尊き御寺なり此寺の前よりゆきゆきてすみよしの里にいたりぬ御あらかは四所おはしますまへなるふた所はならび立給ひてそのうしろに一所又うしろに一所とおくのかたへすぎ〳〵にかさなりてみな西を前にてたち給へる紀の海よりつくしのはてから國かけてゆきかふ船をたゞ一目にみそなはしまもりおはしますよとたのもしうたふとしとしごろふりはへてもまうでまほしうしける御社なればかうやうに物のたよりなるはかたじけなきやうなれど山がつなんどしといふものゝかたはしにだにたらはぬあやしきしづのをのあけくれはたゞよのなりはひにいそがされてさるべき旅路ならではたび〳〵出立こともをさ〳〵かなはぬ身にしあれば又ことさらにまうでん事はいつかはと思ひてこのたびかくちかき所にしも物したればなん今朝をうけよめる歌を大前に奉りてをがみ奉るそのうた

玉ちはふ此すめ神の命をしあやにかしこみ掛まくもあやにかしこきたらし姫神の命の梓弓心ふりおこしから國をことむけますと船よそひよそひたゝしゝ出ましの御船にたちて行雲のゆくさもくさもたひらけくまもり給ひて大

御船はてける時に見わたしの島をよろしみ打よする波をよろしみぬなくらの長岡の前を墨江のよろしき國こ松陰の清き濱びに御あらかをふこしきたてゝ萬代にしづまり

います皇神の大宮ごころあやによろしも

此御前より五丁ばかり西へ松原をはまべに出て海見やりたるいはんかたなくおもしろしかりそめなる茶屋のあるに入ゐて見ればそのわたり入海のやうにてあはぢ島いこまぢかく見ゆ西のかたにかのむこ山のすそさし出て見ゆ南のかたは和泉の國のうら〱にて山なんごはなしいつこなく詣る人々おほかればこゝに物見るもたえずおほし

風の音に聞て久しき住江のきしの姫松けふそ來て見る

此みぎは五丁ばかりあなたにはちひさき船ごもをうかべて大きなるあみを引わたしつゝうかゞひありくさまもめづらしこはいをごもを此網のうちにおひよせんこするわざなるべし水の中をもわたりありきつゝ大ごゑをいだして水の上をしもこしてうちのゝしるもありやゝ遠き所にも同じさまにぞすらむ舟ごも見ゆかくあまのしわざさへこりそへておもしろきを

いかで此海へにすみて墨の江の波のより〱見るよしもかな

かのありまにてむつびつる兵庫の人々姫路の長野氏なんごの此度いこよきついでなればはりまのうら〱をも見に物せよ明石よりこなた名高き所々おほくあり姫路ちかき所にも石の寶殿曾根の松なんごはよにめづらかなる物なりこゝより播磨に出てかへるさたに大坂に出んにはたゞ三日四日がほごにこそあらめ一わたりはかならず見ありきつべき所々ぞかしこせちにすゝめたりつる物を此鹽井大坂にこく物すべきわざありかねて此ついでにこ思ひまうけたるをやこてせちにいそぎたればえものせざりけるこそ口をしけれこも〱此たびは身のやまひを直さんここをほいにてなんここしの夏までいこあつしかりつれば名殘なほいさゝかの道もゆきやかねんこ心見のやうにていでたち湯に日ごろへなんほごも又いかゞあらんこうしろめたく思ひつるを思ひつるやうにもあらで有馬を出んこする五日六日は例のこゝちちりばかりもくもりなきやうにてこは御湯のしるしなんめり かくさはやぎはてたるは こうちつけに思ふまで年ごろのあつしさをわすれてやう〱をゝしき心も出來てかくては人々のすゝむる所々をも心のまゝに見ありきてんこ思ひよるをり〱もありしかこいさや又國にかへりて後旅路のつかれに立そひて立かへり又わづらひなんごしたらんには、そゝやよければよきにすゝみてなんこ人々にもごかれんも人わらへなるわざをや又播磨は師の君のこしごろおもほしわたる道なればちかきほごにかならず思ほしたちなんをさるをりにこそさふらはめこつひに思ひのごめてかくたゞちに大坂には おもむきこしなりけり今かゝるうらわのゆほびかなるけしきを見るにつけては海づらのおかしさは又いここよなき物なりけりこ日ごろの山ぶこころを出たる心

ちにはうち思はるゝにさるうら／＼のありさまいかならむと思ひやらるゝを、今すこしたび／＼も引うごかしてましかば此人もうけ引やうも有なましをとねたければ

いかはかり立まさるらんすまあかし音にきこゆる波のけしきは

かうやうにおもむけていさゝか今もえんずれば何かはさる遠き所々まで見ありき給はんかしこの海山とていたくことなる木草も侍らん物かはいでこのちかき安りう寺まちといふに難波屋の松とて侍るすが笠なんとをうちおきたらんやうして一庭にはひひろごれるめづらしき松に侍り又堺の妙國寺といふにそてちの木の大きなる侍りそれはまだ何がしも見侍らねどたぐひなく大きなるよしきゝおき侍れば今日こそはと先にたちて道引まゝに

十八日けふも日よし

十九日座摩の御社にまうでけるついでにかのちぎり有馬の翁思ひ出てそこよりちかき立賣堀とかいふ所ときゝおきつればたづねてとふらひたればよろこびたることいはんかたなし大坂につきぬるよりそこかしこ國人共ののぼりすめればとふらふ所々おほくあやにくに日さへみじかき頃にて心にはかゝりながら今日までおぼつかなくてなんたれも／＼平らかにおはしますやなんととへば手を折て日をかぞへ侍れば此ごろぞこゝには物し給ふらんと此日頃まち思ひつるをいとうれしうもとて故郷人のあひたらんやうに思ひよろこびたるもとはずばいかに物しと思はん明日は大坂を出ぬべく思ひまうけたるよしいへば今さらにいみじうわかれをゝしみて一夜ととめてもかたらまほしげにおもひたり

廿日日いとよし此やどれりける家の前はいと大きなる川なりこれはかの淀より神崎まで下りし川の江口のわたりよりこなたにわかれたるながれなりとぞ此わたりにてはいと／＼大きにて京伏見よりのぼりくだる船とも夜ひるとなうらうがはしうゆきちがひのゝしるさまもめづらかなりけふは此家の前より船にのりてこぎのぼる京橋といふ橋の下を過て大坂の町ははなれけりきしちかくゆくに船人はつゝみにあがりて長き綱をうちはへ引のぼるなりくだりつるをりは夜にて月はありしかど物のあやめわかれでいぶせかりつるをけふは空のけしきもいとゝかくもらはしからず心ちよきにかなたこなたはればれしう見わたしつゝゆく春日井上井守口なんどいふ所々過ゆく此船にあひのりたる人々十五六人京人も大坂のもまじりゐておのがじゝとり／＼にかたらふをきくもさま／＼にめづらかなり鳥かひといふ所むかし大江の玉淵がむすめの此わたりのうかれめにて霞ならねとゝ亭子の御門のめしにしたがひてつかふまつれるよしいみじかりけるわざかなと思ひいづ西方といふ過るほどとある柳のかげよりさざやかなる船に人ふたりのりてはしらせ來て此のれる船につとつくるまゝに何とかやいふなるはもちひ酒なんどをくへとすゝむるなりけりさめ

るは人に物うるものゝいふらん詞のさまにもあらずいたくなしく聞ぐるしけれど此里人の例のことゝて人はきゝもとがめず船人も旅人も心もとなき程なりつるをこそみだりかはしうめしよせてのみくふさかのぼる川船はさらでだにおそきに此船人の中にはかに風のこゝちあしとてやすめるなんありければ綱手の力たらでいとゞしうなん土佐日記に此川をのぼるほど水すくなくてのぼりわづらひけるよしいひて「とくと思ふ船なやますはわがために水の心の淺きなりけりとかやありしやうにおぼゆるはさもこそはそのかみも心もとなかりけめ人人はいたくくして日は末の時ばかりなるを伏見は猶遠しのぼり船といへどいとかばかりおそきこそまだおぼえねくがぢより物してはいみじきあしよわ人なりとも今はくず葉橋本の程にはいたりなんをいふかひなき船人かなとしりうごつもあり

引のぼる綱手をよわみ水の上に心もゆかぬ淀の川船

供の男どもなんどはおりて船人と同じうとりつきて引たすくれど今は何ばかりのしるしか見えん柱本なんどいふわたりゆく程はおのれも人々と共におりてかつせうえうしつゝ堤をもゆく川のむかひはかふちの國かたのゝ郡なりかの禁野といふ所なんどは今すこし上にてこゝよりは見えざりけりさて渚鶴殿をも過てこぎ行ほどは八幡山のほのかに見えそめたるもめづらし山崎もその西にて川のかたへさし出て遠く見ゆのぼりのぼれば水無瀨川なのかたにちかく見ゆ古ことにおかしうよみたる所にてそのわたりのけしきいかならんと思ひやらる

よそにのみみなせの山のあかなくに船さしよせよよどの川をさ

日もそなたさまにかたぶきたるに淀伏見は猶遠きをやう／＼山崎ちかくなりて寶寺なんどいふ山もよく見ゆ橋本ちかくて日はくれはてにけりかく船のおそくては夜中ばかりにぞ伏見にはつきなんさもあらばやどりとらむにもたど／＼しからむとてみな人此橋本にておりてやがてそこにやどるもあり猶よどまではとてゆくもあり八幡山ふもとの道よりをがみ奉る夜いとくらく物むつかしきに淀の町まではえいたらでいぬの時ばかり川つらなる美豆の里にたどりつきてとまりぬあばらなる物むつかしきやどりなるを淀の大橋は此家の前なりけりあしあらひ物くひなんどしたる程むかひの方に月はなやかにさし出たりその出たる所をいづこばかりぞとこへばだいごの山なりといふ

たいこ山さし出るよはの影見れは月の都はちかつきにけり

くだるをり伏見より船にのりたるも八月の廿日にて此月いづるほどなりけるをけふしも又かくてのぼりけんことこそさらめきておかし

伏見山出しその夜の月もわれも都にちかくめくり來にけり

山城のみつ野の里にかりねして月影さむし淀の川風

廿一日朝とく宿りをいづ大橋いたくこぼれたるすりする程にや垣ゆひめぐらしてゆきかふ人は二丁ばかり上の所より船し

てわたる淀の町をはなれて堤のやうなる道をゆく左みぎ野にもあらず池にもあらであしの所々むら立たる淀野の澤こよめるはこれなるべし此ぬま水に水鳥のみつよつあそびたるいこさむげなり

澤水なおのかよどいとしめおきこつがひはなれすすめるをし鳥

よこ大路鳥羽の道よりひるつかた京に入ぬ例の礪波こふらひて有馬にありつる程のことなごかたり又萬葉集なご引ひろげてここわりさだむるに故郷人ならねごいれ紐の同じ心にて日ころのいぶせさもかずかずはれぬる心ちすよにかたくすなる古言の心なんごはかたみに得たることこ得ぬことのあるをかゝる道にては何かはつゝまんこてそれはこありこれはかゝりなんこあきらめかはしてかたらふ程夜いたくふけぬ

君とわがことかたらへは長月の長々し夜もあきたらすけり

茂穂らは今はまからむこいへご何かは時守のうちなすつづみもうしに成ぬこきくをむぐらふのきたなき宿もいこひ給はずばここどむるまゝにやごりはたいこちかゝらねば今はこてあるじもまらうごもやすみぬあけはてゝやごりにかへりたればいづこの忍ひありきぞなんこ供のをのこはいふ鹽井もおのが淨るりの友のもこに夜ふけにしかばこていぎたなげにて今ぞおきつる

廿二日朝の程堀川なる市が本に物してかたらふきのふはなきほごにてえあはざりければなりけり湯に住つるほごのありさまなんごかたるにのぼり給ひしをり日ころへ給はん旅の空なまうしろめたげにの給ひつるをさもあらでいこ御心ちよげなりや湯のしるしにやなんごいふさなんゆはゆにてかたへはここ茂き家の物あつかひもしらで朝にはおかしき野山にあそび夕にはめづらしき國々のものがたりにまぎれなんご思ふここなくあかしくらしけるけにこそはこしごろ時々おこりけるむねも心ちのくもらはしさも出こで今はたどよのつねの人心ちのし侍るぞや此うれしさこそいはんかたなけれこいへばそこそは又なき母の御もこへの御いへづこなんなれこ此人もまめやかによろこびたりこのうれしさよ何につゝみてもてくだらん旅衣の袖もいみじうあかつききたなげなるをや夕つけて又礪波氏にまかり中にも猶こやかくやこ日くれぬればおごろきてたちぬ

廿三日朝こく三條のやごりをたつ粟田山を過れば旅人なんごのゆきかひいこらうがはし相坂のわたりをゆくほご道の左いさゝか高き山のはらに宮居こおぼしうて木茂き所に大鼓のつづみをうちならすを何わざするにかこ里人にこへばけふは蟬まろ大明神のまつりにてこいふにのぼりてまうでたれば里のわらはごもむらがりゐてしごけなくうちならす成けりそもそも此神よゆくもかへるもこよみたるはしの詞にこゝに庵して住けるよしいへるこ又びわをよく引けるよしものに見えたるこばかりにこそあれそのはじめをたづぬるにいこさだかなら

ずいかなる人とも代々の物しり人もえいひおかぬをかくこゝに御社さだめてまつるなるはおぼろげならずなん契沖あさりの集に蟬まろをとめるとて「あやしくも相坂山の木がくれに蟬となくなることのねにしてとありけるを思ひいでゝ我も

うつせみのからはむなしき後の代に殘るも高し四つの緒のこゑ

その日は水口の驛にやどりぬ

廿四日朝風さむし今宿といふをゆく程心ちなやましうてあゆみがたかりければとある人の家に入て心ちあしきものぞこゝにしばしゆるし給へとてうつぶしゐたる人々とかく見あつかひければいとゞしうむねのあたりすぢの引ていみじういたむさるはかのよことゝもにいひうれへつるあたはらの心ちなりけりとみにもやまぬをとかくしていさゝかしづまりたるやうに覺ゆるほどに人々に扶けられて駕にのりぬ秋田かりいるとて里人いとまなきころほひにてゆかんといふもののなきを人々せめてとかくしてやとひ來たる成けり猶むねはふたがりみちてわびしきをせめてねんじてはひのりてあなはらとのみなきゐたり此かける男一人はかのやすみゐたりける家のあるじにてはじめよりのありさまもしれゝば心ぐるしがりていかに〳〵とゆく〳〵ことゝふもうれし日ごろはさばかり心ちよかりける物を思はずにはかにもかきくもりてともなふ人々をさへ思ひさわがせて例のことゝはいひながらうれたの病のしわざやと涙おちてねたく口をしけれどせんかたもなしかゝればこそ今はおこたりにけりと思ふ〳〵もねをたちてやみぬるにはあらじと猶あやふくは思ひわたりつれと思ひつゞくる程もあなはらとのみうちなげかるかくてひるつかた土山の驛にもなりぬれば旅人やどす家につきてやすむしばしうちやすみ給へさて猶やまずばけふはこゝにやどりてんと人々いふまづいとさむければあつきふすまども打きて心をしづめてやすみたるにぞからうじてしづまりはてぬるいさゝかゆなんどのみて又かごにのる今宿のもの共ははやくかへりにければ今又やとひたるはかごかきといひて此わざをわたらひとしたるあやしうむくつけゞなるものにてとくのり給へ雨もふりぬべし日もみじかきころをとなきけもなくいそがしたつるも心づきなし甲賀山にかゝるほど吹わたる松の嵐もはげしう空かきくもりてしくれ來たるそゞろさむし

旅衣うきたかさぬる袖の上に時雨ふりそふ秋の山みち

かきくもり空にしぐれのみたるゝもわが身にたぐふ心ちのみして

をりからいとゞあはれなり此にはかにおこりてほどなくやむおのが心ちもたゞ時雨と同じことぞかしのぼりゆくまゝに紅葉いとおほし重なれる山々はれくもる雲のけしきもいとあはれふかき山路のさまなりいろ〳〵になる鈴鹿山かなと今ぞいさゝかおかしきかたの物もおぼゆる猶のはなとかく過ぬる程ふらずなりぬ手向をこえて坂下にて茶屋のまへにおろしすゑてやすむ此駕かきどもけふはいと德つくべかりける日を土山

にてむごにためらひ給ひていたく時おくれぬれば御酒手心こごにてこそなんご供の男にいひうれふなるはかゝるものゝつねのむさぼりごはいへご心よわうげにさぞかしごきくを供のをのこはいごつれなういらへだにせず坂下より關までの山路松の木ごもよかくおかしきはいづこにかあらむゆゑあらむつくりにはなんごに一木うつしたらましかばいかにはえあらんなんごゆきかへる度ごごにめのみごまるは定家の中納言のえご過ぬごの給ひけん花の陰にもをさ〳〵おごるまじうこそ日くるゝほご關につきてやごりぬかいさかてさはいひつれご心ゆくばかりごらせたれば又なくよろこびくつがへりていぬ

廿五日ひいごよし心ちもさはやぎはてゝいごうれしけふは馬にのりていづ豐國（トヨクノ）野の松原なんごさしも見所なき道なれご馬のうへは見やりはれ〴〵しうて心ちよしいそぐべきわざもなくごごなるここもあらじ物から故鄕こいへばあやしうわかわかしうごくかへらまほしう覺ゆるはたれも同じ事にやみな人おのづから足すゝみざまにて日高く松坂にいりぬ雲出（クモツ）川のほごり須がはごいふ里にてむかへの人々のあへる時に

袖ぬれて立わかれにし雲出川かへり來て又わたるうれしさ

天明二年壬寅十二月六日艸稿畢　　稻懸大平

此日記をよみていごも〳〵おもしろくおぼえければ　　宣長

出ゆかは心ありまの水くきそよにもあやしくわき出にける

又たはふれに

有間筆ひよいと出たる言のはも人形よりはめつらしきかな

有馬の日記をかりて見てかへすごて　　常雄

また見ねと心も深き水くきにうかむ有馬の御ゆの面かけ

諸ともにゆかまし物を旅衣たちおかれけむことのくやしさ

名草の濱つと

十月十日師の紀の國にものしたまふ御供にて出たつとてよめる
あさもよし紀へゆく君にともなひて朝たちいつる旅衣かな
大河内を経て辻原より左のかたに入て瀬戸なといふ里を過てとりはみ山といふ坂路にて柿の木ともおほくあかくなれるを見てよめる
枝高みとる人もなき柿なれはおのか物とや鳥はみの山
かくいふをきゝて師のよみたまへる
守る人もなき柿ならは我もいさえた高くともとりはみの山
大石にて
川中もゆく手の山の片そはもこれそ名におふ大石の里
深野
ほとせはき岩間によとむ青淵のそこも深野の川つらのさと
めつらしたうけといふを越て河のむかひにさく瀧の里を見やりてそこに瀧野神社ましませは
岩にふれさゝ瀧川のしら波やかみの御前にかくるゆふして
此川の中に大きなる石の丸らなるあり里人つふて岩といふむかししか／＼のをり大御神のつふてになけたまへる石なりといふ
神の代の神ならすしてつふてにはなけ放つへき巖ならめや
赤桶の里にて
神無月いろつきそめてそこかしこあかをけ山の木々のもみちは
阿波野といふ處にて鹿のなくを聞て
くれふかく妻とふ鹿の鳴聲をあはのゝ里のあはれとそきく
七日市にやとりて
いてゝこしけふは十日の日なれとて七日市にそやとる旅人
十一日乙古呂次の山をこえて加婆桑原なといふ里を過き波瀬の里より山深く分いる船戸といふよりのほるにのほる山なむ高見山なりけるこの山は紅葉いとおほく山々にしきのやうに見えわたるいと高き所なれは谷より雲たちのほりはれくもることまめつらかなり
白雲の八重たちわたる高見山ふみさへみつゝけふもこえゆく
道のゆく手にいとこくそめつくしたる梢の手にちかゝるを見すくしかたくて
のほり來てをれはこそをれ高見山雲よりうへの峯の紅葉も
たむけもなかての坂路はいとけはしうくるしきに供のをのことも今朝こえし乙比次の山をこそくるしき坂とおもひしに猶およはさりけりといふをきゝて
高見山こえておもへは今朝こえし山路はおとる乙ころすかな
大たうけとてこえつる所よりなほ七八町斗高う見あけらるゝいたたきに神のやしろましますいふん大明神とかやいふ道のかたはらにたてる鳥居のもとよりをかみて
飯高のたか見の山の手むけより高きたかねにいます御社
小たうけといふをこゆれは大和國吉野郡なる杉谷木津なといふ里谷のそこに見ゆ木津たうけといふをこえて鷲家といふ里にやとりぬ申の時はかりになむありける師の君
大空をとふかことくに來もせぬにわしかにとくも着にけるかな

とよみたまふに

雲よりも高見の峰をこえて来てやとりはうへもわしかなりけり

十二日雨をり〳〵ふりてわしか山何くれの山路をおほく来つれと駕にのりたりけれは雨皮めく物たれかけて四里はかりのほとのことは見すなりぬ龍門の瀧は必見るへう師ののたまひつけしかは里人にあないせさす西蓮寺といふ寺のかたはらより細道を入もてゆくなりけり八町はかり山のそはなとつたひ來つる所に下乘とて石ふみたてり今やうの物としも見えねは立よりて見れは石のかたつかたに元弘三年癸酉卯月八日龍門寺となむえりたりけるそこより一町はかりおくになむ瀧はおちける瀧のさますこくおそろしうなとはあらておかしうよきほとのたきなりまことに布引はへ糸くりかけたるさましたりすへては六丈はかりの高さにて二丈はかりと四丈はかりと二きたになんおちけるこの瀧よりうへの山に平らなる所にむかしの堂の跡とて石すゑもあり瓦のくたけたとも有とそ仙のいはやなといひしもそのわたりなりけんかし例の師の君おほくよみたまへるに

音にきく瀧のしら糸めつらしゝ君にひかれてけふみつる哉

もみちもえたらすそめかけたるを

おりかくる木々の錦も山姫のさらせる布もめつらしきかな

雨もやみて雲もやう〳〵はれゆくもうれし上市の里よし野川のほとりに出けれはありし春師とともにこしをりの事おもひ出られてこの川水のなかれゆくさまもうちつけにむつましうおほえらるゝもあやし

よし野川せゝの岩なみたちかへり早くわたりし春をしそおもふ

年をへて逢見つるうれしさ面かはりもせておはしましけるよなと

人ならは物かたらまほしうおほゆわたりのほとりのきしの岩の上に出てこの川水に手あらひ口すゝきて水くまりの御社をはるかにをかみたてまつる六田の里にてもそのかみもこゝにてやすみつるになとおもひ出られて

花見つゝわたりし春もおもひ出て六田の淀のむつましき哉

おもふとち分見し花のおもかけもたつやよし野のみねの白雲

はるかによしの山のかたのみ見やらるゝ越部の里より安太の里まてのほとは此河つらのみちにて瀬々のいはほのさまたとめつらしう見つゝゆく　古ふり

うちわたし岩波見つゝみよしのゝ大川の邊をゆかくしよしも

宇野山をこえ行ほと右のかたに葛城山高う見ゆ此わたりは宇智郡なり寄足といふ里をゆくに道のかたはらに目にたてる地藏菩薩の堂あり子うむこと平らかにさちはひたまふよしにて近きわたりの里人おほくまうつるよしさと人かたる

さと人のたのみよらしのしるしあれやしたり顔なる地藏とそ見る

犬飼山本上野なといふ里を過てこえつく山路なむ待乳山なりける

いつしかと思ふまつちの山越て紀路にいりたつけふそ嬉しき

その夜ははし本にやとりぬ

十三日けふは此よしの川を船よりくたるいもせ山はけふの船路のほとにありと聞おきつれはいつしかとのみ見まほしくおもふやゝくたり〳〵てかなたにいさゝか見えそめ侍りぬと船人のいふにいとうれしくてはるかに見やれは左のかたによこほれるやうなるを妹山そといふ川の中なるを脊山そといふちひさく森のやうに見

ゆるを萬葉集に「ならひをるかもいもと脊の山なとよめるを思へは等しきはかりの山とこそおもひしにかたへちいさきはいとあやしとおもひをりぬこき行こきゆきて此二山のあはひにこき入て見もてゆくにたかふへくもあらさりけり脊山は川中にやゝ長う五町はかりかほとつゝける山なり妹山もおなしさまにてかなたこなた岩きしおもしろく松の木むらいにしへたかし左右二山のあはひいとまちかしかの事ゆるすやも打はしわたすとよめるにかなひておもほゆ

かはらしとむすふ契も妹と脊の中ゆく川の深きにそしる

岩むらも木たちもともにいもせ山名に忍はれてなつかしき哉

一里はかりくたりたるほと又川中に山あり船人にとへはこれはふりさけといふといふ脊山にそおとれゝとやゝ木ふかく高う見あけらるゝ山なり

めつらしとふりさけ見れは紀の川の中に木高くたてる鳥山

高野辻といふ處も見えたり紛川のてらもはるかに見えたり當國の一の宮といふもこの川つらにあり此わたり小田村といふか近きときけは神名式に小田神社とあるこれなるへし岩手といふ處に船さしよせてしはしやすらふけふは必わか山につくへうちきり置つれはかしこの人々迎に來ましつとて何かしといふ所にて船よりおりてあいたくふまるはてのわたりの茶屋に來て待むかへ給へるなりけりそこよりは師の翁も歩ゆかんとのたまへと其ほと雨いみしうふりきて道のけうも有ましけれはとてみな人々船にとてのり給ひてきて酒なにくれともたせて來たまへるものともとうてゝかたみにうれしうかたらひ給ふ

紀の川やうれしきせゝに棹さしていとゝ心もゆく船路かな

日くるゝほと若山の町に入て中の店北の町といふに瀧田何かしといふ人の家にいたりつきぬ小谷時彰君のもとに人々つとひて歌よみ給ひける日寄道祝といふ題を得て

きの國やさかゆくわかの浦まつもまきおく神のこゝろとそみる

ちりうせぬ千代のまかせは若のうら松をためしの言の葉の道

此ころいろ〳〵の菊をうゑてもてあそふ人のその菊ともにことやうなる名ともをつけて人々にうたこひ給ふよし人ともよみ給ひていさみ獅子といふをよめとのたまへは

名にしおひていさめるしゝのいきほひにほゆる聲さへきくみ池かな

一日小浦朝通君のいさなひ給へるまゝに和歌のうらにものしたまへり舊菌といふ渡より船してくたる此河はかのさの川の字治といふわたりよりわかれて御城のまへをなかれて南にめくれる川なり名草山ちかくこきゆくほと

ふくかせもけふはなくさの山ちかくさをさしくたる波のしつけさ

玉津島ちかくこきゆくほときしの方を見やれは入えの水のうへに釣殿のやうにつくりかけたる御寺めくものあり人々にとへは養珠院ときこえさせける御かたま屋のはいてんといふものなりとのたまふ船の中より見上けたるさま

わたつみの宮かと見えて水のうへにいらかも高くかゝるみたまや

やかてこの御はいてんのもとにさしよせておりぬうへなる山に御堂はなくて御塔たてりうるはしう石の御垣してつくりめくらされけふたふとしさて高松房雄神主の家にまかり給へれはなにくれといみしうあるしし給へり人々歌よみ給へるに

和歌のうらやわかなみ／＼の言のははなか／＼かけし玉津島山
　大河のほとりにいてゝ見ありく　古ふり
紀のうみのにはよくあらしもゝつ船眞熊野さして沖に出るみゆ
かへさには日くれはてゝ小雜賀大やけなといふわたりをのほるほと月さしいてゝ人々いみしうけうすいとおもしろくてかくなからよもすからあらまほしかるをこよひかならすおこなふへき仕へわさもあれはとて
あかなくに夕しほみちて月かけの廣せの岸に船ははてにき
　落合春蘂きみのもとにて人々歌よみたまひける日
とし高ゝ色まさりゆく春の葉のみとりは千代もわかの浦松
とよみてまゐらせけれはあるしの御かへし「ともになほかけをたのみて言の葉の花さきそはむわかのうらまつ又としふともこゝろへたつなあさからぬけふのまとゐをはしめにそしてとあれはかへし
としふとも忘れやはせんあさからぬけふのまとゐの君かなさけを
　窓前竹といふ題にて
窓ちかき竹の葉風よあけくれになれてもたとる雨の音哉
　同し題を古風にてよめと寛君のいひたまへるに
まとこしに月おしてりて風ふけはなひきおきたつ竹の影みゆ
　同しつとひの日本目君のよみたまへる
よひかはす和歌のうらわいともちとせ千代もとちきるこゝろわするな
かへし
和歌のうらやなれぬるけふの友千鳥いきる八千代の聲はたとらす
　小浦利涌君の家の會に川前千鳥
すむ月のかけもしらゝの濱遠く行かた見えて千鳥鳴なり

池水
夜のほとのさむさしられて廣澤の池もみなから氷はてけり
風こえし蘆のみたれもとちはてゝ氷に淸きふゆのいけ水
　恨戀
ことにいてゝうらみすとても葛の葉に玉まく露をそれとやはみぬ
ならはねとあしのひとよの夜かれをも猶やなにはのうらみよとまし
　日前の宮にまうてゝ國造君の御舘とふらひ給ひけるをり庭の紅葉を見て
外よりもてりこそまされ日のくまの宮の邊近き庭のもみちは
　本間君の家の會に野外雪
深山にはふりやしぬらんめつらしくけさそ都の野へのしら雪
駒とめて花かと見れはまた年のうちの大野につもる白ゆき
　本間君の御孫のむすめと水島君の御むすめと琴ひき給ひける桐壺といふ手を彈給へるせうかにまつかせや浪の音なといふことのあるに
わかのうらや松かせ波の音までもかよふかふかき琴のしらへに
　てた郎のやんことなきわたりよりめてさせ給へるよしの歌なとをうけ給りて
天津かせ吹上のことの琴の音はみやこの空にさそ聞えけむ
　長原忠睦ぬしの家にて雪中眺望を
めつらしく雪こそつもれ霜たにもまれに南の紀路の遠山
世におほふ神の御袖かしろたへの雪につゝめる玉つしま山
　明月如晝
淸たきや月に岩根もさやかにてよるとは見えすせゝのしら糸

紀三井寺に物しける日寶蔵院といふ僧坊より和歌の浦のけしきを見て師のよみたまへるうた

あふみにもうらの見るめはまさりけり同し名たかき三井のふるてら

吹かせのなくさの濱に船よせてなみもしつかに見るめをそかる

なとよみたまへるけにかゝる

見るめをも旅のなくさの山寺にきみゐてこすはいかてからまし

となむいらへけるけふも又むかひにさしわたりて玉津島の御社に二度まうつ

わかの浦やまた來て見れはみつ籬の光さしそふ玉つしま山

師の君けふはかへさは歩より物せんとのたまへとかの日前の宮にまうて給ひしをり足の氣おこりてゝるしうし給ひけれは籠輿よりものし給ふこそよからめといへはたはふれてよみたまへる

玉つしまみち守るてふ神なれはかへるうらわのあしやまめやはとあるかをかしうて

かへるさのみちあなかちにくるしまて入えのあしのうらやすくこそ

十一月三日　御前にてはしめてかうせちしたまひけるそはまつ神の道の書を延喜式祝詞卷なる大祓詞をとこしめたまひけるとそ

きみかため古事ともをうれしとや高天の原の神もきゝけん

ふとのりとくかしこきよけふよりは四方の國にも聞そつたへむ

又定家卿の堤井宮に奉れたまひける詠歌大概を本文にて歌のみちのことともこまやかにとき申給ひける日もありしとそ又板文庫とていとめつらしきものをなむ給りけるさるは此翁にとらすへきは何よけむとかしこくおもほしめくらしてかくいとみやひかなる物は給ひけるとそ見侍れは吹上の濱に菊の花たてる繪いみしうえもいはすかきなしたり硯筆なとそへられたり筆は和歌のうらの鷹をつかにしたる木のめは同し浦の錦貝をあはせて藤代の湯浅のたきの葉形の墨田邊のとふをつかにしたる小刀錐なともあり色紙のいとめてたきを摘みてゆひたる紐なむ物よりことにめてたかりける白きと紅ふかくたかはてめわけたる色あひなとけにふかく御心いれさせたまへるかたしけなさも見えて目もあやなる物のさまなりかゝるものはやんことなきわたりにこそころへきをりなとまゐらせ給ふこともあれいみしうおもしといへとも殿人のかきりはたまはれるためしもなかんめりなと見おとろきつゝのたまふ人々もありけりこの物の名の五字をこめて

とし高くおいたふ身こそかしこけれめくみも深き御代に逢つゝ

須佐神社にまうて給はんとて有田のかたにものしける日名高のうらにて

よる浪のかゝれはこそはむかしよりよにも名高の浦と見えけり

藤代のかけをうつしてむらさきのなたかの浦と名にやおひけん

此わたりの入江のけしきいと〳〵いはんかたなし藤代の御社神さひたりやゝのほる坂路よりかへり見れはすきこしかたの里とも黒牛日方名高なとの家居とも入えにそひてたちつゝけるもけしきありておかし戯て

むらさきの名高ふちしろ赤根さす日方黒うし浦はさきの海

のほり〳〵てたむけのほとより見わたしたるはまたたくひなく見ゆわかのうらも若山のかたも見ゆあはち島も見ゆ御坂のまつの木のまよりなとふることおもひいてらる加茂谷の里を過てまたかふら坂といふをのほるほと雨ふりいてゝ道いとあし

うなめらかなるによらせすは谷のそこにもまろひおちぬへうあや
ふくておからめ見せすたゝ杖をたのみてあしのゆくへにこゝろせ
ちる

ふりこけてよものけしきも見やられす雨の足もとたとる山路は

なりかふらによそへてよめる

はる／＼と天雲わけているまゝに高くなりゆくかふら坂かな

有田坂といふをくたりはつれはむかひのかたに糸鹿の里見ゆ

くるしくもゆくさきいそく冬の日はいとかの山もよりてたにみす

こよひは岩倚時倚神主の家に千田の里にたむやとりけるいみしう待よろこひていみしうあるし給ひけるあるしの君にさかつきさすとて御さかなに菊の花のもとに水のなかれたる形につくりたる有けれは

けふよりは千とせをかけてかはらしとくむ盃も菊の下水

このわたりの神主たちこれかれ來つとひたまひて古學の心はへとひきゝつゝ何くれとめつらしき御物かたりともありけりつとめて御社にまうてゝ

山ひろく木たちもしゝに神さひてあやに尊とき須佐の御社

この御社のまへより四町はかり西さまに海邊にいてゝ

よせかへる千田のうらなみ百千たひみれともあかめや沖つしま山

沼野紀之ぬしの家にて忍行戀といふことを

袖ぬれて世にししのふの露にさへこゝろおかるゝ夜はの通路

朝椋神社にまうてたまへるをり御社のまへなるめつらかなる松の木を見て

朝くらやこたる御前の松かえにちとせかはらぬ宮居をそしる

井口敬秩君のもとにて人々歌よみ給ひける日花如舊といふ題を得て

待をしむこゝろつくしもかはらぬをかはらぬ春の花やしるらむ

よし野山みゆきふりぬるむかしへにかはらぬ色や花のしろ妙

丹羽君の御許にまゐりたまひける夜さま／＼あるしたまひける中にそはきりといふ物をいたしたまひけるほとその物の名をかくして歌よみたまへるに又大平にもよめとあるしののたまひけれは

さほ山のはゝそはきりのたえまより錦と見えてそむるもみちは

屛風の繪にさくらのいみしうさかりなるをかきたりけるを見て又師のよみ給へるに同しうよめる

冬としもおもほえぬ哉咲花をときはの宿にうつし繪のかけ

海野素月君のものし給へるなりとて木綿たすきといふ言の葉を或人の見せられけるを見てかへしまゐらすとてよみてそへ侍る

紀のうみのふかき心をくたきつゝ八重にかさねしわかの浦波

わかのなみなみ／＼ならぬことのはもかけてしらるゝゆふたすき哉

かくてまゐらせけれは素月君の御かへし　うへならぬことの葉くさも時なれや人のなさけにひかりそひけり

殿の熊野におはしましけるは霜月廿日頃の事なりきかし御出たちのよそひは得見奉らさりつるをかへらせたまふをり御馬にて東中橋の御門にいらせたまふを道のかたはらにうつくまりゐてあふき見たてまつりていともかしこけれと

伊勢のうみに年ふるあまもけふそ見る又たくひなき玉の光を

國てらす玉のよそひを見くまのゝうらの果まてさそあふきけむ

かけひろき君のめくみはくまの路やいたらぬ隈もあらしとそ思ふ

かくよめるは後の霜月七日の日なりけり吹上の殿に召れて源氏の物語かうせちし給ひける日供にてさふらひて其わたりにておもしろくつくりなされたる松原のあるを見わたし侍りて

よる浪の音かあらぬかこれも又吹上にたてるけふの松風

師のかす〳〵のもの給りたまひけるをうれしくかたしけなく思ひ侍るにおのれにさへこかね一包たまはりけるをいとも〳〵有かたくかたしけなきことゝ思ひ給へて

いせ人のかつくにあまるたま物のわかたもとにもかゝる嬉しさ

そのゝちも又めされて古今集の序なとゝき申たまひけりそのをりもまた同しさまになむありける又

殿の御前よりかしこき仰ことのよしにてめしありて今よりはことにかろからぬ御くすしのつらにめすへきよしありけれは

紀の川の深きめくみをみなかみのさきはへ給ふ心なるべし

御紋とて葵の三葉をあやにしたる羽織着たまへるもめつらしくたふとくて

うれしさも君のめくみもいちしるくそむるあふひの袖に見えけり

いかなる時にかありけんもいゝ名の歌よみたまへるを見て同しうよめる

小忌　心葉　日蔭

咲うめを見にとは今こゝろはよし月なきよはゝ思ひかけすに

今はとて出たちなむとするころ落合春葉君の御許より玉津しまの岩根のすゝきと吹上のはまの菊のくきとをつかにしたる筆めつらしくみやひかにとゝのへて給ふとてそへたまへる歌

此ふてに心かよへといはせてきいはねのすゝき吹上のきく

かへし

たゝみ〳〵の筆とは見すよ濱かせに思ひよせける吹上のきくわか袖につゝむもうれししのすゝき恵みの露の玉つしまつと

人々のもとより何くれと家つとにせよとてめつらしきものとも給ひて歌よみて給ひけれと出たちいそきに事しけくてかへしはえよますなりにき其ころ小谷時彰君の御もとにて師の出たちをいはひ給ふよしにてことに人々おほくつとひて歌よみたまひけりその日

蘿蘿夢といふ事を

咲しより玉もてゆへる白露もひかりをませの床なつの花

閏十一月廿三日若山をいてたつ此度は泉津の國を經て京の方に物せんとすされと竈山伊太祁曾なといふ御社にはとくまうつへかりつるをとやかくやとさはる事おほくていまたえまうてさりけれはけふはそなたさまにめくりて物せんとよふかく出たつたつひぬほのほのすろほと竈山御社にまうつこはかけまくもかしこき神武天皇の御兄命にましましける五瀬のみことの御社なりこの尊の御陵こたかたらすそこかしこたつねけれとそれとおほしきもたつねえさりけり

ふりし代のあとをたつねてはる〳〵と霜ふみまよふ野路の朝明

朝日むらといふより吉禮むらといふにこえて都麻都比賣神社にまうつ

妻つひめ神のいさをか袖人の木にさりいたすなきのつまては

山ひとつ越て伊太祁曾神社にまうつ

天たるや八十の木種を八十國にまきほとこしゝ神そ此神

矢田山を越て井の口の里にいてゝ紀の川を川鍋といふわたりをわ

たる大屋都比賣神社はこゝ渡より四町はかり西の畑の中になむ木ふかき

いたけるの神の功をいそしくも大やつ姫もさつけましけむ

ひつしのときはかり山口の里にいてゝ物まゐりなとす川なへのわたりにて眞風ぬしのよまれける歌今おもひ出たり「いひかしく竈山にけさきらて來てゝ榮によとやわたる川納　紀の國と和泉の堺は山中の里のこなたの山路のほとにちひさき板はしのうるはしきかかゝれりしなむ堺にてありけるその夜は信達といふ驛にやとりけり

咲ころも月日かさねしわか山をけふはいつみの國にきにけり

廿四日樽井安松佐野川なといふ里を過て一里山といふ里にてやすむそこに神の社いとしきすたん蟻通の明神と申には有けるかの御昔時の預しきこえし人紀の國よりかへりのほり給ふほとこゝにて馬の行やらてわつらひけるを此神のしわさそと人々のいひしかは奉る幣にもなかりけれはとて歌をなおよみて奉りたまひけるとそそのうた　かきくもりあやめもしらぬ大空にありとほしをはおもふへしやは

ありとほしをもの名にてそらの星のことをよめる歌なりこの事はちかき世の諷物なとにもこと〳〵しくつくりなしてひかことましりにみな人のいとよくしれることなりかし

つらゆきはうたたてまつる人にありとほしくおほし神の心か

からうしてひねり出たり

高田追分貝塚はよき所なり岸和田こゝは岡部美濃守殿のしりたまふ御城ありことにきはゝし野村春木大津町なと過て堺の町あり

堺はむかしも越しところなりこの町をはなれて南の方をはるかにかへり見て

浦つたひさかひはるかになるまゝに見えす成行紀路の遠山

日くるゝほさ大坂の町に入て長堀といふわたりに紀伊國屋なにかしといふものゝ家たつねてやさる

廿五日南木なちといふ處に高木さてはやゝより翁にしたかひて古言に心さしある人有けりけふめつらしくたつねよりたまへるをいたくよろこひてあるしゝいゝしるこの庭にある井こいわたりにはたくひなくめてたき水なりさてその試者も眞風ぬしもよみ給へりわれも

さし深き松の木蔭にくむみゐの水のみさりも千代に絶せし

大川の北なる天神御社にまうつさらてたに大坂の町は人さわかしうゆきかふをけふはことにこのわたり人のみ立つゝきてゆきやられす申のときはかりやとりにかへりて物したゝめなとしてさて船にのりぬかなたこなた見わたしつゝゆくほとに日くれはてゝ川かせさむく引入てをり

引かつくふすまのうへに夜もすから霜を重ぬる波枕かな

あかつきかた

淀川やよとこの上におく霜も曉ふかくさゆる手枕

廿六日夜明るほと伏見につきて午のときはかり京御幸町の三條わたりにいたりつきぬ

廿七日橋本君のもとに紀の白石をまゐらすとてそへたりける

ら良ま人の御帶にすといふ朝もよし紀の大崎の濱の白石

また中川大年翁のかきたる文なとをもそへて

から國の手師ともてしと聞えける手しかてならひ書る筆の跡

廿八日金子君のもとへ筆何くれとまゐらすとて

千とせふるたつのむれゐる和歌の浦のひかたの蘆のあしつかの筆

廿九日芝山の宰相殿にまゐりたまへる御供にさふらひけれはともにおまへにめしいてられけることのいともかしこく覺えけるを御くたもの御茶なとも同しう賜ひさるへきことなとはおのれにもかたらせ給ふかいともかたしけなくてよみて奉れる

たちよるもかしこき峯の松蔭やめくみもかゝる言の葉の露

をこめきたる歌はさる御前にはいともなめしけれと思ひいたせるまゝに御わらひくさにもとて又御覽せさす

馬の尾にたかる鼠のはひいてゝいとかしこさにむねはしるなり

その夜は金子君のもとにまゐりぬあるしのきみのよみて給へる

思ふことかきつくしつゝうつみ火のあたりへたてすかたるうれしさ　ひさをよせそてをましへてかたる夜ににこれる酒もよしくめやきみとありけれは

ほとせはき袖もわすれてうつみ火のもとにましふる夜はの嬉しさ

としころつかへまつり給ふまめこゝろをめてたまひてその殿よりふかくめくみくはへ給ひけるよしきゝて

おもひかねふかきかねこのますら男と君のめくみも彌増らしも

また母君の七十の賀し給ひけるよしきゝて

母刀自につみてまゐらす春の野のわかなの千代もわかえましなん

こよひ同しう橋本の君も來ゐたまへりこのころむすこの君めてたくつかさにすゝみ給ひけるよしをきゝてよろこひに

大宮の御階にちかき橘のかくの木の實のさかえかしこし

かくよめるは橘氏なれはなり父君は肥後守といひむすこの君は但馬守とておやこ共に禁中にさふらひて御所ちかくつかへまつりたまふ人なりけり又金子氏は仙左衞門とて伊豫の松山の殿の京の御館あつかりてまめやかに仕ふる人なりけり

晦日芝山殿にきのふのかしこまりに參りぬ

十二月朔日京を出て草津にやとる

二日鈴鹿山をこゆるほと思ひつゝけゝる

はる〳〵と南をさして旅ころも又も南にかへるけふかな

こたみ師の紀の國にものしたまへるは川俣こえとてかの高見山をこえてはる〳〵と南をのみさしてものしけるをかへさにはかく京にいてゝ近江路より伊勢にかへり入とて又しも南のかたをさしてこし故にかくはよめるなり師の君かの國の人々に物をしへ給へるこゝろはへをかの指南とかいふ事に思ひよせてなりけりその夜は關の驛にやとりぬ

三日の夜は安濃津に

四日そ家にはかへり給ひける

此紀行をなくさの濱つとゝ名けて

こゝろなきあまのしわさをかきつめて
見れはなくさの濱つとそかし

本居大平

己未紀行

寛政十一年正月師翁二たひ紀國に物し給へる例の供にて道すからよめる歌

廿一日阿坂山の西の道をゆくほと

春風にけさは雪けの雲はれて峯もあさかの山そまちかき

八太にて

いにしへの春そおほゆる大和路やはた此たひも君にひかれて

廿二日伊賀國阿保の里をたちて七見たうけといふを夜深くのほる

たひ衣夜ふかく立ぬひるならはよく見てましを阿保の七村

名張にて

春も猶あさ霜ふかくおきつもの名張の野へを分るさむけさ

櫻井の里にやとりて

かりねしてまたしき花も夢にたにさきぬと見はや櫻井の里

長谷の萩原埴充大人の此里にやとり給へるよしをきゝてしたひ來て弟子になりて夜ふくるまて古學の物語してかへらむとするによみておくりける

あひ見るもこよひ初瀬の里人と大和こゝろをかたる嬉しさ

廿三日朝のほと道もなたらかにて天氣もよくけしきもよけれは翁も駕よりおりて道すからそこかしこ見わたしつゝゆくゆくかたらふ

大和路や名に立たらふみつ山を見つゝし行けは昔をそ思ふ

香具山は物やはらかに見えあの二山は山の形も男めきて見ゆと翁のいはるゝに

かく山のすかたは今もたわやきてをゝしくみゆるうねひ耳なし

巨勢の川つらをゆくほと梅の盛なるを見て

木のもとはあかす過ゆく梅かゝを袖にふきこせ里の春風

信土山をこゆとて

ふる衣としへて又もきの國の待乳の山をけふそこえ行く

廿四日橋本里より船にてくたるに背山のあたりにてしはしおりて陸よりゆかむと師のいはるれはきしにさしよせて

紀の川や瀬はくたらすて背の山を見んとて更に陸よりそ行く

遠き代のふみにしるせる背の山を今もふみゝてしるへする君

妹山はいにしへよりそれとさたかにしる人なけれは背山に引れておのつから歌にのみよみ來つるなりと翁の考へ給へるにつけて

そことしもたつねわつらふ妹山や霞の袖におもかくしけん

かくて瀬山は背山村とて家居もいとおほく山もかくいとさたかなるをさきのたひに川中の小山をそれそと人のいひしはひかことなりけりとおもふ

若山にありけるほとよめるうたともは小谷ぬしのもとにて

春月

てりもせぬ月のあはれも春かすみ空にともれるよはのゝとけさ

小浦ぬしのもとにて川邊柳

みむろ山春は花田の帯にせる明日香の川の青柳のかけ

杉田ぬしの庭の山に梅の木の枝を橋のやうにつくりなされ

たるか此ころ盛なるを見て

梅かゝもとなたかなたに匂ふなり春風わたる花のかけ橋

落合春葉翁に六とせ經てあひたるに八十四になられたれと老せぬさまにみえけれは

老の涙いつちよりけんとしへても見るめかはらぬわかの浦人

春葉翁かへし

わすれめや和歌の友とてよる涙に見るめも深くそへし言のは

二月十七日殿の御前にて師の翁源氏物語かうせちし奉られけるをりともなひてさふらひけることのいとも／＼かしこく覺え侍りけれは

和歌の浦や涙にひかれてよるかひのいけるかひある今日のかしこさ

江戸人小林百枝若山にてはしめてあひてむつましくしけるを二月廿日ころわれは國にかへるを此人も京にものして三月には伊勢にて又逢んといひ契りけれは

いせの海に波たちよらはわかの浦のおなしみるめを又もかりてん

廿四日若山をたちて岩手といふ所より紀の川をあなたにわたるこゝはのほりくたるふねにつみたる物かむかふる司のあるか出來て事おこなへは船ともこゝら川岸にさしよせてらうかはし

ふねのうちにつむは何そとわたし守いはてはたゝにすくさゝりけり

廿五日六田のよとふねさしわたりて吉野の山路にかゝる

川つらを紀路はる／＼とほり來て又わけのほるみよしのゝ山

ふもとの方に大川のなかれ滑く見えわたれるけしきいはんかたなし高取多武何くれの山々も見えたりよしのゝおくは雪いとしろくわけいる山路のさくらまた冬こもれるさまなり

春なから遠い高根に雪見えて衣手さむしみよしのゝ山

またさかぬ櫻かえたもむかし見し面影にほふはなの下道

みよしのや名にしのはれて花はまたさかぬ櫻の蔭もえならす

おのつからまたきにさける花やあると分つくさはやみよしのゝ奥

むかし此山の花見に物したりしは明和九年にてことしまては廿八年になむなりにけるそのをりしれるさと人も有ましけれとあやしうこと所にはかはりてむつましう覺ゆるまゝに

朝夕に面影さらすなれぬれはけにふる里の心地こそすれ

水分の御社にまうつさきのたひ師のよまれける歌をおもひいてゝ

手向せしその神垣の言の葉をけふ又神も思ひいつらん

神の道おなしなかれをくむわれもあふかさらめや水分の山

此神の御惠によりてうまれ出給へる翁の君にしたかひてかくおのれもまたまうて來たることのいとうれしうすゝろになみたさへとゝめかたくなん此翁ことし七十の齡にてかくまうてられたることをよろこひて

のほりこし君か齡ひをよし野山猶みね高く神そ守らん

春毎の初花よりもまれにとふ君をそ神もめつらしと見ん

こたひ若山をたちてより吉野百首とてよしのゝ歌をかすかすよみ出られたるを道すからいひきかせられけるをおも

ひて

此春は花よりさきに言のはのふかき色香を神も愛らん

世にゝほふことはの花の種も又神そまきけんみよしのゝ山

廿六日高見山にて

峯たかみ猶きえのこる雪見つゝ春ともわかすわくる山みち

廿七日粥見の里より大平まつ大石に物してこよひのやとり定めてんとしていそくほとに山道にまとひ入て時おくれ日くれてのち大石につきて翁の心つかひせられけるよしきゝてひかことしけりとわひしくなんおほえけるその事を後によめる

いゆしゝをおふとはなしにいそくとて鹿弓の里に道まよひけり

廿八日立野の里にて故郷の人々むかへに來たるにあへり

高見山雲もへたてゝ春霞立野の野邊にけふそきにける

此一卷は天保十一年九月十五日紀伊國和歌山廣瀬大橋の西つめなる旅のやとりにてうつしとりつ伊勢の國より紀の路のことの葉ともを見て

堀　尾　三　子

高見山たかきしらへの言のはゝ紀の海まても名になかれけむ

明治三十五年十一月十日印刷
明治三十五年十一月十五日發行
昭和二年七月五日增訂再版印刷
昭和二年七月十日增訂再版發行

（本居宣長全集 第十一卷奥付）



再校訂者　本居清造

發行兼印刷者　東京市京橋區鈴木町十二番地　吉川弘文館　代表者　吉川半七

印刷所　三重縣四日市市濱田　四日市印刷株式會社

發賣所

東京市日本橋區數寄屋町　六合館
大阪市東區北久太郎町四丁目　合資會社　柳原書店
名古屋市西區下長者町四丁目　合資會社　川瀨書店
東京市京橋區鈴木町十二番地　日用書房
東京市牛込區早稻田鶴卷町二五一　國際美術社



